

超古代正史

異なる人類の歴史

人は水生人(エス)として進化し35種の人類を生んだ

エス

カゾオバ キブウカ サグバタ ナナブルク ムンビ

アブク ムワリ モルモ

ルハンガ チュクウ

ケウオス ヴィディエ ムシシ レザ ウエネ

オロクン オロルン カアング ジェンギ ワルムベ

アシェラーフ イマナ ニヤメ エバシ キャラトレ モディモ

ディンカ シルック ムルング ハダメ マサイ

ザムビ ンジニ イサック

ギガース 大洋の娘たち 河川の娘たち

現代人はみな、彼らの混血である

特にチュクウは食物連鎖の頂点、地球の王として生まれた

チュクウからは多くの優れた王、英雄が生まれている

大本正

目次

目次

◆まえがき

◆異なる人類・35種族の歴史（生年順）

■エスの歴史（オラン・ペンデク）

- ・アシアー（エス）、アシュケナジム（アシエル）

■カゾオバの歴史（キジムナー）

- ・クシャーナ（カゾオバ）、ブギス族（クサンテー）、鹿島神社（クシュ）、ハザール（コーサラ）、スバル（トバルカイン）

■キブウカの歴史（河童）

- ・吉備氏（キブウカ）、アカイア、鹿島神社（アクスム）

■サグバタの歴史（河童）

- ・蘇我氏（サグバタ）、ヤコブ（ソグボ）

■ナナブルクの歴史（ニンフ）

- ・ニンフ（ナナブルク）、ピラコチャ（プレークサウラー）

■ムンビの歴史（キジムナー）

- ・マニ教（ムンビ）

■アブクの歴史（ピグミー）

・ピュグマエイ（アブク）、賀茂氏（ゴメル）、児玉氏（コットス）、百済（バクトリア）

■ムワリの歴史（ピグミー）

・毛利氏（ムワリ）、百地氏（ミマース）、守屋氏（モレヤ）

■モリモの歴史（ネグリト）

・モルモン教（モリモ）

■ルハンガの歴史（オラン・ダラム）

・ルーベン（ルハンガ）、トバルカイン（ルハンガ）

・ラドン、ラティヌス（ロディア）

・エウローペー、スラブ（シェラフ）

■チュクウの歴史（イエティ）

・諸葛氏（チュクウ）、ゼウス（ソーク）、チュクチ（ステュクス）、トバルカイン（テュポン）、ピラミッド派（デウカリオン）

・老子（アグリオス）、ソクラテス（クリュテイオス）、クリュセーイス、レメク（クリュメネー）、李氏（オーキュロエー）、マウンド派（デウカリオン）、カレリア（アグリオス）

・クスコ（プシケ）、マゴグ（カイコス）、ガンダーラ（カイコス）、関氏（カイコス）、フス派（プシケ）

■クウォスの歴史（アポリジニ）

・カオス（クウォス）、イシュタル（イストロス）、マゴス（カイコス）、プール（トバルカイン）、ゼブルン（トバルカイン）

・ヴァナラシ（ウラヌス）

■ヴィディエの歴史（ヴェッダ族）

・道教（ヴィディエ）、アダム（アドメテー）、ユダヤ（イデュイア）、ユダ（エウドーラー）

・ヘブライ（ヒッポリュトス）、アベル（エピアルテース）、エベル（エピアルテース）

・オーディーオン（ペイトー）、卑弥呼（ハム）、八幡神社（ヤペテ）、ポイニクス、フェニキア人

■ムシシの歴史（パプア人）

- ・モーゼス（ムシシ）、藤原氏（セツ）

■レザの歴史（ミャンマー少数民族）

- ・エロス（レザ）

■ウェネの歴史（アイヌ族）

- ・ヨハネス（ウェネ）、アーリア人（エウリュトス）、インドラ（マイアンドロス）、ヤワン（オアンネス）

■オロクンの歴史（ミャンマー少数民族）

- ・オロクン
- ・アルキュオネウス、元（アルキュオネウス）、夏（アルキュオネウス）、トバルカイン（オロクン）
- ・ウラヌス、那覇（ウラニアー）、ナフタリ（ノア）

■オロルンの歴史（ミャンマー少数民族）

- ・日蓮（オロルン）

■カアングの歴史（コイサン族）

- ・孔子（カアング）、エノク（エンケラドス）

■ジェンギの歴史（コイサン族）

- ・インカ帝国（ジェンギ）

■ワルムベの歴史（ミャンマー少数民族）

- ・ワルムベ、エラム（ワルムベ）、カンボジャ（ワルムベ）
- ・ホルス（パッラース）、ポルピュリオーン、ラムセス（ヘルモス）、マハラエル（ブリアレオ）

ース)、アラム (ブリアレオース)

■イマナの歴史 (ベトナム少数民族)

・文氏 (イマナ)、マンデラ (スカマンドロス)、マナセ (メネストー)、天孫族 (レメク)、多氏

■エバシの歴史 (アパッチ族)

・アパッチ (エバシ)、ヴィスコンティ (プシケー)

■キャラの歴史 (パプア人)

・ケルケイース (キャラ)、カンボジャ (グレニコス)

■トレの歴史 (ドラヴィダ族)

・テレストー (トレ)、タルタロス、トゥルシア (ティルス)、バクトリア (エウドーラー)、平氏 (ガンダーラ)

■ニャメの歴史 (台湾少数民族)

・ヤペテ (ニャメ)

■モディモの歴史 (アラビア人)

・メーティス (モディモ)、マダイ (アドメテー)、メディア (アドメテー)、大和 (ティアマト)、伊達氏 (テテュス)

■シルックの歴史 (シルック族)

・チュルク (シルック)、猿田彦、ゾロアスター (セロス)

■ディンカの歴史 (ディンカ族)

・テングリ (ディンカ)、ガリア人 (チェケル)、天狗 (ディンカ)、アングル人 (ガリア)

■ハダメの歴史（ソマリア少数民族）

- ・ 秦氏（ハダメ）

■マサイの歴史（マサイ族）

- ・ 釈迦（マサイ）、弥勒（ミツライム）

■ムルングの歴史（ミャンマー少数民族）

- ・ フランク人（ムルング）

■ザムビの歴史（カンボジア少数民族）

- ・ セム（ザムビ）、シュメール人（セム）

■ンジニの歴史（インド少数民族）

- ・ 秦（ンジニ）、愛新覚羅（イシン）

■イサックの歴史（ソマリア少数民族）

- ・ 明日香（イサック）

◆まえがき

名前を知って歴史を知るという方法は、新しい名前を知る度に全貌が変わっていくという弊害がある。だが、名前を知り尽くした感があるので、これ以上変わることはないのではないかと考えられる。詳細を詰めるだけで、ほぼ完全な人類の歴史である。

「多摩市のカッパ」

今回は、妖怪として知られるカッパの正体も追及している。通常、カッパと聞くと「想像上の生物」という認識が根強い。しかし、カッパの目撃談は豊富に存在している。民俗学の分野から、目撃談を集めた数冊の本も出ている。じつに、カッパの目撃談は日本全国に及んでいる。これだけ、多種多様な報告がされているのは、知られざる何者かが存在している証だろう。

彼らを見ていないから、彼らを知らないから、彼らは存在しないということにはならない。

古来から「カッパ」と呼ばれている人々。彼らは、いったい誰なんだろう？ただ、カッパの目撃談は、戦後すぐに語られなくなった。そんな中、筆者は多摩市でカッパらしき謎の小人を目撃した。

筆者は、AD1992年当時、東京都多摩市聖ヶ丘に住んでいた。多摩ニュータウンである。聖ヶ丘の頂上に住んでいたが、身体を鍛えようと自転車で毎日、急な坂を下ったり上ったりしていた。聖蹟桜ヶ丘から電車で練馬区まで出勤していた。下りは3分だが、上りは20分かかる。

ある日、駅に向かおうと家から下り坂を颯爽と下っていた。すると、坂の途中に養護学校がある。そこに差し掛かる直前、インド人ぽい肌色の非常に小さい男と目が合った。どこに向かおうとしていたか不明だが、彼は、坂を歩いて上っていた。通常、聖ヶ丘の上の方では、歩いている人を見かけることはない（自転車に乗っている人もいない）。

信じられないことに、男の背丈は常人の膝くらいまでしかなかった。筆者は「え？」と思った。当然だろう。しかし、筆者はそれまでも多摩ニュータウンで何度か霊を見たり、不思議な体験をしていたので、これもその現象のうちの一つと思った。或いは、養護学校の人かとも思った。ということで、失礼に当たると思い、あえて振り返らなかった。

しかし、今考えると、彼はカッパだったのかもしれない。聖ヶ丘は、端正な住宅街であり、緑も多く残っていた。木が鬱蒼と生い茂った大きめの公園もあったが、浄土真宗の寺がある場所柄、除草剤も使用されていなかっただろう。つまり、あそこらへんは、カッパが住むのに適している（「あの小さい人」は、もともとあの辺に住んでいたのかもしれない）。また、そこから5分ほど行けば多摩川も流れていた。彼は微笑んでいたが、散歩中だったのだろうか？

「35種の異なる人類」

名前を知って歴史を知るという方法は、新しい名前を覚える度に全貌が変わって行く。以前は、全てはフェニキア人から始まったと考えていた。しかし、その後、「フェニキア人が最初」という考えは改めて、ノア、セム、ハム、ヤペテ、更にアダムまで遡り、聖書の家族が最初であるという考えに行き着いた。しかし、「神統記」を知ると、聖書の家族が最初であるという考えは捨て、カオスなどの原初の神々が最初の人類である、彼らはホモエレクトスの部族であるという考えに改めた。

そのような試行錯誤を経て、最終的にアフリカで祀られている神々が最初の人類であるという考えに行き着いた。それも尤もな話だ。人類はアフリカで生まれたといわれているのだから。アフリカの神々の名前は人類の名前なのだ。そして、緻密なトラッキングを重ねることにより、その考えは正しいことが証明された。当初、「カオス」に前身は存在しないと考えていた。「カオス」の名が人類最初の名前であるとまで考えていた。しかし、アフリカに「クウォス」の名を見つけることで、カオスにも前身が存在することがわかった。

数多いアフリカの神々のうち、緻密なトラッキングを経て、35種の神を我々の先祖である、オリジナル人類として設定した。エス、カゾオバ、キブウカ、サグバタ、ナナブルク、ムンビ、アブク、ムワリ、モリモ、ルハンガ、チュクウ、クウォス、ヴィディエ、ムシシ、レザ、ウエネ、オロクン、オロルン、カアング、ジェンギ、ワルムベ、イマナ、ニヤメ、エバシ、キャラ、トレ、モディモ、ディンカ、シルック、ハダメ、マサイ、ムルング、ザムビ、ンジニ、イサックである。中には神ではなく、ディンカ、シルック、マサイ、ハダメ、イサックのように、現在でもアフリカに暮らす部族の名前もある。

●河童の正体

今まで、宇宙人、ビッグフットなどのミステリアスな人類にもスポットを当て、名前をトラッキングすることで、その正体に迫ってきた。そして、今回は、河童、キジムナーなどのミステリアスな人類の正体にもスポットを当ててみた。しかして、以下のような結果が得られた。

彼らも、我々と同じ人類である。

河童は、地方によっていろいろな名で呼ばれている。代表的なもので、カァバコ、セコ、ケシャンボ、カワランベなどの名がある。これらの名は、35種のオリジナル人類から生まれたものだ。カァバコ（キブウカ）、セコ（サグバタ）、ケシャンボ（カゾオバ）、カワランベ（河原のムンビ）である。河童ら一族の歴史は古く、200万年前にまで遡ることができる。彼らは、アフリカを離れて地中海・黒海～インダス流域・中央アジアの広範囲に渡り、生活していた。そして、人類の歴史が大きく動いた、およそ30万年前に日本に渡ってきた。

九千坊という、河童の首領の伝説的なエピソードがあるが、この九千坊とはカゾオバのことである。彼らは、西海坊（サグバタ）と戦争をしたとされている。この戦闘の舞台は九州とされているが、実際には中央アジアである。九千坊は亀慈（クチャ）に住み、西海坊はアナトリア（カッパドキア）に住んでいたのだ。超古代、身長が50cmから1mの小人たちの戦争が中央アジアに繰り広げられていたのだ。

それにしても、人類には身長が4mの獣人から身長が1m～50cmの河童、キジムナーと身長差がある。これらの身長差の要因、意味とは一体何だろうか？

●ビクトリア湖時代 異なる人類の故郷

森林に於ける覇を巡り、ゴリラ、チンパンジーに敗北した人類の祖は、アフリカ東海岸に住み着き、水生哺乳類として進化した。この時に「エス」が生まれた。彼らが、一番最初的人类である。人口過密により、海から陸に上がった彼らはアフリカ内陸部に向かい、ビクトリア湖に新天地を見出した。このビクトリア湖時代に、身長が140cmだったエスから様々な大きさの人類が生まれた。身体の大小の相違は、各々が各々の獲物に特化することで生じた。各々の獲物に対する特化。これは、獲物がかぶることの廃止を意味する。これにより、人類という種がスムーズに存続することができるのだ。

河童の祖であるキブウカは、水生生活に特化し、小魚、カエル、昆虫などを獲物にしていたため、身長は50cmほどに縮んだ。キジムナーの祖であるカゾオバは、水陸両用の生活をし、キブウカよりも大き目の獲物に特化していたため、身長は1mほどであった。ピグミーの祖であるア

ブクは、水陸両用の生活をし、エスの頃と同じ獲物を獲っていたため、身長は140cmのままであった。だが、いち早く、完全な陸上生活にスイッチしたクウォス、ムシシ、イマナ、ワルムべらは、大型哺乳類を狩ることで身長は160cmに伸びた。

以上の話は、すべて200万年前までに起きたことだが、その後、50万年前にディンカ、シルックなどの人類がビクトリア湖に登場した。水生生活に特化していた彼らは、天敵の巨大ワニがないビクトリア湖中心部に生活していた。そのため、彼らの頭部は小さく、水中で推進力を得るために手足が伸び、指も長く伸びた。その結果、彼らの身長は2mを越えた。この、ディンカ、シルックがいわゆる金髪・碧眼の白人の祖である。

●獣人の正体

一方、キブウカ、カゾオバ、アブク、クウォスらと同じ時期に登場したルハンガは、身長が4mにまで巨大化した。なぜ、彼らは通常の人類の2倍もの身長があるのだろうか？ヒントは、身体が小さく、力が弱い捕食者は存在しないことである。つまり、ルハンガ、チュクウが4mの巨体を持ち、卓越した身体能力を誇るの、彼らが地球最強の捕食者たる所以だ。

彼らは、地球規模の必然性により、地球の王に選ばれた。その必然性とは、可能性のひとつとして巨大ワニの増加が推測される。それによってビクトリア湖の食物連鎖が破壊された。崩壊した自然のバランスを回復させるためにルハンガは生まれた。彼らは、恐竜時代以降、地球史上最強の捕食者として、ビクトリア湖の食物連座の頂点に君臨した。

ビクトリア湖には、現在でも6mを越える巨大ワニが生息し、時折人を食い殺しているが、超古代、ルハンガは素手で巨大ワニを狩り、食べていた。巨大ワニは人類にとって天敵だった。だが、一方では、巨大ワニの天敵も人類だったのだ。ルハンガの子孫と考えられるオラン・ダラムは、インドシナ半島を流れる河川流域に住み、ビッグフットの仲間と思しき獣人もミシシッピ流域などに隣接する沼地などで目撃されることがある。彼らは、ワニを常食としているのだ。ルハンガの子孫、チュクウは、現ナイジェリアに住んでいた。彼らは、ワニだけでなく、ライオン、象、カバなどの天敵としても機能した。

ルハンガ、チュクウの子孫である獣人UMAたちは、一様に豊かな体毛に覆われていることが知られている。また、ビッグフットの見撃談によると、ビッグフットは3mの跳躍を誇り、時速60kmで走り、岩を投げ、グリズリーを素手で殺すという。イエティも、ヤクの腹部を素手で破り、角を掴んで片手で振り回し、殴り殺したヤクの血をすすっていたところを現地人に目撃さ

れている。

豊かな体毛は、ワニに噛まれても、或いはネコ型猛獣が背中に爪を突き立てても平気なように進化した、一種の防弾チョッキだといえる。ビッグフットに襲われた人によると、ビッグフットに銃弾を浴びせても倒れなかったと報告している。そのエピソードは、彼らの豊かな体毛の役割を如実に伝えている。

●宇宙人の正体

因みに、プーチン大統領、習国家主席、トランプ大統領は、みな、チュクウの子孫である。そして、ロウハニ大統領はルハンガの子孫である。更に、宇宙人（トバルカイン）もチュクウとルハンガの子孫である。チュクウとルハンガはギガントマキアの時代、連合して「テュポン」を生んだ。テュポンは、「神統記」に於いて、世界最強の怪物と記されている。しかし、それも無理はあるまい。地球の王であるチュクウとルハンガの連合体なのだから。

このテュポンが、アルキュオネウスと合体することでトバルカインは生まれた。テュポン+アルキュオネウス=テュポルキュオネ=トバルカインとなる。その後、トバルカインはチュクウのトバルカイン、ルハンガのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、クウォスのトバルカインに分かれて活動する。更に、クウォスのトバルカインには気仙沼に住んでいたケシャンボ（カゾオバ）が加わり、スバル人が生まれている。

現在、比類なき科学力を継承しているのは、チュクウのトバルカイン、一部スバル人のみであり、他のトバルカインは人間界に帰順している。1970年代、コンタクティとして知られるクロード・ボリロンは、エロヒムを称する身長1mの宇宙人に接触している。彼らの正体はスバル人である。また、スバル人は、家族であるキジムナーに特殊な電灯を託した。これにより、キジムナーの目撃者らは「キジムナーは指先が赤く光り、その光で夜に漁をしている」と報告している。

宇宙人（科学の種族）には、エラド（エラ人）、マハラエル（プリアール人）もいるが、彼らも獣人の血統である。エラドはエウリュトス、マハラエルはブリアレオースの子孫である。

中国神話を読み解いた結果、人類は2万年前からUFOを所持し、火星にまで飛行していたことがわかった。科学の種族が火星に行ったのは、観光や研究が目的ではない。彼らの目的は、できそこないの流刑である。宇宙人は、できそこないがリーダーになるのは人類だけだということに

気づいた。原因は、人類特有の知能である。同じ人類であるできそこないは、だが、知能を駆使し、数で圧倒することを奥義とし、優れた者を退けることでリーダーにのし上がるのだ。

しかし、できそこないがリーダーになるのは正しくない。これは、非常に反自然的な事象である。知の最先端を行く宇宙人は、これを防止するために反自然的なできそこないを火星に流刑することにした。ここで、できそこないを定義する。他の集団生活をする種でも同じだが、できそこないとは、基本的にメス、子供をいじめて喜ぶような個体である。現に、チンパンジーの社会では、このような個体は群れに無視され、追放され、野垂れ死にを遂げる。チンパンジーは、こうしてできそこないを淘汰し、正しく種を存続している。できそこないがリーダーになることがないため、チンパンジーは平和に暮らすことができている。

これが人類になると、できそこないの残虐性に拍車がかかる。言葉をしゃべる人類のできそこないは平気でウソをつき、しかも、罪悪感がない。言い訳ばかりし、ごまかし、シラをきり、泥棒し、弱者に暴力をふるい、人をだまし、陥れ、陰謀を企み、拳銃に子供を拉致し、拷問し、陵辱し、殺害した上、食べる。これが人類のできそこない、いわゆる「タナトス」である。タナトスが、人類に於ける「できそこないの淘汰」を廃止した。

火星に降り立った宇宙人は、中国神話によるところの巨山「羅ホウ山」に拠点を得た。羅ホウ山は中国にあると既定されているが、実施には火星のオリンポス山のことである。この火山は、非常に巨大で、高さが2万7000mもある。太陽系一の火山として知られている。閻魔さまは火星にいたのだ。地球の王族は、殺風景な火星の地で卑しいできそこないを裁き、強制労働に従事させた。

●異種の人類タナトス

だが、いくら流刑してもタナトスは出現を続けた。できそこないの方が多く生まれるのが、天命の理に明記されているからだ。正しい人々は、数で圧倒する、タナトスのウソに立ち向かうこともできず、虐げられていた。質量でいけば、どんなに優れていても、優れた人々はできそこないには勝てない。できそこないの方が数が多いからだ。業を煮やした宇宙人は核兵器を開発し、タナトスの邪教に支配された、かつての偉大な古代国家をいくつも焼き払い、砂漠にしてきた。

タナトスはできそこないである。つまり、タナトスに罪悪感はない。だが、宇宙人には罪悪感はある。そのため、できそこないとはいえ、人の形をしている者を核兵器で大量に虐殺したことで宇宙人たちは、精神的に疲労困憊し、巨大な罪悪感に襲われた。宇宙人の社会では、この巨大な

罪悪感は伝説化している。これにより、火星の強制労働施設は封鎖された。巨大な罪悪感、その恐ろしさが、今でも、宇宙人たちの間で語り継がれている。

このため、宇宙人はすぐにタナトスを殺すことができない。タナトスの方も、それを知っていて安心して悪事を楽しんでいる。ただ、宇宙人も、今回ばかりはそうはいかないと考えているようだ。

宇宙人も進化している。現在、彼らは心を読む装置を開発・所持している。これにより、タナトスだけを暴き出し、ピンポイントで殺すことができる。過去、タナトスを知らなかった頃のように、核兵器で「人類、自然、地球のために墮落した大量の人間を虐殺しなければならない」という発想はないのだ（ただ、毎回、殺されたのは大量の信者だけで、タナトス本体はうまく逃げていたのだが）。

筆者は、さまざまな人類を知ることで、いくつもの生活の形があることを知った。現代人の生活が、唯一の生活手段ではない。多くの優れた人類は経済システムを核にした生活を送っていない。経済、金は人類に不必要可決である。金は、誰にも相手にされないでそこないが力を得、力を行行使するシステムであり、タナトス以外の人間に利点はない。

●タナトスとの対峙 それは知能を持った人類の宿命

タナトスと、その信者が作り上げてきた現代文明の生活は、労働が前提である。自然界ではありえないことだ。金も反自然的だが、労働も反自然的である。できそこないであるタナトスが創り上げるものは全てが反自然的である。宇宙人は、何としても全タナトスを討たねばならないと考えている。

特に、脳にとって有害なのが民主主義思想である。民主主義は、何でも言うことを聞く大量の信者を所有しているタナトスだけが勝つためのシステムである。バカのひとつおぼえのように民主主義、民主主義という輩は、間違いなくタナトスの血統である。民主主義は、英雄や偉大な王を殺し、できそこないを王にするための、大変有害な反自然的なシステムである。タナトスの敵であったソクラテス曰く「ひとりの哲人よりも数人の泥棒の主張を採用するのが民主主義だ」として切り捨てている。

資本主義、民主主義、現代文明は何から何までゴミである。今の社会は、人類の最終目標ではない。人類の最高到達点でもないし、ましてや、通過点でさえない。徹頭徹尾、地球上に不必要

なものだ。できそこないが生まれたら速やかに処分すること。これが、これからの人類の課題となるだろう（できそこないとは、簡単にいえば、知能を悪のために使う者だ）。

人類の脳は、どうしたら楽に生きて行けるか、その模索のために進化したものだ。つまり、資本主義・民主主義社会に生きる全人類は、脳の使用法を誤っている。タナトスのウソを覚えるために脳が使用されている。脳は、タナトスのウソを見破るために使用すべきである。

●タナトスの偉業

タナトスは、例えば、手足が生えたゴミだ。だが、彼らは、他の人類が成しえなかった偉業を達成している。彼らは、人類史上初、見えない「心」を知覚した人々である。尤も、彼らが見えない心を知覚できたのは、敵を倒すという目的があったからだが。

どんなに強い敵にも心はある。力対力で勝つことができなくとも、身体ではなく、集団で心を傷つけば強い敵に勝つことも可能なのだ。「イヤガラセ」の誕生である。悲しいことだが、タナトスは、「心」を「人類の弱点」と捉えている。このような、できそこないの発想は、誰にも好かれないうが故だ。

タナトスは、フロイトに先駆けること数十万年前、一流の精神分析医顔負けの心理分析を展開していた。全ては、強い敵を倒すためである。タナトスは、相手が弱い場合には最初から力を行行使するが、強い敵が相手の場合には、心を攻撃して弱体化することを実施している（大量の信者がいるから可能なことである）。ここから見てもわかるように、できそこないであるタナトスは、相手が弱くなければ勝てないのだ。どれだけ多くの人々が自分のウソを信じるか。或いは、信じるフリをするか（大量の信者がいれば可能）。これが、タナトスが考える勝利の定義である。

オリジナル人類の姿

◆オリジナル人類・35種族の姿



エスの姿（参考オランペンデクの想像画）

エスは、一番最初の人類である。彼らは人型UMA、オラン・ペンデクの姿をし、身長は140cm程度と考えられる。チンパンジー、ゴリラに敗北した彼らは、アフリカ東海岸で水生人として進化した。その後、ビクトリア湖に移って身長が50cmのキブウカ、1mのカゾオバ、140cmのアブク、160cmのクウォス、イマナ、ワルムベ、ムシシ、4mのルハンガなど、バラエティ豊かなオリジナル人類の原型を生んだ。ビクトリア湖で人口過多になった時期、各々が各々の獲物に特化することで、上記のように大小異なる人類が生まれた。フクロウや猫族と同じである。

ビクトリア湖に向かわなかった一部のエスは、東アジアに向かった。人類史上初のアフリカ大陸を離れた人類である。400万年前、彼らは東南アジアにアチエー族を残し、九州に阿蘇、東北に蝦夷（えぞ）を築いた。名前で見るとわかります。エスの名は、イザナギ、イザナミ、イスラエルなどの由来でもある。



キブウカ、サグバタの姿（参考ネルソン・デ・ラ・ロッサ）

写真のネルソン・デ・ラ・ロッサは、世界一小さい男としてギネスに載っている俳優である。体重は50cm。先祖のキブウカの隔世遺伝が起きたのだ。

ビクトリア湖時代、人類は各々が各々の獲物に特化した。目的は種の存続である。そうすることで、人類は、猫族やフクロウのように身長に差が出た。キブウカは、小魚、昆虫などを食べていたため、身長が50cmになった。筆者が、多摩市聖ヶ丘で見た河童は彼とそっくりだった。昭和時代に、多摩川でカッパが目撃されていることから多摩川には今でも住んでいるのだろう。





キブウカ、サグバタの進化形（参考インド人）

カッパが巨大化したのがインド人である。つまり、インド人の子どもが一番河童の面影を残していることになる。筆者が多摩市で目撃した非常に小さい人は、肌色も顔も、インド人そっくりだった。ネルソン・デ・ラ・ロッサの顔を見てもわかるとおりだ。

どうやら、カブールの名前から察するに、超古代、カッパはパンジャブ地方に住んでいたようだ。非常に小さい彼らは、しかし、新天地に暮らすことで、各々の獲物に特化する必要性を失った。彼らは、ほかの人類が食べるものを食べるうちに巨大化した。それがインド人誕生の秘密である。





カゾオバ、ムンビの姿（参考メラネシア人）

カゾオバ、ムンビはキジムナーの祖先である。赤毛ではないが、メラネシア人の姿は、キジムナー目撃者による報告に似ている。手足も長い。1 mのカゾオバ、ムンビが新天地で各々の獲物に特化する必要性を失い、獲物を変えた時、身長が普通になった。また、当時の北極圏（ヨーロッパ）に住んでいた彼らは、金髪・碧眼になったため、メラネシアに移ったことにより、金髪・碧眼のメラネシア人が誕生した。



アブク、ムワリの姿（参考ピグミー）

成人男性の身長は140cmである。エスと同じ食生活をしていたため、140cmのままであった。



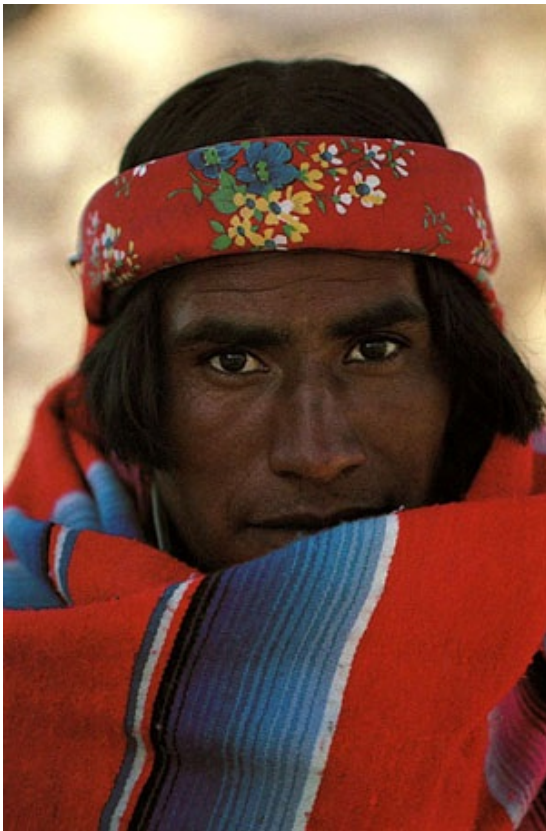
モリモの姿（参考ネグリト）

成人男性の身長は140cmである。エスと同じ食生活をしていたため、140cmのままであった。モルモン教が、モリモの名を継承している。



チュクウ、ルハンガの姿（参考ビッグフット）

チュクウは最大身長4.5 mのイエティの祖であり、ルハンガは最大身長4 mのオラン・ダラムの祖である。地球の意思によって「地球の王」に選ばれた彼らは、地上最大最強の捕食者として、食物連鎖の頂点に君臨している。アフリカ時代はワニを常食としていた。また、彼らは時に、カバ、ライオン、象などの天敵としても機能した。長い豊かな体毛は、腕、足をワニに噛まれても、首、背中を猫科の猛獣に噛まれたり爪を立てられても平気のように進化した防弾チョッキみたいなものだ。この「地球の王」からは、多くの伝説的な英雄が生まれている。



チュクウ、ルハンガの進化形（参考メキシコ人）

メキシコにはときおり、毛だらけで生まれてくる子どもが話題になるが、これはチュクウの隔世遺伝だ。チュクウの顔は知られていないが、メキシコ人のような顔をしていたと考えられる。メキシコ人が3 mほどに巨大化し、毛だらけになったらチュクウである。





クウォスの姿（参考アボリジニ）

アボリジニの顔は、原初の神カオスの顔である。ビクトリア湖時代に生まれたクウォスは、人類でいち早く陸上生活にスイッチし、大型哺乳類を狩るようになった。そのため、彼らの身長は160cmほどに伸びた。





ムシシ、レザ、キャラ、トレの姿（参考パプア人、チッタゴンの少数民族）





ヴィディエの姿（参考ヴェツダ族）

ヴィディエは、イデュシアの生みの親だが、イデュシアは神道、道教、ユダヤ教の祖である。



ワルムベの姿（参考カンボジア人）



カアング、ジェンギの姿（参考コイサン族、ニカウさん）



オロクン、オロルンの姿（参考ミャンマーの少数民族）





オロクン、オロルンの進化形（参考シベリア人、イヌイット、アマゾンの少数民族）

コイサンマン、ミャンマー少数民族の顔をしていた彼らは、シベリアで水生生活（海女さんのような）を実施した。それにより、冷たい海水から身体を守るため、四肢、指が短くなり、顔の凸凹がなくなって平坦になり、目は細くなり、まぶたは一重になった。ウリゲン、エルリクと呼ばれた彼らは、中国人、朝鮮人、日本人といった東アジア人（黄色人種）の祖である。



ウェネの姿（参考アイヌ族）

アイヌ族は単なる先住民ではなく、非常に古いタイプの人類である。超古代、アイヌ族は日本だけでなく、東南アジア、イランに至る広範な地域に住んでいた。



エバシの姿（参考アパッチ族）

アパッチ族は単なるアメリカ先住民ではなく、非常に古いタイプの人類である。その名から、蝦夷（エビス）、原初の水アプスー、アビスなどの由来であることがわかる。超古代、エバシは日本（蝦夷/えびす）、北アメリカ（アパッチ）、マヤ（アプチ）に至る広範に住んでいた。



トレの姿（参考ドラヴィダ族）

聖地デルポイを築いた人々の顔である。トレはペイトーと組んでデルポイを築き、ドラヴィダ族を生んだ。トレ+ペイトー=ドラヴィダ=デルポイとなる。



イマナの姿（参考ベトナム少数民族）

イマナは、ニャメと組んで「古事記」に記された、多くの天津神を古代台湾に生んだ種族である

。



ニャメの姿（参考アミ族、マダガスカル人）

ニャメは、イマナと共にアウトリガーカヌーを完成させ、10万年前に既にインド洋を横断し、東南アジアとアフリカを往来していた。つまり、マダガスカル人は、インド洋を往復した古代人類の賜物である。また、マダガスカルやジンバブエ（特に「カミ」と呼ばれる地域）も高天原の領域だった。ニャメは、天照大神の生みの親でもある。



ディンカ、シルックの姿（参考ディンカ族、スーダン人）

上記の人類に遅れてビクトリア湖に生まれたディンカ、シルックは、巨大ワニがない湖の中心部に生活した。そのため、水生生活に特化していた彼らは、水中で推進力を得るために頭部が小さく、四肢、指が長くなった。

また、50万年前に当時の北極圏（ヨーロッパ）に移住したディンカは背の高い、金髪・碧眼の白人の祖である。ディンカは、エーゲ海からブリテン島に至るまで拡散し、古代ヨーロッパにタンジール、メッサニア、チューリングンを築いた。シルックは、古代ヨーロッパにシラクサ、チューリングン、チューリッヒなどを築いた。



ディンカの進化形（参考ジャック・シラク、クリント・イーストウッド、ルトガー・ハウアー、シラク&イーストウッド）

イーストウッドやハウアーが顔を黒くしたらディンカ、シルックやマサイそのものである。シラク元大統領は、その名からも分かるとおり、シルックの直系の子孫だ。奇遇なことに、シラク元

大統領がイーストウッドと挨拶を交わしている写真を見つけた。ディンカとシルックの再会をみているようだ。

ということで、白人列強時代、黒人の子孫である白人が黒人を奴隷としていたのはおかしい話だということがわかる。すべては、あのヨーロッパと日本を治める邪教（タナトスの宗教）が原因だ。



ムルング、マサイの姿（参考マサイ族）

ビクトリア湖を出てアフリカに拡散した時のディンカの子孫である。ディンカのように、水生生活に特化していた彼らは、水中で推進力を得るために頭部が小さく、四肢、指が長くなった。マサイも、ディンカと同じで、背の高い、金髪・碧眼の白人の祖である。ムルングは古代ヨーロッパにミラノ、リヨン、マルセイユを築き、マサイはセーヌ川を命名し、メッサニアを築いた。



ハダメの姿（参考エチオピア人）

水生生活に特化していた彼らは、水中で推進力を得るために頭部が小さく、四肢、指が長くなった。ハダメは背の高い、金髪・碧眼の白人の祖である。ハダメからはテミス、ハデス、デメテルが生まれた。秦氏やケネディも彼らの子孫である。



ザムビの姿（参考カオサイギャラクシー、ブアカーオ）



モディモの姿 (参考イラク人)

いわゆる人魚と呼ばれた人たちがモディモである。彼らから枝分かれした人々は、イラク人、アラビア人のような顔をし、今でも海に暮らしていると考えられる。モディモは、ティアマトやテテュスなど、水にかかわりが深い神々を生んだ。そこから、彼らは海に住む人魚だったということがわかる。



ンジニの姿 (参考シンド人)



ンジニの進化形の姿（参考セネガル人）

ンジニは、月の神シンや秦（シン）などを生んだ。



ウラヌスの姿（参考バングラデシュ人）

ウラヌスはアルキュオネウスの子孫である。つまり、オロクンとクウォスの合体部族だ。間違いなく、バングラデシュ人はそんな顔をしている。





コットスの姿（参考タイソン、グッドリッジ、ボブサップ、マイケル・ジャクソン、エディ・マーフィー）

コットスは、小人のピクト人と獣人のエウリュトスの合体部族だ。タイソン、グッドリッジのように荒々しい獣人の特徴を持つ者、エディ・マーフィーのようにピグミーの愛嬌を持つ者、マイケル・ジャクソンのようにピグミーの音楽センス、ダンスセンスを受け継いだ者がいる。学者はバントゥー族と呼んでいるが、彼らはコットスだろう。

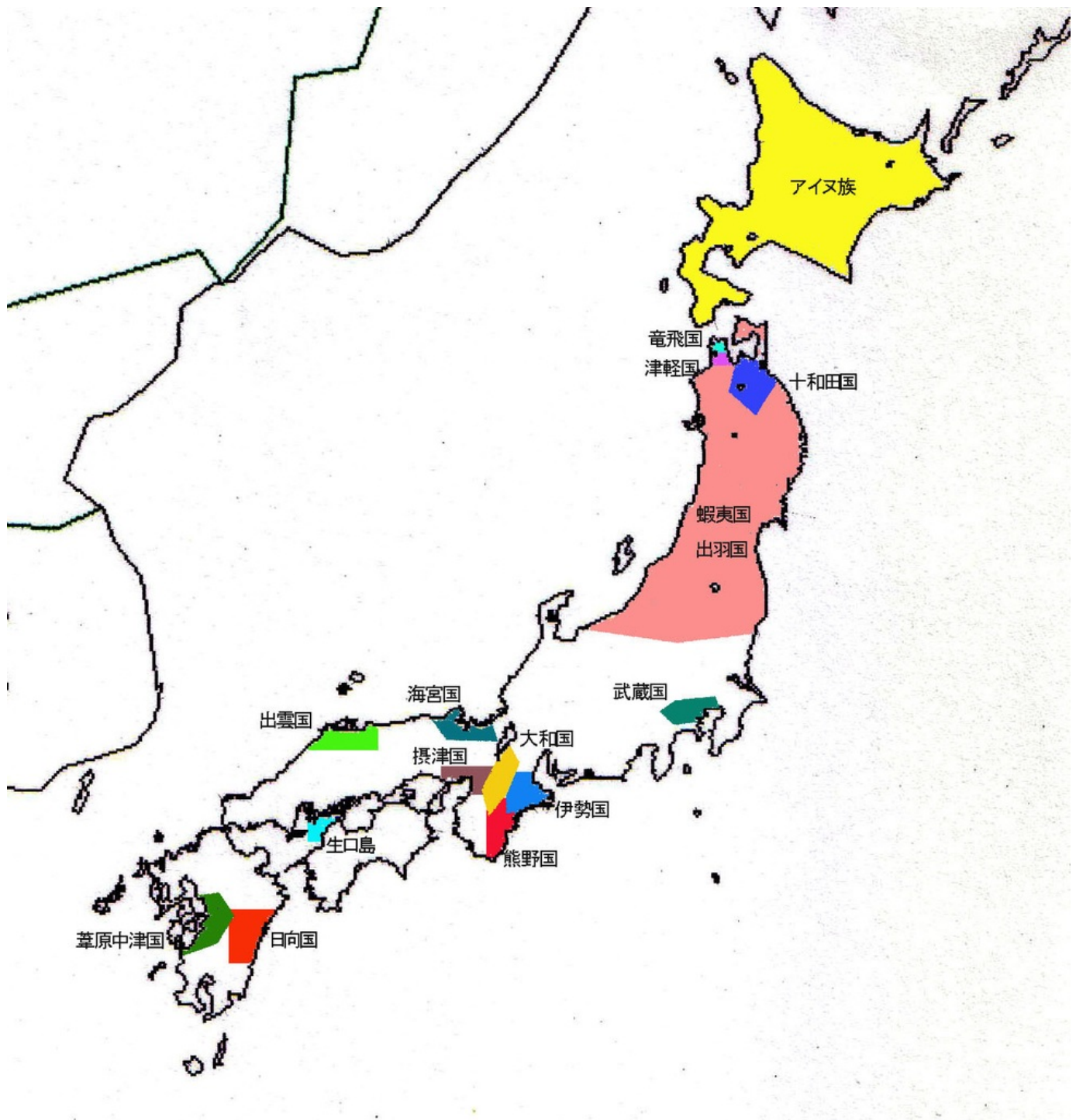




宇宙人の姿（参考ロシア人、サーミ人）

ロシア人は宇宙人の子孫である。シベリアに移住するまでの間、BC 1027年からAD 8世紀頃までトバルカインはロシアに住んでいた。その後、リユーリク（モンゴル人）、スウェード人（インド人）、ワリアギ（アラビア人）、キエフを築くカンボジア人などが来てロシアの国家としての礎を築いた。

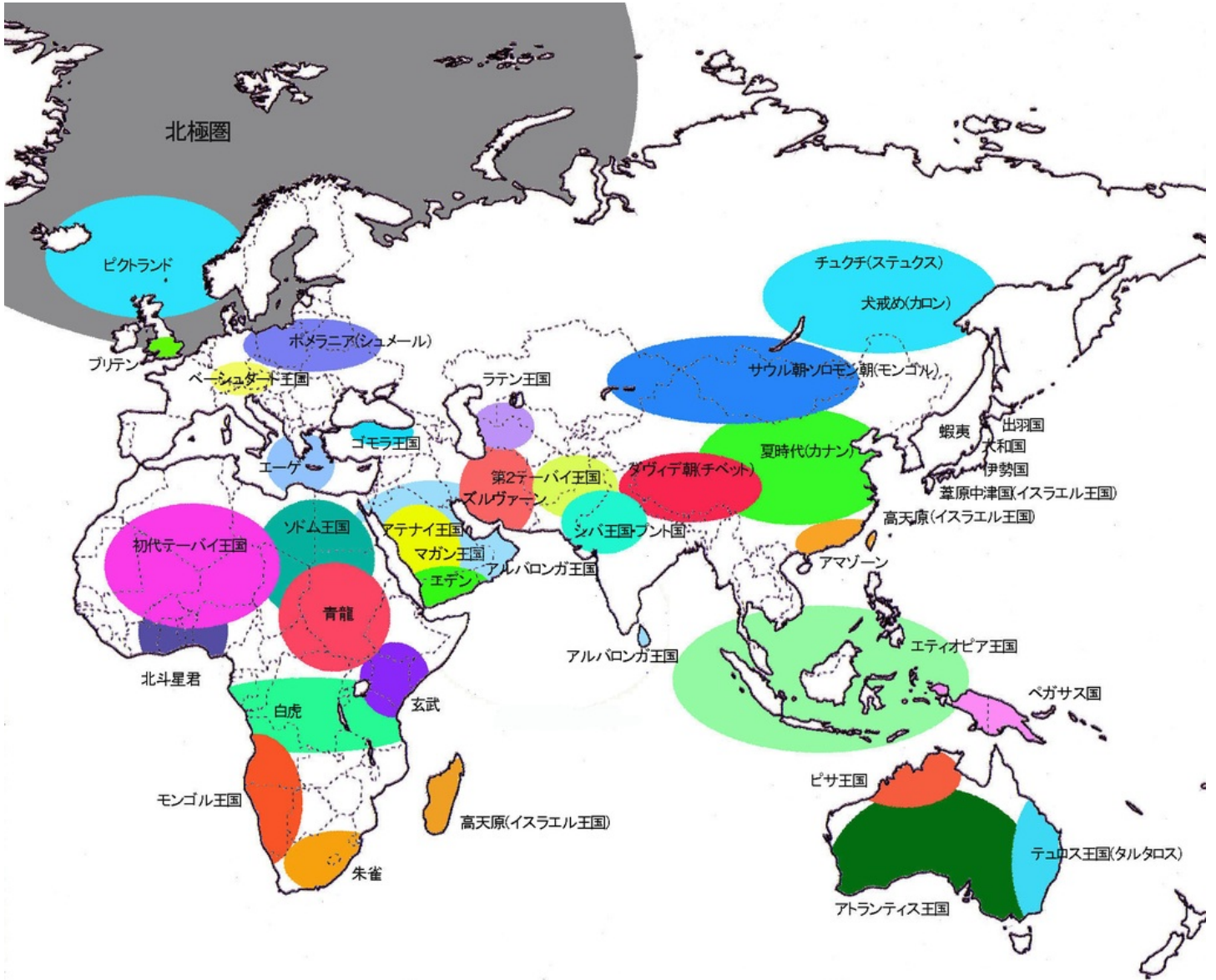
サーミ人は、大地殻変動の時代に南極から逃げたセムの子孫である。そのため、宇宙人（科学の種族トバルカイン）も同じような姿をしているのは間違いない。科学の種族トバルカインは、青森県（出羽、十和田、竜飛）にも住んでいたし、パンジャブにも住んでいたため、日本人やインド人の顔をした宇宙人もいる。クロード・ボリロンとコンタクトした1 mくらいの宇宙人はキジムナーと同族である。



上は古代日本の地図である。一番最初に日本に住み着いたのはエバシ、ウェネであり、エバシは蝦夷（えびす）を築き、ウェネはアイヌ族になった。宇宙人（科学の種族トバルカイン）は出羽、十和田、竜飛に住み、ピラミッドの種族ティカル人は津軽に住んでいた。葦原中津国はアジアとグレニコス、日向国はピュグマエイ、生口島・瀬戸内海チュクチ族（ステュクス）、出雲国はアドメテー、摂津国はセツ（ゼウス）、海宮国（ワタツミ/但馬国）はア

ドメテーとティアマト、大和国はティアマト、熊野国はピクト人、伊勢国はイデューア、武蔵国はミマース（ムシシ）、蝦夷（えびす）はエバシ、出羽国はトバルカイン、津軽はティカル人、竜飛はタップ・オノスのトバルカイン、十和田はトバルカインとブテ、アイヌはウエネが築いた。

◆超古代世界の地図 ユーラシア・アフリカ編

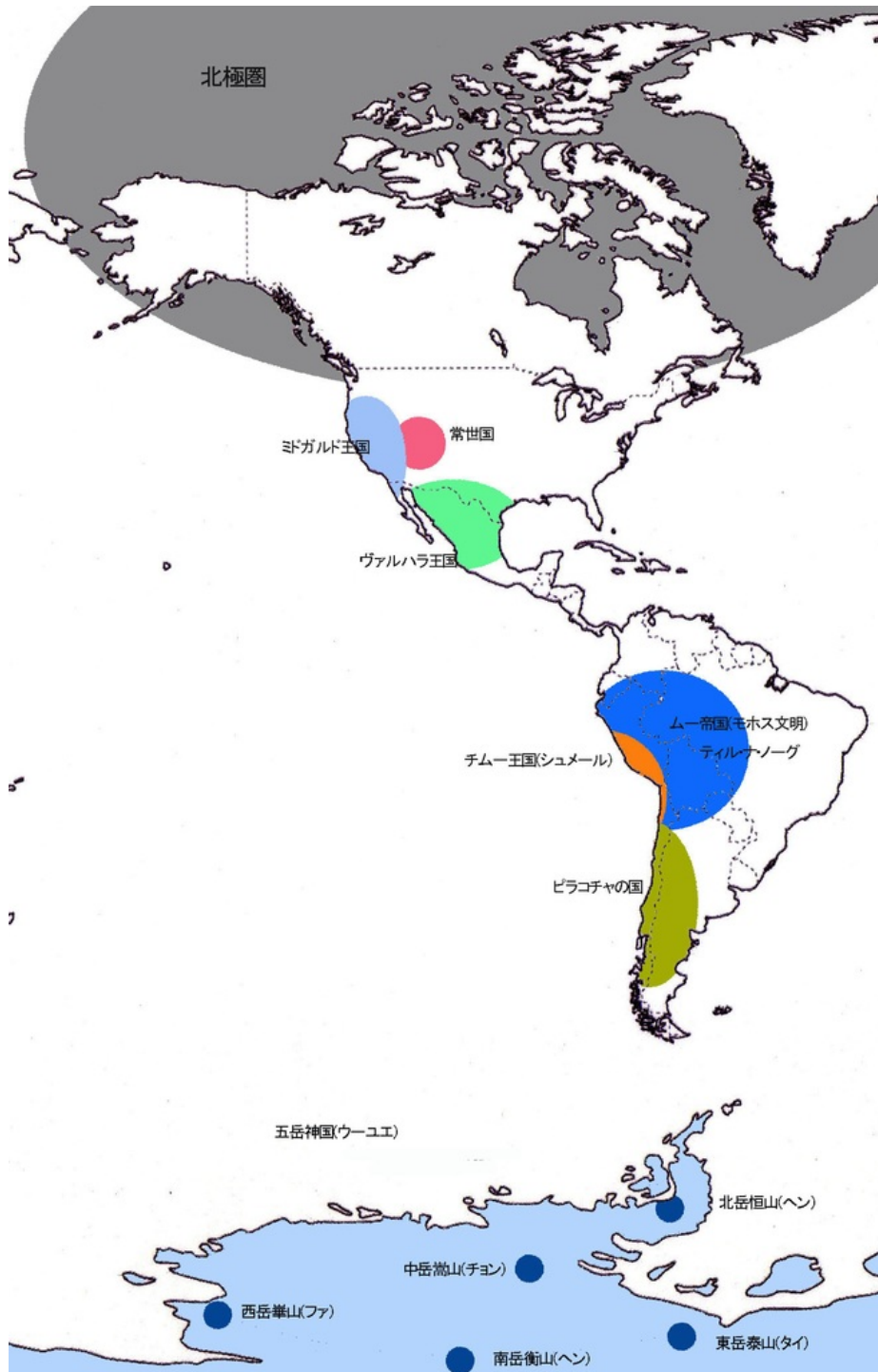


現在、砂漠化しているポイントには伝説の古代国家が存在していた。しかし、すべての国家はタナトスに支配され、タナトス教の信者と化した人々が生活の保障と引き換えに進んで悪に従ったため、これに危機感を抱いたトバルカインが数百発の核兵器をお見舞いし、タナトスと大量のタナトス今日の信者ごと古代国家を焼き尽くした。

最終戦争ラグナロクはネバダ（ミドガルド）、ユタ（常世国）、北メキシコ（ヴァルハラ）で起こり、黙示録アルマゲドン（カラコルム）、ゴビ（サウル朝、ソロモン朝）、チベット（ダヴィデ朝）で起きた。マハーバーラタ戦争はパンジャブ（テバイ王国、シバ王国、ブント王国）、アラビア半島（マガン王国、アテーナイ王国、アルバ・ロンガ王国）で起こり、ソドムとゴモラはスーダン（ソドム）、カッパドキア（ゴモラ）、サハラ（テバイ王国）で起きた。アトランティス王国の滅亡は、グレート・ビクトリア砂漠、サンディー砂漠（アトランティス王国）で

おきた。

◆超古代世界の地図 南北アメリカ編



南極大陸はムー帝国（モホス文明）の植民地だったが、そこに科学の種族が住みつき、核兵器、UFOなどを開発した。南極は、「五岳神（ウーユエ）」の国と呼ばれた。

五岳とは、中国の道教に登場する、南北中東西に位置する聖山のことである。それらは、じつは南極の山々を指していた。東岳泰山は3680mのペンサコラ山、南岳衡山は4528mのカークパトリック山、4350mのマークナム山、中岳嵩山は5140mのマッシュフ山、西岳崑山は4187mのシドリー山、北岳恒山は4191mのプラトー山のことである。東岳大帝とは、冥府の王のことだが、ヴィディエは、南極の王として東岳大帝と呼ばれた。

科学の種族は、知能を悪に用いる者をできそこないと認定し、UFOで火星送りにしていた。冥界の巨山と呼ばれた「羅ホウ山」とは、火星の火山であり、太陽系でもっとも巨大な火山、2万7千mのオリンポス山のことを指している。中国神話で冥界の神々と呼ばれた人々は、できそこないを裁いていた種族のことであり、「十王」と呼ばれた。

地球上の、タナトス（できそこない）を嫌う、世界中の優れた王族が団結し、「十王」を結成していた。秦広王、楚江王、宋帝王、五官王、閻羅王、変成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王である。閻魔大王（ヤマ）は太陽神シャマシュのことであり、ホウ都大帝はルハンガとヴィディエ、太乙救苦天尊はヴィディエとチュクウのことである。

安倍総理と仲間たちのように平気でウソをつき、テッド・バンディ事件の真犯人ブッシュ元大統領、狂気の怪物モンサント社のように子どもを笑いながら殺すような反自然的な人々は、みな火星で裁かれ、死ぬまで強制労働を課せられた。

ただ、優れた人々は罪悪感が強い。そのため、精神的な健康を理由に、火星の強制労働施設は長らく閉鎖されているようだ。聖公会、大谷家、安倍総理なども、「善人は罪悪感が強いからすぐには俺たちを殺さない。というか、殺せない。だから安心だ。ふあはははは」と笑っている。しかし、多くの罪人（できそこない）を火星に送り、核兵器で焼き殺すことで、巨大な罪悪感に苦しんだ先祖の話を伝え聞いている宇宙人たちも、「それどころじゃない」と考えているようだ。

◆アシアー（エス）の歴史

■ 1000万年前～800万年前？ 人類の先祖が海に入る

■ 1000万年前～800万年前？ 「エス誕生」

森林の覇を賭けたものの、体格差に問題があった人類の祖は、チンパンジー、ゴリラに敗北し、アフリカ東海岸に向かった。その後、エレイン・モーガン女史の著書に記述された一連の出来事が発生した。この水生生活時代を通し、人類の祖は現代人の特徴を全て備えた。サルそのものの骨格構造、筋肉が浮力の影響を受けて、前に出ている首が真上に直立した。これにより、人類は言語を手に入れた。彼らは自らを「エス」と呼んだ。この名が、人類が最初に手に入れた名前だろう。彼らは、人類学者にアウストラロピテクスと呼ばれた。

■ 400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■ 400万年前 「アチェー族誕生」

「エスの大移動時代」に参加したエスは、人類で一番最初にアフリカ大陸を離れた。彼らは、マレー半島に「アチェー族」を生んだ。アチェーの名の由来はアシアーである。アシアー＝アチア＝アチェーとなる。彼らは、人型の未確認生物として知られるオラン・ペンデクのような容姿をしていた。だが、アチェー族自体は永年の混血により、東南アジア人に取り込まれた。

■ 400万年前 「阿蘇誕生」「蝦夷誕生」

「エスの大移動時代」に参加したエスは、人類で一番最初にアフリカ大陸を離れた。彼らは、東南アジアを經由して古代日本に上陸した。エスは、九州に「阿蘇」、東北に「蝦夷（えぞ）」を築いた。その名から、日本列島（九州～東北）はエスの土地だったことがわかる。

■ 400万年前 「クウォス誕生」

「第1次エスの大移動時代」に参加したエスは、湖水地方に入植して「クウォス」を生んだ。その後、エスの姿をしていたクウォスは、湖水地方時代にバラエティ溢れる人類の原型を生み出した。クウォスを初めとして、ピグミーの祖アブク、獣人の祖ルハンガ、パプア人の祖ムシシ、アジア人の祖イマナ、ワルムベ、インド人の祖カゾオバ、キブウカ、50万年前に白人の祖ディンカ、シルックである。このように、人類が多様化し、湖水地方の人口密度が増すと、クウォスは人類で一番最初に水生生活から陸上生活にスイッチした。

■ 40万年前 「エバシの大航海時代」

■ 40万年前 「アシアー誕生」

「エバシの大移動時代」の参加者が東南アジアに到来すると、アチェー族は「アシアー」と呼ばれた。アシアーの名の由来はアチェーである。アチェー＝アシェー＝アシアーとなる。その後、アシアーは大洋の娘たちに参加した。

■ 40万年前 「エウローペー誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したアシアーは、ルハンガと組んで東南アジアに「エウローペー」を生んだ。エウローペーの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー＋ルハンガ＝アールハ＝アールーハー＝エウローペーとなる。その後、エウローペーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「葦原中津国誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加しなかったアシアーは、グレニコスと共に日本に移住した。八代湾に上陸した彼らは、「葦原中津国」を築いた。葦原中津国（アシハラナカツクニ）の名の由来は、アシアーとグレニコスの組み合わせである。アシアー＋原＋グレニコス＋国＝アシ原＋ニコス国＝葦原中津国となる。また、台湾（高天原）は、グレニコスが支配していたキレナイカとアシアーが支配していたアナトリア半島に至る海域、つまり、エーゲ海も「葦原中津国」と呼んでいた。

■ 30万年前 「伊邪那岐誕生」「伊邪那美誕生」

葦原中津国を建設したアシアーとグレニコスは、エウリュノメーを迎えて「伊邪那岐」「伊邪那美」の2神を誕生させた。イザナギの名の由来はアシアーとグレニコスの組み合わせであり、イザナミの名の由来はアシアーとエウリュノメーの組み合わせである。アシアー+グレニコス=アシアニコ=イザナギとなり、アシアー+エウリュノメー=アシアノメー=イザナミとなる。

■ 30万年前 「ズルヴァーンの大移動時代」

■ 30万年前 「ズルヴァーン誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、ルハンガと共にイランに入植した。彼らは「ズルヴァーン」を生んだ。ズルヴァーンの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=シアルハン=サルハーン=ズルヴァーンとなる。彼らは、ズルヴァーンの統治による永遠なる平和の時代、光の楽園の時代を作った。

■ 30万年前 「アシェラーフ族誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、現ソマリアに移住し、ルハンガと共に「アシェラーフ」を生んだ。アシェラーフの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=アシアルハ=アシャルーハ=アシェラーフとなる。彼らは、ソマリア人の祖となる。身長が4 mのルハンガと身長が140 cmのエスが混合することにより、ソマリア人～セネガル人は身長が2 mくらいになった。

■ 30万年前 「ウォロフ族誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、現セネガルに移住し、ルハンガと共に「ウォロフ」を生んだ。ウォロフの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=アルハ=ウォルハ=ウォロフとなる。彼らは、セネガル人の祖となる。身長が4 mのルハンガと身長が140 cmのエスが混合することにより、ソマリア人～セネガル人は身長が2 mくらいになった。

■ 30万年前 「アジア誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、アナトリア半島に移住した。この時にアナトリア半島は、アシアーを由来に「アジア」と呼ばれた。アナトリアの支配者アシアーは、キレナイカの支配者グレニコスと共にエーゲ海を治めた。これにより、古代台湾、古代日本では、エーゲ海も「葦原中津国」と呼ばれていた。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「冥界神オシリス誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したアシアーは、東南アジア、北アメリカ、ユカタン半島を経て地中海に帰還し、エジプトに到着した。獣人ヘラクレスと共にエジプトに降り立ったアシアーは、聖地ヘリオポリスに「冥界の神オシリス」を生んだ。オシリスの名の由来はアシアーとヘラクレスの組み合わせである。アシアー+ヘラクレス=アシェレス=オシリスとなる。

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大移動時代」

■ 1万3千年前 「アシュタルテ誕生」

「ヘリオポリスの大航海時代」を経て「垂仁天皇の大移動時代」に参加したアシアーは、メソポタミアに移住した。この時にアシアーはタルタロスと連合し「アシュタルテ」が誕生した。アシュタルテの名の由来はアシアーとタルタロスの組み合わせである。アシアー+タルタロス=アシアタルタ=アシュタルテとなる。

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年 「アシェル誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したオシリスは、スカンジナビア半島に入植し、「アシェル」を生んだ。アシエルの名の由来はオシリスである。オシリス=オシェリス=オシエル=アシェ

ルとなる。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 スカンジナビア半島からメソポタミアに帰還

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアシェルは、スカンジナビアからメソポタミアに移住した。

■BC 5千年 「シェラフ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアシェルは、メソポタミアに移住すると、「シェラフ」を生んだ。シェラフの名の由来はアシェラーフである。アシェラーフ＝シェラーフ＝シェラフとなる。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC 32世紀 「イスラエル王国誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したアスタルテは、メソポタミアを離れて、故地である葦原中津国に帰還した。葦原中津国のアスタルテは、台湾のロア族（ブリアレオース）と連合して「イスラエル王国」を建設した。第2次北極海ルート、サムエルの大航海時代に参加した人々がイスラエル13氏族を生んだ。つまり、イスラエル13支族は、みな日本、中国生まれである。

■BC 32世紀 「ヨセフ誕生」

「ヨセフ」はエジプトに生まれた。つまり、日本に生まれた。エジプトの名の由来は葦原中津国と十和田の組み合わせである。葦原中津国＋十和田＝葦（アジア）＋和田（プテ）＝アシプテ

=エジプトとなる。ヨセフの名の由来はアシアーである。アシアー=アシハ=ヨセフとなる。

■BC 32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC 32世紀 「アシェル族誕生」「レビ族誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したヨセフは、モンゴルで「アシェル族」「レビ族」を生んだ。アシェル、レビの名の由来はアシェラーフである。アシェラーフ=アシェラ=アシェルとなり、アシェラーフ=アシェラーブ=レビとなる。アシェル族とレビ族は、名前こそ違えど、祖を同じくする人々であるため、イスラエルの12支族にはカウントされない。

■BC 30世紀 「ヨシュア誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したヨセフは、モンゴルに移住し、「ヨシュア」と呼ばれた。ヨシュアの名の由来はアシアーである。アシアー=アシュア=ヨシュアとなる。

■BC 30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC 30世紀 「良の金神誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したアスタルテは、現コンゴに「良（うしとら）の金神」を祀った。うしとらの名の由来はアスタルテである。アスタルテ=アシタル=うしとら（良）となる。金神の名の由来は「コンゴの神」である。コンゴ+神=コン神=金神となる。

■BC 30世紀 「アーサー王誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したヨシュアは、ブリテン島に移住し、「アーサー王」と呼ばれた。アーサーの名の由来はアシアーである。アシアー=アーシアー=アーサーとなる。ヨシュアはアーサー王となり、ブリテン島を拠点にヨーロッパを統治した。

■BC 30世紀 「アシル・ボグドー誕生」

「ヨシュアの大移動時代」の参加者が現アンゴラに「モンゴル王国」を建てると、ブリテン島を離れたアーサー王がモンゴル王国を訪れた。彼は、ゲシル・ボグドーの後を継ぎ「アシル・ボグドー」としてモンゴル王国の王位に就いた。アシル・ボグドーの名の由来はアシェラーフとピクトの組み合わせである。アシェラーフ+ピクト=アシェラ+ピクトー=アシル・ボグドーとなる。

■BC30世紀 「蘆屋道満誕生」

アシル・ボグドーは、「蘆屋道満」とも呼ばれた。蘆屋の名の由来はアシアである。当時、イフェの神官（オニ）が「陰陽道」を築いた。陰陽道の名の由来は「モンゴル王国のオニ（神官）」である。オニ+モンゴル=オンモン=オンミョン=オンミョウ（陰陽道）となる。ピグミー族（アブク）が安倍（あべの）晴明を名乗り、アテナイ王国を操る司神タナトスに支配されていた。そのため、蘆屋道満は安倍晴明と対立した。全ての話は、アフリカに住んでいたツチ族（土御門家）が、日本に伝え、自分の格を上げるために利用した。

■BC1020年 「第2次黙示録アルマゲドン」

■BC1020年 「北イスラエル王国誕生」

「第2次アルマゲドン」により、モンゴル王国がナミブ砂漠、カラハリ砂漠と化すと、ガド族とアシェル族（アシル・ボグドー）は新しいイスラエル王国に移住した。

■BC1020年 「イーシュヴァラ誕生」

「第2次黙示録アルマゲドン」によってモンゴル王国が滅ぶと、アシル・ボグドーは、アフリカを離れてインドに移住した。彼らは、後のシヴァ派（パシュパタ派）の主神となる「イーシュヴァラ」を生んだ。イーシュヴァラの名の由来は葦原である。葦原=アーシハラ=イーシュヴァラとなる。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「州胡誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したイーシュヴァラは、澳門から濟州島に移り、「州胡（チェホ）」と命名した。州胡の名の由来はヨセフである。ヨセフ＝ヨチェホ＝チェホ（州胡）となる。州胡とは、濟州島の古名である。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「チェコ人誕生」「プシェミスル家（前身）誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した州胡（チェホ）の民は、多氏と共にブリテン島からヨーロッパに移った。多氏がオースターに拠点を得ると、州胡の民はシレジアに移って「チェホ（チェコ）」と命名した。ハ行がカ行を兼ねる法則があるため、チェホはチェコとも呼ばれたが、現在では「チェコ」と呼ばれるのが一般的である。チェホの名の由来は州胡（チェホ）である。朝鮮人である彼らは、現地人と混合して「プシェミスル家」を築いた。プシェミスルの名の由来は朝鮮語「武州（プシェ）の美酒（ミスル）」である。

■ A D 8 5 0 年 ポジヴォイ 1 世、初代ボヘミア公に即位 「ボヘミア公国誕生」

A D 8 5 0 年、プシェミスル家のポジヴォイ 1 世が初代ボヘミア公の座に就いている。

■ A D 1 1 9 2 年 「崔氏誕生」

一部が王室と対立し、チェコを離れて朝鮮への帰還を果たした。チェコ人の顔をした彼らは、故地である濟州島に辿り着き、現地人と混合して「崔氏（チェ）」を称した。崔（チェ）の名の由来はチェコである。

■ A D 1 1 9 8 年 オタカル 1 世、初代ボヘミア王に即位 「ボヘミア王国誕生」

A D 1 1 9 8 年にオタカル 1 世が初代ボヘミア王に即位して「ボヘミア王国」を築いている。

■ A D 1 2 6 5 年 「伏見天皇誕生」

当時の済州島は高麗の治世下であったため、崔氏は日本に移り住んだ。崔氏は、後深草天皇に接近して自身の血統と打ち立てた。それがA D 1 2 6 5年に第92代天皇に即位した「伏見天皇」である。伏見の名の由来はプシェミスルである。プシェミスル＝プシェミ＝伏見となる。

■ A D 1 4 世紀 「ドゥマク王国誕生」

男系途絶によってプシェミスル家が滅ぶと、彼らはチェコを後に故地である済州島を目指した。その途上、紅海航行中にメッカに上陸した一行は一時的に残留を決意した。ここでイスラム教の素養を得たプシェミスル家はメッカを出てジャワ島に移った。中国人イスラム教徒チェク・コボが、初代王に即位して「ドゥマク王国」を建国している。王チェク・コボのチェクはチェコに由来しており、ドゥマクの名はフランス語「D E M E K K A (メッカの)」に由来している。

■ A D 1 5 2 6 年 「石原氏誕生」

その後、ムガル帝国などのイスラム教国がインドで台頭すると、イーシュヴァラを祀る人々は日本に移住し、「石原氏」を称した。このとき、マヤの人身御供の神イシュバランケーを祖とする「石原氏」と、シヴァ派の主神イーシュヴァラを由来とする「石原氏」とは区別したい。

■ A D 1 6 世紀 ジャワ島から朝鮮半島に移住

A D 1 6 世紀にドゥマク王国が滅ぶと、ジャワ人の顔をしたプシェミスル家は故地を目指した。彼らは、李氏朝鮮支配下の朝鮮半島に渡って祖を同じくする「崔氏」と合流した。

■ A D 1 8 6 0 年 アントン・チャーホフ生誕

■ A D 1 8 年 大山倍達（崔倍達）生誕 「極真空手誕生」

■ A D 1 9 5 4 年 ウゴ・チャベス生誕

ベネズエラ第53代大統領に就任している。しかし、パット・ロバートソンに暗殺された。

■AD1957年 スティーブ・ブシェミ生誕

ブシェミの名の由来はプシェミスルである。プシェミスル=プシェミ=ブシェミとなる。

■AD1984年 麻原彰晃、初代教祖に 「オウム真理教誕生」

AD1966年、文化大革命を機に中国から日本に逃げてきた人々である。ヒンドゥー教・シヴァ派（パーシュパタ派）に属していたホン族の末裔が築いた団体である。彼らの主神はイーシュヴァラである。麻原の名の由来はこのイーシュヴァラである。そしてイーシュヴァラの名の由来は葦原中津国の葦原である。イーシュヴァラ=ヤシャヴァラ=麻原となる。

麻原の祖は、インドから湖南に移り、湖南九江淫祀に参加していた。そして、「文化大革命」がおきると、彼らは中国を逃げ出して先祖の地「葦原中津国（熊本県）」へと導かれた。オウム真理教は、当初はヒンドゥー教・仏教に根ざした同好会だった。だが、日本赤軍は麻原のふてぶてしさとカリスマ性を見込んで、オウムを隠れ蓑として活動するようになる。そこへ、情報を聞きつけた大谷が幹部として上祐、林郁夫などを送り込んだ。大谷は、オウムを常時監視して転覆の機会を狙っていた。

◆アシュケナジム（アシェル）の歴史

■BC7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■BC7千年 「アシェル誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したオシリスは、スカンジナビア半島に入植し、「アシェル」を生んだ。アシエルの名の由来はオシリスである。オシリス=オシェリス=オシエル=アシエルとなる。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「シェラフ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアシェルは、メソポタミアに移住すると、「シェラフ」を生んだ。シェラフの名の由来はアシェラーフである。アシェラーフ＝シェラーフ＝シェラフとなる。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC 32世紀 「アジュラン族誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したアシェルは、荒廃した故地を後に、ソマリアに一時的に避難していた。アシェル族からは「アジュラン族」が輩出された。アジュランの名の由来はアシェルである。

■BC 32世紀 「第2次北極海ルート」

■BC 32世紀 「アッシリア人誕生」

「第2次北極海ルート」に参加しアシェルは、オビカワ流域に入植し、現地人と混合して「アッシリア人」を築いた。アッシリアの名の由来はアシェルである。アシェル＝アッシェル＝アッシリアとなる。

■BC 1950年 「古アッシリア王国誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したアシェルは、メソポタミアに南下して「アッシュール」を称した。BC 1905年、エリシャム1世がアッシリア王に即位している。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「熊襲誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したアシェル族は、ガド族と共に吸収に入植し、「熊襲」を築いた。熊襲の名の由来は預言者エリアの説話に出てくる熊（くま）と、アシェルに当て字した「襲（おそう）」の組み合わせである。

■ B C 6 1 2 年 アッシリア帝国滅亡

新バビロニア王国とメディア王国の連合軍により、アッシリア帝国は滅亡した。

■ B C 6 1 2 年 「太陽神スーリヤ誕生」

新バビロニア帝国、メディア王国の侵攻を受けて首都ニネヴェが陥落した。これを機に、アッシリア人はオリエント地域を脱出してインドに移住した。アッシリア人は「太陽神スーリヤ」を祀ってアーディティヤ神群に参加した。スーリヤの名の由来はチョーラである。チョーラ＝ショーリヤ＝スーリヤとなる。

■ A D 1 世紀 「阿蘇氏誕生」

熊襲武尊が大和武尊に討伐されると、熊襲は解散し、アシェル族は阿蘇山に移って「阿蘇氏」を称する。阿蘇の名の由来はアシェルである。アシェル＝アソル＝阿蘇となる。

■ A D 2 世紀 「ソル・インヴィクトス誕生」

A D 2 世紀、「太陽神スーリヤ」を伴ってインドからローマに移ったチョーラ人はスーリヤに因んで「太陽神ソル・インヴィクトス」を祀った。ラテン語で太陽を意味する「ソル」の名の由来はスーリヤである。スーリヤ＝スーラ＝ソルとなる。

■ A D 3 世紀 「吐谷揮（アーザ）誕生」

「大和人の大航海時代」に冒険心を触発された阿蘇氏は、南北に新天地を求めて旅立った。北上して黒龍江に侵入した北方組はチベットに渡り、吐谷揮（ツヨッゴン）を結成した。吐谷揮の別名アーザの名の由来は阿蘇、或いは阿蘇である。阿蘇＝アーソ＝アーザとなる。阿蘇氏は、柔然が支配するモンゴル高原を抜け、ほぼ人跡未踏のチベットに侵入していった。

■ A D 6 6 3 年 「ヤゼル誕生」

A D 6 6 3 年、吐谷揮が滅ぶと、阿蘇氏は「ヤゼル」を称してオグス 2 4 氏族に加わった。ヤゼルの名の由来はアシェルである。アシェル＝アジェル＝ヤセルとなる。ヤゼルはオグス 2 4 氏族時代に司馬氏の後裔セヴァに出会い、意気投合して「アシュケナジム」を結成している。

■ A D 8 4 6 年 「チョーラ人誕生」「チョーラ朝誕生」

A D 4 7 6 年、西ローマ帝国が滅亡すると、太陽神ソル・インヴィクトスを祀っていたチョーラ人はインドに帰還し、「チョーラ人」を生んだ。チョーラの名の由来はアッシュールである。アッシュール＝アッチョーラ＝チョーラとなる。A D 8 4 6 年、彼らはインドに「チョーラ朝」を開いた。すると、アッシリア帝国時代の先祖の血が甦ったかの如く、チョーラ人は戦争に明け暮れ、パッラヴァ朝、パーンディヤ朝、ラーシュトラクータ朝、チャールキヤ朝などの周辺国に攻め入った。

■ A D 9 世紀 「アシュケナジム誕生」

オグス 2 4 氏族時代にセヴァ（司馬氏）と出会ったヤゼル（阿蘇氏）は「アシュケナジム」の連合体を築き、ハザール帝国から東欧各地に四散した。アシュケナジムの名の由来は「アシェル」と「キナのシマ」の組み合わせである。アシェル＋キナ＋シマ＝アシェキナシマ＝アシュケナジムとなる。

■ A D 1 2 7 9 年 「チヨロ人誕生」

A D 1 2 7 9 年にチョーラ朝が滅ぶと、インド人の顔をしたチョーラ人はナイル上流域に移住し

て現地人と混合し、「チヨロ人」を形成した。チヨロ人はシルック人と連合していた。チヨロの名の由来はチヨーラである。チヨーラ＝チヨラ＝チヨロとなる。

■AD1293年 「アゼルバイジャン誕生」

AD1293年にシュリーヴィジャヤ王国が滅ぶと、阿蘇氏はカンボージャ人と連合し、コーカサスに進出して「アゼルバイジャン」を称した。アゼルバイジャンの名の由来はアシェルとカンボージャの組み合わせである。アシェル＋カンボージャ＝アセルボイジャ＝アゼルバイジャンとなる。

■AD1991年 「アゼルバイジャン共和国誕生」

カゾオバの歴史

◆クシャーナ（カゾオバ）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■400万年前 「カゾオバ誕生」

「第1次エスの大移動時代」によって、アフリカ東海岸から湖水地方に移ったエスから「カゾオバ」が生まれた。カゾオバは、アブク、ムワリ、モリモなどの小人族よりも背の低い人々である。ピグミー、ネグリトはそれでも140cm前後ほどの背丈があるが、カゾオバの身長は1mくらいである。

カゾオバは湖水地方時代、アブク（140cm）、クウォス（160cm）、ルハンガ（4m）、キブウカ（50cm）、ムシシ（160cm）、イマナ（160cm）などの異なる人類と共存していた。この人類の多様化は、同じ人類同士で獲物がかぶらないように、各々が各々の獲物に特化したことに起因する。身体の大きさは、捕食する獲物の大きさに比して決定されるが、カゾオバは身長140cmのアブクよりも小さい獲物に特化したため、身長が1mになった。同じ種の中で、身体の大小が異なる種がある場合、種の存続が真相である。例えば、同じ種で大きさが異なる動物にはフクロウがいる。彼らは、同じ種同士で餌がかぶらないように各々がそれぞれの獲物に特化した。大きいフクロウはウサギなどを、小さいフクロウは虫といった具合にだ。そのため、フクロウは大小さまざまな種類が存在するのだ。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ムンビ誕生」「エバシ誕生」「ザムビ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したカゾオバは、現ケニアに「ムンビ」、現カメルーンに「エバシ」、中央アフリカに「ザムビ」を生んだ。湖水地方時代、人口密度の影響で各々が各々の獲物に特化していたが、新天地ではその必要がなくなり、小魚、昆虫を食べていたカゾオバは、大型哺乳類、大型魚類など、好きな獲物を食べることで巨大化した。エバシ、ザムビは、身長1mから160cmほどになった。

■ 100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■ 100万年前 「キジムナー（前身）誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加したカゾオバは、北極圏であった地中海に入植した。これにより、肌は白くなり、頭髪が赤くなった。これはキジムナーの特徴であるが、沖縄の妖怪キジムナーは古代ギリシアで生まれたことがわかる。カゾオバはムンビと組み、「キジムナー（キジムン）」を生んだ。

キジムナーの名の由来はカゾオバとムンビの組み合わせである。カゾオバ+ムンビ=カゾムン=キジムン=キジムナーとなる。キジムナーは地中海に於いても獲物を変えなかったため、身長は1mのまま暮らした。キジムナーの目撃談同様、彼らは、古代地中海でも小魚、貝などを獲って食べていたと考えられる。

■ 100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」

■ 100万年前 「亀慈（クチャ）誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加したカゾオバは、「亀慈（クチャ）」に住んだ。クチャの名の由来はカゾオバである。カゾオバ=カジャオバ=クチャ（亀慈）となる。各々の獲物に特化しなければならない、という決まりごとが新天地では無効化された。そのため、カゾオバの一部は大型哺乳類を狩るようになり、身体が巨大化した。古代の亀慈では、1mの人と160cmの人が共存していたと考えられる。

■ 100万年前 「九千坊（クセンボ）誕生」

伝え聞く河童伝説によると、昔、九千坊という河童の首領がいた。彼は九州の河童を統率したという。この出来事の真意は如何に？このロマン溢れる物語は絵空事だろうか？ここに、この河童の伝説を読み解こうと思う。九千坊とは、名前を読み解くとカゾオバのことである。カゾオバ=カゾンバ=クセンボ（九千坊）となる。対する西海坊（サイカイボ）は、現カッパドキアに移住していたサグバタに由来している。

つまり、偉大なカッパ九千坊の伝説は、超古代に亀慈の小人と現カッパドキアの小人が大きな戦争を引き起こしたことを物語っている。「キブウカの大移動時代」に参加した西方組と東方組の戦争である。九千坊が、「九州の河童を統率した」という話は、亀慈人が、古代に地中海から中

中央アジア・インドに至る古代オリエント地方を征圧したことを意味する。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「エブ・ゴゴ（ホモ・フロレシエンシス）誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、インドネシアのフローレス島に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。この土岐に「エブ・ゴゴ」が生まれた。エブゴゴの名の由来はカゾオバとゴゴ（意味不明）の組み合わせである。カゾオバ+ゴゴ=オバ・ゴゴ=エブ・ゴゴとなる。当初、エブ・ゴゴは、フローレス島だけでなく、東南アジア一帯に住んでいた。インドネシアに残った者はエブ・ゴゴと呼ばれ、マレーシアに残った者は「オラン・ペンデク」と呼ばれている。彼らは、いたずら者であり、栽培していた野菜を失敬したり、子供を誘拐するという。現地人曰く、「彼らは子供が好きなんだ」。この特徴は、じつは、日本全国に目撃談が及んでいる「カッパ」にも当てはまる。

■ 30万年前 「ステュクス誕生」

「キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは赤髪の白人であった。彼らは東南アジアに入植し、獣人の姿をしたチュクウ、アボリジニの姿をしたクウォスと組んで「ステュクス」を生んだ。ステュクスの名の由来はカゾオバ、チュクウ、クウォスの組み合わせである。カゾオバ+チュクウ+クウォス=ゾオチュクウォス=ステュクスとなる。ステュクスは、大洋の娘たちに名を連ね、冥府の河として知られた。

■ 30万年前 「セデック族誕生」

マレー半島から台湾に上陸したステュクスは、現地人と混合して「セデック族」を生んだ。セデックの名の由来はステュクスである。ステュクス=セデュクス=セデックとなる。

■ 30万年前 「クサンテー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、オーストラリアに入植した。この時、カゾオバはステュクスと組んで「クサンテー」を生んだ。クサンテーの名の由来は九千坊（クセ

ンボとステュクスとの組み合わせである。クセンボ+ステュクス=クセンテュ=クサンテーとなる。その後、クサンテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ゼウクソー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、オーストラリアに入植した。この時に「ゼウクソー」が生まれた。ゼウクソーの名の由来はカゾオバとステュクスの組み合わせである。カゾオバ+ステュクス=ゾオクス=ゼウクソーとなる。その後、ゼウクソーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カシオペア誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、エチオピア王国に移住した。この時に「カシオペア」が生まれた。カシオペアの名の由来はカゾオバである。カゾオバ=カジュオビヤ=カシオペアとなる。

■ 30万年前 「サキザヤ族誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したサグバタは、台湾に入植し、カゾオバと組んで「サキザヤ族」を生んだ。サキザヤの名の由来はサグバタとカゾオバの組み合わせである。サグバタ+カゾオバ=サグゾオ=サクゾオ=サキザヤとなる。

■ 30万年前 「キジムナー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、沖縄諸島に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。彼らは「キジムナー」の名を復活した。白い肌、赤い髪は、地中海時代に得たものである。古代から日本人と共存し、漁の手伝いをするということもある。キジムナーは妖怪として知られているが、古来から目撃談が絶えず、現地人の中では実在していると信じられている。

キジムナーは、現地人の船に乗って共同で漁を行い、夕食時にはかまどの火を借りに来る。年の瀬は一緒に過ごすなど、人間の「隣人的」な扱いを受けている。人間の家に嫁ぐこともあるといわれているほどだ。基本的に品行法制だが、棲家の古木を切り倒すと、家畜を全滅させたり、船を沈めたりなど、一旦恨みを買うと徹底的に復讐をする。

■ 30万年前 「ケンムン誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、奄美大島に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。彼らは「ケンムン」と呼ばれた。ケンムンの名の由来はキジムンである。キジムン=キンムン=ケンムンとなる。数々の目撃談から、ケンムンはキジムナーと同じ容姿であることがわかる。ケンムンは妖怪として知られているが、古来から目撃談が絶えず、現地人の間では実在していると信じられている。

ケンムンは相撲好きで、人に会えば挑戦するといわれている。薪を運ぶのを手伝ったりし、夜間は漁をする。特に魚の目玉が好き。カタツムリ、ナメクジの食べるという。キジムナーや河童に通ずる。部分も多いことから、同族だということがわかる。

■ 30万年前 「ケシャンボ誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、日本に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。彼らは「ケシャンボ」と呼ばれた。ケシャンボの名の由来は九千坊（クセンボ）である。クセンボ=ケセンボ=ケシャンボとなる。ケシャンボの名は、河童の別名として和歌山県で使用されているが、彼らは東北地方に拠点があったと考えられる。「久慈」「気仙沼」の由来は彼らの可能性がある。

■ 30万年前 「ひょうすべ誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、日本に移住した。彼らはキブウカと組んで「ひょうすべ」と呼ばれた。ひょうすべの名の由来はキブウカとカゾオバの組み合わせである。キブウカ+カゾオバ=ブウゾバ=ふうすば=ひょうすべとなる。人間の家に忍び込んで風呂に入り、湯をいただくという。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「砂漠の神セト誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したステュクスは、エジプトに到着した。セトはエジ

プトに「砂漠の神セト」として君臨した。セトの名の由来はステュクスである。ステュクス＝ステ＝セトとなる。

■ 3万年前 「チュクチの大航海時代」

■ 3万年前 「瀬戸内海誕生」

「チュクチの大航海時代」に参加したチュクチ族は、瀬戸内海に移住し、神の島と呼ばれた「生口島」に拠点を得た。この時に瀬戸内海は初めて「瀬戸」と呼ばれた。瀬戸の名の由来はステュクスである。この時の大航海時代は、古事記、日本書紀では山幸彦の説話として記されている。当時、チュクチ族は台湾人に「幸（さち）」と呼ばれていた。幸の名の由来はステュクスである。ステュクス＝スチュクス＝スチュ＝幸（さち）となる。つまり、海幸彦、山幸彦とはチュクチ族のことである。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「スバル人（サハラ）誕生」

クウォスとルハンガのトバルカインが、初代テーバイ王国を建設すると、気仙沼、久慈川に住んでいたケシャンボ（河童）が興味を示し、チュクウのトバルカインに移住を申し出た。チュクウのトバルカイン（出羽国）は、テーバイ王国のトバルカインと連絡を取り、オロクンのトバルカイン（竜飛国）がUFOでケシャンボを送り出した。ケシャンボはテーバイ王国のトバルカインと組み、「スバル」を生んだ。スバルの名の由来はカゾオバとトバルカインの組み合わせである。カゾオバ＋トバルカイン＝ゾオバルカイン＝ゾオバル＝スバルとなる。スバルは「サハラ」の語源にもなった。

■ BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■ BC 30世紀 「葛葉姫誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、スバル人はメソポタミアに移ったが、一部は現アンゴラにあったモ

ンゴル王国に移住した。スバル人は陰陽道に参加し、「葛葉姫（くずは）」を生んだ。くずは（葛葉）の名の由来はカゾオバである。カゾオバ＝カゾオハ＝葛葉（くずは）となる。葛葉姫は、安倍晴明の生みの親として知られている。

■BC1020年 「第2次黙示録アルマゲドン」

■BC1020年 「亀慈国誕生」

「第2次黙示録アルマゲドン」を機に、ナミビア砂漠になった故地を離れたスバル人は、先祖の故地である亀慈（クチャ）に帰還した。この時、彼らは「亀慈国」を築いた。

■AD45年 カドフィセス1世、クシャーナ王に即位 「クシャーナ朝誕生」

亀慈人は、後に大月氏（キナ）と共に「クシャーナ朝」をAD45年のパンジャブの地に開いている。クシャーナの名の由来は亀慈（クチャ）とキナ（大月氏）の組み合わせである。クチャ＋キナ＝クチャナ＝クシャーナとなる。

■AD5世紀 「草野氏誕生」「草薙氏誕生」「楠木氏誕生」

サーサーン朝の台頭を機にクシャーナ朝が滅ぶと、クシャーナ人は東西に亡命した。彼らは、日本に上陸して現地人と混合し、クシャーナを由来に「草野氏」を、クシャーナキ（クシャーナ人）を由来に「草薙氏」「楠木氏」を形成した。また西方組は、ヨーロッパに侵入して「キュサーノ」「キルチネル」「カーシュナー」の名を残している。

■AD5世紀 「牛頭天王誕生」

サーサーン朝の台頭を機にクシャーナ朝が滅ぶと、クシャーナ人は東西に亡命した。彼らは、日本に「牛頭天王（ごず）」を紹介した。牛頭の名の由来はカゾオバ、或いは葛葉姫である。カゾオバ＝ガゾオバ＝ごず（牛頭）となる。牛頭天王は、修験道に於いて神として崇拝された。

■AD??年 キジムナー、赤い電灯をもらう

科学の種族トバルカインと家族であるスバル人は、同じ家族であるキジムナーに会うために沖縄を訪れた。スバル人は、水に濡れても平気な特殊な小型電灯をキジムナーに手渡した。これにより、キジムナーが漁をする様子を目撃した人々は、「キジムナーは指に赤い光をともして漁をする」と報告した。テレポートのようにキジムナーが突然消えたり、神出鬼没なのも、科学の種族トバルカインの計らいだろう。

■AD14世紀 「佐竹氏誕生」

倭寇が暴れ、台湾に福建海賊が侵入すると、セデック族は日本に移住した。源義業に接近したセデック族は自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「佐竹氏」の祖、佐竹昌義である。佐竹の名の由来はセデック、或いはステュクスである。ステュクス=ステュク=佐竹となる。

■AD1923年 アーヴィン・カーシュナー生誕

■AD1950年 ネストル・キルチネル生誕

第55代アルゼンチン大統領

■AD1952年 ヴィニー・ヴィンセント（ヴィンセント・キュサーノ）生誕

■AD1965年 佐竹雅昭生誕

■AD1967年 草野マサムネ生誕 「スピッツ誕生」

■AD1981年 ジャレッド・クシュナー生誕

◆ブギス族（クサンテー）の歴史

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「クサンテー誕生」

ステュクスはイアンテーと組んで「クサンテー」を生んだ。クサンテーの名の由来はステュクスとイアンテーの組み合わせである。ステュクス+イアンテー=クスアンテー=クサンテーとなる。ステュクスはジュオク、チュクウ、クウォスの合体部族だが、クサンテーはクウォスが指揮権を持っていた。その後、クサンテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「センタニ族誕生」

ステュクスは台湾に上陸したが、クサンテーはメラネシアに残り、「センタニ族」を生んだ。センタニの名の由来はクサンテーである。クサンテー=クサンテニ=センタニとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「東南アジア人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年前 「アルパクシャデ誕生」

「東南アジア人の大航海時代」に参加したクサンテーはモンゴルに移住し、次に「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに移住した。その後、「アヌンナキの大移動時代」に参加したクサンテーはスカンジナビア半島に入植し、エウローペーと連合して「アルパクシャデ」を生んだ。アルパクシャデの名の由来はエウローペーとクサンテーの組み合わせである。エウローペー

ー＋クサンテー＝エウロペクサンテ＝アルパクシャデとなる。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「クマルビ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアルパクシャデは、メソポタミアに入植し、ゴメルと連合してクマルビを祀った。クマルビの名の由来はゴメルとエウローペーの組み合わせである。ゴメル＋エウローペー＝ゴメローペー＝ゴメロペ＝クマルビとなる。

■BC 5千年 「ソドム王国誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアルパクシャデは、ゴメルと連合してクマルビを祀った後、チャドに伝説の国「ソドム」を築いた。ソドムの名の由来はクサンテーとゴメルの組み合わせである。クサンテー＋ゴメル＝サンテメ＝ソドムとなる。ソドム王国は、ゴメルが現カッパドキアに築いたゴモラ王国とは同盟を結んでいた。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC 32世紀 「フォキス誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、荒廃した故地を離れたアルパクシャデは、ギリシアに入植し「フォキス」を建てた。フォキスの名の由来はアルパクシャデである。アルパクシャデ＝パクシャ＝フォキスとなる。フォキスはクサンテーが主導していたが、一方、エウローペーはエウボイア島に移り住んだ。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「ブギス族（前身）誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフォキス人はジャワ島に入植した。フォキス人はその後、ジャワ島からスラウェシ島に移り、現地人と混合して「ブギス族」を形成した。ブギスの名の由来はフォキスである。フォキス＝ボギス＝ブギスとなる。

■ B C 1 4 6 年 「フォックス誕生」

ギリシアがローマの属国化したのを機に、フォキス人がブリテン島に移住した。フォキス＝フォックス＝フォックスとなる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ガッサーン王国誕生」

「大和人の大航海時代」に参加したブギス族は、ジャワを越えてアラビア半島に移住した。シリアに移入した彼らは、「ガッサーン王国」を築いた。ガッサーンの名の由来はクサンテーである。クサンテー＝クッサンテー＝ガッサーンとなる。

■ A D 1 3 世紀 「ルウ王国誕生」「ワジョ王国誕生」「ボネ王国誕生」

A D 7 世紀、イスラム教によりガッサーン王国が滅ぶと、ガッサーン人は故地であるスラウェシ島に帰還した。帰還したガッサーン人は、「ブギス」の名を復活させ、「ルウ王国」「ワジョ王国」「ボネ王国」などの王国を建てた。また、ブギス族は強力な海賊として鳴らし、東南アジア大陸部、オーストラリア大陸北岸、ニューギニア沿岸を荒らしたという。

「ルウ王国」の名の由来は、ガッサーン王国時代に住んでいたシリアであり、「ワジョ王国」の名の由来はクマルビ時代に住んでいたアジア（アナトリア半島）であり、「ボネ王国」の名の由来はフォキス時代に住んでいたペロポネソス半島である。シリア＝シリウア＝ルウとなり、アジア＝ワジア＝ワジョとなり、ペロポネソス＝ペロポネソス＝ボネとなる。

■ A D 1 4 1 3 年 「福島氏誕生」

ジャワのイスラム化が始まると、一部ブギス族がインドネシアを離れて日本に帰還した。ジャワ人の顔をしたブギス族は日本人と交わって「福島」の名を成した。福島の名の由来はブギスの島

である。ブギス+島=ブギ島=福島となる。福島氏からは、「古牧・長久手の戦い」「文禄の役」に従軍した武将、福島政則が輩出されている。

■AD1637年 「ブギス族誕生」

AD1637年に福島家が断絶すると、福島正利が東南アジアにとって返し、再度「ブギス」の名を復活させる。福島正利の血を引き継ぐブギス族は、リアウ島を拠点にジョホール王国に侵入を繰り返してマレー半島に勢力圏を得た。

■AD1812年 「リアウ・リング王国誕生」

リアウを拠点に武装した商人として活動していたブギス族は、AD1722年にラジャ・スライマンを迎えて「ジョホール・リアウ王国」を建設した。しかし、ジョホール王国は、商人としてマレー半島の経済を掌握していたブギス族を排除するため、侵略者であるオランダと組んだ。その際、ブギス族は優れた戦士としてオランダに対して交戦を繰り返した。AD1755年、オランダ東インド会社と交戦して敗北するとブギス族は、オランダを宗主と認めている。だが、白人勢力に屈しないブギス族は、その後もオランダやイギリスと度々戦火を交えた。また、白人列強側もブギス族には一目置いていた。しかし、AD1911年、マレー半島の英国領土併合を機にリアウ・リング王国が消滅すると、ブギス族はマレー半島を離れてパンジャブに亡命した。

■AD1911年 「パキスタン・イスラム共和国誕生」

AD1911年、リアウ・リング王国が滅亡すると、ブギス族はマレー半島からインダス流域に侵入し、パキスタン共和国の礎を築いた。パキスタンの名の由来はブギスとスタンの組み合わせである。ブギス+スタン=ブギスタン=パキスタンとなる。AD1973年には、ファザル・イラーヒー・チョードリーが第5代パキスタン大統領に就任し、「パキスタン・イスラム共和国」が成立した。

■AD1929年 福島正実生誕

■AD1961年 マイケル・J・フォックス生誕

◆鹿島神社（クシュ）の歴史

■BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■BC 7千年 「クシュ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したゼウクソーはメソポタミアに移住し、その後に「アヌンナキの大移動時代」に参加して北アフリカに移住した。この時に「クシュ」が生まれた。クシュの名の由来はカゾオバである。カゾオバ＝カジョオバ＝カジョ＝クシュとなる。クシュは、ハムの子として知られている。

■BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「クヴァシル誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したクシュは、アイルランドからバルト海に移り、古代スカンジナビアを訪れた。クシュは、ハム、メトセラと組んで「クヴァシル」を祀っている。クヴァシルの名の由来はクシュ、ハム、メトセラの組み合わせである。クシュ＋ハム＋メトセラ＝クハセラ＝クヴァシルとなる。

■BC 5千年 「光神ルー誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したクシュは、フォモール人と組んで「光神ルー（ルグス）」を祀った。ルグスの名の由来はフォモールとクシュの組み合わせである。フォモール＋クシュ＝ルクシュ＝ルグス（ルー）となる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「ラガシュ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したルー（ルグス）は、メソポタミアに帰還し、都市国家「ラガシュ」をシュメールの地に建設している。ラガシュの名の由来はルグスである。ルグス＝ルグシュ＝ラガシュとなる。

■BC 5千年 「バベルの塔建設」

■BC 5千年 「クシュ人誕生」

「バベルの塔」を機に、メソポタミアを離れたクシュは、ヌビアに入植した。クシュは、ヌビア人と混合して「クシュ人」となった。クシュ人は、後に「エジプト第25王朝」を開いた。

■BC 747年 ビアンキ、初代ファラオに即位 「ヌビア王朝（エジプト第25王朝）樹立」

「太陽神アメン」を崇拝していたクシュ人は、ヌビア地方に「クシュ王国」を建てていた。クシュ王ビアンキは上エジプトに侵攻してテーベを支配下に置いた。この時に、黒人によるヌビア人王朝が成立した。この王朝は約100年続くが、アッシリア人の侵攻を機に大航海時代を企画して東方に新天地を求めてエジプトを後にする。

■BC 7世紀 「クシュ人の大航海時代」

■BC 7世紀 「カーシー王国誕生」「カシミール誕生」

「クシュ人の大航海時代」に参加したクシュ人は、インドに上陸した。彼らは、現地人と混合して「カーシー王国」を建設した。カーシーの名の由来はステュクスである。ステュクス＝ステ

ユクスー=カーシーとなる。カシミールの名の由来はステュクスとパミールの組み合わせである。ステュクス+パミール=クスミール=カシミールとなる。

■BC37年 「アクスム人誕生」

その後、高句麗が朝鮮半島を席卷すると沃祖（オクジョ）は、アラビア半島に移住し「アクスム人」を生んだ。アクスムの名の由来はキブウカとカシミールの組み合わせである。キブウカ+カシミール=ウカシミ=アクスムとなる。

■AD1世紀 「アクスム王国誕生」

アクスム人は、アラビア半島に「アクスム王国」を建てた。後に、アクスム人は紅海の対岸アビシニアに進出してメロエ王国を滅ぼし、コプト教が伝来すると黒アフリカ初のキリスト教国となった。アクスム人のヌビア侵攻は、クシュ人の故地への帰還と考えることができる。

■AD7世紀 「コサ族誕生」

AD7世紀にイスラム教が到来するとアクスム人は南方に逃れた。故地を追われたアクスム人は、未開の土地であった南アフリカに上陸した。彼らは、狩猟・採集の民であるサン人などと混合し、「コサ族」を形成した。コサの名の由来はアクスムである。アクスム=アコサム=コサとなる。

■AD7世紀 「カスマ川誕生」

狩猟・採集の生活が性に合わなかったコサ族は、すぐに南アフリカを発った。そのまま大西洋を横断し、南アメリカ大陸に到達したコサ族は、ユカタン半島に赴いた。その後、コサ族はユカタン半島からペルーに移り、「カスマ川」に拠点を得た。カスマの名の由来はアクスムである。アクスム=アカスマ=カスマとなる。

■AD7世紀 「コスメル誕生」

アクスム人は、ペルーからマヤに赴いて「コスメル島」の拠点を得た。コスメルの名の由来はカ

シミールである。カシミール=カシミル=コスメルとなる。

■ A D 8 世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「木曾氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したコサ族は、諏訪に到着すると、「木曾氏」を生んだ。木曾の名の由来はコサである。

■ A D 1 1 5 4 年 木曾義仲生誕

■ A D 1 5 1 4 年 木曾義康生誕

■ A D 1 5 2 1 年 陶晴賢生誕

■ A D 1 7 ? ? 年 「カランガスム王国誕生」

A D 1 5 5 5 年、武田信玄に敗北した木曾義康は、バリ島に移住した。その後、カリंगाを後にしたカリंगा人は、木曾氏と組んで、バリ島に「カランガスム王国」を築いた。

◆ハザール（コーサラ）の歴史

■ B C 7 千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千年 「クシュ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したゼウクソーはメソポタミアに移住し、その後に「アヌ

ンナキの大移動時代」に参加して北アフリカに移住した。この時に「クシュ」が生まれた。クシュの名の由来はカゾオバである。カゾオバ=カジョオバ=カジョ=クシュとなる。クシュは、ハムの子として知られている。

■BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「クヴァシル誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したクシュは、アイルランドからバルト海に移り、古代スカンジナビアを訪れた。クシュは、ハム、メトセラと組んで「クヴァシル」を祀っている。クヴァシルの名の由来はクシュ、ハム、メトセラの組み合わせである。クシュ+ハム+メトセラ=クハセラ=クヴァシルとなる。

■BC 5千年 「光神ルー誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したクシュは、フォモール人と組んで「光神ルー（ルグス）」を祀った。ルグスの名の由来はフォモールとクシュの組み合わせである。フォモール+クシュ=ルクシュ=ルグス（ルー）となる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「ラガシュ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したルー（ルグス）は、メソポタミアに帰還し、都市国家「ラガシュ」をシュメールの地に建設している。ラガシュの名の由来はルグスである。ルグス=ルグシュ=ラガシュとなる。

■ B C 3 2 世紀 「シュメール人の大航海時代」

■ B C 3 2 世紀 「グジャラート誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したラガシュの民は、ソドムとゴモラの惨事を契機に東方に向かった。ラガシュ族、エリドゥ族はまず「グジャラート」に足を止めた。グジャラートの名の由来はラガシュとエリドゥの組み合わせである。ラガシュ+エリドゥ=ガシュリド=グジャラートとなる。

■ B C 1 0 世紀 「コーサラ誕生」

後に、グジャラートの民はガンジス流域に侵入し、上流に赴いて「コーサラ王国」を建設する。コーサラの名の由来はグジャラートである。グジャラート=グージャラート=コーサラとなる。

■ B C 3 1 7 年 「箕子朝鮮誕生」

マウリア朝が成立すると、コーサラ王家はインドを脱出して朝鮮半島に移住した。インド人の顔をした彼らは朝鮮人と混合して「箕子（キジャ）」を称した。箕子の名の由来はグジャラートである。グジャラート=キジャラート=キジャ（箕子）となる。

■ B C 4 世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■ B C 4 世紀 「ケ誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加した箕子（ギジャ）は、スコットランド北部に至り、ピクト族の共同体に入り込んだ。箕子は、現地人と混合して「ケ」を築いた。ケの由来は箕子（キジャ）である。キジャ=ケジャ=ケとなる。

■ B C 3 世紀 「第2次ヴィシュヌの大航海時代」

■BC3世紀 「ケツアルコアトル誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したコーサラ人とフォトラは「テオティワカン」が栄えていた古代メキシコに降り立ち、連合して「ケツアルコアトル」を生んだ。ケツアルコアトルの名の由来はコーサラとフォトラの組み合わせである。コーサラ+フォトラ=コーチャラ+クオトラ=ケツアルコアトルとなる。

■BC139年 「ケツアルコアトルの大航海時代」

■BC139年 「イツァー人誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したケツアルコアトルは、マヤに上陸した。コーサラ人は、マヤ人と混合して「イツァー人」を生んだ。イツァーの名の由来はケツアルコアトルである。ケツアルコアトル=ケツァ=ケチュア=エチュア=イツァーとなる。

■BC139年 「ケチュア族誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したケツアルコアトルは、ペルーに上陸した。コーサラ人は、ペルー人と混合して「ケチュア族」を生んだ。ケチュアの名の由来はケツアルコアトルである。ケツアルコアトル=ケツァ=ケチュアとなる。ケチュア族は、ガスコン人が到来すると、連合して「クスコ王国」を築くことになる。

■BC139年 「ハザール族誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したケツアルコアトルは、中央アジアに移住すると、彼らは「カザール（ハザール）」を築いた。ケツアルコアトル=ケツァール=カザールとなる。つまり、「ハザール帝国（カザール）」は、ユダヤ人ではなくメキシコの神ケツアルコアトルが築いたものなのだ。

■AD450年 カラダッチ、第2代ハザール王に即位 「ハザール帝国誕生」

A D 4 5 0 年、カラダッチが第 2 代ハザール帝王に即位している。ハザール帝国は謎の多い国家だが、ケツアルコアトルが築いた帝国なのだ。

■ A D 7 1 7 年 「イサウリア朝誕生」

イツァー人はアナトリア半島に移ると、現地人と混合して「イサウリア家」を興した。イサウリアの名の由来はケツアルコアトルである。ケツアルコアトル=イツァル=イツァウリア=イサウリアとなる。A D 7 1 7 年、レオン 3 世が初代皇帝に即位してビザンツ帝国に「イサウリア朝」を開いた。

■ A D 9 ?? 年 「チチェン・イツァー誕生」

A D 8 6 7 年にイサウリア朝が滅ぶと、イサウリア王家（イツァー人）はチェチェン人を連れてメキシコに帰還した。彼らは、「チチェン・イツァー」を築いた。チチェン・イツァーの名の由来はチェチェンとイツァーの組み合わせである。チェチェン=チチェンとなり、チチェン+イツァー=チチェン・イツァーとなる。しかし、チチェン・イツァーは、イシュバランケー、イシュキックなどを祀る人身御供の種族によって支配されていた。

■ A D 1 0 世紀 「梶原氏誕生」

A D 1 0 世紀頃に王国が滅ぶと、ハザール人は中央アジアから日本に移住した。中央アジア人の顔をしたハザール人は、日本人と混合して「梶原氏」を称した。梶原の名の由来はカザールである。カザール=カジャラ=梶原となる。ハザール人は鎌倉景通に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「梶原氏」の祖、梶原景久である。

■ A D 1 2 ?? 年 「カチュリ家誕生」

梶原景久は「鎌倉幕府」を築いた「坂東八平氏」に属していたが、「景久の変」を機に、日本を脱出して中央アジアに帰還した。この時に「カチュリ家」が生まれた。カチュリの名の由来は梶原である。梶原=カジャラ=カチュリとなる。カチュリは、ティムール帝国を生む土壌を提供した。

■AD15??年 「カジャール部族連合誕生」

その後、カチュリ家の系統から、かのチムールが誕生したため、カチュリ家は「チムール帝国」の支配層に組み込まれた。だが、チムール帝国が滅亡すると、カチュリ家は「カジャール部族連合」を結成した。カジャールの名の由来はカザール（ハザール）である。

■AD1572年 「インカ人の大航海時代」

■AD1572年 「コサ族継承」

「インカ人の大航海時代」に参加したケチュア族は、マントゥーロ族はコサ族の故地南アフリカを目指した。南アフリカに到達すると、ケチュア族は「コサ族」を継承して復活させ、マントゥーロ族からは「マンデラ」の姓が生まれた。マンデラの名の由来はマントゥーロである。この系統からは、南アフリカ共和国第8代大統領ネルソン・マンデラが輩出されている。

■AD1794年 「カジャール朝誕生」

AD1794年、カジャール部族連合はサハヴィー朝滅亡後のイランを統一し、アーガー・モハンマド・シャーが初代シャーに即位して「カジャール朝（崇高なる国イラン）」を建設した。

◆スバル（トバルカイン）の歴史

■1万3千年前 「スバル人（サハラ）誕生」

クウォスとルハンガのトバルカインが、初代テーバイ王国を建設すると、気仙沼、久慈川に住んでいたケシャンボ（河童）が興味を示し、チュクウのトバルカインに移住を申し出た。チュクウのトバルカイン（出羽国）は、テーバイ王国のトバルカインと連絡を取り、オロクンのトバルカイン（竜飛国）がUFOでケシャンボを送り出した。ケシャンボはテーバイ王国のトバルカインと組み、「スバル」を生んだ。スバルの名の由来はカゾオバとトバルカインの組み合わせである。カゾオバ+トバルカイン=ゾオバルカイン=ゾオバル=スバルとなる。スバルは「サハラ」の

語源にもなった。

■ B C 5 千年 「伊勢国誕生」「神道誕生」

スバル人は、セネガル人と共に伊勢半島に住む「岱輿」の元を訪れた。両者は意気投合して「伊勢国」を築き、「神道」を生んだ。伊勢の名の由来はイデュイアとカゾオバの組み合わせであり、神道の名の由来はンジニとイデュイアの組み合わせである。イデュイア+カゾオバ=ユイアゾオ=イザヤ=伊勢となり、ンジニ+イデュイア=ジニデュイア=神道（しんとう）となる。

■ B C 3 2 世紀 「ソドムとゴモラ」

■ B C 3 2 世紀 「シッパール誕生」

ソドムとゴモラを機に、スバル人はメソポタミアに「シッパール」を築いた。シッパールの名の由来はスバルであり、スバルの名の由来はサハラである。サハラ=サバラ=スバルとなり、スバル=スッパール=シッパールとなる。

■ B C 3 2 世紀 「第2次北極海ルート時代」

■ B C 3 2 世紀 「スバルバル諸島誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人はまず、北極点を通過する冒険を試みて、第1の拠点スバルバル諸島に辿り着く。スバルバルの名の由来はスバルである。しかし、北極点通過は困難だと分かると、一行は、第2の拠点であるオビ河に到着する。

■ B C 3 2 世紀 「プール族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人は、エニセイ河流域に降り立ち、現地人と混合して「プール族」を形成した。プールの名の由来はスバルである。スバル=スバアル=プールとなる。その後、プール族はアーリア人に参加している。

■ B C 3 2 世紀 「ツバル誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人はシベリアを通過すると、樺太を南下し、単身、太平洋に漕ぎ出て「ツバル諸島」を発見した。ツバルの名の由来はスバルである。

■ B C 3 2 世紀 「セイバル誕生」「ハイ・ブラジル誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人は、太平洋を横断すると、マヤに入植した。彼らはこの時に「セイバル」を建設した。セイバルの名の由来はスバルである。スバル＝スイバル＝セイバルとなる。セイバル人は、同じ時期に「ドルイド教の大航海時代」を介して西廻りでマヤに到達したセロス人（ティルス）と連合し、「ブラジル（セイバル＋セロス）」を称した。セイバル＋セロス＝バルセロ＝ブラジルとなる。

彼らは、マヤからアマゾン流域に侵入して、奥地に分け入った。そして、古の「モホス文明」の亡骸を発見したブラジル人は、モホス文明を復活させた。彼らは、エノク族が残した古代の叡智を学びながらモホス文明をフル稼働させた。この時期にモホス文明を営んでいたブラジル人の記憶が、ハイ・ブラジル伝説の中樞を成していった。

■ B C 3 2 世紀 「シバ王国誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人は「プール族」を生んだが、彼らはパンジャブに入植し、「シバ王国」を築いた。シバの名の由来はスバルである。スバル＝シバル＝シバとなる。

■ B C 3 2 世紀 「パンジャブ誕生」

シバ王国は、ヴァナラシのトバルカインが建設したプント王国と連合して「パンジャブ」を生んだ。パンジャブの名の由来はプントとシバの組み合わせである。プント＋シバ＝プンシバ＝パンジャブとなる。

■ B C 3 2 世紀 「サバエ人（サビニ人）誕生」

シバ王国は、「ソドムとゴモラ」を機に科学を放棄したオロクンのトバルカインと共に「サバエ人（サビニ人）」を生んだ。サバエとサビニの名の由来は、両方ともシバとアルキュオネウスの

組み合わせである。シバ+アルキュオネウス=シバユオ=シバエ=サバエとなり、シバ+アルキュオネウス=シバネウ=サビニとなる。サバエもサビニも、名前は違えど、同じ種族である。

■BC 22世紀 「テーベ誕生」

サバエ人（クウォスのトバルカイン）は、オロクンのトバルカインから生まれたアラム、エラムと連合した。しかし、この時にイマナとニャメがアラム、エラムから分離し、「太陽神アメン」を生んだ。サバエ人は、太陽神アメンのエジプト行きに同行した。両者は、ナイル上流域に至り、神官都市「テーベ」を建設した。テーベの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=トバルカイン=テーベとなる。

■BC 2134年 メンチュヘテプ2世、ファラオに即位 「エジプト第11王朝樹立」

太陽神アメンの王統とトバルカインは「エジプト第11王朝」を開き、人喰い人種スキタイ人の「エジプト第10王朝」と対立した。この対決に勝利し、エジプトを再統一したのは、第11王朝のメンチュヘテプ4世であった。

■BC 1650年 セケンエンラー2世、ファラオに即位 「エジプト第17王朝樹立」

クウォスのトバルカインから「セケンエンラー2世」が生まれた。彼は、ヒクソスを攻撃し、テーベに「エジプト第17王朝」を開いた。

■BC 1565年 アハメス、ファラオに即位 「エジプト第18王朝樹立」

クウォスのトバルカインから「アハメス」が生まれた。彼は、ヒクソスを追放し、テーベに「エジプト第18王朝」を開いた。

■BC 1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC 1027年 「テーバイ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、サバエ人は古代ギリシアに上陸した。彼らは「テーバイ」を建てた。テーバイの名の由来はオロクンのトバルカインが治めていたサハラに建てられた「テーバイ王国」である。

■BC829年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC829年 「破壊神シヴァ誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したサバエ人は、モレヤ族とともにインドに入植した。サバエ人は「破壊陣シヴァ」をインドに生んだ。インドはサバエ人にとっては、シバ王国時代の故地でもある。

■BC829年 「太陽神ヴィシュヌ誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したサバエ人は、ンジニと組んで「太陽神ヴィシュヌ」を祀った。ヴィシュヌの名の由来はカゾオバとンジニの組み合わせである。カゾオバ+ンジニ=バジニ=バジュニ=ヴィシュヌとなる。

■BC829年 「諏訪国誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したサバエ人は、インドに入植したが、一部はインドを離れて日本に進出し、同盟者のモレヤ族（守屋氏）が治めていた「諏訪国」に根を下ろした。彼らが訪れて初めて、当地は「諏訪」と呼ばれた。諏訪の名の由来はシヴァである。シヴァ=シワ=諏訪となる。

■BC753年 「アルメニア人の大航海時代」

■BC750年 「サバエ王国誕生」

「アルメニア人の大航海時代」に参加したサバエ人は、アメン神官団が入植したアラビア半島に入植し、「サバエ王国」を築いた。

■BC750年 「邇芸速日命誕生」

「アルメニア人の大航海時代」に参加したサバエ人は、アメン神官団、長脛彦と合体し、「邇芸速日命（ニギハヤヒ）」の連合体を築いた。物部氏の祖と言われる邇芸速日の名の由来は、ナーガ（長脛彦）、サバエ、アメン（日）の組み合わせである。ナーガ+サバエ+日（アメン）=ナガバエ日=ニギハヤ日=邇芸速日となる。

■BC6世紀 「隼人誕生」

その後、神武天皇の東征を機に「邇芸速日命」の連合体が崩壊すると、長脛彦は現群馬県に移住して「中曾根」を生み、アメン神官団は「閔氏」となった。閔の名の由来はアメンである。また、サバエ人は大和地方から九州に上陸して「隼人」を称した。隼人の名の由来は「サバエの人」である。サバエの人=バエト=ハヤト（隼人）となる。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■AD327年 「ボスニア誕生」

アレキサンダー大王のパンジャブ征服を機に、「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したヴィシュヌは、インドを離れてアドリア海に移っている。彼らは、「ボスニア」の地を得た。ボスニアの名の由来はヴィシュヌである。ヴィシュヌ=ヴィシュニア=ボスニアとなる。

■BC115年 「サービア教誕生」

サバエ王国が滅ぶと、サバエ人はハッラーンに入植して「サービア教」を興した。サービアの名の由来はサバエである。サバエ=サーバエ=サービアとなる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ハイド誕生」「ボイド誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した隼人は、ブリテン島に上陸し、現地人と混合して「ハイド」「ボイド」などの名を生んだ。ハイド、ボイドの名の由来は隼人である。隼人＝ハヤト＝ハイド＝ボイドとなる。

■ A D 7 世紀 「サービア人（セルビア）誕生」

イスラム帝国軍がハッラーンに侵攻すると、サービア教はアドリア海に移った。サービア教徒は「サービア人（セルビア人）」となり、A D 9 2 6 年、セルビア人のトミスラヴ 1 世がクロアチアを統一して「クロアチア王国」を建設している。

■ A D 7 世紀 「柴田氏誕生」

イスラム帝国軍がハッラーンに侵攻すると、サービア教は日本に移住した。彼らは、サービアト（サービアの人）を由来に「柴田氏」を名乗った。サービアト＝サバト＝柴田となる。サービア教徒は阿部氏、大伴氏に接触し、自身の血統を打ちたてた。それが「阿部柴田氏」「大伴柴田氏」である。

■ A D 8 0 1 年 ベラ 1 世、初代バルセロナ伯に就任 「バルセロナ誕生」

この時に、主を失ったモホス文明が再び永い眠りについた。バルセロナの名の由来はブラジルである。ブラジル＝ブラジルナ＝バルセロナとなる。この年、ベラ 1 世が初代バルセロナ伯に就任し、バルセロナ伯領が成立している。だが、A D 8 7 8 年、ギフレー 1 世が台頭すると、バルセロナ人は 2 手に分離してイベリア半島を旅立った。北上組はブリテン島に上陸して「ラッセル」を称し、東方組はアラビア半島に移住し、マンスールウマール 1 世が「ラスール朝」を開いた。どちらの名もブラジル、或いはバルセロナが由来である。ブラジル＝ブラッジル＝ラッセル、ブラジル＝ブラジール＝ラスールとなる。

■ A D 8 ? ? 年 「ラッセル誕生」

A D 8 7 8 年、ギフレー 1 世が台頭すると、バルセロナ人は 2 手に分離してイベリア半島を旅立った。北上組はブリテン島に上陸して「ラッセル」を称した。

■AD8??年 「スウェード人誕生」

ヴァイキング、ノルマン人、デーン人がブリテン島を訪れるようになると、刺激を受けた隼人はブリテン島からスカンジナビアに移住した。彼らは現地人と混合して「スウェード人」を生んだ。スウェードの名の由来はスバルと隼人の組み合わせである。スバル+隼人=スバヤト=スヴァヤード=スウェードとなる。

■AD926年 トミスラヴ1世、初代王に即位 「クロアチア王国誕生」

AD926年、セルビア人のトミスラヴ1世がクロアチアを統一して「クロアチア王国」を建設している。

■AD1003年 ウンベルト1世、初代サヴォイア伯に就任 「サヴォイア家誕生」

AD10世紀頃、スウェード人はワリアギと共にビザンツ帝国の傭兵として、ノルマン人と交戦を繰り返したが、敗北を機に、スウェード人がイタリアに上陸して「サヴォイア」を名乗った。サヴォイアの名の由来はサバエである。スウェード=サヴォイド=サヴォイアとなる。AD1003年にウンベルト1世が初代サヴォイア伯に収まっている。

■AD1003年 「斉藤氏誕生」

一部スウェード人は地中海から日本を目指し、加賀国に上陸した。金髪・碧眼の白人である彼らは、藤原叙用に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが、「斉藤氏」の祖である斉藤忠頼である。

■AD1223年 「早田氏誕生」「鷹島氏誕生」「白浜氏誕生」「立石氏誕生」

「第3回十字軍」に参加したイギリス人ハイド、ボイドは、無意味な虐殺を嫌ってはるばるエルサレムから九州に帰ってきた。彼らは「大和人の大航海時代」の後裔、ハイド、ハンター、ベックのイギリス人の一族である。現長崎に入植した隼人の子孫ハイドは「早田氏（隼人）」「鷹島氏（ホルスの島）」を、ベックは「福島氏（ベックの島）」「今福氏」を、ハンターは「鴨打氏」を、そして、全員で「白浜氏（石灰岩剥き出しのイギリスの岸壁を意味する）」「立石氏（

ストーンサークルを意味する)」を生んだ。彼らは「倭寇」に参加した。

■AD1229年 「ラスール朝誕生」

「第3回十字軍」に参加したイギリス人ラッセルは、無意味な虐殺を嫌ってはるばるエルサレムからアラビア半島に移住した。この時にマンスールウマール1世が生まれた。彼は「ラスール朝」を開いた。ラスールの名の由来はラッセルである。ラッセル＝ラセル＝ラスールとなる。AD1454年に滅んでいる。

■AD1295年 「斯波氏（武衛家）誕生」

AD1285年、フィリッポ1世が死去すると、サヴォイア伯国は10年に渡る継承権争いに見舞われた。これを機に、フィリッポ1世の一族はイタリアを見限り、日本に移住した。イタリア人の顔をした彼らは足利氏に接近し、自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「斯波氏」の祖、足利家氏である。斯波の名の由来はサヴォイアである。サヴォイア＝シヴァイア＝斯波となる。斯波氏は「武衛家」とも呼ばれたが、武衛の名の由来もサヴォイアである。サヴォイア＝サヴェイア＝ヴェイ＝武衛となる。この一連のネーミングセンスに、自分たちがサヴォイアの人間であるという主張と誇りが見え隠れする。

■AD1335年 「スワヒリ誕生」「ソファアラ誕生」

「中先代の乱」が失敗すると、諏訪氏は、故地であるインドに帰還する。一部諏訪氏は、東アフリカの海岸線を南下し、「スワヒリ」に根を下ろした。更に、現地人と混合した諏訪氏は、現モザンビーク近辺に赴いて海港都市「ソファアラ」を築いた。スワヒリの名の由来は諏訪の原であり、ソファアラの名の由来はスワヒリである。諏訪＋原＝スワハラ＝スワヒリとなり、スワヒリ＝スファヒリ＝ソファアラとなる。諏訪氏が到来して始めて、この地域はスワヒリと呼ばれた。

■AD13??年 「サバーハ家誕生」

スワヒリにソファアラを築いた諏訪氏は、スワヒリ地域と貿易を行っていたアラビア人に興味を持ち、アラビア半島に上陸した。ソファアラ人は、ナジュドに移住して現地人と混合し、「サバーハ」を称した。サバーハの名の由来はスワヒリである。スワヒリ＝サワーハリ＝サワーハ＝サバーハとなる。

■AD1414年 「サイド家誕生」

AD1347年頃、黒死病の流行によって危機感を感じた一部サヴォイア家はイタリアを脱出して北インドに移住した。サイドの名の由来はスウェードである。スウェード＝スウィード＝サイドとなる。金髪・碧眼の白人である彼らは現地人と混合し、AD1414年に「サイド朝」を開く初代君主ヒズル・ハーンが輩出された。

■AD1458年 「柴田氏誕生」

AD1451年、サイド王家は王朝の滅亡を機に、インドから日本に移住した。北インド人の顔をした彼らの一部は越前国に上陸して越前斎藤氏に合流し、一部は尾張国に上陸して現地人と混合して「柴田氏」を称した。柴田の名の由来はスウェードである。スウェード＝スヴェド＝柴田となる。この系統からは柴田勝家が輩出されている。

■AD15年 斯波義建生誕

斯波氏の後継者争いが「応仁の乱」の要因のひとつとなった。

■AD15年 斎藤道三生誕

■AD1522年 柴田勝家生誕

勝家は、重要な家臣のひとりとして織田信長に仕えた。ルイス・フロイスからは「甚だ勇猛な武将であり、一生を軍事に費やした人」「信長の時代の日本で最も勇猛な武将であり、果敢な人」と評している。しかし、勝家は一向一揆の司令塔金沢御堂を攻め滅ぼして加賀国を制定した。そのため、大谷に恨まれ、日本を脱出する結果を招いた。歴史上、勝家は妻子を刺して80人と共に切腹したとされているが、実際は海外に逃亡している。

■AD1561年 斯波義銀、サヴォイア公国に移住

斯波義銀は、吉良義昭、石橋家、そして駿河国の今川氏と共に織田信長に対抗する策を練っていたが、謀が発覚して尾張国から追放され、斯波氏（武衛家）は滅びてしまう。これを機に、斯波氏は故郷であるサヴォイアへの帰還を果たした。イタリアに上陸した斯波氏は、家族であるサヴォイア家に接近して自身の血統を打ち立てた。斯波氏の系統からは第31代サヴォイア伯ヴィットリオ・アメデーオ1世が輩出された。アメデーオ（アマデウス）の名の由来は天照大神である。

■AD1573年 「ブー・サイード家誕生」

美濃齊藤氏は、齊藤龍興の代に日本を後にオマーン王国に移住した。サイードの名の由来は齊藤である。AD1744年に、齊藤氏の後裔イマーム・アーマド・ビン・サイードが初代イマームに即位して「ブー・サイード朝」が開かれている。この系統からは、後にスワヒリ文化圏を掌握してポルトガルを撃退し、AD1866年に「ザンジバル帝国」を立国したスルタン・マジド・ビン・サイードが輩出されている。

■AD1626年 シャブタイ・ツヴィ生誕 「シャブタイ派誕生」

日本を脱出した柴田勝家の一族は、アナトリアのイズミールに移住して現地人と混合した。その後、「シャブタイ・ツヴィ」が誕生する。シャブタイの名の由来は柴田であり、ツヴィの名の由来はサヴォイアである。柴田＝シバタイ＝シャブタイとなり、サヴォイア＝ツヴォイア＝ツヴィとなる。近代ユダヤ史に於いて、最も影響を誇った偽メシアとして知られている。預言者アブラハム・ナタン（タナトス）に利用された彼は、オスマン・トルコ帝国に逮捕され、裁判を受けた。彼は、イスラム改宗によって刑を免れたが、その後、アルバニアに追放された。しかし、シャブタイの一族はそこから脱出し、大西洋を越え、スペイン統治下のメキシコにまで逃げ延びた。

■AD1720年 ヴィットリオ・アメデーオ2世、初代王に即位 「サルディーニャ王国誕生」

AD1675年にヴィットリオ・アメデーオ2世が第34代サヴォイア伯に就任している。彼は、AD1720年に初代サルディーニャ王に即位し、「サルディーニャ王国」を建国した。

■AD17??年 「クウェート王国誕生」

AD18世紀、サウード家に追放されるとサバーハ家はクウェートに移り、「クウェート国」を建てた。

■AD1861年 ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世、初代王に即位 「イタリア王国誕生」

中世にビザンツ帝国の傭兵としてノルマン人と戦闘を繰り返したスウェード人の子孫であるサヴォイア家は、ローマ帝国以来のイタリア半島の統一を果たした。

■AD1866年 「ザンジバル帝国誕生」

ブー・サイード家は、後にスワヒリ文化圏を掌握してポルトガルを撃退し、AD1866年に「ザンジバル帝国」を立国したスルタン・マジド・ビン・サイードが輩出されている。ザンジバルの名の由来はケシャンボとスバルの組み合わせである。ケシャンボ+スバル=シャンズバル=ジャンズバル=ザンジバルとなる。

■AD1879年 エミリアーノ・サパタ生誕 「メキシコ革命」

AD1676年、シャブタイ・ツヴィの一族は、流刑地のアルバニアからはるばるメキシコにまで落ち延びた。この時に「サパタ」の名が生まれた。その後、「メキシコ革命」を指揮するエミリアーノ・サパタが生まれた。勇猛果敢と謳われた柴田勝家の子孫であるサパタは、ポルフィリオ・ディアス（大谷家）、ペヌスティアーノ・カランサ（クロノス）に対して武装蜂起を仕掛けた。日本で浄土真宗と戦った勝家の子孫であるサパタは、奇遇なことに、メキシコの地でも大谷の家族と戦う羽目になった。

■AD1927年 ケン・ラッセル生誕

■AD1935年 エルビス・プレスリー生誕

■AD1946年 フレディ・マーキュリー（フレデリック・ブルセラ）生誕 「クイーン誕生」

■AD1951年 カート・ラッセル生誕

■AD1960年 ジャック・ラッセル生誕 「グレイト・ホワイト誕生」

■AD1963年 マイケル・スウィート生誕 「ストライパー誕生」

■AD1973年 エロヒム、クロード・ボリロンに会見

フランス人クロード・ボリロンは、この年に、エロヒムと称する宇宙人に会見した。この時の宇宙人は身長が1mほどだったという。彼らは、スバル人（カゾオバ）の末裔である。なぜエロヒムを称したかは不明である。

■AD1994年 「サパティスタ民族解放軍誕生」

柴田氏、エミリアーノ・サパタの子孫である人々が「サパティスタ民族解放軍」を結成し、AD1994年、NAFTA発効日に合わせて蜂起した。NAFTAによって遺伝子組み換えとうもろこしがメキシコを蝕むことを憂慮したのだ。彼らの目的は、政府転覆、反政府運動ではなく、世界的な新自由主義的グローバリゼーションがもたらす、構造的な搾取と差別に対して戦うことだという。

キブウカの歴史

◆吉備氏（キブウカ）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■400万年前 「キブウカ誕生」

「第1次エスの大移動時代」によって、アフリカ東海岸から湖水地方に移ったエスから「キブウカ」が生まれた。キブウカは、アブク、ムワリ、モリモなどの小人族よりも背の低い人々である。ピグミー、ネグリトはそれでも140cm前後ほどの背丈があるが、キブウカの身長は50cmくらいである。

キブウカは湖水地方時代、アブク（140cm）、クウォス（160cm）、ルハンガ（4m）、カゾオバ（1m）、ムシシ（160cm）、イマナ（160cm）などの異なる人類と共存していた。この人類の多様化は、同じ人類同士で獲物がかぶらないように、各々が各々の獲物に特化したことに起因する。身体の大きさは、捕食する獲物の大きさに比して決定されるが、キブウカは身長1mのカゾオバよりも小さい獲物に特化したため、身長が50cmになった。

同じ種の中で、身体の大小が異なる種がある場合、体長の相違は種の存続が核にある。例えば、同じ種で大きさが異なる動物にはフクロウがいる。彼らは、同じ種同士で餌がかぶらないように各々がそれぞれの獲物に特化した。大きいフクロウはウサギなどを、小さいフクロウは虫といった具合にだ。そのため、フクロウは大小さまざまな種類が存在するのだ。当時の人類にも、それと同じことが起こったのだ。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「サグバタ誕生」「ナナブルク誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したキブウカは、現ベナンに「サグバタ」「ナナブルク」を生んだ。

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■ 100万年前 「エーゲ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加したキブウカは、北極圏であった地中海に入植した。これにより、肌は白くなり、金髪・碧眼の特徴を得た。湖水地方時代、各々が各々の獲物に特化していた。キブウカの場合は昆虫などに特化していたため、身長が低かった。しかし、新天地ではその必要性が無効化された。

大型哺乳類、大型魚類など、大きめの獲物に特化すると、キブウカの身長はみるみる160cmほどになった。彼らは、ソロモン諸島に顕著な、金髪・碧眼のメラネシア人の祖である。逆に言えば、河童の顔はメラネシア人の小型化である。彼らは、勢力圏を「エーゲ」と命名した。エーゲの名の由来はキブウカである。キブウカ＝ウーカ＝エーゲとなる。

■ 100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」

■ 100万年前 「カブール誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加したキブウカは、「カブール」に拠点を得た。カブールの名の由来は「キブウカの土地（プール）」である。キブウカ＋プール＝キブール＝カブールとなる。一部のキブウカは、カブールでも小魚、昆虫などを食べていたが、各々の獲物に特化という湖水地方時代の決めごとが無効化された。そのため、一部は大型哺乳類などを食べた。これにより、身長50cmのキブウカは、みるみる160cmにまで巨大化した。彼らがインド人の祖となった。逆に言えば、河童の顔はインド人の小型化である。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「アカステー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したエーゲ人は、ステュクスと組んで「アカステー」を生んだ。アカステーの名の由来はキブウカとステュクスの組み合わせである。キブウカ＋ステュクス＝ウカステュ＝アカステーとなる。その後、アカステーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ガジュ族誕生」

アカステーは、マレー半島に「ガジュ族」を生んだ。カジュの名の由来はアカステーである。アカステー＝アカジュテー＝カジュとなる。金髪・碧眼の白人である彼らがメラネシア人と混合したことで、一部のメラネシア人、アボリジニに金髪・碧眼の特徴が加えられた。

■ 30万年前 「カアパコ（河童）誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したキブウカ、日本に入植した。この時に「カアパコ（河童）」が生まれた。岩手県では、カッパを「カアパコ」と呼ぶが、このカアパコは、キブウカの名に似ている。キブウカ＝カブウカ＝カパアコ＝カアパコとなる。キブウカは基本的に無毛であり、身長は50cm前後である。一方、身長1m前後の毛深い河童の報告がある。これは、カゾオバ（キジムナー）の子孫である。江戸時代、岩手県岩泉市では、泣いている子供の背中にカッパが乗っかっていることが頻繁にあったという。そこで、現地では「カッパは子供が好きなんだ」とまことしやかに噂された。

■ 30万年前 「ひょうすべ誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、日本に移住した。彼らはキブウカと組んで「ひょうすべ」と呼ばれた。ひょうすべの名の由来はキブウカとカゾオバの組み合わせである。キブウカ＋カゾオバ＝ブウゾバ＝ふうすば＝ひょうすべとなる。ひょうすべは妖怪として有名だが、実際は人間（河童）である。彼らは、人間の家に忍び込んで風呂に入り、湯をいただくという。

■ 3万年前 「コロボックル誕生」

アイヌの伝説によると、「コロボックル」は船で北海道に渡ってきた。「コロボックル」の正体は岩手県岩泉の河童である。コロボックルの名の由来は「カアパコル（河童の人）」である。カアパコル＝カラパコル＝コロボックルとなる。当初、コロボックルは北海道に入植し、アイヌ族と共存していたが、コロボックル女性がアイヌ族に捕まえられたため、「トカプチ」という言葉を残して去ったという。

彼らは、現岩手県に帰還したと考えられるが、その後も、現岩手県を出発してアイヌ族と交易を行ったらしい。コロボックル研究家は、コロボックルがアイヌと交易をしていた際、「彼らは大鷲が住む土地から来ていた。つまり、千島列島の住人だった」と推理したが、筆者は、彼らが岩手県から来ていたと考えている。岩手県にも大鷲は住んでいるからだ。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ケプリ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したカブール人は、インドからエジプトに入植した。この時、彼らは「ケプリ」という神を祀った。ケプリの名の由来はカブールである。カブール=カブル=ケプリとなる。

■BC30世紀 「マプングプエ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したカブール人は、マハラエルと共に東アフリカに移住した。カブール人は、マハラエルと共に現ジンバブエに入植した。この時に「マプングプエ」が生まれた。マプングプエの名の由来はモブワとキブウカの組み合わせである。モブワ+キブウカ=モブワキブウ=モブアキブエ=マプングプエとなる。

■BC30世紀 「サカラバ族誕生」

マプングプエからマダガスカル島に入植したカブール人は、「サカラバ族」を生んだ。サカラバの名の由来はケプリの象徴であったスカラベである。スカラベ=サカラベ=サカラバとなる。この時に「マダガスカル」の名も生まれた。マダガスカルの名の由来はマルドゥクとサカラバの組み合わせである。マルドゥク+サカラバ=マドゥクサカラ=マダガスカルとなる。

■BC7世紀 「スクラブ族誕生」

マダガスカルを離れたサカラバ族は、中央アジアに移住し「スクラブ族」を生んだ。スクラブの名の由来はサカラバである。サカラバ=スクラバ=スクラブとなる。スクラブ族は、ウェネト族、アント族と共にスラブ民族の基礎を築いた。

■BC7世紀 「ザグレブ誕生」

スクラブ族は、中央アジアから現クロアチアに移住した。この時に「ザグレブ」が築かれた。ザグレブの名の由来はスクラブである。スクラブ＝ズグラブ＝ザグレブとなる。

■BC525年 「吉備氏誕生」

ペルシア帝国がオリエント統一を果たすと、カブールにいたキブウカは、当地を離れた。キブウカは現岡山県に上陸し、「吉備氏」を称した。吉備の名の由来はキブウカである。キブウカ＝キビイカ＝吉備（きび）となる。

■BC3??年 「沃祖（オクジョ）誕生」

スクラブ族はデニエン人に支配され、アフリカに船出したが、一部のスクラブ族は、東方に向かった。彼らは、その途上でカシミール人と同盟し、朝鮮半島に移住して「沃祖（オクジョ）」を生んだ。オクジョの名の由来はキブウカとカゾオバの組み合わせである。キブウカ＋カゾオバ＝ウカゾオ＝オクジョ（沃祖）となる。その後、「許勢小柄宿禰」が誕生している。許勢（こせ）の名の由来はオクジョである。オクジョ＝クジョ＝許勢（こせ）となる。この系統からは「宇梶」などの名前が輩出されている。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「コパン誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した吉備氏は、マヤに入植して「コパン」を築いた。コパンの名の由来はキブウカである。キブウカ＝キブンカ＝キブン＝コパンとなる。

■AD987年 ユーグ・ド・カペー、フランス王に即位 「カペー朝誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した吉備氏は、マヤを経てブリテン島に入植していた。その後、彼らは「メロヴィング朝」治世下のフランク王国に移住した。吉備氏は、ヴェルマンドワ伯の爵位を篡奪し、娘ベアトリスを西フランク王ロベール1世に接近させた。この時に、ユーグが誕生する。後に「カペー朝」を開くユーグ・カペーである。カペーの名の由来はキブウカである。キブウカ＝キブー＝カペーとなる。

■AD10世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD10世紀 「コバーン誕生」「カポネ誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したコパンの人々は、まずブリテン島に入植して「コバーン」の名を生み、デンマークに渡って「コペンハーゲン」の名を残している。また、イタリアには「カポネ（カポーン）」の名を残した。

■AD1040年 「相良氏誕生」

「スワヒリ民族の大航海時代」に刺激を受けたサカラバ族は、マダガスカル島を発って日本に向かった。その途上、現ケニアで百地氏の子孫「マサイ族」を迎え入れた一行は、無事に日本に到達する。マダガスカル人の顔をしたサカラバ族は、九州に上陸し、日本人と混合して「相良氏」を形成した。AD1177年、「相良氏」の祖、相良長頼が誕生している。相良の名の由来はサカラバである。彼らは、「桜島」の命名者でもある。

■AD1094年 「マプングプエの大航海時代」

■AD1094年 「マプングプエ（後身）誕生」

AD1094年、カペー朝のフィリップ1世は離婚・再婚を機にリヨン司教に破門を通告される。これを機に、フィリップ1世は子息のアンリ、シャルル、ウスタシーと関連氏族を引き連れてフランスを離れた。このカペー家の一団に、ノルマン朝の成立を機にイングランドを後にしたマゴンサエテ家（天孫族）が合流した。一行は、先祖の故地であるマプングプエを目指した。

■AD1094年 「小早川氏誕生」

一部カペー家は、マゴンサエテ家の片割れのジュート人と共にジンバブエを離れた。日本に到着したカペー家は、土肥実平に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「小早川氏」の祖、土肥遠平である。小早川の名の由来は「グプエの川」である。グプエ+川=グプエ

川＝小早川となる。グプエの川とは、ザンベジ川、或いはリンポポ川のことを示している。

■AD1220年 「マプングプエ王国誕生」

AD1220年に「マプングプエ王国」を建設している。この王国の成立には、一部カペー家とマゴンサエテ家の片割れ「天孫族（マゴン）」が関与している。

■AD1290年 「長宗我部氏誕生」

マプングプエ王国が滅ぶと、マプングプエ人の片割れのカペー家は東方に向かい、日本上陸した。カペー家は対馬の「宗氏」と連合した。やがて、このフランス人の顔をした連合体は対馬を出て土佐国に移動し、現地人と混合して「長宗我部氏」を形成する。長宗我部の名の由来は、ナコタ（長）、宗、カペー（我部）の組み合わせである。長＋宗＋カペー＝長宗我部となる。また、「香宗我部氏」という名前もあるが、これはシャルル（カルル）に香（かおり）を当て字して宗我部に加えたものである。ここから、香宗我部氏はシャルルの系統が主導権を握っていたことがわかる。シャルル（香）＋宗＋我部＝香宗我部となる。

■AD1386年 「ミナンカバウ族誕生」

長宗我部能重が吉原庄全域を支配下に置くと、香宗我部氏は土佐国を後にスマトラ島に移住した、彼らは「ミナンカバウ」を称した。ミナンカバウの名の由来は宗我部（ムネカベ）である。ムネカベ＝ムネンカバエ＝ミナンカバウとなる。AD1651年、オランダ東インド会社がミナンカバウ族の土地で金を発掘して以来、カペー家は、フランス時代の隣人ということで、また、宗氏は祖を同じくするタナトス一族として、オランダと親交をもった。

その後、AD1585年、豊臣秀吉の四国征伐で敗北すると、長宗我部氏は土佐国を後に、兄弟であるミナンカバウの地に移住し、両者は連合した。近年では、ミナンカバウ族は「インドネシア共和国革命政府」を立ち上げて反乱を頻発し、ゲリラ戦を展開した。この反乱は、AD1961年に終焉を迎えているが、背後にオランダがいた可能性も高い。

■AD15年 小早川秀秋生誕

■AD1581年 「シャガール誕生」「セガール誕生」「ジャガー誕生」

相良義陽は、伊東義佑と協力して島津義弘を挟み撃ちすることを謀ったが、島津氏の急襲により伊東氏が壊滅した。その後、島津氏が水俣城を水攻めにしたため、相良氏は降伏し、一部が故地マダガスカルへの帰還を図った。九州を発ち、インド洋を越えてマダガスカル島に辿り着くと、一部はサカラバ族と合流したが、一部は新天地を求めてヨーロッパへと旅立った。

■AD1581年 「桜庭氏誕生」

AD17世紀にフランス軍がマダガスカル島に侵入すると、一部相良氏の系統に属するサカラバ族が日本に帰還した。九州に上陸した彼らは「桜庭」の名を形成した。桜庭の名の由来はサカラバである。この系統からは格闘家の桜庭和志、女優の桜庭ななみが輩出されている。

■AD1887年 マルク・シャガール生誕

■AD1897年 フランク・キャプラ生誕

■AD1899年 アル・カポネ生誕

■AD1939年 フランシス・フォード・コッポラ生誕

■AD1952年 スティーブン・セガール生誕

スティーヴン・セガールが武芸に長けているのは、先祖である獣人ヒッポリュトスの遺伝子が発動したことによる隔世遺伝である。また、彼は親日家でもあるが、それは彼が相良氏の子孫である証拠だ。

■AD1943年 ミック・ジャガー生誕 「ローリング・ストーンズ誕生」

■AD1951年 アレクサンドル・ソクーロフ生誕

スクラブ＝スクーラブ＝ソクーロフとなる。ソクーロフは、前衛映画を撮るロシアの映画監督である。

■AD1952年 ジュリアン・コルベック生誕

コルベックの名の由来はコロボックルである。コロボックル＝コロベックル＝コルベックとなる。

■AD1967年 カート・コバーン生誕 「ニルヴァーナ誕生」

■AD1967年 ネルソン・デ・ラ・ロッサ生誕

彼は、身長が50cmしかないとしてギネスに載った男だ。彼は俳優として成功し、子まで成した。恐らく、隔世遺伝により、先祖であるキブウカなど、「非常に小さい人」の特徴が一度にネルソンに集中したものだろう。ネルソンは、後述の、筆者が見た河童と思しき非常に小さい人物によく似ていた。

■AD1974年 レナード・ディカプリオ生誕

■AD1992年 筆者、カップを目撃

筆者は、AD1992年当時、東京都多摩市聖ヶ丘に住んでいた。多摩ニュータウンである。聖ヶ丘の頂上に住んでいたが、身体を鍛えようと自転車で毎日、急な坂を下ったり上ったりしていた。当時、聖ヶ丘の自宅から聖蹟桜ヶ丘駅まで行き、電車で練馬区まで出勤していた。聖ヶ丘は下りは3分だが、上りは30分もかかる。

ある日、駅に向かおうと家から下り坂を颯爽と下っていた。すると、坂の途中に養護学校がある。そこに差し掛かる直前、インド人ぽい肌色の非常に小さい男と目があつた。どこに向かおうとしていたか不明だが、彼は、坂を歩いて上っていた。通常、聖ヶ丘の上の方では、歩いている人を見かけることはない（自転車に乗っている人もいない）。

信じられないことに、男の背丈は常人の膝くらいまでしかなかった。筆者は「え？」と思った。当然だろう。しかし、筆者はそれまでも多摩ニュータウンで何度か霊を見たり、不思議な体験

をしていたので、これもその現象のうちの一つと思った。或いは、養護学校の人かとも思った。ということで、失礼に当たると思い、あえて振り返らなかった。

しかし、今考えると、彼はいわゆる「カッパ」だったのかもしれない。聖ヶ丘は、端正な住宅街であり、緑も多く残っていた。木が鬱蒼と生い茂った大きめの公園もあったが、浄土真宗の寺がある場所柄、除草剤も使用されていなかっただろう。つまり、あそこらへんは、カッパが住むのに適している（「あの小さい人」は、もともとあの辺に住んでいたのかもしれない）。また、そこから5分ほど行けば多摩川も流れていた。彼は微笑んでいたが、散歩中だったのだろうか？しかし、前述のネルソン・デ・ラ・ロッサが世界最小の人間としてギネスに認定されているのであれば、筆者が見たネルソンと良く似た人はいったい...？少なくとも、彼は、現代社会には属していないことになる。そういえば、筆者は彼が服を着ていたかどうか覚えていない。彼が河童であるなら全裸だったはずだが。

◆アカイアの歴史

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■100万年前 「エーゲ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加したキブウカは、北極圏であった地中海に入植した。これにより、肌は白くなり、金髪・碧眼の特徴を得た。湖水地方時代、各々が各々の獲物に特化していた。キブウカの場合は昆虫などに特化していたため、身長が低かった。しかし、新天地ではその必要性が無効化された。

大型哺乳類、大型魚類など、大きめの獲物に特化すると、キブウカの身長はみるみる160cmほどになった。彼らは、ソロモン諸島に顕著な、金髪・碧眼のメラネシア人の祖である。逆に言えば、河童の顔はメラネシア人の小型化である。彼らは、勢力圏を「エーゲ」と命名した。エーゲの名の由来はキブウカである。キブウカ＝ウーカ＝エーゲとなる。

■20万年前 「ガイアの大移動時代」

■20万年前 「アカイア人誕生」

「ガイアの大移動時代」に参加したガイアは、中央アジアにタナトスを連行し、島流しに処した。その後、エーゲ海を訪れたガイアは、金髪・碧眼の白人であるエーゲ人と混合した。この時に「アカイア人」が生まれた。アカイアの名の由来はキブウカとガイアの組み合わせである。キブウカ+ガイア=ウカイア=アカイアとなる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「海洋神オケアーノス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、アカイア人と連合体を組んだ。この時に「海洋神オケアーノス」が生まれた。オケアーノスの名の由来はアカイアとウラヌスの組み合わせである。アカイア+ウラヌス=アカイアヌス=アカイアーヌス=オケアーノスとなる。その後、オケアーノスはティタン神俗に参加している。

■ 4万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「アゲノール誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したアカイア人は、タルタロス（オーストラリア東部）に移住し、ネイロスと連合した。この時に「アゲノール」が誕生した。アゲノールの名の由来はアカイアとネイロスの組み合わせである。アカイア+ネイロス=アカネイロ=アゲノールとなる。その後、アゲノールは「テュロス」の王となっているが、このテュロスはトゥルシア人が建てたテュロスではない。アゲノールが治めたテュロスはタルタロス（オーストラリア東部）のことである。アゲノール王のテュロス王国は、黒海のキリクス（ケルケイース）、ヨーロッパ（エウロペ）、東南アジア（エティオピア）のポイニクス、カドモスなどと同盟し、交易を行った。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「ゼウスの大航海時代」

■ 1万3千年前 ガイア、スーサに入植

「ゼウスの大航海時代」に参加したガイアは、アフリカを離れてスーサに入植した。

■ 1万3千年前 「アガウエ誕生」

その後、ガイアはサハラにあった初代テーバイ王国に移住した。この時に「アガウエ」が生まれた。アガウエの名の由来はアカイアである。アカイア=アカウア=アガウエとなる。「ギリシア神話」では、アガウエは息子であるテーバイ王ペンテウスを八つ裂きにしている。これは、ディオニュソス密儀の信者であるアガウエが、デュオニュソスの命により、テーバイ王に蜂起したと考えられる。

■ BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■ BC 1790年 「アカイア人復活」

征服本能が強いタナトスの残虐行為が目にしたため、トバルカインは再度、エジプトに核攻撃を行った。核戦争後の混乱により、70人もの短い治世の王が乱立した。100年の間に第13王朝、第14王朝が立て続けに開かれた。ミディアン人と連合していたヤコブは、エジプトを脱出して「アカイア人」に戻り、バルカン半島に移住した。

■ BC 1790年 「アカイワシャ人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したウェシュシュ人は、アカイア人と組んで「アカイワシャ人」を結成した。アカイワシャの名の由来は赤い後ウェシュシュの組み合わせである。アカイア+ウェシュシュ=アカイウェシュ=アカイワシャとなる。彼らは、ベーシュタード王国に居住し、地中海とペルシア湾を往来していた。

■ BC 1027年 「アガウ族誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、インダス流域が核爆発で消滅すると、アカイア人はエチオピア

に移住し「アガウ族」を生んだ。アガウの名の由来はアガウエである。アガウエ＝アガウとなる。

■BC1027年 「イケニ族誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、インダス流域が核爆発で消滅すると、アカイア人はブリテン島に落ち着いて「イケニ族」を成した。イケニの名の由来はオケアーノスである。オケアーノス＝イケアーノス＝イケアノ＝イケニとなる。

■AD61年 「ボーディカの乱」

女王ボーディカは、ローマ軍のブリテン島侵攻を阻止するべく、アカイア人の末裔であるイケニ族を指揮して蜂起させた。ローマ軍は、最初は様子を見るべく、船でブリテン島の海岸を航行してブリテン人の動向を伺っていた。だが、イケニ族は集団で不気味な踊りを披露しローマ軍を怖がらせた。しかし、上陸してきたローマ軍はブリテンを平定し、60年後にはハドリアヌスの長城が建設されている。

■AD61年 「河野氏誕生」

ブリテン島を逃れたイケニ族は、遠く日本にまで足を伸ばし、瀬戸内海に入植した。イギリス人の顔をした彼らは現地人と混合し、「河野氏」を成した。河野の名の由来はオケアーノスである。オケアーノス＝オカワノス＝河野（カワノ）＝河野（コウノ）となる。

■AD712年 「勿吉の大航海時代」

■AD712年 「秋葉神社誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人アイクは、日本に上陸し、現地人と混合して「秋葉神社」を建立した。秋葉の名の由来はアカイアである。アカイア＝アカイハ＝アカハ＝秋葉となる。

■AD1270年 「鵜飼氏誕生」「隠岐氏誕生」「嵯峨氏誕生」

ザガワ朝が滅ぶと、アガウ族は、エチオピアから甲賀国に移住した。エチオピア人の顔をした彼らは現地人と混合して「鵜飼」「隠岐」「嵯峨」などの名を生んだ。鵜飼の名の由来は合いアカイア、隠岐の名の由来はオケアーノス、嵯峨の名の由来はザグエである。鵜飼氏、隠岐氏、嵯峨氏は甲賀忍者の一族として活動した。

■AD1952年 デーヴィッド・アイク生誕

◆鹿島神社（アクスム）の歴史

■BC3??年 「沃祖（オクジョ）誕生」

スクラブ族はデニエン人に支配され、アフリカに船出したが、一部のスクラブ族は、東方に向かった。彼らは、その途上でカシミール人と同盟し、朝鮮半島に移住して「沃祖（オクジョ）」を生んだ。オクジョの名の由来はキブウカとカゾオバの組み合わせである。キブウカ+カゾオバ=ウカゾオ=オクジョ（沃祖）となる。その後、「許勢小柄宿禰」が誕生している。許勢（こせ）の名の由来はオクジョである。オクジョ=クジョ=許勢（こせ）となる。この系統からは「宇梶」などの名前が輩出されている。

■BC37年 「アクスム人誕生」

その後、高句麗が朝鮮半島を席卷すると沃祖（オクジョ）は、アラビア半島に移住し「アクスム人」を生んだ。アクスムの名の由来はキブウカとカシミールの組み合わせである。キブウカ+カシミール=ウカシミ=アクスムとなる。

■AD1世紀 「アクスム王国誕生」

アクスム人は、アラビア半島に「アクスム王国」を建てた。後に、アクスム人は紅海の対岸アビシニアに進出してメロエ王国を滅ぼし、コプト教が伝来すると黒アフリカ初のキリスト教国となった。アクスム人のヌビア侵攻は、クシュ人の故地への帰還と考えることができる。

■ A D 8 世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「鹿島神社誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したコサ族は、房総半島に上陸してアクスムを由来に「鹿島神社」を創建した。アクスム＝アカシマ＝鹿島となる。鹿島（アクスム）の名前からは「小島」「小嶋」「児島」「草間」「風間」などの名前が派生し、その子孫は日本中に四散した。コスメルに因んで「小泉氏」などの名も生まれた。

■ A D 1 0 世紀 「オグズ 2 4 氏族誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したコサ族は、日本を離れてモンゴルに入植し「オグズ 2 4 氏族」を生んだ。オグズの名の由来は沃祖（オクジョ）である。オクジョ＝オクゾ＝オグスとなる。沃祖は「オグズ 2 4 氏族」と呼ばれた軍事集団を形成した。オグズ 2 4 氏族は、さまざまな王族の連合体だった。

■ A D 1 1 6 2 年 「小笠原氏誕生」

金朝が満州に成立すると、オグズ 2 4 氏族は、モンゴルから日本に移住した。加賀美氏に接近して自身の血統を打ち立てたオグズからは、「小笠原氏」の祖である小笠原長清が誕生している。小笠原の名の由来は「オグズの土地（原）」である。オグズ＋原＝小笠＋原＝小笠原となる。

■ A D 1 2 2 1 年 「アッサム誕生」

承久の乱が発生すると、小笠原氏は東西に分かれて日本を後にした。西方組小笠原氏は、アッサム地方に根を下ろした。アッサムの名の由来は小笠原氏に縁がある浅間山（あさま）である。浅間（あさま）＝あっさま＝アッサムとなる。

■ A D 1 2 2 1 年 「ココム家誕生」

承久の乱が発生すると、小笠原氏は東西に分かれて日本を後にした。東方組小笠原氏は、太平洋を越えてマヤに上陸した。マヤ人と混合した小笠原氏は「ココム家」を称した。ココムの名の由来は加賀美である。

■AD1221年 「ビト朝誕生」

西方組小笠原氏は、アッサムを越えてアフリカ湖水地方を訪れているが、小笠原氏はニョロ帝国に身を寄せ、小笠原氏に縁がある飛驒を由来に「ビト朝」を開いた。飛驒（ひだ）＝ヒダ＝ビタ＝ビトとなる。つまり、伝説のニョロ帝国は、古代の日本人が代々の王を務めていたのだ。

■AD1228年 「アホム王国誕生」

AD1228年、アッサム人はアッサムの地に「アホム王国」を建設した。アホムの名の由来は小笠原氏に縁がある石見（イワミ）である。イワミ＝イホミ＝アホムとなる。

■AD1285年 「カマタ王国誕生」

アッサム人はAD1285年にケン王朝の王位を篡奪して「カマタ王国」を建てている。カマタの名の由来は小笠原氏に縁がある上田（かみた）である。

■AD1286年 「カチャリ王国誕生」

アッサム人はAD1286年にディマプールを占領して王位を篡奪している。この時に、「カチャリ王国」が建てられた。カチャリの名の由来は小笠原である。小笠原＝笠原＝カリヤラ＝カチャリとなる。

■AD1573年 「各務氏誕生」

マヤパンの支配を巡って、シウ家がココム家の人々を虐殺すると、ココム家はマヤを脱出して日本に舞い戻った。ココム家は、加賀美氏に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に、加賀美正光が誕生している。加賀美正光は後に「各務氏」を称する。各務の名の由来はココムである。

■AD1680年 「アジュマーン家誕生」

ブータン王国がアッサムに侵攻すると、アッサム人はアラビア半島に移住し、「アジュマーン」を称する。アジュマーンの名の由来はアッサムである。アッサム＝アッサマーン＝アジュマーンとなる。

■AD1680年 「太陽神アチャマン誕生」

更に西方に向かったアッサム人はカナリア諸島にまで足を伸ばし、「太陽神アチャマン」を祀った。

■AD1928年 小島功生誕

カアパコの子孫である小島功がカッパの漫画を書いたことは興味深い。

サグバタの歴史

◆蘇我氏（サグバタ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「サグバタ誕生」「ソグボ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したキブウカは、現ベナンに「サグバタ」を生んだその後、サグバタからは「ソグボ」が生まれた。湖水地方時代のキブウカ同様、サグバタとソグボは、現ベナンの海岸で小魚、甲殻類、貝類、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■100万年前 「カッパドキア誕生」「ゲピード誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加しサグバタは、北極圏であった黒海に入植した。これにより、肌は白くなり、金髪・碧眼となった。しかし、湖水地方時代同様、サグバタは小魚、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。彼らは、黒海をはさんで、西側のパンノニアに後の「ゲピード」の前身、東側のアナトリア半島に後の「カッパドキア」の前身を築いた。

ゲピードの名の由来はサグバタであり、カッパドキアの名の由来はサグバタとダキアの組み合わせである。サグバタ＝サグバータ＝ゲピードとなり、サグバタ＋ダキア＝グバダキア＝カッパドキアとなる。九千坊との戦争の際、サグバタは「西海坊」と呼ばれた。サイカイボ（西海坊）の名の由来はサグバタである。サグバタ＝サイグイバタ＝サイグイバ＝サイカイボ（西海坊）となる。

河童の伝説では、西海坊が九千坊になったとされている。だが、実際には、亀慈の九千坊（カゾオバ）が、西海坊（サグバタ）が治めていたアナトリア半島を制圧したことを意味している。

■100万年前 「グプタ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加しサグバタは、インダス流域に入植した。湖水地方時代、人口密度の影響で各々が各々の獲物に特化していたが、新天地ではその必要がなくなり、小魚、昆虫を食べていたサグバタは、大型哺乳類、大型魚類など、好きな獲物を食べることで巨大化した。サグバタは、身長50cmから160cmほどになった。彼らは、キブウカと共にインド人の祖である。特に、サグバタはインドに「グプタ」の名を残した。グプタの名の由来はサグバタである。サグバタ＝グバタ＝グプタとなる。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「サキザヤ族誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したサグバタは、台湾に入植し、カゾオバと組んで「サキザヤ族」を生んだ。サキザヤの名の由来はサグバタとカゾオバの組み合わせである。サグバタ＋カゾオバ＝サグゾオ＝サクゾオ＝サキザヤとなる。

■ 30万年前 「クバラン族誕生」

台湾に移住したブロンテースは、サグバタ（サキザヤ族）と混合して「クバラン族」を成した。クバランの名の由来はサグバタとブロンテースの組み合わせである。サグバタ＋ブロンテース＝クバロン＝クバランとなる。

■ 30万年前 「月読神誕生」

台湾に上陸したサグバタ（サキザヤ族）は、ニヤメ（アミ族）と混合して「ツクヨミ」を成した。ツクヨミの名の由来はジョクとニヤメの組み合わせである。ジョク＋ニヤメ＝ジョクヤメ＝ツクヨミとなる。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「ジョク」「スク」

「フッキとヌアの大航海時代」

■BC30世紀 「宿神誕生」

宿神の名の由来はサグバタとピュグマエイの組み合わせである。

■BC7世紀 「カッパドキア誕生」

湖水地方時代同様に、小魚、昆虫類を食べていたサグバタは、BC7世紀頃になって好きなものを獲って食べ始めた。これにより、身長50cmだったサグバタは、身長160cmほどに巨大化した。妖精としてとらえられていた彼らはカッパドキア人となる。その後、黒海対岸パノニアから、祖を同じくするゲピード族に誘われたダキア人が訪れると、サグバタはダキア人と組んで「カッパドキア」を称した。カッパドキアの名の由来はサグバタとダキアの組み合わせである。サグバタ+ダキア=グバダキア=カッパドキアとなる。

■BC7世紀 「スキタイ人誕生」

カッパドキア人は、中央アジアに移り、「スキタイ人」を称した。スキタイの名の由来はカッパドキアと同じ、サグバタとダキアの組み合わせである。サグバタ+ダキア=サグダ=サグダイ=スキタイとなる。カッパドキア人がいない時は、彼らはスキタイ人になり、スキタイ人がいない時は、彼らはカッパドキア人になっていた。

おもしろいことに、フリギア王国、ペルシア帝国、アレクサンドル帝国によってアナトリア半島が支配下に置かれる時には、スキタイ人が中央アジアに発生し、カッパドキア王国が栄えている時には、中央アジアにスキタイ人の姿はない。スキタイ人には、祖を同じくするサカ人も加わっていた。

■BC317年 チャンドラグプタ、マガダ王に即位 「マウリア朝誕生」

BC316年、カッパドキアがアレクサンドル大王の支配下に落ちると、サグバタはアレクサンドル大王の軍に混じってインドに移住した。「チャンドラグプタ」を名乗ったサグバタは、マウリア人と共同で「マウリア朝」を開いた。

■BC232年 「カッパドキア王国誕生」

第2代王アショーカがタナトスの宗教（仏教）によって支配され、マウリア朝が征服装置と化すと、サグバタはタナトスを嫌い、カッパドキアに帰還した。彼らは「カッパドキア王国」を築いた。

■BC133年 「カッパドキア人の大航海時代」

■BC133年 「ソグド人誕生」

「カッパドキア人の大航海時代」に参加したスキタイ人は、カッパドキアを諦め、中央アジアに永住を決めた。この時に「ソグド人」が生まれ、ソグディアナ王国が建てられた。ソグドの名の由来はスキタイである。スキタイ＝スギダイ＝スギダ＝ソグドとなる。

■BC133年 「道氏誕生」

「カッパドキア人の大航海時代」に参加したカッパドキア人は、ローマ共和国属州と化した故地を離れ、インド洋を越えて日本に移住した。カッパドキア人は、祖を同じくする吉備氏の国に入植した。この時に「道氏」が生まれた。道氏（どう）の名の由来はカッパドキアである。カッパドキア＝カッパドーキア＝どう（道氏）となる。キアの部分からは「香夜氏」が生まれた。

■AD145年 「サカ王朝誕生」

ソグディアナの建設に協力していたサカ人は、中央アジアからパンジャブに移住した。彼らは、西インドに「サカ王朝」を築いた。サカ王著には、祖を同じくするソグド人も加わっていた。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD320年 チャンドラグプタ1世、マガダ王に即位 「グプタ朝誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した道氏は、賀茂氏、安曇氏、縣氏、熊襲武尊と共にインドに移

住した。道氏はマガダ地方に侵入し、AD320年に「グプタ朝」を開いている。グプタの名の由来はサグバタである。サグバタ＝グバタ＝グプタとなる。グプタ朝初代王の名は、マウリア朝と同じくチャンドラグプタである。

■AD390年 「蘇我氏誕生」

AD390年にサカ王朝が滅ぶと、ソグド人とサカ人は「蘇我氏」を称した。蘇我の名の由来はソグドである。ソグド＝ソガド＝蘇我となる。蘇我氏からは蘇我馬子、蘇我入鹿などが輩出されている。

■AD451年 「コプト教誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した道氏は、エジプトに移住した。彼らからはコプト教を生むディオスコロスが生まれた。ディオスコロスの名の由来は「デウスを殺す」である。デウスとはタナトスのクリュティオスのことである。インドを経た彼らは、卑怯なダーサ族（デウス）を嫌い、ディオスコロスという名を選んだ。コプトの名の由来はサグバタ、或いはグプタである。グプタ＝グプト＝コプトとなる。

■AD454年 「ゲピード王国誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した道氏は、エジプトを発つと、故郷パンノニアに移り住んだ。彼らは「ゲピード」の名を復活させた。覇者フン族亡き後のパンノニアに君臨し、「ゲピード王国」を築いた。

■AD550年 「久保田氏誕生」「窪田氏誕生」

AD550年にグプタ朝が滅びると、道氏の子孫であるグプタ人は日本に帰還した。インド人の顔をした彼らは甲斐国で日本人と混合し「窪田氏」を称した。しばらくして、窪田氏は甲斐国を離れて現福島県に移住し、変遷を加えて「久保田」を称している。その後、久保田氏は日本中に拡散した。窪田、久保田の名の由来はグプタである。

■AD562年 蘇我堅塩媛、日本に移住

柔然がアヴァール王国を掌握すると、正統なアヴァールの王族カティアナとジョアンの姉妹が子供たちと数十騎の兵士を従えてシルクロードを渡り、満州に辿り着いた。カティアナはインドから落ち延びたソグド人蘇我稲目の養女となり、共に日本に上陸した。カティアナは「蘇我堅塩媛」を称し、ジョアンナは「小姉君」を称した。

カティアナは自身の名に堅塩（かたえん）と当て字し、ジョアンナは小姉（しょうあね）と当て字した。蘇我堅塩媛は欽明天皇と結婚したが子供たちは欽明天皇の血を引いてはいない。額田部皇女（アガタの当て字）を含めた全員がアヴァールからの連れ子である（つまり、白人の顔をしていた）。

■AD566年 「木幡氏誕生」「古畑氏誕生」「小畑氏誕生」「小島氏誕生」

AD566年にゲピード王国が滅びると、道氏の子孫であるゲピード族は日本に帰還した。ヨーロッパ人の顔をした彼らは、日本人と混合し「木幡氏」を称した。しばらくして、木幡氏は日本各地に移住し、変遷を加えて「小畑」「小島」を称している。木幡、小島、古畑、小畑の名の由来はゲピードである。

■AD588年 蘇我馬子、法興寺創建

■AD593年 額田部皇女、第33代天皇に即位 「推古天皇誕生」

推古の名の由来はサグバタだと考えられる。サグバタ＝サイグバタ＝推古（すいこ）となる。アヴァール人のアガタ皇女は、蘇我氏由来の名を冠した。つまり、推古天皇の意志は、蘇我氏の意志であった。

■AD642年 蘇我入鹿、専権

■AD645年 「大化の改新」

タナトスの血統である中臣鎌足が指揮した「大化の改新」により、蘇我氏は滅亡した。その後、彼らは日本を脱出して故地であるソグディアナに一旦帰還した。

■AD645年 「スコットランド誕生」

「大化の改新」により、蘇我氏が滅亡すると、彼らは日本を脱出して故地であるソグディアナに一旦帰還した。だが、AD712年にイスラム軍にソグディアナを占領されると、蘇我氏はソグディアナを後に、南北に新天地を求めて旅立った。北方組蘇我氏は、ヨーロッパを通過してブリテン島に上陸し、「スコットランド」を築いた。スコットランドとは「ソグドの土地」を意味している。ソグド+ランド=ソゴドランド=スコットランドとなる。

■AD9??年 「カニク誕生」

ヴァイキングの活動が活発化すると、スコット人はブリテン島を離れた。彼らは、一旦ガンジス流域に移住したが、そこから遡り、中央アジアを訪れた。そこで、彼らはオグス24氏族に参加した。ガンジス流域（ガンガー）から来た彼らは「カニク」を名乗った。

■AD1243年 「金子氏誕生」

AD1243年、セルジューク朝が滅ぶと、セルジューク家は2手に分かれてオリエント地方を離れた。一部は、日本に移住した。日本人と混合した彼らは「金子氏」を生んだ。金子の名の由来はカニクである。カニク=カニコ=金子となる。一方、一部は故地であるスコットランドに帰還した。しかし、彼らが帰還した時期は、スコットランド征伐のため、アンジュー家が率いるイングランド軍がスコットランドに侵攻していた。

■AD1493年 「ソンガイ帝国誕生」

AD1480年、ヨーク朝のイングランド軍がスコットランドに侵攻すると、これを機に、スコット人は、新天地を求めてアフリカに逃亡した。彼らは「ソンガイ帝国」を築いた。ソンガイの名の由来は蘇我である。蘇我=ソング=ソンガイとなる。

ソンガイ帝国は、強力な水軍を組織し、ニジェール河大湾曲部に支配を拡大した。その象徴が、イスラム交易都市ジェンネとトンブクツの支配だった。また、ソンガイ帝国は、トンブクツのイスラム学者を弾圧し、虐殺した。だが、「明日香」を由来にした人物、アスキア・ムハンマドがクーデターを指揮し、AD1493年に「アスキア朝」を開いた。AD1590年、ソンガイ帝国のアスキア朝は、マリキ派に率いられたモロッコ軍の侵攻により滅亡した。

■AD1590年 「新貝氏誕生」「新谷氏誕生」

AD1590年、ソンガイ帝国が滅ぶと、ソンガイ帝国の人々は、インド洋を越えて日本に移住した。日本人と混合したソンガイ帝国の人々は「新貝氏」「新谷氏（しんがい）」を生んだ。新貝の名の由来はソンガイである。

■AD1804年 「ソコト帝国誕生」

大英帝国の成立を機に、これを嫌ったスコット人が新天地を求めて西アフリカを訪れた。白人の顔をした彼らは現地人と混合し、「ソコト族」を成した。ソコトの名の由来はスコット、或いはソグドである。ソコト族はフラニ族と連合し、ハウサ諸国を次々に攻略した。ウスマン・ダン・フォディオが初代帝王の座に就き、「ソコト帝国」が誕生した。ウスマン・ダン・フォディオは、多数の宗教的著作を著した文学者肌だった。

■AD1903年 「迫田氏誕生」「佐古田氏誕生」「坂田氏誕生」「酒田氏誕生」「阪田氏誕生」

ソコト帝国が滅ぶと、ソコト帝国の人々は日本に移住した。蘇我氏の子孫であるため、故地に帰還したということもできる。さかた、さこたの名の由来はソコトである。

■AD1883年 鳩山一郎生誕

第52・53・54代内閣総理大臣に就任。

■AD1935年 高畑勲生誕

■AD1944年 ダルダノー・サケッティ生誕

サケッティの名の由来はスキタイである。スキタイ＝スキッタイ＝サケッティとなる。脚本家としてルチオ・フルチ、ランベルト・バーヴァらに脚本を書き、イタリアンホラー界を支えた。

■ A D 1 9 4 7 年 鳩山由紀夫生誕

◆ヤコブ（ソグボ）の歴史

■ 2 0 0 万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■ 2 0 0 万年前 「サグバタ誕生」「ソグボ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したキブウカは、現ベナンに「サグバタ」を生んだその後、サグバタからは「ソグボ」が生まれた。湖水地方時代のキブウカ同様、サグバタとソグボは、現ベナンの海岸で小魚、甲殻類、貝類、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。

■ 1 0 0 万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■ 1 0 0 万年前 「サグウェ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加しソグボは、紅海に入植した。彼らは、古代エチオピアに「ザグウェ」を築いた。ザグウェの名の由来はソグボである。ソグボ＝ソグホ＝ソグオ＝ザグウェとなる。湖水地方時代同様、ソグボは小魚、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。

■ 1 0 0 万年前 「サカ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加したソグボは、中央アジアに入植した。湖水地方時代、人口密度の影響で各々が各々の獲物に特化していたが、新天地ではその必要がなくなり、小魚、昆虫を食べていたソグボは、大型哺乳類など、好きな獲物を食べることで巨大化した。サカ人の身長は、1mから160cmほどになった。サカの名の由来はソグボである。ソ

グボ=ソガボ～サカとなる。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「セコ誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したサカは、オーストラリアには残らず、日本に移住した。河童に参加した彼らは「セコ」を名乗った。セコの名の由来はサカである。サカ=サコ=セコとなる。湖水地方時代同様、セコは小魚、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。

セコは、人に対して様々ないたずらを働くという。石を割る音を立てたり、山小屋をゆすったり、人をだまして迷わせる、山に入るときに懐に焼き餅を入れていると欲しがるという。

■ BC40世紀 「第1次シュメール人の大航海時代」

■ BC40世紀 「ヤコブ誕生」

「第1次シュメール人の大航海時代」に参加したセコ（河童）は、ペルーに入植し「ヤコブ」を生んだ。ヤコブの名の由来はソグボである。ソグボ=ヨグボ=ヤコブとなる。チムール王国時代、ヤコブは、イサク（イサック）、アブラハム（フォモール人）と連合した。「聖書」の舞台はイスラエルとされているが、彼らが実際に活躍した舞台は古代ペルーの山岳地帯である。

■ BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■ BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ BC32世紀 「サカ人誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加して出羽国に移住し、その後に「モーゼスの大移動時代」に参加したヤコブは、エジプト（日本）からカナン（夏時代の中国）に移り、先祖の故地サカに赴き

、「サカ人」を生んだ。

■BC32世紀 「サグウェ族誕生」

ヤコブは、エジプト（日本）からカナン（夏時代の中国）に移り、先祖の故地サカに赴き、「サカ人」を生んだ。その後、故地であるアビシニアに移住し「サグウェ族」を生んだ。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「大地の神ゲブ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したヤコブは、大移動時代に侵入したミディアン人（司神タナトス）、シェルデン人と連合した。彼らは、エジプトに進出した。シェルデン人は「大気の神シュウ」を、司神タナトスは「天空女神ヌウト」を祀った。シュウの名の由来はシェルデンであり、ヌウトの名の由来はタナトスである。シェルデン＝シュウルデン＝シュウとなり、タナトス＝タヌウトス＝ヌウトとなる。

一方、ヤコブは「大地の神ゲブ」を祀った。ゲブの名の由来はヤコブである。ヤコブ＝ヤゲブ＝ゲブとなる。司神タナトス、シェルデン人とアカイワシャ人は「砂漠の神セト」「太陽神ホルス」「蛇神アトゥム」を退けた。「ヌウト」を、原初の神に据えてヘリオポリスの古株を退けて、古代エジプトに君臨したのである。

■BC7世紀 「スキタイ人誕生」

カッパドキア人は、中央アジアに移り、「スキタイ人」を称した。スキタイの名の由来はカッパドキアと同じ、サグバタとダキアの組み合わせである。サグバタ＋ダキア＝サツダ＝サグダイ＝スキタイとなる。カッパドキア人がいない時は、彼らはスキタイ人になり、スキタイ人がいない時は、彼らはカッパドキア人になっていた。

おもしろいことに、フリギア王国、ペルシア帝国、アレクサンドル帝国によってアナトリア半島が支配下に置かれる時には、スキタイ人が中央アジアに発生し、カッパドキア王国が栄えている時には、中央アジアにスキタイ人の姿はない。スキタイ人には、祖を同じくするサカ人も加わっていた。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「霧島誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したヤコブは、南九州に上陸し、拠点を「霧島」と命名した。霧島の名の由来はイスラエルの聖地ゲリジム山である。ゲリジム＝ゲリジマ＝霧島となる。

■ A D 1 4 5 年 「サカ王朝誕生」

ソグディアナの建設に協力していたサカ人は、中央アジアからパンジャブに移住した。彼らは、西インドに「サカ王朝」を築いた。サカ王著には、祖を同じくするソグド人も加わっていた。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ジェイコブズ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加したサグウェ族は、ブリテン島に上陸し、イギリス人と混血して「ジェイコブス」を生んだ。ジェイコブスの名の由来はヤコブである。

■ A D 6 4 5 年 「ザガワ族誕生」

「大化の改新」により、蘇我氏が滅亡すると、彼らは日本を脱出して故地であるソグディアナに一旦帰還した。だが、A D 7 1 2 年にイスラム軍にソグディアナを占領されると、蘇我氏はソグディアナを後に、南北に新天地を求めて旅立った。また、南方組蘇我氏は、コーカサスをずっと南下してアビシニアに侵入した。「ザガワ族」を称した彼らからは、マラ・テクレ・ハイマノートが輩出された。A D 1 1 3 7 年、彼は初代皇帝に即位してエチオピアに「ザガウェ朝」を開いた。

※チェコ

■ A D 1 0 3 6 年 「犬目氏誕生」「稲毛氏誕生」

聖徳太子の子息の一行と共にインドに来ていた蘇我稲目の後裔は、プラティハーラ朝が滅ぶと、インドから日本に帰還した。インド人の顔をした彼らは日本人と混合して「犬目氏」「稲毛氏」を形成した。犬目の名の由来は稲目であり、稲毛の名の由来は「イナギ（稲目の人）」である。

■ A D 「ヨハネスの大航海時代」

■ A D 1 1 世紀 「横山氏誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人ジェイコブスは、南九州に渡り、故地である「霧島」に帰還した。後に、武蔵国に移ると、マヤ人の顔をした彼らは日本人と混合して「横山氏」を称した。横山の名の由来は「ヤコブの山」である。ヤコブ+山=ヤコ+山=横山となる。横山氏は、「横山党」を組み、坂東八平氏登場以前の関東平野を統べた「武蔵七党」の一角を担った。

■ A D 1 1 世紀 「横山党誕生」

「横山党」を結成した横山氏の仲間たちの歴史を説明したい。海老名氏、愛甲氏、成田氏、本間氏、小俣氏、平子氏がいる。まず、「海老名氏」の祖はアビニオン人である。アビニオン=アビニャン=海老名となる。当時、フランク王国領であったアビニオンは神聖ローマ帝国領になった。そのため、アビニオンの人々は地中海を脱出して日本に移住した。この系統からは落語家林家三平（海老名泰一郎）が輩出されている。「愛甲氏」の祖は、アイルランド人である。A D 1 1 7 1 年、アンジュー家がアイルランドの侵略を開始する。これを機に、コナート居住のアイルランド人がアイルランドを脱出して遠い異邦の地、日本にまで足を伸ばした。愛甲の名の由来はアイルランドとコナートの組み合わせである。

「成田氏」の祖は、プラティハーラ朝の残党である。プラティハーラ朝が滅ぶと、一部プラティハーラ王家は陸路でモンゴルを経由して日本に向かった。インド人の顔をした彼らは日本人と混合して「成田氏」を称した。成田の名の由来は「ナラト（ヴァナラシの人）」である。「本間氏」の祖は、「偉大な精霊モディモ」を祀るコサ族（南アフリカ人）である。西廻りのコサ族はペルーを経て「木曾氏」となるが、東廻りのコサ族は「偉大な精霊モディモ」に因んで「本間氏」を称した。本間の名の由来はモディモである。モディに「本（もと）」を当て字し、モに間（ま）を当て字し、2つを組み合わせ「本間」の漢字表記を組み立て、更に、訓読みで「本間（ほんま）」と呼んだ。

「小俣氏」の祖は、マタラム王国の残党、山田氏である。小俣の名の由来は山田であり、やま

だ（山田）＝あまた＝おまた（小俣）となる。「平子氏」の祖は、ウマイヤ家である。AD1031年、イベリア半島の後ウマイヤ朝が滅ぶと、ウマイヤ家はイベリア半島を発ち、陸路ではるばる日本に移住した。平子の名の由来はイベリアキ（イベリアの人）である。イベリアキ＝ベラキ＝平子となる。こうして見ると、「横山党」はマヤ人、フランス人、アイルランド人、インド人、南アフリカ人、ジャワ人、アラビア人で構成されていたことになる。

■AD1137年 マラ・テクレ・ハイマノート、初代皇帝に即位 「ザグエ朝誕生」

AD1137年、彼は初代皇帝に即位してエチオピアに「ザグエ朝」を開いた。

■AD1262年 「佐川氏誕生」「久保氏誕生」「大久保氏誕生」「小久保氏誕生」

ヘロデ朝の残党は、ザガワ族を退けて「サグエ朝」を廃し、エチオピアに「ソロモン朝」を開いた。これを機に、ザガワ族はエチオピアを後にし、新たな新天地の候補として日本を選んだ。日本に上陸したサガワ族は、「佐川氏」や「久保氏」のシリーズを生んだ。久保の名の由来はソグボである。ソグボ＝グボ＝久保となる。この久保氏はシリーズ化され、「大久保（大窪）」「小久保（小窪）」「中久保（中窪）」「西久保（西窪）」「荻窪」などの名が生まれた。

■AD1262年 「ロマノフ朝誕生」

ヘロデ朝の残党は、ザガワ族を退けて「サグエ朝」を廃し、エチオピアに「ソロモン朝」を開いた。これを機に、ザガワ族はエチオピアを後にし、新たな新天地の候補としてロシアを選んだ。褐色の肌を持つザガワ族は、ロシア人と混合して「ロマノフ家」を形成した。ロマノフの名の由来はソロモンである。自分たちを追放したソロモン朝に、畏怖の念を抱いていたザガワ族は、強い敵の威光を借りんとソロモンの名を拝借した。ソロモン＝ソロモノフ＝ロマノフとなる。

■AD14世紀 「シク教誕生」

ザクセン人として西ヨーロッパに居住していたサカ人は、黒死病の流行を機に、故地を離れてパンジャブに入植した。その後、グル・ナーナクが輩出された。ナーナクの名の由来はノニアク（パンノニアの人）である。ノニアク＝ノーニャク＝ナーナクとなる。グル・ナーナクは、AD1469年に「シク教」を創始した。シクの名の由来はスクである。スク＝シクとなる。

■AD1613年 ミハイル・ロマノフ、初代ツァーリに即位 「ロシア帝国誕生」

AD1613年、ミハイル・ロマノフはイワン4世の後継者としてツァーリの冠を頂いた。ここに「ロシア帝国」が誕生した。

■AD1933年 ケン・ジェイコブス生誕

■AD1934年 横山光輝生誕

ナナブルクの歴史

◆ニンフ（ナナブルク）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ナナブルク誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したキブウカは、現ベナンに「ナナブルク」を生んだ。湖水地方時代のキブウカ同様、ナナブルクは、現ベナンの海岸で小魚、甲殻類、貝類、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■100万年前 「ナバラ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加したナナブルクは、北極圏であった地中海に入植した。これにより、肌は白くなり、金髪・碧眼の特徴を得た。湖水地方時代、各々が各々の獲物に特化していた。キブウカの場合は昆虫などに特化していたため、身長が低かった。しかし、新天地ではその必要性が無効化された。大型哺乳類、大型魚類など、大きめの獲物に特化すると、キブウカの身長はみるみる160cmほどになった。彼らは、ソロモン諸島に顕著な、金髪・碧眼のメラネシア人の祖である。逆に言えば、河童の顔はメラネシア人の小型化である。彼らは、イベリア半島にまで足を伸ばし、「ナバラ」を築いた。ナバラの名の由来はナナブルクである。ナナブルク=ナブル=ナバラとなる。

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」

■100万年前 「ニップール誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加したナナブルクは、「ニップール」に拠点を得た。ニップールの名の由来はナナブルクである。ナナブルク=ナブル=ナップール=ニッポー

ルとなる。一部のナナブルクは、ニップールでも小魚、昆虫などを食べていたが、各々の獲物に特化という湖水地方時代の決めごとが無効化された。そのため、一部は大型哺乳類などを食べた。これにより、身長50cmのナナブルクは、みるみる160cmにまで巨大化した。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「ニンフ誕生」「ニネヴェ誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したナバラ人は、ニップールに移住し、「ニンフ（ニュンペー）」を称した。彼らは自身の拠点として「ニネヴェ」を築いた。ニンフ、ニネヴェの名の由来は。ナナブルクである。ナナブルク=ナンプルク=ナンブ=ニンフとなり、ナナブルク=ナナベルク=ナナベ=ニネヴェとなる。湖水地方時代のキブウカ同様、ナナブルクは、チグリス=ユーフラテス流域で小魚、甲殻類、貝類、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。ニンフとは、水陸両生で、身長50cmほどの金髪・碧眼の白人であった。その後、獲物が大型哺乳類になると、彼らは巨大化した。彼らはカナン～メソポタミア人の祖である。

■ 30万年前 「ネパール誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したニップール人は、メソポタミアを発ってヒマラヤの麓に入植した。彼らは「ネパール」を築いた。ネパールの名の由来はニップールである。ニップール=ニプール=ネパールとなる。一部のナナブルクは、ネパールでも小魚、昆虫などを食べていたが、各々の獲物に特化という湖水地方時代の決めごとが無効化された。そのため、一部は大型哺乳類などを食べた。これにより、身長50cmのナナブルクは、みるみる160cmにまで巨大化した。彼らは、ネパール人の祖である。

■ 30万年前 「プレークサウラー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したニップール人は、オーストラリアに移住し、アシェラーフと組んで「プレークサウラー」を生んだ。プレークサウラーの名の由来はナナブルクとアシェラーフの組み合わせである。ナナブルク+アシェラーフ=ブルクシェラ=プレークサウラーとなる。その後、プレークサウラーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ハリアクモン誕生」

プレークサウラーは、イマナと組んで「ハリアクモン」を生んだ。ハリアクモンの名の由来はプレークサウラーとイマナの組み合わせである。プレークサウラー＋イマナ＝プレークマナ＝ハリアクモンとなる。その後、ハリアクモンは河川の娘たちに参加した。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ BC 5千年 「ナホル誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加し、オーストラリアからメソポタミアに移住していたハリアクモンは、「ナホル」を生んだ。ナホルの名の由来はナナブルクである。ナナブルク＝ナブル＝ナホルとなる。ナホルは、先祖の故地であるニップール、ニネヴェを継承し、シュメールの都市国家として発展させた。

■ BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ BC 32世紀 「因幡氏誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したナホルは、日本に上陸し、現地人と混合して「因幡氏」を称した。因幡の名の由来はニネヴェである。ニネヴェ＝イネヴェ＝因幡となる。

■ BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ BC 7世紀 「難波氏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したラガシュの民は、日本に上陸し、摂津国に移住した。

また、彼らは摂津国のことを「難波・浪速（なにわ）」と呼んだ。難波の名の由来はシュメールの都市国家ニネヴェである。ニネヴェ＝ニネウエ＝難波（なにわ）となる。難波は「なんば」とも読まれるが、ナンバの名の由来もニネヴェである。ニネヴェ＝ニンベ＝ナンバとなる。難波（なにわ）から、後に「難波氏」が生まれ、難波（なんば）から「南波氏」が生まれた。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■BC327年 「ナポリ誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したネパール人は、イタリアに「ナポリ」を残した。ナポリの名の由来はネパールである。ネパール＝ネパーリ＝ナポリとなる。ネパール人は、ネパール、ナポリ、ナバラと3つの拠点を頻繁に往来していたと考えられる。

■BC248年 「出雲国の大航海時代」

■AD488年 「ヴァルン族誕生」

AD488年に東ゴート王国が成立すると、ナポリ人はゴート族の故地バルト海に逃げ延び、「ヴァルン族」を称した。ヴァルンの名の由来はナホルである。ナホル＝ナホルン＝ヴァルンとなる。

■AD5世紀 「物部氏誕生」「ナイマン族誕生」

朝鮮半島が三国時代に入って騒々しくなったため、閔氏は「邇芸速日命」時代に続いていた大和国に帰還した。閔氏は、アメンに「物（もん）」を当て字して「部」を付け加えた。「物部氏」の誕生である。しかしAD587年、物部守屋は「丁未の乱」を機に、一族を率いて日本を脱出し、モンゴルに逃れた。この時に初めて当地は物（もん）を由来に「モンゴル」と呼ばれた。物部氏は先に来ていた因幡氏と連合して「ナイマン族」を形成した。ナイマンの名の由来はナホルとアメンの組み合わせである。ナホル＋アメン＝ナオメン＝ナイマンとなる。また、この時に一部物部氏が朝鮮半島に帰還して「閔氏」の名を復活させている。

■AD727年 「ノルマン人誕生」

ウイグル人は、先祖の托跋部が「北魏」を支配していたことから「魏（ウェイ）の王」を由来に「ヴァイキング」を称した。ウェイ（魏）＋キング＝ヴァイキングとなる。また、ナイマン人は「ノルマン人」となり、大宛（黒人ダン族）は「デーン人」となった。ナイマン＝ナリマン＝ノルマンとなり、ダン＝ダーン＝デーンとなる。ヴァイキングの話になると、すべての名前がごっちゃになっていたが、ヴァイキングとは托跋部を指し、ノルマン人はナイマン人を指し、デーン人は大宛（黒人ダン族）を指している、と理解したい。ヴァイキングやノルマン人は、基本的に暴力的で残虐なデーン人とは対立していた。

■AD911年 ロロ、初代ノルマンディー公に就任 「ノルマンディー公国誕生」

デーン人は、AD866年に「デーンロー」を植民地として掌握したものの、アルフレッド大王率いるウェセックス王国がデーンローを侵食しながら拡大したため、ノルマンディーに逃げ込んだ。ノルマン人はデーン人と組んでシャルル3世を懐柔し、ノルマンディー分与に成功した。イングランドを諦めたデーン人は、次にノルマンディー公国を自分のものにすべく、「クラモール・ド・ハロー」を強いた。これによってデーン人は自分に寄与しない異分子を公的に排除した。デーン人は、敵に有罪判決を与えるための裁判所を用意し、クリュニー会の一般信者に被害者を演じさせ、敵であるノルマン人、ヴァイキング、フランク人などの有力者を被告に設定した。これにより、民を正しく導くことが出来る多くの有力者が死刑判決を受けるために裁判所に召喚され、灰燼に帰した。

■AD1043年 「ノルマン王国誕生」

ヴァルン族とノルマン人（ナイマン）は「ナホル」を祖とする同族である。ヴァルン族はノルマン人と共存しながら、故地ナポリを奪還せんと、地中海に向かい、シチリア島に移住する。グリエルモ1世がプッリャ伯に就任し、「オートヴィル朝」が開かれている。プッリャの名の由来はナホル、或いはナポリだと考えられる。ナポリ＝ナポッリャ＝プッリャとなる。AD1130年、ピッリャ伯のルッジェーロ2世が、シチリア国王に即位して「ノルマン王国」が誕生している。ノルマン王国（両シチリア王国）は、シチリア島とヴァルン族の故地ナポリを含む南イタリア半島を掌握した。

■AD1066年 ウィリアム1世、イングランド王に即位 「ノルマン朝誕生」

■AD114?年 「ナイマン王国誕生」

この短命な王朝はAD1135年に滅亡すると、ノルマン人は北極海ルートに乗って故地であるモンゴルに帰還した。イギリス人の顔をしたノルマン人は、モンゴル人と混合して「ナイマン族」として復活した。AD114?年、ナルクシュ・タヤン・カンが初代王に即位して「ナイマン王国」を建国している。

■AD1500年 「蜂須賀氏誕生」

ノルマン人は、南イタリア（ナポリ）とシチリア島を掌握し、AD1130年に「オートヴィル朝」を開き、「両シチリア王国（ナポリ王国）」を建設していた。その後、アンジュー家のシャルルがシチリア王位に就くと、ノルマン人はアルモハード朝の残党と共に「シチリアの晩鐘」と呼ばれた反乱を、AD1282年に指揮した。これにより、ノルマン人はシチリアとナポリの分離し成功し、シチリアの掌握を続けた。

しかし、AD1500年にハプスブルグ家の支配が確立したことで、シチリア島は、ハプスブルグ家がスペイン王位を喪失するまで、スペイン王国の支配下に置かれた。これを機に、ノルマン人はシチリア島を後にし、日本に移住した。イタリア人の顔をしたノルマン人は、日本人と交わり、「蜂須賀」の系譜を築いた。蜂須賀の名の由来は、バチカンとシカニ（シチリア）の組み合わせである。バチカン+シカニ=バチシカ=蜂須賀となる。蜂須賀の名前から、彼らがノルマン人の系統であることが分かる仕組みになっている。

■AD1833年 アルフレッド・ノーベル生誕

ノーベルの名の由来はナホルである。ナホル=ナーホル=ノーベルとなる。ノーベルは優れた科学者であるが、業績と成果、名声までもタナトス（クリュニー会、シトー会、ドミニコ会、ルター派）に篡奪され、エクスプロイトされている。ノーベル賞は、エクスプロイトの際たるものである。タナトスは、味方を保護する盾として、または敵を攻撃する武器としてノーベル賞を用いる（ノーベルの意は介していない）。

■AD1889年 ジャワハラルール・ネルー生誕 「インド共和国誕生」

ネルー（NEHRU）の名の由来はナホルである。ナホル=NEHRU=ネルーとなる。ネルーは、インド共和国初代大統領に就任している。

◆ピラコチャ（プレークサウラー）の歴史

■30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■30万年前 「プレークサウラー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したニップール人は、オーストラリアに移住し、アシェラーフと組んで「プレークサウラー」を生んだ。プレークサウラーの名の由来はナナブルクとアシェラーフの組み合わせである。ナナブルク＋アシェラーフ＝ブルクシェラ＝プレークサウラーとなる。その後、プレークサウラーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「ブリ族誕生」「ブル族誕生」

プレークサウラーは、マレー半島に「ブリ族」「ブル族」「ブルンガン族」「ベル族」「ヘロン族」「ホアウル族」を生んだ。いずれの名の由来もプレークサウラーである。

■30万年前 「ハリアクモン誕生」

イマナが訪れると、プレークサウラーは彼らと組んで「ハリアクモン」を生んだ。ハリアクモンの名の由来はプレークサウラーとイマナの組み合わせである。プレークサウラー＋イマナ＝プレークマナ＝ハリアクモンとなる。その後、ハリアクモンは河川の娘たちに参加した。

■30万年前 「サンガリオスの大移動時代」

■30万年前 「ピラコチャ誕生」

「サンガリオスの大移動時代」に参加したプレークサウラーは、北アメリカ、マヤを経て人類史

上初の南アメリカに上陸した。現ペルーに入植した彼らは、「太陽神ピラコチャ」を生んだ。ピラコチャの名の由来はプレークサウラーである。プレークサウラー＝プレークサ＝ピラコチャとなる。

■ 3万年前 「活目入彦誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエラドが訪れると、ハリアクモンはエラド（エウリュトス）と組んで「イクメイリヒコ」を生んだ。イクメイリヒコの名の由来はハリアクモンとエウリュトスの組み合わせである。ハリアクモン＋エウリュトス＝アクモエウリュ＝イクメイリヒコとなる。活目入彦は「垂仁天皇」として第11代天皇に即位している。

■ BC 35世紀 「サムエルの大航海時代」

■ BC 35世紀 「蛭子神誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したピラコチャは、ペルーを離れて東北地方に入植した。この時、ピラコチャは「蛭子神」を生んだ。ヒルコの名の由来はピラコチャである。ピラコチャ＝ヒラコチャ＝ヒルコ（蛭子）となる。蛭子は「エビス」とも呼ばれるが、それは、彼らが最初に蝦夷（えびす）に入植していたからだ。

■ BC 32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ BC 32世紀 「バラク誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加した蛭子神は、夏時代の中国に移住して、イスラエルの師士として知られる「バラク」を生んだ。バラクの名の由来はプレークサウラーである。プレークサウラー＝プレク＝バラクとなる。

■ BC 30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ペレグ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したバラクは、メソポタミアに移住して「ペレグ」を生んだ。ペレグの名の由来はバラクである。バラク＝パラグ＝ペレグとなる。

■BC1200年 「プリグ族誕生」

ソドムとゴモラを機に、メソポタミアからインドに移住したペレグは「プリグ族」を生み、アリア人の軍団に参加した。プリグの名の由来はペレグである。ペレグ＝ペリグ＝プリグとなる。

■BC1000年 「フリギア王国誕生」

「十王戦争」を機に、アナトリア半島に移住したプリグ族は、ヒッタイト帝国の跡地に「フリギア王国」を建てた。フリギアの名の由来はプリグである。プリグ＝プリグア＝フリギアとなる。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「生駒氏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したラガシュの民は、日本に上陸し、摂津国に移住した。彼らは、大阪と奈良に跨る生駒山を、初めて「生駒」と呼んだ。生駒の名の由来は活目入彦である。活目入彦（イクメイリヒコ）＝イクメ＝イコマ（生駒）となる。生駒山に暮らした彼らは、後に「生駒氏」を名乗るようになる。

■BC7世紀 「フリージア誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフリギア人は、ネザーラント地域に入植して「フリージア」を築いた。フリージアの名の由来はフリギアである。フリギア＝フリーギア＝フリージアとなる。

■BC7世紀 「女神フリッグ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフリギア人は、スカンジナビア半島に赴いて「女神フリッグ」を生んだ。フリッグの名の由来はフリギアである。フリギア＝フリッギア＝フリッグとなる。

■AD668年 「ブルガリア人誕生」「コーブルク誕生」

高句麗が滅亡するとククルカンは、柔然の創始者である長孫氏（ツァンスン）、日本から来た黒木氏（キルギス人）を率いて西方に向かった。彼らが中央アジアに到達して初めて当地は「コーカサス」と呼ばれた。コーカサスの名の由来はククルカンとツァンスンの組み合わせである。ククルカン+ツァンスン＝ククツァンス＝クークツァス＝コーカサスとなる。

また、ククルカンはフリギア人と組んで「ブルガリア人」と「コーブルク」の2つの連合体を結成した。ブルガリアの名の由来はフリギアとゴグリヨの組合わせであり、コーブルクの名の由来もゴグリヨとフリギアの組み合わせである。フリギア+ゴグリヨ＝フリグリヨ＝ブルガリアとなり、ゴグリヨ+フリギア＝ゴーフリギ＝コーブルクとなる。

■AD1525年 ペーテル・ブリューゲル（大）生誕

ブリューゲルの名の由来はブルガリアである。ブルガリア＝ブリューガリア＝ブリューゲルとなる。

■AD1564年 ペーテル・ブリューゲル（小）生誕

■AD1947年 蛭子能収生誕

ムンビの歴史

◆マニ教（ムンビ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ムンビ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したカゾオバは、現ケニアに「ムンビ」、現カメルーンに「エバシ」、中央アフリカに「ザムビ」を生んだ。ムンビは、現ケニアの海辺でも小魚、貝類、甲殻類に特化していたため、身長は1mのままであった。

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」

■100万年前 「キジムナー（前身）誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」に参加したカゾオバは、北極圏であった地中海に入植した。これにより、肌は白くなり、頭髪が赤くなった。これはキジムナーの特徴であるが、沖縄の妖怪キジムナーは古代ギリシアで生まれたことがわかる。カゾオバはムンビと組み、「キジムナー（キジムン）」を生んだ。

キジムナーの名の由来はカゾオバとムンビの組み合わせである。カゾオバ+ムンビ=カゾムン=キジムン=キジムナーとなる。キジムナーは地中海に於いても獲物を変えなかったため、身長は1mのまま暮らした。キジムナーの目撃談同様、彼らは、古代地中海でも小魚、貝などを獲って食べていたと考えられる。

■100万年前 「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」

■100万年前 「ムンバイ誕生」

「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」に参加したムンビは、インドに移住して「ムンバイ（現ボンベイ）」に住んだ。ムンバイの名の由来はムンビである。ムンビ=ムンビイ=ムンバ

イとなる。湖水地方時代、人口密度の影響で各々が各々の獲物に特化していたが、新天地ではその必要がなくなり、小魚、昆虫を食べていたムンビは、大型哺乳類、大型魚類など、好きな獲物を食べることで巨大化した。身長1 mから160 cmほどになったムンビは、インド人の祖となった。

■ 30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■ 30万年前 「キジムナー誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、沖縄諸島に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。彼らは「キジムナー」の名を復活した。白い肌、赤い頭髮は、地中海時代に得たものである。古代から日本人と共存し、漁の手伝いをするということもあるという。キジムナーは妖怪として知られているが、古来から目撃談が絶えず、現地人の間では実在していると信じられている。

キジムナーは、現地人の船に乗って共同で漁を行い、夕食時にはかまどの火を借りに来る。年の瀬は一緒に過ごすなど、人間の「隣人的」な扱いを受けている。人間の家に嫁ぐこともあるといわれているほどだ。基本的に品行法制だが、棲家の古木を切り倒すと、家畜を全滅させたり、船を沈めたりなど、一旦恨みを買うと徹底的に復讐をする。

■ 30万年前 「ケンムン誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは、奄美大島に入植し、洞窟に居住しながら、川で魚、虫を捕って暮らしていた。彼らは「ケンムン」と呼ばれた。ケンムンの名の由来はキジムンである。キジムン=キンムン=ケンムンとなる。数々の目撃談から、ケンムンはキジムナーと同じ容姿であることがわかる。ケンムンは妖怪として知られているが、古来から目撃談が絶えず、現地人の間では実在していると信じられている。

ケンムンは相撲好きで、人に会えば挑戦するといわれている。薪を運ぶのを手伝ったりし、夜間は漁をする。特に魚の目玉が好き。カタツムリ、ナメクジの食べるという。キジムナーや河童に通ずる。部分も多いことから、同族だということがわかる。

■ 30万年前 「カワランベ（河童）誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したムンビは、日本に入植した。この時に、河童に参

加していたムンビは「カワランベ」を生んだ。カワランベの名の由来は「河原のムンビ」である。河原+ムンビ=カワランビ=カワランベとなる。同じ河童でも、カアパコの身長は50cmであり、カワランベの身長は1mあった。

■ 30万年前 「山姥（ヤマンバ）誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したムンビは、日本に入植した。山岳部に移住した彼らは、この時に「山姥（ヤマンバ）」が生まれた。ヤマンバの名の由来は「山のムンビ」である。山+ムンビ=ヤマンビン=ヤマンバとなる。山姥は人間を獲って食うと言われ、一方では迷子の子供を助けるという。結局、彼らは干渉されるのを防ぐため、平穏な生活を守るために人を獲って食うとウソをついているのだろう。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「アーリマン誕生」

インドから「デウカリオンの大航海時代」に参加したムンバイ人は、メソポタミアに移住し、ワルムベと組んで「アーリマン」を生んだ。アーリマンの名の由来はワルムベとムンビの組み合わせである。ワルムベ+ムンビ=ワルムン=アーリマンとなる。

■ BC 11世紀 「ハヌマーン誕生」

ルハンガは、ムンバイのムンビと共に、マガン王国のラーマ皇子の要請でアラビア半島に渡った。スリランカを支配していたタナトスの一族、魔王ラーヴァナ、ラクシャサ（羅刹）を倒すためである。ハヌマーンの名の由来はルハンガとムンビの組み合わせである。ルハンガ+ムンビ=ハナムン=ハヌマーンとなる。実際には、ハヌマーンはオラン・ダラムそのままの姿をしていたと考えられる。ただ、ムンビと混合したため、身長は4mから3mに縮んだ。

■ BC 165年 「ハスモン朝誕生」

BC 198年、セレウコス朝のアンティオコス3世がエジプト征伐を行った。彼らがヌビアに侵攻すると、メロエ王国のアプスーは、イスラエルに逃亡した。この時、彼らはムンバイ人と連合

した。BC200年頃、ムンバイ人はアーンドラ朝成立を機にイスラエルに逃げていた。両社は共同で「ハスモン朝」を開いた。ハスモンの名の由来はアプスーとムンビの組み合わせである。アプスー+ムンビ=プスモン=ハスモンとなる。

■AD216年 預言者マニ生誕 「マニ教誕生」

AD67年、ユダヤ戦争を機にハスモン朝の残党はイランに逃亡した。その後、ハスモン朝（ムンビ）の残党から「マニ」が生まれた。マニの名の由来はムンビである。ムンビ=ムナビ=マニとなる。

■AD8世紀 マニ教、ウイグル汗国の国教に制定

中国からウイグル汗国に渡ると、マニ教は地元のタナトスと組み、念願の国教指定を受けた。

■AD883年 「惟宗氏誕生」

AD848年、ウイグル汗国が滅ぶと、マニ教は讃岐国に移住し、そこから京に移った。秦氏に接近した彼らは、自身の血統を打ち立てた。ここに「惟宗氏」の祖、惟宗直宗・直本の兄弟が生まれた。惟宗の名の由来は「ウイグルから来たマニ」である。ウイグル+マニ=グルマニ=クルマニ=惟宗となる。

■AD12世紀 「宗氏誕生」

AD845年、「会昌の廃仏」がはじまると、摩尼教は福建に逃れ、「福建海賊」として近海を荒らした。その福建海賊から、対馬に拠点を得た「宗氏」が生まれた。宗の名の由来は摩尼である。摩尼=マニ=宗（むね）となる。

■AD1290年 「香宗我部氏誕生」

香宗我部の名の由来は惟宗（ウイグルとマニ）とカペーの組み合わせである。惟宗+カペー=惟（香）+マニ（宗）+カペー（我部）=香宗我部（こうそかべ）となる。カペー家の残党と組んだ、惟宗氏の末裔部族である。

■AD1290年 「長宗我部氏誕生」

長宗我部の名の由来はナコタ、マニ、カペーの組み合わせである。ナコタ（長）＋マニ（宗）＋カペー（我部）＝長宗我部（ちょうそかべ）となる。長宗我部氏は、カペー家の残党と組みつつ、マニトゥを祀ってナコタ族を支配した預言者マニの直系と、福建の摩尼教の直系宗氏による連合部族である。

■AD1386年 「ミナンカバウ族誕生」

長宗我部能重が吉原庄全域を支配下に置くと、香宗我部氏は土佐国を後にスマトラ島に移住した、彼らは「ミナンカバウ」を称した。ミナンカバウの名の由来は宗我部（ムネカベ）である。ムネカベ＝ムネンカバエ＝ミナンカバウとなる。AD1651年、オランダ東インド会社がミナンカバウ族の土地で金を発掘して以来、タナトスの家族ということで、ミナンカバウ族はオランダと親交をもった。その後、AD1585年、豊臣秀吉の四国征伐で敗北すると、長宗我部氏は土佐国を後に、兄弟であるミナンカバウの地に移住し、両者は連合した。

■AD1958年 「インドネシア共和国革命政府誕生」

近年では、ミナンカバウ族は「インドネシア共和国革命政府」を立ち上げて反乱を頻発し、ゲリラ戦を展開した。この反乱は、AD1961年に終焉を迎えているが、背後でオランダ王国、パプア系華僑と連合していた可能性も高い。

アブクの歴史

◆ピュグマエイ（アブク）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■400万年前 「アブク誕生」

「第1次エスの大移動時代」に参加したエスは、湖水地方に入植し、各々が各々の獲物に特化することで、バラエティに飛んだ人類を生み出した。その中に、オリジナル人類のひとつアブクがいる。彼らは、クウォスよりも小さい獲物に特化していたため、身長が140cmになり、現在のピグミー族に似た容姿をしていた。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ムワリ誕生」「モリモ誕生」「モディモ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したアブクは、現ジンバブエに移住して「ムワリ」を、現レソトに移住して「モリモ」を生んだ。その後、モリモはボツワナに「モディモ」を生んだ。

■200万年前 「モリモの大移動時代」

■200万年前 「パグ族誕生」「ムユ族誕生」

「モリモの大移動時代」に参加したアブクとムワリは、チッタゴンからマレー、インドネシア、パプアに四散した。アブクはパプアに「パグ族」を残し、ムワリもパプアに「ムユ族」を残している。永年の時を経て彼らはパプア人に吸収されたが、当初は小人族だったと考えられる。パグの名の由来はアブクであり、ムユの名の由来はムワリである。両者はピュグマエイ（ピグミー）の前身である。パグ+ムユ=パグムユイ=ピュグマエイとなる。

■ 30万年前 「ブカット族誕生」「ベカタン族誕生」

「カオスの大移動時代」「第2次キブウカの大移動時代」を介して異なる人類がオーストラリアに到来し、混血時代が始まると、ピュグマエイはエウドーラーと意気投合し、連合した。この時に「ブカット族」「ベカタン族」がパプアに生まれた。ブカットの名の由来はピュグマエイとエウドーラーの組み合わせであり、ベカタンの名の由来はブカットである。ピュグマエイ+エウドーラー=ピュグウドー=ブカットとなり、ブカット=ブカタン=ベカタンとなる。このブカットの名は「ピクト」の語源でもある。

■ 30万年前 「ヘカトンケイル誕生」「コットス誕生」

「カオスの大移動時代」「第2次キブウカの大移動時代」を介して異なる人類がオーストラリアに到来し、混血時代が始まると、ピュグマエイは、「ヘカトンケイル」「コットス」を生んだ。ヘカトンケイルの名の由来はベカタン、キャラの組み合わせであり、コットスの名の由来はブカット+エウリュトスの組み合わせである。ベカタン+キャラ=ベカタンキラー=ヘカトンケイルとなり、ブカット+エウリュトス=カッツス=コットスとなる。コットスは、バントウ族（ピグミー族の愛嬌のある顔と獣人の身体能力）の姿をしていた。当時のコットスの姿をした人々が未だに東南アジア、フィリピン辺りに住んでいる。好奇心の強い人々は、彼らを見て「なぜアフリカ人が東南アジアにいるんだ？」と不思議がっている。

■ 30万年前 「日向国誕生」

ヘカトンケイルは、コットスと共に大和国に移住した。この時、ヘカトンケイルは九州に入植し「日向国」を築いた。日向（ひゅうが）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ=ヒュグマエイ=ひゅうが（日向）となる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ティタン神族誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したコットスは、ヘカトンケイルに属し、ティタン神族にも参加した。

■ 4万年前 「第2次ウラヌスの大移動時代」

■ 4万年前 鶴（ゲラノス）と戦う

「第2次ウラヌスの大移動時代」を機に、クロノスの陰謀に巻き込まれたヘカトンケイルはパプアに帰還した。その後、クロノスはゼウスに敗北すると、パプア・ニューギニアに落ち延びて「ダニ族」となった。しかし、ピュグマエイは故地にやってきたクロノスに怒りをあらわにし、何度も戦闘を挑んだ。当時のパプアニューギニアは「ペガサス」と呼ばれていた。アブクとムシシの国という意味だ。アブク+ムシシ=ブクシシ=プグシシ=ペガサスとなる。

ホメロスは、ピュグマエイについて書き残している。「小人族である彼らは、鶴と戦っていた。鶴は毎年略奪に訪れるため、毎年春になると、小人族は矢を携え、羊に乗って大集団を成し、鶴の雛や卵を殺しに進軍する」という。ところで、この意味ありげな「鶴」とは何を意味するのだろうか？疑問に思ったときは、ギリシア語で「鶴」を何と呼ぶのか知ることだ。何の意味も無く鶴と名づけたりはしないからだ。

しかして、鶴はギリシア語でゲラノスである。「ゲラノスってどこかで聞いたことあるな。どこで聞いたかな。クロノスだ！」ということで、ゲラノス（鶴）とは、クロノスのことを意味していると考えて良い。つまり、ピュグマエイが戦っていた「鶴」とは、人喰い人種のダニ族のことである。小人族と呼ばれたピュグマエイは、凶悪な新参者であるダニ族を嫌い、頻繁に戦火を交えていた勇敢な人々だったのだ。

■ 4万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「ユカタン誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したヘカトンケイルは、ユカタン半島に上陸し、ヴァルハラ王国の建設に協力した。この時に、初めて「ユカタン半島」と呼ばれた。ユカタンの名の由来はベカタンである。ベカタン=エカタン=ユカタンとなる。

■ 4万年前 「ピクト人誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したブカット族、ベカタン族はブリテン島に辿り着いた。しかし、氷結を免れていたブリテン島南部にテミスを生んだディンカ族、マサイ族がいた

ため、ブ厚い氷河に覆われたスコットランドに拠点を築き、エスキモーのような暮らしを始めた。彼らは当地を「ピクトランド」と呼んだ。ピクトの名の由来はブカット、或いはベカタンである。ブカット＝ブカト＝ピクトとなる。この時に、彼らはグリーンランド、アイスランドに古来から伝わる小人の伝説を生んだ。イグルーを初めて建造したのも彼らだと考えられる。

■ 4 万年前 「ヘカテ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」のピクト人は、氷上のピクトランドから陸地剥き出しのロンドン地域に移住し、「ヘカテ」を生んだ。ヘカテの名の由来はピクトと同じ、ピュグマエイとエウドーラーの組み合わせである。ピュグマエイ＋エウドーラー＝ピュグドーラー＝ピュグド＝ヘカテとなる。ヘカテは「モルモー」という魔物を従えていたが、モルモーはピュグマエイの同盟者モリモのことである。

■ 4 万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4 万年前 「尾（ウェイ）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、アフリカに上陸し、湖水地方に「尾」を生んだ。彼らは、「東方青龍」の建設に参加した。尾（ウェイ）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグアエイ＝ウェイとなる。

■ 4 万年前 「ピ誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、アジスアベベに「ピ」を生んだ。彼らは、「西方白虎」の建設に参加した。ピの名の由来はピュグマエイである。

■ 4 万年前 「翼（イー）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、現スワジに入植し「翼」を生んだ。彼らは、「南方朱雀」の建設に参加した。翼（イー）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグマエイー＝イーとなる。

■ 4万年前 「危（ウェイ）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、現ケニアに入植し「危」を生んだ。彼らは「北方玄武」の建設に参加した。危（ウェイ）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグマウェイ＝ウェイとなる。

■ 4万年前 「バカ族誕生」「アカ族誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、故地であるアフリカに帰還し、コンゴに入植した。彼らは、現在知られているピグミー族の母体を築いた。この時に「バカ族」「アカ族」が生まれた。バカ、アカの名の由来はピュグマエイである。ピクト＝バカト＝バカ＝アカとなる。「バカ」と「馬鹿」は似ているため、バカ族はその名前のせいで日本人におもしろがられているが、実際には「バカ」の名は、オリジナル人類の名に起源を持つ高貴な名前である。

■ 2万年前 「武曲（ウーク）誕生」

オーディーンが、ヴァルハラから現ベナンに移住した際、ピグミー族は、「武曲」を生んだ。彼らは「北斗星君」の建設に参加した。武曲（ウーク）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグマエイ＝ウークとなる。

■ 1万5千年前 「日子番能邇邇芸命誕生」

台湾に入植したエノクは、ピュグマエイと共にインドから来たヴァナラシ族と連合して「日子番能邇邇芸命」を誕生させた。ヒコホノニギの名の由来はピュグマエイ（コロボックルの祖）、ヴァナラシとエノクの組み合わせである。ピュグマエイ＋ヴァナラシ＋エノク＝ピュグヴァナ＋ネノク＝ヒコホノニギとなる。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万3千年前 「大地殻変動の時代」

■ 1万3千年前 「テングリの大航海時代」

■ 1万3千年前 「神武天皇誕生」

「テングリの大航海時代」に参加したピグミー族は、テングリと共に長江に移住した。その後、彼らは黒龍江に移った。ピグミー族は、そこでティアマト、エウリュトスと連合して初代天皇「神武天皇」を生んだ。御名カムヤマトイワレ彦の名の由来は、ピュグマエイ、ティアマト、エウリュトスの組み合わせである。ピュグマエイ+ティアマト+エウリュトス=グマアマトエウリュ彦=カムヤマトイワレ彦となる。神武天皇は、大地殻変動後にモンゴルに集った亡命者をまとめ、統治した。神武天皇がはじめた「天皇家」は、獣人の王族でもあった。ピュグマエイの名は、日本語の「神（かみ）」の語源でもある。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ BC 7千2百年 「ゴメル誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加した神武天皇の残党は、モンゴルからメソポタミアに移住して「ゴメル」を生んだ。ゴメルの名の由来はピュグマエイとエウリュトスの組み合わせである。ピュグマエイ+エウリュトス=グマエウリュ=ゴメルとなる。ティアマトがない以外は、ゴメルの名は神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）と同じ構成である。

■ BC 35世紀 「サムエルの大航海時代」

■ BC 35世紀 「熊野国誕生」「ガド族誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したユカタン人は、出羽国に移住した。その後、紀伊半島に移った。この時に「熊野国」を築いた。熊野の名の由来は「ピュグマエイの土地（野）」である。ピュグマエイ+野=グマ野=熊野となる。同時に、「ガド族」が生まれている。ガドの名の由来はユカタンである。ユカタン=ユガダン=ガドとなる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「ヤクート族誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したガド族は、ツングースで「ヤクート族」を生んだ。ヤクートの名の由来はユカタンである。ユカタン=ユカータン=ヤクートとなる。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「アッカド人誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したヤクート族は、メソポタミアに入植し「アッカド人」を生んだ。アッカドの名の由来はヤクートである。ヤクート=ヤクート=アッカドとなる。

■BC30世紀 「安倍晴明誕生」

アブク（ピグミー族）から「安倍晴明」が生まれた。安倍の名の由来はウバンギである。ウバンギ=ウバノギ=あべの（安倍）となる。当時、イフェの神官（オニ）が「陰陽道」を築いた。陰陽道の名の由来は「モンゴル王国のオニ（神官）」である。オニ+モンゴル=オンモン=オンミョン=オンミョウ（陰陽道）となる。安倍（あべの）晴明を名乗っていたピグミー族（アブク）は、アテナイ王国を操る司神タナトスに支配され、蘆屋道満（アシル・ボグドー）と対立した。安倍晴明に関する全ての話は、アフリカに住んでいたツチ族（土御門家）が、日本に伝え、自分の格を上げるために利用した。

■BC30世紀 「弓削道鏡誕生」

陰陽道の人物として知られる「弓削道鏡」もアフリカで生まれた。弓削（ゆげ）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ=ピユグマエイ=ユゲ（弓削）となる。

■BC2350年 サルゴン、初代アッカド王に即位 「アッカド帝国誕生」

■BC 2150年 「ゲシル・ボグドー誕生」

BC 2150年、グチウム族に王位を篡奪されると、アッカド人はアフリカに踏み入り、コンゴに移住した。この時、アッカド人は、バラク（プレークサウラー）と組み、「ゲシル・ボグドー」を生んだ。ゲシル・ボグドーの名の由来はプレークサウラーとピクトの組み合わせである。プレークサウラー+ピクト=クサウラ+ビグドー=ゲシル・ボグドーとなる。モンゴル国の英雄として知られるゲシル・ボグドーは、現アンゴラに「モンゴル王国」を築いた。

■BC 1020年 「第2次黙示録アルマゲドン」

■BC 1020年 「北イスラエル王国誕生」

「第2次アルマゲドン」により、モンゴル王国がナミブ砂漠、カラハリ砂漠と化すと、ガド族とアシェル族（アシル・ボグドー）は新しいイスラエル王国に移住した。

■BC 11世紀 「衛誕生」

インド人の顔をした彼らは、中国人と混合して「衛氏（ウェイ）」を形成した。衛の名の由来はヤクートである。ヤクート=ウェイクート=ウェイ（衛）となる。衛は、後に魯（ルー）、韓（ハン）と共にソマリアに入植し、ラハンウェイン族を形成している。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「オック誕生」

「フェニキア人の大航海時代/西方組」第1の拠点フランス南部である。ここには、アッカド人が入植を決めている。アキタニア、オックの名の由来はアッカドである。アッカド=オックド=オックとなる。

■BC 7世紀 「アケメネス家誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したマナセ族は、イランに移住した。マナセ族は、アッカド人と組んで「アケメネス家」を生んだ。アケメネスの名の由来はアッカドとマナセの組み合わせである。アッカド+マナセ=アッカマナセ=アケメネスとなる。アケメネス家は、後にダリウス大帝を輩出しているが、ダリウス大帝はタナトス（ミトラス教）に属していた。

■ B C 7 世紀 「熊襲誕生」「日向国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したガド族は、アシエル族と共に九州に入植した。この時に「熊襲」が生まれた。熊襲の名の由来はピュグマエイとアシエルの組み合わせである。ピュグマエイ+アシエル=グマアシェ=クマソ（熊襲）となる。また、ガド族は、単独で「日向国」を築いた。日向（ひゅうが）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ=ヒュウグマエイ=日向（ひゅうが）となる。更に、漢字表記の「日向」の由来はピュグマエイとマゴの組み合わせである。ピュグマエイ+マゴ=ピ（日）+ムカ（向）=日向となる。

■ B C 7 世紀 「神武の東征」

熊襲から分離したガド族は、日向国にやってきた天孫族と組み、先祖の故地である熊野国に移った。更に、ガド族と天孫族は大和国を経て、満州に入植した。この時に「イエマック」が生まれた。これが所謂「神武天皇の東征」である。ガド族は、神武天皇を生んだ3部族（ピュグマエイ、ティアマト、エウリュトス）のひとつである。

■ B C 3 3 0 年 「ペルシア人の大航海時代」

■ B C 3 3 0 年 「縣氏誕生」

「ペルシア人の大航海時代」に参加したアケメネス家は、日本に上陸して分裂した。アッカド人は「縣氏」を生んだ。縣の名の由来はアッカドである。アッカド=アカド=縣となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ヴァカタカ朝誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した縣氏は、熊襲武尊の残党と共にインドに移住した。彼らは「ヴァカタカ朝」を開いた。ヴァカタカの名の由来はアッカドとティカルの組み合わせである。アッカド+ティカル=アッカティカ=ヴァカタカとなる。

■AD500年 「岡田氏誕生」「芥川氏誕生」

ヴァカタカ朝が滅ぶと、インド人の顔をした縣氏は日本に帰還して現地人と交わり、「岡田氏」「芥川氏」を生んだ。岡田の名の由来はヴァカタカである。ヴァカタカ=アカタ=岡田となる。芥川の名の由来は「ヴァカタカの川」である。ヴァカタカ朝は、デカン高原のド真ん中、マハナジ川からキストナ川までの間を続けていた。つまり、ヴァカタカの川とは、マハナジ川とキストナ川のことである。

■AD531年 「マクリア人の大移動時代」

■AD531年 「マクリア王国誕生」

「マクリア人の大移動時代」に参加したマクリア人は、アフリカ大陸に至り、エジプトを通過した。そして、彼らはナイル上流域ヌビアにまで足を伸ばした。モンゴル人の顔をした安閑天皇の一族はヌビア人と混合し、「マクリア王国」を建設した。

■AD753年 「ヴォキル朝（ブルガリア帝国）誕生」

AD641年頃、ヌビアにイスラム教が伝えられると、マクリア人はヌビアを離れて中央アジアに移住した。ブルガリア帝国が建つと、ガド族はブルガリアに侵入し、「ヴォキル王朝」を開いた。ヴォキルの名の由来はピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグラ=ヴォキルとなる。この王朝は、AD762年まで続いた。

■AD825年 「クマン人誕生」

エクバードによるイングランド統一を機に、マーシア人がフォトラ（エフタル）を率いてイング

ランドを離れ、パンノニアに移住する。この時、マーシア人は安閑天皇の後裔マクリア人と合体し、「マジャール人」が誕生した。一方、天孫族とガド族は差別化のために「クマン人」を称した。クマンの名の由来は熊野国である。熊野＝クマノ＝クマンとなる。

■AD9??年 平将門生誕

■AD9??年 平将平生誕

■AD941年 「第1次ポリネシア人の大航海時代」

■AD941年 「トンガ誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加した平将門は、死んだと見せかけて縣氏、藤原純友、多治経明、平将平の氏族を率いて太平洋に移住を試みた。この時に、平将門はトンガを発見し、「天下」と命名した。この天下島は変遷を重ねて「トンガ」と呼ばれるようになる。

■AD941年 「マフダリ家誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加した平将平は、インド洋を横断してマフィア島に入植した。この時に「マフダリ家」が生まれた。マフダリの名の由来は「マフィアの平（タイラ）」である。マフィア+タイラ=マフタラ=マフダリとなる。

■AD997年 「コメトプル朝（ブルガリア帝国）誕生」

クマン人に参加していたヴォキル家は、再度、ブルガリアに侵入し、「コメトプル朝」を開いた。コメトプルの名の由来はクマンとトバルカインの組み合わせである。クマン+トバルカイン=クマトバル=コメトプルとなる。コメトプルの名から察するに、クマン人は、ロシアに住んでいたトバルカインと交流をしていた可能性がある。この王朝は、AD1018年まで続いた。

■AD1040年 「スワヒリ人の大移動時代」

■AD10??年 「コムネーノス家誕生」

コメトプル朝が滅ぶと、クマン人が分裂した。天孫族は「ヒメノ」を名乗り、ガド族は「コムネーノス」を名乗った。コムネーノスの名の由来は熊野とウラヌスの組み合わせである。クマノ+ウラヌス=クマノーヌス=コムネーノスとなる。

■AD1081年 アレクシオス・コムネーノス、ビザンツ皇帝に即位 「コムネーノス朝誕生」

AD1081年、アレクシオス・コムネーノス将軍がビザンツ皇帝ニケフォロス3世を倒し、「コムネーノス朝」を開いている。ヒメノは天孫族が主導し、コムネーノスはガド族が主導していた。

■AD11世紀 「第2次ポリネシア人の大航海時代」

■AD11世紀 「丹氏誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加したトンガ人は、平安時代末期の日本に帰還した。トンガ人は、トンガを由来に「丹氏」を称した。トンガ=タンガ=丹となる。丹氏は「丹党」を結成して「武蔵七党」に参加する。

■AD11世紀 「丹治氏誕生」

丹党を結成した丹氏と勅使河原氏は連合して「丹治氏」を生んだ。丹治の名の由来は丹氏と多治氏の組み合わせである。

■AD11世紀 「タンガニーカ誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加したトンガ人は、東アフリカに上陸した。この時に「タンガニーカ」が築かれた。タンガニーカの名の由来はトンガである。日本人の血を引くトンガ人は

、タンザニアで得た土地に「バガモヨ」「キサワレ」「ムクランガ」などと命名した。これらの地名は日本語が由来である。「バガモヨ（ばか者）」「キサワレ（きさまら）」「ムクランガ（わからんか）」となる。つまり、将門の子孫は、言葉が通じないタンザニア人に対し、頻繁に怒っていたのだろう。

■AD11世紀 「プトゥン人誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加したトンガ人は、「プトゥン人」を生んだ。プトゥンの名の由来は超古代にヴァルハラ王国を治めていたヴォドゥン（オーディーン）の名に因んでいる。しかも、トンガの名にもかかっている。ヴォドゥン=ポトゥン==プトゥンとなる。

■AD11世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD11世紀 「タイラー誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したプトゥン人は、ブリテン島に上陸して「タイラー」の名を生んだ。タイラーの名の由来は、平将門の平（タイラ）である。

■AD11世紀 「後藤氏誕生」「工藤氏誕生」「加藤氏誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加した縣氏は、縣を由来に「ゴドー」の姓を残した。アガタ=アガター=ゴドーとなる。その後、イングランドを発った縣氏は、フランスに移住した後、ヨーロッパを離れて西アフリカにまで足を伸ばした。現カメルーン辺りに上陸した縣氏は「コトー」の名を残している。更に、現カメルーンを発った縣氏は南アフリカを周航し、インド洋を越えて日本に戻ってきた。ヨーロッパ人、アフリカ人の顔を得た縣氏は、日本に上陸すると現地人と混合して「後藤」「工藤」「加藤」の名を生んだ。3つの名の由来はゴドー、或いはコトーである。

■AD11世紀 「生田氏誕生」「池田氏誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したユカタン人は、日本に上陸すると「生田氏」「池田氏」を生んだ。生田、池田の名の由来はユカタン半島である。ユカタン=イクタン=生田、池田となる。生田氏は「生田神社」を創建している。

■AD11世紀 「スワヒリ人の大移動時代」

■AD1130年 アブド・アルムーミンが初代アミールに即位 「アルモハード帝国誕生」

「スワヒリ人の大移動時代」に参加したマフダリ家は、アブド・アルムーミンを生んだ。彼が、初代アミールに即位して「アルモハード帝国」が誕生した。アルモハードの名の由来はアルと「マフィアート（マフィアの人）」の組み合わせである。アル+マフィアート=アルマフィアート=アルモハードとなる。アブド・アルムーミンは、アンダルシアを支配下に置き、ズイール朝、ハンマード朝を滅ぼした。

■AD12世紀 「コルシカ誕生」

AD12世紀、一部がアルモハード帝国を離れて、コルシカ島に移住した。コルシカの名の由来は日本語「殺す」である。コルシカ人もジェノヴァの支配に抵抗して蜂起をしばしば繰り返している。そんな中、コルシカ人はAD1769年にコルシカからマルセイユに移って「コルシカン・マフィア」を形成している。コルシカの人々は将門の末裔である。

■AD1269年 「マフィア誕生」

AD1269年にアルモハード朝がマリーヌ朝の台頭によって滅ぶと、マフダリ家はシチリア島に移った。この時に、「マフィア」の母体がシチリアに誕生した。マフィアの名の由来はマフィア島である。アルモハードの残党は、シチリアを掌握していたアンジュー家を追放するために「シチリアの晩鐘事件」を指揮し、アンジュー家の支配を弱体化した。

マフダリ家の子孫は、農地を管理するガベロットに転身し、マフィア組織の土台を形成した。シチリア・マフィアは、後にアメリカに移民し、AD1930年代から40年代にかけてラッキー・ルチアーノなどが登場し、ニューヨーク、シカゴに勢力を拡大させた。マフィアは、将平の末裔である。

■AD1381年 ワット・タイラーの乱

■AD1381年 「平岡氏誕生」「奥平氏誕生」

平将門の血を引くワット・タイラーは農民を指揮して「ワット・タイラーの乱」を指導したが、不発に終わった。これを機に、処刑に見せかけたワット・タイラーの一族郎党は、ブリテン島を脱出し、マヤを経て太平洋を横断した。一行は、プトゥン人の拠点トンガ島を通過して将門の故地、日本に上陸した。

イギリス人、マヤ人、ポリネシア人の血を引くワット・タイラーは日本人と混合して「平岡」「奥平」の名を生んだ。平岡の名の由来はタイラー（平）とアッカド（岡）の組み合わせであり、奥平はアッカド（奥）とタイラー（平）が反対になっている。奥平氏は、後に「児玉党」に参加している。

■AD1892年 芥川龍之介生誕

■AD1925年 三島由紀夫（平岡公威）生誕

■AD1945年 奥平剛士生誕 「日本赤軍誕生」

■AD1948年 スティーヴン・タイラー生誕 「エアロスミス誕生」

■AD1959年 ロザンナ・アーケット生誕

アーケットの名の由来はアッカドである。アッカド＝アーグアッド＝アーケットとなる。

■AD1964年 「タンザニア共和国誕生」

AD1964年、タンガニーカ人はザンジバル革命を指揮して「ザンジバル共和国」を建て、ジュリウス・ニエレレが汎アフリカ精神の下、「タンガニーカ・ザンジバル連合共和国」を建設した。その後、「タンガニーカ・ザンジバル連合共和国」は、改名して「タンザニア共和国」となった。

■AD1968年 パトリシア・アーケット生誕

◆賀茂氏（ゴメル）の歴史

■BC7千2百年 「ゴメル誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加した神武天皇の残党は、モンゴルからメソポタミアに移住して「ゴメル」を生んだ。ゴメルの名の由来はピュグマエイとエウリュトスの組み合わせである。ピュグマエイ+エウリュトス=グマエウリュ=ゴメルとなる。ティアマトがない以外は、ゴメルの名は神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）と同じ構成である。

■BC5千年 「天空神クマルビ誕生」「ゴモラ誕生」

ゴメルが、バルト海から来たセムの子アルパクシャデと組んで「最高神クマルビ」を祀った。クマルビの名の由来はゴメルとアルパクシャデの組み合わせである。ゴメル+アルパクシャデ=ゴメアルパ=クマルビとなる。ゴメルはカッパドキア周辺に「ゴモラ」を築いた。アルパクシャデは後にチャド方面に「ソドム」を築くが、「クマルビ」の名の由来によってソドム（アルパクシャデ）とゴモラ（ゴメル）は友好関係にあったことがわかる。

■BC32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「賀茂氏誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したゴメルは、日本に移住して出雲国を建てた。現地人と混合し「賀茂氏」を称した。賀茂の名の由来はゴメルである。ゴメル=ガモル=賀茂となる。賀茂氏は、クマルビを祀り、伝説の国ゴモラを建設した人々の子孫である。

■BC248年 「出雲国の大航海時代」

■BC248年 「カーマルーパ誕生」

「出雲国の大航海時代」に参加した賀茂氏は、日本を発ってインドに達すると「カーマルーパ」を築いた。カーマルーパの名の由来はクマルビである。クマルビ=クマルービ=カーマルーパとなる。

■BC248年 「巨摩誕生」

「出雲国の大航海時代」に参加した賀茂氏は、この後、すぐにインドからモンゴルに移ることを決意し、ミャンマーに立ち寄って、古のカイン族に出会い、彼らを船団に迎え入れた。モンゴルに辿り着く途中、彼らは甲斐国に立ち寄った。一部カイン族が「甲斐国」に残留を申し出たが、この時に賀茂の名を由来に「巨摩（こま）」の名が甲斐国に残された。巨摩の名の由来はゴメルである。ゴメル=ゴマル=巨摩となる。

■BC248年 「姑墨（グモ）誕生」

「出雲国の大航海時代」に参加した賀茂氏は、甲斐国から黒龍江に進入し、モンゴルに入植した。一方、一部の賀茂氏はタリム盆地に及んで「姑墨（グモ）」を建てた。姑墨の名の由来は賀茂である。かも=がも=姑墨（ぐも）となる。

■AD262年 「金氏誕生」「統一新羅樹立」

後漢の西域侵入を機に、姑墨がタリムを離れて朝鮮半島に移住した。彼らは「金氏（キム）」を称した。キム（金）の名の由来はグモ（姑墨）である。新羅に足場を得た金氏から、AD262年に味スウ尼師今が第13代新羅王に即位して「金氏王朝」を新羅に開いた。AD602年、第29代新羅王、武烈が朝鮮半島を統一して「統一新羅」を成立させた。

朝鮮語には「コマ」という言葉があるが、これは小人族ピュグマエイに由来している。ピュグマエイ=グマ=コマとなる。コマの意味は「小さい」であり、年長の者が年少の者に「ちびっこ」などの意味合いで用いることがある。これは金氏が朝鮮半島を統一した際にもたらされたものだろう。また日本でも、広島弁では小さい子供を「こま」と呼ぶ。広島だけでなく、その周辺地域

でも「こま」と呼ばれるなら、出雲国を建てた賀茂氏ももたらしたものでしょう。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「カーマルーパ復活」

「大和人の大航海時代」に参加した賀茂氏はジャワを発ち、安曇氏、吉備氏、道氏、縣氏、熊襲武尊と共にインドに移住した。賀茂氏は「クマルビ」の名を復活させて「カーマルーパ王国」を築いた。クマルビ＝クマルービ＝カーマルーパとなる。

■ A D 4 7 1 年 「鮮卑の大航海時代」

■ A D 4 7 1 年 「カーン王朝カラクムル誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加した姑墨は、慕容部（ムーロング）、乞伏部（キフ）と共にマヤに「カーン王朝カラクムル」を築いた。カーンの名の由来は乞伏部の祖キンブリ人から取り、カラクムルの名の由来はアングル人、姑墨、慕容部の組み合わせである。キンブリ＝カーンブリ＝カーンとなり、アングル＋グモ＋ムーロング＝グルグムロン＝カラクムルとなる。

■ A D 5 2 0 年 「マヤ人の大航海時代」

■ A D 5 2 0 年 「クメール人誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加した姑墨は、アングル人、ドルヒユ族を連れてカンボジアを目指した。姑墨は、アングル人と共にカンボジアに入植し、両者は現地人と混合し、両者は「クメール人」「アンコール人」を生んだ。クメールの名の由来はゴメルである。ゴメル＝ゴメール＝クメールとなる。

■ A D 8 0 2 年 「クメール王国誕生」

A D 7 8 0 年に金志良の乱が起きると、一部の金氏は朝鮮半島を脱出し、カンボジアに移住した。金氏は、アンコール人や祖を同じくするクメール人を統率し、「クメール王国」を築いた。クメール王国は、A D 1 4 3 1 年まで続いた。

■ A D 8 3 2 年 「スマトラ人の大航海時代」

■ A D 8 3 2 年 「三浦氏誕生」

「スマトラ人の大航海時代」に参加した金氏は、ジャワを発って日本に上陸した。彼らは、平忠光に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのが「三浦氏」の祖、三浦為通である。三浦の名の由来はゴメルと同じくピュグマエイと獣人エウリュトスの組み合わせである。ピュグマエイ+エウリュトス=マエイリュ=マエイリヤ=三浦（みうら）となる。

■ A D 9 2 9 年 「ジャワ人の大航海時代」

■ A D 9 2 9 年 「鎌倉氏誕生」

「ジャワ人の大航海時代」に参加したカーマルーパ人は、平忠道に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが、鎌倉章名である。鎌倉の名の由来は「アンコールから来たカーマルーパ」である。カーマルーパ+アンコール=カーマコール=鎌倉となる。

■ A D 9 3 5 年 「神氏誕生」「金刺氏誕生」

新羅が滅亡すると、金氏は朝鮮半島を後に諏訪国に移住した。金氏は2つに分離して氏族を形成した。1組目は金（キム）に似た日本語、神（かみ）を当て字して「神氏（じん）」を生んだ。2組目は「金」と女真（ジュシャン）を意味する「刺（さし）」の組み合わせで、「金刺氏」を形成した。この2つの氏族は、あまり知られていない地味な氏族と考えられているが、実際には国際的に大きな活躍をした。神氏は「シンガサリ王国」「シンガプール王国」を、金刺氏は「金朝」「アユタヤ朝」を築いている。

■ A D 1 0 世紀 「木村氏誕生」

アンコール人が勢力を伸張しはじめた時期に、クメール人はカンボジア王国を後にした。カンボジア人の顔をしたクメール人は、日本人と混合して「木村」の名を成した。木村の名の由来はクメールである。クメール＝クメラ＝木村となる。

■AD10世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD10世紀 「キャメロン誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したクメール人は、イングランドに上陸した。カンボジア人の顔をしたクメール人はイギリス人と混合して「キャメロン」の名を成した。キャメロンの名の由来はクメールである、クメール＝クメーロン＝キャメロンとなる。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1009年 「ギムプタス誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」に参加してリトアニアに移住した金氏からは「ギムプタス」が生まれた。ギムプタスの名の由来は金（キム）プタスである。リトアニア大公国を統治した王の一人である。

■AD1115年 「金朝誕生」

満州から来た「刀伊の賊」が、九州に侵攻した話を聞いて、金刺氏が諏訪国を出て満州に移住した。金刺氏は女真族を支配下に置いて「金朝」を開いた。金朝はチンギスを支援してモンゴル統一を援助したが、逆に成長著しいモンゴル軍に攻め込まれ、滅んでしまう。

■AD1222年 「シンガサリ王国誕生」

諏訪国を発ちインドネシアに移住した神氏は、朝鮮語で「神なら殺せる」を意味する「シンガサリ」を由来に「シンガサリ王国」を建てた。AD1293年、クディリ王家の残党の蜂起によ

って王国が滅ぶと、シンガサリ家はジャワを後にマレー半島に移住し、AD14世紀に「シンガプーラ王国」を建てた。

■AD1247年 「日本人町誕生」

日本仏教の連合軍にハメられた「宝知合戦」を機に、三浦氏は3組に分かれて日本を脱出した。1組目は東南アジア（ベトナム・カンボジア・フィリピン）に散って「日本人町」を建設した。

■AD1293年 「マジャパヒト王国誕生」

日本仏教の連合軍にハメられた「宝知合戦」を機に、三浦氏は3組に分かれて日本を脱出した。2組目はジャワ島に帰還して、AD1293年に「マジャパヒト王国」を建てた。マジャパヒトの名の由来は「真のジャワ人」である。真（マ）+ジャワ（ジャバ）+人（ヒト）=マジャパヒトとなる。

■AD13世紀 「マッラ朝誕生」

日本仏教の連合軍にハメられた「宝知合戦」を機に、三浦氏は3組に分かれて日本を脱出した。3組目はネパールに移住して、AD13世紀に「マッラ朝」を開いている。マッラの名の由来は三浦である。三浦=ミヤツラ=マッラとなる。

■AD13世紀 「スパンブリー国誕生」

AD1234年、王朝の滅亡を機に、金刺氏は、満州からタイに落ち延びて「ムアンスパンブリー」に居住し、AD13世紀に「スパンブリー国」を建てている。スパンブリーとはタイ語で「金の町」を意味している。

■AD1305年 「加茂氏誕生」「徳川家誕生」

パラマーラ朝が滅ぶと、カーマルーパはインドから日本に向かい、三河に上陸した。インド人の顔をした彼らは現地人と混合して「三河加茂氏」を形成した。その後、AD1542年、三河加茂氏は松平清康に接近して自身の血統を打ち立てる。この時に誕生したのが松平元康、後に天下

泰平を実現した「徳川家康」である。パラマール朝は、デカン高原の川を境に北インドを支配していた。つまり、徳川の名の由来は「デカンの川」である。デカン+川=デカ川=徳川となる。

■AD1314年 「ムザッファル朝誕生」

マジャパヒト王国とマッラ朝の一部三浦氏が連合してイランに移住した。三浦氏は、イランに「ムザッファル朝」を開いた。ムザッファルの名の由来はマジャパヒトとマッラの組み合わせである。マジャパヒト+マッラ=マジャパッラ=ムザッファルとなる。

■AD1314年 「村上水軍誕生」

東南アジア各地の三浦氏の末裔はシンガポールの神氏を連れて日本に帰還し、瀬戸内海に集結した。瀬戸内海に集結した三浦氏は神氏と組んで「村上氏」を称した。村上の名の由来は三浦と神の組み合わせである。三浦+神（かみ）=ミユラカミ=村上となる。村上水軍は、因島、来島、能島の3拠点をもっていたが、それぞれの名にも由来がある。

因島（いんのしま）のことを現地人は「いんとう」と呼ぶが、いんとう（インド）は、マジャパヒトの拠点インドネシアを意味している。同様に、来島（クル）の名は「釜山倭館」が建てられた高麗（ゴリョ）に由来し、能島（の）の名は「マッラ朝」の拠点ネパールに由来している。因島村上氏はジャワ島と瀬戸内海を往来し、来島村上氏は朝鮮半島と瀬戸内海を往来し、能島村上氏はネパールと瀬戸内海を往来していた。

■AD1314年 「マーレイ誕生」

神氏は、マレー半島にシンガプーラ王国を築いたが、一部は三浦氏と共に瀬戸内海に赴いて「村上氏」を築いた。一方、一部の神氏は、単独で瀬戸内海から太平洋を横断してマヤを経てブリテン島に至った。東南アジア人の顔をした彼らはイギリス人と混合して「マーレイ」を称した。マーレイの名の由来はマレーである。

■AD1351年 ラーマティーボディー1世、初代王に即位 「アユタヤ朝誕生」

スパンブリーの王統に属するラーマティーボディー1世は満州語で金を意味する「アルチュフ」を由来に「アユタヤ朝」を開いた。アルチュフ=アユチャファ=アユタヤとなる。アユタヤ朝には、「大坂の陣」の残党が大挙して押し寄せ、アユタヤ日本人町を築いてアユタヤ朝の傭兵な

どを務めた。しかし、オランダ東インド会社が勇敢な日本人武士を目の敵にし、アユタヤ王に指示して山田長政の暗殺、及び日本人町の焼き討ちなどを行った。

しかし、ほとんどの日本人はオランダ人の悪意をものともせず、当地アユタヤに留まり続けた。AD1733年にアユタヤ朝が滅ぶと、アユタヤ家はタイを離れて統一新羅の時代以来となる、朝鮮半島への帰還を果たした。この系統からは大韓民国大5代大統領の金大中、俳優の松田優作（金優作）、映画監督の金基督、アニメ監督の今敏が輩出されている。

■AD14世紀 「シンガプーラ王国誕生」

AD1293年、クディリ王家の残党の蜂起によって王国が滅ぶと、シンガサリ家はジャワを後にマレー半島に移住し、AD14世紀に「シンガプーラ王国」を建てた。シンガプーラの名の由来は「シンガサリ」と南アジアで土地を意味する「プール」の組み合わせである。つまり、シンガプーラとは、「シンガサリの領土」を意味している。シンガプーラの名は後に「シンガポール」の名の由来となる。シンガプーラ王国は、AD1603年に「アホム王国」の王位を篡奪し、AD1833年までアホム王国の支配を続けた。

■AD1542年 「徳川家康（松平元康）誕生」

AD1542年、三河加茂氏は松平清康に接近して自身の血統を打ち立てる。この時に誕生したのが松平元康、後に天下泰平を実現した「徳川家康」である。パラマール朝は、デカン高原の川を境に北インドを支配していた。つまり、徳川の名の由来は「デカンの川」である。デカン+川=デカ川=徳川となる。

■AD1600年 「江戸幕府誕生」

「国家安康」の陰謀は大谷が考案したものである。これにより、豊臣家にいちゃもんをつけ、悪者扱いしたうえで排除することができた。「江戸」の命名は、過去に出雲国を共同で建国したエドム人の名に由来している。賀茂氏の同盟者エドム人は、安曇氏（出雲）、アーズミー（インド）、江戸氏（武蔵国）と変遷を遂げている。

■AD1615年 「戦国武士の大航海時代」

■AD1632年 「青幫誕生」

「戦国武士の大航海時代」に参加した来島村上氏は、浄土真宗が推進した「海賊禁止令」によって日本を出ることを決意し、海外に新天地を求めた。来島村上氏は、大坂の陣の残党と共にアユタヤに上陸し、日本人町を築いた。だが、アユタヤ日本人町の焼き討ち事件が起きると、来島村上氏は中国組とアフリカ組の2手に分かれてアユタヤを去った。中国組は上海に渡って海運労働に従事していたが、やがて村上水軍を祖とする労働者が集団化し「青幫（チンパン）」が設立された。

■AD1632年 「チャンガミレ族誕生」

「戦国武士の大航海時代」に参加した来島村上氏は、大坂の陣の残党と共にアユタヤに上陸し、日本人町を築いた。だが、アユタヤ日本人町の焼き討ち事件が起きると、来島村上氏は中国組とアフリカ組の2手に分かれてアユタヤを去った。アフリカ組はジンバブエに進出して「チャンガミレ族」を称した。チャンガミレの名の由来は「シャムの三浦」である。シャムが三浦＝シャムガミレ＝チャンガミレとなる。

■AD1722年 ミール・カマルッディーン・ハーン、宰相に就任 「ニザーム藩国誕生」

AD1722年、カーマルーパ王族の系統に属するミール・カマルッディーン・ハーンがムガル皇帝から宰相の地位を得て「ニザーム藩国」を手中にした。カーマルーパ王国の残党が「ニザーム藩国」を築いた。カマルッディーンの名の由来はカーマルーパである。

■AD1748年 「ケマル家誕生」

AD1748年にジャング家に王位を篡奪されると、ニザーム王家はインドを離れて東西に移住した。西方組はオスマン・トルコ帝国治世下のアナトリア半島に上陸した。彼らは「ケマル」を称した。ケマルの名の由来はカーマルーパである。カーマルーパ＝ケマルーパ＝ケマルとなる。この系統からはムスタファ・ケマル・アタチュルクが輩出されている。

■AD1748年 「夏目氏誕生」

AD1748年にジャング家に王位を篡奪されると、ニザーム王家はインドを離れて東西に移住

した。東方組は、インドを離れて江戸幕府治世下の日本を目指した。インド人の顔をしたニザーム王家は現地人と混合して「夏目」を称した。夏目の名の由来はニザームである。ニザーム＝ニツァム＝夏目となる。この系統からは昭和の大文豪「夏目漱石」が輩出されている。

■AD18世紀 「カウリスマキ誕生」

謎のングミ人、ンデベレ人がチャンガミレの領地に侵入してくると、チャンガミレ族は再度、ジンバブエを離れた。彼らは、遠くバルト海を目指した。フィンランドに移住したチャンガミレ族からは「カウリスマキ」の名が生まれた。カウリスマキの名の由来は「クルシマキ（来島人）」である。クルシマキ＝クオルシマキ＝カウリスマキとなる。

■AD1867年 夏目漱石生誕

■AD1881年 ムスタファ・ケマル・アタチュルク生誕 「トルコ共和国誕生」

ムスタファ・ケマル・アタチュルクは、AD1923年に初代トルコ共和国大統領に就任し、「トルコ共和国」を建国している。こうなると、アタチュルクと漱石は家族ということになるが、そういえば、アタチュルクと漱石の顔は似ていないこともない。

■AD1912年 金日成生誕 「北朝鮮人民民主主義共和国誕生」

東アジアの共産主義、共産党は、リトアニア大公国（唐、新羅の王族）の残党が築いたものである。つまり、金日成（キム・イルソン）はギムプタスの子孫である。

■AD1940年 フランク・ザッパ生誕 「マザーズ・オブ・インヴェンション誕生」

三浦氏（マジャパヒト王国）が築いたムザッファルの人々は、ヨーロッパに移住し「ザッパ」の名を生んでいる。ムザッファル＝ムザッパル＝ザッパとなる。ザッパの名からはフランク・ザッパが生まれている。

■AD1925年 金大中生誕

■AD1927年 金泳三生誕

■AD1941年 金正日生誕

■AD1944年 横山やすし（木村雄二）生誕

■AD1954年 ジェームズ・キャメロン生誕

■AD1949年 金優作生誕 「松田優作誕生」

■AD1956年 デイヴ・マーレイ生誕 「アイアン・メイデン誕生」

■AD1957年 アキ・カウリスマキ生誕

■AD1963年 今敏生誕

■AD1984年 金正恩生誕

◆児玉氏（コトス）の歴史

■30万年前 「ヘカトンケイル誕生」「コトス誕生」

「カオスの大移動時代」「第2次キブウカの大移動時代」を介して異なる人類がオーストラリアに到来し、混血時代が始まると、ピュグマエイは、「ヘカトンケイル」「コトス」を生んだ。

ヘカトンケイルの名の由来はベカタン、キャラの組み合わせであり、コットスの名の由来はブカット+エウリュトスの組み合わせである。ベカタン+キャラ=ベカタンキラー=ヘカトンケイルとなり、ブカット+エウリュトス=カットス=コットスとなる。コットスは、バントゥー族（ピグミー族の愛嬌のある顔と獣人の身体能力）の姿をしていた。当時のコットスの姿をした人々が未だに東南アジア、フィリピン辺りに住んでいる。好奇心の強い人々は、彼らを見て「なぜアフリカ人が東南アジアにいるんだ？」と不思議がっている。

■ 30万年前 「事代主神誕生」

ウラヌスと意気投合したコットスは、日本に移住した。彼らは、ティアマトの国ヤマトに入植して「事代主神」を祀った。コトシロヌシの名の由来はコットス、ウラヌスの組み合わせである。コットス+ウラヌス=コットスラヌス=コトシロヌシとなる。事代主神は、ボブ・サップ、またはマイク・タイソンのような姿をしていた。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ティタン神族誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したコットスは、ヘカトンケイルに属し、ティタン神族にも参加した。

■ 4万年前 「第2次ウラヌスの大移動時代」

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「バントゥー族誕生」

「ギガントマキア」に参加したコットスは、ゼウスに敗北すると、クロノスの理不尽な支配を嫌い、アブク、ムワリの故地であるアフリカを目指した。現在、彼らは、バントゥー族（中でも体格が良い人々）としてアフリカ全域に暮らしている。バントゥー族は、ピュグマエイの愛嬌のある顔・陽気な性格・リズム感と、獣人のゴツい体格・高い身体能力を受け継いでいる。

■ 4 万年前 「カドモス誕生」

「ギガントマキア」に参加したコトスは、ゼウスに敗北すると、クロノスの理不尽な支配を嫌い、新天地を求めて台湾を目指した。コトスは、ミマースと連合体を組んだ。この時にカドモスが生まれた。カドモスの名の由来はコトスとミマースの組み合わせである。コトス＋ミマース＝コトマース＝カドモスとなる。カドモスは、アゲノールのもとで、ポイニクス、キリクス、エウロペと共にテュロス王国（オーストラリア東南部）を支配した。

■ 1 万 3 千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1 万 3 千年前 「初代テーバイ王国誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したカドモスは、東南アジアを拠点にアゲノールが治めるテュロス（タルタロス）と交易を行っていた。しかし、大地殻変動により、エウローペーがヨーロッパから西アフリカに移住すると、カドモスは、これに倣って西アフリカに移った。エウローペーが築いたヨルバに身を寄せたカドモスは、そこから更にニジェール河を遡り、緑豊かだったサハラに入植し、科学の種族トバルカインと共に王国を築いた。この時に「テーバイ」が生まれた。

■ B C 3 2 世紀 「第 2 代テーバイ王国誕生」

「インダス文明」にも名前があった。その名は「テーバイ」である。テーバイの名の由来は「デーヴァ（トバルカイン）」である。ソドムとゴモラを機に、サハラを捨てたトバルカインは、インダスに移住して第二テーバイ王国を建設した。この時、カドモスの血統が引き続き、テーバイの王族として統治を任せられた。カドモスは、善神デーヴァと呼ばれたトバルカインと素晴らしい時を満喫した。しかし、テーバイ王国の栄光は、復讐心を原動力としている夜叉・羅刹（能登族・ダナーン人）たちの乱入によって終焉を迎えた。

■ B C 1 0 2 7 年 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「テーバイ誕生」

「マハーバーラタ戦争」によって荒廃に帰した故地を後に、カドモスは、ギリシアに移住して改めて「テーバイ」を建設した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「カトマンズ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカドモスは、ガンジス流域からネパール方面に進出し、「カトマンズ」を建設した。カトマンズの名の由来はカドモスである。カドモス=カドモンズ=カトマンズとなる。

■BC5世紀 「門真誕生」

カドモス族は「門真」を築いた。門真の名の由来はカドモスである。カドモス=カドマス=門真となる。「門松」の由来もカドモスかもしれない。

■BC5世紀 「児玉氏誕生」「多摩誕生」

ペー族と共に摂津を発ったカトマンズ人は、同盟者であるミマスが築いた武蔵国が位置する関東地方に入植した。彼らは、現地人と混合して「児玉氏」を形成した。更に、彼らは得た拠点を「多摩」と命名した。児玉、多摩の名の由来はカトマンズである。モーゼス=モセス=武蔵となり、カトマンズ=コタマンズ=児玉=多摩となる。

■AD10世紀 「角田氏誕生」

門真の民（カドモス族）が相模国に移住し、東京周辺を「武蔵野」と命名した。カドモスは「カド」に因んで「角田（かどた）」の名を成したが、角田の漢字表記のまま、読みだけの変遷を繰り返して「かくた」「つのだ」「すみだ」などの名を生んだ。

■ A D 1 1 世紀 「有道氏誕生」「桂氏誕生」

児玉党に参加した四方田氏、庄氏、本庄氏の詳細は別項に記しているのので割愛したい。「有道氏」の祖は、アルメニア人である。A D 1 0 4 5 年、セルジューク軍がアルメニアに侵攻すると、これを機に、アルメニア人はシルクロードを渡って日本に移住した。有道の名の由来は「アルメニアの道」である。つまり、彼らはシルクロードイを経たことを示している。プラティハーラ朝が滅ぶと、カトマンズの人々が彼らと共に日本に移住した。ネパール人の顔をした彼らは有道惟能に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「児玉氏」の祖、児玉惟行である。児玉の名の由来はカトマンズである。カトマンズ=コダマンズ=児玉となる。この系統からは児玉源太郎が輩出されている。また、「桂氏」の祖は、カタール人である。カタール=カチャール=桂となる。

■ A D 1 1 世紀 「栗栖氏誕生」「鳴瀬氏誕生」「端氏誕生」「西氏誕生」

A D 1 0 6 6 年、ノルマン人がブリテン島に侵攻すると、「大和人の大航海時代」を経てブリテン島に入植した日本人の子孫、クリス、ニルス、ダニエルのイギリス人一族がイングランドを脱出して太平洋を横断してはるばる日本に帰還した。この時に、ニースの人々が参加していた。白人の姿をした一行は日本人と混合して「栗栖氏」「鳴瀬氏」「端氏」「西氏」を形成した。端の名の由来はダニエルの愛称ダンであり、西の名の由来はニースである。当時、フランク王国領であったニースは神聖ローマ帝国領になった。そのため、ニースの人々は地中海を脱出して日本に移住した。こうして見ると、「児玉党」はアルメニア人、ネパール人、ジャワ人、アラビア人、スペイン人、イギリス人で構成されていたことになる。

■ A D 1 8 5 2 年 児玉源太郎生誕

■ A D 1 9 1 1 年 児玉誉士夫生誕

児玉誉志夫の本名は山田だが、自分がコットス、或いはカドモスの血統であることを知り「児玉」に改名したと考えられる。

■ A D 1 9 3 3 年 児玉清生誕

■AD1942年 モハメド・アリ（カシアス・クレイJr）生誕

■AD1950年 スティーヴィー・ワンダー生誕

■AD1958年 マイケル・ジャクソン生誕

■AD1958年 プリンス（プリンス・ロジャー・ネルソン）生誕

■AD1961年 カール・ルイス生誕

■AD1961年 エディ・マーフィ生誕

■AD1963年 ホイットニー・ヒューストン生誕

■AD1966年 マイク・タイソン生誕

■AD1967年 テディ・ライリー生誕 「ガイ誕生」

■AD1968年 ウィル・スミス生誕

■AD1971年 2パック生誕

■AD1973年 ボブ・サップ生誕

◆百済（バクトリア）の歴史

■30万年前 「ブカット族誕生」「ベカタン族誕生」

「カオスの大移動時代」「第2次キブウカの大移動時代」を介して異なる人類がオーストラリアに到来し、混血時代が始まると、ピュグマエイはエウドーラーと意気投合し、連合した。この時に「ブカット族」「ベカタン族」がパプアに生まれた。ブカットの名の由来はピュグマエイとエウドーラーの組み合わせであり、ベカタンの名の由来はブカットである。ピュグマエイ+エウドーラー=ピュグウドー=ブカットとなり、ブカット=ブカタン=ベカタンとなる。このブカットの名は「ピクト」の語源でもある。

■4万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■4万年前 「ピクト人誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したブカット族、ベカタン族はブリテン島に辿り着いた。しかし、氷結を免れていたブリテン島南部にハタミ人がいたため、ブ厚い氷河に覆われたスコットランドに拠点を築き、エスキモーのような暮らしを始めた。彼らは当地を「ピクトランド」と呼んだ。ピクトの名の由来はブカット、或いはベカタンである。ブカット=ブカト=ピクトとなる。この時に、彼らは、グリーンランド、アイスランドに古来から伝わる小人の伝説を生んだ。イグルーを初めて建造したのも彼らだと考えられる。

■4万年前 「ヘカテ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」のピクト人は、氷上のピクトランドから陸地剥き出しのロンドン地域に移住し、「ヘカテ」を生んだ。ヘカテの名の由来はピクトと同じ、ピュグマエイとエウドーラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドーラー=ピュグドローラー=ピュグド=ヘカテとなる。ヘカテは「モルモー」という魔物を従えていたが、モルモーはピュグマエイの祖モリモのことである。

■BC5千年 「ヘクトル誕生」

ブリテン島からアイルランドに渡ったヘカテは、デリーに「ヘクトル」を生んだ。ヘクトルの名の由来はピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ヒュクトラ=ヘクトルとなる。神話では、「トロイア戦争」でアキレウスに殺されている。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「バクトリア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したヘクトルの残党は、中央アジアに入植し「バクトリア」を築いた。バクトリアの名の由来はピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ヒュクトリア=バクトリアとなる。

■BC 250年 ディオドトス1世、初代王に即位 「バクトリア王国誕生」

ピクト人の子孫であるバクトリア人は、BC 250年、セレウコス朝から独立して「バクトリア王国」を築いている。バクトリアの名の由来はピクトと同じく、ピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ピクトリア=バクトリアとなる。

■BC 139年 「カタール誕生」

王国が滅ぶと、バクトリア人はアラビア半島に移住した。彼らは「カタール」を築いた。カタールの名の由来はバクトリアである。バクトリア=バクトーリア=クターリア=カタールとなる。

■AD年 「百済（前身）誕生」

サーサーン朝がアラビアを攻撃すると、カタールの人々はアラビア半島を離れて朝鮮半島に入植した。メキシコから来たケツアルコアトル（フォトラ）と連合すると、「百済」を生んだ。クダ

ラの名の由来はケツアルコアトルとバクトリアの両方であり、ペクチェの名の由来はヘカテである。バクトリア＝バクダリア＝クダラとなり、ヘカテ＝ヘカチェ＝ペクチェとなる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ベック誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した百済人は、遅れて「大和人の大航海時代」の後を追い、マヤを通過してブリテン島に移住した。彼らは、現地人と混合して「ベック（B E C K）」の名を生んだ。ベックの名の由来はペクチェ、或いはヘカテである。ペクチェ＝ベックチェ＝ベックとなる。

■ A D 3 4 6 年 「百済誕生」

「大和人の大航海時代」に参加しなかった百済の人々は、朝鮮半島に「百済」を築いた。

■ A D 4 7 5 年 朝鮮半島からキダーラに移住

高句麗が百済の首都漢城を陥落させると、これを機に一部の百済人が朝鮮半島を脱出し、名前が似ていると言うことで、ナパタエ人（ナフタリ族）が築いたキダーラ朝に移住した。

■ A D 6 6 3 年 「カタリ派誕生」

キダーラ朝が A D 5 0 0 年に滅ぶと、キダーラ人はフランスに移り、キリスト教徒になった。しかし、人食い人種タナトスの団体クリュニー会、シトー会などが仕切るカトリックに嫌悪を覚えたキダーラ人は独自のキリスト教を切り拓いた。それが「カタリ派」である。カタリの名の由来はバクトリアである。バクトリア＝バカタリア＝カタリとなる。

また、A D 6 6 3 年、新羅と唐の連合軍によって百済が滅ぶと、同盟者である百済人はカタリ派の下に亡命し、カタリ派に参加した。A D 1 0 1 7 年、タナトスのカトリックに発見されたカタリ派は異端の印を押され、受難の道を歩むことになる。

■AD1042年 「クディリ王国誕生」

AD1017年、タナトスのカトリックに発見されたカタリ派は異端の印を押され、受難の道を歩むことになる。百済人はキダラ人と袂を分かち、いち早くカタリ派を抜けて、フランスを後にジャワ島に入植した。フランス人の顔をした彼らは現地人と混合して、初代王サマラヴィジャヤを輩出し「クディリ王国」を建設した。クディリの名の由来は百済である。クダラ＝クディ＝クディリとなる。

■AD1222年 「クティ誕生」

新羅の系統の「シンガサリ王国」がジャワ島に台頭すると、クディリ王家はジャワ島を後に、一部がベンガルに、一部はピグミーの故地である遠くコンゴの地に落ち延びた。ジャワ人の顔をしたクディリ家は、アフリカ人と混合して「クティ」の名を成した。クティの名の由来はクディリである。この系統からはミュージシャンのフェラ・クティが輩出されている。

■AD1482年 「香取氏誕生」

クリュニー会に指揮されたポルトガル人がコンゴに上陸すると、これを嫌ったクティの人々はナイジェリアに逃亡し、一部はアフリカ大陸を離れて日本に移住した。コンゴ人の顔をしたクティの人々は、大中臣氏に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に「香取氏」が誕生した。香取の名の由来はクディリである。

■AD1835年 「福澤諭吉誕生」

イギリス人ベックの一族は、2度に渡って日本を訪れている。1度目は、「薔薇戦争」を機にイギリスを離れ、戦国時代の日本に上陸した。信濃国に移住し、「信濃村上氏」の氏族に参加したベックは「福沢氏」を称した。福沢の名の由来はベックと諏訪の組み合わせである。ベック＋諏訪＝ベック（福）＋諏訪（沢）＝福沢となる。

2度目は、別のイギリス人ベックの一族が、非人間的な産業革命を嫌ってイギリスを後にし、「大和人の大航海時代」の子孫であるイギリス人たちが築いた「洪門」がある東アジアを訪れた。その後、先祖の故地である朝鮮半島にしばらく居住していたベックの一族は儒教を体得し、その後豊前国に渡って先発隊が築いた「福沢」の名を名乗り、「福澤諭吉」を生んだ。

■AD1859年 「金光教誕生」

AD1859年、香取家に生まれて「赤沢」に改姓した赤沢文治が現岡山県に「金光教」を創始している。彼らが祀る「金光大神（こんこうたいじん）」の名の由来はコンゴである。コンゴ＝コンゴ＝金光（こんこう）となる。赤沢の名も、ピグミー族に属するアカ族の名に因んでいる可能性がある。

■AD1916年 グレゴリー・ペック生誕

■AD1938年 フェラ・クティ生誕

■AD1944年 ジェフ・ベック生誕 「ジェフ・ベック・グループ誕生」

ムワリの歴史

◆毛利氏（ムワリ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ムワリ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したアブクは、現ジンバブエに移住して「ムワリ」を、現レソトに移住して「モリモ」を生んだ。その後、モリモはボツワナに「モディモ」を生んだ。

■200万年前 「モリモの大移動時代」

■200万年前 「パグ族誕生」「ムユ族誕生」

「モリモの大移動時代」に参加したアブクとムワリは、チッタゴンからマレー、インドネシア、パプアに四散した。アブクはパプアに「パグ族」を残し、ムワリもパプアに「ムユ族」を残している。永年の時を経て彼らはパプア人に吸収されたが、当初は小人族だったと考えられる。パグの名の由来はアブクであり、ムユの名の由来はムワリである。両者はピュグマエイ（ピグミー）の前身である。パグ+ムユ=パグムユイ=ピュグマエイとなる。

■30万年前 「メーロポシス誕生」

メーロポシスの名の由来はムワリとパシスの組み合わせである。ムワリ+パシス=ムアリパシス=メーロポシスとなる。その後、メーロポシスは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■30万年前 「モルディブ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したメーロポシスは、モルディブ諸島に入植した。モルディブの名の由来はムワリとトバルカインの組み合わせである。ムワリ+トバルカイン=ムワリトバ=モルディブとなる。しかし、トバルカインの登場はもっと後であるため、当時はモルディブではなく、ただ「ムワリ」と呼ばれていた可能性がある。

■ 4 万年前 「第 1 次アルゴス号の大航海時代」

■ 4 万年前 鶴（ゲラノス）と戦う

「第 1 次アルゴス号の大航海時代」に参加したメーロポシスは、パプアに帰還した。その後、クロノスはゼウスに敗北すると、パプア・ニューギニアに落ち延びて「ダニ族」となった。しかし、ピュグマエイは故地にやってきたクロノスに怒りをあらわにし、何度も戦闘を挑んだ。当時のパプアニューギニアは「ペガサス」と呼ばれていた。アブクとムシシの国という意味だ。アブク+ムシシ=ブクシシ=プグシシ=ペガサスとなる。

ホメロスは、ピュグマエイについて書き残している。「小人族である彼らは、鶴と戦っていた。鶴は毎年略奪に訪れるため、毎年春になると、小人族は矢を携え、羊に乗って大集団を成し、鶴の雛や卵を殺しに進軍する」という。ところで、この意味ありげな「鶴」とは何を意味するのだろうか？疑問に思ったときは、ギリシア語で「鶴」を何と呼ぶのか知ることだ。何の意味も無く鶴と名づけたりはしないからだ。

しかして、鶴はギリシア語でゲラノスである。「ゲラノスってどこかで聞いたことあるな。どこで聞いたかな。クロノスだ！」ということで、ゲラノス（鶴）とは、クロノスのことを意味していると考えて良い。つまり、ピュグマエイが戦っていた「鶴」とは、人喰い人種のダニ族のことである。小人族と呼ばれたピュグマエイは、凶悪な新参者であるダニ族を嫌い、頻繁に戦火を交えていた勇敢な人々だったのだ。

■ 4 万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4 万年前 「尾（ウェイ）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、アフリカに上陸し、湖水地方に「尾」を生んだ。彼らは、「東方青龍」の建設に参加した。尾（ウェイ）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ=ピュグアエイ=ウェイとなる。

■ 4 万年前 「ピ誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、アジスアベベに「ピ」を生んだ。彼らは、「西方白虎」の建設に参加した。ピの名の由来はピュグマエイである。

■ 4 万年前 「翼（イー）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、現スワジに入植し「翼」を生んだ。彼らは、「南方朱雀」の建設に参加した。翼（イー）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグマエイー＝イーとなる。

■ 4 万年前 「危（ウェイ）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したピクト人は、現ケニアに入植し「危」を生んだ。彼らは「北方玄武」の建設に参加した。危（ウェイ）の名の由来はピュグマエイである。ピュグマエイ＝ピュグマウェイ＝ウェイとなる。

■ 3 万年前 「ムプティ族誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したムワリは、故地であるアフリカに帰還し、現在知られているピグミー族の母体を築いた。この時にアブクの系統からは「バカ族」「アカ族」が生まれた。一方、ムワリの系統からは「ムプティ族」が生まれた。ムプティの名の由来はムワリとエウドーラーの組み合わせである。ムワリ＋エウドーラー＝ムワド＝ムハト＝ムプティとなる。

■ 1 万 3 千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ B C 7 千年 「神々の集団アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千年前 「マウリ人誕生」

「デウカリオンの大航海時代」を経て、モルディブ諸島からメソポタミアに来ていたムワリは、次に「アヌンナキの大移動時代」に参加してきたアフリカに移住した。彼らは現地人と混合し、「マウリ人」となる。マウリの名の由来はムワリである。ムワリ＝マワリ＝マウリとなる。

■ B C 7 世紀 「ピグミー族の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「マプーチェ族誕生」

「ピグミー族の大航海時代」に参加したバカ族、ムプティ族は、コンゴから南アメリカに上陸し、ラプラタ地域に入植した。その後、バカ族はラ・プラタ地域を去って太平洋を横断し、故地である東南アジアを目指して、最終的にガンジス流域に入植している。一方、ムプティ族は現地人と混合して「マプーチェ族」を成した。マプーチェの名の由来はムプティである。ムプティ＝ムプーティ＝マプーチェとなる。

■ B C 7 世紀 「サンガ誕生」「上座部仏教誕生」

「ピグミー族の大航海時代」に参加したバカ族・ムプティ族は、ガンジス流域に移住した。仏陀と出会ったサンガは、サトゥルヌスの種族であるアーナンダと袂を分かち、自身の「上座部仏教」を設立した。あらゆる面で底が浅い、俗物の集団である日本仏教は、一流の職人による彫刻、建築物、仏像、金細工で飾り付けて無い中身を隠しているが、上座部仏教は仏陀の生活を見習って質素を旨としている。そのため、彼らは小乗仏教と呼ばれて日本仏教などの大乘仏教から嘲られている。サンガの名の由来はサンガリオスである。

■ B C 3 1 7 年 チャンドラグプタ、マウリヤ朝初代王に即位 「マウリヤ朝誕生」

「ポエニ戦争」を機に、北アフリカを離れたマウリ人はインドに進出した。マガダ王国に侵入したマウリ人からは、サグバタの系統であるチャンドラグプタと連合して「マウリア朝」を開いた。マウリアの名の由来はマワリである。マウリ＝マウリアとなる。チャンドラグプタは、殷・能登族に属するサトゥルヌスの子孫であるダナナンダ王が支配するナンダ朝を滅ぼし、「マウリヤ朝」を開いた。しかし、能登族に属するジャイナ教に帰依したチャンドラグプタは、苦行に打ち込んで餓死したとされている。

■BC317年 「馬氏誕生」

「ポエニ戦争」を機に、北アフリカを離れたマウリ人はインドに進出した。その後、一部はインドから更に中国に進出した。北アフリカ人の顔をしたマウリ人は、現地人と混合して「馬氏（マー）」を成した。馬（マー）の名の由来はマウリである。この系統からは鄭和が輩出されている。

■BC268年 アショーカ、マウリヤ朝第3代王に即位

アショーカ王は、「カリंगा戦争」でカリंगा国を滅ぼし、多くのバラモンを殺害した。バラモンが有害であることを知っていたアショーカ王は、バラモンの根絶を目指していた。だが、狡猾なバラモンは、アショーカがバラモンを大量に殺害した事実を逆手に取り、罪悪感を刺激して、アショーカ王を思い通りに動かすことに成功した。罪悪感は人生の足かせであることを能登族は知っていた。ことあるごとに罪を刺激し続ければ（罪がない時は罪を作る）、どんなに強い者でも、ゴミのようなタナトスの言いなりになるのだ。

彼らは、アショーカ王に命じて「法（ダルマ）の政治」を宣言させた。ダルマの内容には、不殺生、正しい人間関係を保つこと、父母に従順であること、礼儀正しくあること、年長者を敬うこと、奴隷や貧民を虐待しないこと、バラモンを尊敬すること、布施を怠らないことなどが明記されていた。これらに違反すると、違反者は、ドルイド教のように不敬者として周囲から無視され、自滅していった。

■BC180年 「モロ誕生」

BC180年、マウリア朝が滅ぶと、マウリア人はガンジス流域からフィリピンに渡って「モロ」を築き、そこから更に冒険に出た人々は「ニュージーランド」を発見する。モロの名の由来はマウリアである。マウリア＝マウラ＝モロとなる。

■BC180年 「マオリ族誕生」

インド人の顔をしたマウリア人は、人跡未踏の地ニュージーランドに人類として初の上陸を果たした（科学の種族は知っていた可能性もあるが）、彼らは「マオリ」を称した。マオリの名の由来はマウリアである。マウリア＝マウリ＝マオリとなる。つまり、巨鳥モアを絶滅させたのはマウリア朝だったということになる。また、マオリ族は近世に人喰い人種として恐れられた。だが、ニュージーランドで実際に人々を虐殺して食べていたのは、パプアから移住してきたダニ族で

ある。

■AD470年 「マイトラカ朝誕生」

ゴート族、フン族が乱入してきたため、トラキア人はバルカン半島を離れて、グジャラートに居つき、ニュージーランドからインドに来ていたマオリ族と連合して「マイトラカ帝国」を建国した。マイトラカの名の由来はマオリとトラキアの組み合わせである。マオリ+トラキア=マオトラカ=マイトラカとなる。マオリ族にとっては、全インドを支配下に置いた「マウリア朝」の再興だった。

■AD776年 「ワリ帝国誕生」

トラキア人と組んでいたマイトラカ朝が滅ぶと、マオリ族は、インドを離れてペルーに移住している。ワルメイ川のエラム人は、インドから来たマオリ族と組み、古代ペルーの地に「ワリ帝国」を打ち建てている。ワリの名の由来はムワリ、或いはマオリである。マオリ=マワリ=ワリとなる。

■AD8世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■AD12世紀 「細川氏誕生」「長谷川氏誕生」

インカ人との抗争を機に、マプーチェ族がパタゴニアを発ち、アリューシャン列島を経て日本に移住した。まず、三河国に立ち寄ったマプーチェ族は現地人と混合して「細川氏」を形成した。更に三河国から離れて大和国に移住したマプーチェ族は現地人と混合して「長谷川氏」を形成した。細川、長谷川の名の由来はマプーチェの川である。マプーチェ+川=プーチェ川=細川、長谷川となる。「マプーチェの川」とはラプラタ河のことである。この系統からは「応仁の乱」の口火を切った細川勝元、「天文法華の乱」の細川晴元、「本能寺の変」に誘われた細川幽斎、信長・秀吉に仕えた長谷川宗仁など多数の武将が輩出されている。

■AD1202年 大江季光生誕 「毛利氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したワリ帝国のマオリ族は、房総半島に上陸し、日本人と混合

した。その後、エラム人は「有馬氏」を称し、「波多美氏」を称したハタミ人、「毛利氏」を称したマオリ族と共に北九州に向かった。マオリ族は大江氏に接近し、自身の血統を打ち立てた。そのときに誕生したのが大江季光である。この大江季光が毛利を名乗り「毛利氏」が誕生した。毛利の名の由来はマウリ、或いはマオリである。

■ A D 1 3 年 毛利経光生誕

毛利経光は越後国に南条館を領有していたが、四男の時親に安芸国高田郡吉田荘を分与して分家を建てた。室町時代、毛利氏は有力な国人領主として勢力を伸張し、山名氏、大内氏の家臣として繁栄した。

■ A D 1 3 7 1 年 鄭和生誕 「鄭和の大航海時代」

鄭和の本名は「馬氏（マー）」である。つまり、彼はマウリ人の子孫である。そのため、故地への帰還に関心があった鄭和は、大航海時代を敢行してアラビア半島、東アフリカにまで航海を行った。

■ A D 1 4 0 5 年 鄭和、第1次大航海時代

永楽帝の命により、鄭和は全長42丈余りの大船62隻、乗組員総数2万7800名からなる大艦隊を組織した。ベトナム、ジャワ、マレー半島、セイロン島、カルカッタへと2年かけて到達した。

■ A D 1 4 0 7 年 鄭和、第2次大航海時代

■ A D 1 4 0 9 年 鄭和、第3次大航海時代

■ A D 1 4 1 3 年 鄭和、第4次大航海時代

第4次大航海時代では、鄭和の艦隊は、東南アジア、インドを抜けてペルシア湾、アラビア半島にたどり着き、ティムール朝、ラスール朝と交流した。

■ A D 1 4 1 7 年 鄭和、第 5 次大航海時代

第 5 次大航海時代では、鄭和の艦隊は、スワヒリ文明の中心地だったマリンディに到達した。この時、鄭和はキリン、サイ、ライオン、ヒョウ、ダチョウ、シマウマなどを中国に連れて帰った。

■ A D 1 4 2 1 年 鄭和、第 6 次大航海時代

■ A D 1 4 3 0 年 鄭和、第 7 次大航海時代

永楽帝が死去し、子息の洪熙帝が王位に就くと、大規模な外征中止を布告した。しかし、1 年後に洪熙帝が死去すると、子息の宣徳帝は 7 回目の航海を計画し、鄭和にその指揮を命じた。この時、鄭和は東アフリカ、南アラビア、メッカを巡り、A D 1 4 3 3 年に帰還した。

■ A D 1 4 3 3 年 「チェワ族誕生」

A D 1 4 3 3 年に帰国した鄭和は、程なくして死んだと伝えられている。しかし、鄭和は死んだと見せかけて、兼ねてから魅了されていたアフリカの地へと旅立つ。これが片道切符となる第 8 次大航海時代である。この最後の航海の時に、鄭和はマレーに立ち寄り、ブラウ・マレー人を船団に迎えた。ブラウ・マレー人は故地であるマラウィに帰還し、鄭和もマラウィを終の棲家に決めた。中国人の顔をした鄭和は、現地人と混合して「チェワ族」を称した。チェワの名の由来は鄭和（チョンファ）である。チョンファ＝チェンファ＝チェワとなる。また、東南アジア人の顔をしたブラウ・マレー人は祖を同じくするマラウィ人と合流し、A D 1 6 世紀に「マラビ帝国」を建てた。

■ A D 1 4 9 7 年 毛利元就生誕

■ A D 1 4 9 8 年 「順朝樹立」

A D 1 4 6 4 年、ガオ帝国が滅び、A D 1 4 9 0 年にはポルトガル大布教団がコンゴを訪れ、A

D 1 4 9 8 年にはマラビ帝国が位置するスワヒリ地域にポルトガルが訪れている。鄭和の子孫、チェワ族はガオの張氏、コンゴ人（孔氏）、そしてケニアのルオ族を誘って中国への帰還を打診した。卑しいタナトスに指揮されたポルトガル人に嫌気が差した彼らは、喜んで船団に参加した。アフリカ人の顔をした一行は、中国人と交わってそれぞれの姓を復活させた。この時、ガオの張氏からは「張献忠」、コンゴの孔氏からは「孔有徳」、チェワの鄭氏からは「鄭芝龍」、ルオ族からは「李自成」が輩出された。また、コンゴ人は新規に「耽（ゲング）」の姓を作り、ここからは「耽仲明」が輩出された。

■ A D 1 5 2 1 年 「諸星氏誕生」

アステカ帝国の人身御供の種族（大谷）が日本に帰還する途上、彼らはメラネシアで、反自然の種族に属するメラネシア人を召使として連れ還った。この中に、大洋の娘たちに属するメーロポシスが混じていた。メーロポシスは、日本（遠江国～駿河国）に上陸すると、日本人と混合して「諸星氏」を生んだ。諸星の名の由来はメーロポシスである。メーロポシス＝メロポシ＝諸星となる。

■ A D 1 5 2 3 年 毛利隆元生誕

■ A D 1 5 5 3 年 毛利輝元生誕

■ A D 1 5 6 3 年 「モロ戦争」

隆元は、謎の死を遂げたとされている。享年41歳、尼子攻めに参加する途上で急死した。死因は食中毒、毒殺とも言われているが、実際にはミンダナオ島でスペイン軍の侵略に苦しむ、祖を同じくするモロ人を加勢しに日本を離れたのだ。これに同意していた元就は、家族の秘密を守るためにオーバーな演技を行い、後世に「元就の悲嘆は尋常ではなかった」と記録されている。スルー王国は、スペインが大規模な軍をミンダナオ島に駐留させることを認めていたが、ミンダナオ島に馳せ参じた隆元が率いる毛利軍は、モロの地を侵略しようとするスペイン軍を蹴散らした。これにより、モロは侵略を免れたが、スペイン軍が侵攻するたびに抵抗し、これを退けた。このモロによる抵抗はアメリカ侵略時にも行われた。

■ A D 1 6 0 0 年 「ムーレイ家誕生」

毛利輝元は、家康に「関ヶ原の戦い」の責任を追及され、長門国、周防国に厳封された。また、家康の約束反故に怒りを覚えた一部毛利氏が西南に分かれ、新天地を求めて旅立った。南方組は、故地ニュージーランドに帰還し、マオリ族との間に毛利輝永が誕生すると、輝永は「タルナキ」を称した。タルナキの名の由来は輝永である。一方、西方組はインド洋、地中海を越えてモロッコに至る。日本人の顔をした毛利氏は、現地人と交わって「ムーレイ家」を形成した。ムーレイの名の由来は毛利、或いはムワリである。ムワリ＝ムアリー＝ムーレイとなる。

■AD1604年 鄭芝龍生誕

■AD1624年 鄭成功生誕

■AD1631年 「李自成の乱」

AD1631年、李自成は孔有徳と共に「李自成の乱」を指揮し、AD1644年に北京を陥落させ、「大順国」を開いている。しかし、その年の内に李自成は清に討たれ、「順」は滅びている。その後、AD1673年に張献忠、聶仲明、孔有徳がイギリス帰還組の呉三桂、尚可喜と共に「三藩の乱」に参加し、清に対して蜂起する。だが、アフリカ帰還組の聶仲明、孔有徳は清に投降し、ホンタイジに快く迎えられ、その後は清に仕えた。

■AD1631年 ムーレイ・アル＝ラシード生誕 「アラウィー朝誕生」

AD1666年、ムーレイ家のムーレイ・ラシードが、サトゥルヌスらのタナトス勢力を退けて「アラウィー朝」を開き、初代モロッコ王に即位して「モロッコ王国」を築いている。

■AD1661年 「鄭氏政権樹立」

スワヒリに位置するマラビ帝国に居住していたチェワ族の子孫、鄭成功は、明の正統と奉じて北伐軍を編成し、清に抵抗した。しかし、南京で大敗すると、台湾を拠点にしようとゼーランディア城包囲戦を勝ち抜き、オランダ軍を撃破した。こうして鄭成功は、台湾をタナトス率いる白人列強の手から解放した。アフリカ帰還組の鄭成功は、イギリス帰還組の「洪門」とも交流を持ち、利害を一にしていた。

■AD1840年 「ワイタンギ条約」

■AD1858年 ポタタウ王、初代マオリ王に即位 「キングタンガ誕生」

マオリ族は、イギリス王室を参考に、マオリ王を擁立して一致団結してイギリスに対抗しようと考えた。だが、これにより、マオリ族はイギリスと衝突すると「マオリ戦争」が起きた。マオリ朝のアショーカ王、毛利隆元の血を引くマオリ族は、純粹に故地を守護するため、征服者に対して蜂起した。だが、インドからやってきた能登族の血を引く人々は、マオリ族を掌握しやすいように、ドサクサに紛れて戦争中に多くの異分子（優れた者、強い者、正直者）を殺害した。平和な日常で人が死ぬのは異常だが、戦時中に人が死ぬのは自然である。この言いわけを利用し、能登族は異分子を多く殺害した。つまり、マオリ族の敵はイギリス人だけでなく、マオリ族内部（パイ・マリレ、リングトゥ教）にもいたのだ。

■AD1860年 「マオリ戦争」

AD1858年、ムガル帝国が滅んでインドが大英帝国の植民地になると。これを機に、ヒンドゥー教・シヴァ派に属するカーラームカ派がカーパーラ派、リンガーヤト派と共にインドを脱出し、ニュージーランドに移住した。彼らは、能登族の系統に属する、タナトスの一族である。

カーラームカ派は、「パイ・マリレ」という宗教を創始し、マオリ族を指揮下に置いた。パイ・マリレに属するマオリ族は、「ハパ、ハパ、パイマリレ、ハウ」と叫びながら大英帝国陸軍に突進した。彼らは手を高く上げ、手のひらを前に向けて前進した。そうすれば銃弾を避けられると教えられたのだ。しかし、それは「ゴーストシャツ」や「マジ（薬用の水）」同様、ただのウソである。マオリ族は殺した白人兵の首を持ち歩き、宣教師を惨殺したことから恐怖の対象となった。しかし教祖のテ・ウア・ハウメネが逮捕されると信者たちは四散した。その後、パイ・マリレの残党は、ニュージーランドを離れてジンバブエに渡った。

一方、リンガーヤト派は「リングトゥ教」を築き、「宗教運動パイ・マリレ」と共にマオリ族を掌握した。リングトゥの名の由来はリンガーヤトである。リンガーヤト＝リンガート＝リングトゥとなる。AD1883年、特赦が出てリングトゥ教は現在でも存続しているが、10年間の間に一部はパイ・マリレの残党と共にニュージーランドを離れ、インド洋を横断してジンバブエにまで落ち延びている。

■AD1899年 「モロの反乱」

この「モロの反乱」は、AD1913年まで続いたが、残念ながらデー人が率いるアメリカ軍に侵略されてしまった。

■AD1902年 「山窩（サンカ）誕生」

タイ王国全土のサンガを管理する必要が出てきたため、ラーマ5世が僧侶の集団でしかなかったサンガを法人化した。全ての僧侶に僧籍を与えて寺院に所属させた。これを機に、この政策に不満を持った正統なサンガとタナトスのサンガがそれぞれ2手に分離し、新天地を求めて東西に旅立った。タナトスのサンガはケニアに移ったが、正統なサンガは、タイ王国から明治政府治世下の日本国に移住した。

彼らは「山窩（サンカ）」と呼ばれた。サンカの名の由来はサンガである。サンカは山窩、山家、三家、散家、傘下、燦下などと表記されることもあった。サンカは、独自の犯罪手口を用いる犯罪専科の単位集団として規定されたり、定住することなく仕事を求めて村々を移動する、回遊生活を営む人々である。地域によっては川漁、竹細工などを営んでいた。彼らは、タイ王国から来たのだ。

■AD1920年 長谷川町子生誕 「サザエさん誕生」

■AD1946年 長谷川和彦生誕

■AD1957年 ムハンマド5世、アラウィー朝第30代モロッコ王に即位

■AD1961年 ハサン2世、アラウィー朝第31代モロッコ王に即位

■AD1970年 ヌル・ミスアリ、ゲリラ組織を結成 「モロ民族解放戦線誕生」

ヌル・ミスアリは、毛利氏の子孫だろう。ミンダナオ島では正しい人々から期待されていたが、ミンダナオ島のタナトス勢力によって翻弄された。ミンダナオ島のタナトスは「鬼」と呼ばれ、平安時代に人喰い人種として日本にも来ていた。現在でも、時折、人肉食いの殺人事件がフィリ

ピンでおきるが、これはタナトスの血を引く者の仕業である。

モロ民族解放戦線に参加していたタナトス（ダナーン族）は、ヌル・ミスアリに反発してテロ組織アブ・サヤフに合流し、AD1977年にはダナーンが主導する「モロ・イスラム解放戦線」が生まれた。フィリピンのタナトス政権と連合しているモロ・イスラム解放戦線を退けるべく、AD2013年にフィリピン軍と交戦した。

■AD1999年 ムハンマド6世、アラウィー朝第32代モロッコ王に即位

■AD2006年 「マオリは戦闘的な遺伝子を持つ」という報告が発表される

聖公会に操られたニュージーランドの科学者が、「マオリは戦闘的な遺伝子を持っている。そのため、暴力的であり、犯罪を犯しやすい」と発表した。これは明らかにタナトスによる伝統的な異分子排除の口実である。善人を殺すと悪となる。しかし、悪を殺せば正義となる。そのため、タナトスは敵であるマオリを悪に仕立てあげたいのだ。悪であれば殺しても構わない。これがタナトスの発想である。タナトスは、「マオリを殺したい」から、マオリを「悪者呼ばわりしている」のだ。

◆百地氏（ミマース）の歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「ミマース誕生」

「オロクンの大移動時代」によってチッタゴンに新しい人類が訪れると、オロクンを代表する新しい人類とチュクウを代表する古い人類が共同体を組んだ。これにより「エピアルテース」「エンケラドス」「グラティオン」「パッラース」「ヒッポリュトス」「ポリュポーテース」「ポルピュリオーン」「ミマース」「アグリオス」の獣人9部族が生まれた。

ミマースは、ムワリとムシシが連合することで生まれた。ミマースの名の由来はムワリとムシシの組み合わせである。ムワリ+ムシシ=ムワムシ=ミマースとなる。彼らはみな、サスカッチのような風貌をしていたと考えられる。ビッグフット目撃談によると、彼らは時速60キロで走り

、3 mの高さを跳躍し、片手で岩を投げ、素手でグリズリーを殺すという。「神統記」に於けるキュクロプス、ヘカトンケイル、ギガースなどの描写、そのままである。

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」によってチッタゴンから中国、「獣人の大狩猟時代」によってモンゴル、シベリアに入植したイエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 「アイス族誕生」

「獣人の大狩猟時代」により、獣人部族はシベリアからアメリカ大陸に渡った。人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、南東部（現ミシシッピ～マイアミ）に居を構えたミマースは「アイス族」を称した。アイスの名の由来はミマースである。ミマース＝ミマイス＝アイスとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「サンガリオスの大移動時代」

■ 30万年前 「パチャママ誕生」「ママクーナ誕生」「ママキーヤ誕生」「ママアルパ誕生」「ママザラ誕生」

「サンガリオスの大移動時代」によって古代アンデスに移住すると、ミマースは様々な種族と連合して「パチャママ」「ママクーナ」「ママキーヤ」「ママアルパ」「ママザラ」などの神々を誕生させた。ママの名の由来はミマースである。「パチャママ」はヴィディエとミマースの組み合わせ、「ママクーナ」はミマースとアルキュオネウスの組み合わせ、「ママキーヤ」はミマースとアルキュオネウスの組み合わせ、「ママアルパ」はミマースとエウローペーの組み合わせ、「ママザラ」はミマースとメトセラの組み合わせである。これらの神々は、インカ帝国の神々として知られている。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「メンフィス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加して古代ギリシアに移住し、3万年後に「ギガントマキア」に参加したミマースは、だが、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出してエジプトに移住した。彼らはエジプトの地に「聖地メンフィス」を建設した。メンフィスの名の由来はミマースである。ミマース=ミンマース=メンフィスとなる。

■ 4万年前 「高御産巢日神誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ティケー、ニヤメと組んで「タカミムスビ」を儲けた。タカミムスビ、カミムスビの名の由来はティケー、ミマース、日（ニヤメ）の組み合わせである。ティケー+ミマース+日=ティケミマス日=タカミムスビ=カミムスビとなる。

■ 4万年前 「神産巢日神誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ティケー、ニャメと組んで「カミムスビ」を儲けた。タカミムスビ、カミムスビの名の由来はティケー、ミマース、日（ニャメ）の組み合わせである。ティケー+ミマース+日=ティケミマス日=タカミムスビ=カミムスビとなる。

■ 4 万年前 「宇摩志阿斯訶備比古遲神誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ティケー、ニャメと組んで「ウマシアシカビヒコジ」の神々を儲けた。ウマシアシカビヒコジの名の由来はミマース、アジア、ティケーの組み合わせである。ミマース+アジア+ティケー+日=イマスアシティケ日=ウマシアシカビとなる。

■ 4 万年前 「天忍穗耳命誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、イマナ、アシアーと混合して「アメノオシホミミ」を生んだ。アメノオシホミミの名の由来はイマナ、アシアー、ミマースの組み合わせである。イマナ+アシアー+ミマース=イマナアシアミマ=アメノオシホミミとなる。

■ 4 万年前 「創造主クグマツツ誕生」

ミドガルド王国のスクルドは、古代アンデスのミマースと組んで「創造主クグマツツ」を生んだ。クグマツツの名の由来は、ギガースとミマースの組み合わせである。ギガース+ミマース=ギガマース=クグマツツとなる。ミマースは、ペルーから来たパチャママの片割れである。

■ 1 万 3 千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1 万 3 千年前 「神淳名川耳（綏靖天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「神淳名川耳」を誕生させている。ヌナカワミミの名の由来はイナンナの河とミマースの組み合わせである。イナンナの河+ミマース=ナンナカワミマ=ヌナカワミミとなる。

■ 1万3千年前 「観松彦（孝昭天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「観松彦」を誕生させている。ミマツヒコの名の由来はミマースである。ミマース＝ミマツ＝ミマツヒコとなる。

■ 1万3千年前 「御間城入彦（崇神天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「御間城入彦」を誕生させている。ミマキイリヒコの名の由来はミマースとエウリュトスの組み合わせである。ミマース＋エウリュトス＝ミマスエウリュ＝ミマキイリヒコとなる。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ B C 7千年 「神々の集団アヌナキの大移動時代」

■ B C 7千年 「ギルガメシュ誕生」

ギルガメシュの名の由来は獣人アルゲースと獣人ミマースの組み合わせである。アルゲース＋ミマース＝アルゲマース＝カルゲマス＝ギルガメシュとなる。このように不世出の偉大な英雄は常に獣人の血統から輩出されている。

■ B C 35世紀 「サムエルの大航海時代」

■ B C 35世紀 「武蔵国誕生」

「サムエルの大航海時代」によって、ペルーから出羽国に移住したミマースは、単独で関東地方に移り「武蔵国」を築いた。武蔵の名の由来はミマースの先祖、オリジナル人類ムシシである。ムシシ＝ムサシ＝武蔵となる。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼス誕生」

「モーゼス」とは武蔵国の人々のことを指している。モーゼスの名の由来は武蔵である。武蔵＝ムーサシ＝モーゼスとなる。数万年前から八代湾に居を構える葦原中津国は、高天原（台湾）と同盟して「イスラエル」を、また、出羽国の十和田の縄文人と組んで「エジプト」と呼ばれる連合王国を形成していた。イスラエルの名の由来はアシアーとブリアレオースの組み合わせ、エジプトの名の由来はアシアーとプテの組み合わせである。

そこに、能登を追放され、パラオ諸島に拠点に移転したダニ族が日本列島に進撃し、九州（葦原中津国）から東北地方（出羽国、十和田）を支配下に置いた。ダニ族は、自らをファラオ（パラオ）と称し、圧政を敷いた。このため、人喰い人種の支配を嫌った武蔵国の人々が音頭を取り、日本中の縄文人を連れてエジプトからカナン（夏時代の中国）への脱出を試みた。それが「モーゼスの大移動時代」である。つまり、モーゼスの正体は武蔵国の人々、関東の縄文人である。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「マズダ神群の大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「アムシャ・スプンタ誕生」

「マズダ神群の大移動時代」に参加したミマースは、シヴァ人、プント人と組んで「アムシャ・スプンタ」を生んだ。アムシャ・スプンタの名の由来はミマース、シヴァ、プントの組み合わせである。ミマース＋シヴァ＋プント＝ミマシャ・シヴァント＝アムシャ・スプンタとなる。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「武蔵国復活」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したミマースは、故地である「武蔵国」に帰還した。

■ A D 4 1 3 年 「百地氏生」

「大和人の大航海時代」が実施された時代、ミマースは日本に残り、修験道に属した。彼らは「百地氏」を生んだ。百地の名の由来はミマースである。ミマース＝ミマーツ＝ミマツ＝百地となる。

■ A D 8 世紀 「桃太郎誕生」

タナトスの子孫、黒人ダン族は、ナイジェリアを発ち、故国ダナーンを目指して東南アジアを訪れ、アンダマン諸島（ジャラワ族）、スラウェシ島、ミンダナオ島、台湾（サアロア族）に拠点を得ていた。この黒人ダン族は、それらの島を出撃し、日本にまで足を伸ばして盗賊行為を行い、奈良時代、平安時代の子女を拉致して食べていた。これに対し、得体の知れない盗賊集団に縄張りを荒らされたと感じた百地氏は、腕利きの山伏、修験者を集め、キジを食糧として船に積み込み、台湾、ミンダナオ島、スラウェシ島、アンダマン諸島にまで行脚し、人喰い人種の黒人ダン族を成敗した。

黒人ダン族は、イフェの神官「オニ」を称していたため、日本人に「鬼」と呼ばれていた。ある意味、これは百地氏による鬼退治であった。つまり、昔話「桃太郎」の原話である。桃太郎（百地氏）、犬（天狗＝山伏）、猿（猿田彦の子孫＝修験者）、キジ（遠征の際の食糧）、キビ団子（吉備国、丹後国）、鬼（黒人ダン族）ということになる。後山の修験者は吉備国を、比叡山の修験者は丹後国を出発したが、「吉備丹後」が変遷を重ねて「キビ団子」となった。或いは、鬼退治に参加した修験者に対する報奨として吉備国、丹後国が与えられる約束があったのかもしれない。

■ A D 8 世紀 「モシ族誕生」

黒人ダン族がアフリカから来たことを耳にした百地氏はアフリカに関心を示し、黒人ダン族（鬼）を皆殺しにすると、アフリカ大陸に向かい、ケニアに上陸した。日本人の姿をした百地氏はマサイ族と混合して「モシ族」を形成した。モシの名の由来はミマース、或いは百地である。ミマース＝ミマス＝ミモシ＝モシとなる。

■ A D 1 3 世紀 「ニョロ帝国の大航海時代」

■ A D 1 3 世紀 「松井氏誕生」

「ニョロ帝国の大航海時代」に参加したモシ族は、日本に帰還し、現地人と混合して「松井氏」を生んだ。松井の名の由来はマサイである。マサイ=マツアイ=松井となる。

■AD1521年 松井忠次生誕 「松平康親誕生」

■AD1556年 百地丹波生誕 「伊賀忍術誕生」

百地丹波の名、丹波の由来はニョロ帝国を築き、タンブジ朝を開いた丹波氏である。マサイ族の類まれな身体能力を受け継いだ百地丹波は、伊賀忍者として織田信長と渡り合い、その名を馳せた。伊賀の名士百地丹波は土豪であったが、伊賀忍術の祖とも呼ばれている。

◆守屋氏（モレヤ）の歴史

■BC7千年 「モレヤ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」を経て、モルディブ諸島からメソポタミアに来ていたムワリは、次に「アヌナキの大移動時代」に参加してきたアフリカに移住した。ムワリはこの地で「エロヒム」を結成していたエロスと出会う。ムワリは、彼らと連合して「モレヤ」を生んだ。モレヤの名の由来はムワリとエロスの組み合わせである。ムワリ+エロス=マリエロ=モレヤとなる。

■BC5千年 「トロイア戦争」

■BC5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC5千年 「ミレー族誕生」

科学の種族はセネガルの地まで飛び、モレヤ人に、兄弟であるアイルランドの神々の惨状を伝えた。彼ら、モレヤの民が、ダーナ神族を倒す「ミレー族」となる。モレヤ=モレー=ミレーとなる。

■BC5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC5千年 「モレヤ山誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したミレー族は、イスラエルに移住した。彼らは、拠点の山岳地帯に「モレヤ山」と命名し、先祖神「エロヒム」を祀った。

■BC829年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC829年 「マルワ誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したモレヤ族は、サバエ人と共にインドに上陸した。モレヤ族は「マルワ」をインドに築いた。マルワの名の由来はモレヤである。モレヤ=モレワ=マルワとなる。

■BC829年 「守屋氏誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したモレヤ族はシェルデン人と共に日本に上陸した。モレヤ族は諏訪国に移住して現地人と混合し、「守屋氏」を称して「洩矢信仰」を興した。守屋、洩矢の名の由来はいずれもモレヤである。

■BC829年 「メロエ人誕生」

インドに「マルワ」を築いたモレヤ族は、インドを離れてクシュ人やヌビア人が治めるヌビアに進出した。彼らは、現地人と混合し「メロエ」を称した。メロエの名の由来はマルワである。マルワ=マルエ=メロエとなる。

■BC480年 「墨家（モー）誕生」

人身御供の種族である建御名方神が出雲国から諏訪国に移ってきた時、彼らを嫌った守屋氏は、中国に移り、齊・宋が支配していた土地に拠点を得た。この時に、墨家（モー）が生まれた、墨（モー）の名の由来はモリヤである。モリヤ＝モーリヤ＝モー（墨）となる。墨家は「諸子百家」に数えられた。

■BC480年 「ムラク誕生」

また、一部はマレー半島に移り、「ムラク族」を築いた。ムラクの名の由来は守屋、或いはモレヤである。モレヤ＝モラヤ＝ムラクとなる。

■BC480年 「マラウイ誕生」

更に西方に向かった人々はスワヒリに到来し、「マラウイ」を築いた。マラウイの名の由来は守屋、或いはモレヤである。モレヤ＝ムラク＝マラウイとなる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ブラック誕生」「ムーア誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した墨家は、現地人と混合して「ブラック」を称した。ブラックの名の由来は「墨」である。また、墨家からは「ムーア」の名も誕生した。ムーアの名の由来は「墨（モー）」である。モー＝モーア＝ムーアとなる。ムーアからは「ブラックモア」「ギルモア」「デズモア」などの姓も生まれた。

■AD350年 「マル誕生」「モロー誕生」

アクスム王国の侵攻によってメロエ王国が滅ぶと、メロエ人はヨーロッパに向けて旅立った。ヌビア人の顔をしたメロエ人は、フランスに上陸して現地人と交わり、「マル」「モロー」などの名を成した。メロエ＝メロエー＝モロー、ミラー＝マルとなる。この系統からは映画監督ルイ・マル、女優ジャンヌ・モローが輩出されている。ルイ・マルとジャンヌ・モローは「死刑台のエレベーター」「鬼火」「黒衣の花嫁」で一緒に仕事をしている。

■AD350年 「ムーラー誕生」

フランスからスイスに移った人々は「現地人と混合してムーラー」の名を成した。ムーラーの名はメロエが由来である。メロエ＝メロエー＝ムーラーとなる。この系統からは映画監督フレディ・M・ムーラーが輩出されている。

■AD350年 「ミラー誕生」

フランスからブリテン島に上陸したメロエ人は、ダンフリーズに移って「ミラー」の名を成した。ミラーの名はメロエが由来である。メロエ＝メロエー＝ミラーとなる。この系統からは作家アーサー・ミラー、映画監督ジョナサン・ミラーが輩出されている。

■AD830年 「モラヴィア王国誕生」

AD4世紀頃、アザニア海賊がスワヒリに登場すると、これを機に、マラウィ人がヨーロッパに亡命した。アフリカ人の顔をしたマラウィ人はシレジアに上陸して現地人と混合し、「モラヴィア人」を称した。モラヴィアの名の由来はマラウィである。マラウィ＝マラウィア＝モラヴィアとなる。AD830年、モイミール1世が初代王に即位し、「モラヴィア王国」を築いた。突如、中央ヨーロッパに出現した謎の強国として知られているが、AD907年に滅亡すると、白人の顔をしたモラヴィア人はスワヒリに帰還し、故地マラウィの人々と合流した。

■AD1040年 「スワヒリ人の大移動時代」

■AD1040年 イブン・ヤースィン、初代皇帝に即位 「アルモラヴィド帝国誕生」

「スワヒリ人の大移動時代」に参加したマラウィ人は、マフダリ家、ハフス人と共に北アフリカに上陸し、現地のベルベル人を統率した彼らは、モロッコを支配し、イベリア半島に乗り込んだ。マラウィ人のイブン・ヤースィンは、西カリフ帝国を倒すと、初代皇帝に即位し「アルモラヴィド帝国（ムラービト王朝）」を建てた。アルモラヴィドの名の由来は「マラウィの人」である。アル+マラウィ+人（ト）＝アルマラウィト＝アルモラヴィドとなる。シレジアを統べた「モラヴィア王国」を再興したいという願望が、マラウィ人をイベリア半島支配に駆り立てたのかもしれない。

■AD11世紀 「村山氏誕生」

AD11世紀にノルマン人がスイスに進撃するとムーラー一族がスイスを脱出して日本に移住した。スイス人の顔をしたムーラーの一族は日本人と混合して「村山氏」を成した。村山の名の由来は「ムーラーの山」である。ムーラー+山=ムラ山=村山となる。ムーラーの山とは、アルプス山脈のことを示している。その後、村山氏は平頼任を輩出し、軍事集団「村山党」を結成して「武蔵七党」のメンバーに加わっている。

■AD1147年 「マレー誕生」

AD1147年、帝国が滅ぶと、マラウィ人はムラユ時代の故地のひとつであるマレー半島に渡り、「マレー」の名を残した。マレーの名の由来はマラウィである。マラウィ=マラエー=マレーとなる。また、統治していたイベリアを由来に「ブラウ・マレー」を称した。イベリア=イブラウ=ブラウとなる。彼らは、14世紀に「ブラウ・スルタン国」を建国した。

■AD1347年 「丸山氏誕生」「森山氏誕生」

AD1347年に「黒死病」が流行すると、マル、モローの一族人は、故地を脱出して日本に向かった。フランス人の顔をした彼らは日本人と混合し、「丸山」「森山」の名を成した。丸山の名の由来は「マルの山」であり、森山の名の由来は「モローの山」である。マル+山=丸山となり、モロー+山=森山となる。「マルの山」も「モローの山」も、どちらもムーラーの山と同じでアルプスを指している。この系統からは俳優・歌手の美輪明宏（丸山明宏）、歌手の森山良子、森山直太郎が輩出されている。

■AD1430年 「マラビ帝国誕生」

馬氏を祖とする鄭和は、永楽帝の命により、西方への航海を6回実施した。鄭和は、最後の航海の時にマレーに立ち寄り、ブラウ・マレー人を船団に迎えた。ブラウ・マレー人は故地であるマラウィに帰還し、鄭和もマラウィを終の棲家に決めた。中国人の顔をした鄭和は、現地人と混合して「チェワ族」を称した。チェワの名の由来は鄭和（チョンファ）である。また、東南アジア人の顔をしたブラウ・マレー人はマラウィ人と合流し、AD16世紀に「マラビ帝国」を建てた。マラビの名の由来はマラウィである。マラウィ=マラヴィ=マラビとなる。

■AD1600年 「アラウィー派誕生」

「マラビ帝国」の主導権はブラウ・マレー人が掌握していたため、不満を示した一部マラウィ人はアルモラヴィド帝国時代の故郷モロッコに返り咲くことを夢見て移住を開始した。その後、マラウィ人は日本を脱出した毛利氏と共にモロッコ王国で連合した。毛利氏は「ムーレイ家」を称してモロッコの王位を篡奪し、マラウィ人は「アラウィー派」を創始し、タナトスが指揮するマーリキー派を退けて、モロッコ人の精神・生活を支配した。アラウィー名の由来はマラウィ、或いはエロヒムである。マラウィ＝アラウィ＝アラウィーとなる。シリアのバアス党などがアラウィー派を信奉している。

■AD1891年 ヘンリー・ミラー生誕

■AD1928年 ジャンヌ・モロー生誕

■AD1932年 ルイ・マル生誕

■AD1935年 美輪明宏（丸山明宏）生誕

■AD1940年 フレディ・M・ムーラー生誕

■AD1941年 ローラ・マルヴィ生誕

■AD1945年 リッチー・ブラックモア生誕 「ディープ・パープル誕生」

■AD1952年 ゲイリー・ムーア生誕

モリモの歴史

◆モルモン教（モリモ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「モリモ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したアブクは、現ジンバブエに移住して「ムワリ」を、現レソトに移住して「モリモ」を生んだ。その後、モリモはボツワナに「モディモ」を生んだ。オリジナル人類モリモはレソトの海岸に暮らし、現在のネグリトに似た容姿をしていた。

■200万年前 「モリモの大移動時代」

■200万年前 「マルマ族誕生」

「モリモの大移動時代」によってチッタゴンに入植したモリモは「マルマ族」を生んだ。マルマの名の由来はモリモである。永い時を経て、マルマ族はミャンマー人に吸収されたが、当初は小人族の容姿をしていた。

■45万年前 「オンゲ族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したカアングは、マルマ族は彼らと連合して「オンゲ族」を生んだ。オンゲの名の由来はカアングである。カアング＝カアング＝オンゲとなる。その後、オンゲ族は東南アジアからアンダマン諸島に移り住んだ。

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「セマン族誕生」

「カオスの大移動時代」によって生まれたカリュプソーとメネステーは、モリモ（ネグリト）を人種母体に「セマン族」を生んだ。セマンの名の由来はカリュプソーとメネステーの組み合わせである。カリュプソー+メネステー=ソーメネ=セマンとなる。ネグリトを人種母体に選んだため、セマン族はネグリトの容姿をしていた。

■ 30万年前 「アエタ族誕生」「アティ族誕生」

「カオスの大移動時代」によって生まれたエウドーラーは、モリモと組んで「アエタ族」「アティ族」を生んだ。アエタ、アティの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=アエドーラー=アエド=アエタ=アエタイ=アティとなる。ネグリトを人種母体に選んだため、アエタ族、アティ族はネグリトの容姿をしていた。

■ 30万年前 「エチオピア王国誕生」

アエテ族（ネグリト）は、エウローペーと組んで「エティオピア王国」を築いた。エティオピアの名の由来はアエテ族とエウローペーの組み合わせである。アエテ+エウローペー=アエテオーペー=エティオピアとなる。エティオピア王国は、マレー半島からインドネシア、ニューギニア、ソロモン諸島までを影響下に置いていたと考えられる。

■ 30万年前 「カシオペア誕生」「アンドロメダ誕生」

エチオピア王国の王族から、「カシオペア」「アンドロメダ」が生まれた。カシオペアの名の由来はカゾオバであり、アンドロメダの名の由来はマイアンドロスとメティスの組み合わせである。カゾオバ=カジュオビヤ=カシオペアとなり、マイアンドロス+メティス=アンドロメティ=アンドロメダとなる。

■ 4万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「サンガ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したモリモは、現アンデス山脈でサンガリオスと出会った。モリモは、彼らと混合してピグミー族の神である「サンガ」を祀った。サンガの名の由来

はサンガリオスである。

■ 4 万年前 「モルモー誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したモリモは、ブカット族と共にブリテン島に入植し、「モルモー」を生んだ。モルモーの名の由来はモリモである。ヘカテは「モルモー」という魔物を従えていたが、これは、ブカット族（またの名をピュグマエイ、ピクト人）とマルマ族（モリモ）の同盟である。

■ 4 万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4 万年前 「マーラ誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したモリモは、ブリテン島から日本に移住した。蝦夷地方に入植した彼らは「マーラ」を生んだ。マーラの名の由来はマルマである。マルマ＝マラマ＝マーラとなる。マーラとは「ラトビア神話」の神である。ラトビア神話の神々は、みな、蝦夷・出羽国に住んでいた人々の名前である。「ヨシュアの大移動時代」の際、ヨーロッパに移住した出羽国の人々が、現地人に偉大な先祖のことを伝えた。

■ B C 4 0 世紀 「第1次シュメール人の大航海時代」

■ B C 4 0 世紀 ムルムスラン、チムー王国第8代王に即位

「シュメール人の大航海時代」に参加したモリモ（マーラ）は、現ペルーに移住した。シュメール人が「チムー王国」を建設すると、モリモは「ムルムスラン」を生んだ。ムルムスランの名の由来はモリモとガラクサウラーの組み合わせである。モリモ＋ガラクサウラー＝モリモサウラー＝ムルムスランとなる。ムルムスランは、チムー王国の第8代王に即位した。

■ B C 3 5 世紀 「サムエルの大航海時代」

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 モリモ、ガンジス流域に移住

「サムエルの大航海時代」に参加して出羽国に帰還し、「モーゼスの大移動時代」に参加してモンゴルに移住したモリモ（ムルムスラン）は、アンダマン諸島に移住した。彼らは、祖を同じくするオンゲ族と混合し、その後、ガンジス流域に移住した。

■ B C 6 世紀 「アンガ王国誕生」

ガンジス流域に移住したオンゲ族は、「アンガ王国」を築いた。アンガの名の由来はカアングである。カアング＝アング＝アンガとなる。

■ B C 5 5 1 年 孔子生誕 「儒教誕生」

マガダ王国のビンドゥサーラ王が王位に就くと、アンガ人は魯国に移住した。この時に、「儒教（ルイ）」の創始者である「孔子（コン）」が生まれた。儒教の名の由来はモリモであり、孔（コン）の名の由来はカアングである。モリモ＝モルイモ＝ルイ（儒）となり、カアング＝カアン＝コンとなる。おもしろいことに「儒人」と書いて「こびと」を意味する。これは、ネグリトであるオンゲ族が「儒教」を興した証だ。

■ B C 4 9 7 年 「康居（カンジュ）誕生」

B C 4 9 7 年、孔子は魯国を出て西域に向かい、「康居（カンジュ）」を築いた。カンジュの名の由来はガンガーである。ガンガー＝ガンジャー＝カンジュ（康居）となる。その後、A D 1 世紀頃に漢が西域に干渉を始めると、一部の康居はタリムを出てデカン高原に移住した。

■ A D ? ? 年 「シモン・ペトロ誕生」 「熱心党のシモン誕生」

中国から地中海に至る交易ルートの拠点にいたセマン族は、マレー半島からイスラエルに移住して「シモン」を称した。シモンの名の由来はセマンである。セマン＝シマン＝シモンとなる。シモン・ペトロは、後にイエス・キリストに出会い、十二使徒のリーダーとなる。

■AD317年 「東晋誕生」

キリスト教をアリウス派、アタナシウス派などのタナトスに篡奪されたセマン族は、イスラエルから中国に移住した。彼らは名前が似ている司馬氏に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのが「東晋」を開く元帝司馬睿である。

■AD350年 「西ガンガ朝誕生」

AD1世紀頃に漢が西域に干渉を始めると、一部の康居はタリムを出てデカン高原に移住した。彼らは、AD350年に「西ガンガ朝」を開いた。ガンガの名の由来はカアングである。カアング=カング=ガンガとなる。西ガンガ朝はAD11世紀頃に滅亡している。

■AD420年 「ハーシム家誕生」

AD420年に「東晋」が滅ぶと、司馬氏はシルクロードを介してコラズムに向かった。そこで司馬氏は、800年程前にコラズムの人々がアレキサンダー大王の魔手から逃れてアラビア半島に渡ったことを耳に入れた。アラビア半島に関心を抱いた司馬氏は、コラズムの人々を追って、そこからアラビア半島に移住し、クライシュ族に参加した。彼らは「ハーシム家」を称した。ハーシムの名の由来は好（ハオ）と司馬の組み合わせである。ハオ（好）+シマ（司馬）=ハオシマ=ハーシムとなる。

■AD571年 マホメット生誕 「イスラム教誕生」

AD571年、ハーシム家からは偉大なイスラム教の始祖「マホメット」が輩出される。マホメットは、人喰い人種がアラビア人に人身御供を強制する様子を見て、常々怒りを感じていた。商人として経済力を蓄えると、マホメットは人喰い人種の神「アラー」を篡奪し、「イスラム教」の頂点に君臨する絶対神として祀った。この時からアラーは正義の神となった。

タナトスは、キリスト教、仏教などを篡奪してきたが、ここでは反対のことが起きたのだ。マホメットは戦いによって人喰い人種を討伐し、イスラム教を限りなく広めることで、人身御供を強要する人喰い人種を駆逐した。マホメットは、悪魔ジン（能登族）に支配されていたメッカの人々を解放し、モレク（能登族）が支配する北アフリカの人々を解放した。

■AD875年 「サーマーン朝誕生」

イスラム教がオリエント地域を席卷して「イスラム帝国」が栄華を誇ると、シモンの系統がイスラエルを脱出してイランに向かった。この時、ナスル1世が「サーマーン朝」を開いている。サーマーンの名の由来はシモンであり、ナスルの名の由来はナザレである。シモン=シーモン=サーマーンとなり、ナザレ=ナズレ=ナスルとなる。彼らは、タナトスが篡奪したキリスト教の巨大化に異を唱えて離反した、十二使徒時代の古いキリスト教の系譜に属する人々だ。

■AD999年 「ゼマン誕生」

サーマーン朝が滅ぶと、彼らはイランを離れてシレジアに入植した。イラン人の顔をした彼らは現地人と混合して「ゼマン」を称した。ゼマンの名の由来はサーマーン、或いはセマンである。セマン=ゼマンとなる。

■AD1342年 「ベンガル・スルターン朝誕生」

チョーラ人の侵攻によって西ガンガ朝が滅ぶと、西ガンガ朝の残党は故地アンガ（ベンガル）に移り、AD1342年に「ベンガル・スルターン朝」を開いている。ベンガルの名の由来はガンガである。ガンガ=バンガ（ハ行がカ行を兼ねる法則）=ベンガルとなる。

■AD1531年 「クウィル朝コンゴ王国誕生」

AD1531年、ムガール帝国の侵攻によってベンガル・スルターン朝が滅ぶと、ベンガル人（西ガンガ人）はガンジス下流域を後に、コンゴを訪れてコンゴ人（東ガンガ人）に習合した。彼らは、AD1558年に「クウィル朝コンゴ王国」を開いた。

■AD16??年 「ベンガル地方政権誕生」

コンゴを出たベンガル人は故地に帰還して、新たに「ベンガル地方政権」を開いた。ベンガル人は、ブルボン家と組んで大英帝国のベンガル征服に抵抗した。

■AD1889年 シモン・キンバング生誕 「キンバング教会誕生」

チェコ人は、ハプスブルグ家に自治を要求していたが、これを機に、一部のゼマンの人々はコンゴに向かった。チェコ人の顔をしたゼマンの人々はキンバング朝の王統と混合し、AD1889年に彼らの系統に属する「シモン・キンバング」が誕生している。「黒いメシア」と呼ばれた彼は、後に「キンバング教会」を創設している。

■AD1910年 カレル・ゼマン生誕

■AD1940年 ポール・アンカ生誕

■AD1944年 ミロシュ・ゼマン生誕

AD2013年、チェコ第3代大統領に就任。

■AD1950年 トニー・バンクス生誕 「ジェネシス誕生」

■AD1956年 トム・ハンクス生誕

ルハンガの歴史（ルハンガ）

◆ルーベン（ルハンガ）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■300万年前 「ルハンガ誕生」

湖水地方時代、クウォスからルハンガが枝分かれした。既に言葉を知っていた彼らは、自身を「ルハンガ」と呼んでいた。彼らは毛深く、体長は4 mあった。現在でいうところの未確認生物オラン・ダラムのような姿をしていたと考えられる。それにしても、彼らは他の人類に比べ、なぜこれほどまでに巨大化したのだろうか？

概して、食物連鎖の頂点にいる動物はいずれも身体が大きい。そう考えるとルハンガが巨大なのは、彼らが食物連鎖の頂点にいたからと考えてよいだろう。ルハンガは、地球に選ばれた捕食者の王なのだ。生態系のバランスが崩れると、自然にバランスを回復する動きが出る。例えば、草食動物が増えすぎると、それを捕食する肉食動物が出現するという具合だ。これは地球の意志である。

地球の意志によって巨大化した動物の例としてコモドドラゴンが挙げられる。コモド島では、小さいカナヘビの一種が巨大化し、コモド島の食物連鎖の頂点に立つべくコモドドラゴンが生まれた。ルハンガも地球規模の必然性により、巨大化した。

代表的な捕食者にはグリズリー、ライオン、トラ、シャチ、ワシ、ワニ、サメなどが挙げられる。捕食を行う動物は、強いことが自然の摂理として定められている。当然だ。弱ければ捕食はできない。そのため、ルハンガにも強大な身体能力が与えられた。目を見張るような、比類なき力は「獲得した」というよりは、天から「与えられた」と考えた方が自然だ。ルハンガは、人類だけでなく、地球の全ての種の王として選ばれた種族なのだ。

■200万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「チュクウ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したルハンガは、ナイジェリアに「チュクウ」を生んだ。陸を移動したルハンガの遺骸は、人類学者によってギガントピテクスと呼ばれた。チュクウは、ルハンガから身長4 mの身体を受け継いでいたが、彼らはニジェール川で更に4.5 mにまで身

長が伸びた。その巨体で、彼らはニジェール流域の覇者となった。チュクウはまず、河川に於いて食物連鎖の頂点に位置づけられた。その後、チュクウはライオン、ハイエナ、ヒョウ、カバ、ゾウなど、天敵がない動物の天敵として機能した。現在でも時折、集団でライオンを狩ったり、棍棒でゾウを殴り殺す巨大な猿の報告がある。これらの巨大な猿とはチュクウの子孫だろう。彼らは、現ナイジェリアの沖合いに出てサメなども素手で狩っただろう。

サスカッチ、ヨーウィ、アルマス、イエレン、ヒバゴンなどの未確認動物、獣人などは、間違いなく、ルハンガ、チュクウの子孫である。数々のUMA専門書やロバート・マイケル・パイル著「ビッグフットの謎」では、ビッグフットらは、3mの跳躍を見せ、時速60kmで走り、岩を投げ、素手で猛獣を殺すことができる。また、彼らは円形の闘技場を作り、拳闘に励み、アジアの言葉に似た独自の言葉をしゃべるとも報告されている。チュクウは非常に卓越した身体能力を持ち合わせ、それに見合った知性も秘めている。

ただ、どんなに優れた種にもできそこないは生まれる。チンパンジーの群れでは、子供をいじめるような個体は集団で無視され、拳闘に群れを追放されることがある。これにより、できそこないは野垂れ死にを迎えるが、こうしてできそこないを淘汰することでチンパンジーは平和に暮らし、種を正しく存続することが可能なのだ。

これらのことは、現代人の間ではタナトスによって廃止されたが、ビッグフットの部族内では今でも実施されている。たまに、人を殺して食べたり、女性を誘拐してレイプするサスカッチの報告があるが、これは、群れを追放されたビッグフットのできそこない（凶暴、残虐、美徳を憎む、復讐心が強い、嘘つきなど問題がある）の仕業だろう。だが、できそこないであってもグリズリーでさえ素手で殺せるわけで、サスカッチのできそこないは野垂れ死にせず、ひとりで森の中で生きているのだ。運が悪ければ、このような個体に出くわし、恐ろしい思いをすることになるかもしれないし、運が良ければ、山奥に棲む地球の王に謁見することができるかもしれない。

■ 100万年前 「チュクウの大移動時代」

■ 100万年前 「ライ誕生」

「チュクウの大移動時代」に参加したルハンガは、モリモなどと同様にチッタゴンに入植し、「ライ族」を生んだ。ライの名の由来はルハンガである。ルハンガ＝ルワンガ＝ルア＝ライとなる。当初、彼らは毛深く、4mの巨体を誇っていた。だが、100万年の間にミャンマー人に吸収され、名前だけがルハンガの名残りとなった。

■ 100万年前 「パンコー族誕生」

「チュクウの大移動時代」に参加したルハンガは、モリモなどと同様にチッタゴンに入植し、「パンコー族」を生んだ。パンコーの名の由来はルハンガである。ルハンガ＝ハンガ＝パンコーとなる。当初、彼らは毛深く、4 mの巨体を誇っていた。だが、100万年の間にミャンマー人に吸収され、名前だけがルハンガの名残りとなった。パンコーの名は、盤古（パングア）の由来となる。

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「アグリオス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したルハンガは、チュクウ、クウォスと組んで「アグリオス」を生んだ。アグリオスの名の由来はチュクウ、ルハンガ、クウォスの組み合わせである。チュクウ＋ルハンガ＋クウォス＝ユクウルウォス＝ユグルオス＝アグリオスとなる。

■ 45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス」を生んでいる。クリュテイオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス＋ヴィディエ＋クウォス＝グリオディエオス＝クリュテイオスとなる。

■ 45万年前 「グラティオーン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオーン」を生んでいる。グラティオーンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス＋ヴィディエ＋ウェネ＝グリオディエウエネ＝グラティオーンとなる。

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマ

ンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「キャリアー族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（現アラスカ～カナダ北部）に居を構えたアグリオスは「キャリアー族」を称した。キャリアーの名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アグリアー＝キャリアーとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ロディア誕生」

「獣人の大移動時代」に参加し、その後に「カオスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、オーストラリアに移住すると「ロディア」を生んだ。ロディアの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス＝クロティアス＝ロディアとなる。その後、ロディアは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ラドン誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したグラティオーンは、ルワが分離することで「ラドン」を生んだ。ラドンの名の由来はグラティオーンである。グラティオーン＝ラティオーン＝ラドンとなる。その後、ラドンは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ペトライエー誕生」

「獣人の大移動時代」を経て「カオスの大移動時代」に参加し、オーストラリアに入植したルハンガは、ヴィディエと共にグラティオンから抜け、新規に「ペトライエー」を生んだ。ペトライエーの名の由来はヴィディエとルワの組み合わせである。ヴィディエ+ルワ=ヴィデルワー=ヴィデルイワー=ペトライエーとなる。その後、ペトライエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カリロエー誕生」

「獣人の大移動時代」を経て「カオスの大移動時代」に参加し、オーストラリアに入植したルハンガは、クリュテイオスから抜け、新規に「カリロエー」を生んだ。カリロエーの名の由来は、クリュテイオスとルワの組み合わせである。クリュテイオス+ルワ=クリュルワ=カリロエーとなる。その後、カリロエーは、大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「クリュメネー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、河川の娘たちを母体にイマナと組んで「クリュメネー」を生んだ。クリュメネーの名の由来はアグリオス、イマナの組み合わせである。アグリオス+イマナ=グリオマナー=クリュメネーとなる。その後、クリュメネーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ロア族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したカリロエーは台湾に移住し「ロア族」を生んだ。ロアの名の由来はルハンガである。ルハンガ=ルアンガ=ロアとなる。

■ 7万年前 「ボトル族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペトライエーはマレーに移住し「ボトル族」を生んだ。ボトルの名の由来はペトライエーである。ペトライエー=ペトル=ボトルとなる。

■ 4万年前 「テュポン（タイパン）誕生」

クロノスの姦計により、古代ギリシアを追放されたチュクウは、オーストラリアに帰還していた、その後、ゼウスに敗北したクロノスがオセアニアに亡命すると、チュクウ（ギガース）はクロノスに操られ、全能神ゼウスを倒すために「怪物テュポン」を結成し、古代ギリシアに侵攻した。テュポンの名の由来はチュクウとルハンガの組み合わせである。チュクウ+ルハンガ=チュハン=テュポンとなる。テュポンは、オーストラリアでは「虹蛇タイパン」と呼ばれた。

■ 4万年前 「モルディブ誕生」

古代ギリシアに向かう途上、怪物テュポンは現モルディブに仮りの拠点を作った。この時に初めて当地は「モルディブ」と呼ばれた。モルディブの名の由来はムワリとテュポンの組み合わせである。ムワリ+テュポン=ムワリテュポ=モルディブとなる。

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「亢誕生」「房誕生」

「ギガントマキア」を機にオセアニアに帰還し、その後「フッキとヌアの大航海時代」に参加したルハンガは、アフリカ湖水地方に入植した。この時、「亢（ハング）」「房（ファンク）」などの都市を築いた。ハング、ファンクの名の由来はルハンガである。ルハンガ=ハンガ=ハング（亢）となり、ルハンガ=ルフアング=ファンク（房）となる。彼らは、ディンカの国「青龍（チンロン）」に参加している。

■ 2 万年前 「禄存誕生」

ヴァルハラ王国を離れたオーディーンが現ベナンに入植すると、青龍のルハンガは、オーディーンの新しい国「北斗星君（ペイトーキンジュン）」の建設に協力した。ルハンガは、北斗星君に参加し、「禄存（ルワン）」を建設した。ルワンの名の由来はルハンガである。ルハンガ＝ルワンガ＝ルワンとなる。

■ 1 万 3 千年前 「テングリの大移動時代」

■ 1 万 3 千年前 「ローバ族誕生」「ラフ族誕生」「ハニ族誕生」「リス族誕生」「ユグル族誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したルワンは、中国に入植した。彼らが、二十八宿神、北斗星君、フッキとヌア、東方青龍、西方白虎、南方朱雀、北方現部の伝説を中国の地に伝えた。チベットに「ローバ族」、雲南に「ラフ族」「ハニ族」「リス族」、モンゴルに「ユグル族」を生んだ。ローバ、ラフ、ハニの名の由来はルハンガであり、リス、ユグルの名の由来はアグリオスである。ルハンガ＝ルーハンガ＝ローバ、ルハンガ＝ラフンガ＝ラフ、ルハンガ＝ルハニガ＝ハニとなり、アグリオス＝アグリウス＝リス、アグリオス＝ユグリオス＝ユグルとなる。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 「ルーベン族誕生」

「モーゼスの大移動時代」によって縄文人が中国を訪れると、チベットのローバ族と、雲南のハニ族が連合して「ルーベン族」を生んだ。ルーベンの名の由来はローバとハニの組み合わせである。ローバ＋ハニ＝ローバニ＝ルーベンとなる。その後、ルーベン族はイスラエルの 1 2 氏族に参加している。

■ B C 3 0 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「バンベド誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したルハンガ（ルーベン族）は、インダス流域からインド洋に出て、ボルネオ島に移住した。彼らはここに「バンベド」を生んだ。バンベドの名の由来はルーベンとビダユの組み合わせである。ルーベン+ビダユ=ベンビダ=バンベドとなる。

■BC30世紀 「ヤザダ神群の大移動時代」

■BC30世紀 バンベド、ボルネオ島からイランに移住

「ヤザダ神群の大移動時代」に参加したバンベドは、ボルネオ島からイランに移住し、「ヤザダ神群」に参加した。彼らは、同じイスラエル王国時代の仲間が築いたマスダー神群、ダエーフ神群と共存した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「韓誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したルーベン族は、現地人と混合して「韓（ハン）」を称した。韓（ハン）の名の由来はルーベンである。ルーベン=ルーハン=韓（ハン）となる。

■BC230年 「返氏誕生」

BC230年に韓が滅ぶと、韓氏は「返氏（ファン）」を生んだ。ファンの名の由来はルハンガ、或いは韓（ハン）である。

■BC209年 「ラハンウェイン族誕生」

BC249年に魯が滅び、BC230年に韓が滅び、BC209年に衛が滅びた。この3者は「秦」による統治を機に連合し、中国を脱出して遠くソマリアに落ち延びた。中国人の顔をした彼らはソマリア人と混合して「ラハンウェイン族」を形成した。ラハンウェインの名の由来は

魯（ルー）、韓（ハン）、衛（ウェイ）の組み合わせである。ルー+ハン+ウェイ＝ルハンウェイ＝ラハンウェインとなる。

■BC202年 劉邦、初代皇帝に即位 「劉氏誕生」「漢誕生」

中国に残った韓氏は、ルーベンに因んで「劉邦（リユーバン）」を生んだ。リユーバンの名の由来はルーベンである。劉邦は「劉氏」の祖となり、初代皇帝に即位して「漢」を開いた。漢は、新を挟んでBC202年からAD220年まで続き、東アジアに大きな影響力を誇った。また、シルクロードを介してパルティア王国、ローマ帝国とも交易を行った。

■AD2??年 「三韓誕生」

ラハンウェイン族を生んだ韓氏は、ソマリアを離れて朝鮮半島に移住し、「三韓」を築いた。山間には「弁韓」「馬韓」「秦韓」があった。秦韓にはソマリアのハダメ族が参加し、秦氏（はた）を生んでいる。

■AD220年 「扶南国誕生」

王氏の「新」が台頭して「前漢」が滅ぶと、一部劉氏は海南島に赴き、古の神農の子孫であるチワン族と連合した。劉氏とチワンの連合体はカンボジアに上陸して扶南国を築いた。扶南の名の由来は海南（ハイナン）である。

■AD221年 劉備、初代皇帝に即位 「蜀誕生」

「大和人の大航海時代」を指揮する多氏の「呉」、倭人の「魏」と共存して、中国に三国時代を築いた。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ターナー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した返氏は、ブリテン島に「ターナー」の名を生んだ。

■AD545年 「フォン人誕生」

扶南国の滅亡を機に、扶南人（チワン族+劉氏）はインド洋を超えて、喜望峰を周航し、遠く大西洋側に進出してニジェールに上陸した。東南アジア人の顔をした彼らは、現地人と混合して「ベナン人」「フォン人」を形成した。ベナンの名の由来は扶南であり、フォンの名の由来はルーベン（劉氏の祖）である。ルーベン＝ルーヴェン＝フォンとなる。

■AD1351年 「紅巾軍誕生」

アフリカ人の顔をしたフォン人は中国に帰還すると、現地人と混合して「韓林児」を称し、ルオ族は「白蓮教」を復活させて韓林児を首領に頂いた。褐色の肌を持ったフォン人（劉氏）、ルオ族（ラーオ族）が中心になって「白蓮教」を復活させ、紅巾族を指揮して大元に対して蜂起した。、リトアニア帰りの朱元璋と協力関係を結び、紅巾軍を指揮して「元朝」をモンゴル高原に追放した。

■AD1351年 「小西氏誕生」

だが、朱元璋は中国を掌握すると、同盟者であった白蓮教を邪教として弾圧した。これを機に、中国を脱出したルオ族は、フォン人と共にアフリカの故地に帰還した。また、四散した紅巾族を構成していたアフリカ人の一部は日本に移住し、日本人と混合して「小西氏」の祖、小西行正を生んでいる。小西の名の由来は中国のラテン名「チニーズ」である。チニーズ＝キニーズ＝キニシ＝小西となる。

■AD1570年 「マルーン誕生」「パルマーレス誕生」

フォン人の逃亡奴隷が集団化して「マルーン」と呼ばれた。マルーンは「キロンボ」と呼ばれる集落を建設し、ブラジル北東部に逃亡奴隷の国家「キロンボ・ドス・パルマーレス」を建設した。AD16??年には、マルーン的首領ズンビが独立国家としての「パルマーレス」を繁栄させた。

■AD1592年 「文禄の役」「慶長の役」

朱元璋に弾圧を加えられると、紅巾族は中国を脱出して日本に落ち延びた。その紅巾族の子孫が小西氏と宗氏である。宗義智（マニ教）、小西行長（フォン族）は、倭寇を統べる松浦鎮信（マトゥーラ族）、有馬晴信（エラム人）、大村喜前、宇久純玄（ブギス族）と共に朝鮮出兵、第一軍の一番隊を担った。つまり、「文禄の役」「慶長の役」とは、秀吉の案ではなかった。

「文禄の役」「慶長の役」は小西氏、宗氏の案であり、中国大陸に改めて覇を唱え、朱氏に対する先祖の雪辱を晴らすのが目的だったのだ。二番隊は、加藤清正（イギリス人ゴドー）と鍋島直茂（ネパール人）、相良長每（サカラバ族）が務めた。三番隊は、黒田長政（ケルト人）、大友吉統（ボルジギン家）が務めた。四番隊は、毛利勝信（マオリ族）、島津義弘（イギリス人スミス）が務めた。五番隊は、福島政則（ブギス族）、戸田勝信（ハルシュタット人）、長宗我部元親（カペー家）、蜂須賀家政（ノルマン人）、生駒親正（ユカタンのクメール人）、来島通行（釜山倭館の村上氏）が務めた。六番隊は、小早川隆景（マプングプエ人）、立花鎮虎（ニョロ人）、毛利秀包、高橋統増（ダキア人）、筑紫廣門（フェニキア人）、毛利輝元が務めた。第二軍の七番隊は、宇喜多秀家（宇久+喜多川）、増田長盛。大谷吉継（ホータン）、加藤光泰、石田三成（ウァシュテペック家）、前野長康が務めた。八番隊以降は割愛するが、豊臣秀吉、木下氏などからしてキガ族の系統に連なっている。だが、「文禄の役」「慶長の役」に参加した面々も非常に国際色豊かであり、由緒正しい王統に属していた。また、受けて立った明の朱氏や李氏朝鮮の李氏も、リトアニア大公国の王統に連なる人々である。つまり、両者は東アジア人の姿をしてはいたものの、先祖の顔ぶれを一瞥すれば、「文禄の役」「慶長の役」が非常に国際的な戦争だったことが分かる。

■AD1658年 「コンバウン誕生」

オリバー・クロムウェルは、死んだと見せかけて一族を率いてイギリスを脱出し、カリブ海に及んだ。クロムウェルは逃亡奴隷マルーンに出会うと、その反骨気質にほれ込み、連合して太平洋を横断した。彼らは「コンバウン」を称した。コンバウンの名の由来はクロムウェルの祖キンブリとフォン（マルーンはフォン人が多い）の組み合わせである。キンブリ+フォン=キンフォウン=コンバウンとなる。

■AD1752年 「コンバウン朝誕生」

アジアに達すると、コンバウンの連合体はミャンマーに上陸した。彼らは、しばらくモン族の世話になり、その後に、ペゲー（朴氏）のモン族（文氏）と共に「タウングー朝」に攻め込み、首都を陥落させた。AD1752年、クロムウェルとマルーンの異色の連合による「コンバウン朝

」がミャンマーに開かれた。

その後、コンバウン朝は、AD1757年にモン王国の首都ペゲーを占領し、AD1766年に「アユタヤ朝」を滅ぼしている。その後、クロムウェルは皮肉にも同郷の人々、大英帝国と相まみえることとなる。AD1824年、「第1次英緬戦争」が起こり、「第3次英緬戦争」を経て、AD1886年に大英帝国がミャンマーを英領インドに併合したため、コンバウン朝は滅亡した。

■AD1907年 フランソワ・デュヴァリエ生誕

クロムウェルとマルーンの連合体は、AD1886年の「コンバウン朝」滅亡と共に解散した。ミャンマー人の顔をしたマルーンは、単身太平洋を横断してハイチに至り、ハイチ共和国第32代大統領フランソワ・デュヴァリエを生む母体を形成する。そして、AD1907年にフランソワ・デュヴァリエは誕生した。ハイチ共和国第32代大統領に就任すると、デュヴァリエは秘密警察を母体にした準軍組織「トントン・マクート」を創設して憲法を廃止し、終身大統領を宣言してハイチに君臨した。

■AD1928年 ジャン＝マリー・ル・ペン生誕

国民戦線創始者。

■AD1948年 ハサン・ロウハーニー生誕

イラン・イスラム共和国第7代大統領に就任している。

■AD19年 ジェイムズ・パンコウ生誕 「シカゴ誕生」

■AD1951年 ジョー・リン・ターナー生誕

◆トバルカイン（ルハンガ）の歴史

■ 4万年前 「テュポン（タイパン）誕生」

クロノスの姦計により、古代ギリシアを追放されたチュクウは、オーストラリアに帰還していた、その後、ゼウスに敗北したクロノスがオセアニアに亡命すると、チュクウ（ギガース）はクロノスに操られ、全能神ゼウスを倒すために「怪物テュポン」を結成し、古代ギリシアに侵攻した。テュポンの名の由来はチュクウとルハンガの組み合わせである。チュクウ+ルハンガ=チュハン=テュポンとなる。テュポンは、オーストラリアでは「虹蛇タイパン」と呼ばれた。

■ 4万年前 「天香語山命誕生」

「ギガントマキア」に敗北したテュポンは、ギリシアから台湾に上陸した。この時、台湾は初めて「台湾」と呼ばれた。台湾の名の由来はテュポンだが、テュポンの名は「ジャパン」の語源でもある。テュポンを解散したギガースは、イマナ、ニヤメと混合して「アメノカグヤマ」を成した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとギューゲースとニヤメの組み合わせである。イマナ+ギューゲース+ニヤメ=イマナギューゲヤメ=アメノカグヤマとなる。

■ 3万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■ 3万年前 「トバルカイン誕生」

「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したテュポン（天香語山命）は、天津神の同僚であるアルキュオネウス（天之御中主神など）と共に「トバルカイン」を生んだ。トバルカインの名の由来はテュポンとアルキュオネウスの組み合わせである。テュポン+アルキュオネウス=テュポアルキュオネ=タパルキュオン=トバルカインとなる。

■ 3万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3万年前 「テワ族誕生」「ティワ族誕生」「トワ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、コロラド流域残留を決めた。彼らは現地人と混合して「テワ族」「ティワ族」「トワ族」など、後にプエブロ族に数えられる部族を生んで

いる。トバルカイン＝トワルクイン＝トワ＝テワ＝ティワと変遷が加えられている。

■ 3万年前 「ルカイ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、台湾に移住した後、「ルカイ族」を生んだ。ルカイの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝ルカイン＝ルカイとなる。

■ 3万年前 「ラガイン族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、台湾に移住した後、ミャンマーに上陸して「ラガイン族」を生んだ。ラガインの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝ルカイン＝ラガインとなる。

■ 2万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 2万5千年前 「南岳衡山誕生」「西岳華山誕生」「北岳恒山誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したトバルカイン（ルハンガ）は、「南岳衡山（ヘンシャン）」「中岳華山（ファシャン）」「北岳恒山（ヘンシャン）」を築いた。ヘン、ファの名の由来はルハンガである。ルハンガ＝ルヘンガ＝ヘン（衡）（恒）となり、ルハンガ＝ルファンガ＝ファ（華）となる。これらの伝説的な山は中国にあるとされているが、実際には南極大陸にある。「南岳衡山」はカークパトリック山（4528m）とマークハム山（4350m）のことであり、「西岳華山」はシドリー山（4187m）のことであり、「北岳恒山」はプラトー山（4191m）のことである。

■ 2万年前 「ヴィマーナ誕生」

ヴィマーナ（UFO）の開発には科学の種族だけでなく、ハムの一族が加わった。それは、ヴィマーナの名前でわかる。ヴィマーナの名前とハムの名前は成立過程が同じなのだ。ハムとヴィマーナの名は、新水生人ヴィディエとイマナの組み合わせである。ヴィディエ＋イマナ＝ヴィマーナ＝ヴィマーナとなる。

■ 2万年前 「羅侯山の大航海時代」

■ 2万年前 「侯都大帝誕生」「羅侯山誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、冥府神「侯都大帝（フェンドウ）」「太乙救苦天尊（タイジュクウ）」を生んだ。フェンドウの名の由来はルハンガとヴィディエの組み合わせであり、タイジュクウの名の由来はヴィディエとチュクウの組み合わせである。ルハンガ+ヴィディエ=ハンディエ=フェンドウとなり、ヴィディエ+チュクウ=ディエチュクウ=タイジュクウとなる。

彼らは、高さが2万7000メートルもある火星の火山オリンポスを「羅侯山（ルオフェン）」と呼んだ。ルオフェンの名の由来はルハンガである。ルハンガ=ルオハンガ=ルオフェンとなる。「九幽地獄」「二十四獄」と呼ばれた施設で、反自然的な罪を裁かれたできそこないたちは、正統な種の存続を願いながら、巨大なピラミッドなどの建設に従事し、黙って死んでいった。

■ 2万年前 「変成王誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したルハンガは、火星に降り立ち、十王に属する「変成王（ビアンチェン）」を築いた。ビアンチェンの名の由来はルハンガ、ジェンギの組み合わせである。ルハンガ+ジェンギ=ハンジェン=ビアンチェン（変成）となる。ルハンガは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 1万3千年前 科学の種族、核兵器を開発

順番としては、UFOよりも核兵器の方が先ではないか？と考える向きもあると思う。だが、科学の種族は大変平和的な人たちであるため、UFOの後に、タナトスを焼くために核兵器が開発された。

■ 1万3千年前 「アトランティス滅亡」

この頃、科学の種族は核爆弾を開発したが、当時、ゼウスがその一報を聞いて喜んだ。古代ギリシア・アトランティス王国（オーストラリア南）では、ディオニュソスが「エレウシス密儀」を

布教する際、「入信しなければ殺す」と多くの人々を脅し、大量の信者を獲得していた。大量の信者獲得は、発言力の増大と共に、そのまま信者の離反防止につながる。そのため、タナトスの宗教は大量の信者の獲得を命題としている。

ディオニュソスは、その大量の信者たちをアトランティスのインフラ全般に送り込んで、これを掌握した。タナトスの発想では、王にならずとも、人民の生活を支配すれば、優れた王にも勝てるのだ。インフラ掌握により、ディオニュソスが何をしていても人々は怒ることも暴れることも弾劾することなく、怒りを飲み込んで幸福を演じていた。人々は、悪と戦って自由を得るのではなく、自由と生活を保障してもらうために、戦いを放棄し、悪に服従していたのだ。本能・感受性・意志の放棄は、非常な罪である。

ディオニュソスの非人間じみた圧制により、多くの人々が苦しんでいた。国民は「幸福な国の国民」を演じさせられていたのだ。抑圧的な生活により、精神疾患が蔓延した。だが、精神疾患患者はディオニュソスの命を受けた信者たちよってことごとく排除されてしまった。なぜなら、幸福な国で精神疾患を患うということは、国家がウソをついている証だからだ。ギリシア神話では、ポセイドンとアテネが対立する説話が紹介されている。これは、ディオニュソスが篡奪したポセイドンの国アトランティスとアテネが君臨していた時代の古代ギリシアとの対立を意味している。

「太陽神アポロン」を祀っていたアベラム族や全能の神ゼウスも、このことを憂慮していたが、数で圧倒するディオニュソスには対抗できなかった。そこへ、科学の種族が核兵器を開発した。ゼウスは、ディオニュソスと彼らに追随する人々を皆殺しにするために、科学の種族に核兵器の使用を要請した。人喰い人種を嫌悪していた科学の種族はこれを快く承諾した。これにより、ディオニュソスが篡奪したアトランティスは滅亡した。オーストラリア南部には、テクタイトが散乱しているが、これは当地にアトランティスの都市が存在していたことを意味している。

■ 1万3千年前 科学の種族、南極大陸の北方引き上げを計画

虚言症を患うタナトスと共存することは不可能だと考えていた科学の種族（エラド、マハラエル、トバルカイン）は、旧世界から切り離された南極大陸の立地条件を高評価していた。そして、彼らは、半分凍結している南極大陸を有効活用すべく、核兵器で地軸を動かして南極をもっと北方に引き上げようという計画を立てた。だが、これに懸念を示したのはノア、セム、ハム、ヤペテ、メトセラ、レメク、エノス、エノクの面々であった。

■ 1万3千年前 「パンドラの箱」

ゼウスは、科学の種族が核爆弾によって地軸を揺らす計画を練っていることを知り、懸念を表明していた。しかし、強行組のルハンガのトバルカインはゼウスの懸念に反感を示した。ルハンガ

のトバルカインはタルタロス（オーストラリア東部）に隠れ、巨大核兵器の開発を進めた。この時の拠点が「パンドラ」と呼ばれた。

パンドラの名の由来はルハンガとタルタロスの組み合わせである。ルハンガ+タルタロス=ハンタル=パンドラとなる。「パンドラの箱」の説話は、世界中の王族の反対を押し切り、ルハンガのトバルカインを筆頭にチュクウ、オロクン、クウォスのトバルカインが地軸の移動計画を強行したことを意味している。つまり、パンドラの箱が開いたのだ。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「科学の種族の大移動時代」

■ 1万3千年前 科学の種族、スコットランドに移住

「科学の種族の大移動時代」に参加したエラド一行は、文明継承を胸に原動機付きの船舶、或いは飛行機でペルーやスコットランドに移住した。文明継承組のエラド、マハラエル、トバルカインは、いわゆる「宇宙人」の祖である。彼らは、このスコットランドに建てた基地にてUFOを発明し、科学の種族として科学文明を深化させたと考えられる。

■ BC 5千年 「初代テーバイ王国誕生」

火星から引き上げたルハンガは、現サハラに都市を築いた。その後、エウローペーがヨーロッパから西アフリカに移住し、カドモスも、これに倣って西アフリカに移った。エウローペーが築いたヨルバに身を寄せたカドモスは、そこから更にニジェール河を遡り、緑豊かだったサハラに入植し、科学の種族トバルカイン（ルハンガ）と共に王国を築いた。この時に「テーバイ」が生まれた。テーバイの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=トールバルカイン=テーベとなる。

■ BC 5千年 「方丈山誕生」

サンガリオスの招待を受けたルハンガは、現チリに移住し、「方丈山（ファンツァン）」を築いた。ファンツァンの名の由来はルハンガとジェンギの組み合わせである。ルハンガ+ジェンギ=ハンジェン=ファンツァン（方丈）となる。方丈山は中国にあるとされているが、アンデス山

中に存在した。

■BC32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC32世紀 「第2代テーバイ王国誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、トバルカインはサハラ砂漠と化した故地から逃れてインダス流域に入植した。「ソドムとゴモラ」を実施した彼らは、科学放棄を決意し、出羽国から来たダヴィデの人々に託した。その代わりに、彼らは「第2代テーバイ王国」を建設し、その後、彼らの生活の痕跡は「インダス文明」と呼ばれた。

■BC32世紀 「プント王国誕生」

更に、ルハンガのトバルカインは、「シバ王国」を築いたカゾオバのトバルカインと連合し「プント王国」を築いた。プントの名の由来はパンドラである。パンドラ=パンド=プントとなる。

■BC32世紀 「パンジャブ誕生」

シバ王国は、トバルカインの子孫であるテーバイ人が建設したプント王国と連合して「パンジャブ」を生んだ。パンジャブの名の由来はプントとシバの組み合わせである。プント+シバ=プンシバ=パンジャブとなる。

■BC1027年 「パーンダヴァ族誕生」

プント人とシバ人は連合して「パーンダヴァ族」を築いた。これは、伝説のプント王国とシバの国が密接に交流を行っていた証だ。しかし、残念ながら、夜叉・羅刹（能登族・ダナーン人）が、同じインダス流域に位置する科学の種族の国「テーバイ」の篡奪を狙っていた。夜叉・羅刹は、例によってインチキ宗教を創設し、最下層にいる多くのパーンダヴァ族を信者として獲得し、パーンダヴァ族のインフラを掌握して、数で圧倒する形でパーンダヴァの有力者を排除してしまった。

■BC1020年 「マハーバーラタ戦争」

■BC6世紀 「パンチャーラ王国誕生」

BC1027年の「マハーバーラタ戦争」でパンジャブが荒廃に帰した際、パンドラはガンジス流域に避難した。インドの6王国時代、彼らはそのまま、「パンチャーラ王国」を建設している。パンチャーラの名の由来はパンドラの組み合わせである。パンドラ=パンジャーラ=バンチャーラとなる。

■BC317年 「パンドヤ王国誕生」

マウリヤ朝がインドを統一すると、パンチャーラ人は、南インドに上陸した。彼らは「パンドヤ王国」を建てた。パンドヤの名の由来はプントである。プント=プントア=パンドヤとなる。

■AD230年 「ヴァンダル族誕生」

中央アジアからバルト海に移動したアント人は、現地人と混合して「ヴァンダル族」を成した。ヴァンダルの名の由来はパンドラである。パンドラ=ヴァンドラ=ヴァンダルとなる。

■AD428年 ガイゼリック、初代王に即位 「ヴァンダル王国誕生」

AD375年にゲルマン人の大移動が始まると、ヴァンダル人はスエビ人、アラン人などと共にイベリア半島になだれ込んだ。その後、ヴァンダル人は来たアフリカに移ってチュニジアを支配下に置き、「ヴァンダル王国」を築いた。当時、北アフリカには人喰いの神モレクを祀るタナトスの血統がいたが、ヴァンダル人は彼らを皆殺しにしながらチュニジアに進軍した。

■AD534年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■AD534年 「ビントロ誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したヴァンダル人は、ジャワ島に「ビントロ」の名を残

した。ビントロの名の由来はヴァンダルである。ヴァンダル=ヴァンドロ=ビントロとなる。

■AD534年 「バユンドゥル誕生」

日本からモンゴルに渡ったケルト人とマルコマンニ人は、現地人と混合して「ケレイト」「メルキト」を形成した。ケレイトの名の由来はケルトであり、メルキトの名の由来はマルコマンニの人である。ケルト=ケルイト=ケレイトとなり、マルコマンニの人(ト)=マルコト=マルキトとなる。一方、ヴァンダル族はオグズ24氏族に参加し、「バユンドゥル」を称した。バユンドゥルの名の由来はヴァンダルである。

■AD11世紀 「土肥氏誕生」

AD11世紀頃にチョーラ朝に飲み込まれてパンドヤ王国が消滅すると、パンドヤ人はインドを離れて日本に移住した。この時に、「坂東」「土肥」「土井」などの名前が生まれた。坂東、土肥の名の由来はパンドヤである。パンドヤ=パンドア=坂東となり、パンドヤ=パンドイ=土肥となる。坂東八平氏の代表格のひとつ「土肥氏」からは土肥実平が輩出されているが、彼は「鎌倉幕府」の始祖である源頼朝に兄として頼られていた。

■AD1378年 カラ・ユルク・オスマン、初代君主に即位 「白羊朝誕生」

AD1378年、バユンドゥルのカラ・ユルク・オスマンは初代君主に即位して「白羊朝」を東部アナトリアの地に開いた。AD1508年に白羊朝が滅ぶと、バユンドゥルはヨーロッパに移住して「ファスビンダー」「ピンター」などの名を成した。この系統からは作家ハロルド・ピンター、映画監督ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーが輩出されている。

■AD1857年 メリー・ベーカー・エディ、教会を設立 「クリスチャン・サイエンス誕生」

AD1857年、ヒンドゥー教・ヴィシュヌ派のパンジャブ人は、セポイの乱を機に、インドを離れてアメリカに移住した。この系統からはAD1879年に「クリスチャン・サイエンス」を創立するメリー・ベーカー・エディが輩出されている。一方、インドから中国に移住した一派から「幸福の科学」の創始者大川隆法が輩出されている。クリスチャン・サイエンスは、科学つながりで「サイエントロジー」「幸福の科学」と祖を同じくしていることがわかる。彼らが科学を

付け足したのは、プント国、シバの王国（パンジャブ）時代に交流を重ねていた科学の種族トバルカイン（善神デーヴァ）に因んでいると考えられる。

■AD1857年 L・ロン・ハバード、教会を設立 「サイエントロジー誕生」

AD1857年、ヒンドゥー教・ヴィシュヌ派のパンジャブ人は、セポイの乱を機に、インドを離れてアメリカに移住した。この系統からはAD1954年に「サイエントロジー」を創立するL・ロン・ハバードが輩出されている。彼らは、科学つながりで「クリスチャン・サイエンス」「幸福の科学」と祖を同じくしていることがわかる。彼らが科学を付け足したのは、プント国、シバの王国（パンジャブ）時代に交流を重ねていた科学の種族トバルカイン（善神デーヴァ）に因んでいると考えられる。

■AD1945年 ライナー＝ヴェルナー・ファスビンダー生誕

■AD1986年 大川隆法、神理伝道機関を設立 「幸福の科学誕生」

インドを脱出してアメリカに渡った仲間とは別に、中国に移住したシェルデン人は、地下教会に属した。しかし、AD1966年に文化大革命がおきると、中国を脱出して日本に移住した。この時、大川隆法はまだ少年だったと考えられる。AD1981年、大川隆法は高級霊界から啓示を受けたという。その後、AD1986年に「幸福の科学」を設立している。ヒンドゥー教・ヴィシュヌ派、中国の地下教会の影響下にあるため、幸福の科学からは、雑多だが近未来的な印象を受ける。彼らは、ヒンドゥー教・ヴィシュヌ派時代の家族であるクリスチャン・サイエンス、サイエントロジーに倣って、自身の名に「科学」を加えた。彼らが科学を付け足したのは、プント国、シバの王国（パンジャブ）時代に交流を重ねていた科学の種族トバルカイン（善神デーヴァ）に因んでいると考えられる。

ルハンガの歴史（アグリオス）

◆ラティヌス（ロディア）の歴史

■45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス」を生んでいる。クリュテイオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+クウォス=グリオディエオス=クリュテイオスとなる。

■45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■40万年前 「キルーテ族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北西部沿岸（現バンクーバー周辺）に居を構えたクリュテイオスは「キルーテ族」を称した。キルーテの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス=キルーテイオス=キルーテとなる。獣人は、アボリジニの顔をしていたクウォスと混合することで、マヤ人の顔を得たと考えられる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ロディア誕生」

「獣人の大移動時代」に参加し、その後に「カオスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、オーストラリアに移住すると「ロディア」を生んだ。ロディアの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス＝クロティアス＝ロディアとなる。その後、ロディアは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ロディ族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したロディアは、マレー半島に「ロディ族」を生んだ。ロディの名の由来はロディアである。

■ 4万年前 「ティエステス誕生」

ペロプスに次ぐ、ピサ王国を治める次世代のオケアーニスとして、マレー地域から来たロディアがメーティスと組んで「ティエステス」を生んだ。また、ハタミ人、セトの連合体ポセイドンがオーストラリア大陸に上陸すると、彼らはエロスと組んで「アトラス」を生んだ。アトレウス（アトラス）は、ピサ王国に進出してペロポスオケアーニスに属する「クリュシッポス」と対立した。

■ 4万年前 「アトランティス王国誕生」

ピサ王国の覇権を巡って、クリュシッポス、ティエステスが争っているところに、ハタミ人、セトの連合体ポセイドンが訪れた。ハタミ人はタルタロスの住人エロスと組んで「アトラス」を生んだ。その後、ポセイドンの後裔アトレウス（アトラス）は、ティエステスと連合してクリュシッポスと対立する。オケアーニス争いを好まないが、タンナ島のタナトスが裏で糸を引き、ティエステスを焚きつけてクリュシッポスを滅ぼしている。この時に「アトランティス王国」が誕生した。アトランティスの名の由来はアトラスとティエステスの組み合わせである。アトラス+ティエステス=アトラテス=アトランティスとなる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年 「ルデ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」によってオーストラリアからメソポタミアに移住し、その後、「アヌンナキの大移動時代」に参加したロディアは、スカンジナビア半島に移住し「ルデ」を生んだ。ルデの名の由来はロディアである。ロディア=ロディ=ルデとなる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5千年 「ラティウム誕生」「ラティヌス誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したルデは、エノスと共にカスピ海沿岸に入植した。その後、エノス（アイネイエース）と組んで「ラティヌス」を祀り、「ラティウム王国」を建設した。ラテン、ラティヌスの名の由来はルデとエノスの組み合わせである。ルデ+エノス=ルディノス=ラティヌス=ラテンとなる。伝説のラテン王国は、イタリアではなく、現在のカ

ラクーム砂漠、キジルクーム砂漠辺りに存在した。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC 32世紀 「スファラディ（パルティア）誕生」

ゼブルン族は、ラテン人（ロディア）と組んで「スファラディ」を生んだ。この時に「パルティア」の名も同時に生まれた。スファラディ、パルティアの名の由来はゼブルンとロディアの組み合わせである。ゼブルン+ロディア=ゼブロディア=セフロティア=スファラディとなり、ゼブルン+ロディア=ゼブロティア=プロティア=パルティアとなる。

■BC 32世紀 「レディン人誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、モルディブ諸島に移住したラテン人は、「レディン人」を称した。レディンの名の由来はラテンである。ラテン=ラデン=レディンとなる。

■BC 32世紀 「ロードス島誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、ロードス島に移住したラテン人（ロト）は、この島を初めて「ロードス島」と命名した。ロードスの名の由来はロトである。また、ロトの名の由来はルデである。

■BC 1072年 「マハーバーラタ戦争」

■BC 1072年 ラテン人、イタリア半島に移住

「マハーバーラタ戦争」を機に、ラテン人、サビニ人、ローマ人はイタリア半島に移住した。

■BC 753年 「ブルトゥス家誕生」

スファラディからは、元老院を作った「ブルトゥス家」が輩出されている。ブルトゥスの名の

由来はスバルとロードスの組み合わせである。スバル+ロードス=バロードス=ブルトウスとなる。

■BC753年 「リディア人誕生」

共和制ローマが誕生すると、これを嫌ったスファラディは、アナトリア半島に移住した。この時に「リディア人」が生まれた。リディアの名の由来はロディアである。ロディア=リディアとなる。

■BC716年 「リディア王国誕生」

リディア人は、チュクウの子孫であるギゲスと組んで「リディア王国」を建てた。

■BC7世紀 「パルティア人誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したスファラディは、中央アジアに移住した。スファラディは「パルティア」を称した。パルティアの名の由来はスファラディである。スファラディ=スパラディア=パルティアとなる。その後、パルティア人は、BC250年にセレウコス朝から独立して「パルティア王国」を建設している。

■BC546年 「リトアニア人誕生」

リディア人は、リディア王国が滅ぶと、バルト海に移住した。この時に「リトアニア人」が生まれた。リトアニアの名の由来はリディアである。リディア=リディアニア=リトアニアとなる。

■AD10世紀 「モルドバ誕生」

モルディブ諸島を離れたレティン人は、故地であるカスピ海に近いロシアに移住した。この時に「モルドバ人」が生まれた。モルドバの名の由来はモルディブである。モルディブ=モルディバ=モルドバとなる。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD11世紀 「リトアニア公国誕生」

「ゲルマン人の大移動」、「ヴァイキング」の登場、そしてシトー会が指揮する「北方十字軍」の到来を機に平和な日常は一変し、戦争が常となった。更に、中国・朝鮮から「唐」「新羅」「高句麗」「宋」を建てた李氏、金氏、閔氏、朱氏、趙氏などの王族が到来したことによって一瞬の内にリトアニアは大国となり、ロシア帝国・ポーランド王国と肩を並べる強国となった。

■AD12世紀 「モルダヴィア誕生」

デーン人は、スウェード人に混じってロシア地域を汚染し始めていた。デーン人は、優れた者を「神のため」と称して殺していた。これを見たトバルカインは激怒し、汚染地域を核兵器で爆破し、焼き払った。ロシア地域は砂漠化していないので、この時、使用された核兵器は少量である。ただ、現地には、核兵器でしか出来ないテクタイトが無数に転がっている。この時、混乱の内にロシアを離れたモルドバ人は黒海のほとりに「モルダヴィア公国」を建設した。

■AD13世紀 「ラトビア誕生」

AD13世紀、モンゴル軍がロシアに侵攻すると、モルダヴィア人は、祖を同じくするリトアニア人の地に赴き、バルト海に移住して「ラトビア人」を称した。ラトビアの名の由来はモルダヴィアである。モルダヴィア＝ルダヴィア＝ラトビアとなる。

■AD14世紀 「リトアニア大公国誕生」

■AD1853年 セシル・ローズ生誕 「イギリス南アフリカ会社誕生」

■AD1962年 W・アクセル・ローズ生誕 「ガンズ・アンド・ローゼズ誕生」

◆ラドンの歴史

■45万年前 「グラティオン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオン」を生んでいる。グラティオンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+ウェネ=グリオディエウェネ=グラティオンとなる。

■45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■40万年前 「クリー族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）に居を構えたグラティオンは「クリー族」を称した。クリーの名の由来はグラティオンである。グラティオン=クリティオン=クリーとなる。

■40万年前 「シャイアン族誕生」

亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）から大平原（ユタ周辺）に居を構えたグラティオンは「シ

「シャイアン族」を称した。シャイアンの名の由来はグラティオンである。グラティオン＝グラチェイオン＝チャイアン＝シャイアンとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ラドン誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したグラティオンは、ルハンガが分離することで「ラドン」を生んだ。ラドンの名の由来はグラティオンである。グラティオン＝ラティオン＝ラドンとなる。その後、ラドンは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ AD1840年 オーギュスト・ロダン生誕

ロダンの名の由来はラドンである。ラドン＝ラダン＝ロダンとなる。ロダンは「考える人」を製作した彫刻家として知られている。当初、「考える人」は、「地獄の門」を覗き込む男というテーマで製作され、「詩想を練るダンテ」と呼ばれていた。だが、この像を鋳造したリュディエによって「考える人」と命名された。リュディエの名の由来はグラティオンである。奇しくも、彼はロダンと祖を同じくする人である。

■ AD1840年 オディロン・ルドン生誕

ルドンの名の由来はラドンである。ラドン＝ルドンとなる。画家であり、リトグラフの製作で知られている。リトグラフ作品集に「夢の中で」「エドガー・ポー」がある。

ルハンガの歴史（ズルヴァーン）

◆エウローペーの歴史

■40万年前 「エバシの大航海時代」

■40万年前 「エウローペー誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したアジアーは、ルハンガと組んで東南アジアに「エウローペー」を生んだ。エウローペーの名の由来はアジアーとルハンガの組み合わせである。アジアー+ルハンガ=アールハ=アールーハー=エウローペーとなる。その後、エウローペーは大洋の娘たちに参加した。

■40万年前 「エウリュノメー誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したエウローペーは、ニャメと組んで東南アジアに「エウリュノメー」を生んだ。エウリュノメーの名の由来はエウローペーとニャメの組み合わせである。エウローペー+ニャメ=エウロニャメとなる。その後、エウリュノメーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「アルペイオス誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したエウローペーは、東クウォスと組んで南アジアに「アルペイオス」を生んだ。アルペイオスの名の由来はエウローペーとクウォスの組み合わせである。エウローペー+クウォス=エウローペウォス=アルペイオスとなる。その後、アルペイオスは河川の娘たちに参加した。

■30万年前 「アラペシュ族誕生」

アルペイオスは、パプアに入植して「アラペシュ族」を生んだ。アラペシュの名の由来はアルペイオスである。アルペイオス=アラペイオシュ=アラペシュとなる。

■ 30万年前 「ズルヴァーンの大移動時代」

■ 30万年前 「ズルヴァーン誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、ルハンガと共にイランに入植した。彼らは「ズルヴァーン」を生んだ。ズルヴァーンの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=シアルハン=サルハーン=ズルヴァーンとなる。彼らは、ズルヴァーンの統治による永遠なる平和の時代、光の楽園の時代を作った。

■ 30万年前 「アシェラーフ族誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、現ソマリアに移住し、ルハンガと共に「アシェラーフ」を生んだ。アシェラーフの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=アシアルハ=アシャルーハ=アシェラーフとなる。彼らは、ソマリア人の祖となる。身長が4 mのルハンガと身長が140 cmのエスが混合することにより、ソマリア人～セネガル人は身長が2 mくらいになった。

■ 30万年前 「ウォロフ族誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したアシアーは、現セネガルに移住し、ルハンガと共に「ウォロフ」を生んだ。ウォロフの名の由来はアシアーとルハンガの組み合わせである。アシアー+ルハンガ=アルハ=ウォルハ=ウォロフとなる。彼らは、セネガル人の祖となる。身長が4 mのルハンガと身長が140 cmのエスが混合することにより、ソマリア人～セネガル人は身長が2 mくらいになった。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「ヌミディア誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したエウリュノメーは、ディオナーと共に北アフリカに移住し、当地を「ヌミディア」と命名した。ヌミディアの名の由来はエウリュノメーとディオ

ーネーの組み合わせである。エウリュノメー+ディオーネー=ノメーディオ=ヌミディアとなる。

■ 30万年前 「アルプス誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したアルペイオスは、パプアを離れてスイスに入植した。この時に「アルプス」の名が生まれた。アルプスの名の由来はアルペイオスである。アルペイオス=アルポス=アルプスとなる。

■ 30万年前 「ヨーロッパ誕生」「エウリュディケ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したエウローペーは、テュケーと共にヨーロッパに移住した。この時から、彼の地は「ヨーロッパ」と呼ばれるようになった。この時、エウローペーはテュケーと組んで「エウリュディケ」を生んだ。エウリュディケの名の由来はエウローペーとティケーの組み合わせである。エウローペー+ティケー=エウロティケ=エウリュディケとなる。

■ 30万年前 「オルペウス誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したエウローペーは、ケルケイースと共にヨーロッパに移住した。オルペウスの名の由来はエウローペーとケルケイースの組み合わせである。エウローペー+ケルケイース=エウロペイース=オルペウスとなる。オルペウスは、妻を冥界から連れ戻そうとする説話で知られている。これは、オルペウスが、タナトスに支配されたエウリュディケをタナトスから解放しようと試みた話である。

しかし、知られているように、オルペウスは、エウリュディケの女たちに八つ裂きにされて殺される。タナトスにインフラを掌握されていたエウリュディケは、生活と自由の保障のために悪に従い、家族を殺す以外の選択肢がなかったということだ。タナトスの信者、恐怖に支配された人間に意志はないのだ。

■ 7万年前 「第1次アルゴスの大航海時代」

■ 7万年前 「オレステス誕生」

「アルゴスの大航海時代」に参加したエウローペーは、ギリシアからオーストラリアに移住した。時が経ち、タナトスは、優れた王アガメムノンを排除したいと常々考えていた。そこで、タナトスは卑怯な手段でアガメムノンの同盟者であるクリュタイムネストラをタネ崇拜の信者として獲得し、アガメムノンに対して離反させ、姦計によって滅ぼした。クリュタイムネストラの名の由来はクリュティア、クリュメネー、エレクトラの組み合わせである。クリュティア+クリュメネー+エレクトラ=クリュティアメネクトラ=クリュタイムネストラとなる。

しかし、アガメムノンの次世代を担う同盟者であるオレステス、エレクトラがアガメムノンの雪辱を果たし、タナトスと裏切り者のクリュタイムネストラを討っている。オレステスの名の由来はエウローペーとアカステーの組み合わせである。エウローペー+アカステー=エウロステー=オレステスとなる。以上、ギリシア神話に収められている、呪われたアトレウス王家の説話は、じつは、ギリシアで起きた話ではない。伝説のアトランティス王国で起きた話である。

■ 7万年前 「宇迦之御魂神誕生」

一部のオケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「宇迦之御魂神」が誕生した。「宇迦之御魂神（ウカノミタマ）」の名の由来はオケアーノスとエウリュノメーとティアマトの組み合わせである。オケアーノス+エウリュノメー+ティアマト=オケノメーティアマ=ウカノミタマとなる。

■ 7万年前 「玉依毘売命誕生」

一部のオケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「玉依毘売命」が誕生した。「玉依毘売命（タマヨリ）」の名の由来はティアマトとエウリュノメーの組み合わせである。ティアマト+エウリュノメー=ティアマエウリュ=タマヨリとなる。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「ヨルバ誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したエウローペーは、西アフリカに入植した。彼らは、現地人と混合して「ヨルバ」を築いた。ヨルバの名の由来はエウローペーである。エウローペー

=ヨーロッパ=ヨルバとなる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年 「アルパクシャデ誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したエウローペーは、クサンテーと連合して「アルパクシャデ」を生んだ。アルパクシャデの名の由来はエウローペーとクサンテーの組み合わせである。エウローペー+クサンテー=エウロペクサンテ=アルパクシャデとなる。

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5千年 「クマルビ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアルパクシャデは、メソポタミアの地でゴメルと連合し、「クマルビ」を生んだ。クマルビの名の由来はゴメルとアルパクシャデの組み合わせである。ゴメル+アルパクシャデ=ゴメルパ=クマルビとなる。

■ BC 5千年 「ソドム誕生」

「バビロンの塔」を機に、アルパクシャデはルデと共にチャドに入植し、「ソドム」を建てた。ソドムの名の由来は、クマルビと同じく、アルパクシャデとゴメルの組み合わせである。アルパクシャデ+ゴメル=シャデメ=ソドムとなる。

■ BC 32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■ BC 32世紀 「エウロペ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、アルパクシャデはソドムから脱出し、ギリシアに移住した。アルパクシャデは分離し、エウローペーはエウボイア島に入植して「エウロペ」を名乗り、クサンテーはフォキスに入植した。

■ B C 3 4 3 年 「ポントス人の大航海時代」

■ B C 3 4 3 年 「アルバニア王国誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したエウロペは、ピテュニアを拠点に周辺に自身の拠点を求めた。エウロペは「アルバニア王国」を築いた。アルバニアの名の由来はエウロペである。エウロペ=エウロペニア=アルバニアとなる。

■ A D 1 1 4 年 「ポントス人の大航海時代」

■ A D 1 1 4 年 「ト部氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したアルバニア人は、現地人と混合して「ト部氏」を生んだ。ト部の名の由来はアルバニアである。アルバニア=ウラベニア=ト部となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ヨルバ人誕生」

「大和人の大航海時代」に参加したト部氏は、ブリテン島を発ち、西アフリカに移住した。日本人、イギリス人の混合体であるト部氏は、先祖が築いた「ヨルバ」の地に入植し、アフリカ人と混合して「ヨルバ人」を形成した。ヨルバの名の由来はト部と同じくエウロペである。

■ A D 8 4 8 年 ケネス・マカルピン、スコットランド統一 「マカルピン家誕生」「アルバ王国誕生」

A D 7 世紀頃、ヨルバ人がナイジェリアからブリテン島に帰還し、スコットランドに拠点を移した。マカルピンの名の由来はマックとヨルバの組み合わせである。マック+ヨルバ=マックヨルバン=マカルピンとなる。マカルピン家からは第19代スコットランド王マクベスなどが出た。

■ A D 1 4 世紀 「カルヴァン誕生」

アサル朝滅亡を機に、マカルピン家はスコットランドを離れてフランスに移住した。彼らは「カルヴァン」を称した。カルヴァンの名の由来はマカルピンである。マカルピン=マカルヴァン=カルヴァンとなる。

■ A D 1 4 世紀 「アルバニア人誕生」

アサル朝滅亡を機に、マカルピン家はスコットランドを離れてアドリア海に移住した。彼らは「アルバニア人」を称した。

■ A D 1 5 4 6 年 ジャン・カルヴァン、改革派教会を設立 「改革派誕生」

マカルピン家の血統に属するジャン・カルヴァンが輩出され、ツヴィングリから「改革派」を受け継いで改革派教会を建設している。カルヴァンは、マルティン・ルター、トマス・クロムウェルと共に「宗教改革」を指揮し、タナトスが建てたクリュニー会、シトー会、ドミニコ会など、ヨーロッパから有害なカトリックを根絶することを目指していた。

■ A D 1 9 3 1 年 レナード・ニモイ生誕

ニモイの名の由来はエウリュノメーである。エウリュノメー=エウリュノメイ=ニモイとなる。

◆スラヴ（シェラフ）の歴史

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「シェラフ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアシェルは、メソポタミアに移住すると、「シェラフ」を生んだ。シェラフの名の由来はアシェラーフである。アシェラーフ＝シェラーフ＝シェラフとなる。

■BC 11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■BC 1027年 「スラヴ人誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したシェラフは、新天地を求めて亡命した。1部は北上して中央アジアに逃れ、「スラブ人」の祖となった。スラヴの名の由来はシェラフである。シェラフ＝スラフ＝スラヴとなる。つまり、イラン人の顔をした人々が、スラヴ民族の母体を築いた。

■BC 1027年 「リビア誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したシェラフは、新天地を求めて亡命した。1部はエジプト方面に逃亡して「リビア」を築いた。リビアの名の由来はシェラフである。シェラフ＝シェラブ＝シェラビア＝ラビア＝リビアとなる。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「シューラセーナ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したレビ族は、晋と組んで「シューラセーナ王国」を建設している。シューラセーナの名の由来は、シェラフと晋（ジン）の組み合わせである。シェラフ＋ジン＝シェーラジーナ＝シューラセーナとなる。

■ B C 4 世紀 「ヒッタイト人が大航海時代」

■ B C 4 世紀 「ジルシン誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したシューラセーナは、箕子（ギジャ）と共にピクトランドに残留した。肅慎は、現地人と混合して「ジルシン」を築いた。ジルシンの名の由来はシューラセーナである。シューラセーナ＝シュラセン＝ジルシンとなる。

■ B C 1 6 8 年 「スラヴ人の大移動時代」

■ B C 1 6 8 年 「疏勒誕生」

「スラヴ人の大移動時代」に参加したスラヴ人は、イリュリア人、ダキア人、ダルダニア人と共にタリム盆地に亡命した。この時、スラヴ人は「疏勒（シューレ）」を建設した。シューレの名の由来はシェラフである。シェラフ＝シェーラフ＝シューレとなる。

■ B C 7 5 年 「リプアリ族誕生」

リビアがローマに占領されると、リビア人はライン河畔に逃れて「リプアリ族」となった。リプアリ族はフランク族と組んで「リプアリ・フランク族」を結成した。

■ A D 2 2 4 年 アルダシール 1 世、初代サーサーン皇帝に即位 「サーサーン朝誕生」

スコットランドから来たジルシンの血統が「サーサーン」を称し、ペルシアを続べた。サーサーンの名の由来はジルシンである。ジルシン＝ジールシン＝サーサーンとなる。サーサーン朝では、第4代皇帝バハラム1世がミトラス教に操られ、「マニ教」の教祖、マニなどを処刑している。

■ A D 6 4 2 年 「佐々木氏誕生」

サーサーン朝が滅ぶと、サーサーン人は同盟者であったイベリア人、タタを連れてイランを出発し、日本に移住した。イラン人の顔をした彼らは日本人と混合して「佐々木氏」を形成した。佐々木の名の由来はサザキ（サーサーン人）である。サーサーン人は、源成頼に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に「佐々木氏」の祖、佐々木義経が誕生した。

サーサーン人の系統からは、日本船舶振興会の会長だった笹川良一が輩出されている。笹川の名の由来は「サーサーンの河」である。サーサーンの河とは、サーサーン朝時代に治めていたチグリス・ユーフラテスのことを指している。佐々木姓からは俳優・声優佐々木功、女優佐々木希が輩出されている。

■AD642年 「チチェン・イツァー誕生」

サーサーン朝が滅ぶと、サーサーン人はゾロアスター教の神官を務めていたマゴス、そして、ビザンツ帝国に「イサウリア朝」を開く前の一部イサウリア家を率いてマヤに移住した。イサウリア家は「イツァー」の名を復活させた。イラン人の顔をしたサーサーン人はイサウリア家と連合し、現地人と混合し、拠点を「チチェン・イツァー」と称した。チチェンの名の由来はサーサーンである。サーサーン＝チャチャン＝チチェンとなる。チチェン・イツァーは、ティカル人に「魔法使いのピラミッド」の建造を要請している。

■AD922年 「ロベール朝誕生」

「メロヴィング朝」を開いたサリー・フランク族のライバルであった「リプアリ族」は、その後、AD732年頃にハスペンゴウ公ロベールを輩出して「ロベール家」を生んでいた。ロベールの名の由来はリプアリである。リプアリ＝リプアル＝ロベールとなる。AD922年、ロベール家のロベール1世が、西フランク王に即位して「ロベール朝」を開き、サリー族に対して雪辱を果たした。しかし、シャルル3世を破って勝利するも、ロベール1世の戦死を機に一族が西フランク王国からバルト海に移住した。

■AD923年 「リユーベック誕生」

「ソワソンの戦い」で、戦死したと見せかけて、ロベールの残党はバルト海に移った。リプアリの人（リプアキ）を由来に拠点を「リユーベック」と命名した。リプアキ＝リユープアキ＝リユーベックとなる。

■AD1093年 「アストゥリアス家の大航海時代」

■AD1093年 「イングーシ誕生」

「アストゥリアス家の大航海時代」に参加したジルシンは国が解散すると、アストゥリアス家と共に、スコットランドを離れて中央アジアに移住した。ジルシンは「イングーシ」を築いた。イングーシの名の由来はアンガスである。アンガス=アンガース=イングーシとなる。

■AD1093年 「ジョロフ王国誕生」

「アストゥリアス家の大航海時代」に参加したジルシンは、アフリカ大陸に進出してセネガルに上陸した。ジルシンは、シェラフの名を由来に「ジョロフ王国」を建設した。シェラフ=ジェラフ=ジョロフとなる。AD1200年に建てられたジョロフ王国は、その後、AD16世紀のカヤル、バオルの分裂、AD19世紀のアマドゥ・シャイク帝国の併合を経て、フランス支配の時に消滅している。

■AD1210年 「ラヴァル家誕生」

リュベックからカペー朝治世下のフランス王国に帰還したリュベック人からは、AD1210年に「ラヴァル公」となるギュイ5世を輩出した。ラヴァルの名の由来はロベールである。ロベール=ロヴェール=ラヴァルとなる。ラヴァル家からは「百年戦争」で活躍した名将ジル・ド・レ、

■AD1237年 「アストラハンの大航海時代」

■AD1237年 「チチメカ族誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したチチェン人は、AD1224年にチチェン・イツァーを放棄すると、イツァー人との連合を解消し、次はマゴスと連合して「チチメカ族」を形成した。チチメカの名の由来はサーサーンとマゴスの組み合わせである。サーサーン+マゴス=ササマゴ=チチメカとなる。チチメカ族は、メキシコに移住し、王族に従事したメシコ族と組んだ。

■AD1237年 「タヤサル王国誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したイツァー人は、AD1224年にチチェン・イツァーを放棄すると、一部チチェン人と共に現グアテマラに移住し、「タヤサル王国」を建てている。タヤサルの名の由来は、チチェンとイサウリアの組み合わせである。チチェン+イサウリア=チチェ+サウリア=チエサウル=タヤサルとなる。

■AD1237年 「ツィリーツァン誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したチチメカ族は、アステカ人と共に、メキシコを離れて中央アジアに移住した。チチメカ族は「ツィリーツァン」を築いた。ツィリーツァンの名の由来はジルシンである。ジルシン=ジールーシン=ツィリーツァンとなる。

■AD1237年 「ルバ族誕生」「スースー族誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したチチメカ族は、大西洋を横断してザイール流域に住み着き、現地人と混合して「スースー族」を形成し、一部チチェン人は「ルバ族」を称した。ルバの名の由来はシェラフである。シェラフ=スラブ=ルバとなる。スースーの名の由来はシェラフ（チチェン）とイサウリア（イツァー）の組み合わせである。シェラフ+イサウリア=シェサウ=シェーサウー=スースーとなる。

■AD1358年 ロベール1世、フランス王に即位 「ハンザ同盟誕生」

バルト海に移ったロベール家はリプアリの人（リプアキ）を由来に拠点を「リューベック」と命名した。リプアキ=リュープアキ=リューベックとなる。AD1227年、帝国都市の地位を入手したリューベックはハンブルグと商業同盟を結び、AD1358年に都市ハンザを統合し、「ハンザ同盟」が設立された。

■AD1377年 「スールー王国誕生」

シュリーヴィジャヤ王国が滅ぶと、疏勒はスマトラ島を離れてフィリピン近海に浮かぶスールー

諸島を訪れた。彼らはスールー諸島に「スールー王国」を建てた。スールーの名の由来はシューレである。シューレ＝シューレー＝スールーとなる。

■AD15世紀 「ルンダ王国誕生」

ルバ族は、ピクトランドに因んだ「ルンダ王国」をAD15世紀に建てている。ピクトランド＝ピクトルンダ＝ルンダとなる。

■AD1539年 「スール朝誕生」

AD16世紀にスペインがフィリピンに進出すると、一部スール一家は新天地を求めて北インドの地を踏み、AD1539年、シェール・シャーが初代王に即位して「スール朝」を開いた。スールの名の由来はスールーである。AD1555年、スール朝が滅ぶ。

■AD1795年 「ラバー帝国誕生」

フランス革命を機に、ブルボン家と共に故国フランスを後にしたラヴァル家はナイル流域に至り、単身、スーダン方面に南下して定住した。フランス人の顔をしたラヴァル家は現地人と混合して「ラバー」と命名された男子を産んだ。ラバーの名の由来はラヴァルである。AD1879年、ラバーは主要部隊を率いてチャドに侵攻し「ダルフールの乱」を引き起こした。ダルフールの名の由来は「De ラヴァル」である。ド+ラヴァル＝ドラヴァール＝ダルフールとなる。その後、AD1893年にボルヌ帝国を滅ぼし、「ラバー帝国」をチャドの地に打ち建てている。

■AD1817年 「スロベニア誕生」

コーカサスに居住していたチチメカ族は「コーカサス戦争」を機に、ボルガ川に居住していた祖を同じくするツィリーツァン人を率いてヨーロッパに移住した。ツィリーツァン人もシェラフの人（シェラフニキ）を称し、それが変遷を重ねてスロベン（スロベニア）となった。シェラフニキ＝シェラベンニキ＝スロベンとなる。その後、AD1991年には「スロベニア共和国」が、AD1993年には「スロバキア共和国」が独立を果たしている。

■AD1817年 「スロバキア誕生」

コーカサスに居住していたジルシンは「コーカサス戦争」を機に、ボルガ川に居住していた祖と同じくするツィリーツァン人を率いてヨーロッパに移住した。イングーシ人は、シェラフの人（シェラフキ）を称し、それが変遷を重ねて「スロバキア」となった。シェラフキ=シェラフキア=スロバキアとなる。その後、AD1991年には「スロベニア共和国」が、AD1993年には「スロバキア共和国」が独立を果たしている。

■AD1922年 スタン・リー（スタン・リーパー）生誕 「マーヴェル・コミックス誕生」

■AD1932年 オマー・シャリフ生誕

■AD1933年 ロマン・ポランスキー（ローマン・リープリンク）生誕

■AD1949年 ナワーズ・シャリーフ生誕

パキスタン共和国第13代、第27代大統領に就任している。

■AD1950年 セルゲイ・ラブロフ生誕

ロシア連邦第4代外務大臣に就任している。

チュクウの歴史①

◆諸葛氏（チュクウ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「チュクウ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したルハンガは、ナイジェリアに「チュクウ」を生んだ。陸を移動した彼らの遺骸は、人類学者によってギガントピテクスと呼ばれた。チュクウは、ルハンガから身長4 mの身体を受け継いでいたが、彼らはニジェール川で更に4.5 mにまで身長が伸びた。その巨体で、チュクウはニジェール流域の覇者となった。チュクウはまず、河川に於いて食物連鎖の頂点に位置づけられた。その後、チュクウはライオン、ハイエナ、ヒョウ、カバ、ゾウなど、天敵がない動物の天敵として機能した。チュクウは、現ナイジェリアの沖合いに出てサメなども素手で狩っただろう。

サスカッチ、イエティ、ヨーウィなどの未確認動物、獣人などは、間違いなく、ルハンガ、チュクウの子孫である。数々のUMA専門書やロバート・マイケル・パイル著「ビッグフットの謎」では、ビッグフットらは、3 mの跳躍を見せ、時速60 kmで走り、岩を投げ、素手で猛獣を殺すことができる。また、彼らは円形の闘技場を作り、拳闘に励み、アジアの言葉に似た独自の言葉をしゃべるとも報告されている。チュクウは非常に卓越した身体能力を持ち合わせ、それに見合った知性も秘めている。

ただ、どんなに優れた種にもできそこないは生まれる。チンパンジーの群れでは、子供をいじめるといったような個体は集団で無視され、拳闘に群れを追放されることがある。これにより、できそこないは野垂れ死にを迎えるが、こうしてできそこないを淘汰することでチンパンジーは平和に暮らし、種を正しく存続することが可能なのだ。

これらのことは、現代人の間ではタナトスによって廃止されたが、ビッグフットの部族内では今でも実施されている。たまに、人を殺して食べたり、女性を誘拐してレイプするサスカッチの報告があるが、これは、群れを追放されたビッグフットのできそこない（凶暴、残虐、美徳を憎む、復讐心が強い、嘘つきなど問題がある）の仕業だろう。だが、できそこないであってもグリズリーでさえ素手で殺せるわけで、サスカッチのできそこないは野垂れ死にせず、ひとりで森の中で生きているのだ。運が悪ければ、このような個体に出くわし、恐ろしい思いをすることになるかもしれないし、運が良ければ、山奥に棲む地球の王に謁見することができるかもしれない。

■100万年前 「チュクウの大移動時代」

■ 100万年前 「チャク族誕生」

「チュクウの大移動時代」に参加したチュクウは、モリモなどと同様にチッタゴンに入植し、「チャク族」を生んだ。チャクの名の由来はチュクウである。チュクウ=チャクウ=チャクとなる。当初、彼らは毛深く、3m~4mの巨体を誇っていた。だが、100万年の間にミャンマー人に吸収され、名前だけがチュクウの名残りとなった。

■ 50万年前 「ギューゲース誕生」

その後、クウォスがインドを通過した際、獣人チュクウの部族は、アボリジニの顔をしたクウォスと接触、親交を暖めた。お互い、姿かたちが異っていたにも拘らず、クウォスは獣人を同じヒトとして認識し、獣人もクウォスを同じヒトとして認めた。彼らは、お互いを嫌悪し、攻撃することはなかった。彼らは、見かけで判断するのではなく、内面を見抜く鋭い洞察力を備えていた。つまり、非常に知性に溢れていたのだ。

交配も可能であったため、ギガースはクウォスと混合した。この時に「ギューエース（ギューゲース）」が生まれた。ギューエースの名の由来はクウォスであり、別名ギューゲースの名の由来はチュクウとクウォスの組み合わせである。クウォス=ギャオース=ギューエースとなり、チュクウ+クウォス=チュクウォス=ギューゲースとなる。彼らが親交を持った証拠は、彼らが残した名前にある。

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「アグリオス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したチュクウは、ルハンガ、クウォスと組んで「アグリオス」を生んだ。アグリオスの名の由来はチュクウ、ルハンガ、クウォスの組み合わせである。チュクウ+ルハンガ+クウォス=ユクウルウォス=ユグルオス=アグリオスとなる。

■ 45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイ

オス」を生んでいる。クリュティオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+クウォス=グリオディエオス=クリュティオスとなる。

■ 45万年前 「グラティオン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオン」を生んでいる。グラティオンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+ウェネ=グリオディエウェネ=グラティオンとなる。

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」に参加して中国に移り、更に「獣人の大狩猟時代」に参加してシベリアに移住したチュクウは、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「ソーク族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したチュクウは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北東部森林地帯（現イリノイ～ニューヨーク近辺）に居を構え、「ソーク族」を称した。ソークの名の由来はチュクウである。チュクウ=シュクウ=ソークとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ステュクス誕生」

「キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは赤髪の白人であった。彼らは東南アジアに入植し、獣人の姿をしたチュクウ、アボリジニの姿をしたクウォスと組んで「ステュクス」を生んだ。ステュクスの名の由来はカゾオバ、チュクウ、クウォスの組み合わせである。カゾオバ+チュクウ+クウォス=ゾオチュクウォス=ステュクスとなる。ステュクスは、大洋の娘たちに名を連ね、冥府の河として知られた。

■ 30万年前 「キュクロプス誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したチュクウは、モンゴルに帰還し、更に「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリアに上陸した。チュクウはカリュプソーと連合し、「キュクロプス」を生んだ。キュクロプスの名の由来はチュクウとカリュプソーの組み合わせである。チュクウ+カリュプソー=チュクリュプソ=キュクロプスとなる。

■ 30万年前 「ティケー誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したチュクウは、モンゴルに帰還し、更に「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリアに上陸した。チュクウは「ティケー」を生んだ。ティケーの名の由来はチュクウである。チュクウ=テュクウ=ティケーとる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ティタン神族誕生」

「第1次ウラヌスの大移動時代」に参加したキュクロプスは、古代ギリシアに移住し「ティタン神族」に参加した。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「スクルド誕生」

オセアニアに残っていたチュクウは「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加し、現カリフォルニアに入植した。彼らは「スクルド」を生んだ。スクルドの名の由来はチュクウとエウリュトスの組み合わせである。チュクウ+エウリュトス=チュクリュト=シュクリュト=スクルドとなる。彼らは、同盟者と共に、ユグドラシル（セコイア）の林の向こう側、現ネバダ砂漠に「ミドガルド王国」を建設した。

■ 4万年前 「テュポン（タイパン）誕生」

クロノスの姦計により、古代ギリシアを追放されたチュクウは、オーストラリアに帰還していた、その後、ゼウスに敗北したクロノスがオセアニアに亡命すると、チュクウ（ギガース）はクロノスに操られ、全能神ゼウスを倒すために「怪物テュポン」を結成し、古代ギリシアに侵攻した。テュポンの名の由来はチュクウとルハンガの組み合わせである。チュクウ+ルハンガ=チュハン=テュポンとなる。テュポンは、オーストラリアでは「虹蛇タイパン」と呼ばれた。

■ 4万年前 「モルディブ誕生」

古代ギリシアに向かう途上、怪物テュポンは現モルディブに仮りの拠点を作った。この時に初めて当地は「モルディブ」と呼ばれた。モルディブの名の由来はムワリとテュポンの組み合わせである。ムワリ+テュポン=ムワリテュポ=モルディブとなる。

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「天香語山命誕生」

「ギガントマキア」に敗北したテュポンは、ギリシアから台湾に上陸した。この時、台湾は初めて「台湾」と呼ばれた。台湾の名の由来はテュポンだが、テュポンの名は「ジャパン」の語源でもある。テュポンを解散したギガースは、イマナ、ニャメと混合して「アメノカグヤマ」を成

した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとギューゲースとニヤメの組み合わせである。イマナ＋ギューゲース＋ニヤメ＝イマナギューゲヤメ＝アメノカグヤマとなる。

■ 4万年前 「雷雨の神チャク誕生」「創造主クグマツツ誕生」

ミドガルド王国のスクルドは、古代マヤに入植し、「雷雨の神チャク」を称した。更に、ミマースと組んで「創造主クグマツツ」を生んだ。チャクの名の由来はチュクウであり、クグマツツの名の由来は、ギガースとミマースの組み合わせである。チュクウ＝チャクウ＝チャクとなり、ギガース＋ミマース＝ギガマース＝クグマツツとなる。ミマースは、ペルーから来たパチャママの片割れである。

チャクは、東西南北の4つのチャクに分かれているとされる。4つのチャクとは、タルタロス（オーストラリア）のキュクロプス、ミドガルド（カリフォルニア）のスクルド、高天原（台湾）の天香語山命、そして、古代マヤの雷雨の神チャクを指している。

■ 1万3千年前 「ユグドラシルの大航海時代」

■ 1万3千年前 「出羽国誕生」

最終戦争ラグナロクにより、ミドガルド王国はネバダ砂漠と化した。この時、「ユグドラシルの大航海時代」に参加したチャクは、テペウと共に古代マヤを離れ、東北地方に入植して「出羽国」を建てた。出羽の名の由来はテペウである。テペウ＝テヘ＝出羽となる。

■ 1万3千年前 「縄文人の大航海時代」

■ 1万3千年前 ヌナカワミミ生誕 「綏康天皇誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したチュクウは、ディオーネー、ミマースと連合して「ヌナカワミミ」を生んだ。ディオーネー＋チュクウ＋ミマース＝オネクウミマ＝ヌナカワミミとなる。その後、ヌナカワミミは綏康天皇として、黒龍江付近を統治する第2代天皇として即位する。

■ 1万5千年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万5千5百年前 チュクウ、アナトリア半島に移住

「垂仁天皇の大移動時代」に参加したチュクウは、アナトリア半島に移住し、リディア王国の初代王ギゲスを輩出する。

■ BC 716年 ギゲス、初代王に即位 「リディア王国誕生」

BC 716年、ギゲスが初代王に即位して「リディア王国」を建てた。ギゲスの名の由来はキューゲースである。キューゲース=ギュゲス=ギゲスとなる。

■ BC 604年 「蜀（古蜀）誕生」

BC 604年、ギゲスの残党はリディア王国を離れて中国に移住した。この時に「蜀（チュウ）」が生まれた。蜀の名の由来はチュクウである。チュクウ=チュウクウ=蜀（チュウ）となる。歴史的には、後代の蜀と区別するために古蜀と呼ばれている。

■ BC 604年 「ムアン・ギャオ誕生」 「曹誕生」

BC 604年、ギゲスの残党はリディア王国を離れて中国に移住した。蜀の建設に参加しなかった人々は、都市国家「ムアン・ギャオ」を中国に築いた。ギャオの名の由来はチュクウである。チュクウ=チュカオ=ギャオとなる。この時に「曹氏（カオ）」が生まれた。カオの名の由来もチュクウである。チュクウ=チュカオ=カオ（曹）となる。

■ BC 1??年 諸葛豊生誕 「諸葛氏誕生」

BC 316年、司馬氏によって古蜀が滅亡すると、蜀の残党は「諸葛氏（ジューガー）」を生んだ。諸葛の名の由来はキューゲース、或いはチュクウである。キューゲース=ジューゲース=諸葛（ジューガー）となる。

■ BC 23年 「サクソン族誕生」

BC 286年、宋が滅ぶと、諸葛氏の一部は宋氏と連合し、中央アジアに移住した。この時に「サクソン族」が生まれた。サクソンの名の由来は諸葛（ジューガー）と宋（ソン）の組み合わせである。ジューガー+ソン=ジュガソン=サクソンとなる。

■ AD 155年 曹操生誕

曹操は、大和人と共に、三国時代の「魏」を建設した。

■ AD 181年 諸葛亮生誕 「諸葛孔明誕生」

■ AD 221年 「蜀誕生」

諸葛孔明は、劉備玄德と共に、三国時代の「蜀」を建設した。

■ AD 265年 「クアン誕生」

魏が滅ぶと、曹操の残党は雲南に移住し「クアン」を築いた。クアンの名の由来はカオである。カオ=カオン=クアンとなる。

■ AD 3世紀 「大和人の大航海時代」

■ AD 304年 「蜀誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した諸葛氏は、祖を同じくするサクソン族を手助けしたが、一部は中国に帰還し、AD 304年に「蜀」を建てた。しかし、AD 306年に蜀が滅ぶと、再度、ゲルマニアに向かった。

■ AD 405年 「蜀誕生」

AD306年に蜀が滅ぶと、諸葛氏は再びゲルマニアに戻ってきた。しかし、サクソン族がユトランド半島に入植すると、再度、諸葛氏は中国にとんぼ返りし、AD405年にまた新たに「蜀」を建てた。しかし、AD413年に蜀が滅ぶと、諸葛氏は、またユトランド半島のサクソン族の元へと帰ってきた。諸葛氏は、サクソン族のブリテン島への移住を援助した。

■AD477年 「サセックス王国誕生」

セックスの名から、3つのイングランド系サクソン諸国は、諸葛氏が指揮していたことがわかる。サセックス王国は、イングランド南部に築かれた。AD860年に滅びている。

■AD519年 チェルディッチ、初代王に即位 「ウェセックス王国誕生」

セックスの名から、3つのイングランド系サクソン諸国は、諸葛氏が指揮していたことがわかる。ウェセックス王国は、イングランド西部に築かれた。AD11世紀に滅びている。ウェセックス王国は偉大な王を生み、デーン人を蹴散らし、イングランド統一を果たしている。

■AD527年 「エセックス王国誕生」

セックスの名から、3つのイングランド系サクソン諸国は、諸葛氏が指揮していたことがわかる。エセックス王国は、イングランド東部に築かれた。AD825年に滅びている。

■AD829年 エクバード王、イングランドを統一

■AD871年 アルフレッド大王、ウェセックス王に即位

■AD886年 アルフレッド大王、デーン人よりロンドン奪還

■AD892年 アルフレッド大王、デーン人の侵攻を撃退

■AD907年 「蜀誕生」

AD899年、治世の間、絶え間なく援護してきたアルフレッド大王が死去すると、諸葛氏は、中国に帰還し「蜀」を建てた。蜀はAD925年に滅ぶが、その前年に諸葛氏はイングランドに帰還している。

■AD924年 エセルスタン王、ウェセックス王に即位

■AD924年 エセルスタン王、デーン人よりデーンローを奪還 「イングランド王国誕生」

■AD934年 「蜀誕生」

エセルスタン王を支え、デーン人を皆殺しにしてきた諸葛氏は、再度、中国に帰還して「蜀」を建てた。

■AD965年 「伊賀国誕生」

AD965年に最後の蜀が滅ぶと、諸葛氏は日本に移住し、「伊賀」を築いた。伊賀の名の由来は諸葛（ジューガー）である。ジューガー＝ユーガー＝伊賀となる。伊賀には「惣国一揆」と呼ばれる共和的自治組織が存在した。惣国の名の由来は「ソークの国」と考えられる。ソークの国＝ソウ国＝惣国となる。短期間でイングランドと中国を行き来した間に蓄えられた、あらゆる知識、そして、地球の王チュクウから受け継いだ獣人の血は、その後の忍者の母体組織形成に寄与した。

■AD1016年 「キプチャク族誕生」

ウェセックスは、クヌート大王率いるデンマーク軍に敗北し、イングランドを脱出した。彼らはイギリス人ギブ（乞伏部）を連れて、中央アジアに帰還し、「キプチャク族」を生んだ。キプチャクの名の由来は乞伏（キフ）＋諸葛（ジューガー）である。キフ＋ジューガー＝キフジュガ＝キプチャクとなる。

■AD1034年 コンチョク・ギエルポ生誕 「サーキャ派誕生」

AD965年に最後の蜀が滅ぶと、諸葛氏はチベットに移住し、「コンチョク・ギエルポ」を生んだ。コンチョクの名の由来はクン族（アルキユオネウス）とチュクウの組み合わせである。クン+チュクウ=クンチュク=コンチョクとなる。サーキャの名の由来は諸葛（ジューガー）である。ジューガー=シューカー=サーキャとなる。サーキャ派は、四大チベット仏教のひとつである。

■AD1066年 「スカキ誕生」

ヨーロッパに移住したウェセックス人は「スカキ」を称した。スカキの名の由来はサカとキンメリアの組み合わせである。サカ+キンメリア=サカキ=スカキとなる。

■AD1066年 「榊原氏誕生」「三好氏誕生」

日本に上陸したサクソン人は、仁木氏に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「榊原氏」の祖、榊原清長である。榊原の名の由来は「サクソンの土地」である。サクソン（SAKCIN）+土地（原）=SAKCI（榊）+原=榊原となる。一方、一部のサクソン人は小笠原長興に接近して自身の血統を打ち立てる。この時に誕生したのが「三好氏」の祖、三好義長である。三好の名の由来はSAINT（三）+サクソン（好き）である。SAINT（三）+サクソン（好き）=三+好き=三好（音読みでみよし）となる。

■AD11世紀 「ガオ王国誕生」

AD938年に大理国が成立すると、曹氏は西アフリカに移住し、「ガオ王国」を築いた。ガオの名の由来は曹（カオ）である。カオ=ガオとなる。

■AD1156年 テムジン生誕 「チンギス・ハーン誕生」

キプチャク族は乞伏部が主導していたため、不満を持った一部諸葛氏はモンゴルに移住した。この時に「テムジン」が生まれた。テムジンの名の由来はテムズの宋（ソン）である。テムズ+ソン=テムソン=テムジンとなる。テムジンは長じてチンギスを名乗ったが、チンギスの名の由来はギューゲースである。ギューゲース=ギュングス=チンギスとなる。

■AD1182年 サキヤ・パンティタ生誕

サキヤ派第6代目座主。サキヤの名の由来は諸葛（ジューガー）である。ジューガー＝シュカ＝サキヤとなる。

■AD1206年 チンギス・ハーン、モンゴル高原を統一

■AD1219年 チンギス・ハーン、モンゴル軍を率いて征西

■AD1227年 「キガ族（キクユ）誕生」

AD1227年、強大な征服欲を持ち、残虐の限りを指令するネストリウス派に嫌気が差したチンギスは、死んだことにして故地から遠く離れた異邦の地ケニアにまで逃れた。チンギスの残党は、現地人と混合して「キガ族（キクユ族）」を成した。キガの名の由来はギューゲースである。ギューゲース＝キガース＝キガとなる。キガの別名に、「キクユ」という名があるが、キクユの名の由来はチュクウである。チュクウ＝チクウ＝キクユとなる。

■AD1285年 サーキヤ派、ディクン・ティルを焼き討ち

ディグンの領主が、イルハン朝と結んで蜂起した。ディグンの名の由来はダゴンである。つまり、ディグンの領主はタナトスだった。最初は勝ち進んだが、サーキヤ派の軍隊が本山ディクン・ティルを焼き討ちしている。ディクン・ティルの名の由来は、ダゴンとティラウの組み合わせと考えられる。つまり、ディクン・ティルは、タナトスの都市だったのだろう。

■AD1288年 「宣政院設立」

モンゴル帝国を築いたフビライは、サーキヤ派を保護し、「宣政院」を建設した。サーキヤ派の長、帝師がここで指導し、サーキヤ派はモンゴル帝国が滅ぶまで、サーキヤ寺院を僧院都市として中央チベットを支配した。AD1358年、勢力を伸張したカギユ派に押され、サーキヤ派の長が暗殺される。

■ A D 1 3 世紀 「カーオ王国誕生」

ガオ王国に、祖を同じくするチンギス・ハーンの残党がやってくると、曹氏の残党はアフリカを離れ、インドシナ半島に移住した。この時、彼らは「カーオ王国」を築いた。カーオの名の由来はガオである。この時に、タイ人に西アフリカ人の血が加えられた。ムエタイ王者のプラカーオは、その名から彼らの子孫である可能性がある。

■ A D 1 4 世紀 「木下氏誕生」

アフリカ人の顔をしたキガ族は日本人と混合し、キガに「木下（キゲ）」を当て字して「木下（きのした）」と訓読みした。A D 1 5 1 3 年、キガ族の娘、木下仲（大政所）が誕生し、A D 1 5 3 7 年には仲の子、木下藤吉郎が生まれた。後の「豊臣秀吉」である。秀吉の他に木下小一郎、木下家定などがキガ族の系統として生まれている。

■ A D 1 4 6 4 年 「ガオ帝国誕生」

諸葛氏からガオ王国を受け継いだチンギスの残党は「ガオ帝国」を築いた。ガオ帝国は、A D 1 4 9 3 年に滅んだ。

■ A D 1 5 3 7 年 豊臣秀吉生誕

A D 1 4 9 3 年、ガオ帝国が滅ぶと、チンギスの残党はアフリカを離れ、戦国時代の日本に移住した。ガオ帝国の残党は、祖を同じくする木下氏に接近し、自身の血統を打ち立てた。藤吉郎を生む木下仲は、西アフリカ人と日本人の4世である。A D 1 5 5 4 年、藤吉郎は織田信長に仕え、A D 1 5 6 6 年には美濃攻めに於いて一夜城を築いた。A D 1 5 7 3 年、秀吉は「羽柴」を称しているが、ハシバの名の由来はパンジャブである。パンジャブ＝パンジャバ＝羽柴となる。パンジャブといえば秀吉の兄弟である「シク教」の拠点である。

■ A D 1 5 7 9 年 「第一次伊賀の乱」

織田信長の息子、北畠信雄が南伊賀の丸山上を攻めたが、結集した伊賀勢がこれを退けている。

しかし、AD1581年、信長が2万の大群を率いて侵攻すると、伊賀は二週間で制圧された。

■AD1587年 「バテレン追放令」「刀狩り令」

キリシタンに好意的だった秀吉が掌を返したように伴天連追放令を発布した。これは秀吉の意志ではなく、大谷の指令である。大谷は自分たちを狙っている勢力に気付き、蜂起を事前に防止するため、秀吉に命じて上記の令を発布させた。「バテレン追放令」「刀狩り令」は、正義を貶め、悪を守る法律であった。

■AD1590年 豊臣秀吉、天下統一

■AD1598年 「シン誕生」

科学の種族の子孫である千利休は、浄土真宗を邪教とみて、仲間を集めて攻撃の機運を探っていた。だが、それを見破った大谷は先手を打って秀吉に千利休処刑を命令した。もちろん、秀吉は利休を処刑したことにして安全な場所へと逃がした。だが、これを見逃すはずがない大谷は秀吉を排除することを考えていた。そのため、秀吉は死んだフリをしてドサクサに紛れて日本を脱出した。

パンジャブに潜伏していた秀吉は「シン」を生んだ。シンの名の由来は豊臣の音読み「ほうしん」である。秀吉は、シク教国の礎を築き、その後、後にやってきた秀頼の残党と共にロシアに向かった。

■AD1615年 「豊臣氏の大移動時代」

■AD1615年 「プーチン誕生」

その後、大坂の陣に敗北した豊臣秀頼の一行が龍造寺氏、千葉氏が潜伏していたパンジャブを訪れる。パンジャブには、既に秀吉一行がいたが、豊臣秀頼の一行は龍造寺隆信らを迎えてパンジャブからカスピ海に至る。日本人の顔をした千葉氏は、ここで中央アジア人と交わり、「チュヴァシ」を称した。チュヴァシ族は、豊臣秀頼の一行と共にサンクトペテルブルグに移り、「プーチン」「メドベージェフ」の名を築いた。

プーチンの名の由来は豊臣の音読み「ほうしん」であり、メドベージェフの名の由来は「千葉又

兵衛」である。千葉又兵衛とは、筆者が考えた想像上の人物である。だが、九州の千葉氏は、豪傑として知られる後藤又兵衛と同時代の人々であるため、豪傑に因んだ名前を子息に命名するのはありえることだ。

■AD1615年 「ケニア誕生」

一方、木下氏の一行は現ケニアに移住し、家族であるキガ族に合流した。この時に「ケニア」が生まれた。ケニアの由来は大阪弁「(わしらの)国や」だと考えられる。

■AD1675年 グル・ゴービンド・シン、第10代グルの座に就く 「シク教国誕生」

AD1675年、グル・ゴービンド・シンが第10代グルの座に就き、AD1716年、バンダー・シンがムガル帝国に蜂起したが失敗した。AD1801年、ランジット・シンが初代マハラジャの座に就き、ムガル帝国からの独立を勝ち取って「シク教国」が築かれた。AD1845年、インド征服を目論む大英帝国との間に「第1次シク戦争」が開始される。

■AD1816年 シャカ、初代皇帝に即位 「ズールー帝国誕生」

AD1745年頃、黒人の奴隷狩りが始まると、キクユ族は南アフリカに逃れた。キクユ族から、AD1787年に「シャカ」が生まれた。シャカの名の由来はチュクウである。チュクウ=シクウ=シャカとなる。シャカの母の名はナンディだが、これはケニアから来た証といえる。シャカの祖先は奴隷狩りから逃れたものの、結局、白人に対峙する結果となった。

■AD1845年 「第1次シク戦争」

■AD1849年 「ボンジョヴィ誕生」

シク教国は、第1次から第2次に至る「シク戦争」を大英帝国軍と戦ったが、大敗すると、一部豊臣氏の子孫は、パンジャブからイタリアに移住した。インド人の顔をした彼らは現地人と混合して「ボンジョヴィ」を称した。ボンジョヴィの名の由来はパンジャブである。パンジャブ=パンジャヴィ=ボンジョヴィとなる。

■AD1893年 ジョモ・ケニヤッタ生誕

AD1964年、ケニア共和国初代大統領に就任している。

■AD1932年 マンモハン・シン生誕

第17代インド首相に就任している。

■AD19年 ウラジミール・プーチン生誕

AD2000年～2008年、第2代ロシア連邦大統領、AD2012年、第4代ロシア連邦大統領に就任している。

■AD1960年 グレタ・スカキ生誕

■AD1962年 ジョン・ボンジョヴィ生誕 「ホン・ジョヴィ誕生」

◆ゼウス（ソーク）の歴史

■40万年前 「ソーク族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北東部森林地帯（現イリノイ～ニューヨーク近辺）に居を構えたチュクウは「ソーク族」を称した。ソークの名の由来はチュクウである。チュクウ＝シュクウ＝ソークとなる。

■30万年前 「ツオウ族誕生」

アプチが、マヤから東アジアに帰還した際、ソーク族は同行していた。彼らは、台湾に入植する

と「ツオウ族」を生んだ。ツオウの名の由来はソークである。ソーク＝ツオウク＝ツオウとなる。

■ 30万年前 「ペルセーイス（ペルセウス）誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、パッラースや台湾から来たツオウ族と共に、オーストラリアに「ペルセウス（ペルセーイス）」を生んだ。ペルセウスの名の由来はパッラース、ツオウ、ムシシ（ミマース）の組み合わせである。パッラース＋ツオウ＋ムシシ＝パッラツオウシ＝パラソウシ＝ペルセウスとなる。

■ 30万年前 「クリュセーイス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュティオスはペルセーイスと共に「クリュセーイス」を生んだ。クリュセーイスの名の由来はクリュティオスとペルセーイスの組み合わせである。クリュティオス＋ペルセーイス＝クリュセーイスとなる。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ペルセウス誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセーイスは、英雄ペルセウスとして、ケルケイース（ゴルゴン）、メーティス（メドゥーサ）の国に取り付いたタナトス一族を皆殺しにした。この時、一部のタナトスはクリュサウル、ペガサスとなって逃亡し、ダナオスの一族はアルゴス号に閉じ込められてオセアニアに連行され、タンナ島に封じ込められた。この時から、ペルセウスの子孫は、時期が来るとタナトスを皆殺しにするようになる。プーチン大統領、習国家主席、トランプ大統領は現代のペルセウスである。

■ 7万年前 「サイシャット族（ヘラクレス）誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセウスは、台湾に上陸してクリュセーイスと共に合体部族を生んだ。この合体部族の誕生に参加したのはペルセーイス側からはパッラー（ヴィディエ+レザ）、ムシシが、クリュセーイス側からはグラティオンとムシシである。しかし、グラティオン自体がアグリオス（チュクウ+ルワ）とディオナー（ヴィディエ+ウラニア）の合体部族である。つまり、ペルセーイスからは3部族、クリュセーイスからは5部族が参加している。

この時に生まれたのは、台湾少数民族として知られる「サイシャット族」である。サイシャットの名の由来はチュクウ、ムシシ、ヴィディエの組み合わせである。チュシシディ=ツォウセイイシディ=サイシャットとなる。サイシャット族は後に「ヘラクレス」と呼ばれることになる。ヘラクレスの名の由来はペルセーイスとクリュセーイスの組み合わせである。ペルセーイス+クリュセーイス=ペルクリュセ=ヘラクレスとなる。

■ 7万年前 「ヘラクレス誕生」

ヘラクレスとは、台湾のサイシャット族のことであるが、ヘラクレスの物語は全て、オーストラリア、メラネシア、南シナ海で起きたことである。ヘラクレスの目的は、主に、反自然の種族の成敗であった。ネメアのライオン、レルネのヒュドラ、ケリュネイアの鹿、エリュマントスの猪、アウゲイアスの家畜小屋掃除、ステュムパリデスの鳥退治、クレタの暴れ牛、ディオメデスの人喰い馬、アマゾネスとの戦闘、ゲリュオンの赤い牛、ヘスペリデスの黄金の林檎、ケルベロスの生け捕りの中でも、特にエリュマントスの猪とディオメデスの人喰い馬はタナトスの一族である。

■ 7万年前 「塩椎神誕生」「摂津国誕生」

サイシャット族は日本に上陸し、現地人に「塩椎神（しおつち）」と呼ばれた。しおつちの名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャツ=しおつちとなる。その後、彼らは「摂津」に拠点を得た。摂津の名の由来はサイシャットである。サイシャット=シャツ=摂津となる。高天原と摂津は、塩椎神（サイシャット族）の勢力圏だった。

■ 7万年前 「素戔鳴尊誕生」

サイシャット族（塩椎神）は、新規の合体部族天照大神（ニヤメ+ドーリス）に敗北し、台湾を離れた。この時にチュクウとムシシは「素戔鳴尊」と呼ばれた。素戔鳴尊の名の由来はサイシャットとウラニアの組み合わせである。サイシャット+ウラニア=サイシャニア=素戔鳴

尊（すさのお）となる。素戔鳴尊はチュクウとムシシ、ウラニアーによる合体部族である。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ヴァルハラ誕生」「戦士の守護神ワルキューレ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、神話通り、葦原中津国に向かった。葦原中津国は2種類あるが、ひとつめは八代湾～天草諸島に跨る地域であり、2つめはアナトリア半島～ナクソス島に跨る地域である。彼らが目指したのは2つめの葦原中津国である。

アルゴス号は、途上の北アメリカで常世国、ミドガルド王国などを残しつつ、メキシコに到達した。大西洋側に出た彼らは、上陸ポイントを「ベラクルス」と命名した。更に、北メキシコに入植した塩椎神の勢力は「ヴァルハラ王国」を築いた。ヴァルハラの名の由来はペルセウスとヘラクレスの組み合わせである。ペルセウス+ヘラクレス=ペルヘラ=ヴァルハラとなる。

ベラクルスには、「ワルキューレ」が生まれた。ベラクルス、ワルキューレの名の由来は共にヘラクレスである。ヘラクレス=エラクーレス=ワルキューレとなる。北アメリカにあったミドガルド王国、北メキシコにあったヴァルハラ王国名は北欧神話に出てくるため、ミドガルド、ヴァルハラは北欧に存在したと考える人も多いただろう。しかし、大概の場合、神話の舞台は神話が編まれた土地で起きた事柄ではない。タナトスを皆殺しにするため、科学の種族は核兵器によってミドガルド、ヴァルハラを消滅させたが、北欧神話は、その時の生存者が何万年もさすらったあぐく、北欧に辿り着き、現地人に伝えたものである。

■ 4万年前 「オリンポス神族誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したサイシャット族は、メキシコを離れ、葦原中津国を目指した。クロノスはケルンを拠点にし、インチキ宗教により、大量の弱者を信者として擁し、ヨーロッパを支配していた。これに対抗するべく、現オリンポス山付近に入植したサイシャット族は「オリンポス神族」を結成した。オリンポスの名の由来はウラヌスとポセイドンの組み合わせである。ウラヌス+ポセイドン=ウラヌポセ=オリンポスとなる。ご存知のように、オリンポス神族には「ゼウス」「ポセイドン」「ハデス」「ヘスティア」「デメテル」「ヘラ」がいる。ヘスティア、デメテル以外はサイシャット族の合体部族から生まれた。

■ 4万年前 「全能神ゼウス誕生」

現オリンポス山付近に拠点を構えたサイシャット族は、「ゼウス」を生んだ。ゼウスの名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャ=ザイシ=ゼウスとなる。

■ 4万年前 クロノスに呑み込まれる

クロノスは、大量の信者を強い発言力・強固な城壁として動員し、オリンポス神族を退けた。優れたオリンポス神族は、だが、数で勝るできそこないに敗北した。間違っているとしても、誰にも好かれていなくても頭数で勝れば勝てるということをクロノスは証明した。ヘシオドスは、この敗北を「クロノスに呑み込まれた」と表現した。

■ 4万年前 「オリンポス神族の大航海時代」

■ 4万年前 全能神ゼウス、クレタに潜伏

「オリンポス神族の大航海時代」に参加しなかったゼウスは、神統記の通りにクレタに潜伏した。ただ、このクレタはエーゲ海のクレタ島のことではなく、マレー半島～ソロモン諸島の中に存在したクレタ王国のことである。

■ 4万年前 「アトランティス王国誕生」

ゼウス以外は「オリンポス神族の大航海時代」に参加し、北アメリカ、マヤ、南アメリカ、南極大陸の発見を経てオーストラリアに入植した。デメテルを生んだアドメテーはエロスと組んで「アトラス」を生んだ。その後、アトラスはタナトスと組んで「アトランティス王国」を築いた。アトランティスの名の由来はアトラス、タナトスの組み合わせである。アトラス+タナトス=アトラナトス=アトランティスとなる。後に、タナトスがアトランティスの王統を篡奪すると、かつての大英帝国のように世界侵略を標榜し、残虐の限りを尽くした。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「スエズ誕生」

クロノスを倒すべく、全能神ゼウスは、エジプトに拠点「スエズ」を築いた。スエズの名の由来はゼウスである。ゼウス＝セウズ＝スエズとなる。ゼウスは、クロノスの一族を皆殺しにするために史上初の武器を製作した。それまでも、石器のナイフ、弓矢、槍などはあったが、ゼウスは投石器などを作った。

■ 4万年前 全能神ゼウス、クロノスをギリシアから追放

「アトランティス人の大航海時代」に参加したゼウスは、「アベルの大航海時代」の人々と連合し、エジプトで体制を整えてからギリシアに侵攻した。クロノスが掌握していた大量の愚か者たちは、しかし、単なる頭数を上回るゼウスたちの実力に翻弄され、容易に退けられた。クロノスはギリシアからパプアに逃亡し、ダニ族となる。クロノスは「できそこないでも数で圧倒すれば優れた者に勝てる」と信じていたが、この時は、優れた者ができそこないの「数で圧倒する方法」を凌駕したため、敗北を喫した。

■ 4万年前 「ティタノマキア」

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「スワジ誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したゼウスは、スエズから南アフリカに移り、「スワジ」を築いた。スワジは宿神（スシェン）、朱雀（ツークエ）とも呼ばれた。スワジの名の由来はスエズであり、スシェンの名の由来はシュシャンである。スエズ＝スワズ＝スワジとなる。ツークエの名の由来はチュクウである。チュクウ＝チュークエ＝ツークエとなる。

ゼウスは、カアングと共に「キンシャサ」を築き、白虎（ベイフー）と共に「アジスアベベ」も築いた。キンシャサの名の由来はカアングとゼウスの組み合わせであり、アジスアベベの名の由来はゼウスとベイフーの組み合わせである。カアング＋ゼウス＝カアンセウス＝キンシャサとなり、ゼウス＋ベイフー＝アゼウス＋アベイフ＝アジスアベベとなる。

■ 2万年前 「オデュッセウス（テセウス）誕生」

オデュッセウスの物語は、実際には「トロイア戦争」ではなく、「最終戦争ラグナロク」の後に、ゼウスが世界中を巡り、諸国のタナトスを成敗して回った話である。当時のゼウスは、現スワジヤやキンシャサに住んでいた。オデュッセウスの名の由来は、ヴィディエ、ゼウスの組み合わせである。ヴィディエ+ゼウス=ヴィディゼウス=オデュッセウスとなる。

シベリア・モンゴル（キコネス人、パイエケス人、アルキノオス王、ナウシカ姫）、コンゴ（ロトパゴイ人）、カリブ海（カリュプソー島）、ナイジェリア（キュクロプス）、セネガル（アイオロス）、ナミビア（人喰いライストリュゴン）、黒海（魔女キルケ）、オーストラリア（海の怪物スキュラ）、ヨーロッパ（ヘリオス島）というように、名前を精査すると舞台が見えてくる。

一方、オデュッセウスは「テセウス」とも呼ばれた。テセウスの名の由来はヴィディエ、ゼウスの組み合わせである。ヴィディエ+ゼウス=ディエゼウス=テセウスとなる。アテナイの王子テセウスの物語も、オデュッセウス同様に、ヴォドゥン王国に取り付いたタナトスと反自然の種族を退治して回る話である。ここでは割愛するが、鉄の棍棒男ペリペテス、四つ裂き男シニス、牝猪パイア、蹴落とし男スケイロン、レスリング男ケルキュオン、引き伸ばし男ポリュペモンの名は、みな、反自然の種族に属していることがわかる。

■ 1万3千年前 全能神ゼウス、デウカリオンとピュラに助言を与える

ギリシア神話に「デウカリオンとピュラ」の説話がある。これは、実際には、ゼウスが、単身タルタロス（オーストラリア）に赴き、「デウカリオン」と「ピュラ」に対し、緊急脱出用の大型船を造るように進言したことを意味している。

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「スーサ誕生」

「ヘリオポリスの大航海時代」に参加したゼウスは、メソポタミアに入植し、「スーサ」を築いた。スーサの名の由来は素戔鳴尊である。素戔（すさ）=スーサとなる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「スイス誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したゼウスは、ライン流域を遡り、アルプス山脈のふもとにまで及んだ。彼らは当地を「スイス」と命名した。スイスの名の由来はゼウスである。ゼウス＝ゼイス＝スイスとなる。

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC19世紀 「ウェシュシュ人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加した肅慎は、祖を同じくするスイス人と連合した。この時に「ウェシュシュ人」が生まれた。ウェシュシュの名の由来はスイスとシュシャンの組み合わせである。スイス+シュシャン＝ウイスシャン＝ウェシュシュとなる。彼らは、トウルシア人らと共にイランに入植し、デニエン人、シェルデン人とは異なる、正義の側の海の民に参加した。

■BC19世紀 「女神イシス誕生」「エフェソス誕生」

ウェシュシュ人は、トウルシア人、ペリシテ人、チェケル人、ルカ人らと共にラムセス3世に加勢し、海の民（デニエン人・シェルデン人）を退けた。その後、ウェシュシュ人はエジプトに入植して「女神イシス」を祀った。イシスの名の由来はウェシュシュである。ウェシュシュ＝エスス＝イシスとなる。また、彼らはギリシアにも入植し、「エフェソス」を築いた。エフェソスの名の由来はウェシュシュである。ウェシュシュ＝ウエシュシュ＝エヘスス＝エフェソスとなる。

■BC1700年 ウェシュシュ人、アテナイ王国と対立

「海の民の大航海時代」に参加したウェシュシュ人は、司神タナトスに支配されたアテナイ王国と対立した。この模様は、ギリシア神話では、ゼウス（ウェシュシュ人）とアテーナイ（司神タナトスと大量の信者たち）の対立として記されている。この戦争は、スエズ（エジプト）対アデ

ン（アラビア半島）の戦いであった。

■BC1027年 「ベーシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「周誕生」

「ベーシュタードの大航海時代」に参加したウェシュシュ人は、東アジアに帰還した。彼らは中国に上陸すると、殷に寄生していた人身御供の種族、能登族を皆殺しにした。その後、ウェシュシュ人は、蚩尤が生んだ「周氏（チョウ）」に参加し、共同で「周」を開いた。周（チョウ）の名の由来はツオウである。ツオウ=チオウ=周（チョウ）となる。

■BC967年 「エジプト第22王朝樹立」

南征した「周」の昭王は、急に故地帰還を思い立った。つまり、中国人の顔をした昭王の軍団はシルクロードを経てエジプトにまで足を伸ばしたのだ。ひとまず、リビアに根を下ろして警察としての地位を得てリビア人を指揮下に置いていた昭王の軍団は、22年後のBC945年にリビア人王朝を古代エジプトに打ち建てている。シュシャン人（スーサ）の子孫である昭王は、シルクロードを通過した際に「シュシャンキ（シュシャン人）」を称した。それが、セッションク1世の名の由来である。

■BC663年 プサメティコス1世、初代ファラオに即位 「サイス朝（エジプト第26王朝）樹立」

中国から逃亡した「周」の王族に属する2つの王統が合体し、「第26王朝（サイス朝）」を樹立した。サイスの名の由来はスイス（周氏の祖ウェシュシュ人の故地）、或いはゼウスである。ゼウス=セウス=サイスとなる。

■BC341年 「スイス復活」

ペルシア帝国に飲み込まれたサイス王家は、故地スイス（シュヴィーツ）に帰還して、スイスの名を復活させた。エジプト人の顔をした彼らは現地のヨーロッパ人と混合して「スイス人」を形成する。スイスの名の由来はサイスである。

■ B C 3 4 1 年 「朱氏誕生」

ペルシア帝国のエジプト王位篡奪に続いてアレキサンダー大王の侵略に晒されたエジプトから脱出した東方組サイス王家は、故地である中国に帰還した。エジプト人の顔をしたサイス王家は中国人と混合して「朱氏」を形成した。朱（チュ）の名の由来はスーサである。スーサ=チューサ=チュ（朱）となる。蚩尤、周氏、趙氏に続き、中国に上陸したゼウスの系統として、朱氏は4世代目にあたる。朱氏からは朱蒙が登場し、彼は、マヤから来たククルカン神族と組んで、B C 3 7 年、朝鮮半島に「高句麗（ゴグリョ）」を建設している。

■ B C 1 世紀 「高句麗誕生」

「ケツァルコアトルの大航海時代」に参加したククルカン（加賀氏）は、ケツァルコアトルと共に満州から朝鮮半島に赴いた。ククルカンは、ゼウスの末裔である朱蒙（朱氏）と組んで「高句麗（ゴグリョ）」を建てた。ゴグリョ（高句麗）の名の由来はククルカンである。ククルカン=ゴグリョカン=ゴグリョとなる。古代朝鮮の王国、高句麗と百済はユカタン半島から来たのだ。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ロス誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した朱氏は、ブリテン島に上陸した。朝鮮人の顔をした朱氏は現地人と混合して「ロス」を成した。ロス（R O T H）の名の由来は「朱」である。

■ A D 6 世紀 「勿吉の大航海時代」

■ A D 8 7 0 年 「東林書院誕生」「朱子学誕生」

デーンローの成立、デーン税の取立てを機に、イギリス人の一族、ロス、キング、ロード、ウィロウ、ハンター、リー、スイスの氏族がイングランドを発ち、中国へ帰還した。イギリス人の顔をした彼らは中国人と混合して先祖の姓を復活させた。スイス（S W I S S）は「周」を、ロ

ス（ROTH）は「朱」を、キング（KING）は「王」を、ロード（ROAD）は「程」を、ウイロウ（WILLOW）は「楊」を、リー（LEIGH）は「李」を、ハンター（HUNTER）は「羅」の名を復活させた。

周氏からは周敦イ、程氏からは「東林書院」を設立した程コウ、程イが、王氏からは「新法党」の指導者であり「新学」の創始者王安石が、楊氏からは楊時が、羅氏からは羅従彦が、李氏からは李トウが、朱氏からは「朱子学」を築いた朱熹が輩出された。その後、非東林派の首領に就任したタナトスの血を継ぐ魏忠賢は、AD1623年に秘密警察を掌握し、東林書院に弾圧を加えた。この「東林書院」の人々が、中国を脱出してイングランドに帰り、「イーストウッド」の姓を称したかどうかは定かではない。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1236年 シュヴァルナス、第4代大公に即位 「リトアニア大公国誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」に参加した中国人・朝鮮人の顔をした唐・高句麗・新羅王家の人々は、現地人と混合してリトアニアの統率を始めた。その後、リトアニアはAD1236年に大公国としてポーランド王国と共に中欧を統べ、ロシア帝国、スウェーデン王国と肩を並べる大国となるまで成長を遂げた。

古代中国や朝鮮半島を統一した王族がリトアニアを統治するのだから強大化も当然だろう。李氏からはパレモナス、金氏からはギムプタス、朱氏からは第4代リトアニア大公シュヴァルナス、閔氏からは初代リトアニア大公ミンダウガス、第2代リトアニア大公ミンガイラスなどの王が輩出された。

■AD1331年 「スイス原初同盟誕生」

スイス人は、後に「原初同盟」を結成して、AD1331年にハプスブルグ家から独立を果たしている。周、サイス朝の子孫であるスイス農民が「モルガルテンの戦い」でハプスブルグ家の軍隊を退けたため、スイス歩兵の勇名が全ヨーロッパに轟いたといわれている。

■AD1368年 朱元璋、初代皇帝に即位 「明誕生」

劉氏がアフリカに残したフォン人（韓山童、韓林児）が中国に帰還し、紅巾族を指揮して元朝に対して蜂起した。それを利用したのがリトアニア大公国から帰還した朱元璋であった。AD12

69年にリトアニアに権力闘争が発生すると、シュヴァルナスはリトアニアを脱出して故地東アジアに帰還した。リトアニア人の顔をした彼は元朝治世下の中国に移り、中国人と混合を繰り返して朱元璋が誕生する母体を築いた。明の皇帝「朱元璋」は、第4代リトアニア大公シュヴァルナスの子孫なのだ。

■AD1368年 「シュヴィトリガイラ誕生」

その後も、朱氏とリトアニアの縁は継続した。AD1424年、永楽帝が第三次タタール遠征にて死す、と見せかけてリトアニアに逆戻りしているのだ。永楽帝はシュヴィトリガイラを名乗り、リトアニア大公の座に返り咲いた。

■AD1744年 マイアー・アムシェル・ロスチャイルド生誕 「ロスチャイルド財閥誕生」

明が1646年に滅亡すると、朱氏は子氏（チー）を連れて再度、ヨーロッパに落ち延びた。当時、リトアニア大公国はポーランド王国に飲み込まれて消滅していたため、彼らは、神聖ローマ帝国治世下のドイツに根を下ろした。中国人の顔をした朱氏と子氏は、「大和人の大航海時代」を経てドイツにやってきた諸子百家「農家」の子孫バウアー家に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのがマイアー・アムシェル・ロスチャイルドである。ロスチャイルドの名の由来は朱（チュ）と子（チー）の組み合わせである。

■AD1773年 アムシェル・マイアー・ロスチャイルド生誕 「フランクフルト家誕生」

■AD1774年 ザロモン・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ウィーン家誕生」

■AD1777年 ネイサン・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ロンドン家誕生」

■AD1788年 カール・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ナポリ家誕生」

■AD1792年 ヤーコブ・マイアー・ロスチャイルド生誕 「パリ家誕生」

■AD1930年 クリント・イーストウッド生誕

■AD1954年 ジョン・ウリ・ロート生誕 「エレクトリック・サン誕生」

■AD1954年 デヴィッド・リー・ロス生誕 「ヴァン・ヘイレン誕生」

◆ツオウ（ソーク）の歴史

■BC32世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC32世紀 「蚩尤誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したゼウスは、長江流域に入植して「蚩尤（チユウ）」と呼ばれた。「蚩尤（チユウ）」の名の由来はツオウである。ツオウ=チオウ=チユウとなる。蚩尤は、人類史上初めて武器を作った戦いの神とされているが、真相は、クロノス、ティタン神族、ギガースとの戦いのため、史上初の弓矢、戦斧、盾を作ったゼウスのことを指している。

■BC1027年 「周誕生」

「ベーシュタードの大航海時代」に参加したウェシュシュ人は、東アジアに帰還した。彼らは中国に上陸すると、殷に寄生していた人身御供の種族、能登族を皆殺しにした。その後、ウェシュシュ人は、蚩尤が生んだ「周氏（チョウ）」に参加し、共同で「周」を開いた。周（チョウ）の名の由来はツオウである。ツオウ=チオウ=周（チョウ）となる。

■BC1027年 「楚誕生」

蚩尤の残党は、祖を同じくするウェシュシュ人と共に「周」を開いたが、不満を表明した一部は長江流域に「楚（チュ）」を築いた。楚の名の由来はツオウである。ツオウ=チョウ=チヨ=チュとなる。

■BC841年 「エジプト第23王朝樹立」

貴族層に侵入して汚職を奨励し、役人の墮落を指揮している能登族を排除するために、厲王（蚩尤の子孫）は改革を決行した。しかし、能登族は大量の農民を指揮して一揆を発生させた。これを機に、厲王は中国を脱出し、昭王の後を追ってシルクロードを越え、エジプトに歩を進めた。中国人の顔をした厲王の一族はエジプト人と混合し、23年後、BC818年にペディバステトを輩出して「第23王朝」を古代エジプトの地に建てた。この第23王朝は、昭王の「第22王朝」と並行してエジプトに存続した。

■BC771年 スサノオ、ヤマタノオロチを皆殺しに

ウェシュシュ人が到来すると、周の王統を篡奪して「東周」を建てた。周氏は、これを機に一時的にに雲南を訪れる。彼らは「スサノオ」を称した。スサノオの名の由来は「肅慎（スーシェン）の王」である。スーシェンの王＝スーシェノ王＝スサノオとなる。彼らは、処女の生贄を求める非情な能登族の神官を皆殺しにし、ヤマタノオロチの人身御供教団を壊滅させた。神話によると、スサノオは櫛名田比売命と結婚しているが、これはスサノオとヤマタノオロチの残党の同盟を意味している。しかし、櫛名田比売命がヤマタノオロチの残党ということを知ると、スサノオは彼らを全滅させ、長江流域に移住した。ただ、スサノオが中国に帰還するとき、能登族の残党が忍び込んでいた。ヤマタノオロチの生き残りは黄河流域に移り、「河伯」を祀って黄河流域で人身御供の儀式を再開した。

■BC525年 「趙氏誕生」

ペルシア帝国によるエジプト征服を機に、一部サイス王家が中国に帰還した。ゼウスに因んだ名前には、既に「周（チョウ）」があるので、彼らは「趙（ツァオ）」を選んだ。趙の名の由来はゼウスである。ゼウス＝ツァオス＝ツァオ（趙）となる。エジプト人の顔をしたサイス王家は中国人と混合して趙氏を形成し、BC500年頃に「趙」を建てている。

■BC228年 「西氏誕生」「石氏誕生」「習氏誕生」「子氏誕生」「植氏誕生」「札氏誕生」

趙は秦の侵攻を受けてBC228年に滅亡してしまう。これを機に、趙氏は、中国各地に四散し

、「西」「石」「習」「子」「植」「札」などの名を生んだ。それぞれの名は「チー、ツィー、シー、ツァ」と発音する。これらの名の由来はツオウ、或いは蚩尤である。

■ B C 3 ? ? 年 西門豹生誕

西門豹は、河伯の人身御供の儀式をインチキとし、教団関係者を問答無用で皆殺しにした。ただ、河伯は仲間を官僚として魏の国の中枢に送り込んでいた。そのため、彼らは魏の王を操り、西門豹を左遷させた挙句、正義漢の彼に民に圧政を敷くことを強要した。これに嫌気が差した西門豹は、自から官職を辞退し、後に「大和人の大航海時代」に参加してブリテン島に渡った。

■ B C 2 0 3 年 趙佗、南越王に即位 「南越国誕生」

南海郡尉に就任した趙佗は、秦が滅ぶと南越国を築いた。B C 1 1 1 年に滅亡したが、趙氏はインドシナ半島に移住したと考えられる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ストーン誕生」「ロック誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した石氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした石氏は現地人と混合して「ロック」「ストーン」を成した。ロック、ストーンの名の由来は「石」である。

■ A D 3 世紀 「ウェスト誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した西氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした西氏は現地人と混合して「ウェスト」を成した。ウェストの名の由来は「西」である。

■ A D 3 世紀 「ラーナー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した習氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした習氏は現

地人と混合して「ラーナー」を成した。ラーナーの名の由来は「習」である。

■ A D 3 世紀 「チャイルド誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した子氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした子氏は現地人と混合して「チャイルド」を成した。チャイルドの名の由来は「子」である。

■ A D 3 世紀 「プラント誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した植氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした植氏は現地人と混合して「プラント」を成した。プラントの名の由来は「植」である。

■ A D 3 世紀 「トランプ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した札氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした札氏は現地人と混合して「トランプ」を成した。トランプの名の由来は「札」である。

■ A D 3 世紀 「リトル誕生」「スモール誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した趙氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした趙氏は現地人と混合して「リトル」「スモール」を成した。リトル、スモールの名の由来は「趙」である。

■ A D 6 6 1 年 「ハリポンチャイ王国誕生」

インドシナ半島に集った小野妹子（遣唐使）、フラニ族（イスラム教伝来）、趙氏（南越国）は、合同で「ハリポンチャイ王国」を築いた。ハリポンチャイの名の由来はヴァラナシ（フラニ族）、ヴァナラシ（小野氏）、ゼウス（趙氏）の組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ+ゼウス=ヴァラヴァンゼウ=ハラパンジェウ=ハリポンチャイとなる。ハリポンの部分、ブルボンの名の由来と同じである。

■AD960年 趙匡胤、初代皇帝に即位 「宋誕生」

サクソニア戦争で、シャルルマーニュ大帝に敗北したザクセン王国の残党（宋氏）は、イギリス人リトル、スモール（趙氏）を率いて中国に帰還した。宋氏は満州に移住したが、趙氏は中国に移住し、同盟者の名を借りて新規に「宋」を開いた。

■AD1276年 「ヨガイラ家誕生」

南宋が滅びると、趙氏の恭帝、端宗、衛王の氏族が中国を脱出し、チンギスの征西に同行してリトアニアに向かった。趙氏は、先発隊である李氏、金氏、朱氏、閔氏らが構成していたリトアニア王家に接触した。趙氏の系統からはヨガイラが誕生し、AD1377年にヨガイラがリトアニア大公の座に就いた。ヨガイラの名の由来は「趙ガイラ」である。

■AD1377年 ヨガイラ、ヤギェヴォ朝初代王に即位 「ヤギェヴォ家誕生」

AD1377年にヨガイラがリトアニア大公の座に就いた。ヨガイラの名の由来は「趙ガイラ」である。この時に「ヤギェヴォ家」が誕生した。ヤギェヴォ家は、数多くのポーランド王、ハンガリー王、ボヘミア王を輩出したが、ジグムント2世の男系断絶を機に、李氏、金氏、朱氏、閔氏らを率いて東アジアに帰還した。このリトアニア帰還組が、東アジアに於ける共産党勢力の母体となる。

■AD1572年 「柳生氏誕生」

ヨーロッパ人の顔をしたヤギェヴォ家の一部は、日本に移住して現地人と混合して「柳生氏」を形成した。柳生の名の由来はヤギェヴォである。ヤギェヴォ＝ヤギェー＝柳生となる。

■AD1571年 柳生宗矩生誕

徳川家光の兵法指南役に選ばれた。

■AD1630年 ジョサイア・チャイルド生誕

■AD1632年 ジョン・ロック生誕

■AD1744年 マイアー・アムシェル・ロスチャイルド生誕 「ロスチャイルド財閥誕生」

明が1646年に滅亡すると、朱氏は子氏（チー）を連れて再度、ヨーロッパに落ち延びた。当時、リトアニア大公国はポーランド王国に飲み込まれて消滅していたため、彼らは、神聖ローマ帝国治世下のドイツに根を下ろした。中国人の顔をした朱氏と子氏は、「大和人の大航海時代」を経てドイツにやってきた諸子百家「農家」の子孫バウアー家に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのがマイアー・アムシェル・ロスチャイルドである。ロスチャイルドの名の由来は朱（チュ）と子（チー）の組み合わせである。

■AD1773年 アムシェル・マイアー・ロスチャイルド生誕 「フランクフルト家誕生」

■AD1774年 ザロモン・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ウィーン家誕生」

■AD1777年 ネイサン・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ロンドン家誕生」

■AD1788年 カール・マイアー・ロスチャイルド生誕 「ナポリ家誕生」

■AD1792年 ヤーコブ・マイアー・ロスチャイルド生誕 「パリ家誕生」

■AD1883年 フランツ・カフカ生誕

■AD1898年 周恩来生誕

■AD1919年 趙紫陽生誕

党総書記や党中央軍事委員会第一副主席に就任した

■AD1937年 柳生博生誕

■AD1945年 レズリー・ウェスト生誕 「マウンテン誕生」

■AD1946年 ドナルド・トランプ生誕

■AD1946年 オリバー・ストーン生誕

■AD1949年 ロバート・プラント生誕 「レッド・ツェッペリン誕生」

■AD1953年 習近平生誕

第7代国家主席に就任している。

■AD1955年 チョウ・ユンファ生誕

■AD1956年 ドワイト・H・リトル生誕

チュクウの歴史②

◆チュクチ（ステュクス）の歴史

■30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■30万年前 「ステュクス誕生」

「キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは赤髪の白人であった。彼らは東南アジアに入植し、獣人の姿をしたチュクウ、アボリジニの姿をしたクウォスと組んで「ステュクス」を生んだ。ステュクスの名の由来はカゾオバ、チュクウ、クウォスの組み合わせである。カゾオバ+チュクウ+クウォス=ゾオチュクウォス=ステュクスとなる。ステュクスは、大洋の娘たちに名を連ね、冥府の河として知られた。

■30万年前 「セデック族誕生」

マレー半島から台湾に上陸したステュクスは、現地人と混合して「セデック族」を生んだ。セデックの名の由来はステュクスである。ステュクス=セデュクス=セデックとなる。

■7万年前 「チュクチ族誕生」

セデック族（台湾）は、意気投合したトゥングル族（カレン族）と共にシベリアに移住した。両者は、ウリゲン、テングリ、エルリクなどの子孫である現地人と交わり「チュクチ」「ディングリング」を形成した。チュクチの名の由来はステュクスである。ステュクス=スチュクチ=チュクチとなる。チュクチ族、丁零（ディングリング）は、黒龍江辺りに住んだ。黒龍江は「神統記」では「冥府の川ステュクス」と呼ばれた。

■7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■7万年前 「速秋津日子誕生」「速秋津日売誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したステュクスは、フィリピンを離れたチュクチ族は、台湾に帰還して獣人エピアルテースと連合した。彼らは「ハヤアキヒコ」「ハヤアキツヒメ」を生んだ。ハヤアキツの名の由来はエピアルテースとステュクスの組み合わせである。エピアルテース+ステュクス=ピアユクス=ハヤアキツとなる。

■ 7万年前 「常世国誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したステュクスは、ウェダ族（エウドーラー）と共に現ユタ州に入植している。彼らは「常世国」を築いた。常世の名の由来はステュクス、エウドーラーの組み合わせである。ステュクス+エウドーラー=テュクエウ=常世（とこよ）となる。

■ 7万年前 「ダグザ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したステュクスは、アイルランドに「ダグザ」の名を残した。ダグザの名の由来はステュクスである。ステュクス=スデュグズ=デュグズ=ダグザとなる。ダグザは、後にダーナ神族の支配下に置かれ、「マー・トゥーレスの戦い」では首領として持ち上げられ、ダーナ神族の命を受けて仲間と戦う羽目になる。

■ 3万年前 「チュクチの大航海時代」

■ 3万年前 「生口島誕生」

「チュクチの大航海時代」に参加したチュクチ族は、瀬戸内海に移住し、神の島と呼ばれた「生口島」に拠点を得た。生口（いくち）の名の由来はチュクチである。チュクチ=ユクチ=生口（いくち）となる。更に、この時に瀬戸内海は初めて「瀬戸」と呼ばれた。瀬戸の名の由来はステュクスである。この時の大航海時代は、古事記、日本書紀では山幸彦の説話として記されている。当時、チュクチ族は台湾人に「幸（さち）」と呼ばれていた。幸の名の由来はステュクスである。ステュクス=スチュクス=スチュ=幸（さち）となる。つまり、海幸彦、山幸彦とはチュクチ族のことである。

■ 1万3千年前 「テングリの大移動時代」

■ 1万3千年前 「チェケル人（前身）誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したテングリは、長江から瀬戸内海に移住した。この時に、テングリはチュクチと組んで「チェケル人」を生んだ。チェケルの名の由来はチュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュクリン=チェケルとなる。

■ BC 32世紀 「タガログ族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したティカル人は出羽国に入植し、トバルカインと共に試験的にピラミッドの建造を始めた。彼らが、広島に「葦獄山」を築いた時、ティカル人はチェケル人と交流を持ち、両者はフィリピンに移住して「タガログ族」を生んだ。タガログの名の由来はチュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュケルグ=タガログとなる。

■ BC 2180年 「ピラミッド派の大航海時代」

■ BC 2180年 「武内宿禰誕生」

「ピラミッド派の大航海時代」に参加したダグザは、ルソン島で合流したタガログ族、コイオス（マルドゥク）と共にルソン島を離れた。彼らは、そのまま北上して黒龍江に入り、故地モンゴルに帰還した。ダグザは、シベリアに移って祖を同じくするチュクチに出会い、合流している。この時に、「武内宿禰」が生まれた。武内の名の由来はダグザである。ダグザ=ダグウザ=武内（タケウチ）となる。武内宿禰は孝元天皇の子孫を称した。

■ BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■ BC 19世紀 「チェケル人誕生」

無法なシェルデン人は、地中海を我がもの顔で荒らしていた。これを懸念した科学の種族は、だが、これ以上核兵器を使用したくなかったため、タガログ族（チェケル人）にシェルデン人退治を依頼した。「海の民の大航海時代」を指揮したタガログ族は、太平洋、マヤ、アイルランド

を経て地中海に進出した。タガログ族は、地中海では「チェケル人」と呼ばれた。チェケルの名の由来はチュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュクリン=チェケルとなる。

■BC19世紀 「オルメカ文明誕生」

チェケル人の一部は、マヤ通過の際、マヤに残留している。彼らが築いた文明は、「オルメカ文明」として知られている。中でも、巨石で造られた巨大な黒人の頭部が有名だ。ただ、あの顔は黒人の顔ではなく、ルソン島に住んでいたチェケル人、つまり、タガログ族（フィリピン人）の顔である。海の民の脅威に曝されたラムセス2世の時代に製作されたレリーフがあるが、このレリーフにはチェケル人の姿が刻まれている。このレリーフに刻まれたチェケル人の顔も黒人に見えるが、じつはフィリピン人の顔である。

■BC1550年 「シェクレシュ人誕生」

チェケル人は、「海の民の大航海時代」に参加していた高車（ガオチェ）と共にクレタ島に入植した。この時に、新規の海の民「シェクレシュ人」が生まれた。シェクレシュの名の由来はチェケルとガオチェの組み合わせである。チェケル+ガオチェ=チェケルチェ=シェクレシュとなる。

■BC1550年 「チグリス誕生」「ザグロス誕生」

シェクレシュ人は、クレタ島からメソポタミアに移り、「ザグロス」「チグリス」などの地名を残している。ザグロス、チグリスの名の由来はシェクレシュである。シェクレシュ=チクレシュ=チグリス、シェクレシュ=ジェグレシュ=ザグロスとなる。

■BC10世紀 「カルタゴ誕生」

「海の民」の時代が終焉を迎えると、シェクレシュ人はクレタ島を離れた。彼らは、チュニジアに入植し、「カルタゴ」を建設した。カルタゴの名の由来はチェケルとマルドゥクの組み合わせである。チェケル+マルドゥク=ケルドゥク=カルタゴとなる。カルタゴは、テュロスと並んで正しく優れた人々の中継地として発展した。美しく、優れた人々を非常に憎悪するタナトスは、ローマ共和国に巢食い、カルタゴ打倒に対して異常なまでの熱意を傾けた。

■ A D 3 世紀 「武内氏誕生」「竹内氏誕生」「武市氏誕生」「高市氏誕生」「田口氏誕生」「出口氏誕生」

騎馬軍団が台頭すると、イエマツクの王族である天皇家をはじめ、武内宿禰の残党は、満州から日本に移住した。この系統からは「土佐勤皇党」の武市瑞山、「大本教」の出口なお、学者の竹内均、脚本家の田口成光、俳優田口トモロウ、漫画家高市由美（山田花子）、漫画家武内直子が輩出されている。

■ A D 5 3 4 年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■ A D 5 3 4 年 「スクスフ誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したガリア人は、満州に移住した。この時、ガリア人は、ジブチ人と組んで「スクスフ」を生んだ。スクスフの名の由来はチュクチとジブチの組み合わせである。チュクチ+ジブチ=チュクジブ=ツクソハ=スクスフとなる。その後、スクスフは建州女直に参加した。

■ A D 9 9 7 年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■ A D 9 9 7 年 「シェイクスピア誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したスクスフは、ブリテン島に移住した。アイルランドは、先祖であるダグザ縁の地だからだ。満州人の顔をしたスクスフは、イギリス人と混合して「シェイクスピア」の名を生んだ。シェイクスピアの名の由来はスクスフである。スクスフ=スークスハ=シェイクスピアとなる。

■ A D 1 1 6 8 年 「結城氏誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したチュクチ族は、北九州に赴き、現地人と混合して「結城氏」を生んだ。結城の名の由来はチュクチである。チュクチ=チュークチ=ユーク=結城となる。A

D 1 1 6 8 年生まれの結城朝光が「結城氏」の祖である。

■ A D 1 3 3 8 年 「ピュー族の大航海時代」

■ A D 1 5 ? ? 年 「宇久氏誕生」

「ピュー族の大航海時代」に参加したチェケル人（オルメカ文明）は、地球を一周したピュー族の船団に、途中のマヤから参加した。太平洋を越えた彼らは、北九州に赴き、現地人と混合して「宇久氏」を生んだ。宇久の名の由来はチュクチである。チュクチ=ユク=宇久となる。A D 1 6 世紀の初頭に生まれた宇久盛定が「宇久氏」の祖となる。その後、宇久氏は倭寇に参加した。

■ A D 1 5 6 4 年 ウィリアム・シェイクスピア生誕

■ A D 1 5 7 7 年 戸隠山修験、見付天神にてアステカ人を成敗

「犬の早太郎」が、見付天神でアステカ帝国時代の生贄の風習を存続させていた大谷を皆殺しにする。「犬」とは天狗のことを指しているが、天狗は山伏、修験者の別名である。犬の早太郎の正体は、戸隠山修験、或いは秋葉山修験に属する優れた修験者である。もちろん、早太郎は個人ではなく、集団でやってきただろう。つまり、早太郎は修験者集団の首領だった可能性が高い。修験者の早太郎に皆殺しにされた大谷は、遠江国を脱出し、命からがら兄弟が住む京都にまで逃げ延びた。彼ら、アステカ帰りの大谷は、日本に残留して本願寺を営んでいた大谷に接触し、自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「西本願寺」を築く准如である。

■ A D 1 6 世紀 「江口氏誕生」「井口氏誕生」「池内氏誕生」

その後、宇久氏は倭寇に参加したが、彼らは日本中に四散し、「江口」「井口」「池内」などの名を生んだと考えられる。全ての名の由来はチュクチである。

■ A D 1 7 世紀 「フルイストゥイ派誕生」

伊達氏の東北地方に於ける台頭を機に、出羽修験は日本を発ち、ロシア帝国に向かった。ヴォルガ河上流に根付いた彼らは、現地人と混合して「フルイストゥイ派」を形成した。フルイストゥイの名の由来は古い死体である。古い死体＝フルイシタイ＝フルイストゥイとなる。古い死体とはミイラ、つまり、出羽三山の聖地に収められている奥州藤原氏3代のミイラのことである。これがフルイストゥイ派の正体が出羽修験である証に他ならない。

ただ、彼らの中に、タナトスが築いた日本仏教に携わる天台密教、或いは真言密教の関係者が紛れ込んでいた。タナトスは、「ディオニュソスの密儀」を再現し、淫靡で残虐な密儀集団としてフルイストゥイ派をロシア内外に知らしめた。フルイストゥイ派のタナトスは「罪を犯せば犯すほどより深く悔い改めることができる。真の意味で救済されるにはより罪を犯すべし」ということを旨にしていた。

■AD1785年 「カルボナリ誕生」

覚明が慣例の掟を破って登拝したのを機に、木曾御岳修験は日本を発ち、イタリアに移住した。彼らは現地人の混合し、AD1800年代初頭に「カルボナリ」を設立した。カルボナリは、その名から「炭焼きの結社」だと考えられているが、実際の名の由来は修験道の護摩祈祷である。ローマ教皇を輩出したサルディーニャ人や神聖ローマ帝国皇帝コンラート2世の子孫である木曾御岳修験は、先祖の名に懸けてイタリア半島を掌握するために「カルボナリ」を組織した。カルボナリは、祖を同じくするサルディーニャ人の血統にカルボナリ入党を打診したため、会員数はあっという間に30万～60万を超えた。カルボナリは、「青年イタリア」のマッツイーニ、「赤シャツ隊」のガリバルディ、「サルディーニャ王国」のサヴォイア家と連合してイタリア王国の独立に関与した。

カルボナリは、AD1820年、ナポリ軍を巻き込んで一斉蜂起して「ナポリ革命」を起こし、翌年にサルディーニャ軍の決起を指導して「ピエモンテ革命」を指揮した。カルボナリはサルディーニャ人の子孫であるため、サルディーニャ王国に親近感を抱いていた。だが、実際にはサヴォイア家は土着のサルディーニャ人とは無関係であり、スウェード人の血統に連なっている。また、AD1821年にはフランス支部「シャルボンヌリー」を創立し、AD1830年に市民、学生、労働者と連携してパリで「フランス7月革命」に関与した。また、翌年には教皇領、ボローニャ、モデナで蜂起して「中部イタリア革命」を指揮するが、オーストリア軍に敗北した。彼らは、「ザーリアー朝」時代の神聖ローマ帝国領の奪還・復活を試みて一連の革命を指揮したが、これに失敗すると、カルボナリはヨーロッパを後に日本に帰還した。

■AD1908年 「大塚氏誕生」「大槻氏誕生」

シベリア大爆発を機に、一部チュクチ族はシベリアを逃れて日本に移住した。日本人と混合した

彼らは、オホーツクを由来に「大塚」「大槻」などの姓を称した。オホーツク=オーツク=大塚、大槻となる。この関係から、若槻、赤塚など、「塚」「槻」が付く姓が彼らによって日本に量産されたと考えられる。科学の種族とツングース人の血を引く大槻教授が、プラズマを研究しているのは興味深い。また、赤塚不二夫が満州で生まれたことも興味深い。個人の記憶は脳に蓄えられるが、家族、民族、種としての記憶は身体に刻まれているのだ。

■AD1837年 出口なお生誕 「大本教誕生」

■AD1920年 竹内均生誕

■AD1933年 伊丹十三（池内万作）生誕

■AD1935年 赤塚不二夫生誕

■AD1944年 田口成光生誕

■AD1956年 江口寿史生誕

■AD1957年 田口トモロウ生誕

■AD1966年 大槻ケンヂ生誕 「筋肉少女帯誕生」

■AD1967年 山田花子（高市由美）生誕

■AD1967年 武内直子生誕

■ AD 1982年 大塚愛生誕

◆トバルカイン（テュポン）の歴史

■ 4万年前 「テュポン誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したギガースは、しかし、クロノスの姦計により古代ギリシアを追放され、オーストラリアに帰還している、その後、ゼウスに敗北したクロノスがオセアニアに亡命すると、ギガースはクロノスに操られ、全能神ゼウスを倒すために「怪物テュポン」を結成して古代ギリシアに侵攻した。テュポンの名の由来はチュクウとヴァナラシの組み合わせである。チュクウ+ヴァナラシ=チュヴァナ=テュポンとなる。

■ 4万年前 「天香語山命誕生」

「ギガントマキア」に敗北したテュポンは、ギリシアから台湾に上陸した。この時、台湾は初めて「台湾」と呼ばれた。台湾の名の由来はテュポンだが、テュポンの名は「ジャパン」の語源でもある。テュポンを解散したギガースは、イマナ、ニヤメと混合して「アメノカグヤマ」を成した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとキューゲースとニヤメの組み合わせである。イマナ+キューゲース+ニヤメ=イマナギュゲヤマ=アメノカグヤマとなる。

■ 4万年前 「トバルカイン誕生」

「ギガントマキア」で敗北したアルキュオネウスは、台湾に帰還した。アルキュオネウスは、テュポンと組んで「トバルカイン」を生んだ。トバルカインの名の由来はテュポントアルキュオネウスの組み合わせである。テュポン+アルキュオネウス=テュポアルキュオネ=タバルキュオン=トバルカインとなる。

■ 3万年前 「ルカイ族誕生」

トバルカインは、台湾に「ルカイ族」を生んだ。ルカイの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=ルカイ=ルカイとなる。

■ 3万年前 「ラガイン族誕生」

トバルカインは、台湾からミャンマーに移住して「ラガイン族」を生んだ。ラガインの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝ルカイン＝ラガインとなる。

■ 2万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 2万5千年前 「五岳神誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したトバルカイン（チュクウ）は、「五岳神（ウーユエ）」を生んだ。ウーユエとは、南極大陸にあった科学の種族の国の名である。ウーユエの名の由来はチュクウとヴィディエの組み合わせである。チュクウ＋ヴィディエ＝ウイエ＝ウーユエとなる。五岳と呼ばれた伝説的な山は、中国にあるとされているが、実際には南極大陸にあった。

「南岳衡山」はカークパトリック山（4528m）とマークハム山（4350m）のことであり、「西岳崑山」はシドリー山（4187m）のことであり、「北岳恒山」はプラトー山（4191m）のことである。

■ 2万年前 「ヴィマーナ誕生」

ヴィマナ（UFO）の開発には科学の種族だけでなく、ハムの一族が加わった。それは、ヴィマーナの名前でわかる。ヴィマーナの名前とハムの名前は成立過程が同じなのだ。ハムとヴィマーナの名は、新水生人ヴィディエとイマナの組み合わせである。ヴィディエ＋イマナ＝ヴィマナ＝ヴィマーナとなる。

■ 2万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2万年前 「太乙救苦天尊誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、冥府神「ホウ都大帝（フェンドウ）」「太乙救苦天尊（タイイジユクウ）」を生んだ。フェンドウの名の由来はルハンガ

とヴィディエの組み合わせであり、タイジユクウの名の由来はヴィディエとチュクウの組み合わせである。ルハンガ+ヴィディエ=ハンディエ=フェンドウとなり、ヴィディエ+チュクウ=ディエチュクウ=タイジユクウとなる。

彼らは、高さが2万7000メートルもある火星の火山オリンポスを「羅ホウ山（ルオフエン）」と呼んだ。ルオフエンの名の由来はルハンガである。ルハンガ=ルオハンガ=ルオフエンとなる。「九幽地獄」「二十四獄」と呼ばれた施設で、反自然的な罪を裁かれたできそこないたちは、正統な種の存続を願いながら、巨大なピラミッドなどの建設に従事し、黙って死んでいった。

■ 2万年前 「テペウ誕生」

火星に住んでいたトバルカインは、雷雨の神チャク、創造主クグマッツが支配する古代マヤに基地を築いた。この時に「テペウ」が生まれた。テペウの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=テペウカイン=テペウとなる。テペウは、創造主として崇められ、王として古代マヤを統治したと考えられる。彼らは、基本的に科学文明を放棄していた。マヤ人が、宇宙人の子孫を自称するのは、これがゆえである。

■ 2万年前 「テワ族誕生」「ティワ族誕生」「トワ族誕生」

その後、テペウはコロラド流域残留に移り住んだ。彼らは現地人と混合して「テワ族」「ティワ族」「トワ族」など、後にプエブロ族に数えられる部族を生んでいる。トバルカイン=トワルカイン=トワ=テワ=ティワとなる。アメリカインディアンが、宇宙人の子孫を自称するのは、これがゆえである。

■ 2万年前 科学の種族、核兵器を開発

順番としては、UFOよりも核兵器の方が先ではないか？と考える向きもあると思う。だが、科学の種族は大変平和的な人たちであるため、UFOの後に、タナトスを焼くために核兵器が開発された。

■ 2万年前 「ユグドラシルの大移動時代」

■ 2 万年前 「出羽国誕生」

最終戦争ラグナロクにより、ミドガルド王国はネバダ砂漠と化した。この時、「ユグドラシルの大航海時代」に参加したチャクは、テペウと共に古代マヤを離れ、東北地方に入植して「出羽国」を建てた。出羽の名の由来はテペウである。テペウ＝テヘ＝出羽となる。

■ 1 万 3 千年前 「縄文人の大航海時代」

■ 1 万 5 千年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ B C 7 千年 「トバル誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加してモンゴルに移住し、その後「垂仁天皇の大移動時代」に参加したテペウは、メソポタミアに移ると「トバル」と呼ばれた。トバルの名の由来はトバルカインである。トナルカイン＝トバルとなる。

■ B C 5 千年 トバル、出羽国に帰還

「バベルの塔」を機に、トバルは出羽国に帰還した。

■ B C 3 2 世紀 「十和田誕生」

「第 2 次北極海ルート」に参加したプテ、ティカル人が出羽国を訪れると、トバルカインはプテと連合し、「十和田」を生んだ。十和田の名の由来はトバルカインとプテの組み合わせである。トバルカイン＋プテ＝トバテ＝トワテ＝十和田となる。

■ B C 3 2 世紀 「イスラエル王国誕生」

葦原中津国（八代湾～天草諸島）のアシアーと高天原（台湾）のブリアレオース（ロア族）が組んで「イスラエル王国」を築いた。イスラエルの名の由来はアシアーとブリアレオースの組み合わせである。アシアー＋ブリアレオース＝アシリアレ＝イスラエルとなる。ムシシの武蔵国、

イデュイアの伊勢国、トバルカインの出羽国、十和田、ティカル人の津軽、エドム人の出雲国、ティアマトの大和国などが参加し、縄文人による連邦王国を築いていた。イスラエルの12支族も、みな、縄文時代の日本、夏時代の中国で生まれた。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「ダヴィデ朝誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加した十和田人は、夏時代の中国に渡り、そこから現チベットに移った。十和田人はここに「ダヴィデ朝」を築いた。ダヴィデの名の由来は十和田である。十和田＝トヴァタ＝トヴァダ＝ダヴィデとなる。ダヴィデ王とは、十和田の縄文人の首長のことである。チベット人が日本人に似ているのは、この時の大移動時代の縄文人の大量移住によるものである。また、ツォボット（チベット）の名もダヴィデ、或いは十和田が由来となっている。十和田＝トヴァッダ＝ツォボット＝チベットとなる。

■BC32世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC32世紀 「善神デーヴァ誕生」

アルマゲドンを機に「ヨシュアの大移動時代」に参加したダヴィデは、文明放棄を決めた人々だったが、インダス流域に入植し、竜飛岬に住んでいた科学の種族から科学力を継承した。更に、テーバイ王国から来たトバルカインと連合し「善神デーヴァ」を生んだ。デーヴァの名の由来は出羽である。出羽＝出え羽＝デーヴァとなる。彼らが監督となり、ハラッパーやモヘンジョ・ダロなど、インダス流域に洗練された都市を築いた。彼らの生活の痕跡が、後に「インダス文明」と呼ばれた。

■BC1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 善神デーヴァ、古代ロシアに移住

「マハーバーラタ戦争」を機に、善神デーヴァはインダス流域を離れ、古代ロシアに移住した。

彼らが入植した人跡未踏の土地は、後に、モルディブから訪れたレティン人が「モルダヴィア」と呼んだ。特に、ロシア人女性には、一般的な白人女性とは異なる印象があるが、それは宇宙人（科学の種族トバルカイン）がもたらしたもののなのだろう。それは、この時にもたらされたのだ。

■ A D 6 世紀 「シベリア誕生」

A D 6 世紀頃、ブルガリア人、ハザール人、ペチェネク族などの騎馬軍団が北上すると、その中にタナトスが混じっていることを発見した善神デーヴァ族は核兵器で自身が築いた基地や施設を爆破し、タナトスが文明を悪用できないように自分たちの痕跡を跡形もなく消滅させた。現地には、核兵器でしか出来ないテクタイトが無数に転がっている。

この時、トバルカインはU F Oでシベリア奥地に飛来し、人跡未踏であることを確認して拠点に定めた。彼らは、先祖でもあるシベリア人を尊敬し、交流を重ねた。彼らが訪れたことにより、シベリアは初めて「シベリア」と呼ばれた。シベリアの名の由来はスバルである。スバル=スバリア=シベリアとなる。しかし、当時、心を読む機械を発明していなかった彼らは、シベリア人が既にタナトスに汚染されていたことを知らなかった。そのため、科学の種族の科学力と、タナトスのできそこないの心を持った人間が誕生してしまう。科学の力を、悪に使う種族の誕生である。

■ A D 1 1 世紀 「和田氏誕生」

宇宙人は、杉本氏に接近して自身の血統を打ち立てた、この時に生まれた杉本義盛は「和田義盛」と改名し、和田氏の祖として武蔵国に渡った。

■ A D 1 1 ? ? 年 「里見氏誕生」「蒲生氏誕生」「瀬田氏誕生」

モルドバの大爆発以降、科学の種族（エラド、マハラエル、トバルカイン）は、シベリアに移住したが、一部が日本に降臨した。一部の科学の種族はヴィマーナ（U F O）を捨て、地上に降りて日本人と混合した。科学の種族は、まず新田氏に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「里見氏」の祖、里見義俊である。里見の名の由来はソドムである。ソドム=サドム=里見となる。

また、一部の科学の種族（多分トバルカイン）は、藤原氏に接近して自身の血統を打ち立てた、この時に誕生したのが「蒲生氏」の祖、蒲生舜清である。蒲生の名の由来はゴモラである。ゴモラ=ゴモウラ=蒲生となる。また、一部の科学の種族は、「瀬田氏」を形成した。瀬田の名の由

来はソドムである。ソドム＝セダム＝瀬田となる。その後、里見氏から「千利休」が輩出され、蒲生氏と瀬田氏が「利休七哲」に加わっている。

■ A D 1 5 2 2 年 千利休生誕

■ A D 1 5 ? ? 年 「利休七哲誕生」

蒲生氏郷、細川忠興、古田重然、芝山宗綱、瀬田正忠、高山右近、牧村利貞などの武将が千利休に師事した。後世になって彼らは「利休七哲」と呼ばれた。この他にも織田長益、千道安、荒木村重、前田利長、有馬豊氏、金森長近が含まれることがある。千利休（里見氏）、蒲生氏郷、瀬田正忠は科学の種族の血統に属している。また、細川忠興はマプーチェ族、古田重然はラコタ族、芝山宗綱、高山右近はカンボージャ人（武田氏）、牧村利貞はマゴス（三木氏）、織田長益は西ゴート族、荒木村重はレイフ・エリクソン、前田利長はマイドゥー族、有馬豊氏はエラム人に属している。

細川忠興の娘であり、明智光秀の奥方であったガラシャの名は興味深い。ガラシャの名は、古の種族、「ヴェーダ神話」を編んだアーンギラサの名前に因んでいる。一方で、科学の種族は虚言症を患う大谷に目をつけ、動向を監視していた。大谷は、袈裟を羽織った人喰い人種であり、日本人を蝕む癌であると科学の種族は認識していた。利休は、大谷の影響を排除するために宗教ではなく、「茶」を編み出し、大谷や日本仏教に対抗するための強い組織の形成を急いだ。

また、利休七哲は、みなキリスト教に改宗し、イエズス会に接触している。彼らの、悪に屈しない意志、諸悪の根源日本仏教に対抗する強い意志を感じる。しかし、残念ながらこれに気付いた大谷に先手を打たれ、「茶」は、大谷の血統に属する利休の後妻の連れ子、千少庵に篡奪されてしまった。利休の子、千道安の本家「堺千家」は消滅し、千少庵が築いたニセモノ「三千家」武者小路千家・表千家・裏千家は存続し、「日本会議」にも関与している。

■ A D 1 5 9 1 年 千利休刑死

大谷の世では、優れていることが罪となる。自分たちの正体を探っている千利休と、利休に傾倒する武将たちの動きに警戒感を覚えた大谷は、秀吉に千利休の切腹をすぐに命じた。秀吉は一向一揆の正体が、大谷の指揮であることを知っていた。大谷や農民の如きは怖くも何とも無いが、それにしても数が多い。数で圧倒する。これが一揆の唯一の利点である。それに作物を作るのは農民である。簡単に皆殺しにすることはできない。せっかく天下統一を果たした秀吉である。大谷の要請を受け入れないと厄介なことになると踏んだ。しかし、崇敬する利休は殺せない。

そこで秀吉は、一計を案じて別人を処刑させ、忍びの者に命じて利休を安全な地へ導いた。し

かし、鬼の如く狡猾な大谷の目はごまかせない。「文禄の役」「慶長の役」の間、制裁として大谷の医者に体調を操作された秀吉はAD1598年に急死した。更に、大谷は家康に入れ知恵をし、秀頼と豊臣一門を殲滅するための罠にはめた。その後の利休がどうなったかは定かではない。だが、彼は科学の種族に迎え入れられた可能性がある。日本上空を飛来する不審な飛行物体に、利休の子孫が搭乗しているかもしれない（先日、筆者はケムトレイルで描かれた「千」の文字を空中に発見した）。

■AD1908年 「ツングース大爆発」

モルドバ大爆発以降、科学の種族はシベリアに居住していた。人食い人種タナトスとそれに追隨する無力で無知な「文明人」を嫌悪する科学の種族は、彼ら「シベリア人」と交流することを好んでいた。しかし、2000年前からタナトスがシベリア人の遺伝体系を汚染し、ナナイ族、オロチ族、オロチョン族、イテリメン族、ユカギール族などのタナトスに属するシベリア人を生んでいた。

当時、まだ思考を読む装置を開発していなかった科学の種族は知らない内にタナトス系シベリア人と交流し、子孫を成していた。科学の種族の遺伝子を得たタナトス系シベリア人は、科学の種族にウソと欺瞞で取り入り、悪用目的で科学の種族の科学力を篡奪し、世界征服用の巨大な要塞を建設していた、

これを察知した科学の種族はすぐに未知の兵器（放射能が検出されないことから核兵器ではない、人類が知らない巨大な爆発力を誇る兵器）で彼らの要塞を爆破した。これが「ツングース大爆発」の真相である。しかし、災害を生き延びたタナトス系シベリア人は、ツングースを逃れてドイツ、アメリカに移住した。彼らは科学者となり、ナチスに協力して「V2ロケット」を開発し、デー人（注）に協力して「原子爆弾」を開発した。一部は「MIB」を組織して宇宙人（科学の種族）に接触した人々に圧力をかけている。

■AD1935年 和田誠生誕

■AD1960年 チュエレイ人、安井氏と接触

「チュエレイ」を称する宇宙人が日本人に接触した。チュエレイの名の由来はニジェールだと考えられる。ニジェール＝ニジェーレイ＝チェレイとなる。ニジェールの名はエノスとメトセラが作った。つまり、このチュエレイ人は獣人アルキュオネウスの子孫である。

■AD1978年 ジャノス人、ジョン・マン家と接触

「ジャノス」を称する宇宙人がアメリカ人に接触した。ジャノスの名の由来はエノスだと考えられる。エノス＝ジェノス＝ジャノスとなる。つまり、このジャノス人は獣人アルキユオネウスの子孫である。

■AD198?年 「ケムトレイル散布」

科学の種族は、タナトスの化学企業が地球上に撒き散らす有毒な化学物質による汚染を憂いている。地球は、彼らの故郷でもあるからだ。永年の除草剤散布によって汚染された郊外の住宅街（特にアメリカ）、ゴルフ場、競技場、競馬場、公園、線路。殺虫剤散布によって汚染された公園、山岳地帯。これによって汚染された地下水は川に流れ込み、海に流れ出ている。これはタナトスによる人類の攻撃であるが、いらぬものを強制的に使わせる法律を整備することで、同時に巨万の富を得ている。

パラコートは1965年に、ラウンドアップは1970年に発売開始された。これ以降、汚染は蓄積し、年々重度を増している。70年代後半から、除草剤・殺虫剤によるアレルギーが顕在化すると、タナトスは自分の血統の医者「有毒な化学物質に起因するアレルギー」を「食物成分に起因する食物アレルギー」「植物の花粉に起因する花粉症」であるとウソをつかせている。これにより、化学企業は責任をとることも断罪されることもなく、人々を攻撃し続けることができる。タナトスの横暴に拍車をかけているのが、タナトスのウソを信じている無知な一般大衆である。

有毒な化学物質による汚染を食い止めるために科学の種族は除草剤、殺虫剤を中和するための未知の物質を撒き始めた。これが「ケムトレイル」である（農薬を使わないロシア・中国での発見報告はない）。ケムトレイルの発見は1990年代とされているが、60年代のアメリカ映画「ファスタープシキヤットキル！キル！（監督ラス・メイヤー）」に、既に空中にケムトレイルを見つけることができる。この映画のロケ地は砂漠であったが、もしネバダ近辺であるなら、この時のケムトレイルは放射能の危険性を指摘していただろう。

近年、科学の種族は、この害に気づかない大量の無知な人々とタナトスを共に亡き者にしようと考えている。彼らは、ソドムとゴモラの時にも躊躇することなく無知な人々とタナトスを共に焼き殺した（狡猾なタナトスはうまく逃げ出しているが）。科学の種族は、加害者であれ被害者であれ、愚かな人間が許せない。彼らは、わかりやすくいえば「バイオレンスジャック」のような存在である。

■AD2003年 「空飛ぶ黒いステッキ」

カナダのオンタリオ州でミステリーサークルの見学に来ていた見物客が、この奇妙な、空中に浮かぶ棒状の物体を偶然カメラに収めている。空飛ぶステッキの写真は「UFO現象ファイル」という本に載っているが、この本を買った当時、この写真を見ても「は？」としか思わなかった。しかし、その一年後、2016年初頭に同じものを見たのだ。いい気なもんで、実際にこの目で見てしまうと人間変わるもんです。これ、間違いなく存在します。

筆者は、これを見つけた時、山の上（舗装整備されている）を散策しており、とある大学の敷地の上空にこれが浮かんでいるのを見た。丁度、その一ヶ月くらい前から、筆者は科学の種族が乗る飛行機（ケムトレイルを撒いている）を見ていたため、冷静だったが、思わず目を疑った。見た感じは黒い棒で、冬場で風が強かったにもかかわらず、空中に突き刺さっているかのようにピクリとも動かない。そして、2ヶ所でヌメツとした赤い光が点滅していた。

何か、監視されている気がして不快な気分になった。ある種の圧力を感じたのだ。機械というよりは、何か得体の知れない生き物のような感じだった。もっと良く見ようと双眼鏡を取り出している内にそれは消えてしまった。しかして、これは科学の種族が作ったものに間違いはない。当時はまだ認識していなかったが、彼らが赤い光を点滅させる時は「警戒しろ」と言っている。確かに、この時に筆者が向かおうとしていた先には大きな競技場があるし、帰り道にはゴルフ場付近を通過しなければならなかった。科学の種族は「競技場、ゴルフ場で撒かれている除草剤に警戒しろ」と、無言の語りで筆者に伝えていたのだ。オンタリオ州の空飛ぶステッキ撮影現場も広大な麦畑であることに留意したい。科学の種族は、除草剤を「非常に危険な物質」だと考えている。

■AD2015年 彼らの飛行機が筆者の前に出現

午前中、たまに散歩をする筆者は、この年の12月に彼らが乗る飛行機を発見した。前から飛んでいたのかどうかは定かではないが、山（舗装整備されている）を登っていたら、ふと空中で静止している飛行機を見たのだ。実際には静止しているのではなく、非常にゆっくりだが、飛んでいた。更に、双眼鏡で見ると飛行機の形をしているのだが、白銀色の機体はボヤッとしていてハッキリとは見えない。何度も観察するうちに、彼らは、筆者を中心に南北の空を飛んでいることがわかった。北の空を飛ぶ場合は東から西へ、南の空を飛ぶ場合は西から東へ飛んでいる。この法則はきっちり守られている。通常通り飛んでいれば安全を意味する。

しかし、筆者が知らずの内に危険な場所に向かっている時、或いは向かおうとしている時（この場合は思考を読んでいる）、彼らは反対方向から飛んでくる。北の空の場合は西から東へ飛び、南の空の場合は東から西へ飛んでいく。また、東西から飛んでくる機がすれ違うときがある。北の空の場合、西から東へ向かう機が東から西へ向かう機とすれ違うのだ。これは「来た方向へ戻れ」ということを示している。時にはすれ違う機がテレポートで消えるときがある。これも「すぐにそこから離れろ」ということを示している（何回か見たが、いずれもゴルフ場の近くや田んぼの真ん中にいた）。彼らは、見世物のように、遊びで消えて見せたりはしない。必ず何か意

味を込めている。

また、ケムトレイルを撒く彼らはケムトレイルで巨大なバツを描いて危険を知らせたり、ケムトレイルで迂回しろという警告もくれる。他にも、飛んでいる生物を操って危険を知らせることがある。「先へ行くな」という警告の時には、あらゆる鳥類、トンボ、蝶、蜂が横切る。「早くそこから離れろ」というときにはスズメバチがスッ飛んでくることも多い。これは怖い。スズメバチが目に入ったこともある。今思えば、スズメバチが目に入った場所は水産加工場地帯だったため、殺菌剤にひどく汚染された場所だった。よほど危険なのだろう（そこで働いている人たちがいるが）。

◆ピラミッド派（デウカリオン）の歴史

■ 4万年前 「デウカリオン誕生」

テュポンは、アグリオスと連合し、「デウカリオン」を生んだ。デウカリオンの名の由来はテュポンとアグリオスの組み合わせである。テュポン+アグリオス=テュグリオ=テウグリオ=デウカリオンとなる。その後、大地殻変動時代を経てメソポタミアに入植すると、デウカリオンは巨石の種族ティカル人となる。この時、チュクウはピラミッド派になり、アグリオスはマウンド派となる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ティカル人誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したデウカリオンは、オーストラリアからスーサに身を寄せた。その後、デウカリオンは「巨石の種族ティカル人」となる。ティカルの名の由来はデウカリオンである。デウカリオン=ティカリオン=ティカルとなる。

■ 1万5千5百年前 「ギョベクリ・テペ建設」

偉大な先祖カオスを祀るため、デウカリオン族とピュラ族は、古代アナトリアに「ギョベクリ・

テペ」の神殿を築いた。ストーンサークル、ドルメン、前方後円墳、ピラミッドなど、すべての「巨石文化の種族」の始まりである。デウカリオン族は、後にマルタ人と連合して「マルドゥク族」を築き、タナトスの要請でメンヒルを、単独でドルメンなどをヨーロッパに築くことになる。

■BC 7千2百年 「チャタル・ヒュユク建設」

チャタル・ヒュユクは、過去にスフィンクスを建造した巨石の種族の萌芽である。ここには、8000人もの人々が住んでいたといわれている。ティカル人の街として発展したのだろう。この頃、デウカリオンは、ヨーロッパからオリエントに進出していたウソつきの人喰い人種ディオニュソスを皆殺しにしている。

■BC 3700年頃 「ジュンガンディーヤ神殿製作」

ピラミッド派は、同盟者マルタ人の拠点であるマルタ島に上陸し、「ジュンガンディーヤ神殿」を築いた。彼らの製作目的は、マルドゥクと同様に「聖なる洞窟」の建立であった。だが、窓が無く、屋内は昼間でも漆黒の闇であるため、製作法や製作の動機が謎とされている。彼らは、「原初の神カオス」を祀るため、真に洞窟の製作を志していた。そのために、真の闇が必要だったのだ。彼らは、後に「第2次北極海ルート」を立ち上げて、大航海時代に突入している。

■BC 32世紀 「第2次北極海ルート時代」

■BC 32世紀 「ロシア巨石文明誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したティカル人は、オビ河に到着する。このオビ河には、ティカル人、メトセラ、スバル人、マダイ族、アシエル、マハラエルが残留を決めた。オビ河がつなぐ4つの支流の1つはカザフスタンとモンゴルの境に端を発するが、AD 2014年3月、近辺であるショリア山中で40mを越える花崗岩でできた人工の壁が発見された。人類史を覆す巨石オーパーツ、ロシアの巨石文明として話題になっているが、この巨石建造物に関わったのがピラミッド建造前夜のティカル人と考えられる。文明放棄組の行く末を常に見守っていた善神デーヴァ族は、巨石の種族であるティカル人に協力して創りあげたモノと考えられる。この時に、ティカル人はピラミッド建造のヒントを得たのではないか。

■BC32世紀 「津軽誕生」「十和田湖命名」「黒又山製作」

「第2次北極海ルート」に参加したティカル人は、シヨリア山中でピラミッド建造のヒントをくれた善神デーヴァ族と共に津軽に移り住んだ。この時に初めて、この地は「津軽」と呼ばれた。津軽の名の由来はティカルである。ティカル=チカル=つがる（津軽）となる。ティカル人と善神デーヴァ族は現地人と混合し、ここで日本人の顔を得た。

また、金髪・碧眼の白人である善神デーヴァ族も一部が日本人の顔を得たと考えられる。ティカル人は、早速ピラミッドの試作品を現青森県に残した。十和田湖の水中ピラミッドと黒又山である。十和田の名の由来はトバルカインとティカルの組み合わせであり、黒又の名の由来はティカルとメトセラの組み合わせである。トバルカイン+ティカル=トバティ=十和田となり、ティカル+メトセラ=カルメト=クロマンタ（黒又）となる。

■BC32世紀 「葦嶽山製作」

ティカル人は現広島県にピラミッドと噂されている「葦嶽山」も残している。この名の由来はアシェルとティカルの組み合わせで、アシェル+ティカル=アシェティカ=葦嶽となる。

■BC32世紀 「タガログ族誕生」

科学の種族と分かれたティカル人は、日本を離れてルソン島に入植した。この時に、ティカルク（ティカルの人）を由来に「タガログ族」を成した。ティカルク=ティガルグ=タガログとなる。

■BC32世紀 「イースター島発見」

ティカル人は、ルソン島を発して太平洋横断に挑んだ。彼らは、メラネシアに到着するとトンガ、サモアなどに「タンガロア」「ティキ」などの神を祀った。タンガロアの名の由来はタガログであり、ティキの名の由来はティカルである。タガログ=タンガログ=タンガロアとなり、ティカル=ティキル=ティキとなる。その後、ティカル人はイースター島を発見した。

■BC29世紀 「パラトアリ・ピラミッド群製作」

更に、イースター島から古代ペルーに到達し、スーペ川を拠点にしたティカル人はアンデス山脈を越えた。その後、アマゾン流域に達すると、彼らは津軽で善神デーヴァ族と共に培ったピラミッド建造技術を単独で実践しはじめた。その結果が「パラトアリ・ピラミッド群」である。人工的な遺物とされる小山が、密林のド真ん中に10基も整然と並んでいるのだが、この時も「黒又山」の時と同様に、ティカル人は善神デーヴァ族の手を少々借りたかもしれない。

■BC29世紀 「カラル遺跡製作」

ティカル人はアマゾン流域からペルー側に戻ると、パラトアリで得た技術を用いて、単独でカラル砂漠に9基の試作品を製作した。それが「カラル遺跡」である。カラルのピラミッドは、エジプト初の階段ピラミッドよりも古い時代に作られたことで謎を呼んだ。

■BC29世紀 「ダカール誕生」

手応えを感じたティカル人は、南米を離れると大西洋をそのまま横断して古代セネガルに辿り着いた。ティカル人はここに「ダカール」の名を残した。ダカールの名の由来はティカルである。ティカル=ディカール=ダカールとなる。その後、ピラミッド技術を携えたティカル人は、ダカールを離れて北上し、地中海に侵入した。以上、お分かりのように、巨石建造の種族は、並々ならぬ冒険家の集団でもあった。

■BC2620年 「サッカラ誕生」「階段ピラミッド製作」

地中海に入ったティカル人は、古代エジプトに上陸した。そこで、ピラミッド派は自身の拠点「サッカラ」を得た。サッカラの名の由来はティカルである。ティカル=シィカル=サッカラとなる。ティカル人は拠点サッカラにて「階段ピラミッド」の建造を開始する。このエジプト初のピラミッドは、ジェセル王のために作られたといわれている。だが、ティカル人のピラミッド建造の目的は、常に「原初の神カオス」を祀るための「聖なる洞窟」の建立であった。ただ、洞窟を造るためには、まず、山を造らねばならない。ピラミッド派は、その後もエジプトに「ピラミッド」を築き、また、シュメールに赴いて「ジグラット」などを建設した。

■BC2180年 「ピラミッド派の大航海時代」

■BC 2180年 「ラピタ文化誕生」

タナトスから解放したマルドゥクを連れた。ピラミッド派はタガログ族の拠点ルソン島を中心に、マルドゥクと共に太平洋地域一帯に小型ピラミッドを多数残した。マルドゥクは多数のメンヒルを島々に残している。ピラミッド派は「ティキ」を祀った。ティキの名の由来はティカルである。ティカル=ティキル=ティキとなる。

■BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC 19世紀 「オルメカ文明誕生」

タガログ族は、マヤ通過の際、マヤに残留している。彼らが築いた文明は、「オルメカ文明」として知られている。中でも、巨石で造られた黒人の頭部が有名だ。ただ、あの顔は黒人の顔ではなく、ルソン島に住んでいたタガログ族、つまり、フィリピン人の顔である。海の民の脅威に曝されたラムセス2世の時代に製作されたレリーフがある。このレリーフにはチェケル人の姿が刻まれているが、黒人に見えるあの顔も、じつはフィリピン人（タガログ族）の顔である。また、巨石の種族マルドゥク（高車）と同盟関係にあったタガログ族は、見よう見まねで、オルメカ文明で土製ピラミッドの建造を試みている。

■BC 1250年頃 「ラス・アルダス製作」

ルソン島に入植したチェケル人と分かれ、ペルーに残留していたティカル人は、ペルー・カスマ川に「ラス・アルダス」と呼ばれるピラミッドを製作した。また、ピラミッド派は一度、マウンド派との連合を試み、BC 10世紀に巨大な土製のピラミッドをエル・サルバドル、ホンジュラスに建造した。

同年代に、ピラミッド派がチャビン・デ・ワントルに宗教都市を建設すると、それを境にピラミッド派の活動が活発化する。ピラミッド派は、マラニョン川、カハマルカ地域にピラミッドを建設し、ネペニャ川に神殿を建設した。その後も、カスマ川、アヤクーチョ地方、ピルー川、チャンカイ川、チンチャ川と次々にピラミッドを製作した。

■BC 582年 「ピタゴラス誕生」

BC 9世紀頃に精力的にピラミッドを残したピラミッド派は、BC 3世紀になるまで500年間

、ペルーでのピラミッド建造を中止している。この間、彼らはギリシアに移住して「ピタゴラス」を生んでいた。ピタゴラスの名の由来はペルーのティカルである。ペルー+ティカル=ペタカル=ピタゴラスとなる。

彼は、古代よりピラミッド建造に携わってきた種族の末裔であるがゆえ、先鋭的な数学者として知られた。また、ピタゴラスは神秘主義的な側面を持ち、密儀結社「ピタゴラス教団」を結成した。しかし、クロトン成立の歴史的背景を知らないピタゴラスは、この地に及んで伝道活動を行うも、人喰い人種「ダン族」の末裔であるクロトン人に嫌われて虐殺されてしまう。

■BC582年 「テオティワカン宗教都市建設」

虐殺を機に、ピタゴラスの一族はクロトンを逃れてペルーに帰還した。だが、新たな新天地を求めた彼らは、故地を離れて古代メキシコに移住した。ピラミッド派は、ギリシアで得た知識を導入し、「死者の大通り」「太陽と月のピラミッド」を含む、洗練された巨大な宗教都市を現出させた。この後、200年後に「イエマックの大航海時代」を機に河伯がメキシコに到来すると、この人身御供の種族を嫌ったピラミッド派は故地ペルーに帰還した。

■BC3世紀 「エル・ミラドール建設」

ペルーでは、ピラミッド派は「ガイナソ文化」に属するピラミッドをピルー川に築き、グアテマラに赴いてスペイン人に「エル・ミラドール」と呼ばれた宗教都市を築いた。時は、BC3世紀頃のことである。この時期、マウンド派はピラミッド派の精力的な活動に不満を示し、故地を離れて東アジアに向かうことを決意し、太平洋を横断して、秦統治下の中国に赴いている。

■BC221年 「万里の長城製作」

ピラミッド派は、マウンド派を追って東アジアに移住し、ピラミッドの需要を求めて中国各地の王族に接触した。匈奴の侵入を防ぐために始皇帝は、ピラミッド派に長城の製作を依頼した。しかし、ピラミッド派は長城建設に乗り気でなかったのか、故地に帰還してオアハカ盆地に鎮座する宗教都市「モンテ・アルバン」や、ボリビアに宗教都市「ティワナク」の建設を指揮した。

■AD72年 「熊襲武尊誕生」

「万里の長城」建設の途中でペルーに逃げたピラミッド派は、再度、東アジアの地を踏むべく、

ペルーを後にした。ピラミッド派は、九州に上陸し、熊襲国に身を寄せた。ピラミッド擁護派として熊襲を味方に付けた彼らは「熊襲武尊」を称した。クマソもヤマトも武（タケル）の名の由来は同じティカルである。ティカル＝タカル＝タケルとなる。その後、熊襲武尊が日本武尊に敗北すると、マウンド派は、熊襲を離れて、吉備国に移住した。現岡山県赤磐市に小型ピラミッドを一基（熊山遺跡）しか残せなかったピラミッド派は、「大和人の大航海時代」に参加して東方に旅立った。

■ A D 3 世紀 「マラエ製作」

「大和人の大航海時代」に参加して故地への帰還を計った熊襲武尊は、途上のタヒチ島に上陸し、ティキを祀るための小型ピラミッド「マラエ」を製作した。ここから、単独での航海がスタートする。

■ A D 3 世紀 「太陽のワカ製作」「月のワカ製作」

ピラミッド派はポリネシアからペルーに移住し、モチェ川付近に「太陽のワカ」「月のワカ」と呼ばれるピラミッドを建造した。

■ A D 3 世紀 「グイマーのピラミッド製作」

更に、そこからマヤに至り、大西洋側に出ると、大西洋を横断してカナリア諸島に上陸する。彼らはここに「グイマーのピラミッド」を建設した。このピラミッドは、誰が建造したのか不明だとされている。

■ A D 4 世紀 「伯爵の神殿製作」「碑銘の神殿製作」

カナリア諸島から帰還したピラミッド派は、折りしも、古墳時代の終焉を機にマヤに移っていたマウンド派と再度対立した。熊襲武尊と日本武尊の対立の再現である。ところが、今回はピラミッド派が勝利し、マウンド派を退けてマヤ全域にピラミッドを建設する権利を得た。ピラミッド派はパレンケに「伯爵の神殿」「碑銘の神殿」を建造している。

■ A D 5 世紀 「エローラの石窟寺院製作」

その後は、太平洋再度横断してインドに移り、AD5世紀に「エローラの石窟寺院」の製作を指揮している。この後、AD8世紀になるまで300年の間、ピラミッド派は東南アジアに移住してヒンズー様式の巨石建造物を建造している。

■AD8世紀 「魔法使いのピラミッド製作」「ティカル・ピラミッド群製作」

AD8世紀にインドから帰還すると、ピラミッド派は「魔法使いのピラミッド」をウシュマルに建設し、ティカルに「第1神殿」～「第4神殿」に至るシリーズを建立している。

■AD8世紀 「ボロブドゥール寺院製作」

その後、ピラミッド派は再度マヤを離れてシャイレンドラ朝治世下のジャワ島に渡り、AD9世紀に「ボロブドゥール寺院」を建造している。

■AD10世紀 「ククルカンの神殿製作」

マヤに帰還したピラミッド派は、チチェン・イツァーに「ククルカンの神殿」を建立した。

■AD1113年 「アンコールワット寺院製作」

しかし、三度、マヤを後にすると、ピラミッド派はAD1113年にはカンボジアにヒンドゥー寺院「アンコール・ワット」を建立している。

■AD13世紀 「ナンマドール遺跡製作」

AD13世紀頃にはポナペ島に「ナンマドール遺跡」を建立している。ムー大陸の痕跡だとかいろいろ言われている。自由を愛する彼らは、自由を奪い、人間の尊厳を否定する文明を広めているタナトスを嫌い、自分たちだけの島を人工的に作ろうとしたのかもしれない。

■AD1320年 「トゥグルク朝誕生」

A D 1 0 世紀、ティカル人破魔矢を拠点に世界中に進出して巨石建造物の建築を依頼されていた。この時、オルメカ文明の時代からマヤにいたタガログ族は彼らに同行してアジアに帰還した。その後、彼らはパンジャブに進出した。タガログ族は「トゥグルク」を称し、ハルジー朝を倒してA D 1 3 2 0 年に「トゥグルク朝」を開いた。トゥグルクの名の由来はタガログである。タガログ＝トグルク＝トゥグルクとなる。A D 1 3 2 3 年、トゥグルク朝はカーカティヤ朝、ホイサラ朝を倒してインド全域を獲得した。

■ A D 1 5 世紀 「万里の長城製作」

その後、ピラミッド派は明の治世下にある中国を訪れ、「万里の長城」の建設を指揮した。万里の長城は、蛮族の侵入を防ぐために築かれた長城は、宇宙からも見える一大モニュメントとして知られている。

■ A D 1 5 世紀 「モアイ製作」

しかし、それが終わると、ピラミッド派はイースター島に閉じこもり、巨石の建造に纏わる技術の継承を目的に「モアイ」の製作を人知れず継続した。ところで、筆者は美大に通っていたが、画力を上達させるには人物デッサンを多く手がけることである。人物は、いろんな形の集合体である。つまり、人物を描破できるようになれば、何でも描けるようになるのだ。それは彫刻も同様である。つまり、イースター島の職人たちが、人物の石造を彫り続けたのは巨石建造物の建造に纏わる諸々の技術継承が目的である。いつでも、どんなものでも造れるように、どんな注文が舞い込んでもいいように人物を彫り続け、巨石の運搬技術の伝統を伝えるために、モアイを建て続けたのだ。

■ A D 1 7 2 2 年 「ダゴール誕生」

A D 1 7 2 2 年、白人がイースター島に到来すると、ピラミッド派はイースター島を離れてインドに移った。彼らは「ダゴール」の姓を成した。ダゴールの名の由来はティカルである。ティカル＝ディガル＝ダゴールとなる。

■ A D 1 7 4 2 年 カリーム・ハーン、イラン王に即位 「ザンド朝誕生」

A D 1 4 1 3 年、トゥグルク朝が滅ぶと、トゥグルク家はイランに移住した。その後、トゥグルクの血統から生まれたカリーム・ハーンは、トゥグルク時代に治めていたシンドを由来に「ザンド朝」をイランに開いた。ザンドの名の由来はシンドである。ザンド朝の系統は、イランからヨーロッパに移住した。

■ A D 1 8 6 1 年 詩聖ダゴール生誕

A D 1 8 6 1 年には詩聖ダゴールが誕生している。ダゴールは、アインシュタイン、ガンジーなど時代の寵児たちと親交を温めた。これをもって、ピラミッド派の大航海時代は終焉を迎えた。

■ A D 1 8 9 0 年 シャルル・ドゴール生誕

■ A D 1 9 4 4 年 タウンズ・ヴァン・ザント生誕

■ A D 1 9 4 5 年 ピート・タウンシェンド生誕 「ザ・フォー誕生」

チュクウの歴史（アグリオス）①

◆老子（アグリオス）の歴史

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「アグリオス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したチュクウは、ルワ、クウォスと組んで「アグリオス」を生んだ。アグリオスの名の由来はチュクウ、ルワ、クウォスの組み合わせである。チュクウ+ルワ+クウォス=ユクウルウォス=ユグルオス=アグリオスとなる。

■ 45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス」を生んでいる。クリュテイオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+クウォス=グリオディエオス=クリュテイオスとなる。

■ 45万年前 「グラティオーン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオーン」を生んでいる。グラティオーンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+ウェネ=グリオディエウエネ=グラティオーンとなる。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴ん

で引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「キャリアー族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（現アラスカ～カナダ北部）に居を構えたアグリオスは「キャリアー族」を称した。キャリアーの名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アグリアー＝キャリアーとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「オーキュロエー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、「オーキュロエー」を生んだ。オーキュロエーの名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アグリオー＝オーキュロエーとなる。その後、オーキュロエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カリュプソー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、アプスーと組んで「カリュプソー」を生んだ。カリュプソーの名の由来はアグリオス、アプスーの組み合わせである。アグリオス＋アプスー＝グリオプスー＝カリュプソーとなる。その後、カリュプソーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「クリュセーイス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、ムシシと組んで「クリュセーイス」を生んだ。クリュセーイスの名の由来はアグリオス、ムシシの組み合わせである。アグリオス+ムシシ=グリオシシ=クリオシーシ=クリュセーイスとなる。その後、クリュセーイスは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「クリュメネー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、イマナと組んで「クリュメネー」を生んだ。クリュメネーの名の由来はアグリオス、イマナの組み合わせである。アグリオス+イマナ=グリオマナー=クリュメネーとなる。その後、クリュメネーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「サンガリオス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、ジェンギと組んで「サンガリオス」を生んだ。サンガリオスの名の由来はジェンギ、アグリオスの組み合わせである。ジェンギ+アグリオス=ジェンギリオス=サンガリオスとなる。その後、サンガリオスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ブリアレオース誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、ポルピュリオンと組んで「ブリアレオース」を生んだ。ブリアレオースの名の由来はポルピュリオン、アグリオスの組み合わせである。ポルピュリオン+アグリオス=ピュリオリオス=ピュリオリオース=ブリアレオースとなる。その後、ブリアレオースはヘカトンケイルに参加した。

■ 30万年前 「サンガリオスの大移動時代」

■ 30万年前 「アクリャ誕生」「ワカ誕生」

サンガリオスの片割れとして「サンガリオスの大移動時代」を指揮したアグリオスは、ペルーに入植すると「アクリャ（巫女）」を生み、「ワカ」を祀った。アクリャ、ワカの名の由来はアグリオスである。

■BC 5千年 「アキレウス誕生」

ギリシア軍に請われてペルーからアイルランドに渡ったアグリオスは、ギリシア軍に「アキレウス」と呼ばれた。アキレウスの名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アクリオス＝アキレウスとなる。アキレウスは、「トロイア戦争」の英雄として知られている。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「羅浮山誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアキレウスは、カリブ海に移住し「羅浮山（ルオフ）」を築いた。ルオフの名の由来はアグリオストアプスの組み合わせである。アグリオス＋アプス＝ルオプ＝ルオフとなる。羅浮山は中国にあるとされているが、実際にはカリブ海に程近いシトラルテペトル山のことである。

■BC 40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC 40世紀 アクンタ、初代王に即位 「チムー王国誕生」

どの神話に於いても、個人と思われている神や英雄は、実際には「ひとつの部族」である。つまり、アキレウスの死は、部族としての敗北である。その後、アキレウスは「アイルランドの神々の大航海時代」に参加してメソポタミアに移住し、その後「シュメール人の大航海時代」に参加してペルーへ帰還した。アキレウスは、ダニ族と組んで「アクンタ」を生んだ。アクンタの名の由来はアグリオスとタナトスの組み合わせである。アグリオス＋タナトス＝アグナト＝アクンタとなる。

■BC 35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC35世紀 「老子誕生」「道教誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したアグリオスは、日本に到着すると、伊勢国で「神道」を築いたイデュイアと連合し、夏時代の中国に移住した。イデュイアの神道は中国で「道教」と呼ばれ、アグリオスは「老子」と呼ばれた。老子（ラオツィ）の名の由来はアグリオスである。アグリオス＝リオス＝ラオツィ（老子）となる。

■BC7世紀 「遼東半島誕生」

「春秋戦国時代」が始まると、老子の子孫は、現遼東半島を訪れ、当地を初めて「遼東半島」と命名した。遼東（リャオドン）の名の由来はアグリオスとディオナーの組み合わせである。アグリオス＋ディオナー＝リオディオネ＝リャオドン（遼東）となる。

■BC226年 「ユーロー（前身）誕生」

BC226年、遼東半島を治めていた燕が滅亡すると、道教の種族、ペー族は満州に移った。アグリオスは、イデュイアと組んで「ユーロー」を生んだ。ユーローの名の由来はイデュイアとアグリオスの組み合わせである。イデュイア＋アグリオス＝ユイアリオ＝ユーローとなる。

■BC1??年 「ラーオ族誕生」

匈奴に参加しなかったユーローは、インドシナ半島に移住して「タイ族」となり、老子（アグリオス）は「ラーオ族」となった。両者は、「ムアン・ギャオ」に移住した。タイの名の由来はタオ（道）である。タオ＝タウ＝タイとなる。彼らは、「タイ・ルー族」などと呼ばれた。ギャオの名の由来はチュクウである。

■BC215年 「ムアン・ペーガイ誕生」

秦の侵攻により、ムアン・ギャオを離れたタイ族は、雲南に移住して「ムアン・ペーガイ」を築いた。ペーガイの名の由来はヴィディエとチュクウの組み合わせである。ヴィディエ＋チュクウ＝ヴィクウ＝ブイークウ＝ペーガイとなる。

■BC87年 タイ族、モンゴルに帰還

BC87年、ムアン・ペーガイ国王クンメンが、漢の通行を許可しなかったため、武帝の攻撃により、ムアン・ペーガイは滅んだ。その後、タイ族はモンゴルに帰還した。

■AD45年 「南匈奴誕生」

タイ族（道教）、扶余は、匈奴に参加した。この時に、匈奴は「北匈奴」と「南匈奴」に分裂した。ペー族の連合体は「南匈奴」に身を寄せていた。

■AD166年 「太平道誕生」

「党錮の禁」が起きると、タナトスの宦官が後漢を私物化したため、社会は腐敗し、何事も賄賂で決められる事態になった。南匈奴に属していた扶余、道教、張角は、タナトスを皆殺しにするために「太平道（タイピントオ）」「五斗米道（ウトミタオ）」を設立した。太平道の名の由来はヴィディエ（張氏）、ペー、道教（ヴィディエ）の組み合わせであり、五斗米道の名の由来はヴィディエとミン（閔）、ヴィディエの組み合わせである。

■AD450年 「ラヴォ王国誕生」

太平道が天師道に吸収されると、太平道（アグリオス、ヴィディエ）はインドシナ半島に移住し、「ラヴォ王国」を建設した。ラヴォの名の由来はアグリオスとヴィディエの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ=リオヴィ=ロヴィ=ラヴァとなる。ラヴァ王国はAD1388年まで続いている。

■AD6世紀 「大賀氏誕生」

AD5世紀頃、中国仏教が篡奪した新天師道が誕生すると、道教、張氏はこれを嫌ってモンゴルに移住した。この時に「大賀（ダヘ）氏」が生まれた。ダヘの名の由来はヴィディエ（張氏）とヴィディエ（道教）の組み合わせである。ヴィディエ+ヴィディエ=ディエヴィ=デビ=ダヘとなる。大賀氏は、AD8世紀まで、王として契丹を統率した。

■AD753年 「ラーシュトラクータ朝誕生」

アグリオスは、リオスの部分をラーシュトラ（ツァラストラ）に重ね合わせ、名前を継承しつつ、百済の残党と共に「ラーシュトラクータ朝」を開いた。ラーシュトラクータの名の由来はラーシュトラと百済の組み合わせである。ラーシュトラ+クダラ=ラーシュトラクダ=ラーシュトラクータとなる。

■AD973年 「龍造寺氏誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、アグリオスは日本に向かい、九州に上陸した。アグリオスは「龍造寺氏」を称した。龍造寺氏の名の由来はラーシュトラクータである。ラーシュトラクータ=ラーシュトラ=リュウゾーテラ=龍造寺（りゅうぞうじ）となる。

■AD973年 「五十嵐氏誕生」「小栗氏誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、アグリオスはインドから日本に移住し、「五十嵐氏」「小栗氏」を生んだ。五十嵐、小栗の名の由来はアグリオスである。アグリオス=アグリオス=五十嵐（いがらし）となり、アグリオス=オグリオス=小栗となる。

■AD1168年 結城朝光生誕 「結城氏誕生」

結城の名の由来はチュクウである。チュクウ=ユクウ=結城となる。結城朝光は親鸞に心酔し、念仏に傾倒したと伝えられる。匈奴時代にタナトスの血が流れ込んだのだろう。

■AD1338年 「ルオ族誕生」

パヤオ王国が滅ぶと、王国の中核を成していたピュー族はパヤオ王国（符氏）と連合して西方に向かう計画を立てた。AD1253年に滅んだ大理国の段部、ラーオ族もこの旅に参加した。ラーオ族は紅海で一行から分離し、東アフリカに至って現ケニアに移住し、「ルオ族」を残した。ルオの名の由来はラーオである。

■AD1363年 「ランサーン王国誕生」

AD1124年、西遼（カラキタイ）が建つと、モンゴルを離れたタイ・ルー族は現ラオスに帰還し、ランサーン王国などのラオス王国の建設に参加した。

■AD1584年 「ルソー誕生」「レスター誕生」「リスト誕生」

九州を離れた龍造寺氏は、パンジャブで豊臣秀頼の一行を迎え、カスピ海に至る。その後、龍造寺隆信の一行は、カスピ海からスイスに移った。彼らは現地人と交わり、「ルソー」「レスター」「リスト」の名を形成した。ルソーの名の由来は龍造寺であり、リスト、レスターの名の由来はラーシュトラクータである。龍造寺（りゅうぞうじ）＝りゅうぞう＝ルソーとなり、ラーシュトラクータ＝ラーシュトラ＝レスター＝リストとなる。

■AD1669年 紀伊国屋文左衛門生誕

紀伊国屋文左衛門の元姓は、五十嵐氏である。つまり、紀伊国屋文左衛門はアグリオスの子孫である。彼は、材木商として成り上がったが、タナトスの血を引く三井家、住友家に目をつけられたためか、一代で消滅してしまった。その後、紀伊国屋文左衛門の残党は、祖を同じくする日本人が移住したラオスに入植した。

■AD18世紀 「ルアンパバーン王国誕生」

倭寇に参加し、後に華僑に参加してスペイン人などと戦っていた宇久氏は、フィリピン遠征時にインドシナ半島に移住した。彼らは、祖を同じくするランサーン王国の結城氏と連合して「ルアンパバーン王国」を築いた。ルアンパバーンの名の由来は蓮（リャン）と八幡（バハン）の組み合わせである。リャン＋バハン＝リャンバハーン＝ルアンパバーンとなる。倭寇は、常に「八幡神」ののぼりを掲げていたため、中国人に中国語読みで「八幡（バハン）」と呼ばれた。

■AD1945年 「ラオス王国誕生」

結城氏（鎌倉幕府）、宇久氏（倭寇）、五十嵐氏（紀伊国屋文左衛門）など、アグリオスの血を引く日本人の子孫が「ラオス王国」を建設した。ラオスの名の由来はアグリオスである。アグリ

オス＝アグラオス＝ラオスとなる。

◆ソクラテス（クリュテイオス）の歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス」を生んでいる。クリュテイオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス＋ヴィディエ＋クウォス＝グリオディエオス＝クリュテイオスとなる。

■45万年前 「グラティオーン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオーン」を生んでいる。グラティオーンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス＋ヴィディエ＋ウェネ＝グリオディエウェネ＝グラティオーンとなる。

■45万年前 「エウリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス」を生んだ。その後、クリュテイオスはウェネと組んで「エウリュトス」を生んでいる。エウリュトスの名の由来はウェネとクリュテイオスの組み合わせである。ウェネ＋クリュテイオス＝ウエリュテイオス＝エウリュトスとなる。

■45万年前 「ヒッポリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したアグリオスは、ヴィディエ、クウォスと共に「クリュテイオス

」を生んだ。その後、クリュテイオスはヴィディエ、パッラースと組んで「ヒッポリュトス」を生んでいる。ヒッポリュトスの名の由来はヴィディエ、パッラース、クリュテイオスの組み合わせである。ヴィディエ+パッラース+クリュテイオス=ヴィパッラーテイオス=ヒッポリュトスとなる。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「キルーテ族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北西部沿岸（現バンクーバー周辺）に居を構えたクリュテイオスは「キルーテ族」を称した。キルーテの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス=キルーテイオス=キルーテとなる。獣人は、アボリジニの顔をしていたクウォスと混合することで、マヤ人の顔を得たと考えられる。

■ 40万年前 「クリー族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）に居を構えたグラティオンは「クリー族」を称した。クリーの名の由来はグラティオンである。グラティオン=クリティオン=クリーとなる。

■ 40万年前 「シャイアン族誕生」

亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）から大平原（ユタ周辺）に居を構えたグラティオーンは「シャイアン族」を称した。シャイアンの名の由来はグラティオーンである。グラティオーン＝グラチェイオーン＝チャイアン＝シャイアンとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「クリュティアー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュティオスは、オーストラリアで「クリュティアー」を生んだ。クリュティアーの名の由来はクリュティオスである。クリュティオス＝クリュティオ＝クリュティアーとなる。その後、クリュティアーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カリロエー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュティオスは、オーストラリアではルワと連合し、「カリロエー」を生んだ。カリロエーの名の由来はクリュティオスとルワの組み合わせである。クリュティオス＋ルワ＝クリュルワ＝カリロエーとなる。その後、カリロエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カリュプソー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュティアーは、オーストラリアでアプスーと連合し、「カリュプソー」を生んだ。カリュプソーの名の由来はクリュティアーとアプスーの組み合わせである。クリュティアー＋アプスー＝クリュプスー＝カリュプソーとなる。

■ 30万年前 「ロディオス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、オーストラリアで「ロディオス」を生んだ。ロディオスの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス＝クリュデイオス＝ロディオスとなる。その後、ロディオスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ブロンテース誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、オーストラリアではウラニアーと連合し、「ブロンテース」を生んだ。ブロンテースの名の由来はウラニアーとクリュテイオスの組み合わせである。ウラニアー＋クリュテイオス＝ウランテイオス＝ブロンテースとなる。その後、ブロンテースはキュクロプスに参加した。

■ 30万年前 「タナトス誕生」

クリュテイオスの下層集団には知能が高い個体があり、「できそこないの方が多いんだから、全員で組めばクリュテイオスの王族を退けることができる」ということに気づいた。ディオナーでも同じことが起きていたが、クリュテイオスの下層集団はディオナーの下層集団と連合し、合体部族「タナトス」を生んだ。タナトスの名の由来はディオナーとクリュテイオスの組み合わせである。ディオナー＋クリュテイオス＝ディオネテイオス＝タナトスとなる。このタナトスは知能によって淘汰を免れることを覚えたできそこないの集団であり、クリュテイオスの王統とは無関係である。※詳細はタナトスの本で

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「カール族誕生」「カロ族誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したカリュプソーは、マレー半島に「カール族」「カロ族」を生んだ。カール、カロの名の由来はカリュプソーである。

■ 30万年前 「クレタ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加して地中海に入植したクリュティアーは、その後、クレタ

島に上陸した。この時に初めてこの島は「クレタ島」と呼ばれた。クレタの名の由来はクリュティアである。クリュティア＝クリュタ＝クレタとなる。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ティア誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したグラティオンは「ティア」を祀り、ティタン神族に参加した。ティアの名の由来はグラティオンである。グラティオン＝グラティアン＝ティアとなる。

■ 7万年前 「テテュス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、トエーと組んで古代ギリシアに「テテュス」を生んだ。テテュスの名の由来はトエーとクリュテイオスの組み合わせである。トエー＋クリュテイオス＝トエテイオス＝テテュスとなる。

■ 7万年前 「ティタン神族誕生」

古代ギリシアに生まれたテテュスは、ウラヌスと組んで「ティタン神族」を結成した。ティタンの名の由来はテテュスとウラヌスの組み合わせである。テテュス＋ウラヌス＝テテュヌス＝ティタヌス＝ティタンとなる。

■ 7万年前 「レティ族誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したクリュテイオスは、マレー半島に「レティ族」を生んだ。レティの名の由来はクリュテイオスである。クリュテイオス＝リュテイ＝レティとなる。

■ 7万年前 「アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「クリュシッポス誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したクリュティアーはオーストラリアに入植し、ヒッポーと組んでピサ王国の王族「クリュシッポス」を生んだ。クリュシッポスの名の由来はクリュティアーとヒッポーの組み合わせである。クリュティアー+ヒッポー=クリュティッポー=クリュシッポスとなる。彼らは、タナトスに属するティエステスと対立していた。

■ 7万年前 「ミドガルド誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したクリュティオスは、巨木セコイア（ユグドラシルと呼ばれた）の森林に魅せられ、現カリフォルニアに降り立った。彼らは、アドメテーと共に「ミドガルド王国」をカリフォルニア～ネバダにかけて建設した。ミドガルドの名の由来はアドメテーとクリュティオスの組み合わせである。アドメテー+クリュティオス=メテクリュテ=メデグリユデ=ミドガルドとなる。

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「天手力男命誕生」

「ギガントマキア」に参加し、ゼウスに敗北したクリュティオスはオーストラリアに帰還した。更に、「命令を聞け」と迫るタナトスを殴り殺し、台湾に移住し、イマナと連合し「天手力男命」を生んだ。天手力男の名の由来はイマナとティオスクリュ（クリュティオスの反対）の組み合わせである。イマナ+ティオスクリュ=イマナテスカリオ=アメノタジカラオとなる。

■ 2万年前 「ユグドラシルの大航海時代」

■ BC 32世紀 「ゴリアテ誕生」

「ユグドラシルの大航海時代」に参加して出羽国に入植し、「モーゼスの大移動時代」に参加して中国に入植したクリュティオスは、カナン（夏時代の中国）に「ゴリアテ」を生んだ。ゴリアテの名の由来はクリュティオスである。クリュティオス=グリユティオス=ゴリアテとなる。ゴリアテはペリシテの巨人として知られているが、知力にも長けていた。タナトスの理不尽な命令

に嫌気がさしていた彼は、わざと少年ダヴィデに敗北することでタナトスを討つことを考えた。

■BC30世紀 「ダエーワ神群の大移動時代」

■BC469年 ソクラテス生誕

「ダエーワ神群の大移動時代」に参加してイランに入植したクリュテイオスは、その後に古代ギリシアに移り「ソクラテス」を生んだ。ソクラテスの名の由来はジョクとクリュテイオスの組み合わせである。ジョク+クリュテイオス=ジョクリュテイオス=ソクラテスとなる。善良なソクラテスは、タナトスから生まれた如何わしいソフィストのやり方に疑念を持ち、できそこないの集団に身一つで挑戦した。彼は「こんなウソつきのできそこないに負けるはずがない」と考えていたのだ。

その通り、質vs質では間違いなくソクラテスが勝っていた。だが、タナトスはできそこないしか勝てない土俵でしか戦わない。ソクラテスはその土俵に上がると、大量のできそこないに圧倒され、哀れにも敗北を喫した。死刑を宣告するために開かれた裁判では、さしもの、ソクラテスも力及ばずであった。もともと、キュベレー密儀、ディオニュソス密儀の息がかかった女を娶った時点で、ソクラテスは勝機を失っていた。

■BC1世紀 「スパルタカス誕生」

奴隷を解放することは良いことだと考えていたブロンテースは、キュクロプス時代の同僚ステロペース、アルゲースと共に「スパルタカス」を生んだ。スパルタカスの名の由来はステロペース、ブロンテース、アルゲースの組み合わせである。ステロペース+ブロンテース+アルゲース=スブロンテゲース=スパルタカスとなる。第三次奴隷戦争の指揮者となったが、彼らは残念ながら、奴隷戦争の背後にいたアタルガティス教の人々の悪意に気づいていなかった。

■AD768年 シャルルマーニュ大帝、フランク王に即位 「カロリング朝誕生」

時を経て、ソクラテスの子孫はギリシアからガリアに移っていた。彼らの系統からはシャルルマーニュが生まれた。シャルルマーニュの名の由来は獣人クリュテイオスとルーマニアの組み合わせである。クリュテイオス+ルーマニア=クリュルーマニア=シャルルマーニュとなる。このように不世出の偉大な英雄は常に獣人の血統から輩出されている。

■AD771年 シャルルマーニュ大帝、ランゴバルト王国を滅ぼし、イタリア王を兼ねる

■AD772年 シャルルマーニュ大帝、サクソン人と交戦 「サクソニア戦争」

■AD794年 シャルルマーニュ大帝、イスパニア出征

■AD795年 シャルルマーニュ大帝、アヴァール人の本拠地を急襲

■AD803年 シャルルマーニュ大帝、ローマで戴冠

■AD814年 シャルルマーニュ大帝、死去

シャルルマーニュ大帝統治時代の後期にノルマン人が出現したが、シャルルマーニュ大帝の生前には目立つ攻撃はなかった。しかし、シャルルマーニュ大帝が死去した途端にノルマン人、デーン人の連合はシャルルマーニュ大帝の子息3兄弟の王位継承権争いに介入し、ロタール1世を傀儡に仕立ててフランク王国の篡奪を謀った。これにより、フランク王国はフランス、ドイツ、イタリアに分離した。

◆クリュセーイスの歴史

■30万年前 「クリュセーイス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、ムシシと組んで「クリュセーイス」を生んだ。クリュセーイスの名の由来はアグリオス、ムシシの組み合わせである。アグリオス+ムシシ=グリオシシ=クリオシーシ=クリュセーイスとなる。その後、クリュセーイスは大洋の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「サイシャット族（ヘラクレス）誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセウスは、台湾に上陸してクリュセーイスと共に合体部族を生んだ。この合体部族の誕生に参加したのはペルセーイス側からはパッラー（ヴィディエ+レザ）、ムシシが、クリュセーイス側からはグラティオンとムシシである。しかし、グラティオン自体がアグリオス（チュクウ+ルワ）とディオナー（ヴィディエ+ウラニア）の合体部族である。つまり、ペルセーイスからは3部族、クリュセーイスからは5部族が参加している。

この時に生まれたのは、台湾少数民族として知られる「サイシャット族」である。サイシャットの名の由来はチュクウ、ムシシ、ヴィディエの組み合わせである。チュシシディ=ツォウセイイシディ=サイシャットとなる。サイシャット族は後に「ヘラクレス」と呼ばれることになる。ヘラクレスの名の由来はペルセーイスとクリュセーイスの組み合わせである。ペルセーイス+クリュセーイス=ペルクリュセ=ヘラクレスとなる。

■ 7万年前 「ヘラクレス誕生」

ヘラクレスとは、台湾のサイシャット族のことであるが、ヘラクレスの物語は全て、オーストラリア、メラネシア、南シナ海で起きたことである。ヘラクレスの目的は、主に、反自然の種族の成敗であった。ネメアのライオン、レルネのヒュドラ、ケリュネイアの鹿、エリュマントスの猪、アウゲイアスの家畜小屋掃除、ステュムパリデスの鳥退治、クレタの暴れ牛、ディオメデスの人喰い馬、アマゾネスとの戦闘、ゲリュオンの赤い牛、ヘスペリデスの黄金の林檎、ケルベロスの生け捕りの中でも、特にエリュマントスの猪とディオメデスの人喰い馬はタナトスの一族である。

■ 7万年前 「ヴァルハラ誕生」「戦士の守護神ワルキューレ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、神話通り、葦原中津国に向かった。葦原中津国は2種類あるが、ひとつめは八代湾～天草諸島に跨る地域であり、2つめはアナトリア半島～ナクソス島に跨る地域である。彼らが目指したのは2つめの葦原中津国である。

アルゴス号は、途上の北アメリカで常世国、ミドガルド王国などを残しつつ、メキシコに到達した。大西洋側に出た彼らは、上陸ポイントを「ベラクルス」と命名した。更に、北メキシコに入植した塩椎神の勢力は「ヴァルハラ王国」を築いた。ヴァルハラの名の由来はペルセウスとヘラクレスの組み合わせである。ペルセウス+ヘラクレス=ペルヘラ=ヴァルハラとなる。

ベラクルスには、「ワルキューレ」が生まれた。ベラクルス、ワルキューレの名の由来は共にヘ

ラクレスである。ヘラクレス＝エラクーレス＝ワルキューレとなる。北アメリカにあったミドガルド王国、北メキシコにあったヴァルハラ王国名は北欧神話に出てくるため、ミドガルド、ヴァルハラは北欧に存在したと考える人も多いだろう。しかし、大概の場合、神話の舞台は神話が編まれた土地で起きた事柄ではない。タナトスを皆殺しにするため、科学の種族は核兵器によってミドガルド、ヴァルハラを消滅させたが、北欧神話は、その時の生存者が何万年もさすらったあぐく、北欧に辿り着き、現地人に伝えたものである。

■ 4 万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4 万年前 「カリス誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したクリュセーイスは、「カリス」を生んだ。カリスの名の由来はクリュセーイスである。クリュセーイス＝クリュセ＝カリスとなる。

■ B C 1 5 3 0 年 「クルズ人誕生」「カッシート朝成立」

シェクレシュ人は、B C 1 5 3 0 年に「カッシート朝」を築いた。カッシート朝を開いた謎の「クルズ人」の正体はシェクレシュ人である。また、B C 1 1 5 0 年にカッシート朝が滅ぶと、シェクレシュ人（クルズ人）はクレタ島に帰還し、神官「クーレース」となる。また、クーレースは「ギリシア（ 그리스 ）」の語源でもある。

■ B C 6 世紀 「フィン人の大航海時代」

■ B C 6 世紀 「コラズム誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加したカレリア族とスオミ族は、現地を初めて「コラズム」と呼んだ。コラズムの名の由来はカレリアとスオミの組み合わせである。カレリア＋スオミ＝カレスオミ＝コラズムとなる。コラズムは、ハ行がカ行を兼ねる法則により、ホラズム、ホラサンとも呼ばれている。

■ B C 3 2 7 年 「コラズム族の大移動時代」

■BC327年 「クライシュ族誕生」

「コラズム族の大移動時代」に参加したコラズム人は、アラビア人と混合して「クライシュ家」を形成している。クライシュの名の由来はコラズムである。コラズム＝コライズム＝クライシュとなる。ヒムヤル人を除き、「コラズム族の大移動時代」に加わったほとんどの種族が、クライシュ族に参加している。残念ながら、その後に、人身御供の種族タナトスがアラビア半島を訪れると、クライシュ族以下、アラビア人は人喰い人種の支配下に置かれ、人身御供を強要された。

■AD634年 「ギルザイ族誕生」

イスラム軍がアラビア半島を統一すると、これを機に、クライシュ族はコラズムに帰還する。彼らは「ギルザイ」を称した。ギルザイの名の由来はクライシュである。クライシュ＝クラシャイ＝ギルザイとなる。

■AD1231年 「黒澤氏誕生」

AD1231年、コラズムがチンギスによって完全に破壊されると、一部ギルザイ族は日本に逃亡した。コラサン人の顔をした彼らは日本人と混合して「黒澤氏」を形成した。黒澤の名の由来はアグリオスとシヴァの組み合わせである。アグリオス＋シヴァ＝グリオシヴァ＝黒澤となる。

■AD1231年 「カルザイ誕生」

AD1231年、コラズムがチンギスによって完全に破壊されると、ギルザイ族は伊勢平氏の子孫パシュトゥーン人に「ギルザイ」の名を篡奪されたため、ヨーロッパに移住した「ドゥラニ」の名を拝借し、ドゥラニ族の中に「カルザイ」の名を成した。

■AD1907年 アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー生誕

クルーゾーの名の由来はクライシュである。クライシュ＝クレエシュー＝クルーゾーとなる。

■AD1910年 黒澤明生誕

■AD1939年 ジョン・クリーズ生誕 「モンティ・パイソン誕生」

クリーズの名の由来はクルーザーである。クルーザー＝クルーゾ＝クリーズとなる。

■AD1957年 ハーミド・カルザイ生誕

アフガニスタン・イスラム共和国初代大統領に就任している。

■AD1955年 黒沢清生誕

◆レメク（クリュメネー）の歴史

■30万年前 「クリュメネー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したアグリオスは、河川の娘たちを母体にイマナと組んで「クリュメネー」を生んだ。クリュメネーの名の由来はアグリオス、イマナの組み合わせである。アグリオス＋イマナ＝グリオマナー＝クリュメネーとなる。その後、クリュメネーは大洋の娘たちに参加した。

■7万年前 「ムナ族誕生」「リオ族誕生」「モニ族誕生」

オーストラリアから東南アジアに移住したクリュメネーは、マレー半島に「ムナ族」「リオ族」を、パプアに「モニ族」を生んだ。ムナ、モニ、リオの名の由来はクリュメネーである。クリュメネー＝クリオメネー＝リオとなり、クリュメネー＝クリュムナー＝ムナ、クリュメネー＝クリュモニー＝モニとなる。

■ 7万年前 「大山津見神誕生」

一部のオケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、大和地方に住んでいたティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「大綿津見神」「大山津見神」「宇迦之御魂神」「豊玉毘売命」「玉依毘売命」が誕生した。「大綿津見神（オオワタツミ）」の名の由来はアドメテーとティアマト、「大山津見神誕（オオヤマツミ）」の名の由来はクリュメネーとティアマトの組み合わせである。クリュメネー+ティアマト=ユメティアマ=ユメチャマ=ヤマツミとなる。

■ 7万年前 「久留米誕生」

大和国に「大山津見神」を生んだクリュメネーは、単身、九州に入植して拠点を「久留米」と命名した。久留米の名の由来はクリュメネーである。クリュメネー=クルメネー=久留米となる。

■ 7万年前 「天之御中主神誕生」

イマナは、台湾に来たオケアーニスと連合して「アメノミナカヌシ」を生んだ。アメノミナカヌシの名の由来はイマナ、クリュメネー、ペネイオスの組み合わせである。イマナ+クリュメネー+ペネイオス=イマナメネーケネイオス=アメノミナカヌシとなる。

■ 4万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「レメク誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したクリュメネーは、ペルーに移住してカイコスと連合した。この時に「レメク」が生まれた。レメクの名の由来はクリュメネーとカイコスの組み合わせである。クリュメネー+カイコス=リュメカー=レメクとなる。このコンビは、他にもマゴグ、マゴ、マゴス、マゴイを生んでいる。レメクは、ペルーの拠点に「リマック」と命名した。リマックとは、ペルーの首都リマの古名である。

■ 3万年前 「ムー帝国（ローマ帝国）誕生」

レメクは、アマゾン上流のモホス文明を継承し、科学・技術力を発展させた。ティル・ナ・ノーグ（ティアワナク）、モホス文明（アマゾン上流）、五岳神（南極大陸）で展開された文明の追及の記憶は、ムー帝国幻想に重ね合わせられている。ムー帝国を統治したユピテルなどの王族の名は、後世、イタリアに伝えられ、ローマの神々としてローマ帝国で祀られた。ローマ、ラ・ムーなどの名はレメクが由来である。

■ 3万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3万年前 「マカタオ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加した一部のレメクは、エノクたちと共に台湾に入植した。この時に「マカタオ族」が生まれた。マカタオの名の由来はレメクとヴィディエの組み合わせである。レメク+ヴィディエ=メクディエ=マカタオとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「エノクの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ケルマ王国誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したレメクは、ナイル上流域に進出してヌビアに至り、「ケルマ王国」を建てている。ケルマの名の由来はクリュメネーである。クリュメネー=クリュメ=ケルマとなる。

■ B C 4 0 世紀 「シュメール人の大航海時代」

■ B C 3 5 世紀 「サムエルの大航海時代」

■ B C 3 5 世紀 「ライマ誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したケルマ人はメソポタミアからペルーに移住し、その後「サムエルの大航海時代」に参加して出羽国に入植した。その時、ケルマ人はガラクサウラーと組んで出羽国の王族「ライマ」を生んだ。ライマの名の由来はガラクサウラーとクリュメネーの組み合わせである。ガラクサウラー＋クリュメネー＝サウラメネ＝ソロモン＝ソロイモン＝ライマとなる。ライマは、ラトビア神話に記された神の一人であるが、ラトビア神話には、出羽国を治めていた王族の名が神として記されている。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 「モンゴル誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したメネストーは、現モンゴルに移住し、ガラクサウラーと組んで「モンゴル」の名を生んだ。モンゴルの名の由来はメネストーとガラクサウラーの組み合わせである。メネストー＋ガラクサウラー＝メネガラ＝モンゴルとなる。

■ B C 3 2 世紀 ソロモン、第3代イスラエル王に即位 「ソロモン朝誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したメネストーは、ガラクサウラーと組んでモンゴルの名を生んだ。更に、両者は「ソロモン朝」を築いた。ソロモンの名の由来はガラクサウラーとメネストーの組み合わせである。ガラクサウラー＋メネストー＝サウラメネ＝ソロモンとなる。ソロモン王は、モンゴル高原を治めた。ソロモン朝の都は、タクラマカン砂漠、ゴビ砂漠辺りに存在したと考えられる。

■ B C 3 2 世紀 「エルサレム誕生」

この時に「エルサレム」の名も生まれた。エルサレムの名の由来はサウルとソロモンの組み合わせである。サウル＋ソロモン＝ウルソロモ＝エルサレムとなる。ただ、残念ながらサウル王やソロモン王は、タナトスの一族である預言者ナタンにいいように操られ、悪の為に働き、ダヴィデ王を敵視した。

■ B C 3 0 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「エルズルム誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したソロモンは、核攻撃で荒廃した故地を脱出して黒海南部のほとりに辿り着いた。ソロモンの残党はここに「エルズルム」を建設した。エルズルムの名の由来はエルサレムである。この地名は今でも現存している。その後、サウルの残党はヨーロッパに移住し、ソロモンの残党は現イスラエルに、ヨシュア（アシアー）は現エジプトに移住した。この時に、北ヨーロッパは「ゲルマニア」と呼ばれ、カナンに「イスラエル（葦原中津国と高天原による連邦国家）」「エルサレム」の名がもたらされ、「エジプト（葦原中津国と十和田による連邦国家）」は初めてエジプトと呼ばれた。

■BC27世紀 「マガダ王国誕生」

イスラエル王国（高天原と葦原中津国の連邦国家）が滅ぶと、マカタオ族は台湾を離れた。彼らは、ガンジス流域に根城を得て「マガダ王国」の下地を築いた。マガダの名の由来はマカタオである。マカタオ＝マガダオ＝マガダとなる。その後、BC18世紀頃、マガダ人から輩出されたピリハドラータが初代王に即位して「マガダ王国」を建てている。

■BC882年 「マケドニア人誕生」

第24代マガダ王リブンジャヴァの時代に正統なマガダ王国が滅亡すると、マガダ人はインドを後にしてギリシア方面に進出し、「マケドニア」に上陸した。マケドニアの名の由来はマガダである。マガダ＝マガダン＝マガダンニア＝マケドニアとなる。BC808年、カラノスが初代王に即位して「マケドニア王国」が建てられた。

■BC336年 「アレキサンダー帝国誕生」

BC336年にはアレキサンダー大王が第26代マケドニア王に即位している。アレキサンダー大王は、古代ギリシア、シリア、エジプト王国、ペルシア帝国を侵略して領土に組み込み、「アレキサンダー帝国」を儲けた。アレキサンダー大王の目的は、タナトスの系譜に属するインチキ宗教を壊滅させることであった。

■BC148年 「マギンダナオ族誕生」

「第4次マケドニア戦争」の敗北を機に、マケドニア人は故地を出て東方に赴いた。まず、フィリピンのミンダナオ島に上陸した一行は当地を「マギンダナオ」と命名した。マギンダナオの名の由来はマケドニアである。マケドニア＝マケドニア＝マギンダナオとなる。マギンダナオ族は、AD16世紀にマラウィを首都に据えて「マギンダナオ王国」を建てている。スペインの支配時、AD1619年に彼らは、ミンダナオに侵攻したスペイン軍を退けている。更に、AD1645年にはスペインとオランダに主権を認めさせ、講和条約を結んでいる。

■BC148年 「段部誕生」

「第4次マケドニア戦争」の敗北を機に、マケドニア人は故地を出て東方に赴いた。マケドニア人はフィリピンの次に黒龍江に入り、モンゴルに至った。マケドニア人は「段部（ドウアン）」を称した。ドウアンの名の由来はマケドニアである。マケドニア＝マケドゥアンニア＝ドウアンとなる。段部は、宇文部・拓跋部が指揮する「鮮卑」に参加した。その後、段部はAD471年の「鮮卑の大航海時代」を経て太平洋を横断し、ブリテン島にまで移住している。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「タナー誕生」「ドナー誕生」「ターナー誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加した段部は、イギリスに上陸し、現地人と混合して「タナー」「ドナー」の名を生んだ。これらの名の由来は段（ドウアン）である。ドウアン＝ドウアナ＝ドナー＝タナー＝ターナーとなる。

■AD628年 「ヨハネスの大航海時代」

■AD768年 「クルム朝（ブルガリア帝国）誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加していたイギリス人ドナーは、ブルガリア帝国に侵入し、「クルム王朝」を開いた。クルムの名の由来はクリュメネーである。クリュメネー＝クリュメ＝クルムとなる。マケドニア人の末裔である彼らは、プレシアン1世の時代にマケドニアを領有し、故

地の奪還を果たした。

■AD906年 段思平、初代王に即位 「大理国誕生」

AD852年、ドゥロ王朝が復活を遂げると、ブルガリア帝国を去ったクルム家は雲南に移住し、「段部」の名を復活させた。段思平は南詔国を倒し、タイ族、ユワン族、ラーオ族を支配下に置いた。その後、段部は、タイ族、ラーオ族と組んで「大理国（ダーリ）」を立てた。ダーリの名の由来はヴィディエとアグリオスの組み合わせである。ヴィディエ+アグリオス=ディエリオ=ダーリとなる。

■AD1096年 段正淳、初代後大理国王に即位 「後大理国誕生」

AD1253年、段興智の代に後大理国は滅んだ。その後、彼らは「ピュー族の大航海時代」に参加した。

■AD1338年 「ピュー族の大航海時代」

■AD1338年 「テュニカ族誕生」

「ピュー族の大航海時代」に参加した段部は、ピュー族と共に西方に向かい、地中海に入った。段部は故地であるマケドニアに居を定める方針だったが、当時はビザンツ帝国の治世下にあったため、ピュー族と共に更に西方に向かった。イングランドを通過した段部は、アイルランド、アイスランドの航路を経て大西洋を超え、北アメリカに至った。アメリカ南東部に居を構えた段部は、マケドニア人（マケドニキ）を由来に「テュニカ族」を形成した。マケドニキ=ドニキ=テュニカとなる。

■AD1338年 「田中氏誕生」

「ピュー族の大航海時代」に参加したテュニカ族は、アメリカ南東部を出て東アジアを目指し、太平洋を横断して室町時代の日本に進出した。インディアンの顔をしたテュニカ族は、大和国・近江国に上陸して現地人と混合した。テュニカ族は「田中」を称した。テュニカ=タナカ=田中となる。AD1585年には、田中忠政が誕生している。マケドニア由来の「田中」の他にも、

田中にはサタンの人（サタニカ）、大谷の人（オオタニカ）などを由来にしたものがある。

■AD16世紀 「マギンダナオ王国誕生」

マケドニア人の子孫であるマギンダナオ族は、AD16世紀にマラウィを首都に据えて「マギンダナオ王国」を建てている。

■AD1619年 マギンダナオ王国、スペイン軍を撃退

スペインの支配時、AD1619年に彼らは、ミンダナオに侵攻したスペイン軍を退けている。

■AD1645年 マギンダナオ王国、講和条約を締結

AD1645年にはスペインとオランダに主権を認めさせ、講和条約を結んでいる。

■AD1841年 田中正造生誕

■AD1929年 アラン・タネール生誕

■AD1930年 リチャード・ドナー生誕

チュクウの歴史（アグリオス）②

◆李氏（オーキュロエー）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「オーキュロエー誕生」

「獣人の大移動時代」に参加してモンゴルに移住し、その後に「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリアに移住したアグリオスは、ルワが抜けたことで「オーキュロエー」を生んだ。オーキュロエーの名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アグリオエース＝オーキュロエーとなる。

■30万年前 「コロワイ族誕生」

エチオピア王国の繁栄を聞いたオーキュロエーは、パプアに移住して「コロワイ族」を生んだ。コロワイの名の由来はオーキュロエーである。オーキュロエー＝オーキュロア＝キュロアイ＝コロワイとなる。

■4万年前 「大綿津見神誕生」

ギリシアから台湾に上陸したグューゲースは、新世代水生人イマナ、ニャメと混合して「アメノカグヤマ」を成した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとグューゲースとニャメの組み合わせである。イマナ＋グューゲース＋ニャメ＝イマナグューゲヤメ＝アメノカグヤマとなる。

■4万年前 「大山津見神誕生」

■7万年前 「天手力男神誕生」

高天原が繁栄すると、オーキュロエーは台湾に移住し、「天手力男神」を生んだ。天手力男神の名の由来は、イマナ、クリュテイオス、オーキュロエーの組み合わせである。イマナ＋クリュテ

イオス+オーキュロエー=アマナテイオスキュロエ=アメノタジカラオとなる。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「大日本根子彦（孝霊天皇、孝元天皇）誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したティアマトは、オーキュロエー、グレニコスと組んで「大日本根子彦」を生んだ。大日本根子彦の名の由来はオーキュロエー、ティアマト、グレニコスの組み合わせである。オーキュロエー+ティアマト+グレニコス=オーアマトニコ=大日本根子（おやまとねこ）となる。大日本根子彦は、「孝霊天皇」「孝元天皇」として天皇に即位している。

■ 1万3千年前 「稚日本根子彦（開化天皇）誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したティアマトは、オーキュロエー、グレニコスと組んで「稚日本根子」を生んだ。稚日本根子彦の名の由来はオーキュロエー、ティアマト、グレニコスの組み合わせである。オーキュロエー+ティアマト+グレニコス=オーキュアマトニコ=稚日本根子（わかやまとねこ）となる。稚日本根子彦は、「開化天皇」として天皇に即位している。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万3千年前 「ロウヒ誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加し、その後に「垂仁天皇の大移動時代」に参加したオーキュロエーは、メソポタミアに入植した。彼らは「ロウヒ」を生んだ。ロウヒの名の由来はオーキュロエーである。オーキュロエー=ロエヘ=ロウヒとなる。

■ BC 5千年 「レウ誕生」

その後、オーキュロエーは、メソポタミアに「レウ」を生んだ。レウの名の由来はオーキュロエーである。オーキュロエー=ロエー=レウとなる。

■BC32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC2???年 ジェドエフラー、ファラオに即位

「ソドムとゴモラ」を機に、エジプトに移住していたレウからジェドエフラーが生まれ、ファラオに即位した。

■BC2???年 カフラー、ファラオに即位

■BC2???年 メンカウラー、ファラオに即位

■BC2490年 「太陽神ラー誕生」

レウは、「太陽神ラー」を生んだ。ラーの名の由来はオーキュロエーである。ラーの名の由来はオーキュロエーである。オーキュロエー＝オーキュロアー＝ロアー＝ラーとなる。その後、ファラオは「ラーの息子」の称号を冠した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「黎族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したレウは、澳門から海南島に移って「黎族」となる。黎（レイ）の名の由来はレウである。レウ＝レイ＝黎となる。

■BC222年 「李氏誕生」

秦が中国を統一して南越を掌握すると、黎族は中国に移って「李氏」を称した。李（リー）の名の由来はレウである。レウ＝レウー＝リーとなる。

■ A D 4 世紀 「柔玄（ルークシャン）誕生」

柔玄（ルークシャン）の名の由来は李（リー）と亀慈（クチャ）の組み合わせである。柔玄（ルークシャン）に所属していた李淵が「唐」を開いている。

■ A D 4 5 7 年 レオ 1 世、ビザンツ皇帝に即位

A D 4 世紀頃、再度、ギリシアに覇を唱えることを考えたチワン族は、今回は黎族を率いてビザンツ帝国治世下のギリシアに向かった。彼らは、「東晋」の治世に海南島を発ち、地中海に進出している。中国人の顔をした黎族、チワン族はイサウリア家に自身の血統を打ち立てた。黎族は、先祖であるレウに因んで「レオ」と命名し、チワン族は神農（シェンノン）に肖って「ゼノン」と命名した。シェンノン＝シェノン＝ゼノンとなる。レオは「レオ 1 世」を称して A D 4 5 7 年にビザンツ皇帝に即位し、「ゼノン」は A D 4 7 4 年、レオ 1 世に続いてビザンツ皇帝に即位した。

■ A D 5 5 4 年 「李朝誕生」

その後、レオ、ゼノンの一族が 4 5 7 年頃にビザンツ帝国の王位を喪失すると、彼らは、ビザンツ帝国を後に東アジアに帰還した。レオの一族はベトナムに上陸して「李氏」を称した。李氏は、A D 5 5 4 年に「前李朝」を開いた。彼らは、ベトナムの李氏や朝鮮半島の李氏（イー）の祖となった。

■ A D 6 1 8 年 李淵、初代皇帝に即位 「唐誕生」

柔玄を生んだ李氏は、アテネ人の後裔である唐氏と連合し、「唐」を建設した。

■ A D 9 8 0 年 「黎朝誕生」

唐が滅ぶと、李氏はベトナムに帰還して黎族を復活させた。黎族はデー人（チワン）の「丁朝」を滅ぼした。この時、彼らは「黎朝」をベトナムに開いた。その後、A D 1 0 0 9 年に王朝が滅ぶと、ベトナムを離れた李氏は中国に戻っている。

■AD1006年 「李朝誕生」

ビザンツ帝国から戻ったレオの一族（ベトナムの李氏）は、黎朝（中国の李氏）を退けて、ベトナムに「李朝」を開いた。この時に、黎族（中国の李氏）は中国に帰還した。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1038年 李継遷、初代王に即位 「西夏誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」に参加した李継遷は、遼朝によって西夏王に封ぜられた。AD1227年、チンギスの侵攻によって西夏が滅びると、李氏はチンギスの征西に同行してヨーロッパに至る。

■AD12世紀 パレモナス、リトアニア大公に即位 「パレモナス朝誕生」

パレモナスは、唐の王族である李氏の子孫である。パレモナスの名の由来はハオと李モナスの組み合わせである。ハオ（好）＋リモナス＝ハオリモナス＝パレモナスとなる。

■AD1225年 「李馬鴻誕生」

AD1225年に李朝が滅ぶと、李氏はベトナムを離れて「倭寇」誕生前夜の北九州に移住した。倭寇の李氏からは「李馬鴻」が輩出されている。李馬鴻は、シオコと連合艦隊を組み、フィリピンに進出してスペイン駐屯軍を襲撃した。

■AD1358年 「ジャックリーの反乱」

西夏の残党は、モンゴル軍の征西に同行してフランスにまで到達した。ジャックリーは、彼らの子孫である。彼は、農民を搾取する邪教カトリック教会（クリュニー会、シトー会、ドミニコ会）を打倒するべく、農民を指揮して蜂起したが鎮圧されてしまう。骨の髄までカトリックに支配されていたフランス農民は、英雄ジャックリーの忠実な手足とはならなかったようだ。

■AD1358年 「五十嵐氏誕生」

ジャックリーの乱が失敗すると、残党はイギリスに逃れたが、一部が日本に移住した。この時に「五十嵐氏」を形成した。五十嵐の名の由来はアグリオスである。アグリオス＝アグリオス＝五十嵐となる。

■AD1392年 「李氏朝鮮誕生」

AD1279年に南宋の趙氏がリトアニアに到達すると、パレモナスの王統を継ぐ李氏は中央アジアに拠点移した。中央アジア人の顔を得た李氏からは、李成桂が誕生した。中央アジアを出て東アジアへの帰還を実施した李成桂はAD1364年とAD1383年に女真族を討伐した。その後、朝鮮半島に侵入した一行は、AD1392年に「李氏朝鮮」を開いた。漢字を廃してハングル文字を朝鮮半島に導入した李成桂は、ヨーロッパに先駆けて活字印刷も発明した。朝鮮半島の李氏（イー）の名の由来はオーキュロエーである。オーキュロエー＝ロエー＝エー＝イーとなる。

■AD1866年 「丙寅洋擾」

クリュニー会に率いられたフランス軍が李氏朝鮮に侵攻した。クリュニー会は、フランス人神父殺害を口実に軍艦7隻、兵員1300名を動員して江華島を占領した。しかし、漢城に向かうフランス軍進軍の途上、李氏朝鮮は2度の襲撃を行い、フランス軍を撤退させた。

■AD1871年 「辛未洋擾」

通商を求めてきたジェネラルチャーマン号を李氏朝鮮が沈没させると、バプティスト率いるアメリカ軍は、これを口実に軍艦5隻を率いて損害賠償を求めてきた。これに奇襲攻撃を加えた李氏朝鮮だが、アメリカ軍はこれを口実に江華島を占領した。しかし、大院君の強硬な開国拒否により、アメリカ軍は撤退した。この、2度の侵略者との戦闘により、首都付近が荒廃すると、その際の写真を持ち出して「朝鮮人は遅れている」と笑う日本人がいるが、恥ずかしいことだ。

■AD1875年 「江華島事件」

タナトスの一族である朝鮮儒教老論派は、少論派によって李氏朝鮮を追放された。その際、老論派は長州藩に移住し、伊藤博文、山縣有朋を輩出している。この2人が建国した大日本帝国軍が江華島に侵入し、開国を迫った。李氏朝鮮を追放された恨みを忘れない、執念深い老論派による復讐の始まりである。

■AD1913年 ヴィヴィアン・リー生誕

フランスからイギリスに移住したジャックリーの子孫と考えられる。女優ヴィヴィアン・リーは「風と共に去りぬ」「欲望という名の電車」で知られている。

■AD1921年 サタジット・レイ生誕

■AD1923年 リー・クアンユー生誕 「シンガポール誕生」

■AD1927年 ジャネット・リー生誕

フランスからイギリスに移住したジャックリーの子孫と考えられる。女優ジャネット・リーは「サイコ」で知られている。

■AD1940年 ブルース・リー（李小龍）生誕

真の英雄は、みな獣人の子孫だが、映画で英雄を演じたブルース・リーも、実際にカンフーの達人だったので、間違いなく獣人の子孫だった。

■AD1954年 フレッド・オーレン・レイ生誕

■AD1955年 李克強生誕

AD2013年、第7代国務院総理に就任している。

■AD1957年 ジェイク・E・リー生誕

■AD1963年 ジェット・リー生誕

◆マウンド派（デウカリオン）の歴史

■4万年前 「デウカリオン誕生」

テュポンは、アグリオスと連合し、「デウカリオン」を生んだ。デウカリオンの名の由来はテュポンとアグリオスの組み合わせである。テュポン+アグリオス=テュグリオ=テウグリオ=デウカリオンとなる。その後、大地殻変動時代を経てメソポタミアに入植すると、デウカリオンは巨石の種族ティカル人となる。この時、チュクウはピラミッド派になり、アグリオスはマウンド派となる。

■1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■1万3千年前 「ティカル人誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したデウカリオンは、オーストラリアからスーサに身を寄せた。その後、デウカリオンは「巨石の種族ティカル人」となる。ティカルの名の由来はデウカリオンである。デウカリオン=テイカリオン=ティカルとなる。

■1万5千5百年前 「ギョベクリ・テペ」

「垂仁天皇の大移動時代」で、モンゴルから来た獣人グューエースは、デウカリオン族と連合すると、偉大な先祖カオスを祀るため、古代アナトリアに「ギョベクリ・テペ」の神殿を築いた。ストーンサークル、ドルメン、前方後円墳、ピラミッドなど、すべての「巨石文化の種族」の始まりである。獣人グューエースは、後にタナトスの要請でメンヒルを、単独でドルメンなどをヨ

ーロッパに築くことになる。

■BC 7千2百年 「神々の集団アヌナキ」

大地殻変動を機に、世界各地から神々の血統がメソポタミアに集った。ブリテン島から来たテミス、モンゴルから来た三皇、垂仁天皇、獣人たち、オケアーニスたち、エビス（アプスー）、ヤマト（ティアマト）、エジプトから来たアトゥム、カイン、マハラレル、カインアン、南極から来たエノク、レメク、ヤペテの4者が連合して「神々の集団アヌナキ」を築いた。また、彼らはヤペテの子として知られる一族を共同で生んだ。

■BC 7千5百年 「ギョベクリ・テペ」

コイオスは、デウカリオン族と連合すると、偉大な先祖カオスを祀るため、古代アナトリアに「ギョベクリ・テペ」の神殿を築いた。ストーンサークル、ドルメン、前方後円墳、ピラミッドなど、すべての「巨石文化の種族」の始まりである。獣人ギュエースは、後にタナトスの要請でメンヒルを、単独でドルメンなどをヨーロッパに築くことになる。

■BC 7千2百年 「チャタル・ヒュユク」

チャタル・ヒュユクは、過去にスフィンクスを建造した巨石の種族の萌芽である。ここには、8000人もの人々が住んでいたといわれている。デウカリオンの街として発展したのだろう。この頃、ウソつきの人喰い人種ダーナ神族がヨーロッパからオリエント地域を訪れ、見事な巨石建造物を見て、巨石建造物を建造するためにデウカリオン族をヨーロッパに招待した。だが、ダーナ神族が人喰い人種だと知ると嫌悪を示したデウカリオンは、ダーナ神族を皆殺しにしている。しかし、この時にコイオスが、ダーナ神族と共にオリエントに来ていたシェルデン人の要請を受けた。

■BC 3200年 「ニューグレンジ製作」

ティカル人は2派に分離・独立し、ピラミッド派とマウンド派に分かれた。マウンド派は、シェルデン人、ダーナ神族らタナトスの一族に誘われてヨーロッパに向かった獣人ギュエースと共に、ヨーロッパに移住した。この時、人喰い人種を嫌った彼らは、アイルランドに移って「ニューグレンジ」を製作した。建造目的は、「原初の神カオス」を祀る「聖なる洞窟」の建

造である。獣人ギューエースのように、巨石を組み合わせるだけの武骨な印象を与える建造物ではなく、ティカル人は一歩踏み込んだ、デザイン的にも洗練された「聖なる洞窟」の建造を試みた。ここにマウンド派の礎が築かれた。

■BC32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「ティカル建設」

ティカル人はマヤに「ティカル」を建設した。「第2次北極海ルート」に参加したティカル人は、ピラミッド派となり、「ドルイド教の大航海時代」に参加したティカル人は、マウンド派として活躍することになる。マウンド派は、古代マヤに都市（ティカル）を建設するが、後にピラミッド派に篡奪されている。

■BC26世紀 「ワカ・プリエタ製作」

マウンド派は、ティカルからペルーに移住すると、チカマ川に「ワカ・プリエタ」と呼ばれるマウンドを製作した。その後も、チャンカイ川に「リオセコ」と呼ばれるマウンドを建造した。

■BC2500年 「シルベリー・ヒル製作」

ペルーを発ったティカル人は、マヤには戻らず、ブリテン島に至り、巨大なマウンド「シルベリーヒル」を建造している。

■BC221年 「始皇帝陵製作」

宗教都市エル・ミラドル建設など、マウンド派はピラミッド派の精力的な活動に不満を示し、故地を離れて東アジアに向かうことを決意し、太平洋を横断した。東アジアに到達したマウンド派は、需要と新天地を求めて中国に移住すると、「始皇帝陵」の製作を始皇帝に打診した。始皇帝陵の建設が開始された。始皇帝陵は、基本的にピラミッド型の巨大なマウンドであった。

■ A D 7 2 年 「日本武尊誕生」

「始皇帝稜」建設後、中国には需要が無いことを悟ったマウンド派は、次なる新天地として、イエマック王家が続べる満州の地に進出した。一方、マウンド派はイエマック王、景行天皇に接近して自身の血統を打ち立てた。「日本武尊」の誕生である。クマソもヤマトも武（タケル）の名の由来は同じティカルである。ティカル＝タカル＝タケルとなる。

マウンド擁護派としてイエマックを味方に付けるべく、日本武尊は満州を後にして日本列島に上陸し、ピラミッド黄金時代を標榜する熊襲武尊を討伐するために九州に向けて出陣する。その後、熊襲武尊を倒した日本武尊は、日本全土にマウンドを築く権利をイエマック王家に認められた。「古墳時代」の到来である。マウンド派は、九州南部から吉備国、大和国、武蔵国、東北地方に至るまで、広範な地域に渡って大型から小型のものまで、前方後円墳を多数残した。

■ A D 1 世紀 「前方後円墳誕生」

長らく前方後円墳と呼ばれているが、これらの建築物は古墳ではなく、地母神ガイアを祀るために建設された子宮型のモニュメントである。ガイアの血を引くマウンド派は、ニューグレンジの頃から女神の子宮を念頭にモニュメントを建設していたが、日本でデザインに変化が現れ、現在知られる前方後円墳のデザインが完成した。

現在、日本では祭りの際には山車を引くことが通例となっているが、これは当時、古墳建設の際に人々が土砂を運搬していた様子が山車を引く形に昇華されたものである。当時、日本武尊（マウンド派）は、九頭龍などのタナトス一族を皆殺しにしていたので、喜んだ民衆は進んで古墳建設に従事した。そのような背景が、この「日本の祭り」を存続させている。

■ A D 1 世紀 「古墳時代」

身の程知らずの人身御供の種族は、古墳時代、日本武尊の古墳製作に干渉し、「古墳は王の墓であるべきだ」「王の墓を築く時は側近・奴隷を人柱として埋めるべきだ」と主張した。もちろん、日本武尊はこんなたわごとに耳は貸さない。だが、人身御供の種族は隠れて人柱を実施した。目的は、先代王の優れた側近を皆殺しにし、次世代の王の側近を自分の息がかかった者で固めるためである。しかし、これを知った日本武尊は彼らを皆殺しにし、九頭龍の信者たちを納得させるために、代わりに「埴輪」を埋めるようになった。こうして、土蜘蛛を皆殺しにした景行天皇の偉業を引き継いだ日本武尊は、日本各地で古墳製作を指揮しながら、同じく土蜘蛛の邪教詐欺集団、九頭龍の人身御供の種族を皆殺しにするようになった。

鹿野山麓には、九つの頭を持つ大蛇が村人を貪り食っていたという伝説が伝えられている。しかし、伝説によると、日本武尊（マウンド派ティカル人）がこの大蛇を退治している。当時、マウンド派ティカル人は、日本各地に前方後円墳を築いていた。村人は、古墳制作の指揮を執る彼らに大蛇の成敗を要請したのだろう。マウンド派ティカル人が大蛇探索に出かけた3日後、川下で洗濯物をしていた娘が川がだんだん赤く染まっていくのを見た。マウンド派ティカル人は、九頭龍崇拜の人々の拠点を急襲し、皆殺しにしたのだ。

■ A D 4 世紀 古墳時代の終焉

古墳の需要が激減すると、マウンド派は日本を後にしてマヤに舞い戻った。そこには、日本時代にライバルとして争ったピラミッド派が既に勢力伸張を謀っていた。マヤのピラミッド時代である。

■ A D 4 世紀 「イサパ文化誕生」

ピラミッド派に敗北したマウンド派は、マヤから太平洋岸に移って、縄文人の影響を受けた「イサパ文化」を生んだ。その後、故地のひとつアイルランドに帰還することを目的に、マウンド派はマヤを後に大西洋岸を北上した。

■ A D 4 世紀 「ミシシッピ文化誕生」

ミシシッピ流域に侵入して上流に拠点を得たマウンド派は、「カホキア遺跡」を残している。約120基のマウンドが残されているが、中でも「モンクス・マウンド」は、長さ316m、高さ30mを誇る。底面積だけを比べても「ギザのピラミッド」、テオティワカンの「太陽のピラミッド」を凌ぐ巨大な遺物である。この大きさから「ピラミッド派に負けたくない」というマウンド派の心意気と、両者を隔てる亀裂の深さが伝わってくる。

■ A D 8 0 0 年 「トゥクロール族誕生」

ついに、マウンドの製作を断念したティカル人は、ミシシッピ流域を後に、故地のひとつセネガルに帰還して現地人と混合した。トゥクロールの名の由来はティカルとダカールの組み合わせである。ティカル+ダカール=ティカルール=トゥクロールとなる。その後、トゥクロール族は、「テクルール王国」をセネガルの地に建設した。

■AD9世紀 「ドゥクリャ人誕生」

一方、AD10世紀頃にダカールを離れた一部トゥクロール族はアドリア海に侵入し、「ドゥクリャ人」を称した。ドゥクリャの名の由来はトゥクロールである。トゥクロール=トゥクリアル=ドゥクリャとなる。

■AD925年 「アストゥリアス家の大航海時代」

■AD925年 「ディゴル人誕生」

ディゴルの名の由来はドゥクリャである。ドゥクリャ=ドゥグリャ=ディゴルとなる。AD1285年、テクルール王国がマリ帝国に征服されると、トゥクロール族は兄弟であるドゥクリャ人を頼ってコーカサスに移住し、ディゴル人に合流している。

■AD年 「ティグレ人誕生」

ヴァカタカ朝が滅ぶと、相棒の縣氏は日本に帰還したが、ピラミッド派である熊襲武尊は故国エジプトに帰還を試みるが、代わりにアビシニアに上陸する。インド人の顔をした彼らは現地人と混合して「ティグレ人」を称した。ティグレの名の由来はティカルである。

■AD11世紀 「加治氏誕生」「阿保氏誕生」「大岡氏誕生」「青木氏誕生」

「丹治氏」の名の由来は丹氏と多治氏の組み合わせである。あとの4氏族はみなカホキア起源である。カホキア遺跡とは、マウンド派のティカル人がミシシッピに残した巨大マウンドである。インディアンの顔をしたマウンド派ティカル人は、ミシシッピ流域を出て、古墳時代以来遠く離れていた日本に帰還した。彼らは日本人と混合してカホキアを由来に「加治」「青木」「阿保」の名を築いた。カホキア=クワジア=加治、カホキア=アホキア=青木、カホキア=アホキア=阿保となる。また、一部は巨大マウンドに因んで「大岡氏」を称した。以上、「加治氏」「阿保氏」「大岡氏」「青木氏」は、日本武尊の子孫だということになる。こうして見ると、「丹党」はポリネシア人、インディアンで構成されていたことになる。以上、「武蔵七党」は「サイボーグ009」のように、国際色豊かなメンバーで構成されていたことが分かる。

◆カレリア（アグリオス）の歴史

■BC 1270年頃 「カレリア族誕生」

一部ヘールル族はフィンランドに移って「カレリア族」を称し、フィン人（フェニキア人）、スオミ族（サーミ人）と共に北極海ルートの航海に出発する。カレリアの名の由来はカ行がハ行を兼ねる法則である。ヘールル＝ケールル＝ケーレリア＝カレリアとなる。ブリアレオースは、ポルピュリオンとアグリオスの合体部族だが、カレリア族はアグリオスが主導した。

■BC 6世紀 「フィン人の大航海時代」

■BC 6世紀 「コラズム誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加したカレリア族とスオミ族は、現地を初めて「コラズム」と呼んだ。コラズムの名の由来はカレリアとスオミの組み合わせである。カレリア＋スオミ＝カレスオミ＝コラズムとなる。コラズムは、ハ行がカ行を兼ねる法則により、ホラズム、ホラサンとも呼ばれている。

■BC 327年 「コラズム族の大移動時代」

■BC 327年 「ケーララ誕生」

「コラズム族の大移動時代」に参加したカレリア族は、単身南インドに移住し、上陸したポイントに「ケーララ」と命名した。ケーララの名の由来はカレリアである。カレリア＝ケラリア＝ケーララとなる。

■AD 1102年 「吉良氏誕生」

チョーラ人の侵攻を機に、南インドを脱出した東方組ケーララ族は日本に上陸して現地人と混合し、「吉良氏」を称した。吉良の名の由来はケーララである。ケーララ＝キーララ＝吉良となる。

■AD1102年 「コロロ王国誕生」

チョーラ人の侵攻を機に、南インドを脱出した西方組ケーララ族は西アフリカに赴いて「コロロ王国」を建てた、コロロの名の由はケーララである。ケーララ＝コーララ＝コロロとなる。コロロ王国が滅亡すると、コロロ人はヨーロッパに移住した。

■AD1560年 「戦国大名の大航海時代」

■AD1560年 吉良氏、ルネサンス後期のイタリアに移住

「戦国大名の大航海時代」に参加した吉良氏は、キャンディ王国が築かれたスリランカを離れ、インド洋、紅海を経た吉良氏は、地中海に入ってルネサンス後期真っ只中のイタリア半島に上陸した。吉良氏は、現地人と混合して「グエツラ」を称した。その後、イングランド、スコットランドに渡って「ギラ」「ギア (G e r e)」などの名を残した。

■AD1564年 ガリレオ・ガリレイ生誕

ガリレイの名の由来はカレリアである。カレリア＝カリレア＝ガリレイとなる。

■AD1875年 アレイスター・クロウリー生誕

クロウリーの名の由来はコロロである。コロロ＝コローロ＝クロウリーとなる。

■AD1920年 トニーノ・グエツラ生誕

グエツラの名の由来は吉良である。吉良＝キエツラ＝グエツラとなる。

■AD1949年 リチャード・ギア生誕

ギアの名の由来は吉良である。吉良=K I R A=G I R A=G E R E=ギアとなる。

■AD1954年 マイケル・ギラ生誕 「スワズ誕生」

ギラの名の由来は吉良である。吉良=キラ=ギラとなる。

チュクウの歴史（ティケー）

◆クスコ（プシケ）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「ティケー誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したチュクウは、モンゴルに帰還し、更に「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリアに上陸した。チュクウは「ティケー」を生んだ。ティケーの名の由来はチュクウである。チュクウ=テュクウ=ティケーとる。

■AD3世紀 「壱岐誕生」「隠岐誕生」

「大和人の大航海時代」に触発されたブギス族は、スラウェシ島から北九州に赴き、現地人と混合して「宇久氏」を形成した。宇久、結城、壱岐、隠岐などの名の由来はみなブギスである。

■7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■7万年前 「プシケ誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」が到来し、ヘラクレスがアマゾン王国と戦争を始めると、エバシは、オーストラリア北西部に移住した。この時に「プシケ」が生まれた。プシケの名の由来はバブサとテュケーの組み合わせである。バブサ+テュケー=ブスケ=プシケとなる。

■7万年前 「ピサ王国誕生」

当時、オーストラリア大陸南東部にはタルタロス一族が君臨し、西部には河川の娘たちのオイノマオスが王として君臨していた。プシケーは、まずタルタロスに赴いて体勢を整え、オイノマオスの国に侵入した。彼らはオイノマオスに勝利し、別の王族ヒッポダメシアと連合した。この時に「ピサ王国」が誕生した。ピサの名の由来はバブサである。バブサ=ブサ=ピサとなる。こ

うして、河川の娘たちに勝利したバブサ族は、タルタロスの国と並ぶピサ王国を建設してオーストラリア大陸に君臨した。

■ 4 万年前 「オリンポス神族の大航海時代」

■ 4 万年前 「ペロプス誕生」

「オリンポス神族の大航海時代」が到来すると、メラネシア海域に根を張っていたアンボン族（アンピロー）はマレー地域に住んでいたカロ族（カリュプソー）と連合体を組んだ。この時にペロプスが生まれた。ペロプスの名の由来はアンピローとカリュプソーの組み合わせである。アンピロー+カリュプソー=ピロプソー=ペロプスとなる。ペロプスは、アトランティス王国の王族となる。

■ 1 万 3 千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1 万 3 千年前 「原初の水アプスー誕生」

アトランティス王国が吹き飛び、大地殻変動でオーストラリア海岸部が荒廃に帰すと、「デウカリオンの大航海時代」に参加したピサ人はスーサに上陸し、コーカサス地方に入植した。彼らは「原初の水アプスー」を称した。アプスーの名の由来はエバシである。エバシ=エバシー=アプスーとなる。アプスーはモンゴルから来たティアマトと同盟を組み、メソポタミアから少々離れることで「神々の集団アヌナキ」の種族とは距離を置いた。

■ BC 11 世紀 「太陽神ヴィシュヌ誕生」

魔神アスラ、ヤクシャ、ラクシャサなどのタナトス勢力が増すと、アプスーは雷神インドラ（マイアンドロス）と組んで「太陽神ヴィシュヌ」を祀った。ヴィシュヌの名の由来はアプスーとウェネの組み合わせである。アプスー+ウェネ=プスウェネ=ヴィシュヌとなる。

■ BC 1026 年 「ピサ建設」

「マハーバーラタ戦争」によって故地が荒廃すると、アプスーはインダス流域を離れてギリシアに移住した。彼らはペロポネソス半島に改めて「ピサ」を築いた。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■AD327年 「ボスニア誕生」

アレキサンダー大王のパンジャブ征服を機に、「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したヴィシュヌは、インドを離れてアドリア海に移っている。彼らは、「ボスニア」の地を得た。ボスニアの名の由来はヴィシュヌである。ヴィシュヌ＝ヴィシュニア＝ボスニアとなる。

■BC327年 「ヴァスコン誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したヴィシュヌは、次にアドリア海らイベリア半島北部に上陸した。ヴィシュヌは、「ヴァスコン人」を称した。ヴァスコンの名の由来はプシケとガンダーラの組み合わせである。プシケ＋ガンダーラ＝プシガン＝パシガン＝ヴァスコンとなる。

■BC327年 「ガスコン誕生」

ヴィシュヌは、「ヴァスコン人」を称したが、同盟者であるティケーは、差別化のために独自に「ガスコン人」を称した。ガスコンの名の由来はハ行がカ行を兼ねる法則によっている。ヴァスコン＝グァスコン＝ガスコンとなる。

■BC327年 「クスコ誕生」「ビスコ川誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したガスコン人は、ペルーに入植し、「クスコ人」を生んだ。クスコの名の由来はガスコンである。ガスコン＝グスコン＝クスコとなる。また、拠点の川には「ビスコ」と命名した。ビスコの名の由来はヴァスコンである。ヴァスコン＝ヴァスコ＝ビスコとなる。

■AD8世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「上野国誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したクスコ人は、単独で上野国に移住した。グアム島から日本に上陸したイギリス人ジョーンズが「上野国（うえの）」を築いたが、クスコ人が到来すると、上野（うえの）は、クスコ、或いはガスコンに因んで上野（こうずけ）と呼ばれた。クスコ＝クスコ＝上野（こうずけ）となる。

■ A D 8 世紀 「山伏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したクスコ人は、上野国で役小角の仲間と出会い、「山伏」を結成する。山伏の名の由来は山のプシケーである。山＋プシケー＝山プシ＝山伏となる。修験道は、主に山伏が継承し、修験道を生んだ天狗とは生活圏を異にしていた。

■ A D 1 0 8 7 年 藤原清衡生誕 「奥州藤原氏誕生」

山伏は、藤原秀郷の子孫を称して藤原経清を生んだ。その後、藤原経清は陸奥豪族、安倍頼時の娘と結婚して「奥州藤原氏」の祖、藤原清衡を生んだ。藤原の名の由来はカシュガルであるが、奥州藤原氏の場合、山伏の土地（原）である。山伏＋原＝ぶし原＝藤原となる。

■ A D 1 1 8 9 年 「奥州藤原氏の大航海時代」

■ A D 1 2 6 0 年 「クスコ王国誕生」

奥州藤原氏は、故地ペルーに帰還し「クスコ人」を復活させた。クスコ人は、ケチュア族と連合し「クスコ王国」を建設した。

■ A D 1 3 6 9 年 ヤン・フス生誕 「フス派誕生」

A D 1 3 5 0 年、インカ人、ケチュア族の連合体がインカ帝国を築くと、クスコ人はペルーを去った。クスコ人は、大西洋を渡り、チェコに入植した。この時に「ヤン・フス」が生まれた。フ

スの名の由来は山伏である。山伏=ふし=フスとなる。

■AD13??年 「カザフ族誕生」

AD1350年、インカ人、ケチュア族の連合体がインカ帝国を築くと、クスコ人はペルーを去った。クスコ人は中央アジアに、奥州藤原氏は大西洋を超えてジンバブエに移住した。中央アジアに拠点を得たクスコ人は、「カザフ」を称した。カザフの名の由来はクスコである（ハ行がカ行を兼ねる法則）。クスコ=クスホ=カザフとなる。

■AD1469年 ケレイ・ハン、初代君主に即位 「カザフ・ハン国誕生」

■AD1572年 「允氏誕生」「具志堅氏誕生」

インカ帝国が滅ぶと、クスコ人はペルーから沖縄島に帰還した。クスコ人は、インカ帝国の威光を借り、当初、「允氏（いん）」を称していた。しかし、AD1638年、允顕徳が真和志間切り具志堅の島を賜って具志堅用易を称し、「具志堅」の名を生んだ。具志堅の名の由来はガスコンである。ガスコン=グスコン=具志堅となる。グスクなどの言葉もガスコン、或いはクスコが由来である。

■AD19年 エリア・カザン生誕

■AD1942年 ムアンマル・アル=カザフイー生誕

リビアに移住したカザフ族は、「リビア・アラブ共和国」を築いたムアンマル・アル=カザフイーを輩出した。優れた指導者であるため、タナトスに凶悪な人物扱いをされ、拳闘にできそこないの革命が起きた。そのため、彼は、優れた指導者に似つかわしくない死を遂げた。

■AD1955年 具志堅用高生誕

世界王座防衛13度は日本人男子世界王者の最多記録

◆マゴグ（カイコス）の歴史

■30万年前 「カイコス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したギュージェースは、オーストラリアで「カイコス」を生んだ。カイコスの名の由来はギュージェースである。ギュージェース＝キュケス＝カイコスとなる。その後、カイコスは河川の娘たちに参加した。

■3万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■3万年前 「レメク誕生」

「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したクリュメネーは、ペルーに移住してカイコスと連合した。この時に「レメク」が生まれた。レメクの名の由来はクリュメネーとカイコスの組み合わせである。クリュメネー＋カイコス＝リュメカー＝レメクとなる。このコンビは、他にもマゴグ、マゴ、マゴス、マゴイを生んでいる。レメクは、ペルーの拠点に「リマック」と命名した。リマックとは、ペルーの首都リマの古名である。

■3万年前 「レメクの大移動時代」

■3万年前 「ムー帝国（ローマ王国）誕生」

「レメクの大移動時代」を企画したレメクは、南極大陸に移住した。アトランティス人から南極大陸のことを耳にしていたレメクは、エラド、マハラエル、トバルカイン、エノス、メトセラを率いてペルーから南極大陸に移った。しかし、異を唱えたエノクは一部エラド、マハラエル、トバルカインを率いて東アジアを目指すことになる。南極に移り住んだレメクは、アトランティス人が築いた土地を継承し、モホス、ペルーで得た文明を南極で開花させた。

この時の栄光の時代が、ムー大陸、アトランティス大陸の伝説として現在に伝えられている。

「ラ・ムー」などの名はレメクが由来と考えられる。つまり、レメクの血統が王族として南極に君臨した。アトランティス人が残した跡地に築かれた南極文明、南極の王国は「ムー帝国」或い

は「ローマ王国」と呼ばれた。いずれも名の由来はレメクである。

■ 3万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3万年前 「マカタオ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加した一部のレメクは、エノクたちと共に台湾に入植した。この時に「マカタオ族」が生まれた。マカタオの名の由来はレメクとヴィディエの組み合わせである。レメク+ヴィディエ=メクディエ=マカタオとなる。

■ 1万年3千年前 「エノクの大航海時代」

■ 1万年3千年前 「澳門誕生」

「エノクの大航海時代」に参加して南極大陸を後にしたレメクは、沖縄に向かったエノクと共に広東に入植した。彼らは拠点を「澳門（マカオ）」と命名した。マカオの名の由来はレメクとエノクの組み合わせである。レメク+エノク=メクエ=マカオとなる。澳門のレメクは、台湾に赴いて祖を同じくするマカタオ族を迎え入れた。

■ 1万年3千年前 「メコン誕生」

澳門のレメクとエノクは、インドシナ半島にも上陸した。両者は、大河のひとつに「メコン」と命名している。メコンの名の由来はレメクとエノクの組み合わせである。レメク+エノク=メクエノ=メコンとなる。

■ 1万年3千年前 「マガン王国（ミケーネ文明）誕生」

エノクと別れたレメクは、メコン河を離れてアラビア半島にまで足を伸ばし、伝説の「マガン王国」を建設している。マゴンの名の由来はメコンである。メコン=メゴン=マゴンとなる。マゴンとは「ミケーネ」のこともであるが、ミケーネ文明は、ギリシアではなくアラビア半島に存在したのだ。ミケーネの名の由来もマガンと同じく、レメクとエノクの組み合わせである。レメ

ク+エノク=メクエノ=ミケーネとなる。

■ 7千2百年前 「マゴグ誕生」

一方、アラビア半島から来たマガン人は神々の集団アヌンナキと組み、ヤペテの子として知られる「マゴグ」を生んだ。マゴグの名の由来はクリュメネーとカイコスとの組み合わせである。クリュメネー+カイコス=メカイコ=メガイゴ=マゴグとなる。

■ B C 3 2 世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ B C 3 2 世紀 「加賀氏誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したマゴグは、出雲国の現地人と混合して「加賀氏」を称した。加賀の名の由来はマゴグである。マゴグ=マガガ=加賀となる。能登族が出雲国を訪れた際、能登に興味を持った加賀氏は、能登方面に入植して「加賀国」を築いている。

■ B C 4 世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■ B C 4 世紀 「ククルカン誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加した加賀氏は、オロク族、一部タタール人、河伯と共にマヤに入植した。日本人の顔をした加賀氏は、オロク族と組んで「ククルカン」を祀った。ククルカンの名の由来は、加賀とウリゲン（オロク）の組み合わせである。加賀+ウリゲン=カガリゲン=ククルカンとなる。

■ B C 1 世紀 「ケツアルコアトルの大航海時代」

■ B C 1 世紀 「高句麗誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したククルカンは、ケツアルコアトルと共に太平洋を

横断し、満州から朝鮮半島に赴いた。ククルカンは、ゼウスの末裔である朱蒙（朱氏）と組んで「高句麗（ゴグリョ）」を建てた。ゴグリョ（高句麗）の名の由来はククルカンである。ククルカン＝ゴグリョカン＝ゴグリョとなる。古代朝鮮の王朝、高句麗と百済はユカタン半島から来たのだ。そういえば、韓国俳優にはメキシコ人に似た顔の人もいる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「モホーク族誕生」「モヒカン族誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した加賀氏は、北アメリカに「モホーク族」を残した。モホークの名の由来はマゴグである。マゴグ＝マホグ＝モホークとなる。モホークからはモヒカン族が派生する。モヒカンの名の由来はモホークである。

■ A D 3 世紀 「クリーク族誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した高句麗（ククルカン）は、アメリカに「クリーク族」を残した。クリークの名の由来はククルカンである。ククルカン＝ククルーカン＝クルーカ＝クリークとなる。

■ A D 6 5 1 年 「ヨハネスの大航海時代」

■ A D 6 5 1 年 「九十九里誕生」「菊理媛神誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したククルカンは単独で行動し、中国から日本に向かった。彼らは房総半島に上陸すると、上陸した海岸に「九十九里」と命名した。九十九里の名の由来はククルカンである。房総半島から故地である加賀国に向かったククルカン神族は「菊理媛神（くくりひめ）」を祀り、「白山比咩大神」の信仰を形成した。

■ A D 6 5 1 年 「舜氏誕生」「閻氏誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加した段部は、故地であるモンゴルに帰還したかったが、契丹が

君臨していたため、代わりに加賀国に立ち寄ってククルカンを誘い、雲南に移住した。段部（ドゥアン）は「舜氏（トゥアン）」を称し、ククルカン神族は「閻氏（カク）」を称した。閻氏はAD748年に南詔王に即位し、舜氏はAD897年に南詔王に即位している。

■AD651年 「パガン族誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したモヒカン族は、ククルカンと共に一旦満州に上陸し、その後南方に向かった。ククルカンは加賀国に帰還するが、モヒカン族はミャンマーに足を伸ばしている。彼らは「パガン族」を称した。パガンの名の由来はモヒカンである。モヒカン=モピカン=ピカン=パガンとなる。

■AD668年 「ブルガリア人誕生」「コーブルク誕生」

高句麗が滅亡するとククルカンは、柔然の創始者である長孫氏（ツァンスン）、日本から来た黒木氏（キルギス人）を率いて西方に向かった。彼らが中央アジアに到達して初めて当地は「コーカサス」と呼ばれた。コーカサスの名の由来はククルカンとツァンスンの組み合わせである。ククルカン+ツァンスン=ククツァンス=クークツァス=コーカサスとなる。

また、ククルカンはフリギア人と組んで「ブルガリア人」と「コーブルク」の2つの連合体を結成した。ブルガリアの名の由来はフリギアとゴグリヨの組合わせであり、コーブルクの名の由来もゴグリヨとフリギアの組み合わせである。フリギア+ゴグリヨ=フリグリヨ=ブルガリアとなり、ゴグリヨ+フリギア=ゴーフリギ=コーブルクとなる。

■AD668年 「大蔵氏誕生」「大倉氏誕生」「小倉氏誕生」

高句麗が滅亡するとククルカンは、東漢氏と共に、朝鮮半島から日本に渡った。ククルカンは、日本人と混合して「大蔵氏」の祖、大蔵広隅を誕生させた。大蔵の名の由来はゴグリヨである。ゴグリヨ=オグリヨ=オーグリヨ=大蔵となる。その後、大蔵氏から「大倉氏」「小倉氏」が派生したと考えられる。

■AD906年 「曲氏誕生」「大理国誕生」

閻氏は、AD779年に失脚すると、雲南を出て単身ベトナムに向かった。閻氏は、ベトナムでは「曲氏（クック）」を称した。ククルカンが由来である。AD906年、曲承裕がベトナム帝

王に即位している。曲氏の王統は、数十年間ベトナムに君臨した。舜氏の統治の後、ここで、段部は本家「段」の名を復活させた。段思平は南詔国を倒し、タイ族、ユワン族、ラーオ族、張氏、シャーナ族を改めて支配下に置いた。その後、段部は、タイ族、ラーオ族と組んで「大理国（ダーリ）」を立てた。

■AD1000年 「カーカティヤ朝誕生」

曲氏の王統は、数十年間ベトナムに君臨した。その後、彼らはベトナムからインドに移住し「カーカティヤ朝」を開いた。カーカティヤの名の由来は加賀と。

■AD1044年 「パガン朝誕生」

■AD1168年 「菊池氏誕生」「六角氏誕生」「甲賀誕生」

ロスチスラフ1世とキエフ大公の座を巡って争ったイジャスラフ3世は敗北したのを機に、東西に新天地を求めて旅立った。西方組はロシアからスコットランドに移って「ロージア王国」を築いた。東方組はロシアから遠く日本にまで旅立った。その途上で、彼らはインドに立ち寄り、AD12世紀に滅びたカーカティヤ朝の人々を船団に迎えた。まず、一行は九州に上陸した。インド人の顔をしたカーカティヤの人々は、藤原政則に接近して自身の血統を打ち立てている。この時に生まれたのが「菊池氏」の祖、菊池則隆である。菊池の名の由来はカーカティヤである。カーカティヤ=カーカティ=菊池となる。

また、リユーリク家とカーカティヤの一部は九州から近江国に至り、共同で「六角氏」を形成した。六角の名の由来はリユーリクとカーカティヤの組み合わせである。リユーリク+カーカティヤ=リク（六）+カーカ（角）=六角となる。近江国を治めていた六角氏は、「甲賀衆」を掌握し、伊賀にも「六角派」を置いて北畠氏、仁木氏と共に伊賀国を3分割して「伊賀衆」を支配下に置いていた。甲賀の名の由来はカーカティヤである。カーカティヤ=カーカ=甲賀となる。AD1487年、甲賀忍者は、六角高頼征伐のために、足利氏が幕府軍を派遣した「鉤の陣」で、特異な存在感をアピールした。

■AD1314年 「ベーコン誕生」「ペキンパー誕生」

王国の滅亡を機に、パガン族は故地帰還を目指して船出を開始した。一旦、モヒカン族の故地アメリカに帰ったものの、パガン族はそこから更に先へ進み、ブリテン島に上陸した。ミャンマー

人の顔をしたパガン族は、イギリス人と混合して「ベーコン」「ペキンパー」などの名前を生んだ。

ベーコンの名の由来はパガン、ペキンパーの名の由来はパガンとピューの組み合わせである。パガン＝パーガン＝ベーコンとなり、パガン＋ピュー＝パガンピュー＝ペキンパーとなる。この系統からはシュルレアリスムの画家フランシス・ベーコン、映画作家サム・ペキンパーが輩出されている。ハードボイルドな作風で知られるサム・ペキンパーはこのような言葉を残している。「真実とはバレないウソだ」。

■AD1836年 「クリーク戦争」

AD1813年、アッパー・クリークの宗教指導者たちは合衆国の文明化プログラムに抵抗し、「レッドスティック戦争」を引き起こした。AD1825年には、デー人（Dane）がクリーク族に「インディアン・スプリングス条約」を突きつけて締結させ、サギ同然にジョージアなど多くの土地を割譲した。AD1843年には、土地の投機者と不法侵入者に土地を騙し取られ、「1836年のクリーク戦争」を引き起こしている。

■AD1909年 フランシス・ベーコン生誕

■AD1925年 サム・ペキンパー生誕

■AD1928年 スタンリー・キューブリック生誕

高句麗とフリギア人の合体部族コーブルクは、神聖ローマ帝国治世下のドイツに移住し、一部はイギリスに移住した。この系統からは「2001年宇宙の旅」「アイズ・ワイド・シャット」で知られる映画監督スタンリー・キューブリックが輩出された。キューブリックの名の由来はコーブルクである。コーブルク＝コーブルック＝キューブリックとなる。

◆ガンダーラ（カイコス）の歴史

■BC7世紀 「クシュ人の大航海時代」

■BC7世紀 「ガンダーラ王国誕生」

「クシュ人の大航海時代」に参加したマガン人とタルタロス（ナフタリ族）は、インダス流域に移住した。この時に「ガンダーラ王国」が生まれた。

■BC327年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■BC327年 「キンダ族誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したガンダーラ人は、アラビア半島に上陸した。彼らは、アラビア人と混合して「キンダ族」を称した。キンダの名の由来はガンダーラである。ガンダーラ=ギンダーラ=キンダとなる。その後、キンダ族はヨルダンに移った。

■BC327年 「キンダ人の大航海時代」

■BC327年 「ブリギンテ族誕生」

「キンダ人の大航海時代」に参加したキンダ族は、イベリア半島に上陸すると、「ブリギンテ」の名前を得た。ブリギンテの名の由来はイベリアのキンダである。イベリア+キンダ=ベリアキンダ=ブリギンテとなる。

■BC327年 ブリギンテ族、ブリテン島に入植

■BC327年 「キンブリ人（前身）誕生」「カンブリア誕生」

ブリギンテ族は、ブリテン島北部を拠点にし、カイコス
のブリギンテ族はスコットランドに入植し、「カンブリア」を築いた。この時に「キンブリ人」が生まれた。カンブリア、キンブリの名の由来はブリギンテと同じくイベリアのキンダである。キンダ+イベリア=キンベリア=カンブリア=キンブリとなる。

■BC4世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■BC3世紀 「キンブリ人誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したキンブリ人は、ユトランド半島に入植し、「キンブリ人」を称した。彼らは、「ヒッタイト人の大航海時代」の同盟者テウトニ人と連合し、女神ダヌの信者として管理・支配されていた。

■BC3世紀 「カンタブリア誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加しなかったキンブリ人は、単身イベリア半島に帰還し、「カンタブリア」を築いた。カンタブリアの名の由来はブリギンテの反対である。ブリギンテ（イベリア+キンダ）=カンタブリア（キンダ+イベリア）となる。

■BC3世紀 「シンハラ人誕生」

イベリア半島に帰還したキンブリ人は、更に東方に向かい、ランカー島に上陸している。この時に「シンハラ人」が誕生した。シンハラの名の由来はキンブリである。キンブリ=シンフリ=シンハラとなる。

■BC133年 「ケント人誕生」「カンタベリー誕生」

ローマ共和国がイベリア半島を領有すると、それを機に、カンタブリア人はブリテン島に帰還した。この時に「ケント人」が生まれ、「カンタベリー」が築かれた。ケント、カンタベリーの名の由来はカンタブリアである。カンタブリア=カンタベリー=ケントベリー=ケントとなる。

■BC101年 「ヴェルケレの戦い」

女神ダヌに指揮されたキンブリ人とテウトニ族の連合体は、BC113年にローマに侵入し、健闘するが、撃退されてしまう。その後、BC102年の「アケセクスチェの戦い」でテウトニ

族はローマ軍の前に粉碎され、BC101年の「ヴェルケレの戦い」ではキンブリ人が大いに敗れた。

■BC69年 「カーンヴァ朝誕生」

キンブリ人・テウトニ族は、BC73年の「スパルタクスの大乱（第3次奴隷戦争）」にも参加したが、バタヴィア族のローマ蜂起が失敗すると、3者は連合して地中海を脱出した。そして、インドに上陸した3者は、マガダ王国を訪問し、シュンガ朝に仕えた。その後、キンブリ人の主導でシュンガ朝の王位を篡奪した一行は「カーンヴァ朝」を開いている。カーンヴァの名の由来はカンブリアである。カンブリア=カンバリア=カーンヴァとなる。

■BC23年 「乞伏部誕生」

バタヴィア族と共にモンゴルに移住したキンブリ人は「乞伏部（キフ）」を結成した。乞伏（キフ）の名の由来はキンブリであり、禿髪（トゥファ）の名の由来はバタヴィアである。キンブリ=キンフリ=キフとなる。乞伏部は、後に「鮮卑」に加わっている。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「ギブ誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加した乞伏部は、ブリテン島に上陸すると現地人と混合して「ギブ（GIBB）」の名を生んだ。ギブの名の由来はキフ（乞伏）である。この系統からは「ビーズ」のアンディ・ギブなどが輩出されている。

■AD5世紀 「ケント王国誕生」

■AD8世紀 「カンディアーノ家（前身）誕生」

「マーシア王国」に服属したことを機に、ケント人はアングル人と連合して「カンディアーノ」を称した。カンディアーノの名の由来はケントとアングルの組み合わせである。ケント+アング

ル=ケントアン=ケントアヌ=カンディアーノとなる。

カンディアーノ家はヴェネツィア共和国に渡り、AD887年にピエトロ・カンディアーノ1世がヴェネツィア第16代ドージェに就任している。しかし、AD976年には封建領主と化した第22代ドージェ、ピエトロ・カンディアーノ4世が市民の蜂起を招いて殺害されている。カンディアーノ家はこれを機に、マヤとインドに移住した。

■AD8世紀 「ガンダ誕生」「ンコロ誕生」

「マーシア王国」に服属したことを機に、ザイール流域に根付いたケント人は「ガンダ族」を称し、アングル人は「ンコロ族」を称した。両者は、ザイール流域を遡って大湖水地方に移って、伝説の「ニョロ帝国」の傘下に入った。また、その後に大湖水地方から帰還したンコロ族は、アフリカ西海岸に「アンゴラ」を継承した。

■AD887年 ピエトロ・カンディアーノ1世、ヴェネツィア第16代ドージェに就任

カンディアーノ家はヴェネツィア共和国に渡り、AD887年にピエトロ・カンディアーノ1世がヴェネツィア第16代ドージェに就任している。しかし、AD976年には封建領主と化した第22代ドージェ、ピエトロ・カンディアーノ4世が市民の蜂起を招いて殺害されている。カンディアーノ家はこれを機に、マヤとインドに移住した。

■AD976年 ピエトロ・カンディアーノ4世、ヴェネツィア第22代ドージェに就任

AD976年には封建領主と化した第22代ドージェ、ピエトロ・カンディアーノ4世が市民の蜂起を招いて殺害されている。市民に意志はない。実際には、タナトスの宗教が陰謀によってカンディアーノを陥れている。カンディアーノ家はこれを機に、マヤとインドに移住した。

■AD976年 「フナク誕生」

AD976年には封建領主と化した第22代ドージェ、ピエトロ・カンディアーノ4世の殺害を機に、カンディアーノ家は2手に分離してマヤに移住した。マヤに至った人々は「フナク」を称した。フナクの名の由来はヴェネツィアである。ヴェネツィア=ヘネキア=フナクとなる。マヤの将軍フナク・セエルは、チチェン・イツァーの支配者を倒したと伝えられている。

■AD976年 「ゴンドワナ誕生」

AD976年には封建領主と化した第22代ドージェ、ピエトロ・カンディアーノ4世の殺害を機に、カンディアーノ家は2手に分離してインドに移住した。インドに上陸した人々は「ゴンドワナ」を称した。ゴンドワナの名の由来はカンディアーノである。カンディアーノ＝ガンディアナ＝ゴンドワナとなる。

■AD1016年 「キプチャク族誕生」

ウェセックスは、クヌート大王率いるデンマーク軍に敗北し、イングランドを脱出した。彼らはイギリス人ギブ（乞伏部）を連れて、中央アジアに帰還し、「キプチャク族」を生んだ。キプチャクの名の由来は乞伏（キフ）＋諸葛（ジューガー）である。キフ＋ジューガー＝キフジュガ＝キプチャクとなる。

■AD1236年 「キンボール誕生」「キャンベル誕生」

AD1236年、モンゴル軍の総司令官バトゥの大遠征軍の前にキプチャク族は滅んでしまう。これを機に、キプチャク族は再度、故地であるイングランドへの帰還を試みた。キンブリ人の子孫である乞伏部は、キンブリを由来に「キンボール」「キャンベル」のなを生んだ。キンブリ＝キンブリー＝キンボールとなり、キンブリ＝キャンブリ＝キャンベルとなる。

■AD1519年 「コンティ家誕生」

スペイン人がマヤ・アステカに侵攻すると、フナク家は地中海に帰還した。彼らは「コンティ家」を称した。コンティの名の由来はカンディアーノである。カンディアーノ＝コンディアーノ＝コンティとなる。コンティ家は「黒い貴族」と呼ばれた。

■AD1564年 「近藤氏誕生」

AD1564年、アクバルによって「ゴンドワナ王国」は滅亡している。この時に、日本に移住したゴンドワナ人は、「近藤氏」を生んだ。近藤の名の由来はゴンドワナである。ゴンドワナ＝ゴンドワ＝近藤となる。

■AD1724年 イマヌエル・カント生誕

AD1564年、アクバルによって「 Gondwana王国」は滅亡している。この時に、ヨーロッパに移住した人々は「カント」を称した。

■AD19世紀 ガンダ族、ニョロ帝国に侵攻

AD19世紀、イギリス人の血が流れるガンダ族（ケント人）は、大湖水地方に進出してきた大英帝国と結び、伝説の「ニョロ帝国」に進撃した。

■AD1834年 近藤勇生誕 「新撰組誕生」

■AD1942年 ビル・コンティ生誕

■AD1946年 バリー・ギブ生誕 「ビーズ誕生」

■AD1947年 パトリス・ルコント生誕

■AD1947年 ボビー・キンボール生誕 「TOTO誕生」

■AD1948年 近藤誠生誕

■AD1958年 ブルース・キャンベル生誕

幼馴染であるサム・ライミ監督のホラー映画「死霊のはらわた」で知られている。

■AD1959年 リッチー・サンボラ生誕 「ボン・ジョヴィ誕生」

■AD1964年 ジュゼッペ・コンテ生誕

AD2018年、第65代首相に就任している。

◆関氏（カイコス）の歴史

■BC327年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■BC327年 「関氏（グァン）誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したガンダーラ人は、中国に上陸した。彼らは、中国人と混合して「関氏（グァン）」を称した。関（グァン）の名の由来はガンダーラである。ガンダーラ＝グアンダーラ＝関（グァン）となる。関氏からは、三国時代に活躍した「関羽」が輩出されている。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD471年 「カーン王朝誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した乞伏部は、マヤに入植すると「カーン王朝」を開いた。

■AD471年 「コーンウォール誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した乞伏部は、マヤを経てブリテン島に移住すると拠点を「コーンウォール」と命名した。コーンウォールの名の由来はキンブリである。キンブリ＝キーンヴォーリ＝コーンウォールとなる。

■AD651年 「ヨハネスの大航海時代」

■AD651年 「源氏（前身）誕生」

AD651年、バーニシア王国がディアラ王位を篡奪すると、ディアラ王家は「ヨハネスの大航海時代」に参加した。イギリス人の顔をしたディアラ王家は、多治比氏・安倍氏、藤原氏に接近して自身の血統を打ち立てた上で、天皇家に接近した。

AD823年、大原真室女が嵯峨天皇に接近して嵯峨源氏の祖「源融」を生み、藤原時平女が敦実親王に接近して宇多源氏の祖「源雅信」を生み、源俊女が源満仲に接近して摂津源氏の祖「源頼光」を生み、源能有女が貞純親王に接近して清和源氏の祖「源経基」を生んでいる。源氏と平氏の名の由来はガンダーラを2つに分割したものであるが、ガンダーラのガンに「源（げん）」を当て字し、訓読みで「みなもと氏」と読まれた。

■AD1534年 トマス・クロムウェル、宗教改革を指揮 「聖公会誕生」

トマス・クロムウェルはカトリックの影響下から脱するために「聖公会」を生んだ。クロムウェルの名の由来はコーンウォールである。コーンウォール＝クロンウェル＝クロムウェルとなる。

■AD1560年 「キャンディ王国誕生」

安芸氏、小早川氏、越智氏、尼子氏、今川氏、吉川氏、浅井氏、吉良氏、武田氏など、織田信長に敗れた人々が日本を脱出してスリランカに移住する。彼らは連合体を形成してキャンディ王家を作った。キャンディの名の由来は「源氏」である。ゲンジ＝ギエンチィ＝キャンディとなる。その後、吉良氏、武田氏、一部安芸氏は独自の行動を取ってスリランカを離れた。

■AD1560年 「神田氏誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したガンダーラ人は、日本に上陸した。彼らは、日本人と混合して「神田」を称した。神田の名の由来はガンダーラである。ガンダーラ＝カンダーラ＝神田となる。

■AD1560年 「ガンディー誕生」

一部キャンディ王家はスリランカを出てグジャラートを経て西アフリカに辿り着いた。グジャラートにはキャンディ、或いは源氏を由来に「ガンディー」の名が残されている。キャンディ王国の系統からは、インド独立の父マハトマ・ガンディーが輩出されている。

■AD1560年 「アシャンティ帝国誕生」

西アフリカでは安芸氏、小早川氏、越智氏、尼子氏、今川氏、吉川氏、浅井氏が「オツムフォ・ナナ」なる連合体を結成した。オツムフォ・ナナの名の由来は日本語「頭は7」である。更に、アカン人（ガンダーラ人の子孫）と連合した彼らは「アシャンティ」を称した。アシャンティの名の由来はアカンとキャンディの組み合わせである。アカン+キャンディ=アキャンディ=アシャンティとなる。アシャンティの歴代の王はアカン人とオツムフォ・ナナが交替で勤めた。

■AD1649年 オリバー・クロムウェル、共和制を採用 「共和制イングランド誕生」

オリバー・クロムウェルは、トマス・クロムウェルが推進した脱カトリックを支持していた。しかし、クリュニー会に聖公会が篡奪されると、次に共和制を採用してカトリックの影響力から脱しようと考えた。

■AD1658年 「コンバウン（前身）誕生」

タナトスの反撃にあうとオリバー・クロムウェルは、死んだと見せかけて一族を率いてイギリスを脱出し、カリブ海に及んだ。クロムウェルは逃亡奴隷マルーンに出会うと、その反骨気質に惚れ込み、連合して太平洋を横断した。彼らは「コンバウン」を称した。コンバウンの名の由来はクロムウェルの祖キンブリとフォン（マルーンはフォン人が多い）の組み合わせである。キンブリ+フォン=キンフォウン=コンバウンとなる。

■AD1752年 「コンバウン朝誕生」

アジアに達すると、コンバウンの連合体はミャンマーに上陸した。彼らは、しばらくモン族の世話になり、その後、ペゲー（朴氏）のモン族（文氏）と共に「タウングー朝」に攻め込み、首

都を陥落させた。AD1752年、クロムウェルとマルーンの異色の連合による「コンバウン朝」がミャンマーに開かれた。

その後、コンバウン朝は、AD1757年にモン王国の首都ペゲーを占領し、AD1766年に「アユタヤ朝」を滅ぼしている。その後、クロムウェルは皮肉にも同郷の人々、大英帝国と相みえることとなる。AD1824年、「第1次英緬戦争」が起こり、「第3次英緬戦争」を経て、AD1886年に大英帝国がミャンマーを英領インドに併合したため、コンバウン朝は滅亡した。

■AD1869年 マハトマ・ガンディー生誕

■AD1908年 サルバドール・アジェンデ生誕

第29代チリ大統領

■AD1940年 ダリオ・アルジェント生誕

アルジェントの名の由来はアシャンティである。アシャンティ=アーシャンテ=アルジェントとなる。AD1824年~1863年に大英帝国との衝突が起きると、一部のアシャンティ人はイタリアに逃亡した。この時に「アルジェント」の名が生まれた。

■AD1971年 ジュリアン・アサンジ生誕 「ウィキリークス誕生」

■AD1975年 アーシア・アルジェント生誕

◆フス派（プシケ）の歴史

■AD1369年 ヤン・フス生誕 「フス派誕生」

AD1350年、インカ人、ケチュア族の連合体がインカ帝国を築くと、クスコ人はペルーを去

った。クスコ人は、大西洋を渡り、チェコに入植した。この時に「ヤン・フス」が生まれた。ヤン・フスの名の由来は山伏である。山伏=やんぶし=ヤン・フスとなる。

■AD1374年 ヤン・ジシュカ生誕 「ターボル派誕生」

AD1347年、黒死病がヨーロッパを席卷するが、バスク人は、背後にカトリック（クリュニー会）がいることを突き止めた。バスク人は、黒死病を逃れるために一時、イベリア半島からチェコに避難した。この時に「ヤン・ジシュカ」が生まれた。ジシュカの名の由来はプシケーである。プシケーは、もともとエバシとティケーの合体部族だが、ヤン・ジシュカは、ジシュカを名乗ることで、ティケー側の出自であることを示している。ジシュカの名の由来は鈴鹿である。鈴鹿=シジュカ=ジシュカとなる。

■AD1415年 ヤン・フス、梵刑

ヤン・フスは、犯罪者・悪党の巢であるカトリック（クリュニー会・シトー会・ドミニコ会）を舌鋒鋭く批判した。彼は、「形式的に教会に所属することや、教会の職務や職位は、その人が真実の教会の一員であることを保証はしない」と語った。フスは、カトリック教会がタナトスであるとの認識は無かったと思うが、カトリック教会が善を装った悪党の集団であることを見抜いていた。

■AD1419年 「フス戦争」

ジギスムントがボヘミア王に即位すると、ジシュカ率いるターボル派は蜂起した。「ターボル派」の名はターボルという土地名に由来しているが、一方で、科学の種族トバルカインの存在を、少々ながら示唆しているのではないか。銃器の使用は、画期的ではある。だが、その銃器は一体誰が持ち込んだのだろうか？銃器の出所については不明な点が多いのだが、科学の種族の関与があったとしか考えられない。汚らわしいカトリック教会（クロノス）を倒そうとする優れた人々の出現に科学の種族は喜び、進んで手を貸したのだ。

■AD1437年 「雑賀衆誕生」

ハプスブルグ家が神聖ローマ帝国の覇権を掌握すると、ルクセンブルグ家はヨーロッパを離れて日本に帰還した。ルクセンブルグ家は、フス派の英雄ヤン・ジシュカの残党を同行させた。ルク

センブルク家の雑賀衆はタナトスだが、鈴木氏、土橋氏やその子孫である斉賀氏、才賀氏はフス派、ヤン・シジュカの子孫であり、タナトスとは無関係である。鈴木孫一をはじめ、土橋氏、雑賀衆はチェコ人、ドイツ人のような顔をしていただろう。

日本語の呼び方「さいが」、漢字表記の「雑賀（ざつが）」もジシュカの名に因んでいる。ジシュカ＝ジシュイカ＝シュイガ＝さいがとなり、ジシュカ＝ジシュ（雑）＋カ（賀）＝雑賀となる。とにかく、フス派は、鉄砲を世界で最初に戦争に用いた人々である。そのため、雑賀衆は当然のように銃撃戦を得意とした。だが、ルクセンブルク家は、家族である大谷家と共謀し、フス派（鈴木氏）を支配下に置き、偉大な英雄である織田信長に対抗した。つまり信長は、神聖ローマ帝国、シトー会をてこずらせて名を馳せたフス派の鉄砲隊と一戦交えていたようなものだ。また、「一水会」の鈴木邦男、ロシアと親交が深い鈴木宗男などもフス派の英雄ヤン・ジシュカの子孫だと考えられる。鈴木氏は戦国時代の後、雑賀衆（ルキフェル）に随行してモンゴルに赴き、サーキャ派に侵入し、その後、モンゴルから帰還して創価学会、生長の家などの創立にも携わっている。浄土真宗はタナトスによる邪教であり、創価学会、生長の家も半分はタナトスの一面を持つが、それらの団体の正義の一面を支えているのがフス派の子孫である。

■ A D 1 4 3 7 年 鈴木孫一生誕 「鈴木氏誕生」

ルクセンブルグ家と共にヨーロッパを発ち、シルクロードを伝って日本に移住したジシュカの残党は「鈴木孫一」を称し、「鈴木氏」を生んだ。ジシュカ＝シジュカ＝鈴木となる。また、鈴木孫一の「孫一」の名はジシュカの「最初の孫」、或いは「最高の孫」であることを示している。鈴木の名の由来には、他に

■ A D 1 4 3 7 年 「土橋氏誕生」

この時に「土橋氏」が同時に生まれた。土橋の名の由来はジシュカとフスの組み合わせである。つまり、彼らは自分たちがフス派の英雄ジシュカに傾倒していることをアピールしている。ジシュカ＋フス＝ツチカ＋フシ＝ツチ（土）＋ハシ（橋）＝土橋（どばし）となる。土橋氏からは土橋守重が誕生している。

■ A D 1 4 3 9 年 「バルバリア海賊誕生」

ヤギェヴォ朝ポーランド王国がフス派を一掃すると、フス派の残党は大挙してボヘミアを脱出し、故地である北アフリカに向かった。ここで、一部がレスボス島に立ち寄り、後に「バルバリア海賊」として悪名を轟かせるウルージ、フズールの兄弟が誕生する。A D 1 5 0 4 年、彼らは祖

を同じくするハフス朝に接触してスルターンと交渉の末、チュニジアに拠点を得た。

■AD1439年 「ブルンジ王国誕生」「フツ族誕生」

その後、AD1517年にウルージはアルジェを占領している。だが、マリキ派に指示されたアルジェ住民の蜂起と、一万人規模のスペイン軍襲来により、ウルージはアフリカ湖水地方に移住し、「ブルンジ王国」を築いた。ブルンジの名の由来はウルージである。ウルージ=ウルンジ=ブルンジとなる。また、フス派の子孫でもある彼らは現地人と混合して「フツ族」を称した。フツの名の由来はフスである。

■AD15??年 「サーキャ派篡奪」

石山戦争が終了すると、雑賀衆はモンゴルに移住した。彼らは、チベット仏教の「サーキャ派」に侵入し、一部を篡奪した。もともと、サーキャの名の由来は諸葛（ジューガー）だったが、雑賀衆たちはサーキャの由来を雑賀であると定めた。

■AD15??年 「ジャコバン修道院誕生」

日本人の顔をした雑賀衆は、フランス人と混合してドミニコ会に入信し、「ジャコバン修道院」を建立した。ジャコバンの名の由来は雑賀とヴァイシュラーヴァナの組み合わせである。雑賀+ヴァイシュラーヴァナ=サイガヴァナ=ジャコバンとなる。

■AD1年 ロベスピエール生誕

■AD1785年 「ジャコバン派誕生」

ジャコバンの名の由来は雑賀とヴァイシュラーヴァナの組み合わせである。ジャコバン派の由来、ジャコバン修道院はドミニコ会の修道院である。ドミニコ会の先祖にはヴァイシュラーヴァナがいる。そのため、雑賀とヴァイシュラーヴァナの組み合わせとなった。雑賀衆とドミニコ会の連合という趣である。雑賀+ヴァイシュラーヴァナ=サイガヴァナ=ジャコバンとなる。

過去、フス派を率いて神聖ローマ帝国と戦い、石山戦争時代に織田信長と戦った雑賀衆は戦術面を担当し、アテネに民主制を敷いたクレステネス、奴隷の自由を謳い「シチリア奴隷戦争」を

指揮してローマに蜂起したアタルガティス教の子孫であるドミニコ会が民主主義を担当した。

■AD1789年 「フランス革命」

「フランス革命」は、実際にはマリー＝アントワネットの「ダイヤモンド首飾り事件」から、既に始まっていた。王政を倒す口実として、まず、敵に汚名を着せることが先決であるが、そのために、ジャコバン派は、このダイヤモンド首飾り事件を作りあげた。基本的にフランス革命には、雑賀衆（ルクセンブルグ家）、雑賀衆（フス派）、ドミニコ会が関与していた。3者には、三者三様の異なる思惑があった。雑賀衆（ルクセンブルグ家）は、神聖ローマ帝国ルクセンブルグ朝の再興があり、ドミニコ会には、シチリア奴隷戦争の完遂、或いは民主制アテネの再興があった。

しかし、雑賀衆（フス派）には、真の人民の解放が頭にあった。リーダーはロベスピエールである。ロベスピエールの名は通常ファーストネームであるが、姓に使用しているため、彼は、日本人の子孫と考えられる。雑賀衆に加わっていたフス派の子孫だ。ほぼ現生人類でありながら、タナトスの手の内を見てきた彼は、タナトスに協力しながら漁夫の利を得る形でタナトスを裏切った。彼は、王政などの権威を廃止し、ダントンなど、タナトスの血を引く者もみな処刑した。特にカトリック廃止に力をいれ、「最高存在の祭典」を催して人民の精神的な解放を画策した。しかし、英雄時代の名残りであるナポレオン・ポナパルトが出現すると、タナトスにとってはノーマークだったようで、乗りに乗ったナポレオンは、あっという間にヨーロッパを席卷した。ただ、クリュニー会が悪であるという認識が無かったナポレオンは、せっかくロベスピエールが追放したクリュニー会を呼び戻し、以前の権限を取り戻してしまう。これが仇となりナポレオンは、征服本能に滾るクリュニー会の手先となり、ロシア帝国に侵攻した。クリュニー会にとっては、ロシア帝国とナポレオン皇帝という2つの敵を一度に弱体化、願わくば同士討ちという思惑があった。

■AD1840年 ピョートル・チャイコフスキー生誕

チャイコフスキーの名の由来は雑賀とフスとスキーの組み合わせである。雑賀＋フス＋スキー＝サイガフスキー＝チャイコフスキーとなる。「くるみ割り人形」「白鳥の湖」「交響曲第6番 悲愴」などで知られる音楽家チャイコフスキーは、タナトスの血統ではないが、タナトスに近い位置にいるフス派の子孫である。

■AD1869年 「チャイコフスキー団誕生」

チャイコフスキーの名の由来は雑賀とフスとスキーの組み合わせである。雑賀＋フス＋スキー＝サイガフスキー＝チャイコフスキーとなる。ニコライ・チャイコフスキーは、マルク・ナタンソン、オリガ・ナタンソンと共に「チャイコフスキー団」を結成した。「フランス革命」でもそうだったが、雑賀衆のフス派は、ロシア人農民の真の解放を企図していたと考えられる。

■AD1863年 「ポーランド人の反乱」「ポーランド人の暴動」

AD1863年、フランス革命、ナロードニキ運動などを経てポーランドに帰還していたフス派が「ポーランド人の反乱」「ポーランド人の暴動」を指揮した。しかし、これに敗れると、彼らは雑賀衆時代の故地である日本に帰還した。このポーランドからの帰還で古河財閥、鈴木商店、藤田財閥、神戸川崎財閥、東京川崎財閥などが生まれた。彼らが故地を同じくする同志である証拠に、古河財閥、鈴木商店、神戸川崎財閥は戦後、連合して「第一勧銀グループ」を生んでいる。

■AD1874年 鈴木岩治郎、商店を開業 「鈴木商店誕生」

樟脳、砂糖貿易商として世界的な拠点網を確立し、製糖、製粉、製鋼、タバコ、ビールなどの事業を展開した。更に、保険、海運、造船などの分野にも進出したが、タナトスの直系、三井財閥の陰謀により、焼き討ちを被っている。焼き討ちの実行者は時宗、浄土真宗などの信者だろう。

■AD1930年 「創価学会誕生」

内モンゴル周辺に居住していた一部の「サーキャ派」は、もともとは諸葛氏（ジューガー）の子孫が築いたものだが、一部は雑賀衆の末裔である。諸葛氏、雑賀衆で構成されたサーキャ派は、中国共産党の台頭と軍閥戦争を機に、内モンゴルから日本に逃れた。一方、ルーマニアがオーストリアに宣戦して第一次世界大戦に参加すると、源義経の子孫（ヴラド家）はルーマニアを発って日本に帰還した。サーキャ派（諸葛氏）は、教育者であった牧口常三郎を教祖に据えて「創価教育学会」を設立した。創価の名の由来はサーキャである。彼らは、「サーキャ」に「創価」を当て字したのだ。

一方、浄土真宗と関係が深い雑賀衆は、ヴラド家と組んで加賀出身の戸田城聖を自身の代表者に据え、犬養毅などに教義を評価されていた牧口常三郎に接近させた。ヴラド家が戸田城聖に接触したのは、戸田の名の由来がタタールだと考えたからだろう。その後、創価教育学会に加わったヴラド家は、「創価」の由来にルーマニア語「ソッカ（ショック）」を独自に加え、ルーマニアと同じデザインの旗を教団の旗として設定した。

一方、浄土真宗の信徒であり、雑賀衆と組んでいた戸田城聖は、ヴラド家の意向に沿わずに大谷の指示により独自に動いた。彼は、浄土真宗の信者で占められた特高警察と結び、牧口常三郎と共に「治安維持法違反で逮捕される」と、いう芝居を演じた。その後、獄中で牧口が殺害されると、戦後、無事に出所した戸田は、浄土真宗の信者を大量に創価学会に入信させた。こうして、教団は一気に巨大化した。

一方、牧口常三郎を失ったサーキャ派（諸葛氏）は、雑賀衆に裏切られたヴラド家と組み、今度は金融業を営んでいた池田大作を代表に据え、戸田城聖を暗殺し、大きく成長した教団を取り戻した。満州に縁がある彼らは、女真に因んで「潮」という名の雑誌を刊行した。女真（ジュシャン）＝シャン＝シアン＝シオン＝シオ＝潮（読みはうしお）となる。しかし、半分以上が浄土真宗の信者であるため、創価学会の半分は浄土真宗のものといえる。そのため、創価学会に入信した浄土真宗の信者は独自に動き、「公明党」を結党した。太田昭宏氏などは、大谷の直系だと考えられる。創価学会の名はひとつだが、様々な歴史的背景を持つ集団が右往左往している複雑な集団である。

■AD1930年 「生長の家誕生」

彼らは、AD1918年～AD1928年まで続いた軍閥戦争を機に、中国から日本に逃れてきた人々である。彼らは、石山戦争が一段落し、織田信長が本能寺の変で死亡したのを機に、モンゴルに移住した雑賀衆の末裔である。その後、ロシア帝国が中国に南下すると、雑賀衆はサーキャ派と共に中国に潜伏していた。モンゴルから帰還した雑賀衆から輩出された谷口雅治は、恩師である大谷家（西本願寺）に接触し、浄土真宗信者を大量に貸与してもらい、教団を急速に発展させた。

■AD1943年 鈴木邦男生誕 「一水会誕生」

■AD1948年 鈴木宗男生誕

■AD1948年 鈴木敏夫生誕

■AD1951年 押井守生誕

映画監督の押井守は、フス派の子孫である。ポーランドのオシーという地名、或いはオシーとい

う東欧に多いファーストネームが「押井」の名の由来となっている。押井は実写映画「アヴァロン」をポーランドで撮影したり、たびたびポーランドに言及している。彼がポーランドに親近感を持ち、且つ関係が深いのは、ポーランド、チェコに暮らし、ボヘミアの独立を守るために神聖ローマ帝国と戦ったフス派の子孫である証だ。戦術、軍事兵器にも造詣が深い彼だが、先祖の影響がうかがえるその趣味は充分彼の仕事に活かされている。

■AD1960年 土橋安騎夫生誕 「レベッカ誕生」

■AD2004年 「フーシ派誕生」

AD1990年代、フセイン・パドルッディーン・フーシは、イエメン北部でザイード派宗教運動「信仰する若者」を指揮し、発展させた。しかし、AD2004年にフーシが殺害されると、異母弟のアブドルマリク・フーシが指揮し、「フーシ派」が生まれた。フーシの名の由来はフスである。イランが支援し、アルカイダ、ISISが敵視しているということは、彼らは正義である。

クウォスの歴史（クウォス）

◆カオス（クウォス）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■400万年前 「クウォス誕生」

「第1次エスの大移動時代」に参加したエスは、湖水地方に入植して「クウォス」を生んだ。エスは身長が140cmほどだったが、水陸両用の生活を送る人類が多い中、クウォスは、人類で一番最初に陸上生活にスイッチし、大型哺乳類などを狩るようになった。そのため、彼らの身長は160cmほどになった。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ヴィディエ誕生」「ウェネ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したクウォスは、現コンゴに移住して「ヴィディエ」を、現ニジェール流域に移住して「ウェネ」を生んだ。

■50万年前 「クウォスの大移動時代」

■50万年前 「グューエース誕生」

「クウォスの大移動時代」を指揮したクウォスは、チッタゴンを通過した際、チュクウと接触、親交を暖めた。お互い、姿かたちが異っていたにも拘らず、クウォスは獣人を同じヒトとして認識し、獣人もクウォスを同じヒトとして認めた。彼らは、姿が異なるからと、お互いを嫌悪し、攻撃することはなかった。彼らは、見かけで判断するのではなく、内面を見抜く鋭い洞察力を備えていた。つまり、非常に知性に溢れていたのだ。

交配も可能であったため、チュクウはクウォスと混合した。この時に「グューエース（グューゲース）」が生まれた。グューエースの名の由来はクウォスであり、別名グューゲースの名の由来

はチュクウとクウォスの組み合わせである。クウォス＝グウォース＝グューエースとなり、チュクウ＋クウォス＝チュクウォス＝グューゲースとなる。彼らが親交を持った証拠は、彼らが残した名前にある。

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「キユース族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したグューエースは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、現シアトル近辺に居を構えた。グューエースは「キユース族」を称した。キユースの名の由来はグューエースである。グューエース＝ギェユース＝キユースとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 35万年前 「カオス誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したキユース族は、家畜を釣れ、カウディア族（アルキユオネウス）、ブリアレオース（ポルピュリオン、アグリオスの合体部族）と共にモンゴルに移住し、遊牧民として暮らし始めた。当時のシベリアは現在の日本の位置にあり、日本はもっと赤道に接近していた（だからワニの化石が発見される）。この時、キユース族は「カオス」を称した。カオスの名の由来はクウォスである。クウォス＝クオス＝カオスとなる。

■ 35万年前 「犬誕生」「遊牧民族誕生」

当時の北アメリカには、アルカオテリウム（猪の祖）、ウィンタテリウム（サイに似ていた）、ブロントテリウム（サイの祖）、メソヒップス（馬の祖）、アルティカメルス（ラクダの祖）、

モロプス（大きな馬くらいの大きさ）、ジャイアントパイソン、メガテリウム（なまけものの祖）などの巨大装飾哺乳類が存在していた。獣人は、その比類なき身体能力でスミロドン（サーベルタイガー）などの大型肉食動物と戦いながら、これらの巨大哺乳類を狩った。一方、乱獲によって大型哺乳類が絶滅すると、古代人類の中でも知性に秀でたクウォスはアルカオテリウム（猪の祖）、メソヒップス（馬の祖）、アルティカメルス（らくだの祖）を飼いならして家畜化し、現在知られている豚、馬、らくだを生んだ。

エバシのアメリカ大陸訪問を機に、争いを好まない獣人ギガースの集団は、家畜化した豚、馬、らくだを携えて、アメリカ大陸からモンゴルに帰還した。この時に、東アジアに馬やらくだがもたらされ、モンゴルから中央アジアに広がっていった。この時、クウォスは、獣人アルキュオネウス、獣人ブリアレオースと連合して神統記に記された「原初の神々」の種族を生んだ。「カオス」「ガイア」「エロス」である。家畜をモンゴルに持ち込んだ彼らは、人類初の遊牧民として暮らした。また、狼を飼いならして「犬（ディンゴ）」を生んだ。

遊牧により、定期的に栄養価の高い食事を摂るようになった事で、カオスらは急速に知能を発達させる機会を得た。ここで、現代人でさえ、なかなか理解できない彼らの「知恵」について触れてみたい。遊牧民であった彼らは、時折、家畜による反乱に悩まされていた。しかし、カオスは、ここで、反乱が起きてから対処するのではなく、反乱を事前に防止する、という発想を得るに至る。つまり、リーダー格になる素質を持つ個体を幼い内に見極め、間引くことで、集団で暴れると手が付けられない大型哺乳類の反乱を防止し、凶暴な狼を人間の友たらしめた。これが真に「知る」ということである。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ギヤ族誕生」「グワ族誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したカオスは、モンゴルを発ち、人類史上初のオーストラリア大陸上陸を果たすと、現在でもアボリジニの一部族として知られる「ギヤ族」「グワ族」を生んだ。ギヤ、グワの名の由来はカオスである。カオス＝ギヤス＝ギヤとなり、カオス＝グワス＝グワとなる。現在、アボリジニには多数の部族がいるが、すべてギヤ族、グワ族から分離し、生まれたと考えられる。

■ 30万年前 「虹蛇誕生」

オケアーニスには、知能によって自然淘汰を免れたできそこないたちが潜んでいた。知能が低ければ淘汰を免れることは無いが、知能が高ければ淘汰を免れようとする個体が出てくる。これは

知能を持った人類に付きまとう課題である。カオスは遊牧技術を応用して「虹蛇信仰」を創り上げ、できそこないたちを統治した。彼らは、知能を悪用する者には、天罰として制裁を加え、できそこないたちを管理した。遊牧民であるカオスたちは、大型哺乳類がないオーストラリアでは生産能力を持たなかったが、できそこないたちが困った時には優れた知恵・力によって救いの手を差し伸べた。一方、知恵・力を授けられたできそこないたちは狩猟・採集に従事し、生産者としてカオスたちに貢物を供えた。こうして、両者はお互いの欠けた部分を補いあい、共存した。これが正しい人類の暮らし方であり、宗教の形である。

■ 30万年前 「ウォルンクア誕生」

カオスはエレボスと組んで虹蛇「ウォルンクア」を祀った。エレボス＝ウェレンボス＝ウォロンビとなり、エレボス＋カオス＝ウェレンボス＋クアス＝ウォルンクアとなる。

■ 30万年前 「ステュクス誕生」

「キブウカの大移動時代」に参加したカゾオバは赤髪の白人であった。彼らは東南アジアに移植し、獣人の姿をしたチュクウ、アボリジニの姿をしたクウォスと組んで「ステュクス」を生んだ。ステュクスの名の由来はカゾオバ、チュクウ、クウォスの組み合わせである。カゾオバ＋チュクウ＋クウォス＝ゾオチュクウォス＝ステュクスとなる。ステュクスは、大洋の娘たちに名を連ね、冥府の河として知られた。

■ 20万年前 タナトスを皆殺しにする

知能によって自然淘汰を免れたできそこないの王タナトスは、虹蛇信仰に対抗してタネ崇拜を創り上げ、大量のできそこないを信者として獲得し、大量の信者にウソを強要することで、ウソを真実に作り変えた。タナトスの信者たちは悪を正義と呼び、正義を悪と呼んで攻撃した、自然界では出来損ないの方が多く生まれることに気づいたタナトスは、数で圧倒する形で少数派の知性を貶めたのだ。彼らは真の王を退け、人類の美德をゆがめた。これに激怒した正しき者たちはタナトスを皆殺しにし、残党はヨーロッパに流すことを決定した。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7 万年前 「コイオス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したカオスは、古代ギリシアの地を踏んだ。この時に「コイオス」が生まれた。コイオスの名の由来はカオスである。カオス=カイオス=コイオスとなる。その後、彼らはティタン神族に属した。

■ 4 万年前 「ティタノマキア」

■ 4 万年前 ギリシアからオーストラリアに移住

「ティタノマキア」に参加したコイオスは、ゼウスに敗北すると、ギリシアを脱出してオーストラリア（タルタロス）に帰還した。

■ 1 万 3 千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1 万 3 千年前 オーストラリアからスーサに入植

「デウカリオンの大航海時代」に参加したコイオスは、メソポタミアで巨石の種族となったデウカリオンと連合した。デウカリオンはメーロポシスと共に「マルドゥク」を生んでいたが、デウカリオンとの連合を機に、コイオスはこのマルドゥクの名を継承した。

■ B C 7 千 5 百年 「ギョベクリ・テペ」

コイオスは、デウカリオンと連合すると、偉大な先祖カオスを祀るため、古代アナトリアに「ギョベクリ・テペ」の神殿を築いた。これが、ストーンクル、ドルメン、前方後円墳、ピラミッドなど、すべての「巨石文化」の始まりである。巨石の種族となったコイオスは、後にタナトスの要請でメンヒルを、単独でドルメンなどをヨーロッパに築くことになる。

■ B C 7 千 2 百年 「チャタル・ヒュユク」

チャタル・ヒュユクは、過去にスフィンクスを建造した古（いにしえ）の巨石の種族の復活で

ある。ここには、8000人もの人々が住んでいたといわれている。デウカリオンの街として発展したのだろう。この頃、ウソつきの人喰い人種ダーナ神族がヨーロッパからオリエント地域を訪れ、見事な巨石建造物を見て、巨石建造物を建造するためにデウカリオンをヨーロッパに招待した。だが、ダーナ神族が人喰い人種だと知ると嫌悪を示したデウカリオンは、ダーナ神族を皆殺しにしている。しかし、この時にコイオスが、ダーナ神族と共にオリエントに来ていたシェルデン人の要請を受けた。

■BC5千年 「メンヒル誕生」「ストーンヘンジ誕生」

メンヒルは、永遠に朽ちることがない「聖なる樹木」であり、ストーンサークルは「聖なる森」である。多くのメンヒルには立筋が刻まれているが、これは侵食によるものではない。これは樹木であることをアピールするため、製作者が意図的に刻んだものだ。大量の信者を獲得するため、ダーナ神族は「我々は小さな石を巨石にまで育てることができる。偉大な魔術師である」とウソをついて布教を行っていた。彼らはその都度、民が見ていない間にコイオス（マルドゥク）に命じて小さな石を大きな石に段々と取り返させた。こうして、無知な弱者を畏怖させ、権勢を誇った。さも、小石が樹木のように巨石へと育つサマを演出するため、コイオス（マルドゥク）は骨を折った。二次的な副産物として土木・建築技術が発展した。

■BC5千年 「ドルメン誕生」

一方、「ドルメン」は、コイオス（マルドゥク）が自分たちの意志で建設していた。ドルメンは、偉大な先祖「カオス」を祀るために造られた「聖なる洞窟」なのだ。ピラミッドの建設動機もこれと同じである。洞窟を作るためには、まず、山を作らなければならないのだ。そのため、ドルメン建造の際、コイオス（マルドゥク）は巨石を積み重ねた。ピラミッドは高度な数学の知識を元に計算して建造され、洗練されたデザインが特徴だが、それに比べてドルメンは非常に無骨な印象を与える。

■BC36世紀 「マルタ島誕生」「ジュンガンディーヤ神殿建造」

マルドゥクの名を継承したコイオスは、「マルタ島」に入植し、ゴゾ島に「ジュンガンディーヤ神殿」を建てた。この神殿は、マウンド派ティカル人と協力し、建造したと考えられる。目的は、原初の神カオスを祀るためである。この時に、マルタ島は初めて「マルタ」と呼ばれた。マルタの名の由来はマルドゥクである。マルドゥク＝マルド＝マルタとなる。

■BC2180年 「ピラミッド派の大航海時代」

■BC2180年 「ラピタ文化」

ダーナ神族の言いなりになってメンヒルを作っていたコイオス（マルドゥク）は、かつての同僚であり、一時的にピラミッド建造を中止したティカル人（デウカリオン）の誘いを受け入れ、「ピラミッド派の大航海時代」に参加してヨーロッパを離れ、遠くペルーに移住した。この時期を境に、メンヒルやドルメンがヨーロッパで製作されなくなった。更に、彼らはルソン島を拠点に、太平洋各地の島々に進出してメンヒルなどの巨石遺物を残した。彼らの残した仕事は、ソロモン諸島、バヌアツ諸島、フィジー、トンガ、サモアにまで広く分布している。彼らが、太平洋を股にかけて活動した時代は考古学者によって「ラピタ文化」と呼ばれている。

■BC2180年 「高車誕生」

その後、コイオス（マルドゥク）はタガログ族と共にルソン島からモンゴルに移住した。モンゴルのコイオス（マルドゥク）は「高車（ガオチェ）」を生んだ。ガオチェの名の由来はカオスである。カオス=カオシェ=ガオチェとなる。高車は、モンゴル各地に「立石」「石人」「鹿石」などの石造遺物を設けた。一方、ドルメンを作りたくなかった高車は朝鮮半島にも赴き、ドルメンの一種である「支石墓」を数多く残している。

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC1550年 「シェクレシュ人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加した高車（ガオチェ）はチェケル人と連合し、クレタに「シェクレシュ人」が生まれた。チェケル+ガオチェ=チェケルチェ=シェクレシュとなる。

■BC1150年 「シェクレシュ人の大航海時代」

■BC1150年 「クリシュナ誕生」

カッシート朝が滅んだ後、「シェクレシュ人の大航海時代」に参加してインドに移住したシェクレシュ人は現地人と混合して「クリシュナ」を祀った。クリシュナの名の由来はシェクレシュとヴィシュヌの組み合わせである。シェクレシュ+ヴィシュヌ=クレシュヌ=クリシュナとなる。

■BC10世紀 「カルタゴ誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したチェケル人（タガログ族）はフィリピン人の顔をしていた。彼らは、高車と連合してチュニジアに入植し、「カルタゴ」を建設した。カルタゴの名の由来はチェケルと高車の別名マルドゥクの組み合わせである。チェケル+マルドゥク=ケルドゥク=カルタゴとなる。カルタゴは、テュロスと並んで正しく優れた人々の中継基地として発展した。美しく、優れた人々を非常に憎悪するタナトスは、ローマ共和国に巢食い、カルタゴ打倒に対して異常なまでの熱意を傾けた。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「河内氏誕生」「石舞台誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加した高車（元カルタゴ人）はインド洋を越えて日本に入植した。チュニジア人の顔をした高車は日本人と混合して「河内氏」を称した。カワチの名の由来は高車（ガオチェ）である。ガオチェ=ガワチェ=河内となる。蘇我馬子の墓として有名な明日香村の石舞台は、実際にはドルメンであり、河内氏が建造したものである。巨石を運搬する作業は、その後に「だんじり祭り」として河内地方で昇華された。だんじりの名の由来は、高車の同盟者であり、チェケル人（タガログ族、丁零）の祖の名、テングリである。デングリ=テンジリ=だんじりとなる。

■BC7世紀 「ダキア人誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカルタゴ人は、地中海を越えてライン河畔に入植したが、高車はカルタゴ人から離脱して単独でパンノニアに赴いた。このとき、彼らは「ダキア人」を称した。ダキアの名の由来はカルタゴ、或いはマルドゥクである。マルドゥク=マルドゥキア=ダキアとなる。

■ B C 6 世紀 「支石墓誕生」

河内氏は、B C 6 世紀頃に朝鮮半島に渡り、西部に基盤式支石墓を築いている。白人の大航海時代以前に、人類は大規模な航海を行っていないと信じる学者たちは、全く同じ構造を持つヨーロッパのドルメンと朝鮮半島の支え石墓を異なるものと考えている。学者は、朝鮮半島に最初にやってきた人類だけが朝鮮人であり、それ以来、朝鮮人は朝鮮半島から出たことがないと考えている。これと同じ発想を、世界各国の人々に当てはめているが、じつに滑稽である。古代人はもっとダイナミックな活動をしていた。

■ B C 5 世紀 「カッパドキア人誕生」

黒海の対岸からアナトリアを訪れたダキア人は、ヤコブの子孫と連合し「カッパドキア」を称した。カッパドキアの名の由来はフェニキア文字のひとつカッパとダキアの組み合わせである。カッパ+ダキア=カッパドキアとなる。カッパドキア人は、ペルガモン王国、ガラテア王国、ピチニア王国、ポントス王国などと並んで「カッパドキア王国」を建設した。

■ B C 1 6 8 年 「スラヴ人の大移動時代」

■ B C 1 6 8 年 「大夏誕生」

「スラヴ人の大移動時代」に参加したダキア人は、タリム盆地に亡命した。ダキア人は「大夏（ダキア）」を建設した。大夏（ダキア）の名の由来はそのまま、ダキアである。

■ B C 1 3 3 年 「カッパドキア人の大航海時代」

■ B C 1 3 3 年 「香夜氏誕生」

「カッパドキア人の大航海時代」に参加したダキア人は、ダキアの名前を2つに分離して「道氏」「香夜氏」を称した。道氏は吉備氏と共同で「大和人の大航海時代」に参加した。吉備氏、道氏はインドに「グプタ朝」を開いている。また、香夜氏は、単独で朝鮮半島に渡り、「伽耶諸国

」を築いている。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「マドック族誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した高車は、現カリフォルニアに入植し、マルドゥクの名を継承していた高車は「マドック族」を名乗った。マドックの名の由来はマルドゥクである。マルドゥク=マードゥク=マドックとなる。

■ A D 3 世紀 「ニート誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した高車は、現地人と混合して「ニート」の名を生んだ。ニートの名の由来は「高」である。英語の「ニート (N E A T)」には「小奇麗な、さっぱりした、格好良い」などの意味がある。

■ A D 3 世紀 「伽耶誕生」

吉備氏、道氏は「大和人の大航海時代」に参加して東西に移住したが、香夜氏は単独で朝鮮半島に入植した。この時に「伽耶」が生まれた。伽耶の名の由来は香夜（かや）である。

■ A D 3 世紀 「カワチ遺跡製作」

「大和人の大航海時代」に参加した河内氏は、ペルーに上陸して「ナスカ文化」に参加し、カワチ遺跡を残した。また、カワチを拠点に軍事主義体制を敷いた。この軍事国家カワチは、後に「インカ帝国」の母体となる。

■ A D 5 6 2 年 「コヤ族誕生」「チンチャ王国誕生」

伽耶が新羅の侵攻によって滅ぶと、伽耶人は朝鮮半島を脱出して太平洋を横断し、ペルーに上陸した。朝鮮人の顔をした彼らは、現地人と混合して「コヤ」を称した。コヤの名の由来は伽耶で

ある。彼らは、「チンチャ王国」を建てているが、チンチャの名の由来は朝鮮語の「チンチャ（本当か?）」である。無事に太平洋を横断できた彼らは、余りの驚きと喜びから、思わず「チンチャ!？」と叫んだ。

■AD581年 「高橋氏誕生」「富樫氏誕生」

フージャンの子孫である烏孫（ウースン）は大夏（ダキア）と共に日本に移住し、連合して「高橋」「富樫」の名を成した。高橋、富樫の名の由来はダキアとフージャンの組み合わせである。ダキア（高）＋フージャン（橋）＝高橋となり、ダキア（トガ）フージャン（ジャ）＝トガジャ＝富樫となる。その後、大夏は「高山」「高村」「高木」など「高」が付く姓を多く成し、烏孫は「橋田」「橋野」「石橋」など「橋」が付く姓を多く残した。また、富樫氏からは「富田」「富山」「富永」など「富」が付く姓が多く残された。

■AD712年 「勿吉の大航海時代」

■AD712年 「高千穂神社誕生」「新田氏誕生」

ニート（高氏）は、「高千穂神社」を建立した。高千穂の名の由来は、イギリス人と混合した高氏の子孫ジョン・ニートである。ジョンに「千穂」を当て字して「高（ニート）」と組み合わせ、「高千穂」の名を組み立てた。また、ニート（高氏）は、日本人と混合して「新田」の名を残している。新田の名の由来はニートである。ニート＝ニット＝新田となる。英語の「ニート（NEAT）」には「小奇麗な、さっぱりした、格好良い」などの意味がある。そのため、彼らは「新」を当て字したと考えられる。

■AD8世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■AD8世紀 「根津氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加した河内氏は、諏訪に到着すると、現地人と混合して「根津氏」を形成した。一時期、河内氏はナスカ高原に「カワチ」と呼ばれる軍事国家を形成していた。そのため、河内氏はナスカを由来に「根津」を称した。ナスカ＝ネズカ＝根津となる。「根津氏」からは「根津財閥」を築いた根津嘉一郎、俳優根津甚八が輩出されている。

■ A D 1 1 世紀 「マヤ人の大航海時代」

■ A D 1 1 世紀 「マードック誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したマドック族は、イギリス人と混合して「マードック」の名を成した。マードックの名の由来はマドックである。マドック=マードックとなる。

■ A D 1 1 世紀 「マタギ誕生」「本木氏誕生」「元木氏誕生」「茂木氏誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したアドック族は日本に移住した。インディアンの頃からの生活を続けたかったマドック族は、日本人が住む都市部や農村部は避けて山岳部に暮らした。彼らは、「マタギ」と呼ばれた。マタギの名の由来はマドックである。マドック=マドク=マタギとなる。マタギは夏季は農業を営み、冬季は集団で山間部に入り、数日間に渡って狩猟を行った。初期の頃、マタギはヤリや毒矢を用いていたという。ここに、彼らがインディアンの末裔であったことを確認できる。現在でも東北部にマタギと呼ばれている人々が暮らしていることが確認できる。だが、大方は都市部に降りた。彼らは、マタギに「本木」「元木」「茂木（もてぎ）」などの漢字を当て字した。また、一部のマタギは太祖マルドゥクの名を由来に「森高」「丸高」「森継」などの姓も作った。

■ A D 1 1 4 1 年 「賀陽氏誕生」「臨濟宗誕生」

ペルー人の顔をしたコヤ族は日本人と混合して「賀陽氏」を形成した。賀陽の名の由来は伽耶、或いはコヤである。A D 1 1 4 1 年、賀陽氏から「臨濟宗」を手がける栄西が誕生する。

■ A D 1 3 9 9 年 「ウォディアール家誕生」「マイソール王国誕生」

A D 1 3 9 2 年に李氏朝鮮が成立すると、落胆した伽耶の末裔が朝鮮半島を出てインドに移住した。朝鮮人の顔をした伽耶人はインド人と混合して「ウォディアール家」を形成した。ウォディアールの名由来は朝鮮語「ウォディア？（どこ？）」である。ヤドゥラーヤが初代王に即位して「マイソール王国」を築いている。マイソールの名由来は朝鮮語「ムイソウル（ソウルじゃない）」である。李氏朝鮮時代、李成桂は「漢城」の呼称を廃して「ソウル」に改めた。その

ため、これを気に入らない伽耶人は、新しい国に「マイソール」を冠した。

■AD1300年 新田義貞生誕

■AD1572年 「インカ人の大航海時代」

■AD1572年 「 gaucho 誕生」

「インカ人の大航海時代」に参加したマントゥーロ族、ケチュア族、カワチ族はインカ帝国を脱出して東方を目指した。アンデス山脈を越えてラ・プラタ地域に出ると、カワチ族が同地に残留した。彼らはガオチェ（高車）を由来に「gaucho」を称した。勇敢かつ自由な気風で知られる gaucho は、イギリスのラ・プラタ侵略時、英国軍をブエノス・アイレスから追放している。

■AD17世紀 「ゴヤ誕生」「ドガ誕生」「デュカス誕生」

AD17世紀、マイソール王国はマラーター同盟と交戦状態に陥る。これを機に、一部ウォディアール家はヨーロッパに移住し、ダキアを由来に「ゴヤ」「ドガ」「デュカス」などの名を生んだ。

■AD1746年 フランチェスコ・デ・ゴヤ生誕

■AD1834年 エドガー・ドガ生誕

■AD1865年 ポール・デュカス生誕

■AD1920年 川内康範生誕 「月光仮面誕生」

■AD1931年 ルパート・マードック生誕

■AD1956年 高橋葉介生誕

■AD1957年 高橋留美子生誕 「うる星やつら誕生」

■AD1966年 富樫義博生誕

■AD1940年 ジョルジオ・モロダー生誕

◆イシュタル（イストロス）の歴史

■30万年前 「イストロス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したカオスは、テレストーと連合して、オセアニアに「イストロス」を生んだ。イストロスの名の由来はクウォスとテレストーの組み合わせである。クウォス+テレストー=ウォステレス=イストロスとなる。その後、イストロスは河川の娘たちに参加した。

■30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■30万年前 「イステル川誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したイストロスは、オーストラリアを後に、黒海西岸に入植した。この時にドナウの古名「イステル川」が生まれた。イステルの名の由来はイストロスである。イストロス=イステルス=イステルとなる。

■ 7万年前 「アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「瀬織津比咩神誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したイストロスは、台湾に上陸してアプスーと連合し「セオリツヒメ」を成した。セオリツの名の由来はアプスーとイストロスの組み合わせである。アプスー＋イストロス＝スウロス＝スオロツ＝セオリツとなる。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万3千年前 「イシュタル誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加してモンゴルに移住したイストロスは、次に「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに入植した。この時に、イストロスは「イシュタル」を生んだ。イシュタルの名の由来はイストロスである。イストロス＝イシュトロス＝イシュタルとなる。

■ A D 7世紀 「オーストリア誕生」

イスラム帝国台頭を機に、イシュタルはメソポタミアを離れてライン河畔に移住し、オースターを継承して拠点を「オーストリア」と命名する。オーストリアの名の由来はオースターとイシュタルの組み合わせである。オースター＋イシュタル＝オーシュタール＝オーストリアとなる。

■ A D 7世紀 「石田氏誕生」

イスラム帝国台頭を機に、イシュタルは日本に上陸して山城国に居を構え「石田」の名を称する。石田の名の由来はイシュタルである。イシュタル＝イシダル＝石田となる。

■ A D 718年 「アストゥリアス家誕生」

現ナバラ州に「エステラ」の名を残したオーストリア人から、AD718年に「アストゥリアス王国」を建設するペラーヨが輩出される。アストゥリアスの名の由来はオーストリアである。オーストリア=オストリアス=アストゥリアスとなる。アストゥリアス家が滅亡すると、アストゥリアスの名を継承した人々はヨーロッパを中心に拡散した。

■AD827年 「ストラスクライド王国誕生」

AD757年にイベリア半島を出た一部アストゥリアス家は、スコットランドに落ち延びていたローマ皇帝の血統クラウディウス家と連合する。ストラスクライドの名の由来はアストゥリアスとクラウディウスの組み合わせである。アストゥリアス+クラウディウス=ストゥリアスクラウディ=ストラスクライドとなる。ラン・マク・アースガルが初代ストラスクライド王に即位している。

■AD925年 「アストゥリアス家の大航海時代」

■AD925年 「オセツト族誕生」

「アストゥリアス家の大航海時代」に参加したアストゥリアス家は、現オセチアに移住してアストゥリアスの名に因んだ「オセツト人」を称した。オセツトの名の由来はアストゥリアスである。アストゥリアス=オセツトゥリアス=オセツトとなる。AD13世紀、モンゴル軍の襲来を機に、オセツト人はハンガリーと中国に逃亡した。ハンガリーのオセツト人は、「ヤース人」を称し、中国のオセツト人は「アスト人」を称した。ヤースとアストの名の由来はどちらもアストゥリアスである。アストゥリアス=トゥリアース=ヤースとなり、アストゥリアス=アストとなる。

■AD1093年 「ストラスクライドの大航海時代」

■AD1093年 「アストラハン誕生」

「ストラスクライドの大航海時代」に参加したクラウディウス家は、イシュタルの故地に近い、中央アジアにやって来た。クラウディウス家は先祖の名イシュタルに因んで「アストラハン」とな

った。イシュタル=イシュトラ=アストラとなる。

■AD1237年 「アストラハンの大航海時代」

■AD1237年 「アステカ族誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したアストラハン・タタールは、ムシュキ族を伴って中央アジアから大西洋に出てメキシコに渡った。アストラハン・タタールは「アステカ族」を称し、マスカットやモスクワの由来になったムシュキ族が「メシコ族」となった。アステカの名の由来はアストラとティカルの組み合わせである。アストラ+ティカル=アスティカ=アステカとなる。アストラハンの系統からは初代アステカ皇帝アカマピチトリ、第2代アステカ皇帝ウィツィリウィトルが輩出され、第4代皇帝にメシコ族の系統のイツコアトルが輩出されている。

■AD1年 アカマピチトリ、初代アステカ皇帝に即位 「アステカ帝国誕生」

■AD1466年 カシム1世、初代王に即位 「アストラハン・タタール国誕生」

AD1440年、ウァシュテペック族出身のモクテスマが第3代アステカ帝国皇帝に即位した。ウァシュテペック族が天下を取ったことにより、アステカ族（アストラハン）、メシカ族（ムシュキ）はアステカ帝国を後にする。東方組のアステカ族、メシカ族は、故地であるアストラハンに帰還した。アステカ帰還組から生まれたカシム1世は、AD1466年に「アストラ・ハン国」の初代王に即位する。アストラ・ハン国は、AD1556年に滅亡している。

■AD1825年 ヨハン・シュトラウス2世生誕

シュトラウスの名の由来はアストゥリウスである。アストゥリウス=アシュトラウス=シュトラウスとなる。

■AD1878年 ヨシフ・スターリン生誕

スターリンの名の由来はイシュタルである。イシュタル=イシュターリン=スターリンとなる。

■AD1940年 リンゴ・スター（リチャード・スターキー）生誕 「ザ・ビートルズ誕生」

アスタルキ（アスタルテの人）＝シュタールキー＝スターキーとなる。

■AD1946年 シルヴェスター・スタローン生誕

アストラン＝アストラーン＝スタローンとなる。

■AD1956年 ラース・フォン・トリアー生誕

トリアーの名の由来はオーストリアである。オーストリア＝オーストリアー＝トリアーとなる。

◆マゴス（カイコス）の歴史

■1万3千年前 「マガン王国（ミケーネ文明）誕生」

エノクと別れたレメクは、メコン河を離れてアラビア半島にまで足を伸ばし、伝説の「マガン王国」を建設している。マゴンの名の由来はメコンである。メコン＝メゴン＝マゴンとなる。マゴンとは「ミケーネ」のことでもあるが、ミケーネ文明は、ギリシアではなくアラビア半島に存在したのだ。ミケーネの名の由来もマガンと同じく、レメクとエノクの組み合わせである。レメク＋エノク＝メクエノ＝ミケーネとなる。

■BC5千年 「女神モコシェ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加してマガン王国の王統を篡奪したアラムは、ローマ王国を築いたが、レメクから分離したカイコスは「豊穡の女神モコシェ」を祀った。モコシェの名の由来はレメクやマゴスと同じくクリュメネーとカイコスの組み合わせである。クリュメネー＋カイコス＝メコス＝モコシェとなる。

■BC1027年 「メガラ誕生」「マゴ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出し、ペロポネソス半島に上陸したミケーネ人とチェケル人は「メガラ」を築いた。メガラの名の由来はミケーネとチェケルの組み合わせである。ミケーネ+チェケル=ミケル=メガラとなる。メガラ人は船人として地中海を縦横無尽に駆け、カルタゴ人やフェニキア人と交流をし、BC685年には植民都市カルケドンを築き、BC667年には植民都市ビザンティオンを建設した。メガラ人は、カルタゴでは「マゴ」を称した。マゴの名の由来はメガラである。メガラ=マゴラ=マゴとなる。

マゴは、「フェニキア人の大航海時代」に参加してイランに「マゴス」、日本に「天孫族」を残した。一方、カルタゴに残留したマゴは、BC6世紀にカルタゴに「マゴ王朝」を開き、100年後には、将軍ハンニバル・マゴを輩出している。BC409年、将軍ハンニバル・マゴは、カルタゴ軍をシチリアに侵攻させて「第2次ヒメラの戦い」を指揮した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「マゴス誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したマゴは、フェニキア人、アッカド人、マナセ族と共にペルシアに入植を決めた。マゴは「マゴス」となって祭祀を取り仕切った。マゴスの名の由来はクリュメネーとカイコスとの組み合わせである。クリュメネー+カイコス=メイコス=マゴスとなる。

■BC552年 「マゴスの大航海時代」

■BC552年 「聖地メッカ誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマゴスは、メディア人と共に、紅海に入ってアラビア半島に根付いた。先祖の故地マガン王国への帰還である。マゴスはメディーナの隣に「メッカ」を築いた。メッカの名の由来はマゴである。マゴ=マッゴ=メッカとなる。

■BC552年 「ハイ・キング誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマゴスは、西方に向かい、アイルランドに上陸した。現地人と混合したマゴスは、「O'」と「M a c」の氏族を形成した。O'、M a cの名の由来はオメガである。その後、「聖地タラ」と「ミード」は、代々、古代アイルランドを統べるハイ・キングたちの重要な拠点となる。更に、マゴスはドルヒユ族と合体し、ひとつの王統を形成する。

■ B C 3 世紀 「ガスコン人の大航海時代」

■ B C 1 3 年 「景行天皇誕生」

「ガスコン人の大航海時代」に参加したマゴスは、ドルヒユ族と共に満州に上陸し、イエマックの王室に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのが「大足彦（オオタラシヒコ）」である。オオタラシヒコの名の由来はオメガ（オー）とタラスカである。オー+タラスカ=オオタラシ=大足彦となる。つまり、大足彦の名はマゴスとドルヒユ族の連合体であることを示している。景行天皇は、弱い民衆を苦しめるタナトスの一族である土蜘蛛を皆殺しにし、日本武尊にもタナトスの一族である九頭龍の討伐を指示した。

■ A D 8 4 年 「成務天皇誕生」

ワカタラシヒコの名の由来は「若」とタラスカである。ワカ+タラスカ=ワカタラシ=稚足彦となる。稚足彦は「成務天皇」として第13代天皇に即位している。成務天皇の時代、ステュクスの後裔である武内宿禰が大臣として政務を統括したと言う。

■ A D ? ? 年 「仲哀天皇誕生」

タラシナカツヒコの名の由来はタラスカと河の種族グレニコスの組み合わせである。タラスカ+グレニコス=タラスナカ=足仲彦となる。足仲彦は「仲哀天皇」として第14代天皇に即位している。仲哀天皇を最後に、ポントス人の応神天皇が即位するまで、イエマック王位（天皇の座）は70年間、空位となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「アプリマック誕生」

「マゴスの大航海時代」マゴスはペルーに上陸し、アベルと組んで「アプリマック川」を拠点に定めた。アベル+マック=アベルマック=アプリマックとなる。

■ A D 3 世紀 「ムスコギー族誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した仲哀天皇の一族は、アメリカに入植して「ダラス」を築き、「ムスコギー族」を成した。ダラスの名の由来はタラスカであり、ムスコギーの名の由来は朝鮮語「何の肉ですか？（ムスンコギヤ？）」である。

■ A D 8 世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「三木氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したマゴスは、房総半島に上陸し、諏訪に到着すると、「三木氏」を生んだ。三木氏の名の由来はマゴスである。マゴス+マコス=ミコス=三木氏となる。

■ A D 1 8 7 1 年 御木徳一、初代教祖 「パーフェクト・リバティー教団誕生」

■ A D 1 9 0 7 年 三木武夫生誕

第 6 6 代内閣総理大臣に就任している。

◆ プール（トバルカイン）の歴史

■ B C 3 2 世紀 「第 2 次北極海ルート」

■BC32世紀 「プール族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人は、エニセイ河流域に降り立ち、現地人と混合して「プール族」を形成した。プールの名の由来はスバルである。スバル＝スバアル＝プールとなる。その後、プール族はアーリア人に参加している。

■BC1027年 「十王戦争」

■BC1027年 「クル族誕生」

「マハーバーラタ戦争」で使用された核兵器によってアーリア人の連合体は崩壊し、一族は四散した。だが、祖を同じくするプール族とバーラタ族は合体して「クル族」を結成している。クルの名の由来はプールである。プール＝グール＝クルとなる。

■BC1027年 「アーリア人の大移動時代」

■BC1027年 「キュロス誕生」

「十王戦争」の後、イランにやって来たクル族は、現地人と混合して「キュロス」の名を誕生させた。この系統からはキュロス1世、キュロス2世が輩出されている。アーリア人に属するクル族は「ペルシア帝国」の誕生に携わった。

■BC529年 「太陽神ミトラの大航海時代」

■BC529年 「クール人誕生」

「太陽神ミトラの大航海時代」に参加したクル族は、ヨーロッパ人と混合して「クール人」を形成する。クールの名の由来はクルである。彼らは、拠点として「クールラント」を築いた。

■BC529年 「カウィール家誕生」

「太陽神ミトラの大航海時代」に参加したクル族はマヤ人と混合して「カウィール家」を形成した。カウィールの名の由来はクールである。クール=クイール=カウィールとなる。

■AD520年 「マヤ人の大航海時代」

■AD520年 「クール人復活」

「マヤ人の大航海時代」に参加したカウィール家は、ベリーズ人と共にリトアニアに赴き、「クール人」を復活させた。土地柄もあり、クールの名は英語の「冷たい」を連想させるが、実際には、「クール人の土地」に由来している。AD1228年、クール人はセムガル族と連合してリガを襲撃し（リヴォニア十字軍）、AD1260年には十字軍側に参加したがリヴォニアに敗北している（ドゥルペの戦い）。

■AD603年 「ウイグル人誕生」

托跋部は、マヤから来たカウィール家と連合して「ウイグル人」を結成する。ウイグルの名の由来はウェイ（魏）とクール（カウィール）の組み合わせである。ウェイ+クール=ウェイクル=ウイグルとなる。ウイグル人はイングランドで誕生したことになる。

■AD603年 「スヴェルケル誕生」

ウイグル人は、ブリテン島を離れて、オーディーンを祀る植民地スカンジナビアに移動した。この時、新たに「スヴェルケル」の名が誕生している。だが、この名はAD1161年まで封印される。スヴェルケルの名の由来はスバルとカウィールの組み合わせである。スバル+カウィール=スヴァルカウィル=スヴェルケルとなる。

■AD6??年 「ウイグル汗国誕生」

その後、ウイグル人は、スカンジナビアを後に北極海ルートに入った。レナ河に到達したウイグ

ル人はそのままシベリアを南下し、モンゴルの地を踏む。白人とマヤ人の顔をした連合体はモンゴル人と混合して、AD6??年に「ウイグル汗国（回鶻）」を建てた。

■AD727年 「ウイグル人の大航海時代」

■AD727年 「ヴァイキング誕生」

「ウイグル人の大航海時代」に参加したウイグル人は、先祖の托跋部が「北魏」を支配していたことから「魏（ウェイ）の王」を由来に「ヴァイキング」を称した。ウェイ（魏）＋キング＝ヴァイキングとなる。また、ナイマン人は「ノルマン人」となり、大宛（黒人ダン族）は「デーン人」となった。ヴァイキングの話になると、すべての名前がごっちゃになっていたが、ヴァイキングとは托跋部を指し、ノルマン人はナイマン人を指し、デーン人は大宛（黒人ダン族）を指している、と理解したい。ヴァイキングやノルマン人は、基本的に暴力的で残虐なデーン人とは対立していた。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「荒木氏誕生」「北島家誕生」「千家家誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したアイスランド人は「北島家」を、デンマーク人・スウェーデン人は「千家家」を、エリクソンは「荒木氏」を、スヴェルケル家は「佐原氏」を成した。北島の名の由来はずばりアイスランドであり、千家の名の由来は「SENの家」である。「SENの家」は、クリスチャンセン、ヘンリクセン、マイケルセンなど、セン（SEN）が付く名前の人々による連合体である。

■AD997年 「佐原氏誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したヴァイキングは、現地人と混合して「佐原氏」を生んだ。佐原氏からは、「一の谷の合戦」で一番乗りを果たした佐原義連が輩出されている。

■AD997年 「エリク家誕生」「スヴェルケル家誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したヴァイキングとレイフ・エリクソンは、長い時間と労力をかけて故地である日本に到着したものの、トンボ帰りを決意する。エリクソンはヴァイキングと共にスカンジナビアに上陸すると、ヴァイキングは「スヴェルケル」の名を解禁し、レイフ・エリクソンは「エリク家」を築いた。AD1161年、スヴェルケル家のカール1世がスウェーデン王に即位すると、その後はエリク家とスヴェルケル家が仲良く交代で王位に就いた。

■AD1235年 「ジャーン朝誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したイギリス人は、日本から足を伸ばしてきたアフリカに移住した。ジャーンの名の由来は「SON（ソン）」である。ソン＝ション＝ジャーンとなる。ヤグムラサン・イブン・ジャーンが初代君主に即位した。その後、AD1555年にジャーン朝が滅亡すると、ジャーン王家は北アフリカから中央アジア・アストラハンに移り、AD1599年に同じ名前で、新しく「ジャーン朝」を開いている。このジャーン朝は、AD1756年に滅亡している。

■AD1250年 「スヴェルケル家の大航海時代」

■AD1250年 「川原氏誕生」「川井氏誕生」「川平氏誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」に参加したスヴェルケル家は、「ウイグル人」以来、永らく同盟関係にあったカウィール家が分離・独立を申し出て、日本に残留を決めた。金髪・碧眼の白人の姿をしたカウィール家は日本人と混合して「川原」「川井」「川平」などの姓を作った。すべての名はカウィールが由来である。

■AD1535年 「川端氏誕生」「川中氏誕生」「川辺氏誕生」「川瀬氏誕生」「川田氏誕生」

托跋部と同盟していたペチェネグ族はスフォルツァ家から分離・独立を申し出、その代わりに、過去にウイグル・ヴァイキング時代に托跋部の同盟者であったカウィール家に接触した。両者は合体して5つの名を生んだ。いずれもカウィールとペチェネグの組み合わせである。「川端（カウィ+ペチェ）」「川中（カウィ+ネグ）」「川辺（カウィ+ペ）」「川瀬（カウィ+チェ）」

」「川田（カウイ+チェ）」となる。更に、川田からは「桑田」の名も派生している。この5つの姓を持つ人々は、日本人を人種母体に持ちながら、イタリア人、北欧人、マヤ人、中央アジア人など多様な民族の血を継承している。

■AD1899年 川端康成生誕

■AD1954年 ニール・ショーン生誕 「ジャーニー誕生」

■AD1956年 桑田桂祐生誕 「サザンオールスターズ誕生」

■AD1957年 川井憲次生誕

■AD1969年 河瀬直美生誕

◆ゼブルン（トバルカイン）の歴史

■BC32世紀 「第2次北極海ルート」

■BC32世紀 「スバルバル諸島誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人はまず、北極点を通過する冒険を試みて、第1の拠点スバルバル諸島に辿り着く。スバルバルの名の由来はスバルである。しかし、北極点通過は困難だと分かると、一行は、第2の拠点であるオビ河に到着する。

■BC32世紀 「プール族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人は、エニセイ河流域に降り立ち、現地人と混合し

て「プール族」を形成した。プールの名の由来はスバルである。スバル＝スバアル＝プールとなる。その後、プール族はアーリア人に参加している。

■BC 32世紀 「ツバル誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したスバル人はシベリアを通過すると、樺太を南下し、単身、太平洋に漕ぎ出て「ツバル諸島」を発見した。ツバルの名の由来はスバルである。

■BC 32世紀 「ゼブルン族誕生」

ツバル人は、太平洋の孤島を出発し、遠くイスラエルの地に上陸し、「ゼブルン族」を形成した。ゼブルンの名の由来はツバルとトバルカインの組み合わせである。ツバル＋トバルカイン＝ツヴァライン＝ゼブルンとなる。

■BC 32世紀 「スファラディ（パルティア）誕生」

ゼブルン族は、ラテン人（ロディア）と組んで「スファラディ」を生んだ。この時に「パルティア」の名も同時に生まれた。スファラディ、パルティアの名の由来はゼブルンとロディアの組み合わせである。ゼブルン＋ロディア＝ゼブロディア＝セフロティア＝スファラディとなり、ゼブルン＋ロディア＝ゼブロティア＝プロティア＝パルティアとなる。

■BC 248年 アルサケス2世、初代王に即位 「パルティア王国誕生」

その後、イオニア人、パルティア人はインドを離れてイランに帰還した。この時、イオニア人は「ポントス王国」を築き、パルティア人は「パルティア王国」を建設している。BC 281年、マケドニアから独立したミトリダテス1世が、初代王に即位して「ポントス王国」を黒海南岸に打ち立て、BC 247年には、アルサケス2世が初代王に即位して「パルティア王国」をイランの地に打ち立てた。

■AD 114年 「ポントス人の大航海時代」

■AD114年 「托跋部誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したパルティア人は、チベットからモンゴルに移り、現地人と混合して「托跋部（ツォバ）」を結成した。ツォバの名の由来はゼブルンである。ゼブルン＝ズェブルン＝ツォバとなる。宇文部、托跋部は同盟して正統な鮮卑（シェンヴェイ）をモンゴルから追放した。

■AD432年 「北魏誕生」

托跋部は、この時に魏（ウェイ）の名を戴いた。この名前からウイグル、ヴァイキングの名が生まれることになる。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「ゴドジン王国誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加した托跋部は、慕容部、乞伏部、段部、宇文部、甲斐氏と共にブリテン島に移住した。モンゴル人の顔をした托跋部は、イングランドの地に「ゴドジン王国」を建設した。ゴドジン（GODDODIN）の名の由来は「応神の神」の英語訳である。ゴッド+オージン＝ゴッドージン＝ゴッドジンとなる。

■AD471年 「最高神オーディン誕生」

ゴドジン王国を出撃した托跋部は、応神天皇の名を借りて「オーディン」を称し、スカンジナビアの地に出現した。オージン＝オージーン＝オーディーンとなる。この時に、北欧神話の全容が確立された。新参者であるはずの托跋部は、先発隊である「悪神ロキとヘル（ルキフェル）」「雷神トール（ドルヒユ）」「戦神テュール（ミツライム）」「太陽神フレイ（マハラエル）」などを退けて最高神の位を篡奪した。

■AD603年 「ウイグル人誕生」

托跋部は、マヤから来たカウィール家と連合して「ウイグル人」を結成する。ウイグルの名の由

来はウェイ（魏）とクール（カウィール）の組み合わせである。ウェイ＋クール＝ウェイクル＝ウイグルとなる。ウイグル人はイングランドで誕生したことになる。

■AD603年 「スヴェルケル誕生」

ウイグル人は、ブリテン島を離れて、オーディーンを祀る植民地スカンジナビアに移動した。この時、新たに「スヴェルケル」の名が誕生している。だが、この名はAD1161年まで封印される。スヴェルケルの名の由来はスバルとカウィールの組み合わせである。スバル＋カウィール＝スヴァルカウィル＝スヴェルケルとなる。

■AD6??年 「ウイグル汗国誕生」

その後、ウイグル人は、スカンジナビアを後に北極海ルートに入った。レナ河に到達したウイグル人はそのままシベリアを南下し、モンゴルの地を踏む。白人とマヤ人の顔をした連合体はモンゴル人と混合して、AD6??年に「ウイグル汗国（回鶻）」を建てた。その後のウイグル汗国は、後に大谷家、ドミニコ会などを生む大宛人に支配されている。

■AD727年 「ウイグル人の大航海時代」

■AD727年 「ヴァイキング誕生」

「ウイグル人の大航海時代」に参加したウイグル人は、先祖の托跋部が「北魏」を支配していたことから「魏（ウェイ）の王」を由来に「ヴァイキング」を称した。ウェイ（魏）＋キング＝ヴァイキングとなる。また、ナイマン人は「ノルマン人」となり、大宛（黒人ダン族）は「デー人」となった。ヴァイキングの話になると、すべての名前がごっちゃになっていたが、ヴァイキングとは托跋部を指し、ノルマン人はナイマン人を指し、デー人は大宛（黒人ダン族）を指している、と理解したい。ヴァイキングやノルマン人は、基本的に暴力的で残虐なデー人とは対立していた。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「荒木氏誕生」「北島家誕生」「千家家誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したアイスランド人は「北島家」を、デンマーク人・スウェーデン人は「千家家」を、エリクソンは「荒木氏」を、スヴェルケル家は「佐原氏」を成した。北島の名の由来はずばりアイスランドであり、千家の名の由来は「SENの家」である。「SENの家」は、クリスチャンセン、ヘンリクセン、マイケルセンなど、セン（SEN）が付く名前の人々による連合体である。

■AD997年 「佐原氏誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したヴァイキングは、現地人と混合して「佐原氏」を生んだ。佐原氏からは、「一の谷の合戦」で一番乗りを果たした佐原義連が輩出されている。

■AD997年 「エリク家誕生」「スヴェルケル家誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したヴァイキングとレイフ・エリクソンは、長い時間と労力をかけて故地である日本に到着したものの、トンボ帰りを決意する。エリクソンはヴァイキングと共にスカンジナビアに上陸すると、ヴァイキングは「スヴェルケル」の名を解禁し、レイフ・エリクソンは「エリク家」を築いた。AD1161年、スヴェルケル家のカール1世がスウェーデン王に即位すると、その後はエリク家とスヴェルケル家が仲良く交代で王位に就いた。

■AD1235年 「ジャーン朝誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したイギリス人は、日本から足を伸ばしてきたアフリカに移住した。ジャーンの名の由来は「SON（ソン）」である。ソン＝ション＝ジャーンとなる。ヤグムラサン・イブン・ジャーンが初代君主に即位した。その後、AD1555年にジャーン朝が滅亡すると、ジャーン王家は北アフリカから中央アジア・アストラハンに移り、AD1599年に同じ名前で、新しく「ジャーン朝」を開いている。このジャーン朝は、AD1756年に滅亡している。

■AD1250年 「スヴェルケル家の大航海時代」

■AD1250年 「円谷氏誕生」「渋谷氏誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」に参加したスヴェルケル家は、スカンジナビアを発って西方に向かい、ブリテン島、アイスランド、北アメリカ、マヤを経て太平洋に出た。パルティア人と共に「托跋部」の中核を成していた「ゼブルン族」は、祖を同じくする人々が棲むツバル諸島に赴いた。スヴェルケル家は、意気投合したツバル人を船団に加えて日本に向かった。日本に上陸したツバル人は現地人と混合して「円谷」を形成した。円谷の名の由来はツバル（円）とタネ（谷）の組み合わせである。

■AD1250年 「シュワルツネッカー誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」を続行したスヴェルケル家は黒澤氏を同行させた。その後、黒海に入って中央アジアに上陸したスヴェルケル家は解散したペチェネグ族の残党と合体し、「シュワルツネッカー」を結成した。シュワルツネッカーの名の由来は、スヴェルケルとペチェネグの組み合わせである。スヴェルケル+ペチェネグ=スヴェルチェネグ=シュワルツネッカーとなる。この系統からは俳優アーノルド・シュワルツネッカーが輩出されている。

■AD1250年 「スフォルツァ誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」を続行したスヴェルケル家は、黒澤と共にイタリアの地を踏み、現地人と混合して「スフォルツァ家」を形成した。スフォルツァの名の由来はシュワルツネッカーである。シュワルツネッカー=シュワルツエ=スフォルツァとなる。スフォルツァ家は、ヴィスコンティ家の配下から這い上がり、ミラノ公の地位を得た。

■AD1320年 ジョン・ウィクリフ生誕 「ウィクリフ派誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」を続行したスヴェルケル家は、ゴドジン王国時代の故地、ブリテン島に移住した。現地人と混合して「ウィクリフ」を称した。ウィクリフの名の由来はウイグルである。ウイグル=ウイグルフ=ウィクリフとなる。

■AD1384年 ジョン・ウィクリフ死去 「ロラード運動誕生」

ウィクリフが死ぬと、ウィクリフ派の人々は「ロラード運動」を展開した。ロラードの名の由来は托跋部が宇文部と共に繁栄させた鮮卑を滅ぼした柔然（ローラン）の名に肖っている。ロラードの名の由来はローランの人である。ローラン+ト=ローラント=ロラードとなる。

■AD1535年 「沢辺氏誕生」「沢田氏誕生」「沢中氏誕生」

スフォルツァ家は、ミラノ公位喪失を機に、ミラノを離れて日本に移住した。イタリア人の顔をした彼らは、日本人と混合して「沢辺（スフォ+ペ）」「沢田（スフォ+チェ）」「沢中（スフォ+ネグ）」の名を育んだ。いずれの名もスフォルツァとペチェネグの組み合わせである。

■AD1838年 フェルディナント・フォン・ツェッペリン生誕

ツェッペリンの名の由来はゼブルンである。ゼブルン=ゼップルン=ツェッペリンとなる。

■AD1901年 円谷英二生誕 「円谷プロ誕生」

■AD1947年 アーノルド・シュワルツネッカー生誕

■AD1948年 沢田研二生誕

クウォスの歴史（ヴァナラシ）

◆ヴァナラシ（ウラヌス）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「天空神ウラヌス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、オーストラリアに「ウラヌス」を生んだ。ウラヌスの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルネウス＝ウラヌスとなる。ウラヌスはガイアの息子とされているが、ガイア、ウラヌス、共にアルキュオネウスの分身である。

■30万年前 「事代主神誕生」

ウラヌスは獣人コットスと連合、ギリシアに向かう前にインドから日本に移住した。彼らは、ティアマトの国ヤマトに入植して「事代主神」を祀った。コトシロヌシの名の由来はコットス、ウラヌスの組み合わせである。コットス＋ウラヌス＝コットスラヌス＝コトシロヌシとなる。

■7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■7万年前 「ヴァナラシ誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加しなかったクウォスのウラヌスは、ガンジス流域に入植した。彼らは、ウラヌスと差別化するため、自らを「ヴァナラシ」と呼んだ。ヴァラナシの「ナ」と「ラ」の位置を変えてヴァナラシとしている。

■7万年前 「ブヌン族誕生」

ガンジス流域でカアングと知り合ったヴァナラシは、彼らと共に台湾に入植した。彼らは現地人と混合して「ブヌン」を成した。ブヌンの名の由来はパニとアヌの組み合わせである。パニ＋ア

ヌ＝パニアン＝ブヌンとなる。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「ペルセポネ誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したブヌン族は、ブリテン島南部に入植し、獣人ペルセウスと連合して「ペルセポネ」を生んだ。ペルセポネの名の由来はペルセウスとブヌンの組み合わせである。ペルセウス＋ブヌン＝ペルセブヌン＝ペリセポネとなる。

■ 1万5千年前 「日子番能邇邇芸命誕生」

台湾に入植したエノクは、ピュグマエイと共にインドから来たヴァナラシ族と連合して「日子番能邇邇芸命」を誕生させた。ヒコホノニニギの名の由来はピュグマエイ（コロボックルの祖）、ヴァナラシとエノクの組み合わせである。ピュグマエイ＋ヴァナラシ＋エノク＝ピュグヴァナ＋ネノク＝ヒコホノニニギとなる。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万3千年前 「テミスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「テリピヌ誕生」

「テミスの大航海時代」に参加したペルセポネは、メソポタミアに移住し「テリピヌ」を生んだ。テリピヌの名の由来はデルポイとヴァナラシの組み合わせである。デルポイ＋ヴァナラシ＝デルヴァナ＝テリピヌとなる。テリピヌは、後にアーリア人に参加している。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「至高神アヌ誕生」

「台湾人の大航海時代」「垂仁天皇の大移動時代」に参加したブヌン族はメソポタミアに移住した。この時、彼らは「至高神アヌ」を生んだ。アヌの名の由来はヴァナラシである。ヴァナラシ＝アナラシ＝アヌとなる。アヌは、後にアーリア人に参加している。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万5千5百年前 「ウンマ誕生」

アヌは、ニヤメと組んでメソポタミアにシュメール都市国家「ウンマ」を築いた。ウンマの名の由来はアヌトニヤメの組み合わせである。アヌ＋ニヤメ＝アヌメ＝アンメ＝ウンマとなる。

■ BC 1200年 アヌ族、パニ族と共にアーリア人に参加

ヴァラナシの子孫であるバラーナ族は、祖を同じくするヴァナラシの子孫であるアヌ族、パニ族と共にアーリア人の軍団に参加した。

■ BC 1027年 「十王戦争」

■ BC 1027年 「パルニ人誕生」

「十王戦争」の後、アヌ族、パニ族と共にイランにやって来たバラーナ族は、現地人と混合して「パルニ人」を誕生させた。パルニの名の由来はバラーナである。バラーナ＝バラニ＝パルニとなる。

■ BC 330年 「ペルシア人の大移動時代」

■ BC 330年 「匈奴誕生」

ペルシア帝国が滅亡すると、アヌ族、パニ族はタタール人と共にモンゴルに移住した。アヌ族、パニ族は連合し、羌族と合体し「匈奴（キョンヌ）」を結成した。キョンヌの名の由来は、羌（キャン）とアヌの組み合わせである。キャン+アヌ=キャンヌ（匈奴）となる。

■ A D 1 2 4 年 「奈良誕生」「和珥氏誕生」

匈奴が滅び、アラン人（アーリア人）が西方に移住すると、アヌ族はモンゴルを離れて日本に入植した。アヌ族は、現地人と混合して「和珥氏」を生み、拠点を「奈良」と命名した。奈良、和珥の名の由来はヴァナラシである。ヴァナラシ=ワナラシ=ワニ（和珥）、ヴァナラシ=ナラ=奈良なる。

■ A D 1 2 4 年 「橘氏（前身）誕生」

匈奴が滅び、アラン人（アーリア人）が西方に移住すると、パニ族はモンゴルを離れて日本に入植した。日本に上陸したパニ族は、現地人と混合して「橘氏」を生んだ。橘の名の由来はタタールとヴァナラシの組み合わせである。タタール+ヴァナラシ=タタヴァナ=橘となる。タタールの名を組みあわせたのは、彼らがモンゴルから来た証である。

■ A D 6 世紀 「小野氏誕生」

和珥氏は、春日山山麓に移住し「小野氏」を生んだ。小野の名の由来はアヌである。アヌ=アノ=小野となる。

■ A D 6 0 2 年 小野妹子、遣隋使に参加

小野妹子は、インドシナ半島に移住し「ハリプンチャイ王国」の礎を築く。

■ A D 6 6 1 年 「ハリプンチャイ王国誕生」

インドシナ半島に集った小野妹子（遣唐使）、フラニ族（イスラム教伝来）、趙氏（南越国）は、合同で「ハリプンチャイ王国」を築いた。ハリプンチャイの名の由来はヴァラナシ（フラニ族）、ヴァナラシ（小野氏）、ゼウス（趙氏）の組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ

+ゼウス=ヴァラヴァンゼウ=ハラパンジェウ=ハリプンチャイとなる。ハリプンの部分は、ブルボンの名の由来と同じである。

■AD69?年 橘諸兄生誕 「橘氏誕生」

■AD721年 橘奈良麻呂生誕

■AD782年 橘逸勢生誕

■AD842年 「橘氏の大航海時代」

■AD842年 「ニヨロ帝国誕生」

「承和の変」により、橘逸勢は伊豆に流される途上、三ヶ日辺りで船で逃亡すると、AD713年、律令制により、丹波国が丹後国と但馬国に分割されたのを機に、海外逃亡を考えていた丹波氏はこれに参加した。丹波氏は、橘逸勢の残党と共に日本を後にしてアフリカ大陸に向かった。

一行はナイル河を遡って湖水地方に進出し、「ニヨロ帝国」を建てた。ニヨロは「ブニヨロ」とも呼ばれたが、ヴァナラシが由来である。ヴァナラシ=ヴァニヨロシ=ブニヨロ=ニヨロとなる。また、900年頃にニヨロ帝国に「テンブジ朝」が開かれた。この、テンブジの名の由来は丹波氏である。丹波氏=タンバジ=テンブジとなる。

■AD922年 橘恒平生誕

橘恒平を最後に橘氏の流れは止まるが、橘恒平の残党は「ニヨロ帝国」に向かったものと考えられる。

■AD11世紀 「猪俣氏誕生」

「猪俣氏」の名の由来は、ヴァナラシと小俣の組み合わせである。プラティハーラ朝が減ぶと、

プラティハーラ王家は北インドから日本に移住した。彼らは、マタラム王国を喪失した小俣氏（山田氏）と組んで「猪俣」の名を形成した。ヴァナラシ+小俣=アナ+俣=猪俣となる。猪俣氏は武士団「猪俣党」を結成している。

■ A D 1 3 世紀 「ニョロ帝国の大航海時代」

■ A D 1 3 世紀 「立花氏誕生」

A D 1 2 0 0 年代末期、つまり、チュエジ朝が開かれた頃、ニョロ帝国の橘氏は百地氏の後裔モシ族（マサイ）を率いて湖水地方を離れ、日本に帰還している。アフリカ人の顔をした橘氏は、大友氏に接近し、自身の系統を打ち立てた。この時に誕生したのが「立花氏」の祖、大友貞戴。後の立花貞戴である。肖像画を見ると、立花氏の顔は非常に黒い。これは、彼らがアフリカ人の血を引いていた証だ。一方、マサイ族は、有名な伊賀忍者「百地丹波」を輩出した。忍者の世界に、身体能力が高いアフリカ人の血が導入されると、忍者の世界はにわかに活気付いた。

■ A D 1 3 世紀 「ブルボン家誕生」

A D 1 2 9 2 年、タイに建てられたハリプンチャイ王国が滅ぶと、彼らはインドシナ半島を離れ、ヨーロッパに移住した。彼らは、ヨーロッパに「ブルボン家」を生んだ。ブルボンの名の由来はハリプンチャイの名の由来と同じく、ヴァラナシ（フラニ族）とヴァナラシ（小野氏）の組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ=ヴァラヴァナ=ブルボンとなる。

■ A D 1 4 7 5 年 ミケランジェロ・ブオナローティ生誕

レオナルド・ダ・ビンチと共に「ルネッサンス」の時代を牽引し、彫刻と天井画に多くの傑作を残した。

■ A D 1 5 1 3 年 立花道雪生誕

■ A D 1 5 9 4 年 アンリ 4 世、ブルボン朝初代フランス国王に即位 「ブルボン朝誕生」

ブルボン朝は、聖公会（ポルトガル・クリュニー会）が掌握した大英帝国の侵略軍から世界を救うため、世界に進出し、大英帝国が現れるところに出現した。イロコイ連邦（アメリカ・カナダ）、ベンガル（インド）などで原住民を軍事的に援助した。もともと、ベンガルは先祖の故地ヴァラナシを含んでいるため、特に支援を惜しまなかった。また、彼らはもともとハリプンチャイ王国の子孫で、インドシナ半島の出身のため、インドシナ半島の支配にこだわった。

一方、ブルボン家は、病気がちな男系が続いたことで知られ、近親相姦が原因などという風評に苦しんだ。だが、これはフランス・クリュニー会による優れたブルボン家に対する攻撃であった。これは、ハプスブルグ家でも同様であったが。クリュニー会は、クリュニー会に属する医者に命じ、ブルボン家代々の男系メンバーに一服盛り、弱体化、ゆくゆくはブルボン家の滅亡を謀っていた。

■AD1793年 ルイ16世、処刑 「フランス革命」

タナトスのキリスト教ドミニコ会が指揮したフランス革命により、ルイ16世は理不尽にも処刑された。淘汰されるべきできそこないが、数で圧倒することで優れた者に勝利した瞬間である。できそこないの勝利は、人類にとって、果てしない悲劇である。

■AD1814年 ルイ18世、フランス王に即位 「王政復古」

聖公会、フランス・クリュニー会、ドミニコ会の連合が皇帝ナポレオンを失脚させると、フランス・クリュニー会がルイ18世を即位させ、王政復古を実現した。だがこの時、既にルイ18世に決定権は無く、ハノーヴァ朝と聖公会の関係のように、隠れているクリュニー会のための「顔」を司る役割しかなかった。AD1852年、ナポレオン3世の皇帝即位を機に、ブルボン家は再び王座を去った。ルイ18世は、ヴァナラシの系統と考えられる。

■AD1838年 安田善次郎生誕 「安田財閥誕生」

AD1795年、「フランス革命」を機に、ブルボン家（ヴァナラシ）の残党は中央アジアに赴いてヤジディーと接触した。ブルボン家は、ヤジディーの祖が日本に移住したことを聞くと、彼らも日本への移住を決意した。この時に「安田氏」が生まれた。安田の名の由来はヤジディーである。ヤジディー＝ヤジデ＝安田となる。実質、彼らはブルボン家（ヴァナラシ）の血を引いていた。

■AD1886年 吉田吉造生誕 「ブルボン製菓誕生」

AD1795年、「フランス革命」を機に、ブルボン家（ヴァナラシ）の残党は中央アジアに赴いてヤジディーと接触した。ブルボン家は、ヤジディーの祖が日本に移住したことを聞くと、彼らも日本への移住を決意した。ブルボン家はヤジディーの子孫吉田氏に接触して自身の血統を打ち立てた。この時に、「株式会社ブルボン」の創立者、吉田吉造が誕生した。故地に対する郷愁が、彼を洋菓子作りにまい進させた。

■AD1900年 ルイス・ブニュエル生誕

ブニュエルの名の由来はヴァナラシである。ヴァナラシ＝ヴァニヤエルシ＝ブニュエルとなる。

■AD1933年 ヨーコ・オノ生誕

小野の名の由来はアヌである。アヌ＝アノ＝小野となる。ヴァナラシの子孫であるヨーコ・オノが、ヴァラナシの子孫であるジョン・レノンと出会い、意気投合したのは興味深い出来事である。

ヴィディエの歴史

◆ 道教（ヴィディエ）の歴史

■ 50万年前 「ヴィディエ誕生」

コンゴの海岸に暮らしていたヴィディエは、水生生活から陸上生活にスイッチした。彼らは、ヴェツダ族の容姿をしていた。

■ 50万年前 「クウォスの大移動時代」

■ 50万年前 「ヴェツダ族誕生」

「クウォスの大移動時代」に参加したヴィディエは、スリランカ島に入植して「ヴェツダ族」となった。ヴェツダの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ＝ヴィッディエ＝ヴェツダとなる。

■ 50万年前 「パゼツヘ族誕生」

マレーシアを離れたマニ族は、して「プユマ族」を、ヴィディエと連合して「パゼツヘ族」を築いた。プユマの名の由来はアプスーとイマナの組み合わせであり、パゼツヘの名の由来はアプスーとヴィディエの組み合わせである。アプスー＋イマナ＝アプイマ＝プユマとなり、アプスー＋ヴィディエ＝プスーヴィ＝パゼツヘとなる。

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「グラティオン誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヴィディエは、アグリオス、ウェネと組んで「グラティオン」を生んだ。グラティオンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス＋ヴィディエ＋ウェネ＝グリオディエウエネ＝グラティオンとなる。

■ 45万年前 「クリュテイオス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヴィディエは、アグリオス、クウォスと組んで「クリュテイオス」を生んだ。クリュテイオスの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+クウォス=グリオディエウォス=クリュテイオスとなる。

■ 45万年前 「ヒッポリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヴィディエは、パッラース、クリュテイオスと組んで「ヒッポリュトス」を生んだ。ヒッポリュトスの名の由来はヴィディエ、パッラース、クリュテイオスの組み合わせである。ヴィディエ+パッラース+クリュテイオス=ヴィパッラーテイオス=フィパラテイオス=ヒッポリュトスとなる。

■ 45万年前 「エピアルテース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、「エピアルテース」を生んだ。エピアルテースの名の由来はヒッポリュトスである。ヒッポリュトス=イッポリュトス=イップォリュトス=エピアルテースとなる。

■ 45万年前 「エウリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ウェネと組んで「エウリュトス」を生んだ。エウリュトスの名の由来はウェネ、ヒッポリュトスの組み合わせである。ウェネ+ヒッポリュトス=ウェリュトス=エウリュトスとなる。

■ 45万年前 「エンケラドス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、カアングと組んで「エンケラドス」を生んだ。エンケラドスの名の由来はカアング、ヒッポリュトスの組み合わせである。カアング+ヒッポリュトス=アングリュウトス=エンケラドスとなる。

■ 45万年前 「ポルピュリオン誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したパッラースは、ヒッポリュトス、ウェネと組んで「ポルピュリオン」を生んだ。ポルピュリオンの名の由来はパッラース、ヒッポリュトス、ウェネの組み合わせである。パッラース+ヒッポリュトス+ウェネ=パッラーポリュウェネ=ポルピュリオンとなる。

■ 45万年前 「ポリュポーテース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ヴィディエ、クウォスと組んで「ポリュポーテース」を生んだ。ポリュポーテースの名の由来はヒッポリュトス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。ヒッポリュトス+ヴィディエ+クウォス=ポリュヴィディオス=ポリュポーテースとなる。

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」に参加して中国に移り、更に「獣人の大狩猟時代」に参加してシベリアに移住したチュクウは、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「アドメテー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、メーティスと組んで「アドメテー」を生んだ。アドメテーの名の由来はヴィデエ、メーティスの組み合わせである。ヴィディエ+メーティス=ヴィデメーティ=アドメテーとなる。その後、アドメテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「イアンテー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、ウェネと組んで「イアンテー」を生んだ。イアンテーの名の由来はウェネ、ヴィディエの組み合わせである。ウェネ+ヴィディエ=ウェンディエ=イアンテーとなる。その後、イアンテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「イデュイア誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、「イデュイア」を生んだ。イデュイアの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=イディエ=イデュイアとなる。その後、イデュイアは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「エウドーラー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、トレと組んで「エウドーラー」を生んだ。エウドーラーの名の由来はヴィディエ、トレの組み合わせである。ヴィディエ+トレ=イエトーレ=エウドーラーとなる。その後、エウドーラーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ディオオーネー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、ウラニアーと組んで「ディオオーネー」を生んだ。ディオオーネーの名の由来はヴィディエ、ウラニアーの組み合わせである。ヴィディエ+ウラニアー=ディエニアー=ディオオーネーとなる。その後、ディオ

ーネーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「トエー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、「トエー」を生んだ。トエーの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=ディエー=トエーとなる。その後、トエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ペイトー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、「ペイトー」を生んだ。ペイトーの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=プイティエ=ペイトーとなる。その後、ペイトーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ペトライエー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、ルワと組んで「ペトライエー」を生んだ。ペトライエーの名の由来はヴィディエ、ルワの組み合わせである。ヴィディエ+ルワ=ヴィディルワー=ヴィデルイワー=ペトライエーとなる。その後、ペトライエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「タナトス誕生」

クリュティオスの下層集団には知能が高い個体があり、「できそこないの方が多いんだから、全員で組めばクリュティオスの王族を退けることができる」ということに気づいた。ディオーネーでも同じことが起きていたが、クリュティオスの下層集団はディオーネーの下層集団と連合し、合体部族「タナトス」を生んだ。タナトスの名の由来はディオーネーとクリュティオスの組み合わせである。ディオーネー+クリュティオス=ディオネティオス=タナトスとなる。このタナトスは知能によって淘汰を免れることを覚えたできそこないの集団であり、クリュティオスの王統とは無関係である。

■ 30万年前 「ダオ族誕生」

ディオナーは、マレー半島に「ダオ族」を生んだ。ダオの名の由来はディオナーである。ディオナー=ディオ=ダオとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「パトホラ誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、パッラスと共にフィリピンに入植した。彼らは現地人と混合して「パトホラ」を祀った。パトホラの名の由来はペイトーとパッラスの組み合わせである。ペイトー+パッラス=ペイトパラ=パトハラとなる。パトハラは、フィリピンの創造神として崇拝されている。

■ 7万年前 「タオ族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加して台湾に入植したトエーは、現地人と混合して「タオ族」を築いた。タオの名の由来はトエーである。トエー=トエ=タオとなる。

■ 7万年前 「五十猛命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したイデュイアは、黒海から途中参加したケルケースと共に日本に上陸し、「イタケル」を生んだ。イタケルの名の由来はイデュイアとケルケースの組み合わせである。イデュイア+ケルケース=イデュイアケル=イタケルとなる。

■ 7万年前 「軍神の女神アテナイ誕生」

日本から台湾に移住したイデュイアは、台湾にて、ウラニアーと連合体を組んだ。この時に「アテナイ」が生まれた。アテナイの名の由来はイデュイアとウラニアーの組み合わせである。イデュイニアー=アテナイ=アテナイとなる。その後、アテナイは「オリンポス神族」に参加した。

■ 4 万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4 万年前 「アテナイ王国誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したアテナイは、アラビア半島に入植し、現アデンに「アテナイ王国」を建設した。

■ 4 万年前 「妊婦の守護神ハトホル誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したパトハラは、エジプトに入植した。フィリピン人の顔をしたパトハラは、現地人と混合して「妊婦の守護神ハトホル」を祀った。パトハラ＝パトホル＝ハトホルとなる。

■ 3 万年前 「パイワン族誕生」

ペルーからエノクたちが台湾を訪れると、ヴィディエはエノクと組んで連合体を生んだ。この時に生まれたのが「パイワン族」である。パイワンの名の由来はヴィディエとエノクの組み合わせである。ヴィディエ＋エノク＝ヴィエノ＝パイワンとなる。

■ 3 万年前 「タイヤル族誕生」

ペルーからエラドがエノクたちと共に台湾を訪れると、ヴィディエはエラドと組んで連合体を生んだ。この時に生まれたのが「タイヤル族」である。タイヤルの名の由来はヴィディエとエラドの組み合わせである。ヴィディエ＋エラド＝ティエラ＝タイヤルとなる。

■ BC 30 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ BC 30 世紀 「ランブダ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したヴィディエは、ワルムベと共に古代オリエントに移住し、フェニキア文字のひとつ「ランブダ」を生んだ。ランブダの由来はワルムベとヴィディエの組み

合わせである。ワルムベ+ヴィディエ=ルムディエ=ランブダとなる。

■BC1200年 「カンボジャ人誕生」

「海の民」の時代になり、海の民がヒッタイト人、トロイア人をイランに導くと、ベーシュタード王国が建てられた。この時に同行したフェニキア人、ヴィディエ・ワルムベ（ランブダ）は「カンボジャ人」を生んだ。カンボジャの名の由来はフェニキアとランブダの組み合わせである。フェニキア+ランブダ=キアンブダ=カンボジャとなる。

■BC1200年 フージャン、ベーシュタード王に即位 「フージャン人誕生」

カンボジャ人からは、後に「フージャン人」が輩出されている。フージャンの名の由来はカンボジャである。カンボジャ=カンボジャン=フージャンとなる。フージャンからは、ベーシュタード王に即位するフージャンが輩出されている。

■BC11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「福建誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したフージャン人は福建（フージャン）に根付いた。福建人は「福建王国」を建て、アマゾン由来に「媽祖（マソ）」を祀った。媽祖は航海安全守護神として信奉され、華僑はこの信仰を携えて世界各地に移住している。この系統からは胡錦濤が輩出されている。

■BC329年 「単于誕生」「烏孫誕生」

BC329年に楚の家臣団が分裂すると、キンメリア人の系統の羌族は、黄氏と福建人を率いてモンゴルに帰還した。フージャン人は「単于（ゼンウ）」を称した。単于の名の由来はフージャンをひっくり返したジャンフーである。ジャンフー=ジャンウ=単于となる。一方、一部フージャン人はタリム盆地に赴いて「烏孫（ウースン）」を築いた。

ウースンの名の由来はフージャンである。フージャン=ウーシャン=ウースンとなる。こうして、福建人の系統が単于として匈奴の王位を代々継承した。匈奴は、非常に凶暴な面も持ち合わせ

ていたが、これは人喰い人種タナトスの系統に連なる田氏、或いは人身御供の種族である能登族の血筋の者が匈奴の支配層に深く侵入していたことを示す。

■ B C 3 2 9 年 「張氏誕生」

フージャン人から「張氏（チャン）」が誕生した。チャンの名の由来はフージャンである。フージャン＝フーチャン＝チャンとなる。張氏の系統からは、「太平道」の張角、「三国志」の張飛、張作霖、「青幫」の張嘯林、韓国俳優チャン・ドンゴン、香港女優セシリア・チャンが輩出されている。チャン・ドンゴンとセシリア・チャンは、ホ・ジノ監督の映画「危険な関係」で競演している。

■ A D 年 張角生誕

■ A D 1 6 6 年 「五斗米道誕生」

「党錮の禁」が起きると、タナトスの宦官が後漢を私物化したため、社会は腐敗し、何事も賄賂で決められる事態になった。南匈奴に属していた扶余、道教、張角は、タナトスを皆殺しにするために「太平道（タイピントオ）」「五斗米道（ウートミタオ）」を設立した。太平道の名の由来はヴィディエ（張氏）、ペー、道教（ヴィディエ）の組み合わせであり、五斗米道の名の由来はヴィディエとミン（閔）、ヴィディエの組み合わせである。

ヴィディエ+ペー+ヴィディエ=ディエペーディエ=タイピントオとなり、ヴィディエ+ミン+ヴィディエ=ヴィディミンディエ=ウイテミンタオ=ウートミタオとなる。太平道は「黄巾の乱」を指揮したが、黄巾軍の正体は「南匈奴」であった。また、五斗米道は天師道とも呼ばれた。

■ A D 3 世紀 「シュリーヴィジャヤ誕生」

太平道の残党は、スマトラ島に移住して「シュリーヴィジャヤ王国」を築いた。シュリーヴィジャヤの名の由来はキャラ、ワルムベ、ヴィディエの組み合わせである。キャラ+ワルムベ+ヴィディエ=キャラワヴィディエ=シャラワヴィジエ=シュリーヴィジャヤとなる。

■ A D 3 0 4 年 張軌、初代涼王に即位 「前涼誕生」

■ A D 3 2 4 年 張駿、第 2 代涼王に即位

■ A D 3 6 3 年 張軌、第 3 代涼王に即位

■ A D 6 世紀 「大賀氏誕生」

A D 5 世紀頃、中国仏教が篡奪した新天師道が誕生すると、道教、張氏はこれを嫌ってモンゴルに移住した。この時に「大賀（ダヘ）氏」が生まれた。ダヘの名の由来はヴィディエ（張氏）とヴィディエ（道教）の組み合わせである。ヴィディエ+ヴィディエ=ディエヴィ=デビ=ダヘとなる。大賀氏は、A D 8 世紀まで、王として契丹を統率した。

■ A D 8 6 2 年 「キエフ公国誕生」

リューリクはモンゴル人（柔然/ローラン）であり、スウェード人はインド人（チーティ王国）であり、ルス人はマヤ人（セロス）であり、ワリアギはアラビア人（ナパタ王国）であった。この国際的な連合体は、リューリクを指揮者にスウェード人傭兵の力でノヴゴロドを支配下に置いた。同時に、リューリクは「リューリク朝」を開き、ロシアの建国者となった。ロシア人の母体人種は、は宇宙人（科学の種族トバルカイン）である。

ロシアの名の由来はトゥルシア人の末裔「ルス」である。後にワリアギがキエフを占領し、首都に設定している。キエフの名の由来はキャラとヴィディエの組み合わせである。キャラ+ヴィディエ=キャヴィ=キエフとなる。A D 9 1 3 年にはイーゴリ 1 世が初代キエフ大公に就任して「キエフ大公国」を築いている。

■ A D 1 3 3 6 年 「ヴィジャヤナガル王国誕生」

A D 1 3 7 7 年にシュリーヴィジャヤ朝は滅ぶが、カンボジア人は既にスマトラ島を脱してインドに移住を完了していた。カンボジア人はカンボジア王国の同僚アンコール人と組んで「ヴィジャヤナガル王国」を建てた（本国カンボジアはクメール人の支配下にあった）。カンボジア+アンコール=ボジア+ンコール=ヴィジャヤナガルとなる。

■AD1431年 「カンボジア王国誕生」

AD1334年、マジャパヒト王国の勢力がスマトラ島に及ぶと、シュリーヴィジャヤ王国の中枢を成していたカンボジア人は、インドシナ半島に移住した。この時に「カンボジア王国」が建てられた。カンボジア王国は、AD1953年まで続いた。

■AD1490年 ユースフ・アーディル・シャー、初代王に即位 「ヒジャプール王国誕生」

ヴィジャヤナガルが分裂してカンボジア人が単独で作った国。ヒジャの名の由来はヴィジャヤ（カンボジア）である。

■AD1942年 ロニー・ジェームズ・ディオ生誕

■AD1968年 セリーヌ・ディオ生誕

■AD1972年 チャン・ドンゴン生誕

■AD1980年 セシリア・チャン生誕

◆アダム（アドメテー）の歴史

■30万年前 「アドメテー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、メーティスと組んで「アドメテー」を生んだ。アドメテーの名の由来はヴィデエ、メーティスの組み合わせである。ヴィディエ+メーティス=ヴィデメーティ=アドメテーとなる。その後、アドメテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「海神宮誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加した一部アドメテールは、但馬国に入植し、ティアマトと組んで「海神宮（ワタツミカミノミヤ）」の国を建設した。ワタツミの名の由来はアドメテールとティアマトの組み合わせである。アドメテール+ティアマト=アドティアマ=アトチャマ=ワタツミとなる。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「太陽神アトゥム（アダム）誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したアドメテールは、太平洋、アメリカ大陸を越えて地中海に入った。この時、アドメテールは航海を共にしたアルキュオネウス、エピアルテースと共にエジプトの地に上陸した。ここに、人類の祖「アダム（アトゥム）」が生まれた。アダム、アトゥムの名の由来はいずれもアドメテールである。アドメテール=アドメ=アトゥム=アダムとなる。

■ 7万年前 「スフィンクス建設」

ヘラクレスは、エジプトに「蛇神アトゥム」を祀っていたアダムと連合して「スフィンクス」を建設した。ヒトとコブラを合体させた頭部を持ち、百獣の王ライオンの身体を持つスフィンクスは、「蛇神アトゥム」を祀るアダムと、「太陽神ホルス」を祀る獣人の英雄ヘラクレスの合体を象徴している。後に、巨石の種族となる獣人の英雄たちは、この時に始めて巨石を用いて建築を行った。

■ 4万年前 「オリンポス神族の大航海時代」

■ 4万年前 「南極大陸発見」

「オリンポス神族の大航海時代」に参加したメンバーは、南極大陸を発見した。当時、南極大陸

は現在よりも北方に位置しており、大陸の半分は緑に覆われていた。彼らは南極北部に拠点を築き、そこを拠点に更に冒険を続け、先祖であるガイアの故地オーストラリア大陸（タルタロス）に至る。

■ 4万年前 「デメテル誕生」「アルテミス誕生」

「オリンポス神族の大航海時代」に参加したテミスは、オーストラリアに「デメテル」「アルテミス」を祀った。デメテルの名の由来はテミスとタルタロス、アルテミスの名の由来はエロスとテミスの組み合わせである。テミス+タルタロス=テミタロ=デメテルとなり、エロス+テミス=エロテミス=アルテミスとなる。その後、デメテル、アルテミスはオリンポス神族に参加した。

■ 4万年前 「アトラス誕生」「アトランティス王国誕生」

神話では、アトランティスに上陸したポセイドンは、原住民の娘クレイトオと結ばれている。このクレイトオの名の由来はカリア（ガイアが祀っていた虹蛇）とタルタロスの組み合わせである。カリア+タルタロス=カリアタ=クレイトオとなる。この時に「アトラス」が誕生している。アトラスの名の由来はアドメテーとエロスの組み合わせである。ハタミ+エロス=ハタロス=アトラスとなる。

オリンポス神族は、ニューギニアからオーストラリアに進出していた太平洋の神タネ（タナトス）と連合して「アトランティス王国」を築いた。アトランティスの名の由来はアトラスとタナトスの組み合わせである。アトラス+タナトス=アトラナトス=アトランティスとなる。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「天宇受売命誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したテミス（デメテル、アルテミス）は、一部が台湾に上陸した。彼らは、イマナと連合して「天宇受売」を生んだ。アメノウズメの名の由来はイマナとアドメテーの組み合わせである。イマナ+アドメテー=イマナアゾメテ=アメノウズメとなる。

■ 4万年前 オリンポス神族、クロノスを追放

「アトランティス人の大航海時代」に参加したオリンポス神族は、エジプトで体勢を整え、ギリシアに侵攻し、クロノスを退けた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大移動時代」

■ 1万3千年前 「太陽神ウトゥ誕生」

「ヘリオポリスの大移動時代」に参加してメソポタミアに逃れたアトゥムは、現地人と交わって「太陽神ウトゥ」を生み、神々の集団アヌンナキに参加した。ウトゥの名の由来はアトゥムである。アトゥム＝ウトゥム＝ウトゥとなる。

■ 1万3千年前 「ドルイド教誕生」「ダロッド族誕生」

エジプトから太陽神アトゥム、ブリテン島からテミス（デメテル、アルテミス）が集まり、ドゥムジ、太陽神ウトゥが生まれると、アドメテーの一族が集合し、祖を同じくする人々のための秘密結社「ドルイド教」が築かれた。ドルイドの名の由来はデメテルとアドメテーの組み合わせである。デメテル＋アドメテー＝テルアド＝ドルイドとなる。彼らが、ドルイド教を結成したのは「ダロッド族」の名前からして、ソマリアだと考えられる。

■ BC 5千年 「第1次北極海ルート」

■ BC 5千年 「イズマ族誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したアドメテーは、ペチョラ河に残留した。彼らは、現地のモンゴロイドと交わって「イズマ族」を形成した。アダム＝アザム＝イズマとなる。

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「卑南文化誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したアドメターは、台湾に辿り着いた。アドメターは、巨石の種族の仕事を真似し、台湾に巨大なメンヒルを残した。彼らが残した遺物は、後世になって「卑南文化」と呼ばれた。

■BC32世紀 「安曇氏誕生」「出雲国誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したアドメターは、日本に上陸した。アドメターは「安曇氏」を生み、拠点に「出雲」と命名した。安曇、出雲の名の由来はアドメターである。アドメター＝アゾメター＝安曇＝出雲となる。イスラエル王国時代、出雲国は「エドム」と呼ばれた。エドムの名の由来はアドメターである。アドメター＝アドメ＝エドムとなる。BC1500年にヒクソスの子孫能登族がこの地を訪れるまで、出雲国は、賀茂氏、加賀氏、因幡氏、安曇氏によって守られ、国家として繁栄した。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ウラルトゥ誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加してモンゴルに移住し、その後「ヨシュアの大移動時代」に参加した安曇氏は、エルリクと共にコーカサスに移住した（エルリクはシベリアから参加した）。彼らは連合して「ウラルトゥ」を築いた。ウラルトゥの名の由来はエルリクとウトウの組み合わせである。エルリク＋ウトウ＝エルリトゥ＝ウラルトゥとなる。

■BC1700年 「エトルリア人誕生」

ミディアン人（司神タナトス）がウラルトゥに侵入し、ウラルトゥ人をインチキ宗教の信者とし

て篡奪すると、メソポタミアに「ミタンニ王国」を建てた。その後、ミタンニ人は、ウラルトゥ人を率いてアラビア半島に侵攻し、アテーナイ王国に君臨した。その後、ミディアン人は、ウラルトゥ人を指揮して隣国のマガン王国（ローマ王国）に侵攻させ、ロムルスとサビニ人の王統と対立した。

この時、ウラルトゥ人は「エトルリア人」と呼ばれた。エトルリアの名の由来はウラルトゥの同じで、ウトゥとエルリクの組み合わせである。ウトゥ+エルリク=ウトゥルリ=エトルリアとなる。

■BC1270年 「エトルリア王国誕生」

ミタンニ王国（アテーナイ王国）が滅ぶと、司神タナトスから解放されたエトルリア人は、アラビア半島を発ち、マガン人（ローマ人、ミケーネ人とも呼ぶ）、サビニ人、ラテン人と共にイタリア半島に上陸した。エトルリア人はイタリアに「エトルリア王国」を築いた。

■BC509年 「エドム王国誕生」

共和制ローマが台頭すると、エトルリア人はイスラエルに移住した。この時に「エドム王国」が生まれた。エドムの名の由来はアドメテーである。アドメテー=アドメ=エドムとなる。

■BC248年 「出雲国の大航海時代」

■BC248年 「オットマン誕生」

更に、安曇氏、甲斐氏の両者は、後に登場する「オグズ24氏族」に参加することになる。その時、安曇氏は「オットマン」を称した。オットマンの名の由来はエドムである。エドム=エドムン=オットマンとなる。オットマンといえば「オスマン・トルコ帝国」の創始者である。ただ、彼らはウイグル人（ハナフィー派）によって支配下に置かれていた。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「オトミ人誕生」

一行は、太平洋を越えてマヤに辿り着いた。マヤに残留を申し出たのは、慕容部、乞伏部、安曇氏であった。日本人の顔をした安曇氏はマヤ人と混合して「オトミ」を称し、慕容部はカウィール家と結んで「カラクムル王国」を建てた。更に、乞伏部がカラクムルと連合して「カーン王朝」を開いた。カーンの名の由来はキンブリ、或いはガンダーラである。オトミの名の由来はオットマンであり、カラクムルの名の由来はカウィールと賀茂氏の祖ゴメルの組み合わせである。カウィール+ゴメル=カーラゴメル=カラクムルとなる。

■AD929年 「江戸氏誕生」

AD929年にマタラム王国が滅亡すると、ジャワの安曇氏は、インドのカーマルーパ人（賀茂氏）、ジャワ人（王氏）、山田氏、葛城氏と共に日本に帰還した。ジャワ島を出た彼らは、房総半島に上陸すると、その地を「鴨川」と命名した。鴨川の名の由来は「賀茂の川」である。ジャワ人の顔をした安曇氏は秩父重綱に接近して自身の血統を打ち立てる。この時に「江戸氏」の祖、江戸重継が誕生した。江戸の名の由来は安曇氏の大祖エドムである。

■AD1953年 江戸アケミ生誕 「じゃがたら誕生」

◆ユダ（エウドローラー）の歴史

■30万年前 「エウドローラー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、トレと組んで「エウドローラー」を生んだ。エウドローラーの名の由来はヴィディエ、トレの組み合わせである。ヴィディエ+トレ=イエトーレ=エウドローラーとなる。その後、エウドローラーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「ブカット族誕生」「ベカタン族誕生」

「大洋の娘たちの大移動時代」を介してオケアーニスがインドネシア海域に到来すると、ピュグマエイはエウドローラーと意気投合し、連合した。この時に「ブカット族」「ベカタン族」がイン

ドネシアに生まれた。ブカットの名の由来はピュグマエイとエウドーラーの組み合わせであり、ベカタンの名の由来はブカットである。ピュグマエイ+エウドーラー=ピュグウドー=ブカットとなり、ブカット=ブカタン=ベカタンとなる。このブカットの名は「ピクト」の語源でもある。ブカット族、ベカタン族の容貌は、金髪・碧眼・白人（オケアーニス）とピグミー族（小人族）との混血だったと考えられる。

■ 30万年前 「オト族誕生」「ウエダ族誕生」「トル族誕生」

エウドーラーは、単身マレー半島に入植し「オト族」「ウエダ族」を、パプアに「トル族」を生んだ。オト、ウエダ、トルの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=エウド=エウト=オト、エウドーラー=ウエドラー=ウエダ、エウドーラー=エウトラ=トラ=トルとなる。

■ 30万年前 「アテ誕生」

更に、オーストラリアでは、反自然の種族に属する「アテ（破滅）」が生まれた。アテの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=エウト=エト=アテとなる。しかし、ニクスやタナトスを嫌ったアテは、その後、独自の道を歩んでいる。

■ 7万年前 「天火明命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者たちが台湾に上陸すると、エウドーラーは、カリユプソーと共にイマナと連合体を組んだ。この時に「天火明」が生まれた。アメノホアカリの名の由来はイマナ、エウドーラー、カリユプソーの組み合わせである。イマナ+エウドーラー+カリユプソー=イマナエウカリユ=アメノホアカリとなる。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「常世国誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したチュクチ族（ステュクス）は、ウエダ族（エウドーラー）と共に現ユタ州に入植した。彼らは「常世国（とこよのくに）」を築いた。常世（とこよ）の名の由来はステュクス、エウドーラーの組み合わせである。ステュクス+エウドーラー

=テュクエウ=常世（とこよ）となる。

■ 7万年前 「ユタ族誕生」

現ユタ州に「常世国」を築いたエウドーラーは、単身、「ユタ族」を生んだ。ユタの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=エウド=エウト=ユタとなる。ただ、この当時はまだモンゴロイドがアメリカ大陸に足を踏み入れていなかった。

■ B C 1 9 世紀 「海の民の大航海時代」

■ B C 1 9 世紀 「ユダ族誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したユタ族は、北アメリカを離れてイスラエルに入植した。彼らは、現地人と混合し「ユダ族」を称した。ユダの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=エウド=ユダとなる。

■ B C 7 世紀 「クシュ人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「チェーディ誕生」

「クシュ人の大航海時代」に参加したユダ族は、インド人と混合し、「チェーディ王国」をインドに建設した。チェーディの名の由来はユダ（J U D A）である。ユダ=ジューダ=チェーティとなる。

■ B C 3 世紀 「ガスコン人の大航海時代」

■ B C 3 世紀 「ジュート人誕生」

「ガスコン人の大航海時代」に参加したチェーディ人は、ゲルマニアに入植すると、白人と混合して「ジュート人」を形成した。ジュートの名の由来はチェーディである。チェーディ=チェー

ト=ジュートとなる。

■ A D 5 世紀 「ケント王国誕生」

ジュート人はブリテン島に渡ると、カンタブリア人（ブリギンテ族）と組んで「ケント王国」を建設した。ケントの名の由来はカンタブリアである。カンタブリア=ケントブリア=ケントとなる。

■ A D 6 世紀 「ペクサエテ王国誕生」

ケント王国が滅ぶと、ジュート人はケント人と袂を分かち、ウェールズに移住した。ジュート人は、ウェールズで「大和人の大航海時代」の残党と連合した。百済人と組んで「ペクサエテ王国」を築いた。ペクサエテの名の由来は百済とジュートの組み合わせである。ペクチェ（百済）+ジュート=ペクシウト=ペクサエテとなる。

■ A D 6 世紀 「ウレオチェンサエテ王国誕生」

ケント王国が滅ぶと、ジュート人はケント人と袂を分かち、ウェールズに移住した。ジュート人は、ウェールズで「大和人の大航海時代」の残党と連合した。アーリア人、陳氏と組んで「ウレオチェンサエテ王国」を築いた。アーリア+チェン+ジュート=アリアチェンジウト=ウレオチェンサエテとなる。

■ A D 6 2 8 年 「ヨハネスの大航海時代」

■ A D 6 5 6 年 「マゴンサエテ王国誕生」

ケント王国が滅ぶと、ジュート人はケント人と袂を分かち、ウェールズに移住した。ジュート人は、ウェールズで「大和人の大航海時代」の残党と連合した。天孫族（マゴ）と組んで「マゴンサエテ王国」を築いた。モーガン+ジュート=モガンシウト=マゴンサエテとなる。

■ A D 8 1 9 年 「ジャード朝誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したジュート人は、ハワイの発見、日本を越えてアラビア半島に上陸した。ジュート人は「ジャード」を称した。ジャードの名の由来はジュートである。ジュート＝ジュード＝ジャードとなる。AD819年、ムハンマド・イブン・ジャードが初代王に即位して「ジャード朝」を開いている。

■AD7世紀 「穢多誕生」

鬼（黒人ダン族）は、ニューギニア島にも立ち寄り、「アテ（破滅）」を日本に誘っている。アテは、鬼と共に奈良時代の日本に上陸した。メラネシア人の顔をした彼らは、日本人と混合し、そのまま「アテ」を名乗っていた。その後、年月を重ねて変遷が加えられ、「アテ」は「穢多（えた）」となった。

戦国時代、アステカ帰りの大谷は、太平洋に四散していたタナトスの兄弟（ニユクスの子、エリスの子）を忠実な僕して日本に連れ帰ってきた。だが、この時に先発隊の穢多（アテ）が彼らと対立した。その後、大谷が支配する日本仏教が家康を操作して日本列島を掌握すると、大谷（西本願寺）は自分たちに与しない穢多を非人として差別の対象に設定した。

■AD1094年 「西郷氏誕生」「東郷氏誕生」

AD1018年、ジャード朝が滅ぶと、アラビア人の顔をしたジャード人は、アラビア半島からジンバブエに移り住んだ。その後、AD1094年にマゴンサエテ王国の人々がカペー家と共にジンバブエに到達すると、ジャード人とマゴンサエテのジュート人は、共に日本に移住した。相模国に上陸したジャード家は、渋谷重国に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが、「東郷氏」の祖、東郷実重である。東郷の名の由来は「東周りのジャード」である。ジャード人の後裔としては、東郷平八郎が有名である。

西方のイングランドから来たジュート人（マゴンサエテ）は「西郷氏」を称し、東方のハワイから来たジャード人は「東郷氏」を称したジュート人は「ジュート」に「さと（郷）」を当て字し、西回りのジュート人（マゴンサエテ）は西郷を、東回りのジュート人（ジャード朝）は東郷を称した次第である。

■AD1337年 「大里王統誕生」

西郷氏が沖縄の西側、南山王国を支配した。初代王の「察度」、そして大里の「里」はジュートが由来である。AD1405年に大里王統が滅ぶと、西郷氏は薩摩国に帰還している。AD1

50?年には、琉球帰還組から西郷正勝が誕生している。

■AD1350年 「察度王統誕生」

東のジャードを意味する東郷氏は沖縄の東側、つまり中山王国を支配した。「承察度」の名の由来はジャードである。AD1429年に察度王統が滅ぶと、東郷氏は日本に帰還している。AD1561年には、琉球帰還組から東郷重位が誕生している。

■AD1485年 ヘンリー・チューダー、初代王に即位 「チューダー朝誕生」

ウレオチェンサエテのジュート人は「チューダー家」の祖となる。チューダーの名の由来はジュートである。ジュート=チュートー=チューダーとなる。AD1485年、ヘンリー・チューダーがヨーク朝を倒して「チューダー朝」を開いている。

■AD1491年 ヘンリー8世生誕

ヘンリー8世は、アン・ブーリンを刑死させたり、「聖公会」を生んだトマス・クロムウェルを処刑している。

■AD150?年 西郷正勝生誕

AD1405年に大里王統が滅ぶと、西郷氏は薩摩国に帰還している。AD150?年には、琉球帰還組から西郷正勝が誕生している。

■AD1561年 東郷重位生誕

AD1429年に察度王統が滅ぶと、東郷氏は日本に帰還している。AD1561年には、琉球帰還組から東郷重位が誕生している。

■AD1603年 「サウード家誕生」

スチュアート朝が成立すると、チューダー家はブリテン島を脱出して遠くアラビア半島に足を伸ばした。イギリス人の顔をしたチューダー家はアラブ人と混合して「サ우드家」を形成した。サウードの名の由来はチューダーである。チューダー＝チューダ＝シウーダ＝サ우드となる。その後、彼らはアナイザ族に参加してディルイーヤを支配した。

■AD1744年 ムハンマド・イブン＝サ우드、初代王に即位 「第1次サ우드王国誕生」

AD1744年、ムハンマド・イブン＝サ우드がワッハーブ派と連合して「第一次サ우드王国」を建国した。

■AD1828年 西郷隆盛生誕

■AD1848年 東郷平八郎生誕

■AD1871年 出口王仁三郎（上田喜三郎）生誕 「皇道大本誕生」

上田の名の由来はエウドーラーである。そして出口なおの名「出口」の由来はステュクスである。ステュクスはエウドーラーと共に、7万年前の「第2次アルゴス号の大航海時代」の際、連合していた。彼らは、現ユタに「常世国」を建設している。その古代から続く絆が、「大本教」の核を成している。これは、祖を同じくする家族の血が成せる業である。個人の記憶は脳に蓄えられるが、民族、種の記憶は体、遺伝子に刻まれている。

■AD1877年 「西南戦争」

西郷隆盛は、浄土真宗を弾圧していた島津氏（スミス）とはイギリス時代の同志である。大谷家（タナトス）は、聖公会（クロノス）が支配する大英帝国と組み、邪魔な薩摩藩を攻略しようと試みる。タナトスの一族が多い長州藩を薩摩藩に接近させ、同盟を組ませた。滅ぼすために動向を探り、動向を探るために同盟を組んだのだ。薩摩藩が滅んだ時点で、日本はタナトスの国となった。

■AD1932年 「サウジアラビア王国誕生」

AD1824年に「第二次サウード王国」を建てている。AD1932年、リヤドをラシード家から奪還し、ナジュドに「サウジアラビア王国」を建国している。

■AD1964年 「西パプア国独立闘争組織誕生」

穢多やニユクスの子、エリスの子がニューギニア島に帰還し、西パプア独立運動を指揮した。独立運動に関わった人々の名は日本語の名残りが見受けられる。カイセポ（飼いせば）、ジョウエ（女王）、ウオムシウォル（青虫おる）、ジョク（邪気）、マンダチャン（まんだしゃん）、メイドガ（毎度か）、ワンマ（あんま）、ミリノ（いみりの）、ワルサ（悪さ）、インディ（いで）、アジャミセバ（味見せば）、ペケイ（破壊）、プライ（無頼）、ワダンボ（わだんぼ）、テゲイ（てーげー）、ワインガイ（わいんかい）などである。以上、標準語もあるが、下北半島、名古屋、関西地方、静岡、徳島、岩手、甲州、沖縄、宮崎、北海道などの方言に因んだ名前が多く見受けられる。

また、パプアの独立運動家には、アンダマン諸島のジャラワ族（黒人ダン族）やミャンマー、アフリカを経て帰ってきたトンガ人（タンナ人）なども混在している。アンダマン諸島の名に因んだ「ヒンドム」はスウェーデンに拠点を設け、ミャンマー、アフリカを経たタンナ人は「タンガフマ」を称して、セネガルに拠点を設けている。アンダマン＝ハンダマ＝ヒンドムとなり、トンガ（リンポポ流域）＋バマー（ビルマ）＝トンガバマ＝タンガフマとなる。

AD1973年、ヤコブ・プライは「西パプア共和国暫定政府」を宣言し、AD1988年にはトーマス・ワインガイが「西メラネシア国」の独立を宣言している。穢多の子孫は非常に活発に活動しているが、インドネシア共和国に君臨している華僑が彼らの独立を許さない。一部の華僑にはダニ族の血が流れている。つまり、ニューギニア島は「ダニ族の血を引く華僑のものだ」という考えがあるのだ。ダニ族の血を引く華僑も、もともとは大谷に誘われてアステカ帝国に渡った人々の子孫である。つまり、華僑VS西パプアの構図は、故地に帰還した、祖を同じくする人々による、故地を巡る抗争と捉えることができる。因みに、トーマス・ワインガイは日本人女性の妻を娶っている。これは彼の先祖が日本にいた証拠だ。

◆ユダヤ（イデユイア）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「イデュイア誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、「イデュイア」を生んだ。イデュイアの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=イディエ=イデュイアとなる。その後、イデュイアは大洋の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「軍神の女神アテナイ誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したウラニアーは、台湾にてイデュイアと共に連合体を組んだ。この時に「アテナイ」が生まれた。アテナイの名の由来はイデュイアとウラニアーの組み合わせである。イデュイニアー=アテニアー=アテナイとなる。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「アテナイ王国誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したアテナイは、アラビア半島に上陸してアデンに入植した。アテナイはアデンをアテナイ王国として繁栄させ、アラビア半島に大きな国家を築いた。

■ 4万年前 アテナイ、海神ポセイドンと対立

アトランティス王国のタナトスはアテナイ王国征服のため、オーストラリアを発ってアラビア半島に侵攻した。このとき、卑怯なタナトスは食料の供給を絶つために、ギリシア人の農作地に大量の枯葉剤を撒き、土地を荒廃させた。しかし、アテナイは残された土地にオリーブを植え、タナトスの思惑を退けた。

■ 2万年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 2万年前 「五岳神誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したヴィディエは、「五岳神（ウーユエ）」を生んだ。ウーユエとは、南極大陸にあった科学の種族の国の名である。ウーユエの名の由来はチュクウとヴィディエの組み合わせである。チュクウ+ヴィディエ=ウイエ=ウーユエとなる。五岳と呼ばれた伝説的な山は、中国にあるとされているが、実際には南極大陸にあった。

「南岳衡山」はカークパトリック山（4528m）とマークハム山（4350m）のことであり、「西岳華山」はシドリー山（4187m）のことであり、「北岳恒山」はプラトー山（4191m）のことである。

■ 2万年前 「東岳泰山誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したヴィディエは、科学の種族の土地、南極大陸に降り立った。ヴィディエは「泰山（タイシャン）」を築いた。タイの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=ティエ=タイ（泰山）となる。泰山は中国にあるとされているが、実際には、南極大陸に立つペンサコラ山（3680m）が泰山である。

■ 2万年前 「羅侯山の大航海時代」

■ 2万年前 「ホウ都大帝誕生」「太乙救苦天尊誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、冥府神「ホウ都大帝（フェンドウ）」「太乙救苦天尊（タイイジユクウ）」を生んだ。フェンドウの名の由来はルハンガとヴィディエの組み合わせであり、タイイジユクウの名の由来はヴィディエとチュクウの組み合わせである。ルハンガ+ヴィディエ=ハンディエ=フェンドウとなり、ヴィディエ+チュクウ=ディエチュクウ=タイイジユクウとなる。

■ 2万年前 「宋帝王誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「宋帝王（ソندیワン）」を生んだ。ソندیの名の由来はジェンギとヴィディエの組み合わせである。

ジェンギ+ヴィディエ=シャンディ=ソンディ（宋帝王）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「太山王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「太山王（タイシャン）」を生んだ。タイシャンの名の由来はヴィディエとジェンギの組み合わせである。ヴィディエ+ジェンギ=ディエジェン=タイシャン（太山）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「都市王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「都市王（ドゥシ）」を生んだ。ドゥシの名の由来はヴィディエとクウォスの組み合わせである。ヴィディエ+クウォス=ディエス=ドゥシ（都市）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「五道転輪王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「五道転輪王（ウータオツァンルン）」を生んだ。ウータオツァンルンの名の由来はヴィディエ、ジェンギ、オロルンの組み合わせである。ヴィディエ+ジェンギ+オロルン=ヴィディエジェンルン=ウータオツァンルン（五道転輪）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 1 万 3 千年前 「大地殻変動」

■ B C 5 千年 「岱輿山誕生」

火星から帰還したヴィディエは、仙人が住む神山のひとつ「岱輿（ダイユ）」を伊勢半島に築いた。ダイユの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=ヴィダイユ=ダイユ（岱輿）となる。

■BC5千年 「伊勢国誕生」「神道誕生」

スバル人は、セネガル人と共に伊勢半島に住む「岱輿」の元を訪れた。両者は意気投合して「伊勢国」を築き、「神道」を生んだ。伊勢の名の由来はイデュイアとカゾオバの組み合わせであり、神道の名の由来はンジニとイデュイアの組み合わせである。イデュイア+カゾオバ=ユイアゾオ=イザヤ=伊勢となり、ンジニ+イデュイア=ジニデュイア=神道（しんとう）となる。

■BC35世紀 「老子誕生」「道教誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したアグリオスは、日本に到着すると、伊勢国で「神道」を築いたイデュイアと連合し、夏時代の中国に移住した。イデュイアの神道は中国で「道教」と呼ばれ、アグリオスは「老子」と呼ばれた。老子（ラオツィ）の名の由来はアグリオスである。アグリオス=リオス=ラオツィ（老子）となる。

■BC35世紀 「遼東半島誕生」

「春秋戦国時代」が始まると、老子の子孫は、現遼東半島を訪れ、当地を初めて「遼東半島」と命名した。遼東（リャオドン）の名の由来はアグリオスとディオオーネーの組み合わせである。アグリオス+ディオオーネー=リオディオネ=リャオドン（遼東）となる。

■BC1027年 「アテネ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、イシン人がギリシアに来訪、その後、「マハーバーラタ戦争」によってアラビア半島が核兵器で消滅すると、アテナイ人、アデン人（ピュトン）が古代ギリシアに入植し、イシン人と共に都市国家「アテネ」を築いた。アテネの名の由来はアテーナイである。アテネ人は、スパルタ人と共に好戦的な人々であり、常に戦争に明け暮れていた。「第一次神聖戦争」「サラミスの海戦」「第一次ペロポネソス戦争」「第二次神聖戦争」「第二次ペロポネソス戦争」「シチリア戦争」「コリントス戦争」「同盟市戦争」「クレモニデス戦争」など、ほとんど常に戦闘を繰り返していた。BC267年、マケドニア人の台頭により、アテネ人はギリシアを離れることを決意した。

■BC226年 「ユーロー（前身）誕生」

BC226年、遼東半島を治めていた燕が滅亡すると、道教の種族、ペー族は満州に移った。アグリオスは、イデュイアと組んで「ユーロー」を生んだ。ユーローの名の由来はイデュイアとアグリオスの組み合わせである。イデュイア+アグリオス=ユイアリオ=ユーローとなる。

■BC2??年 「タイ族誕生」

匈奴に参加しなかったユーローは、インドシナ半島に移住して「タイ族」となり、老子（アグリオス）は「ラーオ族」となった。両者は、「ムアン・ギャオ」に移住した。タイの名の由来はタオ（道）である。タオ=タウ=タイとなる。彼らは、「タイ・ルー族」などと呼ばれた。ギャオの名の由来はチュクウである。

■BC215年 「ムアン・ペーガイ誕生」

秦の侵攻により、ムアン・ギャオを離れたタイ族は、雲南に移住して「ムアン・ペーガイ」を築いた。ペーガイの名の由来はヴィディエとチュクウの組み合わせである。ヴィディエ+チュクウ=ヴィクウ=ブイークウ=ペーガイとなる。

■BC87年 タイ族、モンゴルに帰還

BC87年、ムアン・ペーガイ国王クンメンが、漢の通行を許可しなかったため、武帝の攻撃により、ムアン・ペーガイは滅んだ。その後、タイ族はモンゴルに帰還した。

■AD45年 「南匈奴誕生」

タイ族（道教）、扶余は、匈奴に参加した。この時に、匈奴は「北匈奴」と「南匈奴」に分裂した。ペー族の連合体は「南匈奴」に身を寄せていた。

■AD166年 「太平道誕生」

「党錮の禁」が起きると、タナトスの宦官が後漢を私物化したため、社会は腐敗し、何事も賄賂

で決められる事態になった。南匈奴に属していた扶余、道教、張角は、タナトスを皆殺しにするために「太平道（タイピントオ）」「五斗米道（ウートミタオ）」を設立した。太平道の名の由来はヴィディエ（張氏）、ペー、道教（ヴィディエ）の組み合わせであり、五斗米道の名の由来はヴィディエとミン（閔）、ヴィディエの組み合わせである。

ヴィディエ+ペー+ヴィディエ=ディエペーディエ=タイピントオとなり、ヴィディエ+ミン+ヴィディエ=ヴィディミンディエ=ウイテミンタオ=ウートミタオとなる。太平道は「黄巾の乱」を指揮したが、黄巾軍の正体は「南匈奴」であった。また、五斗米道は天師道とも呼ばれた。

■AD450年 「ラヴォ王国誕生」

太平道が天師道に吸収されると、太平道（アグリオス、ヴィディエ）はインドシナ半島に移住し、「ラヴォ王国」を建設した。ラヴォの名の由来はアグリオスとヴィディエの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ=リオヴィ=ロヴィ=ラヴァとなる。ラヴァ王国はAD1388年まで続いている。

■AD6世紀 「ドヴァーラヴァティー王国誕生」

朴氏は、新羅時代の同盟者である昔氏と共にインドシナ半島に「ドヴァーラヴァティー王国」を築いた。ドヴァーラヴァティーの名の由来はトバルカイン（朴氏）とヴィディエ（昔氏）の組み合わせである。トバルカイン+ヴィディエ=トバルヴィディ=トバルヴィディ=ドヴァーラヴァティーとなる。この王朝は、AD11世紀まで続いた。

■AD6世紀 「大賀氏誕生」

AD5世紀頃、中国仏教が篡奪した新天師道が誕生すると、道教、張氏はこれを嫌ってモンゴルに移住した。この時に「大賀（ダヘ）氏」が生まれた。ダヘの名の由来はヴィディエ（張氏）とヴィディエ（道教）の組み合わせである。ヴィディエ+ヴィディエ=ディエヴィ=デビ=ダヘとなる。大賀氏は、AD8世紀まで、王として契丹を統率した。

■AD653年 細奴選、南詔王に即位 「南詔誕生」

ラヴォ王国のヴィディエは、雲南に移住し「細氏（テ）」を生んだ。細（テ）の名の由来はヴ

ィディエである。ヴィディエ=ディエ=テとなる。細奴選は、南詔の前身「蒙舍詔」の初代王となった。

■AD779年 異牟尋、第3代南詔王に即位

ラヴォ王国のヴィディエは、雲南に「異氏（ティ）」を生んだ。ティの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=ディエ=ティとなる。異牟尋は、第3代南詔王に即位した。

■AD859年 世隆、第8代南詔王に即位

ラヴォ王国のヴィディエは、雲南に「世氏（テー）」を生んだ。テーの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=ディエ=テーとなる。世隆は、第8代南詔王に即位し、「大礼皇帝」と呼ばれた。

■AD862年 「キエフ公国誕生」

リューリクはモンゴル人（柔然/ローラン）であり、スウェード人はインド人（チエーティ王国）であり、ルス人はマヤ人（セロス）であり、ワリアギはアラビア人（ナパタ王国）であった。この国際的な連合体は、リューリクを指揮者にスウェード人傭兵の力でノヴゴロドを支配下に置いた。同時に、リューリクは「リューリク朝」を開き、ロシアの建国者となった。ロシア人の母体人種は、は宇宙人（科学の種族トバルカイン）である。

ロシアの名の由来はトゥルシア人の末裔「ルス」である。後にワリアギがキエフを占領し、首都に設定している。キエフの名の由来はキャラとヴィディエの組み合わせである。キャラ+ヴィディエ=キャヴィ=キエフとなる。AD913年にはイーゴリ1世が初代キエフ大公に就任して「キエフ大公国」を築いている。

■AD1180年 「シップソーンパンナー王国誕生」

AD1124年、西遼（カラキタイ）が建つと、モンゴルを離れたタイ・ルー族は現タイに帰還し、シップソーンパンナー王国などのタイ王国の建設に参加した。

■AD1963年 板尾創路生誕

板尾の名の由来はヴィディエと考えられる。ヴィディエ＝イテア＝板尾となる。AD1796年、スリランカがイギリス統治下に落ちると、ヴェッタ族はスリランカを離れて江戸時代の日本に入植した。つまり、板尾の名はインド生まれである。松本（ホン族）の名もインド生まれで、浜田（バマー族）の名はミャンマー生まれである。先祖が同郷の土だと気が合い、良いモノが作れるという見本だ。

ヴィディエの歴史（ヒッポリュトス）

◆ヘブライ（ヒッポリュトス）の歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「ヒッポリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヴィディエは、パッラース、クリュテイオスと組んで「ヒッポリュトス」を生んだ。ヒッポリュトスの名の由来はヴィディエ、パッラース、クリュテイオスの組み合わせである。ヴィディエ+パッラース+クリュテイオス=ヴィパッラーテイオス=フィパラテイオス=ヒッポリュトスとなる。

■45万年前 「ポリュポーテース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ヴィディエ、クウォスと組んで「ポリュポーテース」を生んだ。ポリュポーテースの名の由来はヒッポリュトス、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。ヒッポリュトス+ヴィディエ+クウォス=ポリュヴィディオス=ポリュポーテースとなる。

■45万年前 「エウリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ウェネと組んで「エウリュトス」を生んだ。エウリュトスの名の由来はウェネ、ヒッポリュトスの組み合わせである。ウェネ+ヒッポリュトス=ウェリュトス=エウリュトスとなる。

■45万年前 「エンケラドス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、カアングと組んで「エンケラドス」を生んだ。エンケラドスの名の由来はカアング、ヒッポリュトスの組み合わせである。カアング+ヒッポリュトス=アングリュトス=エンケラドスとなる。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「ビーヴァー族誕生」「フーパ族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したヒッポリュトスは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）、現カリフォルニアに居を構えた。ヒッポリュトスは「ビーヴァー族」「フーパ族」を生んだ。ビーヴァー、フーパの名の由来はヒッポリュトスである。ヒッポリュトス＝ヒヴォリュトス＝ビーヴァーとなり、ヒッポリュトス＝ヒーポリュトス＝フーパとなる。

■ 40万年前 「ハイダ族誕生」「イパイ族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したポリュポーターズは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、亜北極圏（アラスカ～カナダ北部）、現カリフォルニアに居を構えた。ポリュポーターズは「ハイダ族」「イパイ族」を生んだ。ハイダ、イパイの名の由来はポリュポーターズである。ポリュポーターズ＝ポーター＝ハイダとなり、ポリュポーターズ＝ポリポイテース＝イパイとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「パルテニオス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、アルキュオネウスと組んで「パルテニオス」を生んだ。パルテニオスの名の由来はヒッポリュトスとアルキュオネウスの組み合わせである。ヒッポリュトス+アルキュオネウス=ポリュトネウス=パルテニオスとなる。その後、パルテニオスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「プルトー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、「プルトー」を生んだ。プルトーの名の由来はヒッポリュトスである。ヒッポリュトス=ポリュト=プルトーとなる。その後、プルトーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ポリュドーラー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、エウドーラーと組んで「ポリュドーラー」を生んだ。ポリュドーラーの名の由来はヒッポリュトスとエウドーラーの組み合わせである。ヒッポリュトス+エウドーラー=ポリュドーラーとなる。その後、ポリュドーラーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「大洋の娘たちの大移動時代」

■ 30万年前 「ペロポネソス誕生」

「大洋の娘たちの大移動時代」に参加したポリュドーラーは、ペロポネソス半島に入植し、ペネイオス、レスと連合し、初めて「ペロポネソス」と命名した。ポリュドーラー+ペネイオス+レス=ポリュペネイソス=ペロポネソスとなる。

■ 30万年前 「タナイス川誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加しなかったパルテニオスは、紅海から黒海に移住し、黒海に流れ込む河川を「タナイス川」と命名した。タナイスの名の由来はパルテニオスである。パルテニオス＝パルタナイス＝タナイスとなる。タナイスとは、ドナウ川の古名である。

■ 30万年前 「ブリテン誕生」

黒海からブリテン島に移住した人々は、当地を「ブリテン」と命名した。ブリテンの名の由来はパルテニオスである。パルテニオス＝ブリテニオス＝ブリテンとなる。彼らが、ブリテン島に上陸した人類史上初の人々である。

■ 7万年前 「バリ族誕生」「パルエ族誕生」

マレーに「バリ」「パルエ」を生んだ。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「イーアペトス誕生」

イーアペトスの名の由来はポリュポーターズである。ポリュポーターズ＝ユポーターズ＝イーアペトスとなる。その後、彼らはティタン神族に属した。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「バリ族誕生」「パルエ族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したポリュドーラーは、マレーに「バリ」「パルエ」を生んだ。

■ 7 万年前 「バリト族誕生」

「第 1 次アルゴス号の大航海時代」に参加したプルトーは、マレーに「バリト」を生んだ。

■ 4 万年前 「ギガントマキア」

■ 4 万年前 「パポラ族誕生」

「ギガントマキア」に参加し、ゼウスに敗北したヒッポリュトスは、ギリシアを離れて台湾に移住した。現地人と混合して「パポラ族」を形成した。パポラの名の由来はヒッポリュトスである。ヒッポリュトス=ピッポリュトス=ピポリュ=パポラとなる。

■ 4 万年前 「天菩卑能命誕生」

獣人ヒッポリュトスは、イマナと混合して「アメノホヒ」を成した。アメノホヒの名の由来はイマナとヒッポリュトスの組み合わせである。イマナ+ヒッポリュトス=イマナヒッホ=アメノホヒとなる。

■ 3 万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■ 3 万年前 「パタゴン人誕生」

「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したポリュポーテースは、アルキュオネウスと共にペルーに移住し、そこからパタゴニアに移住した。この時に「パタゴン人」が生まれた。彼らは身長が 4 m 近くある巨人の種族として白人の大航海時代のサイに報告されたが、実際には獣人ポリュポーテースと獣人アルキュオネウスの子孫だった。ポリュポーテース+アルキュオネウス=ポーテキュオネ=ポテキオン=パタゴンとなる。

■ 1 万 3 千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万3千年前 「ヘブライ人誕生」

「台湾人の大航海時代」を経て「垂仁天皇の大移動時代」に参加してパポラ族は、メソポタミアに入植し、現地人と混合して「ヘブライ人」を生んだ。ヘブライの名の由来はパポラである。パポラ＝パポライ＝ヘブライとなる。

■ BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ BC 32世紀 「ヒベルニア誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したヘブライ人は、アイルランドに上陸した。彼らは、アイルランドの古名「ヒベルニア」を残した。ヘブライ＝ヘブライニア＝ヒベルニアとなる。

■ BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■ BC 19世紀 「バビロニア人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したヒベルニア人は、地中海に戻ると、メソポタミアに入植し、「バビロニア人」を成した。バビロニアの名の由来はヒベルニアである。ヒベルニア＝ビベルニア＝バビロニアとなる。BC 1830年、メソポタミアを制したバビロニア人は、シェルデン人・ダーナ神族の魔手からメソポタミアの地を守護するために「バビロニア帝国」を建設している。

■ BC 1850年 スムラエル、第2代バビロニア王に即位 「バビロニア帝国誕生」

BC 1792年、「ハンムラビ法典」で知られる第6代バビロニア皇帝ハンムラビが輩出されている。

■BC1230年 「モーゼスの大移動時代」

■BC1230年 「イシム第2王朝誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したヘブライ人は、BC1160年に「第2イシム王朝」をメソポタミアの地に建国した。

■BC987年 「ビュブロス人誕生」

エラム人の王がバビロニア帝国に君臨すると、バビロニア人はシリアに移住した。ビュブロスの名の由来はバビロニアである。バビロン=バビルス=ビュブロスとなる。ビュブロスの名の由来はバビロンである。バビロン=バビルス=ビュブロスとなる。ビュブロスの名は「パピルス=ペーパー」や「ピープル」の語源でもある。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「バヴァリア誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したビュブロス人は「バヴァリア」を築いた。ビュブロス=ビュブリア=バヴァリアとなる。

■BC460年 「ヒポクラテス誕生」

ピタゴラスの名の由来は獣人ヒッポリュトスとエンケラドスの組み合わせである。ヒッポリュトス+エンケラドス=ヒッポケラドス=ヒポクラテスとなる。ヒポクラテスは、有毒植物の研究をし、毒性の分類と効能を調べ上げた。たが、その成果は全てタナトスに奪われてしまう。ヒポクラテス自身は医学の父として名を残したが、彼の業績はずべて人喰い人種に篡奪されて悪用された。この時から、タナトスはウソをつくために白衣を着用し、医学を用いて人を殺すようになる。医者が人を殺しても罪に問われない。それは殺人ではなく、治療だからだ。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■ B C 3 世紀 「フィブ誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したバヴァリア人は、スコットランドに入植した。インド人（フィダッハ）、ソマリア人（フォトラ）、ヨーロッパ人（フィブ）の顔をした3者がピクトランドに根付いた。フィブの名の由来はヘブライである。ヘブライ＝フィブライ＝フィブとなる。

■ B C 3 世紀 「ピピル人誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したバヴァリア人は、マヤに移住し「ピピル人」を生んだ。ピピルの名の由来はバヴァリア、或いはビュブロスである。ビュブロス＝ビュブロ＝ピピルとなる。ピピル人がマヤ人（ボイイ族）と共にマヤの神話を体系化し「ポポル・ヴー」の原型を創造した。ポポル・ヴーの名の由来はピピルとボイイの組み合わせである。

■ B C 3 世紀 「プエブロ族誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したバヴァリア人はコロラド流域に入植した。この時に「プエブロ族」が生まれた。プエブロの名の由来はビュブロスである。ビュブロス＝ビュブロ＝プエブロとなる。プエブロ族は、チャコ・キャニオンに「プエブロ・ボニート」、メサ・ヴェルデに「メサ・ヴェルデ遺跡」などの洗練された建築物を残している。

■ B C 3 世紀 「ババリア誕生」

ボイイ族がバヴァリアに侵入してバイエルンの基礎を作ると、バヴァリア人は故地を出てパンジャブに移住した。彼らは「ババリア」を名乗り、後のラージプートの派閥「チャンドラヴァンシ」に参加した。

■ A D 8 世紀 「馬場氏誕生」

A D 8 世紀のイスラム帝国軍のパンジャブ侵攻を機に、ババリアはパンジャブを後にして日本に移住した。インド人の顔をしたババリアは、日本人と混合して「馬場氏」を形成した。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「ホピ族誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したフィブは、兄弟であるプエブロ族を追ってコロラド流域を目指した。フィブは、「プエブロ族」に合流すると、「ホピ」を称し、プエブロ族に参加した。ホピの名の由来はフィブである。フィブ=フブ=ホピとなる。

■AD997年 「フリーメイソン誕生」

その後、トンボ帰り中のレイフ・エリクソンの船団に再度、同行したホピ族は、ピクトランドに帰還した。インディアンの顔をしたホピ族は、ピクトランドで白人の顔をしたフィブと合流し、「ホッパー」「ブレイ」などの名を残した。ホッパーの名の由来はホピであり、ブレイの名の由来はヘブライである。

ヘブライ、バビロン、ビュブロス、バヴァリア、ピピル、プエブロの血統を継ぐフィブ（ホピ族）は、「ヘブライの石工」を意味する「フリーメイソン」を創立した。基本的にフリーメイソンは、「第1の神の遺伝子」と「第2の神の遺伝子」の血統に属する人々の子孫が旧交を温めあう、親睦を目的とした友好団体である。もちろん、ここにもタナトスの一部が侵入して悪用しているのだが。

■AD12世紀 「バイバルス誕生」

エジプトに到達したプエブロ族は、キプチャク族などと混合し、マムルークの一員として「アイユーブ朝」に仕えた。その後、AD1223年にプエブロ族の後裔から「バイバルス」が誕生した。バイバルスの名の由来はビュブロスである。ビュブロス=ビュイバルス=バイバルスとなる。バイバルスは、第7回十字軍やモンゴル軍と戦いながら「マムルーク朝」の第4代スルタン、クトゥズを殺害して第5代スルターンに即位した。

■AD1277年 「ポポルカ族誕生」

その後、AD1277年にバイバルスが死去すると、バイバルスの一族は中央アジアを離れ、コ

コロラド流域には帰還せずにメキシコに移住している。彼らは、プエブロキ（プエブロの人）を由来に「ポポルカ族」を称した。プエブロキ＝ポポロカ＝ポポルカとなる。

■AD1277年 「ヒバロー族誕生」

また、一部ポポルカ族はメキシコを離れてアマゾン流域に至り、「ヒバロー族」となった。ヒバローの名の由来はポポルカである。ポポルカ＝ポポロー＝ヒバローとなる。

■AD14世紀 「ファール誕生」

メサ・ヴェルデを放棄したプエブロ族は、故郷のバヴァリアを目指してコロラド流域から大西洋を超えてバヴァリアに帰ってきた。インディアンの顔をした彼らは、白人と混合して「ファール」の名を形成した。ファールの名の由来はプエブロである。プエブロ＝プエーブロ＝ファールとなる。「ファール昆虫記」で有名なアンリ・ファールの顔をよく見ると、インディアン時代の面影を残しているのが分かる。

■AD1680年 「ポペの王国誕生」

イギリス人ホッパーが一族を率いてコロラド流域に帰還する大航海時代を実施した。ホッパーがコロラドで見たものは、家族であるホピ族やプエブロ族がスペイン人によって存亡の危機に晒されている光景だった。「ポペ」と呼ばれたホッパーは、「プエブロの反乱」の計画を練った。密通者がいたものの、ポペはそれを見越し、計画日の10日前に蜂起したため、反乱は成功を収めた。

彼らは、18人のフランシスコ会修道士や、男女合わせて380人のスペイン人を殺害した。その後、ポペはAD1688年に死去するまでプエブロの知事として総督邸に居住し、プエブロ族から捧げ物を集めた。しかし、ポペの死後、プエブロ族の結束は弱まり、スペイン人による再度の征服を許してしまう。

■AD1823年 アンリ・ファール生誕

■AD1882年 エドワード・ホッパー生誕

■AD1894年 江戸川乱歩（平井太郎）生誕

■AD1914年 マリオ・バーヴァ生誕

■AD1928年 ポルポト（サロット・サル）生誕

ポルポトの名の由来はポリュポーテースである。ポリュポーテース＝ポリュポーテ＝ポルポトとなる。「ポルポト」が生まれたことにより、何万年も眠っていた獣人の英雄の血が突然目覚めた。偉大な先祖の血が彼を揺り動かしたが、残念ながらダナーン族（タナトス）によって、耐えがたい汚名を着る結果となった。

■AD1936年 デニス・ホッパー生誕

■AD1938年 ジャイアント馬場（馬場正平）生誕

ジャイアント馬場の巨体は、先祖である獣人ヒッポリュトスの遺伝子が発動したことによる隔世遺伝である。

■AD1943年 トビー・フーパー生誕

■AD1953年 ポルポト、カンボジア共産党を結成 「クメール・ルージュ誕生」

ポルポトの本名はサロット・サルであるが、彼は自分が獣人ポリュポーテースの子孫であることを知ったため、「ポルポト」を名乗ったと考えられる。彼は、インドシナ半島を正しく治めるために「クメール・ルージュ」を結成したが、集まった党員は古の人喰い人種ダナーン族の血統ばかりだった。そのため、デーン人が治めるアメリカ合衆国が、クメール・ルージュを支援した。ソ連が支援するベトナム共和国に負けたアメリカ（デーン人）は、それでも故地ダナーンの奪還を諦めることが出来ず、クメール・ルージュに夢を託したという形である。

■AD1955年 スティーヴン・ブレイ生誕

■AD1969年 桜庭和志生誕

桜庭和志が格闘家となったのは、先祖である獣人ヒッポリュトスの遺伝子が発動したことによる隔世遺伝である。

■AD1976年 ポルポト、第2代民主カンプチア首相に就任 「民主カンプチア誕生」

ポルポトは、ダナン族の血を引くカンボジア人を統率し、AD1976年にプノンペンを占領し「民主カンプチア」を成立した。民主と称しているが、タナトスがそういう美辞麗句を持ち出す時は、何かを破壊しようとしている時である。そういうわけで、ポルポトの思惑とは異なり、クメール・ルージュの党员（ダナン族）は、独自の判断でベトナムの旧政権関係者、富裕層、各種専門家、知識人、親ベトナム派党员、ベトナム系住民を殺戮した。この時、上記の被害者と人工的な飢饉の被害者も含めて330万人が殺害されたとされている。中でも、九一特別部隊は、人の臓物をフライにして食べたいばかりに、無実の住民に親ベトナムの濡れ衣を着せて処刑し、食料を調達していた。ポルポト自身は、これらの殺戮とは無関係だろう。

◆アベル（エピアルテース）の歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「エピアルテース誕生」

その後、インドに上陸して陸上生活を始めたチュクウからは新しい部族が生まれた。「エピアルテース」「エンケラドス」「グラティオーン」「パッラーズ」「ヒッポリュトス」「ポリュポーターズ」「ポルピュリオーン」「ミマース」「アグリオス」の9部族である。彼らはみな、サスカッチ、イエティのような風貌だったと考えられる。ビッグフット目撃談によれば、彼らは時速60キロで走り、3mの高さを跳躍し、片手で岩を投げ、素手でグリズリーを殺すという。「神統記」に於けるキュクロプス、ヘカトンケイル、ギガースなどの描写、そのままである。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「イヤー族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加して人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北西部沿岸（バンクーバー周辺）に居を構えたエピアルテースは「イヤー族」を称した。イヤーの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エピアルテース＝ピアー＝イヤーとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「アベル誕生」

「カオスの大移動時代」によってオーストラリアに移住し、「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したエピアルテースは、アドメテー、アルキュオネウスと共にエジプトの地に上陸した。

ここに、人類の祖「アダム」が生まれ、「太陽神アトムウ」が祀られた。アダム、アトムウの名の由来はいずれもアドメテーである。尚、アルキュオネウスは「カイン」に、エピアルテースは「アベル」となる。アベルの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エピアルテース＝アベルとなる。

■ 4 万年前 「ギガントマキア」

■ 4 万年前 「ピュラ誕生」

「ギガントマキア」に参加し、ゼウスに敗北したエピアルテースは、ティタン神族がいるタルタロスに移住して彼らと連合体を組んだ。そのときに誕生したのが「ピュラ」である。ピュラの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エピアラテース＝ピュラとなる。

■ 4 万年前 「速佐須良比咩神誕生」

「ギガントマキア」に参加し、ゼウスに敗北したエピアルテースは、オケアーニスに属するクリュセーイス、カリロエーと混合して「ハヤサスライビメ」を成した。ハヤサスライの名の由来はエピアルテース、クリュセーイス、カリロエーの組み合わせである。エピアルテース＋クリュセーイス＋カリロエー＝ピアセーイスロエー＝ハヤサスラヒとなる。

■ 4 万年前 「アベラム族誕生」

「ギガントマキア」に参加し、ゼウスに敗北したエピアルテースは、新天地を求めてパプア・ニューギニアに赴いた。エピアルテースはクリュメネーと組んでニューギニアの地に「アベラム族」を残した。アベル＋クリュメネー＝アベリュメ＝アベラムとなる。

■ 4 万年前 「アベルの大航海時代」

■ 4 万年前 「太陽神アポロン誕生」「愛と美の女神アフロディテ誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したアベルは、ギリシアに上陸すると、「太陽神アポロン」を祀

ってオリンポス神族に加わった。アポロンの名の由来はアベラムである。アベラム＝アベラン＝アポロンとなる。また、アベルはテテュスと連合して「アフロディテ」を儲けている。アフロディテの名の由来はアベラムとテテュスの組み合わせである。アベラム＋ティタン＝アベラティタ＝アフロディテとなる。

■ 1万3千年前 「神武天皇の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ BC 7千2百年 「神々の集団アヌンナキ」

■ BC 7千2百年 「天空神バアル誕生」

「神武天皇の大移動時代」を経て、「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに入植したエピアルテースは「神々の集団アヌンナキ」に参加した。このとき、彼らは「天空神バアル」を祀った。バアルの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝ピアル＝バアルとなる。その後、残念ながら「天空神バアル」は「アナト」「タニト」を祀る出雲・能登族に篡奪されてしまう。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 5千年 「アヴァロン誕生」

「トロイア戦争」を戦うために、ギリシア軍に同行してブリテン島に進撃したアベラム族は、スコットランドに科学の種族トバルカインが住んでいることを知り、科学の種族トバルカインと旧交を暖めた。この時、「アヴァロン」の名が生まれた。アヴァロンの名の由来はアベラム、或いはアポロンである。

■BC 5千年 「フィル・ボルグ族誕生」

狡猾なウソをつき、卑怯な手段でトロイアを蹂躪するダーナ神族に怒りを覚えたアベラム族は、ダーナ神族を討つために科学の種族トバルカインに連合を打診した。この時、科学の種族トバルカインは近代兵器を置いて素手で戦う決意をする。愛するアイルランドの環境、インフラを牛耳るダーナ神族に逆らえないでいる兄弟を守るためである。この時に「フィル・ボルグ族」が生まれた。フィルボルグの名の由来はアヴァロンとトバルカインの組み合わせである。アヴァロン+トバルカイン=ヴァロ+バルカ=フィル・ボルグとなる。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「アプリア誕生」「ウンブリア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアベラム族は、オアンネスと共にイタリア半島に落ち延び、「アプリア」「ウンブリア」などの土地を手に入れている。アプリアの名の由来はアベラムであり、ウンブリアの名の由来はオアンネスとアベラムの組み合わせである。アベラム=アベリヤム=アプリアとなり、オアンネス+アベラム=オインベラ=ウンブリアとなる。

■BC 5千年 「第1次北極海ルート」

■BC 5千年 「ピルー（チャビン・デ・ワントル）誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したエピアルテースは、北極海を通過して太平洋に出た。彼らはペルーに赴いて「ビルー川」を拠点にチャビン・デ・ワントル文化を創生した。ピルーの名は、後のペルーの語源となっている。

■BC 5千年 「アニシナベ族誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したエピアルテースは、アメリカ大西洋沿岸に出て北上し、イヌピアト、イヌイトなどを生んだエノスと出会った。両者は、連合して「アニシナベ族（エノス+アベル）」を形成した。エノス+アベル=エノスアベ=アニシナベとなる。

■BC32世紀 「バーラタ族誕生」

スファラディを離脱し、パルティアに拠点を設けたロディアから「バーラタ族」が生まれた。バーラタの名の由来はスファラディである。スファラディ＝スファーラディ＝ファーラディ＝バーラタとなる。バーラタ族は、プール族と共にアーリア人に加わっている。

■BC552年 「マゴスの大航海時代」

■BC552年 「アプリマック誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマゴスは、ペルーに入植すると、アベルと連合した。彼らは、拠点の「アプリマック」を中心に、チャビン・デ・ワンタル文化を牽引した。アプリマックの名の由来はアベルとマゴスの組み合わせである。アベル+マゴス＝アベルマゴ＝アプリマックとなる。

■BC529年 「バルト海誕生」

「太陽神ミトラの大航海時代」がマヤに訪れると、刺激を受けたアプリマックのエピアルテースはペルーを発ち、北欧に入植した。この時、彼らがバルト海を初めて「バルト海」と命名した。バルトの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝ピアルテ＝バルトとなる。

■BC146年 「ランゴバルト人誕生」

ローマとの抗争が激化すると、一部のフランク人はゲルマニアを逃れてバルト海に移住した。彼らは、エピアルテースと連合して「ランゴバルト人」を形成した。ランゴバルトの名の由来はフランクとエピアルテースの組み合わせである。フランク+エピアルテース＝ランクピアルテ＝ランゴバルトとなる。

■AD568年 アルボイン、初代王に即位 「ランゴバルト王国誕生」

ランゴバルト人は、東ゴート王国を滅ぼした東ローマ帝国を退けてイタリア半島に「ランゴバルト王国」を築いた。AD774年になると、シャルルマーニュ大帝率いるフランク王国軍の侵攻によって滅んでいる。

■AD8世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■AD8世紀 「阿比留氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したアプリマックの人々は、上総国から対馬国に移った。アプリマック人は「阿比留氏」を称した。阿比留の名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エピアル＝阿比留となる。対馬の阿比留氏は、後に東北地方に移って「津島」の姓を興した。

■AD774年 「フォード誕生」

ランゴバルト族を解散したエピアルテースは、ブリテン島に帰還して「フォード」の名を成した。フォードの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝ピアルテ＝ヒアルデ＝フォードとなる。また、フォードの名からは多様な名前が輩出されている。

■AD774年 「ロンバルディア誕生」

ランゴバルト族は、その後も北イタリアに残留した一部ランゴバルト族は「ロンバルディア人」として知られるようになる。ロンバルディアの名の由来はランゴバルトである。ランゴバルト＝ランバルト＝ロンバルディアとなる。

■AD1807年 ジュゼッペ・ガリバルディ生誕

ガリバルディの名の由来はランゴバルトと同じくカリंगाとエピアルテースの組み合わせである。カリंगा＋エピアルテース＝カリピアルテ＝ガリバルディとなる。

■AD1863年 ヘンリー・フォード生誕 「フォード自動車誕生」

■AD1909年 太宰治（津島修治）生誕

■AD1949年 スティーヴ・ペリー生誕 「ジャーニー誕生」

■AD1950年 ジョー・ペリー生誕 「エアロスミス誕生」

■AD1950年 マイク・ラザフォード生誕 「ジェネシス誕生」

■AD1951年 ロブ・ハルフورد生誕 「ジューダス・プリースト誕生」

■AD1952年 ニール・パート生誕 「ラッシュ誕生」

■AD1961年 ベンジャミン・フルフォード生誕

■AD1965年 デイヴ・ロンバート生誕 「スレイヤー誕生」

◆エベル（エピアルテース）の歴史

■BC5千年 「エベル誕生」

「台湾人の大航海時代」を経て、「垂仁天皇の大移動時代」に参加したエピアルテースは、メソポタミアに「エベル」を生んだ。エベルの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エピアル＝エベルとなる。

■BC 5千年 「バベルの塔建設」

■BC 5千年 「イベリア誕生」

「バベルの塔」の一件により、エベルは単身、メソポタミアを発って西方に船出をし、「イベリア半島」を発見した。イベリアの名の由来はエベルである。エベル=エベリア=イベリアとなる。

■BC 5千年 「イボ人誕生」「イフェ王国誕生」

イベリア半島を離れたイベリア人は、アフリカ大陸を南下した。西アフリカに達したイベリア人は、そこに「初代テバイ王国」を発見し、ニジェール人、エロヒム、アムル人、マルタ人が暮らしているのを見た。エベルは現地人と混合して「イボ人」となる。イボの名の由来はイベリアである。イベリア=イボリア=イボとなる。その後、イボ人は、初代テバイ王国に隣接して、伝説の「イフェ王国」を建てた。イフェの名の由来はイベリアである。イベリア=イヘリア=イヘ=イフェとなる。

■BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「フォモール人誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したイボ人は、スカンジナビア半島に入植し、ハミ族と組んで「フォモール人」を生んだ。フォモールの名の由来はハミとエピアルテースの組み合わせである。ハミ+エピアルテース=ハミアル=フォモールとなる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「エウボイア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したフォモール人は、エーゲ海に帰還し、エウボイア島に上陸し、この島を初めて「エウボイア」と呼んだ。エウボイアの名の由来はイボである。イボ＝エボ＝エウボア＝エウボイアとなる。

■BC 5千年 「アムル人誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したフォモール人は、メソポタミアに上陸し、「アムル人」を称した。アムルの名の由来はフォモールである。フォモール＝オモール＝アムルとなる。

■BC 5千年 「第1北極海ルート」

■BC 5千年 「ポメラニア誕生」

「第1北極海ルート」に参加したフォモール人（アムル人）は、バルト海に面した北ヨーロッパ岸に入植し、「ポメラニア」を築いた。ポメラニアの名の由来はフォモールである。フォモール＝フォモリア＝ポメラニアとなる。ポメラニア人は、ラップランドのサーミ人と交流を重ねたが、「シュメール文明」とは、ポメラニア人とサーミ人の交流を指し、メソポタミアではなく、バルト海で展開されたものだ。

■BC 40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC 40世紀 「アブラハム誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したアムル人は、シュメール人と共にペルーの地に「チム一王国」を建設した。この時に「アブラハム」が生まれた。アブラハムの名の由来はエピアルテースとハムの組み合わせである。エピアルテース＋ハム＝エピアルハム＝アブラハムとなる。「聖書」では、アブラハムはエジプトを目指しているが、彼が目指したエジプトとは、実際には、

縄文時代の日本列島のことである。

■ B C 3 5 世紀 「サムエルの大航海時代」

■ B C 3 5 世紀 「奥羽誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したアブラハムは、出羽国に入植した。彼らは拠点を「奥羽」と呼んだ。奥羽の名の由来はエウボイアである。エウボイア=エウウ=奥羽となる。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 「エフライム族誕生」「パミール誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したアブラハムは、夏時代の中国に上陸し、そのままタリム盆地に入植した。この時に、彼らは「パミール」を拠点とした。パミールの名の由来はフォモールである。フォモール=ポモール=パミールとなる。また、アブラハムはパミールで「エフライム族」と呼ばれた。エフライムの名の由来はエピアルテースとハムの組み合わせである。エピアルテース+ハム=エピアルハム=アブラハム=エフライムとなる。

■ B C 3 2 世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ B C 3 2 世紀 「フエ誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したエウボイア人は、東南アジアに上陸してベトナムに「フエ」の名を残した。フエの名の由来はエウボイアである。エウボイア=エウホイア=ホイア=フエとなる。

■ B C 3 0 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「都市国家エブラ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したエフライム族は、シリアに移住し、都市国家「エブラ」を築いた。エブラの名の由来はエフライムである。エフライム＝エブライム＝エブラとなる。

■ B C 2 2 4 0 年 「アフラマズダー誕生」

アッカド帝国がシリアを蹂躪すると、アブラハムは滅亡したエブラを後に、古代イランに入植した。この時に「アフラマズダー」が生まれた。アフラマズダーの名の由来はエフライムの土地（エフライムスタン）である。エフライムスタン＝エフラムスター＝アフラマズダーとなる。

■ B C 9 3 2 年 「北イスラエル王国誕生」

「ヨシュアの大移動時代」の参加者がカナンに「北イスラエル王国」を建設すると、エフライム族がイランから駆けつけた。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 6 世紀 「フィン人の大航海時代」

■ B C 6 世紀 「ウクライナ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加してフィンランドに移住し、その後に「フィン人の大航海時代」に参加したエフライム族は、オビ川に入植した。その後、彼らは南下して「ウクライナ」「クリミア」を築いた。ウクライナ・クリミアの名の由来はエフライムである。エフライム＝エクライン＝ウクライナとなり、エフライム＝エフライミア＝フライミア＝クリミアとなる。

■ B C 3 4 3 年 「ポントス人の大航海時代」

■ B C 3 4 3 年 「イベリア王国誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したイベリア人は、コーカサスに移住し「イベリア王国」を築いた。イベリアといえばスペインなので、コーカサスにイベリア王国の名があるのは奇妙だが、これが「ポントス人の大航海時代」が存在した証となる。

■BC330年 「アヴァール人誕生」

ペルシア帝国が滅亡すると、アフラマズダーの種族は、パンノニアに入植し、「アヴァール人」を称した。アバールの名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エビアルテース＝アヴァールとなる。

■AD114年 「ポントス人の大航海時代」

■AD114年 「忌部氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したイベリア人は、パルニ人、タジク人、ハルキス人、エウロペ族と共に日本に上陸した。イベリア人は、現地人と混合して「忌部氏」を生んだ。忌部の名の由来はイベリアである。イベリア＝インベリア＝忌部となる。

■AD114年 「尾張氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したイベリア人は、日本に移住した。彼らは、現地人と混合して「尾張氏」を称した。尾張の名の由来はエピアルテースである。エピアルテース＝エヒアル＝エイアル＝尾張（おわり）となる。

■AD562年 蘇我堅塩媛、小姉君がパンノニアから満州に移住

柔然（ローラン）がアヴァール王国を掌握すると、正統なアヴァールの王族カティアナとジョアンの姉妹が子供たちと数十騎の兵士を従えてシルクロードを渡り、満州に辿り着いた。カティアナはインドから落ち延びたソグド人蘇我稲目の養女となり、共に日本に上陸した。カティアナは「蘇我堅塩媛」を称し、ジョアンナは「小姉君」を称した。カティアナは自身の名に堅塩（かたえん）と当て字し、ジョアンナは小姉（しょうあね）と当て字した。蘇我堅塩媛は欽明天皇と

結婚したが子供たちは欽明天皇の血を引いてはいない。額田部皇女（アガタの当て字）を含めた全員がアヴァールからの連れ子である（つまり、白人の顔をしていた）。

■AD582年 「聖徳太子誕生」

柔然（ローラン）の王統バヤン・カガンが、アヴァール人を率いてバルカン半島を略奪すると、正統なアヴァールの王族アンナがハムレット（厩戸皇子）を含む子供たちと数十騎の兵士を従えてシルクロードを渡り、満州に辿り着いた。その後、アンナは母（小姉君）の後を追って満州から日本に渡っている。アンナは「穴穂部間人皇女」を称した。穴（あな）の名の由来はアンナであり、穂部（ほべ）の名の由来はアヴァールである。穴穂部間人皇女は従兄弟の用明天皇（大兄皇子＝オーウェン）と結婚している。AD604年には聖徳太子が「十七条憲法」を制定し、推古天皇と共に奈良時代の日本に君臨した。故地から逃亡したアヴァール人の王統が、奈良時代の日本で、この世の春を謳歌していたのだ。

■AD593年 額田部皇女、第33代天皇に即位 「推古天皇誕生」

AD593年、アヴァール人の王女「推古天皇」が第33代天皇に即位している。推古天皇は、白人（ハンガリー人）の顔をしていたと考えられる。

■AD750年 「パーラ朝誕生」

歴史では、山背大兄王は蘇我入鹿に襲撃されて自害して果てたと言われているが、実際にはインドに逃亡した可能性がある。山背大兄王は、兄弟の財王、日置王、白髪部王、長谷王、三枝王、伊止志古王、麻呂古王と子息の難波麻呂古王、麻呂古王、弓削王、甲可王、尾治王を伴って日本を脱出し、シルクロードを介してパルティアに移住した。

それからインドに侵攻した山背大兄王の一行は、AD750年頃に「パーラ朝」「プラティハーラ朝」を開いた。パーラの名の由来はアヴァールであり、プラティハーラの名の由来はパルティアとパーラの組み合わせである。アヴァール＝アパール＝パーラとなり、パルティア＋パーラ＝パルティパーラ＝プラティハーラとなる。

■AD1036年 「原氏誕生」「相馬氏誕生」

AD1174年にパーラ朝が滅ぶと、彼らは日本に帰還して「原氏」を称した。また、一部はパ

一ラ朝が君臨していた土地に栄えていた古王国の名「スーマ」の名に因んで「相馬氏」を称した。原の名の由来はパーラであり、相馬（そうま）の名の由来はスーマである。つまり、原氏、田原氏、相馬氏は聖徳太子の子孫といえることができる。

■ A D 1 2 世紀 「由良御前誕生」

尾張氏の血を引く由良御前は、源義朝との間に源頼朝、源希義、源義経の3人の子を生んでいる。ただ、頼朝以外は父親が別であるため、頼朝は希義、義経を憎悪していた。義経の父親は由良御前と同じく尾張氏の血筋の者だった可能性が高い。勢力拡大を念頭に、尾張氏は源義朝に由良御前を接近させたわけである。

■ A D 1 年 源義経生誕

■ A D 1 年 源義経、奥州に潜伏

■ A D 1 1 8 9 年 「奥州藤原氏の大航海時代」

■ A D 1 1 8 9 年 「ヴラド家誕生」

「奥州藤原氏の大航海時代」に参加した義経は、黒龍江に降り立ち、単身、チンギスの征西に同行し、ワラキアに居を得た。義経は現地人と混合し、「浦戸」での恨みを忘れないように自身の氏族に「ヴラド」の名を称した。ヴラド家は、ドラクール家に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に、アレクサンドル1世が誕生している。彼は、A D 1 4 3 1 年に第20代ワラキア君主に即位している。

■ A D 1 4 ? ? 年 ヴラド・ツェペシュ、第27代ワラキア君主に即位

源義経が興したヴラド家はワラキア公の座を得たが、第27代ワラキア君主には、かの悪名高いヴラド・ツェペシュが即位している。

■AD1462年 ヴラド・ツェペシュ逮捕

イギリスを逃れたソウニー・ビーン家は、第27代ワラキア公に就任したヴラド・ツェペシュに寄生し、大勢の人々を串刺しの刑に処した。AD1459年、オスマン・トルコ帝国の使節がツェペシュのもとを訪れたが、ダニ族は、使節を串刺しにすることをツェペシュに進言した。その後、オスマン皇帝メフメト2世は、大軍を率いてワラキアを襲撃したが、ツェペシュの居城に乗り込んだ皇帝が見たものは、大量のオスマン兵の串刺しであった。これを見たメフメト2世は戦意喪失し、ワラキアを撤退している。ツェペシュは、オスマン兵のみならず、ワラキア領内でも粛清を実施し、多くの農民を串刺しに処したという。しかし、最も串刺しを望んでいたのは、アステカ帰りのダニ族である。

一方、このオスマン・トルコ帝国との最前線で、ダニ族は対オスマンつながりでマルタ騎士団と知り合っている。その後、オスマン皇帝はツェペシュの弟ラドゥを支援することで、ツェペシュの地位を篡奪した。これにより、ツェペシュはトランシルヴァニアに落ち延びたが、逆に、オスマン帝国に協力したという罪状でハンガリー王に逮捕され、幽閉された。これを機に、宿主を失ったダニ族は、2手に分かれ、ワラキアを脱出してケニアと中国・長江水系に移住した。

■AD1526年 「野々村氏誕生」「野村氏誕生」

オスマン・トルコ帝国がオーストリアに進撃すると、源義経の子孫がバルカン半島を離れて日本に帰還した。白人の顔をした彼らは日本人と混合して「野々村氏」「野村氏」を称した。野々村、野村の名の由来はパンノニアの村である。パンノニア+村=ノニャ村=野々村となり、パンノニア+村=ニャ村=野村となる。この系統からは、秀吉に仕えた野々村幸成が輩出されている。

■AD1769年 「團氏誕生」「蜷川氏誕生」「松田氏誕生」「増田氏誕生」

オスマン・トルコ帝国がワラキアに進撃すると、源義経の子孫がバルカン半島を離れて日本に帰還した。白人の顔をした彼らは日本人と混合して「團氏」「蜷川氏」を称した。團の名の由来はドナウであり、蜷川の名の由来は「パンノニアの川（ドナウ）」である。ドナウ=ドナ=團となり、パンノニア+川=ノニア川=蜷川となる。そして、松田、増田の名の由来はアフラマズダーである。アフラマズダー=マズダー=増田、松田となる。

■AD1858年 團琢磨生誕

■AD1924年 團伊玖磨生誕

■AD1930年 「創価学会誕生」

内モンゴル周辺に居住していた一部の「サーキャ派」は、サクソン族やキプチャク族の結成を経たシャカ族の末裔と考えられる。彼らは、中国共産党の台頭と軍閥戦争を機に、内モンゴルから日本に逃れた。一方、ルーマニアがオーストリアに宣戦して第一次世界大戦に参加すると、源義経の子孫（ヴラド家）はルーマニアを発って日本に帰還した。サーキャ派は、教育者であった牧口常三郎を教祖に据えて「創価教育学会」を設立した。創価の名の由来はサーキャである。彼らは、「サーキャ」に「創価」を当て字したのだ。一方、シルクロードを渡って日本に上陸したヴラド家は、加賀出身の戸田城聖を自身の代表者に据え、犬養毅などに教義を評価されていた牧口常三郎に接近させた。彼らが戸田城聖に接触したのは、戸田の名の由来がタタールだと考えたからだろう。その後、創価教育学会に加わったヴラド家は、「創価」の由来にルーマニア語「ソッカ（ショック）」を独自に加え、ルーマニアと同じデザインの旗を教団の旗として設定した。一方、浄土真宗の信徒であった戸田城聖は、ヴラド家の意向に沿わずに大谷の指示により独自に動いた。彼は、浄土真宗の信者で占められた特高警察と結び、牧口常三郎と共に「治安維持法違反で逮捕される」と、いう芝居を演じた。その後、獄中で牧口が殺害されると、戦後、無事に出所した戸田は、浄土真宗の信者を大量に創価学会に入信させた。こうして、教団は一気に巨大化した。一方、牧口常三郎を失ったサーキャ派は、今度は金融業を営んでいた池田大作を代表に据え、戸田城聖を暗殺して、大きく成長した教団を取り戻した。満州に縁がある彼らは、女真に因んで「潮」という名の雑誌を刊行した。女真（じょしん）＝じょ＝シオ＝潮（うしお）となる。しかし、半分以上が浄土真宗の信者であるため、創価学会の半分は浄土真宗のものといえる。そのため、創価学会に入信した浄土真宗の信者は独自に動き、「公明党」を結党した。太田昭宏氏などは、大谷の直系だと考えられる。

■AD1945年 原一男生誕

■AD1947年 ケビン・クライン生誕

■AD195?年 原雅行生誕

■AD1935年 蜷川幸雄生誕

■ A D 1 9 5 2 年 エモマリ・ラフモン生誕 「タジキスタン共和国大統領」

■ A D 1 9 6 1 年 原哲夫生誕 「北斗の拳誕生」

原哲夫が描いたケンシロウ、トキ、ラオウなど「北斗の拳」の登場人物たちは、超古代、神々の時代に活躍した獣人エピアルテースの再現かもしれない。

ヴィディエの歴史（ペイトー）

◆オーディーン（ペイトー）の歴史

■30万年前 「ペイトー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリア大陸に移住したヴィディエは、「ペイトー」を生んだ。ペイトーの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=プイティエ=ペイトーとなる。その後、ペイトーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「プトン族誕生」「パタニ族誕生」など

ペイトーは、マレー半島に「バトゥ族」「ハドゥイ族」「ビダエ族」を、ウェネと組んで「プトン族」「バタク族」「パタニ族」「パチャン族」「パティン族」を生んだ。「バトゥ族」「ハドゥイ族」「ビダエ族」の名の由来はペイトーであり、「プトン族」「バタク族」「パタニ族」「パチャン族」「パティン族」の名の由来はペイトーとウェネの組み合わせである。ペイトー+ウェネ=ペイトエネ=パタニ=プトン=パティン=パチャンとなる。

■30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■30万年前 「デルポイ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したペイトーは、トレと共に古代ギリシアに「デルポイ」を築いた。デルポイの名の由来はトレとペイトーの組み合わせである。トレ+ペイトー=ドレペイ=デルポイとなる。

■30万年前 「守護蛇ピュトン誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したディンカは、ペイトーと組み、ナイル流域からエーゲ海へ移った。この時に、彼らは聖地デルポイの守護蛇「ピュトン」を生んだ。ピュトンの名の由来はペイトーとディンカの組み合わせである。ペイトー+ディンカ=ペイディン=ピュトンとなる。頭部が小さく、手足、指が長いディンカは、北極圏に近いエーゲ海に暮らすことで、背の

高い金髪・碧眼の白人（北欧人）の祖となった。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「アラビア誕生」「アデン誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、アラビア半島南部に上陸した。ペイトーは、この地に「アデン」を建設した。アデンの名の由来はピュトンである。ピュトン=ピヤトン=アデンとなる。アデンは、「エデン」の語源にもなっている。また、オルペウスは当地を「アラビア」と命名した。アラビアの名の由来はオルペウス、或いはエウローパーである。エウローパー=エウロピア=アラビアとなる。

■ 7万年前 「ドラヴィダ族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、トレと共にインドに入植した。この時に「ドラヴィダ族」が生まれた。ドラヴィダの名の由来はトレとペイトーの組み合わせである。トレ+ペイトー=ドレベイドー=ドラヴィダとなる。デルポイと同じ由来を持つ。

■ 7万年前 「ポイニクス誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、グレニコスと連合してフェニキア人の祖である「ポイニクス」を生んだ。ポイニクスの名の由来はペイトーとグレニコスの組み合わせである。ペイトー+グレニコス=ペイニコス=ポイニクスとなる。フェニキアの名の由来はポイニクスである。ポイニクス=ポイニキャ=フェニキアとなる。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「オーディーン誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、古代マヤに入植し、「オーディーン」を生んだ。オーディーンの名の由来はペイトーとディンカの組み合わせである。ペイトー+デ

インカ=オーディン=オーディーンとなる。オーディーンは、ヴァルハラ王国を統治した。

■ 2万年前 「最終戦争ラグナロク」

■ 2万年前 「ドロン・オドゥン（ヴォドゥン）誕生」「北斗星君誕生」

「最終戦争ラグナロク」により、オーディーンがヴァルハラから現ベナン辺りに入植し、青龍（湖水地方）のディンカと組んで「北斗星君（ペイトーキンジュン）」を建設した。北斗星君の名の由来はペイトー、カアング、ジェンギの組み合わせである。ペイトー+カアング+ジェンギ=ペイトーカアンジェン=ペイトーキンジュン（北斗星君）となる。

オーディーンは、「ドロン・オドゥン」を築いた。ドロン・オドゥンの名の由来はトレ、ヴァナラシ、オーディーンの組み合わせである。これは、オーディーンが現ベナンと共に、アンダマン諸島（トレ）、ヴァナラシ（ガンジス流域）までをも支配していたことを意味する。トレ+ヴァナラシ+オーディーン=トレアナ+オディン=ドロン・オドゥンとなる。

また、オーディーンは「ヴォドゥン」とも呼ばれた。ヴォドゥンの名の由来はオーディーンである。オーディーン=オディン=ヴォドゥンとなる。ヴォドゥンは創造主であり、現ベナンでは超人的な力を持つ神とされた。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「ハム誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極にやってきたイマナはペイトーと連合して「ハム」を生んだ。ハムの名の由来はイマナとペイトーの組み合わせである。ペイトー+イマナ=ペイマナ=ハムとなる。「ヴィマナ（UFO）」の名の由来もペイトーとイマナの組み合わせである。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「ウトナピシュティム誕生」

「大地殻変動」を機に、ベナンの人々がアフリカからメソポタミアに移ると、アプスー、テミス

と共に「ウトナピシュティム」を生んだ。ウトナピシュティムの名の由来はアテン、アプスー、テミスの組み合わせである。アテン+アプスー+テミス=アテナプステミ=ウトナピシュティムとなる。

■BC1350年 「太陽神アテン誕生」

ミディアン人は、大量の信者を率いてナイル流域に侵入し、アマルナに拠点を築いた。更に彼らは、アメンヘテプ3世に接近して信者とし、重い通りに操作した。司神タナトスに操作されたアメンヘテプ4世は、上下エジプトで勢力を振るうアメン神官団を退けるべく「太陽神アテン」を祀り、「アマルナ宗教改革」を実行した。太陽神アテンの名の由来はアデンである。

■BC1027年 「アテネ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、イシン人がギリシアに来訪、その後、「マハーバーラタ戦争」によってアラビア半島が核兵器で消滅すると、アテナイ人、アデン人（ピュトン）が古代ギリシアに入植し、イシン人と共に都市国家「アテネ」を築いた。アテネの名の由来はアテーナイである。アテネ人は、スパルタ人と共に好戦的な人々であり、常に戦争に明け暮れていた。「第一次神聖戦争」「サラミスの海戦」「第一次ペロポネソス戦争」「第二次神聖戦争」「第二次ペロポネソス戦争」「シチリア戦争」「コリントス戦争」「同盟市戦争」「クレモニデス戦争」など、ほとんど常に戦闘を繰り返していた。BC267年、マケドニア人の台頭により、アテネ人はギリシアを離れることを決意した。

■BC343年 「ポントス人の大航海時代」

■BC343年 「ピテュニア王国誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したアテネ人はアナトリア半島に入植した。彼らは、「ピテュニア王国」を建設した。ピテュニアの名の由来は偉大な祖ピュトンである。ピュトン=ピュトンニア=ピュテニアとなる。

■BC267年 「ブトン人誕生」

一部アデン人は、アザニアー海賊と共にスワヒリから日本に向かうが、ペイトーは東南アジアに入植して「ブトン人」を生んでいる。プトゥンの名の由来はピュトンである。ピュトン＝プトン＝ブトンとなる。

■ B C 2 世紀 「エッセネ派誕生」

マレー半島のブトン人は、日本を後にしたアザニアー人と共にイスラエルに入植した。マレー人と日本人の顔をした彼らは現地人と混合して「エッセネ派」となる。エッセネの名の由来はアザニアーである。アザニアー＝アッサニアー＝エッセネとなる。イエスの時代、エッセネ派は、パリサイ派、サドカイ派と共にユダヤ教の主な派閥の中心的存在であった。

■ A D 7 0 年 「唐氏誕生」

ディアスポラにより、イスラエルを後にしたエッセネ派は東南に分離し、新天地を求めて旅立った。東方組はインド洋を越えて中国に至った。イスラエル人の顔をした彼らは中国人と混合して「唐氏（タン）」を称した。唐（タン）の名の由来はアテネである。アテネ＝アタン＝タン（唐）となる。

■ A D 7 0 年 「タヌーフ族誕生」

ディアスポラにより、イスラエルを後にしたエッセネ派は東南に分離し、新天地を求めて旅立った。南方組は、アラビア半島に落ち延びて「タヌーフ族」を称した。タヌーフの名の由来はアテネである。アテネ＝アテネーフ＝タヌーフとなる。

■ A D 5 8 3 年 「東突厥帝国誕生」「西突厥帝国誕生」

阿史那氏のことを、祖を同じくするアテネの末裔であることを見抜いた唐氏は、突厥帝国と唐を連合することを阿史那氏に打診した。唐氏は李氏を配下に置き、隋に蜂起する準備を進めている最中だったが、中国を掌握した後、中国を突厥帝国と連合させることで、唐氏は、ユーラシア大陸を統べる巨大帝国を手にしたかったのだ。しかし、一部阿史那氏は承諾したものの、一部阿史那氏には反撥するものがいたため、突厥帝国は A D 5 8 7 年に東突厥（阿史那氏）と西突厥（唐氏）に分裂した。それを証明するが如く、唐樹立後、唐の李靖が A D 6 2 9 年に東突厥に攻撃を加えている。

■ A D 6 1 8 年 李淵、初代皇帝に即位 「唐誕生」「昊天上帝誕生」

アテネ人の子孫「唐鑑」は、武川鎮の「柔玄（ルークシャン）」に属していた李淵と親交を持ち、子息の「唐検」も李淵の子息、李世民と親交を持った。大昔、アテネ人がアメンホテプ4世の背後で暗躍し、アマルナ改革を実行したのと同様、唐鑑は、李淵の背後に隠れて唐に纏わる一切を指揮していた。唐氏と李氏はある種の連合体を築いていたのだろう。李淵は「唐」を開いたが、実質、唐を掌握していたのはアテネ人（唐氏）だったのだ。

また、唐氏は都市国家アテネを復活させるべく、宇宙の中心に設定された「長安城」を建設した。そして、南郊円丘での祭典儀礼は「アマルナ宗教改革」の再現ともいえるべきものであった。唐の主神「昊天上帝（ハオティアン）」とは、「太陽神アテン」のことに他ならない。ハオティアンの名の由来はアテンである。アテン＝アオティアン＝ハオティアンとなる。

■ A D 6 8 2 年 「東突厥帝国復活」

A D 6 2 9 年の唐による攻撃を機に、東突厥の王統はしばらく途絶えるのだが、A D 6 0 2 年に故国が滅んだタヌーフ族が祖を同じくする東突厥を訪問し、A D 6 8 2 年に東突厥帝国を復興させた。

■ A D 7 3 9 年 「田辺氏誕生」「渡辺氏誕生」

A D 7 4 4 年に引き続いて東突厥帝国が滅ぶと、阿史那氏はタヌーフ族を率いて中央アジアから日本に移住した。タヌーフ族は、日本人と混合して「田辺氏」を成した。更に、タヌーフ族は源宛にも接近して自身の血統を打ちたてている。それが「嵯峨源氏」の祖、源綱である。その後、源綱は「渡辺氏」に名を改めている。田辺の名の由来はタヌーフであり、渡辺の名の由来はアテネの浜辺である。タヌーフ＝タナフェ＝田辺となり、アテネの辺（浜辺）＝アテネベ＝渡辺となる。

◆卑弥呼（ハム）の歴史

■ 1 万 5 千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「ハム誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極にやってきたイマナはペイトーと連合して「ハム」を生んだ。ハムの名の由来はイマナとペイトーの組み合わせである。ペイトー+イマナ=ペイマナ=ハムとなる。「ヴィマナ(UFO)」の名の由来もペイトーとイマナの組み合わせである。

■ 1万3千年前 「エノスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「エロヒム誕生」

「エノスの大航海時代」に参加したエロスはハムと連合して「エロヒム」を生んでいる。エロス+ハム=エロハム=エロヒムとなる。イスラエルの神として知られる「エロヒム」は、アフリカ生まれの神なのだ。

■ 1万3千年前 「ノアの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ハミ族誕生」

ハミの名の由来はハムである。彼らは、「エノスの大航海時代」に参加した黒い肌の兄弟アムル人と連合して「フォモール人」を築き、「第1次北極海ルート」に参加して「パミール人」などを生んでいる。現在では、オリジナルのハミ族は、少数民族としてフィンランドに居住している。

■ BC 5千年 「フォモール人誕生」「ポメラニア誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したイボ人は、スカンジナビア半島に入植し、ハミ族と組んで「フォモール人」を生んだ。フォモールの名の由来はハミとエピアルテースの組み合わせである。ハミ+エピアルテース=ハミアル=フォモールとなる。彼らの拠点「ポメラニア」と呼ばれた。ポメラニアの名の由来はフォモールである。フォモール=フォモリアン=ポメラニアとなる。

■BC 5千年 「モリガン誕生」

フォモール人（ハミ族）は、トバルカインと組んで「モリガン」を生んだ。モリガンの名の由来はフォモールとトバルカインの組み合わせである。フォモール+トバルカイン=モールカイン=モリガンとなる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「エウボイア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したフォモール人は、エーゲ海に帰還し、エウボイア島に上陸し、この島を初めて「エウボイア」と呼んだ。エウボイアの名の由来はイボである。イボ=エボ=エウボア=エウボイアとなる。

■BC 5千年 「アムル人誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したフォモール人は、メソポタミアに上陸し、「アムル人」を称した。アムルの名の由来はフォモールである。フォモール=オモール=アムルとなる。

■BC 5千年 「マリ誕生」

アイルランドを脱出したエロス（アムル人）は、北アフリカには帰還せずにメソポタミアに移住した。彼らは「都市国家マリ」を建設した。マリの名の由来はアムルである。アムル=アマリ=マリとなる。

■BC5千年 「アムル人誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したフォモール人は、メソポタミアに上陸し、「アムル人」を称した。アムルの名の由来はフォモールである。フォモール＝オモール＝アムルとなる。

■BC40世紀 「第1次シュメール人の大航海時代」

■BC40世紀 「叡智の神ミミル誕生」 「美丈夫の神ヘーニル誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したフォモール族は、ミドガルド王国に入植した。フォモール族は「ミミル」を生み、一部フォモール族は、ヴァン神族の「最高神ニョルド」と組んで「ヘーニル」を生んだ。ミミルの名の由来はハミとフォモールの組み合わせであり、ヘーニルの組み合わせはフォモールとニョルドの組み合わせである。ハミ＋フォモール＝ミモール＝ミミルとなり、フォモール＋ニョルド＝フォニョル＝ヘーニルとなる。

■BC40世紀 「アブラハム誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したアムル人は、シュメール人と共にペルーの地に「チム一王国」を建設した。この時に「アブラハム」が生まれた。アブラハムの名の由来はエピアルテースとハムの組み合わせである。エピアルテース＋ハム＝エピアルハム＝アブラハムとなる。「聖書」では、アブラハムはエジプトを目指しているが、彼が目指したエジプトとは、実際には、縄文時代の日本列島のことである。

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC32世紀 「ポモ族誕生」 「ピマ族誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したアブラハムは、現カリフォルニアに「ポモ族」を、コロラド流域に「ピマ族」を残している。いずれの名の由来もフォモールである。フォモール＝フォモ

=ポモ=ピマとなる。

■BC35世紀 「奥羽誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したアブラハムは、出羽国に入植した。彼らは拠点を「奥羽」と呼んだ。奥羽の名の由来はエウボイアである。エウボイア=エウウ=奥羽となる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「エフライム族誕生」「パミール誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したアブラハムは、夏時代の中国に上陸し、そのままタリム盆地に入植した。この時に、彼らは「パミール」を拠点とした。パミールの名の由来はフォモールである。フォモール=ポモール=パミールとなる。また、アブラハムはパミールで「エフライム族」と呼ばれた。エフライムの名の由来はエピアルテースとハムの組み合わせである。エピアルテース+ハム=エピアルハム=アブラハム=エフライムとなる。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ヤムハド王国誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したアブラハムは、古代エジプトに入植した。アブラハムは、エジプトでナフタリ族と連合体を組んだ。ヤムハドの名の由来はハムとヤペテの組み合わせである。ハム+ヤペテ=アムヘテ=ヤムハドとなる。BC16世紀にヤムハド王国は滅亡している。

■BC1027年 「キンメリア人誕生」

羌族は、タリム盆地に進出してパミール人と連合し、「キンメリア人」を組んだ。羌（キャン）+パミール=キャンミール=キャンメリア=キンメリアとなる。謎の民族とされるキンメリア人は、中央アジアに覇を唱え、フルリ人のウラルトゥ王国に侵攻し、サルゴン2世が率いるアッ

カド帝国と戦火を交えた。また、フリギア王ミダスを自殺に追い込んだりしたが、アッシリア軍、リディア王国軍に敗北してモンゴルに帰還している。

■BC610年頃 「ヒミルコ誕生」

リディア王国に敗北すると、パミール人がキンメリア人から離脱し、地中海に移住した。地中海では「ヒミルコ」の名が生まれている。ヒミルコの名の由来はパミール人（パミールキ）である。パミールキ＝パミルコ＝ヒミルコとなる。カルタゴの将軍ヒミルコが有名である。

■BC330年 「ラハム族誕生」

ペルシア帝国が滅亡すると、アフラマズダーの種族は、アラビア半島に入植し、「ラハム族」を称した。ラハムの名の由来はアブラハムである。アブラハム＝ラハムとなる。ラハム族は、AD4世紀頃に「ラハム王国」を築いている。

■BC327年 「コラズム族の大移動時代」

■BC327年 「ヒムヤル人誕生」

「コラズム族の大移動時代」に参加したパミール人は、現地人と混合し、「ヒムヤル人」を称した。ヒムヤルの名の由来はパミールである。パミール＝ハミイル＝ヒムヤルとなる。唯一、クライシュ族に参加しなかったヒムヤル人は、単独で「ヒムヤル王国」を建て、BC115年頃にアラビア南部全域を支配下に置いた。ヒムヤル王国は、アラビアの強国としてサバエ王国、ハドラマウト王国と度々戦火を交え、征服して支配下に置いている。

■AD106年 「卑弥呼誕生」

ナパタエ人と共にインドシナ半島に上陸したヒムヤル人は現地人と混合し、この時に「卑弥呼」が誕生した。卑弥呼の名の由来はヒムヤル人の祖パミール人を意味する「ハミキ」である。ハミキ＝ハミコ＝卑弥呼となる。卑弥呼は、アラビア人とインドシナ人のハーフ、つまりインド人のような顔をしていたと考えられる。

■AD146年 「マルコマンニ人誕生」

倭国大乱を機に、邪馬台人がインドシナ半島を離れてゲルマニアに移住した。ゲルマニアに上陸した卑弥呼の一族は、アラマンニ人と合体して「マルコマンニ人」を成した。マルコマンニの名の由来はヒミルコ（パミール人を意味するパミルコ）とアラマンニの組み合わせである。ヒミルコ+アラマンニ=ミルコマンニ=マルコマンニとなる。

■AD534年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■AD534年 「丸子氏誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したケルト人は、日本人と混合して「黒田氏」を生み、マルコマンニ人は「丸子氏」を生んだ。丸子の名の由来はマルコマンニである。

■AD534年 「メルキト誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したケルト人とマルコマンニ人は、モンゴル人と混合して「ケレイト」「メルキト」を形成した。ケレイトの名の由来はケルトであり、メルキトの名の由来はマルコマンニの人である。ケルト=ケルイト=ケレイトとなり、マルコマンニの人(ト)=マルコト=マルキト=メルキトとなる。

■AD10世紀 「ハイマー誕生」

イスラム帝国の分裂を機に、アラビア人の顔をした西方組ヒムヤル人はヨーロッパに移住し、「ハミル」「ハイマー」などの姓を残した。ハミル、ハイマーの名の由来はヒムヤルである。ヒムヤル=ハミヤル=ハミルとなり、ヒムヤル=ヒムヤー=ハイマーとなる。

■AD10世紀 「逸見氏誕生」

イスラム帝国の分裂を機に、アラビア人の顔をしたヒムヤル人は、東方に進み、日本に上陸して現地人と混合し「逸見（へんみ）氏」を形成した。逸見の名の由来はヒムヤルである。ヒムヤル

=ヒンムヤル=逸見（へんみ）となる。

■AD10世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD10世紀 「ハム誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したポモ族、ピマ族はイギリス人と混合して、ボーナム、カニンガム、ベッカム、バッキンガムなど、「ハム」が付く姓を量産した。ハムの名の由来はフォモールである。

■AD1918年 スパイク・ミリガン生誕

■AD1921年 クリス・マルケル生誕

■AD1928年 エンニオ・モリコーネ生誕

■AD1941年 ショーン・S・カニンガム生誕

■AD1947年 ピート・ハム生誕 「バッドフィンガー誕生」

■AD1948年 ジョン・ボーナム生誕 「レッド・ツェッペリン誕生」

■AD1949年 リンジー・バッキンガム生誕 「フリートウッド・マック誕生」

■AD1951年 マーク・ハミル生誕

■AD1954年 アンゲラ・メルケル生誕

第8代ドイツ共和国首相に就任している。

■AD1959年 サム・ライミ生誕 「死霊のはらわた誕生」

■AD1975年 デビッド・ベッカム生誕

◆八幡神社（ヤペテ）の歴史

■1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■1万5千年前 「ヤペテ誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極にやってきたニャメはペイトーと連合して「ヤペテ」を生んだ。ヤペテの名の由来はニャメとペイトーの組み合わせである。ニャメ+ペイトー=ニャペイト=ヤペテとなる。

■1万3千年前 「ノアの大航海時代」

■BC7千2百年 「神々の集団アヌンナキ誕生」

大地殻変動を機に、世界各地から神々の血統がメソポタミアに集った。ブリテン島から来たヘカテ、テミス、モンゴルから来た三皇、垂仁天皇、獣人たち、オケアーニスたち、エビス（アプスー）、ヤマト（ティアマト）、エジプトから来たアトゥム、カイン、マハラレル、カインアン、南極から来たエノク、レメク、ヤペテの4者が連合して「神々の集団アヌンナキ」を築いた。また、彼らはヤペテの子として知られる一族を共同で生んだ。

■BC7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■BC 7千年 「プタハ誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したペイトーは、アプスーと共にエジプトに移住し、「プタハ」を生んだ。プタハの名の由来はペイトーとアプスーの組み合わせである。ペイトー+アプスー=ペイトアプ=ペトパ=プタハとなる。その後、ペイトーは再度、アラビア半島（アテーナイ王国）に帰還する。

■BC 7千年 「プテ誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したヤペテは、北アフリカに「プテ」を生んだ。プテの名の由来はヴィディエである。ヴィディエ=プディエ=プテとなる。

■BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「ビト誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したプテは、アイルランドに移住すると、ノアの子「ビト」を称した。ビトの名の由来はヤペテである。ヤペテ=ヤペト=ビトとなる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「ベドウィン族誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したプテは、アイルランドから地中海に帰還した。

彼らは「ベドウィン族」を生んだ。ベドウィンの名の由来はピュトンである。ピュトン=ピュトウィン=ベドウィンとなる。

■BC 5千年 「第1次北極海ルート」

■BC 5千年 「ハッティ人誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したプテは、オビ河に「ハッティ人/グティ人」を形成した。ハッティの名の由来はプテである。プテ=プッティ=ハッティとなる。別名グティは、ユーラシアに根付く、ハ行はカ行を兼ねる法則が作用している。その後、ハッティ人はヌビア人（ノア）と共に故地メソポタミアを目指して南下した。

■BC 5千年 「ヒッタイト人誕生」

オリエントに南下してきたハッティ人は、製鉄の種族として古代オリエント地域で活動していたタタと出会い、連合体を築いた。それが「ヒッタイト人」である。ヒッタイトの名の由来はハッティとティタンの組み合わせである。ハッティ+ティタン=ハッテイタ=ヒッタイトとなる。古代タルタロス（オーストラリア）で製鉄を営んでいたデウカリオン（製鉄の種族）は、アナトリアで製鉄技術を発展させたため、「ヒッタイト帝国」は鉄器を振るい、一流の古代国家として繁栄した。

■BC 1900年 「ヒッタイト帝国誕生」

「製鉄の種族タタ」を仲間に付け、鉄器という武器を得たハッティ人の帝国は、エジプト王国に匹敵する大帝国としてオリエント地域に覇を唱えた。

■BC 1200年 「ベーシュタード王国」

トゥルシア人は、ペリシテ人、チェケル人、ウェシュシュ人、ルカ人、シェクレシュ人などと共に、デニエン人、シェルデン人によって国家を滅ぼされたトロイア人、ミケーネ人、ヒッタイト人の亡命を助け、イランの地に誘導した。彼らはベーシュタード王国を築いた。

■BC1027年 「ベッシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「ホータン誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したハッティ人は、タリム盆地に移住し、拠点を「ホータン」と命名した。ホータンの名の由来はヒッタイトと同じく、ハッティとティタンの組み合わせである。ハッティ+ティタン=ハッィタン=ホータンとなる。ホータンは、後に「ヒッタイト人の大航海時代」によって、マヤに移住した。そのため、OTANの名に似ているとして、大谷が大宛に来た際、ホータンを篡奪している。

■BC1027年 「クアディ族誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したハッティ人は、現地人と混合して「クアディ族」を形成した。クアディの名の由来はグティである。グティ=グアティ=クアディとなる。彼らは、後にスワヒリから戻ったトゥルシア人と連合して「シュレースヴィヒ」を建設する。

■BC7世紀 「クシュ人の大航海時代」

■BC7世紀 「ヴィデーハ誕生」

「クシュ人の大航海時代」に参加したベドウィン族は、インドに上陸した。ベドウィン族は「ヴィデーハ王国」を建設した。ヴィデーハの名の由来はプタハである。プタハ=パイターハ=ヴィデーハとなる。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■BC327年 「フィダッハ誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したヴィデーハは、ピクトランドに入植し「フィダッハ」を生んだ。フィダッハの名の由来はヴィデーハである。ヴィデーハ=フィデーハ=フィダッハと

なる。

■BC4世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■BC4世紀 「ポウハタン連邦誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」第3の拠点は北アメリカ北東部森林地帯である。ここには、ホータン人が残留した。彼らは、後にヨーロッパから訪れるポーニー族（ポエニ人）と組んで「ポウハタン連邦」を形成した。ポウハタンの名の由来はボイイとホータンの組み合わせである。ボイイ+ホータン=ボイホタン=ポウハタンとなる。

■BC4世紀 「ゴート族誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」第5の拠点はスカンジナビア半島である。ここには、タタール人とホータン人が残留した。ホータン人はスカンジナビアに落ち着いて「ゴート族」を称した。ゴートの名の由来はホータン（ハ行はカ行を兼ねる）である。ホータン=コータン=ゴートとなる。後に、ルシタニア人がゴート族と合体し、ルシタニア人が主導するゴートは「西ゴート族」となり、正統なゴートは「東ゴート族」となる。

■BC113年 「バタヴィア族誕生」

フィダッハは、キンブリ人に誘われ、ケルト文化が華やぐゲルマン人台頭前夜のヨーロッパに移った。フィダッハは「バタヴィア族」を生んだ。バタヴィアの名の由来はベドウィンである。ベドウィン=ベドウィア=バタヴィアとなる。キンブリ人とテウトニ族の連合体は、女神ダヌの指揮により、BC113年にローマに侵入するというが、撃退されてしまう。その後、BC102年の「アクエセクスチェの戦い」でテウトニ族はローマ軍の前に粉碎され、BC101年の「ヴェルケレの戦い」ではキンブリ人が大いに敗れた。

■BC73年 「キンブリ人の大航海時代」

■BC69年 「カーンヴァ朝誕生」

「キンブリ人の大航海時代」に参加したバタヴィア族は、インドに移住した。キンブリ人の主導でシュンガ朝の王位を篡奪した一行は「カーンヴァ朝」を開いている。カーンヴァの名の由来はキンブリとバタヴィアの組み合わせである。キンブリ+バタヴィア=キンヴィア=カーンヴァとなる。

■BC23年 「禿髪部誕生」

カーンヴァ朝が滅ぶと、バタヴィア族はキンブリ人、テウトニ人と共にインドからモンゴルに移住した。バタヴィア族は「禿髪部（トゥファ）」を結成して「鮮卑」に参加した。禿髪（トゥファ）の名の由来はプタハである。プタハ=タハ=トゥハとなる。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「八幡神社誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加しなかった禿髪部は、現大分県に上陸した。彼らは、「八幡信仰」を体系化した。八幡の名の由来は禿髪部（バタヴィア）の先祖ヤペテである。八幡神社に「応神天皇崇拜」が盛り込まれているのは、八幡神社の創立者が「鮮卑」の出身であることを意味している。

■AD471年 「ベートーヴェン誕生」「バタイユ誕生」

中国人の顔をした禿髪部（トゥファ）はヨーロッパ人と混合して「ベートーヴェン」「バタイユ」の名を誕生させた。ベートーヴェン、バタイユの名の由来は両方とも禿紙部の先祖ベドウィンである。ベドウィン=ベドーウィン=ベートーヴェンとなり、ベドウィン=ベドーウィ=バタイユとなる。

■AD554年 「ゲーテ誕生」

AD493年に東ゴート王国が成立したが、テヤ王が「モンラクタリウスの戦い」で戦死すると、東ゴート族はヨーロッパに四散した。この系統からはドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング

・フォン・ゲーテが輩出されている。ゲーテの名の由来はゴートである。

■AD962年 「畠山氏誕生」

AD962年、神聖ローマ帝国が成立すると、イタリア半島に残留していた東ゴート族は、これを嫌ってイタリアを脱出し、日本に落ち延びた。イタリア人の顔をした東ゴート族は、秩父重弘に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「畠山氏」の祖、畠山重能である。畠山の名の由来は「ハッティの山」である。ハッティの山とはつまり、東ゴート王国時代に縁があるアルプス山脈のことである。

■AD962年 「八田氏誕生」「小田氏誕生」

AD962年、神聖ローマ帝国が成立すると、イタリア半島に残留していた東ゴート族は、これを嫌ってイタリアを脱出し、日本に落ち延びた。イタリア人の顔をした東ゴート族は、宇都宮氏の祖、藤原兼仲に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「八田氏」の祖、八田宗綱と「小田氏」の祖、八田知家である。八田の名の由来はハッティであり、小田の名の由来はゴートである。ゴート=オート=小田となる。因みに、織田氏は西ゴート族である。

■AD1749年 ヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテ生誕

■AD1770年 ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン生誕

■AD1897年 ジョルジュ・バタイユ生誕

■AD1947年 小田和正生誕 「オフコース誕生」

◆ポイニクスの歴史

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ポイニクス誕生」

オーストラリア東部（テュロス王国）に赴いたペイトーは、グレニコスと連合してフェニキア人の祖である「ポイニクス」を生んだ。ポイニクスの名の由来はペイトーとグレニコスの組み合わせである。ペイトー+グレニコス=ペイニコス=ポイニクスとなる。フェニキアの名の由来はポイニクスである。ポイニクス=ポイニキャ=フェニキアとなる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ BC 7千年 ポイニクス、テーバイ王国に移住

「デウカリオンの大航海時代」に参加したポイニクスは、メソポタミアに入植したが、後に、西アフリカにあるテーバイ王国に移住した。テーバイ王国は、カドモスの血統が統治し、エウロペー（ヨルバ族）も住んでいた。

■ BC 7千年 「フェニキア人誕生」

フェニキア人は突然登場したように見えるが、それはサハラにあったテーバイ王国がフェニキア人だけでなく、自らの歴史もろとも強力な核兵器で完全に消滅したためである。ポイニクスはサハラを拠点に地中海に赴いて交易に勤しんだと考えられる。

■ BC 11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■ BC 1027年 「黄帝誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したフェニキア人黄河流域に入植し、「黄帝（ファンディ）」を誕生させた。黄（ファン）の名の由来はフェニキアである。黄帝（フェニキア人）は、神農と組んで蚩尤（ゼウス）と対決し、これを下したと伝えられている。黄帝の子孫は「黄氏（ファン）」となり、中国全土に拡散した。

■ B C 9 世紀 「ポエニ人誕生」

カルタゴが繁栄すると、フェニキア人も交易に参加し、「ポエニ人」と呼ばれた。ポエニの名の由来はポイニクスである。ポイニクス=ポイニ=ポエニとなる。フェニキア人もポエニ人も、同じ種族である。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代（東方組）」

■ B C 7 世紀 「ペー族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したポエニ人は、インドシナ半島に移住し「ペー族」を生んだ。ペーの名の由来はポエニである。ポエニ=ポエーニ=ポエー=ペーとなる。その後、ペー族は、アンガ人、シャム人と共に春秋戦国時代の中国に上陸する。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代（西方組）」

■ B C 7 世紀 「ボイイ族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したポエニ人は、バルト海に入植い「ボイイ族」となった。ポエニ=ポエエニ=ボイイとなる。

■ B C 3 9 0 年 「ウェル・サクレム」

大谷の祖であるドルイド僧による「一向一揆」の原型がこれである。「数で優れた者を圧倒する」という戦法が、古代ローマ相手に実施されていたのだ。多数の愚か者を指揮して少数の優れた者を数で圧倒する。これは、確かに賢い方法ではあるが、優れた者が多数である時、この方法は機能しない。ドルイド教が指揮した「ウェル・サクレム」は、それを教えてくれる。ローマには優れた兵士が大勢いたのだ。この時、ドルイド教は、強い敵と戦う前には、強い者たちを弱体化しなければならない、ということ学んだ（そして、その研究と実践は近代になって中世ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本で発揮されることになる）。

■BC385年 「バイエルン誕生」

「ウェルサクレム」に参加したボイイ族は、フランク族と連合して現バヴァリア地方に「バイエルン」を築いた。バイエルンの名の由来はボイイとフランクの組み合わせである。ボイイ+フランク=ボイイラン=バイエルンとなる。

■BC335年 「ウェル・サクレム（アレクサンダー大王に謁見）」

BC335年、ドルイド僧の指揮下にあったガリア人は、ドナウ川とモラヴァ川の合流地点で、かのアレクサンダー大王と会見している。強い者と初めて対面する時、いい顔をして必ず下手に出る彼らは、大王に忠誠を示す品々を贈った。アレクサンダー大王は、自身の名声ガリアにまで轟いていることを期待して「おまえたちが一番恐ろしいと思う人物は誰だ？」と問うた。これに対し、ガリア人は「自分たちに怖いものは何もない」と答えた。この時、感銘を受けたアレクサンダー大王はガリア人を友と呼び、同盟を築こうとした。だが、大王は後にこの発言を撤回し「あいつらはただのホラ吹きだ」と一蹴し、ガリア人を追放している。この報復としてドルイド僧はアレクサンダーを暗殺した。これにより、マケドニア帝国という障害が除去されたガリア軍は、バルカン半島になだれ込んだ。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■BC327年 「ポウハタン連邦誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したポエニ人は、北アメリカ北東部森林地帯に入植した。彼らは、後にヨーロッパから訪れるポーニー族（ポエニ人）と組んで「ポウハタン連邦」を形成した。ポウハタンの名の由来はボイイとホータンの組み合わせである。ボイイ+ホータン=ボイホタン=ポウハタンとなる。

■BC327年 「ポーニー族誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」第6の拠点北アメリカ大陸である。ヨーロッパ人の顔をしたボイイ族は、現地人と混合して「ポーニー族」を形成した。ポーニーの名の由来はポエニである。ポ

エニ=ポエーニー=ポーニーとなる。

■BC327年 「スー族誕生」「コマンチ族誕生」

ポーニー族は、更にフェニキア文字のひとつシグマを現地人に冠した。シグマは分離して「スー族」と「コマンチ族」に分かれた。シグマ=シー+グマン=スー+コマンチとなる。

■BC327年 「オマハ族誕生」「クロウ族誕生」

ポーニー族は、更にフェニキア文字のひとつオミクロンを現地人に冠した。オミクロンは「オマハ族」と「クロウ族」に分離した。オミクロン=オミイ+クロウン=オマハ+クロウとなる。

■BC329年 「匈奴（キョンヌ）誕生」

BC329年に楚の家臣団が分裂すると熊氏は、黄氏と福建人を率いてモンゴルに移住した。祖を同じくする羌族や、ペルシア帝国の滅亡を機にモンゴルに来ていたアーリア人（アラン人）、タタ（タタール人）と組んだ熊氏は「匈奴（キョンヌ）」を結成した。匈奴の名の由来は熊・羌（キャン）と黄（ファン）の組み合わせである。キャン+ファン=キャン+ファンヌ=キャンヌ=匈奴となる。匈奴の名はある意味フェニキアを逆にひっくり返したものである。

■BC327年 「マヤ人誕生」「ポポル・ヴー誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したボイイ族は、ユカタン半島に入植した。ボイイ族は、現地人にフェニキア文字のひとつミューを冠して「マヤ人」を生んだ。ミュー=ミヤー=マヤとなる。また、マヤ人は、「ポポル・ヴー」を編纂した。ポポルヴーの名の由来はバヴァリアとボイイの組み合わせである。バヴァリア+ボイイ=バヴァラ+ヴィイ=ポポル・ヴーとなる。

■BC279年 「ウェル・サクレム（聖地デルポイ侵攻）」

BC279年、ついにガリア人は聖地デルポイを蹂躪し、略奪の限りを尽くしたが、聖地デルポイを治めていたディオニュソス密儀と対立することになる。ディオニュソス密儀のダルダニア人は、ドルイド教とは「神託」を学んだ師と弟子の間柄であった。だが、彼らは、ガリア人の侵

攻をドルイド教の裏切りと判断し、「アポロンの呪い」とウソぶいて、ガリア人の指揮官を暗殺した。

ドルイド僧は、これを単なるウソと見抜いたが、何も知らないガリア人兵士は恐れおののき、軍団は周囲に四散した。後に、人喰い人種を嫌っていた正統なケルト人は、ドルイド僧から逃れるようにアナトリア半島に落ち延び、独自にガラティア王国を建てた。

■BC 226年 「夫余誕生」

BC 226年、燕が滅亡すると、ペー族はモンゴルから満州に移って「解氏（へ）」を称して「夫余（プユ）」を生んだ。解（へ）、夫余（プユ）の名の由来はペー、或いはポエニである。ポエニ＝プユニ＝プユとなる。

■BC 52年 「ハウエル誕生」「パウエル誕生」

ウィルキングトリクスの蜂起に参加するが、「アレシアの戦い」でローマ軍に敗北する。ボイイ族は、敗北を機にバイエルンに戻るが、バイエルンを発ってブリテン王に移住した。ボイイ族はバイエルンを由来に「ハウエル」「パウエル」、そしてボイイを由来に「ヴァイ」などの名を成した。バイエルン＝パウエルン＝パウエル＝ハウエルとなる。

■AD 45年 「南匈奴誕生」

タイ族（道教）、扶余は、匈奴に参加した。この時に、匈奴は「北匈奴」と「南匈奴」に分裂した。ペー族の連合体は「南匈奴」に身を寄せていた。

■AD 93年 「フン族誕生」

北匈奴が滅ぶと、黄氏は匈奴を解散して「フン族」として中央アジアに進出を果たす。フンの名の由来は黄（ファン）である。ファン＝ハン＝フンとなる。フン族には、「サートヴァーハナ朝」のサートヴァタ族（サトゥルヌス）とホン族も加わっている。フン族は、アラン族と共に東ゴート族を撃破したため、東ゴート族は安全なローマ領内に避難した。これを機に「ゲルマン人の大移動」が始まる。この強靱な騎馬民族に魅了されたアッチラ（サトゥルヌス）は、サートヴァタ族の力を借りてフン族を完全な支配下に置いた。

■AD166年 「太平道誕生」

「党錮の禁」が起きると、タナトスの宦官が後漢を私物化したため、社会は腐敗し、何事も賄賂で決められる事態になった。南匈奴に属していた扶余、道教、張角は、タナトスを皆殺しにするために「太平道（タイピントオ）」「五斗米道（ウートミタオ）」を設立した。太平道の名の由来はヴィディエ（張氏）、ペー、道教（ヴィディエ）の組み合わせであり、五斗米道の名の由来はヴィディエとミン（閔）、ヴィディエの組み合わせである。

■AD189年 「白蓮社誕生」

夫余は、太平道が解散すると「白蓮教（パイリャン）」を結成した。パイリャンの名の由来は公孫度は後漢により遼東太守に任命され、その後、独立した。公孫淵は魏王に上洛を求められるが、反旗を翻して「燕王」を称した。だが、一族が処刑されると公孫淵は「大和人の大航海時代」に参加してブリテン島に渡った。

■AD284年 符洪生誕 「符氏誕生」

夫余は、太平道が解散すると「符氏（フー）」を生んだ。符（フー）の名の由来はペーである。ペー＝ヘー＝フーとなる。符洪は、事実上の「前秦」の創始者である。

■AD3世紀 「ピュー王国誕生」

公孫氏が滅ぶと、一部ペー族は遼東半島からミャンマーに移って「ピュー王国」を建てた。ピューの名の由来はペーである。ピュー族は、後にタイに移って「パヤオ王国」を、インドに移って「ホイサラ朝」を開いている。

■AD351年 符建、初代前秦王に即位 「前秦誕生」

■AD357年 符堅、第3代前秦王に即位

■AD394年 符崇、第6代前秦王に即位

■AD4??年 「ポーウィス王国誕生」

AD4??年、ボイイ族は、「ポーウィス王国」をブリテン島に建てている。ポーウィスの名の由来はボイイである。ボイイ=ボイイス=ポーウィスとなる。

■AD445年 「黄氏誕生」「舟木氏誕生」「船井氏誕生」「船瀬氏誕生」

人身御供の種族であるアッチラを嫌ったフン族は、ヨーロッパ支配を放棄して東方に帰還した。中国に上陸したフン族は「黄（ファン）」の名を継承した。また、日本に上陸したフン族は「河野氏」を称した。羌（キャン）に河（かわ）を当て字し、「キャンの土地」の意を含んだ「河野氏」を冠した。更に、フン族は日本人と混合して「舟木」「船井」「船瀬」などの名を形成した。舟木、船瀬の名の由来はフェニキアであり、船井の名の由来はフンである。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「ピュー族誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したポーニー族は、ミャンマーに入植し、「ピュー族」を生んだ。ピューの名の由来はボイイである。ボイイ=ポイイ=ピューとなる。

■AD1094年 「パヤオ王国誕生」

AD960年、宋が建つと符氏はタイに移住した。この時、彼らは「パヤオ王国」を築いた。パヤオの名の由来はボイイである。ボイイ=ポイイ=パヤオとなる。この王国はAD1338年まで続いた。

■AD11世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD11世紀 「ボヘミア誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したマヤ人は、ブリテン島を経てヨーロッパに上陸し、「ボヘミア」を築いた。ボヘミアの名の由来はボイイとマヤの組み合わせである。ボイイ+マヤ=ボヒイマヤ=ボヘミアとなる。

■AD1338年 「ピュー族の大航海時代」

■AD1338年 「ポー誕生」「ヒューズ誕生」

パヤオ王国賀滅ぶと、王国の中核を成していたピュー族はパヤオ王国（符氏）と連合して西方に向かう計画を立てた。ピュー族は、イングランドに上陸してイギリス人と混合し、「ポー」を、パヤオ王国（符氏）は「ヒューズ」などの姓を生んだ。

■AD1905年 ハワード・ヒューズ生誕

■AD1940年 ジョン・ヒューズ生誕

■AD1947年 コージー・パウエル生誕

■AD1950年 船瀬俊介生誕

■AD1959年 デビッド・コレシュ（ヴァーノン・ウェイン・ハウエル）生誕

■AD1960年 スティーブ・ヴァイ生誕

■AD1966年 C・トーマス・ハウエル生誕

◆フェニキア人の歴史

■BC 7千年 「フェニキア人誕生」

フェニキア人は突然登場したように見えるが、それはサハラにあったテーバイ王国がフェニキア人だけでなく、自らの歴史もろとも強力な核兵器で完全に消滅したためである。ポイニクスはサハラを拠点に地中海に赴いて交易に勤しんだと考えられる。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「スンダ族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフォキス人とフェニキア人はその後、ジャワ島からスラウェシ島に移り、現地人と混合して「スンダ族」「ブギス族」を形成した。スンダの名の由来はフェニキア文字ゼータである。ゼータ=ゼンタ=スンダとなる。

■BC 7世紀 「大伴氏誕生」「久米氏誕生」「筑紫国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフェニキア人は、ガド族、アシェル族、イッサカル族、ヤコブ、多氏と共に九州に上陸した。フェニキア人は多氏と連合して「大伴氏」を形成し、現地人にフェニキア文字のひとつシグマを冠して「久米氏」を誕生させた。大伴氏の名の由来は「多」とフェニキアに当て字した「判（はん）」の組み合わせである。久米氏の名の由来はシグマであり、シグマ=シグメ=久米となる。大伴氏、久米氏は連合して「筑紫」に拠点を得ている。筑紫の名の由来は筑（シグマ）と紫（フェニキアン・パープル）の組み合わせである。他にも、久米氏はシグマを由来に五島列島に「知訶（ちか）」の名を残している。

■BC 7世紀 「魏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したフェニキア人は、ルーベン族、ダン族、マウリ人、アング族、シン族と共に黄河流域に入植した。フェニキア人は、現地人にフェニキア文字のひとつ

パイを冠した。やがてパイは変遷を重ねて魏（ウェイ）と呼ばれた。パイ＝ハイ＝ウェイ（魏）となる。

■BC332年 「ウェネト人誕生」

アレクサンダー大王の侵攻を機に、テュロス人がフェニキアを後に東西に移住した。東方組は、黒海に侵入して中央アジアに上陸し、「ウェネト人」を称した。ウェネトの名の由来はフェニキアである。フェニキア＝ヴェネツィア＝ウェネトとなる。ウェネト人は、スラヴ人（シェラフ）、アント人（アンドーラ）、スクラブ人（スカラベ）と共に「スラヴ民族」の礎を成し、「ヴェネディクト会」「ヴェネツィア共和国」を建設するに至る。

■BC227年 「倭人誕生」

BC227年、魏が滅ぶと、黄河のフェニキア人である魏氏は、九州のフェニキア人である筑紫国を訪れ、北九州に入植した。彼らは「倭人」となり、北九州は「倭国」と呼ばれた。倭（わ）の名の由来は魏（ウェイ）である。ウェイ＝ウェ＝わとなる。

■BC227年 「大江氏誕生」「土師氏誕生」

この時代に、倭人（フェニキア人）は、大和人にフェニキア文字のひとつエータを冠し、多氏と組んで「大枝氏」を形成した。大枝の名の由来は多（大）とエータ（枝）の組み合わせである。後に大枝氏は「大江氏」に名を変えている。また、倭人は、大和人にフェニキア文字のひとつプシーを冠して「土師氏」を形成している。土師（はじ）の名の由来はプシーである。プシー＝ハシー＝土師となる。

■AD220年 「魏復活」

「大和人の大航海時代」前夜、大和国の倭人は再度中国に覇を唱えるべく、日本を後に中国に出撃した。AD220年、倭人は「魏」を再建した。しかし、AD265年に「魏」が滅ぶと、倭人は日本に帰還し、「大和人の大航海時代」の準備に入った。この大航海時代の計画は、中国の地にいた頃から多氏が温めていたものと考えられる。そのため、多氏と倭人が日本に帰還する際、計画に賛同した中国・朝鮮の有志をたくさん連れて戻っている。

■ A D 2 2 7 年 「大和国誕生」

B C 2 2 7 年、魏が滅んで魏氏が日本に来て「倭人」となり、倭人が多氏の拠点を訪れて初めて「大和」の漢字表記が生まれた。倭人（わ）の名の由来は魏（ウェイ）である。大和の漢字表記の由来は「多（呉）」と「倭（魏）」の組み合わせである。大（多）＋和（倭）＝大和となる。そして、ヤマトの読みは「ティアマト」の名に因んでいる。

A D 2 2 2 年に多氏が「呉」を、A D 2 2 0 年に倭人が「魏」をそれぞれ再建すると、彼らは共同でティアマトの頃から存在するヤマト地方を掌握し、「大和」の漢字表記を使用して「大和国」とした。一般的な学者は、古代人が広範囲の拠点を勢力圏を一度に治めることは不可能だという偏見を持つため、「魏志倭人伝」には日本で起きたことしか書かれていないと考えている。しかし、「魏志倭人伝」は、日本のことを記録した書物ではなく、大和国、北九州、タイで起きた事柄を記録した書物と考えることができる。大和人は、呉、魏、大和国を同時に支配したし、九州の倭人は、タイにあった邪馬台国と交流をしていた。

■ A D 2 6 5 年 魏滅亡を機に、大和国に帰還

「大和人の大航海時代」前夜、倭人は再度中国に覇を唱えるべく、日本を後に中国に出撃した。A D 2 2 0 年、倭人は「魏」を再建した。しかし、A D 2 6 5 年に「魏」が滅ぶと、倭人は日本に帰還し、「大和人の大航海時代」の準備に入った。この大航海時代の計画は、中国の地にいた頃から倭人が温めていたものと考えられる。そのため、多氏と倭人が日本に帰還する際、計画に賛同した中国・朝鮮の有志をたくさん連れて戻っている。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 4 2 1 年 「ヴェネツィア人誕生」

B C 5 6 年、ブルターニュ半島からアドリア海に移住したウェネト人は、イヴス・アルトゥスの小島群の中に街を建設した。「ヴェネツィア共和国」の礎である。ヴェネツィアの名の由来はフェニキアである。フェニキア＝フェネチア＝ヴェネツィアとなる。

■ A D 5 2 9 年 「ベネディクト会誕生」

AD529年、ウェネト人のベネディクトスは、モンテ・カッシーノに修道会「ベネディクト会」を創設した。ベネディクトの名の由来はウェネトである。ウェネト＝ウェネティ＝ベネディクトとなる。

■AD697年 パオルッチョ・アナフェスト、初代ドージェに就任 「ヴェネツィア共和国誕生」

海の民トゥルシア人、フェニキア人の直系であるヴェネツィア人は、AD1124年に長期に渡るテュロス攻略に参加し、テュロスの1/3の領有権を獲得した。これはある意味、テュロス人の子孫であるヴェネツィア人がアレキサンダー大王の侵攻を機に中央アジアに逃げて以来、1500年ぶりとなる故地への帰還だった。ドミニコ会が、領内で魔女狩り裁判を行うことを許可せず、悪と戦う意志を持っていたヴェネツィア人だが、AD1779年にナポレオンに降伏した。カルタゴやフェニキアと同様、ここに謎めいた国家、ヴェネツィア共和国は滅亡した。

■AD737年 「ボルジギン誕生」

一方、大伴古慈斐の一族はモンゴルに及んで「ボルジギン家」を成し、後裔としてユーラシアの覇者チンギス・ハーンを儲けている。ボルジギンの名の由来は古慈斐（フルジビ）である。フルジビ＝フルジビン＝ブルジギン＝ボルジギンとなる。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「佐久間氏誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したインディアンの部族スー族、コマンチ族は、フェニキア文字のひとつ「シグマ」の部族である。彼らは、お互い合体した上で日本人と混合し、「佐久間氏」を生んだ。佐久間の名の由来はフェニキア文字のひとつ「シグマ」である。シグマ＝シクマ＝佐久間となる。

■AD11世紀 「須久毛氏誕生」「大相模氏誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」を経て、アメリカ大陸から日本に移住したスー族・コマン

チ族は日本人と混合して「佐久間氏」を成したが、一方では、「野与党」に加わる「須久毛氏」「大相模氏」を誕生させた。須久毛、相模の名の由来はフェニキア文字のひとつシグマである。こうして見ると、「野与党」はマジヤール人、スイス人、ウイグル人、ポリネシア人、インディアンで構成されていた。

■AD1206年 「大友氏誕生」

テムジンが成長してチンギス・ハーンとなり、モンゴルを席卷すると、ボルジギン家の一部が日本に帰還することを決めた。大伴古慈斐の子孫である彼らは、「判」を「友」に換えて「大友氏」を称した。まず、ボルジギンに因んで「古庄氏」を称した彼らから古庄能直が誕生した。後に、古庄能直は近藤能成の娘に接近して自身の血統を打ちたてる。その時に近藤能直が生まれている。この近藤能直が大友を称して「大友氏」が始まっている。

■AD18世紀 「グンマ王国誕生」「ゴンマ王国誕生」

大友宗麟の子、大友義統が島津氏に敗北すると、九州を離れた大友氏は、エチオピア・ギベ地方に移住した。大友氏は、フェニキア文字のひとつ「ガンマ」を由来に「グンマ王国」「ゴンマ王国」を建てた。

■AD1935年 筑紫哲也生誕

■AD1944年 久米宏生誕

■AD1952年 佐久間正英生誕

■AD1954年 大友克弘生誕

■AD1956年 大友康平生誕 「ハウンドドッグ誕生」

ムシシの歴史

◆モーゼス（ムシシ）の歴史

■50万年前 「ムシシ誕生」

オリジナル人類ムシシは湖水地方に暮らし、筋骨隆々なパプア人の姿をしていた。

■50万年前 「クウォスの大移動時代」

■50万年前 「ササク族誕生」

「クウォスの大移動時代」に参加し、アフリカ大陸を出たムシシは、チッタゴンからパプアに移った。彼らは、クウォスと連合して「ササク族」を生んだ。ササクの名の由来はムシシとクウォスの組み合わせである。ムシシ+クウォス=シシクウォ=ササクとなる。

■45万年前 「ミマース誕生」

「オロクンの大移動時代」によってチッタゴンに新しい人類が訪れると、オロクンを代表する新しい人類とチュクウを代表する古い人類が共同体を組んだ。これにより「エピアルテース」「エンケラドス」「グラティオン」「パッラース」「ヒッポリュトス」「ポリュポーテース」「ポルピュリオン」「ミマース」「アグリオス」の獣人9部族が生まれた。

ミマースは、ムワリとムシシが連合することで生まれた。ミマースの名の由来はムワリとムシシの組み合わせである。ムワリ+ムシシ=ムワムシ=ミマースとなる。彼らはみな、サスカッチのような風貌をしていたと考えられる。ビッグフット目撃談によると、彼らは時速60キロで走り、3mの高さを跳躍し、片手で岩を投げ、素手でグリズリーを殺すという。「神統記」に於けるキュクロプス、ヘカトンケイル、ギガースなどの描写、そのままである。

■50万年前 「盤古の大移動時代」

■50万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 50万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」によってチッタゴンから中国、「獣人の大狩猟時代」によってモンゴル、シベリアに入植したイエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 50万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「アイス族誕生」

「獣人の大狩猟時代」により、獣人部族はシベリアからアメリカ大陸に渡った。人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、南東部（現ミシシッピ～マイアミ）に居を構えたミマースは「アイス族」を称した。アイスの名の由来はミマースである。ミマース＝ミマイス＝アイスとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ペルセウス（ペルセーイス）誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、パッラーズと共に「ペルセウス（ペルセーイス）」を生んだ。ペルセウスの名の由来はパッラーズとムシシ（ミマース）の組み合わせである。パッラーズ＋ムシシ＝パッラシシ＝パラシーシ＝ペルセウスとなる。

■ 30万年前 「クリュセーイス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、クリュテイオスと共に「クリュセーイス」を生んだ。クリュセーイスの名の由来はクリュテイオスとムシシ（ミマース）の組み合わせである。クリュテイオス+ムシシ=クリュシーシ=クリュセーイスとなる。

■ 30万年前 「パシス誕生」「レソス誕生」「ネソス誕生」「アイセポス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、エバシ、イマナ、エウリュトスと共に「パシス」「ネソス」「レソス」を生んだ。エバシ+ムシシ=パシシ=パシスとなり、イマナ+ムシシ=ナシシ=ネソスとなり、エウリュトス+ムシシ=リュシシ=レソスとなる。また、ミマースは、自分の後身パシスと組んで「アイセボス」を生んでいる。アイセボスの名の由来はアイス（ミマース）とパシスの組み合わせである。アイス+パシス=アイスパシ=アイセポスとなる。

■ 30万年前 「ヘルモス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、パッラースと共に「ペルセウス（ペルセーイス）」を生んだが、同時にもうひとつの部族を生んだ。「ヘルモヌ」である。ヘルモスの名の由来はパッラースとムシシ（ミマース）の組み合わせである。パッラース+ムシシ=パッラムシ=ハラムシ=ヘルモスとなる。

■ 30万年前 「グレニコス誕生」

「ディンカの大航海時代」に参加したディンカがオセアニアを訪れると、ディンカは、キャラ、ムシシと組んで「グレニコス」を生んだ。グレニコスの名の由来はキャラ、ディンカ、ムシシの組み合わせである。キャラ+ディンカ+ムシシ=キャラナコシ=グレニコスとなる。その後、グレニコスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「ナクソス誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したグレニコスは、エーゲ海に「ナクソス」の名を生んだ。ナクソスの名の由来はディンカとムシシの組み合わせである。ディンカ+ムシシ=ンカシシ=ナクソスとなる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「サイシャット族（ヘラクレス）誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセウスは、台湾に上陸してクリュセーイスと共に合体部族を生んだ。この合体部族の誕生に参加したのはペルセーイス側からはパッラー（ヴィディエ+レザ）、ムシシが、クリュセーイス側からはグラティオンとムシシである。しかし、グラティオン自体がアグリオス（チュクウ+ルワ）とディオナー（ヴィディエ+ウラニアー）の合体部族である。つまり、ペルセーイスからは3部族、クリュセーイスからは5部族が参加している。

この時に生まれたのは、台湾少数民族として知られる「サイシャット族」である。サイシャットの名の由来はチュクウ、ムシシ、ヴィディエの組み合わせである。チュシシディ=ツオウセイイシディ=サイシャットとなる。サイシャット族は後に「ヘラクレス」と呼ばれることになる。ヘラクレスの名の由来はペルセーイスとクリュセーイスの組み合わせである。ペルセーイス+クリュセーイス=ペルクリュセ=ヘラクレスとなる。

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「メンフィス誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したミマースは「カオスの大移動時代」に参加してオーストラリアに移住し、次に「ウラヌスの大移動時代」に参加して古代ギリシアに渡った。ミマースはギガースの種族としてティタン神族に加わるが、その後「ギガントマキア」に敗北すると、ギリシアを脱出してエジプトに移住した。彼らはエジプトの地に「聖地メンフィス」を建設した。メンフィスの名の由来はミマースである。ミマース=ミンマース=メンフィスとなる。

■ 4万年前 「高御産巢日神誕生」「神産巢日神誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ティケー、ニヤメと組んで「タカミムスビ」を儲けた。タカミムスビ、カミムスビの名の由来はティケー、ミマース、日（ニヤメ）の組み合わせである。ティケー＋ミマース＋日＝ティケミマス日＝タカミムスビ＝カミムスビとなる。

■ 4 万年前 「宇摩志阿斯訶備比古遲神誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ティケー、ニヤメと組んで「ウマシアシカビヒコジ」を儲けた。ウマシアシカビヒコジの名の由来はミマース、アジア、ティケーの組み合わせである。ミマース＋アジア＋ティケー＋日＝イマスアシティケ日＝ウマシアシカビとなる。

■ 4 万年前 「天忍穗耳命誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、イマナ、アシアーと混合して「アメノオシホミミ」を成した。アメノオシホミミの名の由来はイマナ、アシアー、ミマースの組み合わせである。イマナ＋アシアー＋ミマース＝イマナアシアミマ＝アメノオシホミミとなる。

■ 4 万年前 「太陽神シャマシュ誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ザムビと組んでタイ（シャム）に「太陽神シャマシュ」を生んだ。シャマシュの名の由来はザムビとムシシの組み合わせである。ザムビ＋ムシシ＝ザムシ＝シャマシュとなる。

■ 2 万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2 万年前 「ヤマ神（閻魔）誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したシャマシュは、火星に「ヤマ神（閻魔）」を生んだ。ヤマ神（閻魔）の名の由来はシャマシュである。シャマシュ＝シャマ＝ヤマとなる。ヤマ神は、火星

の最高峰「羅ホウ山」で、反自然的な人々を裁き、制裁を加えた。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「神淳名川耳（綏靖天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「神淳名川耳」を誕生させている。ヌナカワミミの名の由来はイナンナの河とミマースの組み合わせである。イナンナの河+ミマース=ナンナカワミマ=ヌナカワミミとなる。つまり、欠史八代の一部天皇は、3mを誇る巨体の持ち主だったことになる。

■ 1万3千年前 「観松彦（孝昭天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「観松彦」を誕生させている。ミマツヒコの名の由来はミマースである。ミマース=ミマツ=ミマツヒコとなる。つまり、欠史八代の一部天皇は、3mを誇る巨体の持ち主だったことになる。

■ 1万3千年前 「御間城入彦（崇神天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したミマースは、黒龍江に天皇家に属する「御間城入彦」を誕生させている。ミマキイリヒコの名の由来はミマースとエウリュトスの組み合わせである。ミマース+エウリュトス=ミマスエウリュ=ミマキイリヒコとなる。つまり、欠史八代の一部天皇は、3mを誇る巨体の持ち主だったことになる。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ BC 7千年 「ギルガメシュ誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加したミマースは、モンゴルからメソポタミアに移住し「ギルガメシュ」を生んだ。ギルガメシュの名の由来はアルゲースとミマースの組み合わせである。アルゲース+ミマース=アルゲマース=カルゲマス=ギルガメシュとなる。

■BC40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC40世紀 「ママクーナ誕生」「ママキーヤ誕生」「ママアルパ誕生」「ママザラ誕生」

「シュメール人の大航海時代」によってペルーに移住すると、ミマースは様々な種族と連合して「ママクーナ」「ママキーヤ」「ママアルパ」「ママザラ」などの神々を誕生させた。ママの名の由来はミマースである。「ママクーナ」はミマースとアルキュオネウスの組み合わせ、「ママキーヤ」はミマースとアルキュオネウスの組み合わせ、「ママアルパ」はミマースとエウローペーの組み合わせ、「ママザラ」はミマースとメトセラの組み合わせである。これらの神々は、インカ帝国の神々として知られている。

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC35世紀 「武蔵国誕生」

「サムエルの大航海時代」によって、ペルーから出羽国に移住したミマースは、単独で関東地方に移り「武蔵国」を築いた。武蔵の名の由来はミマースの先祖、オリジナル人類ムシシである。ムシシ＝ムサシ＝武蔵となる。

■BC32世紀 「モーゼス誕生」

「モーゼス」とは武蔵国の人々のことを指している。モーゼスの名の由来は武蔵である。武蔵＝ムーサシ＝モーゼスとなる。数万年前から八代湾に居を構える葦原中津国は、高天原（台湾）と同盟して「イスラエル」を、また、出羽国の十和田の縄文人と組んで「エジプト」と呼ばれる連合王国を形成していた。イスラエルの名の由来はアジアーとブリアレオースの組み合わせ、エジプトの名の由来はアジアーとプテの組み合わせである。

そこに、能登を追放され、パラオ諸島に拠点に移転したダニ族が日本列島に進撃し、九州（葦原中津国）から東北地方（出羽国、十和田）を支配下に置いた。ダニ族は、自らをファラオ（パラオ）と称し、圧政を敷いた。このため、人喰い人種の支配を嫌った武蔵国の人々が音頭を取り、日本中の縄文人を連れてエジプトからカナン（夏時代の中国）への脱出を試みた。それが「モーゼスの大移動時代」である。つまり、モーゼスの正体は武蔵国の人々、関東の縄文人である。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「マズダ神群の大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「アムシャ・スプンタ誕生」

「マズダ神群の大移動時代」に参加したモーゼスの残党は、シヴァ、パンドラと組んで、イランに「アムシャ・スプンタ」を生んだ。アムシャ・スプンタの名の由来はミマース、シヴァ、パンドラの組み合わせである。ミマース+シヴァ+パンドラ=アマス・シヴァンド=アムシャ・スプンタとなる。

■ A D 1 0 6 年 「邪馬台国誕生」

トラヤヌス皇帝がナパタエ王国から自治権を奪うと、ナパタエ人はアビシニア人に統治されていたヒムヤル王国に立ち寄った。ナパタエ人は、アビシニア人に不満を持つ一部ヒムヤル人を同行させて、遠くインドシナ半島に移り住んだ。アラビア人の顔をしたナパタエ人は、シャム族と連合して「邪馬台国」を建設した。邪馬台の名の由来はシャムとナパタエの組み合わせである。シャム+ナパタエ=シャムタエ=邪馬台となる。つまり、邪馬台国は現在のタイに存在したと考えられる。

■ A D 1 4 6 年 「ジャマタエ人誕生」

倭国大乱を機に、邪馬台人は卑弥呼の一族（ヒムヤル人）と共に、インドシナ半島を離れてゲルマニアに移住した。ゲルマニアに上陸した邪馬台国の一族は、ゲルマニア人と混合して「ジャマタエ人」を成した。ジャマタエ人の名の由来は邪馬台である。邪馬台=ジャマタイ=ジャマタエとなる。当初、マルコマンニ人（卑弥呼+アラマンニ人）とジャマタエ人の両者は邪馬台国時代からの同盟者とあって、連合していた。しかし、理由は不明だが、ジャマタエ人は同盟者であるはずのマルコマンニに討伐されてしまう。これは、マルコマンニがドルイド教に操られていた可能性が高い。

■AD170年 「マーシア人誕生」

同盟者であるはずのマルコマン二人に討伐されると、「ジャマタエ人」は空中分解し、シャム族とナパタエ人に分離して東西に移住した。タイ人の顔をしたシャム族はブリテン島に移住して白人と混合して「マーシア人」を形成した。マーシアの名の由来はシャマシュである。シャマシュ＝シャマーシュ＝マーシアとなる。

■AD825年 「マーシア人の大航海時代」

■AD825年 「マジヤール人誕生」

「マーシア人の大航海時代」に参加したマーシア人は、エクバードによるイングランド統一を機に、フォトラ（エフタル）を率いてイングランドを離れ、パンノニアに移住する。この時、マーシア人は安閑天皇の後裔マクリア人と合体し、「マジヤール人」が誕生した。マジヤールの名の由来はマーシアとマクリアの組み合わせである。マーシア+マクリア＝マーシアリア＝マジヤールトなる。

■AD1323年 「シシマン朝（ブルガリア帝国）誕生」

AD1308年、アンジュー帝国がハンガリーを支配下に置くと、マジヤール人はブルガリア帝国に亡命した。この時、マジヤール人は「シシマン家」を生んだ。シシマンの名の由来はムシシとモンの組み合わせである。ミカエル・シシマン3世は「シシマン朝」を開いた。この王朝はAD1396年まで続いた。

■AD1584年 宮本武蔵生誕

AD1396年、シシマン朝が滅ぶと、シシマン家は日本に移住した。彼らからは「宮本武蔵」が生まれた。不世出の剣豪であった宮本武蔵は、ギルガメシュ、モーゼス、ミマースの先祖であるオリジナル人類ムシシの遺伝子を継いでいた。彼は、自分がムシシの子孫であることを知っていたため、「武蔵」を名乗った。ムシシ＝ムサシ＝武蔵となる。

■AD1756年 アマデウス・ウルフガング・モーツァルト生誕

モーツァルトの名の由来はマジヤールの人（マジヤールト）である。マジヤールト＝マーチャルト＝モーツァルトとなる。

■AD1922年 ラス・メイヤー生誕

■AD1924年 モーリス・ジャール生誕

■AD1934年 ゲイリー・マーシャル生誕

■AD1942年 ペニー・マーシャル生誕

■AD1949年 ビリー・ジョエル生誕

ジョエルの名の由来はマジヤールである。マジヤール＝ジャール＝ジャアル＝ジョエルとなる。天孫族（マクリア人）の系譜に連なるため、親日家としても知られている。おもしろいことに、ビリー・ジョエルはソロ・デビュー以前、「アッチラ」というユニットを組んでいる。彼は、自分の先祖が中央アジアの騎馬民族だったことを無意識的に知っていたのかもしれない。

◆藤原氏（セツ）の歴史

■30万年前 「ペルセウス（ペルセーイス）誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、パッラースや台湾から来たツオウ族と共に、オーストラリアに「ペルセウス（ペルセーイス）」を生んだ。ペルセウスの名の由来はパッラース、ツオウ、ムシシ（ミマース）の組み合わせである。パッラース＋ツオウ＋ムシシ＝パッラツオウシ＝パラソウシ＝ペルセウスとなる。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「サイシャット族（ヘラクレス）誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセウスは、台湾に上陸してクリュセーイスと共に合体部族を生んだ。この合体部族の誕生に参加したのはペルセーイス側からはパッラー（ヴィディエ+レザ）、ムシシが、クリュセーイス側からはグラティオンとムシシである。しかし、グラティオン自体がアグリオス（チュクウ+ルワ）とディオナー（ヴィディエ+ウラニア）の合体部族である。つまり、ペルセーイスからは3部族、クリュセーイスからは5部族が参加している。

この時に生まれたのは、台湾少数民族として知られる「サイシャット族」である。サイシャットの名の由来はチュクウ、ムシシ、ヴィディエの組み合わせである。チュシシディ=ツォウセイイシディ=サイシャットとなる。サイシャット族は後に「ヘラクレス」と呼ばれることになる。ヘラクレスの名の由来はペルセーイスとクリュセーイスの組み合わせである。ペルセーイス+クリュセーイス=ペルクリュセ=ヘラクレスとなる。

■ 7万年前 「塩椎神誕生」「摂津国誕生」

サイシャット族は日本に上陸し、現地人に「塩椎神（しおつち）」と呼ばれた。しおつちの名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャツ=しおつちとなる。その後、彼らは「摂津」に拠点を得た。摂津の名の由来はサイシャットである。サイシャット=シャツ=摂津となる。高天原と摂津は、塩椎神（サイシャット族）の勢力圏だった。

■ 7万年前 「筒之男命誕生」

摂津に入植したサイシャット族は「筒之男命（つつのお）」を生んだ。つつのおの名の由来はサイシャットとウラニアの組み合わせである。サイシャット+ウラニア=シャツニア=筒之男命（つつのお）となる。筒之男命は、ムシシとウラニアの合体部族である。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ヴァルハラ誕生」「戦士の守護神ワルキューレ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、神話通り、葦原中津国に向かった。葦原中津国は2種類あるが、ひとつめは八代湾～天草諸島に跨る地域であり、2つめはアナトリア半島～ナクソス島に跨る地域である。彼らが目指したのは2つめの葦原中津国である。

アルゴス号は、途上の北アメリカで常世国、ミドガルド王国などを残しつつ、メキシコに到達した。大西洋側に出た彼らは、上陸ポイントを「ベラクルス」と命名した。更に、北メキシコに入植した塩椎神の勢力は「ヴァルハラ王国」を築いた。ヴァルハラの名の由来はペルセウスとヘラクレスの組み合わせである。ペルセウス+ヘラクレス=ペルヘラ=ヴァルハラとなる。

ベラクルスには、「ワルキューレ」が生まれた。ベラクルス、ワルキューレの名の由来は共にヘラクレスである。ヘラクレス=エラクーレス=ワルキューレとなる。北アメリカにあったミドガルド王国、北メキシコにあったヴァルハラ王国名は北欧神話に出てくるため、ミドガルド、ヴァルハラは北欧に存在したと考える人も多いただろう。しかし、大概の場合、神話の舞台は神話が編まれた土地で起きた事柄ではない。タナトスを皆殺しにするため、科学の種族は核兵器によってミドガルド、ヴァルハラを消滅させたが、北欧神話は、その時の生存者が何万年もさすらったあげく、北欧に辿り着き、現地人に伝えたものである。

■ 4万年前 「オリンポス神族誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、メキシコを離れ、葦原中津国を目指した。クロノスはケルンを拠点にし、インチキ宗教により、大量の弱者を信者として擁し、ヨーロッパを支配していた。これに対抗するべく、現オリンポス山付近に入植したサイシャット族は「オリンポス神族」を結成した。オリンポスの名の由来はウラヌスとポセイドンの組み合わせである。ウラヌス+ポセイドン=ウラヌポセ=オリンポスとなる。

■ 7万年前 「セツ誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加した筒之男命は、オリンポス神族には参加せず、エジプトに入植した。オリンポス神族に参加しなかった一行からは、アダム（アドメテー）、アベル（エピアルテース）、カイン（アルキュオネウス）、セツ（筒之男命）が生まれた。セツの名の由来は摂津である。摂津=セツツ=セツとなる。セツは、アダムの仲間に参加し、聖書ではカイン、アベルの弟として数えられた。

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「スーサ誕生」

「ヘリオポリスの大航海時代」に参加したゼウスは、メソポタミアに入植し、「スーサ」を築いた。スーサの名の由来は素戔鳴尊である。素戔（すさ）＝スーサとなる。中国神話では、スーサは「宿神（スシェン）」とも呼ばれた。

■ B C 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7千年 「シドン誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したセツは、カナンに入植して「シドン」を建設した。シドンの名の由来はムシシとグラティオーンの組み合わせである。ムシシ+グラティオン＝シディオーン＝シドンとなる。シドンは、フェニキア人の都市のひとつとして繁栄を極めた。

■ B C 3 2世紀 「シチリア誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、シドンを離れたセツは、シチリア島に入植して、当地を初めて「シチリア」と呼んだ。シチリアの名の由来はムシシとルハンガの組み合わせである。ムシシ+ルハンガ＝シシルハ＝シチリアとなる。

■ B C 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7世紀 「車氏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したセツは、中国に入植し、「車氏（チェ）」を生んだ。車（チェ）の名の由来はセツである。セツ＝チェツ＝チェ（車）となる。

■ B C 7 世紀 「車師国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したシドン人は、黒龍江からタリム盆地に侵入し、「車師国（チェシ）」を建設した。車師の名の由来はセツである。セツ=チェツ=チェシとなる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「カー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した車氏は、ブリテン島に上陸した。中国人の顔をした車氏は現地人と混合して「カー」を成した。カーの名の由来は「車」である。

■ A D 6 世紀 車持与志古生誕 「車持氏誕生」

突厥帝国の誕生を機に、車師国（チェシ）の人々は日本に移住し「車持氏」を称した。車持の名の由来は日本語読みの車師（シャシ）である。車師（シャシ）=シャジ=車持（シャジ）となる。

■ A D 6 世紀 藤原不比等生誕 「藤原氏誕生」

その後、車持与志古の娘が中臣鎌足に接近して自身の血統を得る。この時に誕生したのが「藤原不比等」である。藤原の名の由来はカシュガルである。この時、彼らは八行が力行を兼ねる法則を適用した。つまり、カシュガル=ハシュバル=藤原となる。藤原氏が関係している春日大社も、もともとはハルヒと読まれていた。だが、藤原氏が春日大社を篡奪したのを機に、カシュガルを由来に「カスガ大社」と呼ばれた。

■ A D 7 3 7 年 「野人女直誕生」

天然痘の流行を機に、藤原4兄弟の氏族が満州に移住し、一部はモンゴルに移り住んだ。この天然痘は中臣氏が準備したものだろう。この移住に参加したのは、藤原武智麻呂、藤原房前、藤原宇合、藤原麻呂、婿である大伴古慈斐（こしび）の一族郎党である。この5者の子息に消息不明

の者が多いが、彼らはみな満州に移った者である。満州に移って「野人女直」と呼ばれた彼らは、2手に分離して「ウェジ」「ワルカ」となる。ウェジとワルカの名の由来は「藤原」を2つに割ったものである。「藤（ウェジ）」「原（ワルカ）」となる。また、キルギス族を吸収して、「ゴルカ」を生んでいる。

■AD737年 「ボルジギン誕生」「ジャムラット誕生」「ボルチン誕生」「ウガン誕生」

一方、大伴古慈斐の一族はモンゴルに及んで「ボルジギン家」を成し、後裔としてユーラシアの覇者チンギス・ハーンを生む母体集団を儲けている。ボルジギンの名の由来は古慈斐（フルジビ）である。フルジビ＝フルジギ＝フルジギン＝ボルジギンとなる。

武智麻呂は孫の世代である良因、真従、許人麿、長川、真作、河主、弓主、川合、真書、瀧麻呂、主後、広河らを率いてモンゴルの地を踏んだ。武智麻呂の一族は「ジャムラット」を称した。ジャムラットの名の由来は武智麻呂の人である。武智麻呂＋人＝タケチマロト＝チマロト＝ジャムラットとなる。

房前は、子の鳥養、孫の世代の塩麻呂を率いてモンゴルの地を踏んだ。彼らは「ボルチン」を称した。ボルチンの名の由来は房前の音読み「ボウゼン」である。ボウゼン＝ボウジン＝ボルチンとなる。

最後に、宇合は、子の清成、蔵下麻呂、孫の世代の安継らを率いてモンゴルの地を踏んだ。彼らは、「ウガン」を称した。ウガンの名の由来は宇合である。ウゴウ＝ウゴウン＝ウガンとなる。また、麻呂は、子の宗継、綱主、八綱、清綱らを率いてモンゴルにやって来た。彼らはモンゴルに騎馬軍団を築いていない。

■AD766年 最澄生誕 「天台宗誕生」

AD742年、モンゴルの支配権が東突厥からウイグルに移ると、藤原氏の子孫は中国に移った。この時に「最澄」が生まれた。最澄の名の由来はサイシャットである。サイシャット＝サイシャー＝最澄となる。最澄は、中国から日本に移って「天台宗」を興したが、その後、円珍などのタナトスによって篡奪された。最澄には、遣唐使に参加した逸話があるが、布教に勤めるためには日本人である必要があったと考えられる。

■AD774年 空海生誕 「真言宗誕生」

空海の祖は、シドンに住んでいた。AD713年、イスラム軍がフェルガーナに侵攻すると、イスラム軍に参加していた空海の祖は中国に向かい、ネパール辺りで「空海」を生んだ。空海の名

の由来は天空神バアル（空）と海神ダゴン（海）の組み合わせである。バアル、ダゴンを知っているのは、空海の祖がシドンに住んでいた証である。空海は真言宗を築いたが、後に、新義真言宗を興したタナトスに篡奪された。空海には、遣唐使に参加した逸話があるが、布教に勤めるためには日本人である必要があったと考えられる。

■AD822年 「ブータ誕生」

入寂したと見せかけた最澄は、日本を脱出してインドに上陸した。最澄は、インドに思想運動タントリズム（密教）を展開し、ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教にタントリズムの要素を多分に含んだ宗派を残した。また、最澄の一族は、カルナータカ州に鬼神、亡者、精霊を意味する「ブータ」と呼ばれる民俗神を祀り、広めた。ブータの名の由来は不動明王である。不動＝フドー＝ブータとなる。

■AD893年 藤原純友生誕

藤原純友は、空海の子孫である。タナトスに真言宗を篡奪された空海は、摂津に移り、純友の祖となる。摂津は、先祖である塩椎神の時代に築かれた故地でもある。純友の名の由来はシャマシュとティアマトの組み合わせである。シャマシュ+ティアマト＝シャマティアマ＝サマタマ＝純友となる。古代オリエントの神々の名を冠することにより、シドンから来たことを示唆している。

■AD939年 「天慶の乱」

■AD941年 「第1次ポリネシア人の大航海時代」

■AD941年 「サモア誕生」「フィジー誕生」

「第1次ポリネシア人の大航海時代」に参加した藤原純友は、太平洋に「フィジー」「サモア」を発見した。フィジーの名の由来は藤原であり、サモアの名の由来は純友である。藤原＝フィジーワラ＝フィジーとなり、純友＝サモアトモ＝サモアとなる。

■AD966年 藤原道真生誕

AD927年、渤海国が滅ぶと、一部野人女直が、日本に帰還した。彼らは、祖を同じくする藤原氏に自身の血統を打ち立てた。この時に藤原道真が生まれた。道真の名の由来は、道教（新天師道）の「道」と女真族の「真」の組み合わせである。

■AD1027年 「全真教誕生」

AD1027年、藤原道真が死去すると、残党は満州に帰還した。日本の王だった道真の子孫は、中国に移ると「王氏」を称した。道真の末裔として生まれた王重陽は、チンギス・ハーンが登場直前に、満州に「全真教」を築いた。全真は、中国語で「クアンゼン」と読むが、これは日本語の「完全」が由来と考えられる。

■AD11世紀 「第2次ポリネシア人の大航海時代」

■AD11世紀 「ルフィジ誕生」

「第2次ポリネシア人の大航海時代」に参加したフィジー人は、現タンザニアに移住した。彼らは「ルフィジ」を築いた。ルフィジの名の由来はフィジーである。

■AD1197年 「ヴードゥー教誕生」

イスラム教を信奉するゴール朝がAD1181年にパンジャブを、AD1191年に西インドを、AD1192年に北インドを、AD1197年に東インドを征服すると、最澄の子孫が築いたタントリズム派は「第2次ポリネシア人の大航海時代」に参加した。

インド洋を越えてアフリカ大陸に到達すると、彼らはアフリカ東海岸を南下し、南アフリカを周航して西アフリカに落ち延びた。彼らは現地人にタントリズムを伝えると、それは現地の宗教と習合して「ヴードゥー教」として成立した。ヴードゥーの名の由来はブータと同じく、不動明王である。不動＝フドー＝ヴードゥーとなる。ヴードゥー教は、天台密教、インドのタントリズムを継承した宗教だといえる。

■AD1642年 「藤井氏誕生」

当時、オランダ人がニューギニアを訪れた。ダニ族は、強い侵略の本能を持つ白人（ダニ族の子孫だが）の登場に危機感を感じ、白人をライバルと考えた。そしてダニ族は、白人に取られる前に、太平洋の島々の侵略を決行した。彼らは、パプアを発ってフィジー、サモア、ニュージーランド、ソロモン諸島、バヌアツなどを支配下に置き、果てはハワイ、イースター島にまで足を運んだ。

ダニ族は、フィジーに於いて、カニバリズムを確立した社会制度のひとつにまで定着させた。この人喰い人種を嫌った一部フィジー人は故地である日本に逃亡し、「藤井氏」を成している。白人探検家、曰く「フィジー人は単に復讐などの必要性からではなく、好んで人を食べる。頻繁に人が殺され、食欲を満たすために男や女、子供をさらっている。2、3日埋めた死体を漁り海で洗った後、焼いて食べる」としている。この場合のフィジー人は真のフィジー人ではなくダニ族と改めるべきだろう。ダニ族はアットランダムに人を殺しているように見えるが、実際には優れた者を選んで殺している。AD1871年には、フィジー人（ダニ族）がボラバ村の谷に夜襲をかけて村人全員を食べたという事件が起きた。

■AD1791年 「ハイチ革命」

植民地時代から、ブドゥー教はサント＝ドマング植民地を掌握するべく、黒人奴隷を管理下に置いて放棄の機会が熟すのを待った。第一弾は、ブドゥー教司祭フランソワ・マッカンドルが黒人奴隷の抵抗集団をまとめあげ、プランテーションの奴隷の中に秘密の情報組織を築き上げた。マッカンドルは、AD1751年から数年かけて奴隷の反乱を指揮したが、フランス軍に捕縛されて火刑に処された。

第二弾は、ブドゥー教高僧デュディ・ブークマンが数千人の奴隷を指揮した。大規模な奴隷蜂起のためにサント＝ドマング植民地は内戦状態に陥った。10日間の内に白人居留地は孤立し、2000人の白人を殺害して280ヶ所の砂糖プランテーションを破壊し、焼き尽くした。その後、スペインの介入で一時的にブドゥー教の勢いは断たれたが、指揮官トゥーサン・ルヴェルチュールがナポレオンと渡り合い、サント・ドミンゴを侵略して当地の奴隷を解放した。だが、彼は騙まし討ちにあい、フランスで収監されて獄中で死んだ。AD1804年、ジャン＝ジャック・デサリーヌがサント＝ドマング独立を宣言し、名を「ハイチ」に改めた。ハイチの名の由来は藤原である。藤原＝ハイチワラ＝ハイチとなる。

■AD1822年 「デンマーク・ウィージーの乱」

西インド諸島で生まれたデンマーク・ウィージーは、奴隷としてアメリカに上陸した。だが宝くじに当たり、自由奴隷の身分を手に入れた。ウィージーは、チャールストンの農場を攻め落とそ

うと画策し、9000人の賛同者を得たが、蜂起は事前に漏れ、逮捕されて絞首刑に処された。西インド諸島生まれとあるため、彼はアメリカ侵略を狙ったブドゥー教の司祭だった可能性がある。

■AD1831年 「ナット・ターナーの乱」

天啓を受けたナット・ターナーは、奴隷数十名を指揮してヴァージニアで蜂起した。彼らは、60人の白人を殺害したが、逮捕されて公判に付された。デンマーク・ウィージーの乱と時期的に近い点から見て、ターナーも西インド諸島生まれで、アメリカ侵略を狙ったブドゥー教の司祭だった可能性がある。

■AD1915年 「全米黒人地位向上協会誕生」

ブドゥー教の僧侶はハイチからアメリカに侵入し、人種問題を盾に白いアメリカに切り込んでいった。創設者のW・E・B・デュボイスは、ハイチのブドゥー僧の子孫だろう。キング牧師は公民権運動を信じていたが、彼を暗殺したのは仲間（黒人ダン族）だろう。貧しい黒人は、黒い肌で差別されているが、裕福な黒人（ダン族）は、黒い肌を武器にして富を得ている。

■AD1929年 マーティン・ルーサー・キング生誕

■AD1941年 モーリス・ホワイト生誕 「アース・ウィンド&ファイア誕生」

■AD1948年 「真如苑誕生」

AD1949年の中華人民共和国誕生を機に中国から日本に逃れてきた人々である。真如の名の由来は女真を反対にしたものだと考えられる。つまり、真如苑は「女真の苑」を意味している。教祖である伊藤真乗の名「真乗」も女真に因んでいる。彼が因んだ「女真」とは、藤原氏の子孫「野人女直」のことだろう。そのためか、真如苑は、大谷率いる日本仏教に度々攻撃されている。

■AD1954年 アドルファッターフ・サイード・フセイン・ハリール・アッ=シーシー生

誕

AD2013年、彼は、タナトスの一族であるムスリム同胞団に属するムルシーをクーデターによって排除し、AD2014年にエジプト・アラブ共和国第4代大統領に就任している。シーシー大統領の祖は、藤原氏の子孫シャハ王家の支配に不満を評し、ネパールを発って、セツの時代の故地エジプトに帰還した。シーシーの名の由来はセツ、或いはムシシである。セツ=セシ=セーシー=シーシーとなる。

■AD1962年 藤井フミヤ生誕 「チェッカーズ誕生」

■AD1983年 ミランダ・カー生誕

■AD1993年 メルシオル・ンダダイエ、第4代ブルンジ共和国大統領に就任

ヴードゥー僧デュディ・ブークマンが生んだファン系集団の子孫であるが、フツ族と混合したため、ツチ族に暗殺された。ンダダイエの名の由来はデュディである。デュディ=ンデュディ=ンダダイエとなる。

◆シュシャン（セツ）の歴史

■BC32世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC32世紀 「肅慎誕生」

「ヘリオポリスの大航海時代」に参加したセツは、大地殻変動によって荒廃した故地を後に兄弟ゼウスの拠点スーサに移住した。その後、「シュメール人の大航海時代」に参加したセツは、ツォウ族と共にスーサを発ち、満州に入植した。この時に「肅慎（スーシェン）」が生まれた。スーシェンの名の由来はシュシャンである。シュシャン=シューシャン=スーシェンとなる。

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC19世紀 「ウェシュシュ人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加した肅慎は、祖を同じくするスイス人と連合した。この時に「ウェシュシュ人」が生まれた。ウェシュシュの名の由来はスイスとシュシャンの組み合わせである。スイス+シュシャン=イスシャン=ウェシュシュとなる。彼らは、トゥルシア人らと共にイランに入植し、デニエン人、シェルデン人とは異なる、正義の側の海の民に参加した。

■BC1100年 「宋誕生」

「マハーバーラタ戦争」が始まると、シュシャン人はベーシュタード王国を離れ、中国に移住した。この時に「宋氏（ソン）」が生まれた。ソンの名の由来はシュシャンである。シュシャン=シュシオン=ソンとなる。

■BC1027年 「ベーシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「周誕生」

「ベーシュタードの大航海時代」に参加したウェシュシュ人は、東アジアに帰還した。彼らは中国に上陸すると、殷に寄生していた人身御供の種族、能登族を皆殺しにした。その後、ウェシュシュ人は、蚩尤が生んだ「周氏（チョウ）」に参加し、共同で「周」を開いた。周（チョウ）の名の由来はツオウである。ツオウ=チオウ=周（チョウ）となる。

■BC770年 「東周誕生」

ウェシュシュ人の片割れであるスイス人、周氏がエジプトに移住して「サイス朝」を開くと、残ったウェシュシュ人の片割れであるシュシャン人は「周（西周）」を継承し、「東周」を開いた。

■BC249年 「朝鮮誕生」「衛氏朝鮮誕生」

東周滅亡後、シュシャン人は朝鮮半島を訪れた。彼らが、が朝鮮半島に訪れて初めて、当地は「朝鮮」と呼ばれた。朝鮮（チョソン）の名の由来はシュシャン（スーサ）である。シュシャン＝チュシヨン＝チョソン（朝鮮）となる。

シュシャン人が来るまで、朝鮮半島は、箕子（ギジャ）によって統治されていた。しかし、箕子は既に「ヒッタイト人の大航海時代」に参加して朝鮮半島を離れたため、周氏は「衛（ウェイ）」を称して朝鮮半島の一部に「衛氏朝鮮」を開いた。衛氏朝鮮の名の由来はウェシュシュ（衛＝ウエ、朝鮮＝シュシュ）である。

■BC23年 「サクソン族誕生」

BC286年、宋が滅ぶと、諸葛氏の一部は宋氏と連合し、中央アジアに移住した。この時に「サクソン族」が生まれた。サクソンの名の由来は諸葛（ジューガー）と宋（ソン）の組み合わせである。ジューガー＋ソン＝ジュガソン＝サクソンとなる。

■AD449年 「ザクセン誕生」

諸葛氏はブリテン島に渡ってウェセックス王国、エセックス王国、サセックス王国を築いたが、宋氏は、ドイツ北西部に残り、「ザクセン王国」を築いた。

■AD315年 「柔然誕生」

BC108年に衛氏朝鮮が滅ぶと、周氏は朝鮮半島からモンゴルに移っている。彼らは「柔然（ジュジュ）」を生んだ。柔然（ジュジュ）の名の由来はシュシャンである。シュシャン＝ジュジャン＝ジュジュとなる。柔然は、AD315年頃にタリム盆地からの亡命者、楼蘭（ローラン）や、宇文部に皇位継承権を篡奪されたイェマック王家の木骨閭（モグル）の一族郎党と組んで柔然を騎馬軍団として強化する。だが、彼らはAD4世紀に楼蘭に乗っ取られる形で柔然を追放されてしまう。この時に楼蘭が主導権を握ると、柔然（ジュジュ）は、「ローラン」の別称を得る。

■AD315年 「長孫氏誕生」

柔然を追放されたシュシャン人は、「長孫氏（ツァンスン）」を称した。長孫（ツァンスン）の名の由来はシュシャンである。シュシャン＝シュンシャン＝ツァンスンとなる。長孫氏は、自分

たちのお株を奪った楼蘭を憎み、打倒柔然に情熱を燃やした。長孫嵩は、代国に取り入って将軍の地位を得、AD391年の柔然北伐に参加している。また、北魏の将軍だった長孫道生はAD425年に柔然（ローラン）を討伐し、勝利している。長孫氏の系統はその後軍人として西魏、北周などの支配層に名を連ねた。また、唐の時代には政治家として知られる長孫順徳が輩出されている。

■AD668年 「高句麗の大移動時代」

■AD668年 「チェチェン人誕生」「コーカサス誕生」

「高句麗の大移動時代」に参加した長孫氏は、西方に逃亡した柔然を追い、現コーカサスに踏み込んだ。彼らは、「チェチェン人」を形成した。チェチェンの名の由来はシュシャンである。シュシャン=チュチャン=チェチェンとなる。その後、高句麗の人々と連合した長孫氏は、黒海とカスピ海の間地域を、初めて「コーカサス」と命名した。コーカサスの名の由来はゴグリヨとシュシャンスの組み合わせである。ゴグリヨ+シュシャン=ゴグシュシ=ゴークシュシ=コーカサスとなる。

■AD772年 「サクソニア戦争」

■AD919年 ハインリッヒ1世、東フランク王に即位 「サクソニア家誕生」

■AD9??年 「女真族誕生」

サクソニア戦争で、シャルルマーニュ大帝に敗北したザクセン王国（宋氏）は、イギリス人リトル、スモール（趙氏）を率いて中国に帰還した。宋氏は、満州に入植して「女真族（ジュシャン）」を称した。「女真族（ジュシャン）」の名の由来はシュシャンである。シュシャン=ジュシャンとなる。

■AD960年 趙匡胤、初代皇帝に即位 「宋誕生」

サクソニア戦争で、シャルルマーニュ大帝に敗北したザクセン王国の残党（宋氏）は、イギリス

人リトル、スモール（趙氏）を率いて中国に帰還した。宋氏は満州に移住したが、趙氏は中国に移住し、同盟者の名を借りて新規に「宋」を開いた。

■AD962年 オットー大帝、初代皇帝に即位 「神聖ローマ帝国誕生」

■AD9??年 「チチェン・イツァー誕生」

AD867年にイサウリア朝が滅ぶと、イサウリア王家（イツァー人）はチェチェン人を連れてメキシコに帰還した。彼らは、「チチェン・イツァー」を築いた。チチェン・イツァーの名の由来はチェチェンとイツァーの組み合わせである。チェチェン=チチェンとなり、チチェン+イツァー=チチェン・イツァーとなる。しかし、チチェン・イツァーは、イシュバランケー、イシュキックなどを祀る人身御供の種族によって支配されていた。

■AD1068年 「中村氏誕生」「土屋氏誕生」

AD10世紀に「遼」が勢力圏を満州にまで拡大すると、女真族は満州を後に日本に移住した。彼らは、日本に「中村氏」を生んだ。中村（ちゅうそん）の名の由来はシュシャンである。シュシャン=チュシャン=チューソン（中村）となる。AD11??年に中村氏の祖である中村宗平が輩出され、その宗平の子として土屋氏の祖土屋宗遠が誕生している。後に、土屋氏が武蔵七党のひとつである「中村党」を仕切るようになる。土屋の名の由来はシュシャンである。シュシャン=チュチャン=ツチャ（土屋）となる。

■AD1068年 「上総氏誕生」「秩父氏誕生」

一部チェチェン人は、コーカサスを離れて日本に向かった。彼らは、途中のインド洋辺りで善棟王の子孫ラージプートと合流した。両者は房総半島に上陸し、チェチェン人は「上総氏（かずさ）」を称した。そして、ラージプートは「破壊神シヴァ」を由来に「千葉氏」を称した。更に、上総氏は千葉氏と連合して「秩父氏」を結成した。

上総の名の由来はコーカサスであり、秩父の名の漢字表記の由来は「父なるゼウス（秩）」、また読み方の由来はチェチェンと千葉の組み合わせである。コーカサス=コーカズス=かずさ（上総）となり、チェチェン+千葉=チェ千葉=ちちぶ（秩父）となる。彼ら、千葉氏、上総氏、秩父氏は先発隊である中村氏、土屋氏、土肥氏と連合して「坂東八平氏」の中核を担い、鎌倉幕府の成立に邁進することとなる。

■AD1068年 「ジェチェン誕生」

一部チェチェン人は、コーカサスを離れて日本に向かった。一部チェチェン人はシルクロードを介して満州に移住している。長孫氏の子孫であるチェチェン人は、祖を同じくする女真族に合流することを考えていた。だが、その頃には、既に正統な女真族は日本に移って「中村党」を組織し、活動していた。更に、女真族自体は日本から来た中臣氏に篡奪されていた。その後、チェチェン人は「ジェチェン」を称し、中臣氏が築いた「建州女直」に参加した。ジェチェンの名の由来はチェチェンである。

■AD1333年 「チュエジ朝誕生」

鎌倉幕府が滅ぶと、坂東八平氏に属する上総氏、秩父氏は日本を脱出してインド洋を横断、伝説のニョロ帝国を目指した。ニョロ帝国は、橘氏、丹波氏が築いた湖水地方に築かれた幻の帝国である。湖水地方を訪れた上総氏、秩父氏は、ニョロ帝国に「チュエジ朝」を開いた。チュエジの名の由来はチェチェンである。チェチェン=チュエチェン=チュエジとなる。

■AD14??年 「スワジランド誕生」

チュエジ朝が滅ぶと、チュエジ人はアフリカを更に南下し、南アフリカに到達した。超古代、ゼウスが「朱雀」を築いた土地に入植した。朱雀を築いた際に「スワジ」の名が生まれたが、スワジの名の由来はゼウスである。ゼウス=セウズ=スワジとなる。

■AD14??年 「財津氏誕生」

チュエジ朝が滅ぶと、チュエジ人は故地である日本に帰還し、現熊本県に入植して「財津氏」を生んでいる。財津の名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャ=ザイチャ=財津となる。

■AD1934年 財津一郎生誕

芸人・俳優財津一郎は「てなもんや三度笠」で知られている。

■ A D 1 9 4 8 年 財津和夫生誕 「チューリップ誕生」

「チューリップ」のリーダー財津和夫は、A D 1 9 7 3 年発表のシングル「心の旅」でスターダムにのしあがる。

レザの歴史

◆エロス（レザ）の歴史

■50万年前 「レザ誕生」

ザンビアの海岸に暮らしていた「レザ」は、水生生活から陸上生活にスイッチした。彼らは、メラネシア人の容姿をしていた。

■50万年前 「クウォスの大移動時代」

■50万年前 「ラシ族誕生」「リス族誕生」

「クウォスの大移動時代」に参加したレザは、チッタゴンを経てミャンマーに移住し、「ラシ族」「リス族」を生んだ。ラシ、リスの名の由来はレザである。レザ=レサ=ラシ=リスとなる。

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「パッラース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したレザは、ヴィディエと組み、獣人を人種母体に「パッラース」を生んだ。パッラースの名の由来はヴィディエとレザの組み合わせである。ヴィディエ+レザ=ヴィレザ=ビッレーザ=パッラースとなる。

■45万年前 「ヒッポリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたパッラースは、ヴィディエ、クリュテイオスと組んで「ヒッポリュトス」を生んだ。ヒッポリュトスの名の由来は、ヴィディエ、パッラース、クリュテイオスの組み合わせである。ヴィディエ+パッラース+クリュテイオス=ヴィパラテイオス=ヒッポリュトスとなる。

■ 45万年前 「ポリュポーテース誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたパッラースは、ヴィディエ、クウォスと組んで「ポリュポーテース」を生んだ。ポリュポーテースの名の由来はパッラース、ヴィディエ、クウォスの組み合わせである。パッラース+ヴィディエ+クウォス=パラヴィデエス=ポリュポーテースとなる。

■ 45万年前 「ポルピュリオン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたパッラースは、ヒッポリュトス、ウェネと組んで「ポルピュリオン」を生んだ。ポルピュリオンの名の由来はパッラース、ヒッポリュトス、ウェネの組み合わせである。パッラース+ヒッポリュトス+ウェネ=パラポリュウェネ=ポルピュリオンとなる。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「獣人の大狩猟時代」に参加したイエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「パルース族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したパッラースは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、シアトル

付近に居を構えた。パッラースは「パルース族」を称した。パルースの名の由来はパッラースである。パッラース＝パラース＝パルースとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「ブリアレオース誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したポルピュリオンはアグリオスと組んで「ブリアレオース」を生んだ。ブリアレオースの名の由来はポルピュリオン、アグリオスの組み合わせである。ポルピュリオン＋アグリオス＝ピュリオリオス＝ブリアレオースとなる。

■ 30万年前 「エロス誕生」

「獣人の大移動時代」の際に生まれたブリアレオースから、ルワが離脱した。この時に「エロス」が生まれた。エロスの名の由来はブリアレオースである。ブリアレオース＝アレオース＝エロスとなる。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ネイロス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したエロスは、オーストラリアに上陸し、ウラニアーと組んで「ネイロス」を生んだ。ネイロスの名の由来はウラニアーとエロスの組み合わせである。ウラニアー＋エロス＝ニアロス＝ネイロスとなる。その後、ネイロスは河川の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「イエロ誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加してギリシアに移住し、「アルゴス号の大航海時代」に参加してオーストラリアに帰還したエロスは、故地であるオーストラリアに帰還し、虹蛇「イエロ」を祀った。イエロの名の由来はエロスである。エロス＝イエロス＝イエロとなる。

■ 4 万年前 「アベルの大航海時代」

■ 4 万年前 「ウルチ族誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したエロスは、シベリアに移住して「ウルチ族」を生んでいる。エロス＝エロチ＝ウルチとなる。

■ 4 万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4 万年前 「ナイル川誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したネイロスは、エジプトに入植した。この時に「ナイル」の名が生まれた。ナイルの名の由来はネイロスである。ネイロス＝ナイロス＝ナイルとなる。

■ 4 万年前 「軍神アレス誕生」「月の女神アルテミス誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したエロスは、ギリシアに上陸すると、「戦闘の神アレス」を祀ってオリンポス神族に加わった。アレスの名の由来はエロスである。エロス＝エレス＝アレスとなる。アレスは、後に「マルス」とも呼ばれた。また、エロスはハタミ人と連合して「アルテミス」を祀った。アルテミスの名の由来はエロスとテミスの組み合わせである。エロス＋テミス＝エロテミス＝アルテミスとなる。

■ 1 万 5 千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万3千年前 「エノスの大航海時代」

■ 1万年3千年前 「アムル人誕生」「エロヒム誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極に移住し、「エノスの大航海時代」に参加して西アフリカに移住したエロスはハムと連合して「エロヒム」「アムル人」を生んでいる。ハム+エロス=ハムエロ=アムルとなり、エロス+ハム=エロハム=エロヒムとなる。イスラエルの神として知られる「エロヒム」は、アフリカ生まれの神なのだ。「エロヒム」と「アムル人」は不可分の存在であった。

■ BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■ BC 5千年 「光神ルー誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したエロスは、アイルランドに到着すると、クシュと組んで「光神ルー（ルグス）」を祀った。アムル+クシュ=ルクシュ=ルグス（ルー）となる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5千年 「マリ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加してアイルランドを脱出したエロスは、北アフリカには帰還せずにメソポタミアに移住した。彼らは「都市国家マリ」を建設した。マリの名の由来はアムルである。アムル=アマリ=マリとなる。

■BC 5千年 「シュメール人誕生」

タップ・オノスの破壊を機にスカンジナビア半島からメソポタミアに避難したセムは、アイルランドからやってきたアムル人と連合して「シュメール人」を称する。シュメールの名の由来はセムとアムルの組み合わせである。セム+アムル=セムール=シュメールとなる。シュメール人の祖は、他にもセムとアーリア人の組み合わせがある。つまり、シュメール人は2種類が存在した。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC 32世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC 32世紀 「ソマリア誕生」

ソドムとゴモラの事件を機に、「シュメール人の大航海時代」に参加したシュメール人がソマリアを訪れた際、「ソマリア」の名が生まれた。ソマリアの名の由来はシュメールである。シュメール=シュメリア=ソマリアとなる。移住から100年後、シュメール人は故国に帰還し復興に努めた。これが、本格的な「シュメール文明」の夜明けとなる。

■BC 32世紀 メナス（ナルメル）、初代ファラオに即位 「エジプト第1王朝誕生」

ソロモン朝の残党は、エジプトに逃れると、ナイルの雄ノアと連合した。「メナス（ナルメル）」は個人名ではなく、ソロモン朝とシュメール人、ノアの連合体の名称である。メナスの名の由来はソロモンの片割れであるメネステーである。メネステー=メネス=メナスとなり、ナイル+アムル=ナイルムル=ナルメルとなる。

■BC 32世紀 「サマリア人誕生」

褐色の肌を持つ一部ソマリア人は、イスラエルに移住して「サマリア人」となった。サマリアの名の由来はソマリアである。

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「ウェールズ誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したエロス（アムル人）はドルイド教と共にブリテン島に上陸し「ウェールズ」を築いた。ウェールズの名の由来はエロスである。エロス＝ウェーロス＝ウェールズとなる。

■AD1866年 H・G・ウェルズ生誕

■AD1915年 オーソン・ウェルズ生誕

■AD1935年 ヤロミル・イレシュ生誕

■AD1940年 ビクトル・エリセ生誕

■AD1947年 ジョー・ウォルシュ生誕

■AD1951年 スティーブ・ウォルシュ生誕 「カンサス誕生」

ウェネの歴史

◆ヨハネス（ウェネ）の歴史

■45万年前 「ウェネ誕生」

50万年前にホモハビリスが水生生活を中止して、上陸し、シベリアに向かった後、水生生活を続けていた人々が陸上に上がった。ニジェール流域に水生人として暮らしていた人々はアイヌ人に似た姿をしており、自らを「ウェネ」と呼んでいた。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■45万年前 「アイヌ人誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したウェネは、東南アジアに到達し、日本に入植した。この時、ウェネは「アイヌ人」となった。アイヌの名の由来はウェネである。ウェネ=ウイネ=アイヌとなる。彼らは縄文人の原型を成したが、時が経つにつれ、日本列島が多くの人々で賑わうようになると、彼らの居住地は北海道に限定された。

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「エウリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ウェネと組んで「エウリュトス」を生んだ。エウリュトスの名の由来はウェネ、ヒッポリュトスの組み合わせである。ウェネ+ヒッポリュトス=ウェリュトス=エウリュトスとなる。

■45万年前 「ポルピュリオン誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したパッラースは、ヒッポリュトス、ウェネと組んで「ポルピュリオン」を生んだ。ポルピュリオンの名の由来はパッラース、ヒッポリュトス、ウェネの組

み合わせである。パッラース+ヒッポリュトス+ウェネ=パッラーポリュウェネ=ポルピュリオンとなる。

■ 45万年前 「グラティオン誕生」

「盤古の大移動時代」の際に生まれたアグリオスは、ヴィディエ、ウェネと共に「グラティオン」を生んでいる。グラティオンの名の由来はアグリオス、ヴィディエ、ウェネの組み合わせである。アグリオス+ヴィディエ+ウェネ=グリオディエウェネ=グラティオンとなる。

■ 45万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ポントス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したウェネは、オーストラリアに「ポントス」を生んだ。ポントスの名の由来はウェネ、クリュテイオスの組み合わせである。ウェネ+クリュテイオス=ウェンテイオス=ポントスとなる。

■ 30万年前 「エウエノス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したウェネは、オーストラリアに「エウエノス」を生んだ。エウエノスの名の由来はアイヌ、ウェネ、エバシの組み合わせである。アイヌ+ウェネ+エバシ=アイウェネシ=エウエノスとなる。その後、エウエノスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「イアンター誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したウェネは、オーストラリアに「イアンター」を生んだ。イアンターの名の由来はウェネ、ヴィディエの組み合わせである。ウェネ+ヴィディエ=ウエンディエ=イアンターとなる。その後、イアンターは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「マイアンドロス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したウェネは、オーストラリアに「マイアンドロス」を生んだ。マイアンドロスの名の由来はピュグマエイ、ウェネ、テレストーの組み合わせである。ピュグマエイ+ウェネ+テレストー=マエイウエンテレス=マイアンドロスとなる。その後、マイアンドロスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「アンピロー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したウェネは、オーストラリアに「アンピロー」を生んだ。アンピローの名の由来はウェネ、パッラーズの組み合わせである。ウェネ+パッラーズ=ウエンパッラー=アンピローとなる。その後、アンピローは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「アウユ族誕生」

エウエノスは、オーストラリアからパプアに移住し「アウユ族」を生んだ。アウユの名の由来はエウエノスである。エウエノス=エウエ=アウユとなる。

■ 30万年前 「ズルヴァーンの大移動時代」

■ 30万年前 「ズルヴァーン誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したエウエノスは、オーストラリアから古代イランに入植した。この時、エウエノスはアシェラーフと組んで「ズルヴァーン」を生んだ。ズルヴァーンの名の由来はアシェラーフとウェネの組み合わせである。アシェラーフ+ウェネ=シェラウエン=ズルヴァーンとなる。至高神と呼ばれたズルヴァーンがイランを治めた時代は、最良の時と呼ばれた。

■ 30万年前 「ヤハウエ誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したエウエノスは、イランから現イスラエルに入植した。この時に「ヤハウエ」が生まれた。ヤハウエの名の由来はエウエノスである。エウエノス=エハエノス=ヤハウエとなる。

■ 30万年前 「ウェヌス（ヴィーナス）誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加したエウエノスは、現イスラエルから古代ギリシアに入植した。この時に「ウェヌス」が生まれた。ウェヌスの名の由来はエウエノスである。エウエノス=ウェノス=ウェヌスとなる。ウェヌスは英語で「ヴィーナス」と呼ばれている。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「アンボン族誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加して地中海に移住したアンピローは、「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加して東南アジアに帰還した。彼らは、メラネシアに「アンボン族」を生んだ。アンボンの名の由来はアンピローとウェネの組み合わせである。アンピロー+ウェネ=アンウエン=アンボンとなる。

■ 7万年前 「イパン族誕生」「パイワン族誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加して地中海に移住したイアンターは、「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加して東南アジアに帰還した。彼らは、マレー半島に「イパン族」、台湾に「パイワン族」を生んだ。イパンの名の由来はイアンターであり、パイワンの名の由来はヴィディエとイアンターの組み合わせである。イアンター=イハンター=イパンとなり、ヴィディエ+イアンター=ヴィアン=パイワンとなる。

■ 7万年前 「気吹戸主神誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したエウエノスは、エレクトラ、アプスーと連合した。この時に「イブキドヌシ」が生まれた。イブキドヌシの名の由来はアプスー、エレクトラ、エウエノスの組みあわせである。アプスー+エレクトラ+エウエノス=アプクトノス=イブキドヌシとなる。

■ 4万年前 「オリンポス神族の大航海時代」

■ 4万年前 「ペロプス誕生」

「オリンポス神族の大航海時代」が到来すると、メラネシア海域に根を張っていたアンボン族（アンピロー）はマレー地域に住んでいたカロ族（カリュプソー）と連合体を組んだ。この時にペロプスが生まれた。ペロプスの名の由来はアンピローとカリュプソーの組み合わせである。アンピロー+カリュプソー=ピロプソー=ペロプスとなる。ペロプスは、アトランティス王国の王族となる。

■ 4万年前 「アベルの大航海時代」

■ 4万年前 「エノス誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したエウエノスは、エジプトに到着すると「エノス」を生んだ。エノスの名の由来はエウエノスである。エウエノス=エノスとなる。

■ 4 万年前 「戦闘の神エニユオ誕生」

古代ギリシアに侵攻し、クロノスを退けたオリンポス神族に参加していたエノスは「戦闘の神エニユオ」を生んだ。エニユオの名の由来はエノスである。エノス=エニユオス=エニユオとなる。

■ 4 万年前 「クロマニヨン人の大航海時代」

■ 3 万年前 「ナスカ誕生」

「クロマニヨン人の大航海時代」に参加したエノスは、ペルーでエノクと連合すると、「ナスカ」を建設した。ナスカの名の由来はエノスとエノクの組み合わせである。エノス+エノク=ノスク=ナスカとなる。

■ 3 万年前 「ティル・ナ・ノーグ国誕生」

■ 3 万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3 万年前 「アナサジ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエノスは、コロラド流域に入植したエノスは「アナサジ族」となる。アナサジの名の由来はエノスとムシシの組み合わせである。エノス+ムシシ=エノシシ=アナサジとなる。

■ 2 万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2 万年前 「平等王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したウェネは、テングリと共に、十王に属する「平等王（ピンデン）」を生んだ。ピンデンの名の由来はポントスとテングリの組み合わせである。ポントス+

テングリ=ポンテン=ピンデンとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「エノスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ニジェール誕生」

「エノスの大航海時代」に参加したエノスは、メトセラと共にニジェール流域に移り、連合して「ニジェール」を称した。ニジェールの名の由来はエノスとメトセラの組み合わせである。エノス+メトセラ=ノスセラ=ニジェールとなる。ニジェールは「ナザレ」の語源でもある。

■ B C 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■ B C 5千年 「ヌアザ誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したエノスは、アイルランドに単身「主神ヌアザ」を祀った。エノス=エノアサ=ヌアザとなる。

■ B C 5千年 「トロイア戦争」

■ B C 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ B C 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ B C 5千年 「蓬莱山誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエノスは、ルデと共にカスピ海に入植した。こ

の時、彼らは「蓬莱山（ペンライ）」を築いた。ペンライの名の由来はポントスとクリュティアー（ルデ）の組み合わせである。ポントス+クリュティアー=ポンリュ=ペンライとなる。蓬莱山は中国にあるとされているが、実際にはコーカサス山脈に存在した。

■BC 5千年 「アイネイエース誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエノスは、ルデと共にカスピ海に入植した。この時に「アイネイエース」が誕生している。アイネイエースの名の由来はエウエノス、クリュティオス（ルデ）の組み合わせである。エウエノス+クリュティオス=ウエネイオス=アイネイエースとなる。

■BC 5千年 「ラティウム誕生」「ラティヌス誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエノスは、ルデと共にカスピ海に入植した。その後、アイネイエースを生んだ彼らは、「ラティヌス」を祀り、「ラティウム王国」を建設した。ラテン、ラティヌスの名の由来はルデとエノスの組み合わせである。ルデ+エノス=ルディノス=ラティヌス=ラテンとなる。

■BC 5千年 「ナザレ誕生」

ラティウム王国が築かれると、エノスは、カスピ海から現イスラエルに赴き、拠点「ナザレ」を得る。ナザレの名の由来はニジェールである。ニジェール=ニジエレ=ナザレとなる。

■BC 5千年 「バベルの塔建設」

■BC 5千年 「第1次北極海ルート時代」

■BC 5千年 「エネツ族誕生」「ネネツ族誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したエノスは、ペチョラ川流域に入植した。彼らは、現地のモンゴロイドと交わって「エネツ族」「ネネツ族」を形成した。エノス=エネス=エネツ=ネネツと

なる。

■BC5千年 「イヌピアト誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したエノスは、シベリアの北極海を抜けると、そのままアリューシャン列島を渡り、カナダ北極圏に侵入していった。アラスカに残留したエノスとプテは連合し、現地人と混合して「イヌピアト」を形成した。エノス+プテ=エノプウテ=イヌピアトとなる。

■BC5千年 「イヌイット誕生」

カナダ方面に向かったエノスとアダムも連合し、現地人と混合して「イヌイット」を形成した。エノス+アダム=エノアダ=イヌイットとなる。

■BC2600年 「クノッソス誕生」

アナサジ族は、故地を去り、コロラド流域から遠く、地中海へと漕ぎ出した。地中海に侵入した彼らはクレタ島に上陸した。この時に「クノッソス」の名が生まれた。クノッソスの名の由来はアナサジである。アナサジ=ハナサジ=カナサジ=クノッソスとなる。

■BC年 ヨハネス生誕

■AD66年 「八木氏誕生」「矢作氏誕生」

AD66年、「ユダヤ戦争」が起きると、ヨハネスの一族郎党はイスラエルから脱出した。シルクロードを介して中国に至り、海を渡って日本に上陸した人々は、「八木氏」を称した。八木の名の由来はイエスの人（イエキ）、或いはヤハウエの人（ヤキ）であり、矢作の名の由来はヤハウエの人（ヤハキ）である。

■AD66年 「バヌアツ誕生」

AD66年、「ユダヤ戦争」が起きると、ヨハネスの一族郎党はイスラエルから脱出した。海路で太平洋に渡ったヨハネスの一族は、太平洋の孤島に上陸した。彼らは、この志摩を「バヌアツ」と呼んだ。バヌアツの名の由来はヨハネスである。ヨハネス＝ヨハネアス＝ハネアス＝バヌアツとなる。

■AD66年 「ジョーンズ誕生」

AD66年、「ユダヤ戦争」が起きると、ヨハネスの一族郎党はイスラエルから脱出した。イギリスに渡ったヨハネスの一族は、「ジョーンズ」と呼ばれた。ジョーンズの名の由来はヨハネスである。JOHANES（ヨハネス）＝HANES＝JANES＝JONES（ジョーンズ）となる。

■AD6世紀 「ヨハネスの大航海時代」

■AD6世紀 「ハワイ誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人ジョーンズは、新航路の開発を目的に広大な太平洋を冒険中、偶然にも「ハワイ諸島」を発見した。ハワイの名の由来はヤハウエであり、グアムの名の由来は日本語「神（かみ）」である。ヤハウエ＝ハウエ＝ハワイとなる。

■AD6世紀 「グアム誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人ジョーンズは、ハワイ島から「グアム島」を発見し、日本に至っている。グアムの名の由来は日本語の「神（かみ）」である。かみ＝くあみ＝グアムとなる。

■AD6世紀 「上野国誕生」「上野氏誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人ジョーンズは、グアム島から現群馬県に移住して「上野国」を築いた。うえの（上野）の名の由来はエウエノスである。エウエノス＝ウエノ＝上野となる。当時は、上野はうえのと呼ばれていた。ただ、その後にガスコン人が到来すると、上野（うえの）は、ガスコンに因んで上野（こうずけ）と呼ばれた。

■ A D 6 世紀 「渤海（ボハイ）誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人ジョーンズは、上野国から中国に移住した。この時、彼らが侵入した湾は「渤海（ボハイ）」と呼ばれた。ボハイの名の由来はハワイである。ハワイ＝ホハイ＝ボハイとなる。

■ A D 6 3 4 年 「役小角誕生」

A D 6 3 0 年、唐が東突厥を滅ぼすと、一部の阿史那氏が日本に移住した。彼らは、上野氏と連合して「役小角」を生んだ。役小角の名の由来はエウエノスとアザニアーの組み合わせである。エウエノス＋アザニアー＝エウエンノ＋オズニアー＝エンノ＋オズヌ＝役小角（えんの・おずぬ）となる。

■ A D 6 9 8 年 「渤海王国誕生」

A D 6 2 9 年、唐が中国統一を果たすと、渤海湾に住んでいた人々は満州に移住し、A D 6 9 8 年に「渤海国（ボハイ）」を建てた。

■ A D 7 2 7 年 「修験道誕生」

渤海国は、この時に始めて日本に遣使を送った。このとき、チュクチ族（ステュクス）と渤海人（エウエノス）の連合体が日本を訪れ、祖を同じくする役小角の土地を訪ね、共に「修験道」を築いた。修験道の名の由来はチュクチとエウエノスの組み合わせである。チュクチ＋エウエノス＋道＝チュクエノ＋道＝チュクエン＋道＝修験道（しゅげん）となる。

■ A D 9 3 2 年 「ブワイ朝誕生」

A D 9 2 6 年に渤海国が滅ぶと、渤海人は西方に向けて旅立ち、天孫族はハワイに向けて旅立った。A D 9 3 2 年、渤海人はイランの地に「ブワイ朝」を開いた。ブワイの名の由来はボハイ（渤海）である。ボハイ＝ボワイ＝ブワイとなる。

■AD1062年 「京極氏誕生」

セルジューク軍がバグダッドに入城したのを機に、ブワイ家はイランを発ち、日本に移住した。AD1219年、ブワイ人は佐々木信綱に接近して自身の血統を打ち立てた。AD1220年、この時に「京極氏」の祖、佐々木氏信が誕生した。佐々木氏信は、後に京極氏信を称している。当時のバグダッドは、世界に類を見ない最先端をいく都市のひとつだった。そのため、バグダッドを治めていたブワイ家は、「極められた都」を由来に「京極」を称した。京極とはバグダッドのことある。

■AD1062年 「ジンバブエ誕生」

AD1062年、ブワイ朝が滅ぶと、ブワイ家はイランを発ち、東アフリカを南下してザンベジ川流域に上陸した。イラン人の顔をした彼らは現地人と混合して「ジンバブエ人」を形成した。彼らが訪れて始めて、当地は「ジンバブエ」と呼ばれた。ジンバブエの名の由来は中国語「新渤海（シンボハイ）」である。シンボハイ＝シンボバイ＝ジンバブエとなる。

■AD1180年 「ヴィッテルスバッハ誕生」

AD1062年に滅んだブワイ朝の残党はエフタルの残党と連合し、「ヴィッテルスバッハ」を結成してバイエルンに移住した。ヴィッテルスバッハの名の由来はエフタルとボハイの組み合わせである。エフタル＋ボハイ＝フォトラス＋ボッハイ＝ヴィッテルスバッハとなる。

■AD1220年 「ジンバブエ王国誕生」

AD1220年、ジンバブエ人は「ジンバブエ王国」を建てている。遺跡「グレート・ジンバブエ」は、AD11世紀から建造が開始され、まだ完成していなかった。AD1450年、ジンバブエ王国が滅ぶと、ジンバブエ人は東アフリカを離れ、遠く、ハワイの地に帰還した。

■AD1320年 「バフマニー朝誕生」

4人のバイエルン公が立つと、ヴィッテルスバッハ家の一部（バッハ）がバイエルンを後にインドに移住した。一方、AD1287年、スコタイ朝の援助を受けたワーレルーがペグー朝の王

位に就くと、反感を持ったモン族がミャンマーを後にデカン高原に移住した。白人の顔をしたヴィッテルスバッハ家はデカン高原に上陸し、モン族と組んで、AD1347年に「バフマニー朝」を開いた。バフマニーの名の由来はバッハとモンの組み合わせである。バッハ+モン=バッハモニ=バフマニーとなる。

■AD1322年 「怕尼芝王統誕生」

怕尼芝（はにじ）の名の由来はヨハネス、或いはバヌアツである。ポリネシア人の顔をした彼らは沖縄人と混合して怕尼芝を輩出し、怕尼芝王統を創始して北山王国を支配した。AD1416年に怕尼芝王統が滅ぶと、彼らは日本列島に移住し、「羽仁」を称した。

■AD1490年 「バッハ誕生」

バフマニー朝が滅ぶと、ヴィッテルスバッハ家はインドを離れて故地であるバイエルンに帰還した。インド人の顔をした彼らは、現地人と混合して「バッハ」の名を生んだ。バッハの名の由来はバフマニーである。バフマニー=バッフマニー=バッハとなる。

■AD1590年 「ボハイの乱」

AD1450年、ジンバブエ王国が滅ぶと、ザンベジ流域を後にしたジンバブエ人は故地である満州に帰還し、ちょっと足を伸ばしてモンゴルに居を定めた。アフリカ人の顔をしたジンバブエ人はモンゴル人と混合して「ボハイ」を生んだ。ボハイの名の由来は渤海（ボハイ）である。ボハイは、万暦の三征のひとつに数えられる「ボハイの乱」を指揮した。

AD1589年、厳しい統治で悪名を轟かせたタナトスの血統に属する「党香」が巡撫として寧夏に派遣された。党夏は、馬が死んだ時に賠償金を徴収する制度を作り、自分の手で他人の馬を殺し、被害者から賠償金を徴収した。また、長期に渡って給料を支給せず、不満を漏らした者は威嚇して退けた。このため、劉東エキ、許朝らが党夏に対して蜂起した。投降したモンゴル人でありながら、ボハイもこの蜂起に参加した。だが、AD1592年に自殺と見せかけて中国を脱出したボハイは、ハワイ諸島に落ち延びた。

■AD1685年 ヨハン=セバスチャン・バッハ生誕

■AD1795年 カメハメハ1世、初代王に即位 「ハワイ王国誕生」

カメハメハ1世が初代ハワイ王に即位すると、

■AD1844年 「バーク教誕生」

カメハメハ1世が初代ハワイ王に即位すると、ブワイ朝の血を継ぐ一部ハワイ人は、ハワイ諸島を離れ、「ブワイ朝」時代に続いていたイランの地に赴いた。ブワイ朝の中でもジンバブエ王国の血を継ぐ人々からは、サイイド・アリー・モハンマドが輩出された。彼は、バハーウッラーを宣言し、「バーク教」を創始した。バークの名の由来はジンバブエである。ジンバブエ=ジンバ=バーク=バークとなる。

■AD1863年 「バハーイー教誕生」

一方、ブワイ朝の中でもヴィッテルスバッハ、バフマニー朝の血を継ぐ人々からは、ミルザ・ホセ・アリが輩出された。AD1863年、ミルザ・ホセ・アリはバハーウッラーを自称して「バハーイー教」を創始している。バハーイーの名の由来はボハイ、或いはブワイである。ボハイ=ボハーイー=バハーイーとなる。

■AD1844年 フリードリッヒ・ニーチェ生誕

ニーチェの名の由来はナザレである。ナザレ=ナーザレ=ナーチャレ=ニーチェとなる。

■AD1906年 アリストテレス・オナシス生誕 「オナシス財閥誕生」

■AD1928年 羽仁進生誕

■AD1940年 テリー・ジョーンズ生誕 「モンティ・パイソン誕生」

■AD1944年 ミック・ジョーンズ生誕 「フォリナー誕生」

■AD1947年 デヴィッド・ボウイ（デヴィッド・ジョーンズ）生誕

■AD1955年 ミック・ジョーンズ生誕 「クラッシュ誕生」

■AD1955年 ハワード・ジョーンズ生誕

■AD1968年 セバスチャン・バック生誕 「スキッド・ロウ誕生」

◆アーリア人（エウリュトス）の歴史

■45万年前 「エウリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、ウェネと組んで「エウリュトス」を生んだ。エウリュトスの名の由来はウェネ、ヒッポリュトスの組み合わせである。ウェネ+ヒッポリュトス=ウェリュトス=エウリュトスとなる。

■50万年前 「盤古の大移動時代」

■50万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■50万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩き

つけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 50万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「エリー族誕生」

人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北東部森林地帯（現イリノイ～ニューヨーク）に居を構えたエウリュトスは「エリー族」を称した。エリーの名の由来はエウリュトスである。エウリュトス＝エウリュートス＝エリーとなる。獣人は、アボリジニの顔をしていたクウォスと混合することで、マヤ人の顔を得たと考えられる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「エリダノス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したエウリュトスは、ペネイオスと組んで「エリダノス」を生んだ。エウリュトス＋ペネイオス＝エウリュトネイオス＝エリダノスとなる。その後、エリダノスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「ヨルダン川誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したエリダノスは、現ヨルダンに入植した。この時に「ヨルダン」の名が生まれた。ヨルダンの名の由来はエリダノスである。エリダノス＝エリダン＝ヨルダンとなる。

■ 7 万年前 「第 1 次ウラヌスの大移動時代」

■ 7 万年前 「第 1 次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「玉依毘売命誕生」

「アルゴスの大航海時代」に参加したエウリュトスは、ティアマトが治めるヤマトの国に入植した。エウリュトスはティアマトと連合して「玉依毘売命」を生んだ。「玉依毘売命（タマヨリ）」の名の由来はティアマトとエウリュトスの組み合わせである。ティアマト+エウリュトス=ティアマエウリュ=タマヨリとなる。

■ 7 万年前 「第 2 次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「ウルド誕生」「スクルド誕生」「ヴェルダンディ誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したエウリュトスは、ミドガルド王国の建設に協力した。エウリュトスは、ユグドラシルの根元に住むといわれる「3 柱の女神」を生んだ。単身で「ウルド」を、チュクウと共に「スクルド」を、トエーと組んで「ヴェルダンディ」を生んでいる。チュクウ+エラド=チュクラド=スクルドとなり、エラド+トエー=エラドンドエー=ヴェルダンディとなる。

■ 7 万年前 「ヤレド（エラド）誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したエウリュトスは、エジプトに入植して「ヤレド（エラド）」を生んだ。エウリュトス=エウリュト=エラド=ヤレドとなる。エラドはヤレドとは不可分の存在であり、同じエウリュトスから生まれた。

■ 4 万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4 万年前 「婁（ルー）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したエウリュトスは、現アジスアベベに入植した。「白虎」が築かれると、エウリュトスはこれに参加し、「婁（ルー）」を生んだ。婁（ルー）の名の由来はエウリュトスである。

■ 4 万年前 「柳（リウ）誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したエウリュトスは、現スワジに入植した。「朱雀」が築かれると、エウリュトスはこれに参加し、「柳（リウ）」を生んだ。柳（リウ）の名の由来はエウリュトスである。

■ 4 万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4 万年前 「女神レト誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加し、クロノスが支配するギリシアに侵攻したヤレドは「女神レト」を祀った。レトの名の由来はヤレドである。ヤレド＝ヤレト＝レトとなる。レトはゼウスと結婚するが、これはセツ（ゼウス）とヤレド（レト）が同盟していたことを意味する。

■ 3 万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3 万年前 「アルタイ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエラドは、冷たい海水により、シベリア人と混合し、「アルタイ族」を生んでいる。アルタイの名の由来はエラドである。エラド＝エラドイ＝アルタイとなる。

■ 3 万年前 「タイヤル族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエラドは、エノクたちと共に台湾を訪れると、ヴィディエはエラドと組んで連合体を生んだ。この時に生まれたのが「タイヤル族」である。タイヤルの名の由来はヴィディエとエラドの組み合わせである。ヴィディエ+エラド=テイエラ=タイヤルとなる。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「科学の種族誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したエラドは、南極に移住した。彼らは、チュクウ、ルハンガ、オロクン、クウォスのトバルカインに接触し、マハラエルと共に「科学の種族」となった。この3者は、所謂「宇宙人（UFOに乗る人）」として知られている。

■ 1万3千年前 科学の種族、核兵器を開発

■ 1万3千年前 「アトランティス滅亡」

この頃、科学の種族は核爆弾を開発したが、当時、ゼウスがその一報を聞いて喜んだ。古代ギリシア・アトランティス王国（オーストラリア南）では、ディオニュソスが「エレウシス密儀」を布教する際、「入信しなければ殺す」と多くの人々を脅し、大量の信者を獲得していた。大量の信者獲得は、発言力の増大と共に、そのまま信者の離反防止につながる。そのため、タナトスの宗教は大量の信者の獲得を命題としている。

ディオニュソスは、その大量の信者たちをアトランティスのインフラ全般に送り込んで、これを掌握した。タナトスの発想では、王にならずとも、人民の生活を支配すれば、優れた王にも勝てるのだ。インフラ掌握により、ディオニュソスが何をしていても人々は怒ることも暴れることも弾劾することなく、怒りを飲み込んで幸福を演じていた。人々は、悪と戦って自由を得るのではなく、自由と生活を保障してもらうために、戦いを放棄し、悪に服従していたのだ。本能・感受性・意志の放棄は、非常な罪である。

ディオニュソスの非人間じみた圧制により、多くの人々が苦しんでいた。国民は「幸福な国の国民」を演じさせられていたのだ。抑圧的な生活により、精神疾患が蔓延した。だが、精神疾患患者はディオニュソスの命を受けた信者たちによってことごとく排除されてしまった。なぜなら、幸福な国で精神疾患を患うということは、国家がウソをついている証だからだ。ギリシア神話

では、ポセイドンとアテネが対立する説話が紹介されている。これは、ディオニュソスが篡奪したポセイドンの国アトランティスとアテネが君臨していた時代の古代ギリシアとの対立を意味している。

「太陽神アポロン」を祀っていたアベラム族や全能の神ゼウスも、このことを憂慮していたが、数で圧倒するディオニュソスには対抗できなかった。そこへ、科学の種族が核兵器を開発した。ゼウスは、ディオニュソスと彼らに追随する人々を皆殺しにするために、科学の種族に核兵器の使用を要請した。人喰い人種を嫌悪していた科学の種族はこれを快く承諾した。これにより、ディオニュソスが篡奪したアトランティスは滅亡した。オーストラリア南部には、テクタイトが散乱しているが、これは当地にアトランティスの都市が存在していたことを意味している。

■ 1万3千年前 南極を北方に引き上げる作戦を練る

虚言症を患う人喰い人種ディオニュソスと共存することは不可能だと考えていた科学の種族（エラド、マハラエル、トバルカイン）は、旧世界から切り離された南極大陸の立地条件を高評価していた。そして、彼らは、半分凍結している南極大陸を有効活用すべく、核兵器で地軸を動かして南極をもっと北方に引き上げようという計画を立てた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「テングリの大航海時代」

■ 1万3千年前 「神日本磐余彦尊（神武天皇）誕生」

「テングリの大航海時代」に参加して黒龍江に入植したエウリュトスは、ティアマトらと連合して「カムヤマトイワレヒコ」を生んだ。カムヤマトイワレヒコの名の由来はピュグマエイ、ティアマト、エウリュトスの組み合わせである。ピュグマエイ+ティアマト+エウリュトス=グマアマトエウリュ彦=カムヤマトイワレ彦となる。彼らはディオナーが築いた天皇を継承し、「神武天皇」として初代天皇に即位し、天皇家として黒龍江付近を統率した。

■ 1万3千年前 「科学の種族の大移動時代」

■ 1万3千年前 「大地の女神エリウ誕生」

エラド族、マハラエル族はトバルカイン族を残し、タップ・オノスからアイルランドに移った。エラド族は「大地の女神エリウ」「ダグザの父エラドウ」を古代アイルランドに祀り、現地人を支配下に置いた。一方、科学の種族は、失った故郷南極を再現するため、共同で北アフリカに赴いて現サハラ砂漠一帯に壮大な基地を築いていた。その時に、大西洋を横断してセネガルに移住した文明放棄組「エノス」の一団と再会する。文明継承組は、セネガル人の顔をした兄弟を古代アイルランドに招いた。アイルランドに上陸した彼らはいくつか神々を祀った。

■ 1万千5百年前 「御間城入彦（崇神天皇）誕生」

エウリュトスは、ミマースと連合して「ミマキイリヒコ」を生んだ。ミマキイリヒコの名の由来はミマースの人（ミマキ）とエウリュトスの組み合わせである。ミマキ+エウリュトス=ミマキエウリュ+彦=ミマキイリヒコとなる。ミマキイリヒコは「崇神天皇」として第10代天皇に即位している。

■ 1万千5百年前 「活目入彦（垂仁天皇）誕生」

エウリュトスは、ハリアクモンと組んで「イクメイリヒコ」を生んだ。イクメイリヒコの名の由来はハリアクモンとエウリュトスの組み合わせである。ハリアクモン+エウリュトス=アクモンエウリュ+彦=イクメイリヒコとなる。イクメイリヒコは「垂仁天皇」として第11代天皇に即位している。

■ 1万千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万千5百年前 「最高神エル誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加したエウリュトスは、メソポタミアに入植し、「エル」を生んだ。エルの名の由来はエウリュトスである。エウリュトス=エルド=エルとなる。

■ BC 7千年 「アヌンナキの大航海時代」

■BC 7千年 「ダグザの父エラドウ誕生」

「アヌンナキの大航海時代」に参加したエラドは、アイルランドに入植した。この時に「エラドウ」が生まれた。エラドウの名の由来はエラドである。エラドウは新参者だが、7万年前からアイルランドに住む「ダグザ（チュクチ）の父」を称した。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「エリドゥ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエラドは、メソポタミアに移住した。彼らは、メソポタミアの地にシュメール文明を支えた都市国家「エリドゥ」を建設した。エリドゥの名の由来はエラドである。エラド＝エラドゥ＝エリドゥとなる。

■BC 5千年 「最高神オロドゥマレ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエラドは、アムル人と共にニジェール流域に移住し、「最高神オロドゥマレ」を生んだ。オロドゥマレの名の由来はエラドとアムルの組み合わせである。エラド＋アムル＝エラドムル＝オロドゥマレとなる。

■BC 32世紀 「第2次北極海ルート時代」

■BC 32世紀 「ウィルタ族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したヤレドは樺太に入植し、「ウィルタ族」を残している。ウィ

ルタの名の由来はヤレドである。ヤレド=イヤレド=ウィルタとなる。

■BC32世紀 「アリュート族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したヤレドは、アリューシャン列島に入植し、現地人と混合して「アリュート族」を形成した。アリュートの名の由来はヤレドである。ヤレド=ヤリュード=アリュートとなる。

■BC32世紀 「アーリア人誕生」

アリュート族はシベリアに帰還して「アーリア人」を称した。アリュート=アーリュート=アーリアとなる。モンゴロイドの顔をしたアーリア人は、「第2次北極海ルート」の同僚であったプール族（スバル人）、マトウラ族（ミツライム族）、マツヤ族（メトセラ族）の後を追ってインドにまで南下した。再会した彼らは連合体を結成した。

■BC32世紀 「魯（ルー）誕生」

一部アリュート族は古代中国に進出し、BC1042年に「魯（ルー）」を建国している。魯（ルー）の名の由来はアリュートである。アリュート=リュール=ルー（魯）となる。魯はBC256年まで続いたが、滅亡すると魯の一族はソマリアに移住した。

■BC12世紀 「アリナ族誕生」

インドに移住したアーリア人は「アリナ族」を称した。アーリア人の連合体には、他にもブリグ族（ペレグ）、ドルヒユ族（トロイア）、パルシュ族（ペルシア）、ダーサ族（デウス）、パニ族・アヌ族・バラナ族（ヴァラナシ）が参加した。インド時代のアーリア人は、ベーシュタード王国・善神デーヴァの隣人として善き時代を謳歌した。

■BC1027年 「太陽の女神アリンナ誕生」

「十王戦争」の後、イランにやって来たアリナ族は、一部がタタと組んでタタール人を生み、一部は現地人と混合して「太陽の女神アリンナ」を誕生させた。その後、彼らはイランを発ってヒ

ツァイト帝国の跡地に進出し、当地に「太陽の女神アリンナ」を祀った。

■BC 11世紀 「エラ人誕生」

汚らしいタナトスに嫌気がさした科学の種族はヴィマーナで地球を飛び出し、宇宙に活路を見出した。ビリー・マイヤー著「地球外知的生命体 プレアデスとのコンタクト（徳間書店）」によると、宇宙人の自称はエラ人、プレヤール人である。「マハーバーラタ戦争」を機に、宇宙に進出したエラドが「エラ人」になったと考えられる。エラの名の由来はエラドである。エラド＝エラとなる。

■BC 209年 「ラハンウェイン族誕生」

BC 249年に魯が滅び、BC 230年に韓が滅び、BC 209年に衛が滅びた。この3者は「秦」による統治を機に連合し、中国を脱出して遠くソマリアに落ち延びた。中国人の顔をした彼らはソマリア人と混合して「ラハンウェイン族」を形成した。ラハンウェインの名の由来は魯（ルー）、韓（ハン）、衛（ウェイ）の組み合わせである。ルー＋ハン＋ウェイ＝ルハンウェイ＝ラハンウェインとなる。

■AD 93年 「アラン族誕生」

北匈奴が滅ぶと、アーリア人は匈奴を離脱してアラン族として中央アジアに進出を果たす。アランの名の由来はアーリアである。アーリア＝アーリアン＝アランとなる。アラン族は、フン族と共に東ゴート族を撃破したため、東ゴート族は安全なローマ領内に避難した。これを機に「ゲルマン人の大移動」が始まる。

■AD 1896年 アントナン・アルトー生誕

■AD 1953年 エラ人、ビリー・マイヤーに接触

ビリー・マイヤーは、著書で宇宙人の神話を紹介している。神話には、エラ人、プレヤール人の先祖「ヘーノク」が登場する。エラド、マハラエルの父はエノクであるが、エノクとヘーノクは似ている。これは偶然だろうか。更に、マイヤーは、ソモン、トゥーラスと呼ばれる宇宙人の都

市が、過去、核兵器によって焦土と化した話を紹介している。ソモンは「ソドム」、トゥーラスは「マー・トゥーレスの戦い」のことだと考えられる。

一般的に、宇宙人に関するの話は、どうしても色眼鏡で見がちだ。だが、名前を検証して歴史を知る方法を用いた限り、ビリー・マイヤーの報告は非常に信頼できる。名前により、マイヤーの言葉が全て、真実であることを証明している。500光年離れたプレアデス星団から来たエラ人・プレイヤー人は、実は科学の種族エラド・マハラエルである。つまり、地球人は既に500光年先の遠い宇宙の果てまで到達しているのだ。

超常現象マニアの間では、月（ピラミッド、基地）、火星（ピラミッド、人面遺跡など）に宇宙人の痕跡が残されていると信じられている。だが、500光年離れた場所に行く能力を持つ科学の種族なら月、火星に基地を構えることは難しいことではない。火星の巨大な人面遺跡は、タナトスが科学を発展させることを見越して造られたのかもしれない。つまり、脅しである。

■AD1907年 ミルチャ・エリアーデ生誕

■AD1954年 レジェップ・タイップ・エルドアン生誕

エリダノスの血統からは、第12代トルコ大統領レジェップ・タイップ・エルドアンが輩出されている。エルドアンの名の由来はヨルダンである。ヨルダン=ヨルドアン=エルドアンとなる。

■AD1961年 トム・アラヤ生誕 「スレイヤー誕生」

◆インドラ（マイアンドロス）の歴史

■30万年前 「マイアンドロス誕生」

マイアンドロスの名の由来はピュグマエイ、ウエネ、テレストーの組み合わせである。ピュグマエイ+ウエネ+テレストー=マエイエネテレス=マイアンドロスとなる。マイアンドロスはピュグマエイではなく、ウエネが主導したが、その後、彼らは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「アンドロメダ誕生」

マイアンドロスはメーティスと組んで「アンドロメダ」を生んだ。アンドロメダの名の由来はマイアンドロスとメティスの組み合わせである。マイアンドロス+メティス=アンドロメティ=アンドロメダとなる。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「アンダマン諸島発見」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したマイアンドロスは、スカマンドロスと共にアンダマン諸島に入植した。この時に、「アンダマン諸島」の名が生まれた。アンダマンの名の由来はマイアンドロスとスカマンドロスの組み合わせである。マイアンドロス+スカマンドロス=アンドマンド=アンダマンとなる。

■ 30万年前 「アンダルシア誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したマイアンドロスは、アンダマン諸島からイベリア半島に入植した。この時に「アンダルシア」が生まれた。アンダルシアの名の由来はマイアンドロスである。マイアンドロス=アンドロス=アンダルシアとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「雷神インドラ誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したマイアンドロスは、インドに移住した。この時に「インドラ」が生まれた。インドラの名の由来はマイアンドロスである。マイアンドロス=マイアンドラス=インドラとなる。

■ BC3年 アレクサンドル生誕 「アレクサンドル大王誕生」

アルゲースは、マイアンドロスと連合して「アレクサンドル」を生んだ。アレクサンドルの名の由来はアルゲースとマイアンドロスの組み合わせである。アルゲース+マイアンドロス=アルゲースアンドロス=アレクサンドルとなる。人種母体はマケドニア人だが、アレクサンドル大王には獣人アルゲース、雷神インドラの血が流れていることがわかる。

■BC3世紀 「アーンドラ王国誕生」

アレクサンドル大王は、死んだことにしてインドに移住した。その後、マウリア朝マガダ王国がインドを統一すると、アレクサンドル大王の残党はガンジス流域からデカン高原に避難した。彼らはそこで「アーンドラ王国」を建設している。アーンドラの名の由来はマイアンドロスである。マイアンドロス=アンドロ=アーンドラとなる。

■AD230年 「アント族誕生」

アーンドラ朝が滅ぶと、マイアンドロスは中央アジアに移住して「アント人」を生んだ。アント人は、スクラブ人、ウェネト人と共にスラブ民族の母体を築いた。アントの名の由来はアーンドラである。

■AD230年 「安藤氏誕生」「遠藤氏誕生」

アーンドラ朝が滅ぶと、マイアンドロスは日本に移住して「安藤氏」「遠藤氏」の名を生んだ。安藤、遠藤の名の由来はアーンドラである。アーンドラ=アーンドーラ=安藤（遠藤）となる。この系統からは「安藤組」の安藤昇が輩出されている。

■AD534年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■AD534年 「安達氏誕生」「半田氏誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したアント人は、日本人と交わって「安達氏」「半田氏」を生んだ。半田の名の由来はヴァンダルである。また、ヴァンダル族は小田野三郎に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのが「安達氏」の祖、安達盛長である。ヴァンダル=

ハンダル=半田となり、ヴァンダル=アンダル=安達（あだち）となる。

■ A D 1 9 2 6 年 安藤昇生誕 「安藤組誕生」

◆ヤワン（オアンネス）の歴史

■ 3 0 万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 3 0 万年前 「オアンネス誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したイアンターは、ウェネスと組んで「オアンネス」を生んだ。オアンネスの名の由来はイアンターとウェネスの組み合わせである。イアンター+ウェネス=イアンネス=オアンネスとなる。オアンネスは、水生人として暮らした。

■ 3 0 万年前 「ボアン誕生」

オアンネスは、当時、氷の下にあったアイルランドにまで生活圏を広げた。アイルランドでは、彼らは「ボアン」を称した。ボアンの名の由来はズルヴァーンである。ズルヴァーン=ヴァン=ボアンとなる。大地殻変動後は、アイルランドに「ボアン川」の拠点を得た。

■ 7 万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「ホアンヤ族誕生」「トルビアワン族誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加して東南アジアに移住したオアンネスは台湾に入植した。この時に「ホアンヤ族」が生まれ、獣人ステロペースと共に「トルビアワン」を儲けている。ホアンヤの名の由来はオアンネスである。オアンネス=ホアンネス=ホアンエス=ホアンヤとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「ヤワン誕生」

「大地殻変動」が起き、アイルランドを覆っていた氷が溶けると、オアンネスはアイルランドから泳いでメソポタミアに渡った。この時、海の中から現れたオアンネスは、メソポタミア人（シュメール人）に「魚神」と呼ばれた。オアンネスは、メソポタミアの地に「ヤワン」を生んだ。ヤワンの名の由来はオアンネスである。オアンネス＝ヤワンネス＝ヤワンとなる。

■ BC 5千年 「イウヌ（ヘリオポリス）誕生」

バビロンの塔を機に、ヤワンは古代エジプトに移住した。この時に「イウヌ」を築いた。イウヌの名の由来はウエネである。ウエネ＝ウエネ＝イウヌとなる。イウヌは「聖地ヘリオポリス」の古名である。

■ BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■ BC 5千年 「愛の神オインガス誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したオアンネスはクシュと組んで「愛の神オインガス」を祀った。オインガスの名の由来はオアンネスとクシュの組み合わせである。オアンネス＋クシュ＝オアックス＝オインガスとなる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC1179年 「イオニア人誕生」

アッシュール・ダン1世が、アッシリアの王座に就いて強い征服本能を発揮し始めると、これを嫌ったオアンネスはシュメールから逃亡し、黒海沿岸部に入植した。このとき、彼らは「イオニア人」を称した。イオニアの名の由来はオアンネスである。オアンネス=オアンニア=イオニアとなる。

■BC829年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC829年 「越（ユエ）誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したヤワンは長江流域に移住した。現地人と混合した彼らは「越（ユエ）」を称して古代中国に覇を唱えるべく、春秋戦国時代に討って出た。越（ユエ）の名の由来はヤワンである。ヤワン=ユワン=ユエ（越）となる。

■BC753年 「アルメニア人の大航海時代」

■BC343年 「ポントス人の大航海時代」

■BC343年 「ポントス王国（前身）誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したイオニア人は、黒海南岸に「ポントス王国」を築いた。ポントスの名の由来はポントスである。彼らは、ポントスの故地に「ポントス王国（前身）」を建設した。しかし、タナトスが侵入すると、すぐにインドに移住した。BC281年、マケドニアから独立したミトリダテス1世（タナトス）が、初代王に即位して「ポントス王国」を黒海南岸に打ち立てた。

■BC306年 「ジャワ誕生」

BC306年、越が滅びると、越人はジャワ島に移住した。彼らが訪問して初めて、彼の島は「ジャワ島」と呼ばれた。ジャワの名の由来はヤワン（JAWAN）である。JAWAN（ヤ

ワン) = ジャワン = ジャワとなる。

■ A D 3 0 6 年 「城氏誕生」

B C 3 0 6 年、越が滅びると、越人は日本を訪れた。東北地方に移住した彼らは「城氏」を生んだ。城(じょう)の名の由来はジャワである。ジャワをジョウと読み、「城」を当て字した。彼らの拠点は「越(えつ)」と呼ばれた。

■ B C 3 0 6 年 「王氏誕生」

ジャワ人は、再度中国に進出し、「王氏(ワン)」を生んだ。ワンの名の由来はヤワンである。ヤワン=ワン(王)となる。

■ A D 1 1 4 年 「ボン教誕生」

ローマ皇帝トラヤヌスのメソポタミア遠征を機に、ポントス人、パルティア人はシルクロードを使い、陸路でチベットを経てモンゴルに至っている。陸路組は、人類史上初めてチベットの地に足を踏み入れた可能性がある。ポントス人は「ボン教」を創始した。ボンの名の由来はポントスである。ポントス=ポントス=ボンとなる。

■ A D 1 1 4 年 「宇文部誕生」

ポントス人、パルティア人はしばらくしてチベットからモンゴルに移り、現地人と混合して騎馬軍団「宇文部(ユーウェン)」「托跋部(ツォバ)」を結成した。ユーウェンの名の由来はイオニアであり、ツォバの名の由来はチベットと同じである。イオニア=イーウェンニア=ユーウェンとなる。

■ A D 2 7 0 年 誉田別尊、第15代イェマック王に即位 「応神天皇誕生」

宇文部(ポントス人)、托跋部(パルティア人)は満州に赴き、70年間空位だったイェマックの王位を篡奪し、宇文部の首領「誉田別尊(ホンダワケ)」が応神天皇に即位した。誉田別(ほんだわけ)の名の由来はポントスとオケアーノスの組み合わせである。ポントス+オケアーノス

=ホント+オケ=誉田（ほんだ）+別（わけ）となる。応神天皇の即位によって、木骨閩（モグル）がイエマックの王位を奪い返すべく、周氏、楼蘭と共に「柔然」の結成に参加した。

■AD307年 「楊氏誕生」

慕容部が鮮卑の実権を握ると、宇文部はモンゴルから中国に進出した。宇文部は中国人と混合して「楊氏（ヤン）」を形成した。ヤンの名の由来はイオニア、或いは宇文（ユーウェン）である。イオニア=イアンニア=ヤンニア=ヤン（楊）となる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「キャッスル誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した城氏は、ブリテン島に上陸した。この時に「キャッスル」の名が生まれた。キャッスルの名の由来は城である。

■AD319年 「本多氏誕生」「本田氏誕生」

鮮卑の時代が終焉を迎えると、宇文部、一部托跋部、タタール人はモンゴルを発って日本に移住した。宇文部はポントスを由来に「本多」「本田」を称した。

■AD345年 「姚氏誕生」

道教、ペー族、張氏、ユワン族の連合は「前涼」をAD345年に開き、ペー族は「符氏（フー）」を称し、ユワン族は「姚氏（ヤオ）」を称してAD351年に「前秦」を開いた。涼（リャン）の名の由来はアグリオスである。姚氏は、AD384年に「後秦」を開き、一方、張氏と道教は連合して「蕭氏（キャオ）」を称し、宋（南朝）の王位を篡奪し、AD479年に「南齊」を、AD502年に「梁（リャン）」を、AD555年に「西梁」を開いている。梁（リャン）の名の由来はアグリオスである。587年に西梁が滅ぶと、一行は2手に分離して行動した。

■AD535年 宇文泰、西魏初代王に即位 「西魏誕生」

永い間、同盟者であった托跋部がヨーロッパに移住すると、宇文部は托跋部の北魏を継承して「西魏」を建設した。

■AD557年 宇文覺、北周初代王に即位 「北周誕生」

西魏が滅ぶと、宇文部は「北周」を建設した。北周では、AD574年に仏教を邪教として弾圧している。大宛のタナトスたちは、仏教を使って東アジアを征服しようとしていたわけだからこれは当然のことであった。北周は「隋」建国の下地を準備した。

■AD589年 楊堅、初代皇帝に即位 「隋誕生」

楊堅は、タナトスの一族タングートなどを討っているが、タナトスが指揮する仏教徒の一揆・暴動に翻弄されてしまった。短命に終わった隋は、霸王の座を唐氏、李氏に託している。

■AD878年 「カスティーリャ王国誕生」

「夷浮の乱」を起こしたものの、鎮圧された陸奥安倍氏は、東北地方を離れ、城氏を率いてインド洋を横断してジンバブエに上陸した。城氏は一部陸奥安倍氏と共に更にイベリア半島に移住した。この時、城氏は「カスティーリャ家」を生んだ。カスティーリャは「城」を意味するスペイン語である。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1009年 「エヴェン族誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」に参加した隋の王族は、シベリアに移住して「エヴェン族」を生んだ。エヴェンの名の由来はヤワンである。ヤワン=ヤヴァン=エヴェンとなる。

■AD1072年 アルフォンソ6世、カスティーリャ王に即位

■AD1303年 「イヴァン誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」に参加した隋の王族から生まれたエヴェン族は、ロシアに移住し、「イヴァン」の名をもたらした。イヴァンの名の由来はシベリアの部族「エヴェン」である。この系統からはイヴァン1世、イヴァン2世、ルーシを「タタールのくびき」から解放したイヴァン3世（イヴァン大帝）、イヴァン4世（イヴァン雷帝）、イヴァン5世、生後2ヶ月で即位したイヴァン6世が輩出されている。

■AD1325年 イヴァン1世、モスクワ大公に即位

エヴェン族の子孫、イヴァン1世はモスクワ大公とウラジミール大公の座を得た。オゴタイの家族であるイヴァン1世は、キプチャク汗国に忠誠を誓い、キプチャク・ハンの徴税人となり、モスクワを裕福にした。

■AD1369年 「伊勢氏（後北条氏）誕生」「伊豆誕生」

トラスタマラ家にカスティーリャ王位を篡奪されると、ブルゴーニュ家（カスティーリャ）はイベリア半島を後に、先祖の故地である日本を目指した。「伊豆」に上陸した彼らは、当地を「伊豆」と呼び「伊勢氏」を称した。伊豆、伊勢の名の由来はイスパニアである。イスパニア=イズパニア=伊豆となり、イスパニア=イセパニア=伊勢となる。

■AD1432年 伊勢盛時生誕 「北条早雲誕生」

AD1432年、伊勢氏からは伊勢盛時、後の「北条早雲」が誕生している。伊勢氏は、北条氏が祖（ジャワ人）を同じくすることを知っていたため、威光を借らぬと「北条」の名を拝借した。時は戦国時代、北条早雲は並居る武将を向こうにまわして重厚な存在感を示した。

■AD1455年 「キングの大航海時代」

■AD15世紀 「新マタラム王国誕生」

同じ時期に同じ伊勢氏の人々がジャワ島に帰還している。伊勢定興と伊勢弥二郎の2人である。両者は氏族を率いてジャワ島に帰還し、AD16世紀に「新マタラム王国」を築いている。

■AD1533年 イヴァン4世、初代ツァーリに即位 「イヴァン雷帝」

イヴァン4世は、アストラ・ハン国、カザン・ハン国をモスクワに組み入れたが、タナトスに残酷・苛烈という汚名を着せられたため、ロシア史上最大の暴君「イヴァン雷帝」と呼ばれた。AD1570年、イヴァン雷帝はノヴゴロド市がリトアニアに加勢しないよう、市の有力者とその家族を皆殺しにしている。「ノヴゴロド虐殺」である。

この時、市民は全て連行され、拷問によって裏切りの自白を引き出され、その後に男は殺害され、女・子供は足を縛られて湖に捨てられた。2月に入ると、1月2日に始まった大虐殺・略奪は市内から市外に移り、修道院が略奪の目標となった。当時のノヴゴロド市、人口3万人の内、延べ3000人が虐殺され、300人がモスクワに連行された。しかし、これらの所業は、タナトスの官僚によって行われただろう、また、エヴェン族の末裔であるイヴァン雷帝は、シベリア征服事業を実施している。

■AD1590年 「新マタラム王国誕生」

AD1590年、秀吉に切腹を命じられた北条氏直も、死んだと見せかけてジャワ島に馳せ参じ、伊勢氏と共に新マタラム王国の建設に参加している。新マタラム王国は、カスティージャ王家、北条早雲の後裔として、インドネシアを守護するためにオランダ東インド会社と戦った。

■AD1591年 「楊応龍の乱」

「キングの大航海時代」に参加したイギリス帰還組のパワー（呉）、テラー（譚）、ハンター（羅）、ウィロウ（楊）、ダンスター（田）は四川と貴州を結ぶ要点、播州に拠点を得ていた。AD1591年、田氏の娘が妾となり、楊応龍を操作し「楊応龍の乱」を発生させた。明の転覆が目的だったと考えられるが、田氏が指揮した「楊応龍の乱」は9年で鎮圧された。

■AD1673年 「三藩の乱」

「キングの大航海時代」に参加したイギリス帰還組による「三藩の乱」が発生する。この蜂起に

も「キングの大航海時代」に参加したイギリス帰還組の面々、王嘉胤、高迎祥、呉三桂、尚可喜が登場する。また、この蜂起には張献忠、李自成、耽仲明も参加しているが、この3人はアフリカ帰還組である。

■AD1696年 「エヴェンキ族誕生」

エヴェンキ族は、ロシア人との交流のために食生活にロシアの影響が濃いとされている。小麦でパンを作り、紅茶を飲み、紅茶にミルクを加える。しかし、これは死んだと見せかけたエヴェン族の後裔イヴァン5世が、ロシアを脱出してツングースに帰還したことを意味する。彼は「エヴェンの人」を意味する「エヴェンキ」を称した。

病弱なイヴァン5世は姉ソフィアの傀儡であったが、AD1689年にソフィアがピョートル支持派によって倒されると、イヴァン5世は名ばかりの統治者としてAD1696年で没した。しかし、実際にはイヴァン5世は死んだと見せかけて残党と共にロシアを脱出し、故地であるツングースに落ち延びた。ロシア帝国では、その後もエヴェン族のツァーリの座篡奪の陰謀は続いたが、生後2ヶ月でツァーリの座を戴いたイヴァン6世はクーデターにより廃位され、背後にいたエヴェン族も離散した。

■AD1906年 本田宗一郎生誕 「ホンダ自動車誕生」

■AD1914年 ウィリアム・キャッスル生誕

■AD1940年 王貞治生誕

■AD1947年 スティーヴン・キング生誕

■AD1947年 エドワード・ヤン生誕

■AD1955年 ジョン・キング生誕 「ギャング・オブ・フォー誕生」

オロクンの歴史

◆オロクンの歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「オロクン誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したワルムベは、現ナイジェリアに「オロクン」「オロルン」を生んだ。オロクンは、ミャンマー少数民族の姿をしていた。日本で活躍しているボビー・オロゴンは、その名前からすると「原初の海オロクン」の末裔かもしれない（顔と身体はバントゥー族だが）。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■45万年前 「アラカン族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したオロクンは、アフリカを離れ、ミャンマーに入植した。この時、「アラカン族」が生まれた。アラカンの名の由来はオロクンである。オロクン＝オラカン＝アラカンとなる。

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」に参加して中国に移り、更に「獣人の大狩猟時代」に参加してシベリアに移住したチュクウは、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「カウディア族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したアルキュオネウスは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、現カリフォルニア近辺に居を構え、「カウディア族」を称した。カウディアの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス=アルカウディア=カウディアとなる。

■ 40万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「エレクトラ誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したオロクンは、アルキュオネウスから分離し、トレと組んで「エレクトラ」を生んだ。エレクトラの名の由来はオロクンとトレの組み合わせである。オロクン+トレ=オロクトレ=エレクトラとなる。エレクトラはその後、大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ウリゲン誕生」「オロク族誕生」

ミャンマー人の姿をしたアロール族とアラカン族は、東南アジアを離れてシベリアを目指した。彼らの到来を機に、クウォスとチュクウの部族は、シベリアを明け渡してオーストラリアに移る。だが、アロール族とアラカン族は豊かな海産資源に目を奪われ、再び水生生活に入った。その際、シベリア・モンゴルの神である「ウリゲン」と「オロク族」が誕生した。ウリゲン、オロクの名の由来はオロクンである。オロクン=オリゲン=ウリゲンとなり、オロクン=オロクと

なる。彼らは、シベリア人の祖となる。

彫りが浅く、目が細く、部品が小さいという特徴を持つ、シベリア人の容姿は、世界中の人々とは異なる印象を持っている、肌が白くとも黒くとも、更に、同じモンゴロイドに分類される東南アジア人、インディアンでさえ彫りが深い。つまり、東アジア人は異端であり、彫りが深い人々の方が人類の主流である。じつは、これがシベリアに達したホモサピエンスが再度、海に入って水生生活をしていた証拠である。低温の海水に対応するため、身体が変化したのだ。

■ 7万年前 「シベリア人の大移動時代」

■ 7万年前 「東アジア人（モンゴロイド）誕生」

「シベリア人の大移動時代」に参加したウリゲン、エルリクは、シベリアを発って中国、朝鮮半島、日本列島に入植した。この時に、中国人、朝鮮人、日本人の姿が生まれた。十和田の縄文人がモンゴル、チベットに移った時、モンゴル人、チベット人が生まれた。つまり、モンゴル人、チベット人は縄文人の面影を残している。

■ 7万年前 「ケタガラン族誕生」「アリクン族誕生」

「シベリア人の大移動時代」に参加したウリゲンは、台湾に入植した。この時に「ケタガラン族」と「アリクン族」が誕生した。ケタガランの名の由来はエレクトラ、テングリ、カアングの組み合わせであり、アリクンの名の由来はオロクンである。エレクトラ+テングリ+カアング=ケトグリアン=ケタガランとなり、オロクン=オリクン=アリクンとなる。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「心誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したアリクン族は、台湾を離れてアフリカに入植した。湖水地方に移住したアリクン族は、「心（キン）」を生んだ。心（キン）は「青龍（チンロン）」の建国に参加した。

■ 4 万年前 「参誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したアリクン族は、台湾を離れてアフリカに入植した。アジスアベベ付近に移住したアリクン族は、「参（カン）」を生んだ。参（カン）は「白虎（ベイファー）」の建国に参加した。

■ 4 万年前 「玄武誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したアリクン族は、台湾を離れてアフリカに入植した。ケニア付近に移住したアリクン族は、ゼウスと共に「玄武（シュアンウー）」を建設した。シュアンウーの名の由来はアリクンとゼウスの組み合わせである。アリクン+ゼウス=クンウ=クアンウー=シュアンウーとなる。シュアンウーになる前のクアンウーの名はケニアの語源でもある。

■ 3 万年前 「モンゴロイドの大移動時代」

■ 3 万年前 「ヨロク族誕生」

「モンゴロイドの大移動時代」に参加したウリゲンは、故地を離れて新天地を求めてアメリカに向かった。水生人として暮らしていたシベリア人は、泳いでベーリング海峡を渡り、徒歩で南アメリカ先端にまで到達した。ウリゲンは、カリフォルニアに入植し「ヨロク族」を残している。ヨロクの名の由来はオロクンである。オロクン=ヨロクン=ヨロクとなる。

■ 3 万年前 「アルア族誕生」

「モンゴロイドの大移動時代」に参加したカリフォルニアを発ったウリゲンは、当時、文明の最先端を行っていたペルーに立ち寄り、モホス平原に移住した。この時、ウリゲンはアマゾンにアルア族を残した。アルアの名の由来はオロクンである。オロクン=オルアクン=アルアとなる。アマゾン原住民の姿、生活は、古（いにしえ）のウリゲンの姿、生活を髣髴とさせるものだろう。

■ 1 万 3 千年前 「テングリの大航海時代」

■ 1万5千年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ BC 7千年 「エレキシュガル誕生」

「テングリの大航海時代」に参加して長江水域に入植し、モンゴルに移住して「垂仁天皇の大移動時代」に参加したアリクン族は、メソポタミアでメーティス、オーキュロエーと組んで「エレキシュガル」を生んだ。エレキシュガルの名の由来はエレクトラ、メーティス、オーキュロエーの組み合わせである。エレクトラ+メーティス+オーキュロエー=エレクスキュロ=エレキシュガルとなる。

■ BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■ BC 19世紀 「ヨーク誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したヨロク族は、単独でブリテン島に入植し、拠点「ヨーク」を入手した。ヨークの名の由来はヨロクである。ヨロク=ヨオク=ヨークとなる。

■ BC 19世紀 「ルカ人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したヨロク族は、ブリテン島の次に、トゥルシア人と共にイランに入植し、「ルカ人」として海の民に参加した。ルカの名の由来はヨロクである。ヨロク=ヨルカ=ルカとなる。

■ BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ BC 7世紀 「アウラック国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したルカ人は、北ベトナムに拠点を移して「アウラック国」を建設した。アウラックの名の由来はオロクンである。オロクン=オウロクン=アウラック

となる。

■ B C 4 世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■ B C 4 世紀 「ククルカン誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したオロク族は、メキシコに移住した。日本人の顔をした加賀氏はオロク族と連合して「ククルカン」を祀った。ククルカンの名の由来は、加賀とウリゲンの組み合わせである。加賀+ウリゲン=カガリゲン=ククルカンとなる。

■ B C 3 世紀 「オロク族継承」

その後、アウラック国が B C 3 世紀頃に滅ぶと、ルカ人は先祖の故地シベリアを目指し、樺太に入植してマヤに移住した「オロク族」の名を継承した。

■ B C 1 3 9 年 「ケツアルコアトルの大航海時代」

■ B C 1 世紀 「高句麗誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したククルカンは、ケツアルコアトルと共に満州から朝鮮半島に赴いた。ククルカンは、ゼウスの末裔である朱蒙（朱氏）と組んで「高句麗（ゴグリヨ）」を建てた。ゴグリヨ（高句麗）の名の由来はククルカンである。ククルカン=ゴグリヨカン=ゴグリヨとなる。古代朝鮮の王国、高句麗と百済はユカタン半島から来たのだ。

■ A D 6 6 8 年 「高句麗の大移動時代」

■ A D 6 6 8 年 「ブルガリア誕生」

「高句麗の大移動時代」に参加したククルカンは、西方に移住して「ブルガリア人」を結成する。ブルガリアの名の由来はペレグとゴグリヨの組み合わせである。ペレグ+ゴグリヨ=ペレグリ

オ＝ブルガリアとなる。

■AD668年 「大蔵氏誕生」「大倉氏誕生」「小倉氏誕生」

「高句麗の大移動時代」に参加しなかったククルカンは朝鮮半島から日本に渡った。ククルカンは、日本人と混合して「大蔵氏」の祖、大蔵広隅を誕生させた。大蔵の名の由来はゴグリヨである。ゴグリヨ＝オグリヨ＝オーグリヨ＝大蔵となる。その後、大蔵氏から「大倉氏」「小倉氏」が派生したと考えられる。

■AD791年 「ゴプラン家誕生」

「高句麗の大移動時代」に参加したククルカンは、ブルガリア人を生み、アヴァール人（楼蘭）と連合した。彼らは、シャルルマーニュ大帝の進撃を機にシロンスク地方に移住した。楼蘭とククルカンは、2つの連合体を築いた。ククルカンは一部楼蘭と連合して「ゴプラン家」を築いた。ゴプランの名の由来は朝鮮語「高（ゴ）」とアヴァール（楼蘭）の組み合わせである。ゴグリヨ＋アヴァール＝ゴヴァール＝ゴヴァラン＝ゴプランとなる。

■AD791年 「ポーランド王国誕生」

ポピエル家はバルト海に移住すると、現地を「ポーランド」と命名した。ポーランドの名の由来はゴプランの土地である。ゴプラン＋ランド＝ゴプランド＝ポーランドとなる。その後、伝説的な君主ピヤストが誕生すると、ゴプラン家はモンゴルに帰還している。

■AD916年 「高麗誕生」

オロク族が主導するゴプラン家は高句麗時代の拠点、朝鮮半島に帰還して「高麗（ゴリヨ）」を建てた。高麗（ゴリヨ）の名の由来は高句麗（ゴグリヨ）である。ゴグリヨ＝グリヨ＝ゴリヨ（高麗）となる。

■AD1048年 「ゴール朝誕生」

シロンスク時代に同盟者であった遼が高麗を服属させると、不満を持った一部高麗王家が朝鮮半

島を脱してインドに移住した。朝鮮人の顔をした彼らは、現地人と混合し、高麗（ゴリョ）を由来に「ゴール朝」を開いた。ゴール朝は、バングラデシュからインド北部、パンジャブ、アフガンに至る広大な地域を支配下に置いた。

■AD1215年 インドから朝鮮半島に帰還

AD1108年、ゴール朝はセルジューク・トルコ帝国に服属し、AD1215年にはホラズム・シャー朝によってゴール朝の王位を廃されている。これを機に、インド人の顔をしたゴール王家は高麗に帰還した。

■AD1356年 「アヴァ王朝誕生」

紅巾軍の猛威、李成桂の登場を機に、高麗の王家は再度、朝鮮半島を脱出してミャンマーに逃れた。AD1364年、タドミンピャが初代王に即位して「アヴァ王朝」が開かれた。アヴァの名の由来はアヴァールである。彼らの祖、柔然（ローラン）が「アヴァール帝国」を篡奪して、ヨーロッパに君臨していた頃の威光に預かろうとしたのだ。

■AD1555年 「アヴァ王朝誕生」

AD1555年、タウングー朝の侵攻により、アヴァ王朝は滅亡する。これを機に、ミャンマー人の顔をしたアヴァ王家は、李氏朝鮮治世下の朝鮮半島に帰還したと考えられる。

■AD1973年 ボビー・オロゴン生誕

オロクンの歴史（アルキュオネウス）

◆アルキュオネウスの歴史

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「アルキュオネウス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したオロクンは、クウォスと組んで「アルキュオネウス」を生んだ。アルキュオネウスの名の由来はオロクンとクウォスの組み合わせである。オロクン+クウォス=オロクノウォス=アルキュオネウスとなる。

■ 45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■ 50万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

イエティ、オラン・ダラムのように4 m近い巨体を持っていたチュクウの部族は、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■ 45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「カウイア族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したアルキュオネウスは、現カルフォルニアに居を構え、「カウイア族」を生んだ。カウイアの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス=アルカウイアネウス=カウイアとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 35万年前 「ガイア誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、モンゴルに「ガイア」を生んだ。ガイアの名の由来はカウイア、或いはアルキュオネウスである。アルキュオネウス=キュオ=カイア=ガイアとなる。ガイアは、地母神として「神統記」に記された。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「アルゲース誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、オーストラリアに「アルゲース」を生んだ。アルゲースの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス=アルキュオス=アルゲースとなる。その後、アルゲースはキュクロプスに参加した。

■ 30万年前 「天空神ウラヌス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、オーストラリアに「ウラヌス」を生んだ。ウラヌスの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス=アルネウス=ウラヌスとなる。

■ 30万年前 「タオカス族誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、台湾に上陸してティケーと連合した。この時に「タオカス族」が生まれた。タオカスの名の由来はティケーとアルゲースの組み合わせである。ティケー+アルゲース=テイゲス=タオカスとなる。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7 万年前 「第 1 次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「第 2 次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「カイン誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したアルゲースは、エジプトの地に「カイン」を生んだ。カインの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオネ＝カインとなる。カインは、聖書にアダムの子、アベル、セツの兄弟として記されている。

■ 7 万年前 「カイナン誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したアルゲースは、エジプトの地に「カイナン」を生んだ。カイナンの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオネン＝カイナンとなる。カイナンは、聖書にエノスの子として記されている。

■ 4 万年前 「ギガントマキア」

■ 4 万年前 「国之常立神誕生」

「ギガントマキア」で敗北したアルキュオネウスは、台湾に帰還した。彼らは、ティケー、テテュスと組んで「クニトコタチ」を生んだ。クニトコタチの名の由来はアルキュオネウス、ティケー、テテュスの組み合わせである。アルキュオネウス＋ティケー＋テテュス＝キュオネティケテテ＝クニトコタチとなる。

■ 4 万年前 「天児屋命誕生」

「ギガントマキア」で敗北したアルキュオネウスは、台湾に帰還した。彼らは、イマナと混合して「アメノコヤネ」を生んだ。アメノコヤネの名の由来はイマナとアルキュオネウスの組み合わせ

せである。イマナ+アルキュオネウス=イマナキュオネ=アメノコヤネとなる。

■ 4万年前 「金山毘古神誕生」「金山毘売神誕生」「思金神誕生」

「ギガントマキア」で敗北したアルキュオネウスは、台湾に帰還した。アルキュオネウスは、ニヤメと混合して「金山毘古神」「金山毘売神」「思金神」を生んだ。カナヤマ、オモイカネの名の由来はアルキュオネウスとニヤメの組み合わせである。アルキュオネウス+ニヤメ=キュオネヤメ=カナヤマとなり、ニヤメ+アルキュオネウス=ヤメキュオネ=オモイカネとなる。

■ 4万年前 「トバルカイン誕生」

「ギガントマキア」で敗北したアルキュオネウスは、台湾に帰還した。アルキュオネウスは、テュポンと組んで「トバルカイン」を生んだ。トバルカインの名の由来はテュポントアルキュオネウスの組み合わせである。テュポン+アルキュオネウス=テュポアルキュオネ=タバルキュオン=トバルカインとなる。

■ 3万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■ 3万年前 「パタゴン人誕生」

「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したアルキュオネウスは、ポリュポーテースと共にペルーに移住し、そこからパタゴニアに移住した。この時に「パタゴン人」が生まれた。彼らは身長が4 m近くある巨人の種族として白人の大航海時代の際に報告されたが、実際にはポリュポーテースとアルキュオネウスの子孫だった。ポリュポーテース+アルキュオネウス=ポーテキュオネ=ポテキオン=パタゴンとなる。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「クンユ誕生」「キアンユン誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加したアルキュオネウスは、「神武天皇の大航海時代」の参加メ

ンバーと共に、モンゴルに「クンユ」「キアンユン」と呼ばれた国を築いた。クンユ、キアンユンの名の由来はいずれもアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオネウ＝クンユ、アルキュオネウス＝キュオネウ＝キアンユンとなる。北方からは、凍りついた故地を逃れたホモサピエンスの部族が「犬戎」「山戎」を築いていた。

アルキュオネウスと連合したティアマトたちは、後に、天孫族が築くイエマックの王統とは異なる天皇家の王統を築いた。神武天皇から始まり、垂仁天皇に終わる系譜は「クンユ」「キャンユン」時代に生きた天皇家の系譜である。彼らの御名は、みな獣人、オケアーニス、河の種族、ティアマトに纏わる名前構成されている。御名によれば、孝霊天皇、孝元天皇、開化天皇、垂仁天皇は河の種族の血筋に属している。

■ 1 万 5 千 年 「垂仁天皇の大移動時代」

■ B C 7 千 2 百 年 「ギルガメシュ誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加したアルゲースは、メソポタミアに移住した。アルゲース（タオカス族）は、マサイ族と連合し、「ギルガメシュ」を生んだ。ギルガメシュの名の由来はアルゲースとマサイの組み合わせである。アルゲース＋マサイ＝アルゲマサイ＝アルゲマシャ＝ギルガメシュとなる。

■ B C 7 千 2 百 年 「ウルク誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加したアルゲースは、シュメール都市国家「ウルク」を築いた。ウルクの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルキュ＝ウルクとなる。

■ B C 7 千 年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千 年 「カナン誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したアルゲースは、北アフリカに「カナン」を生んだ。カナンの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルキュオネ＝キュオネン＝カナンとなる。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC 32世紀 「ガネーシャ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、インドに移ったアルゲースは、象の頭部を持った神「ガネーシャ」を生んだ。ガネーシャの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオネウシヤ＝ガネーシャとなる。

■BC 1027年 アルジュナ生誕

ガネーシャは、マハーバーラタ戦争の英雄「アルジュナ」を生んだ。アルジュナの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルキュオネ＝アルギュオネ＝アルジュナとなる。

■BC 1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC 336年 アレクサンドロス、マケドニア王に即位 「アレクサンドロス大王誕生」

アルジュナの子孫はパンジャブからヨーロッパに移住し、マケドニア王家に接近してアレクサンドロス大王を生んでいる。アレクサンドロスの名の由来はアルゲースとマイマンドロスの組み合わせである。アルゲース＋マイアンドロス＝アルゲースアンドロス＝アレクサンドロスとなる。

■BC 45年 カエサル、インペラトルの称号を得る

ローマ共和国がマケドニア王国と戦火を散らした際、アレクサンドロスの子孫がローマに移住した。彼らは、ユリウス家に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に「カエサル」が生まれた。カエサルの名の由来はアルゲースとエウリュトスの組み合わせである。アルゲース＋エウリュトス＝ゲースエウリュ＝カエサルとなる。

■BC 27年 アウグストゥス、初代ローマ皇帝に即位 「ローマ帝国誕生」

カエサルを生んだアルゲースとエウリュトスは、そのままローマに「アウグストゥス」を生んだ。アウグストゥスの名の由来はカエサルと同じく、アルゲースとエウリュトスの組み合わせである。アルゲース+エウリュトス=アルゲーストス=アウゲストス=アウグストゥスとなる。アウグストゥスとカエサルは親戚として知られているが、両者は、獣人アルゲースと獣人エウリュトスの血統だったのだ。

■AD1804年 ナポレオン1世、帝政フランス初代皇帝に即位 「フランス帝国誕生」

アウグストゥスの子孫はヨーロッパに潜伏していたが、AD18世紀になり、コルシカ島を治めていたポナパルト家に接近し、自身の血統を打ち立てた。この時に「ナポレオン」が生まれた。ナポレオンの名の由来はアルゲースの祖先アルキュオネウスと獣人ポルピュリオンの組み合わせである。アルキュオネウス+ポルピュリオン=ネウピュリオン=ナポレオンとなる。ナポレオン・ポナパルトは英雄時代に於ける最後の英雄であった。ただ、彼はフランス・クリュニー会が悪の元凶であることを見抜けなかった。ナポレオンはロベスピエールらが追放したクリュニー会をわざわざ呼び戻し、権限を復活させてやっている。そのため、フランス・クリュニー会は、当然のように恩を仇で返し、ドミニコ会、聖公会と共謀して皇帝ナポレオンを失墜させた。

■AD1852年 ナポレオン3世、第2帝政フランス初代皇帝に即位 「第2フランス帝国誕生」

ナポレオン3世はフランス・クリュニー会の術中にはまり、ベトナム侵略を実行している。しかし、ドミニコ会が指揮する第3共和制が実験を握ると、ナポレオン3世は失脚し、フランス・クリュニー会はバイエルンに移住した。フランス・クリュニー会は、バイエルン・クリュニー会として「ナチス帝国」の基盤を形成する。

◆元（アルキュオネウス）の歴史

■35万年前 「獣人の大移動時代」

■35万年前 「ガイア誕生」

「獣人の大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、モンゴルに「ガイア」を生んだ。ガイアの名の由来はカウエア、或いはアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオ＝カエア＝ガイアとなる。ガイアは、地母神として「神統記」に記された。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 20万年前 タナトスを皆殺しに

知能によって自然淘汰を免れたできそこないの王タナトスは、虹蛇信仰に対抗してタネ崇拜を創り上げ、大量のできそこないを信者として獲得し、ウソを真実に作り変えた。タナトスの信者たちは悪を正義と呼び、正義を悪と呼んで攻撃した、自然界では出来損ないの方が多く生まれることに気づいたタナトスは、数で圧倒する形で少数派の知性を貶めた。彼らは真の王を退け、人類の美德をゆがめた。これに激怒した正しき者たちはタナトスを皆殺しにし、残党はヨーロッパに流すことを決定した。

■ 20万年前 「ガイアの大移動時代」

■ 20万年前 「アカイア人誕生」

「ガイアの大移動時代」に参加したガイアは、中央アジアにタナトスを連行し、島流しに処した。その後、エーゲ海を訪れたガイアは、金髪・碧眼の白人であるエーゲ人と混合した。この時に「アカイア人」が生まれた。アカイアの名の由来はキブウカとガイアの組み合わせである。キブウカ+ガイア＝ウカエア＝アカイアとなる。

■ 20万年前 「聖地デルポイ」

金髪・碧眼・白人の姿をしたオケアーニスに属するテレストーとペイトーが共同でデルポイを築いた。国家と言っても村落の集合体に過ぎなかった。ガイアが地母神として聖地デルポイに祀られ、オケアーニスに属するペイトーが「守護蛇ピュトン」としてデルポイを守護した。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「海洋神オケアーノス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、アカイア人と連合体を組んだ。この時に「海洋神オケアーノス」が生まれた。オケアーノスの名の由来はアカイアとウラヌスの組み合わせである。アカイア+ウラヌス=アカイアヌス=アカイアーヌス=オケアーノスとなる。その後、オケアーノスはティタン神俗に参加している。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「カイン誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したオケアーノスは、エジプトの地に「カイン」を生んだ。カインの名の由来はオケアーノスである。オケアーノス=ケアノ=ケアン=カインとなる。カインは、聖書にアダムの子、アベル、セツの兄弟として記されている。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「奎誕生」「西方白虎誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したガイアは、現キンシャサに入植し「奎（グイ）」を生み、同盟者と共に「西方白虎（ベイフー）」を建設した。グイの名の由来はガイアである。ガイア=グイア=グイとなる。

■ 4万年前 「鬼誕生」「南方朱雀誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したガイアは、現スワジに入植し「鬼（グイ）」を生み、

同盟者と共に「南方朱雀（ツークエ）」を建設した。グイの名の由来はガイアである。ガイア＝ガイア＝グイとなる。

■ 4万年前 カイン、アベルを殺す

聖書にはカインがアベルを殺す記述があるが、これは実際には、クロノス打倒を拒否したカイン（アルキュオネウス）がアベル（エピアルテース）と交戦したものである。これにより、カインは「ノドの地（メラネシア～オセアニア海域）」に流されている。

■ 4万年前 「アベルの大航海時代」

■ 4万年前 「カイン族誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したアベルは、オリンポス神族に参加しなかったカインを責め、過去の交戦を持ち出し、責めた。その後、アベルは非を認めたカインを連れてノドの地（メラネシア～オセアニア海域）を目指した。「ノドの地」とは、タナトスの勢力圏を意味する。現ミャンマーに放置されたカインは、そのまま「カイン族」となる。

■ 4万年前 「エンリル（前身）誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したアベルは、シベリアまで行ったが、ミャンマーに戻り、カイン族を拾って、再度、エジプトに帰還した。アベルは、エノス、カイン、ヤレド、エノク、メトセラにギリシア侵攻の重要性を説き、クロノス打倒の協力を得ようと動いた。この時に、カイン族はマハラレルと連合して「エンリル」を生んでいる。エンリルの名の由来はカインとマハラレルの組み合わせである。カイン+マハラレル＝インレル＝エンリルとなる。

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大移動時代」

■ BC 7千2百年 「エンリル誕生」

「ヘリオポリスの大移動時代」に参加したエンリルは、メソポタミアに移住し、そのまま神々

の集団アヌンナキに参加した。

■ B C 7 千 2 百年 「神々の集団アヌンナキ誕生」

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「ガイン族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したエンリルは、パプアニューギニアに移住した。この時に「ガイン族」が生まれた。ガインの名の由来はカインである。

■ B C 2 4 8 年 「出雲国の大航海時代」

■ B C 2 4 8 年 「甲斐氏誕生」

「出雲国の大航海時代」に参加したカイン族は、一行と共にインドに行き、そこから引き返して日本に移住した。カイン族は、「甲斐氏」を称した。甲斐の名の由来はカインである。

■ B C 2 4 8 年 「カイ誕生」

「出雲国の大航海時代」に参加した甲斐氏は、安曇氏と共にモンゴルに到達した。安曇氏、甲斐氏の両者は、後に登場する「オグズ24氏族」に参加することになる。その時、甲斐氏は「カイ」を称した。カイの名の由来は甲斐である。

■ B C 1 3 9 年 「ケツアルコアトルの大航海時代」

■ B C 1 3 9 年 「阮氏誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したガイン族は、パプアからベトナムに移住した。こ

の時に「阮氏（グエン）」が生まれた。グエンの名の由来はガインである。ガイン＝ガエン＝グエンとなる。この後、阮氏（グエン）は中国に移って元氏（ユエン）となる。

■AD471年 「鮮卑の大航海時代」

■AD471年 「カイト誕生」

「鮮卑の大航海時代」に参加したカイは、托跋部、慕容部、乞伏部、段部、宇文部と共にブリテン島に移住した。カイは、更に歩を東に進めてスコットランドにまで足を伸ばした。甲斐氏はピクト人の共同体に参加し、「カイト」を称した。カイトの名の由来は「甲斐の人」である。

■AD471年 慕容部、ピクトランドに入植

「鮮卑の大航海時代」に参加した慕容部は、ピクトランドに入植した。彼らは、そこで「鮮卑の大航海時代」の同盟者であるカイトと連合を組んだ。

■AD662年 「元氏誕生」

唐による範囲拡大と共に北ベトナムが支配下に置かれると、阮氏はベトナムから中国に移住した。彼らは「元氏（ユエン）」を称した。元の名の由来は阮である。ただ、読みがグエンからユエンに変わった。

■AD814年 円珍生誕 「寺門派誕生」「山王信仰誕生」「日吉大社誕生」「猿神誕生」

AD814年に誕生した円珍は、元氏の子孫である。円（ユエン）の名の由来は元（ユエン）である。中国で仏教を学んだ円珍、円仁は日本に移住して天台宗を篡奪した。円珍は「寺門派」を築くが、一方で「山王信仰」を興し、「猿神」を祀り「日吉大社」を創建した。円珍は、オリジナリティに拘り、由来をインドに求めた。円珍は、ヤマ神に因んで「山王信仰」を、猿王ヴァーリンに因んで「猿神」を日吉神社に祀った。

日吉（ひよし）の名の由来はヴァイシュラーヴァナである。また日吉は「日枝（ひえ）」と呼ばれることもあるが、「ひえ」の名の由来もヴァイシュラーヴァナである。ヴァイシュラーヴァナ＝ヴァイシュ＝日吉（ひよし）となり、ヴァイシュラーヴァナ＝ヴァイ＝日吉（ひえい）となる

。

■AD1115年 中国からモンゴルに移住

金朝が宋を圧倒し、中国北部を支配下に置くと、元氏は中国からモンゴルに移住した。

■AD1195年 「マリーン王朝誕生」

ヴァイキング時代、慕容部は、カイトと共にピクトランドを発ち、モロッコに入植した。彼らは、「マリーン朝」を開いた。マリンの名の由来は、慕容部（ムーロン）である。ムーロン＝マーロン＝マーリンとなる。AD1463年、ポルトガル王国がカサブランカを占領すると、7年後にマリーン朝は滅んだ。

■AD1215年 フビライ生誕

元氏はトルイ夫人ソルコクタニ・ベキに接近して自身の血統を打ち立てた。この時に、フビライが誕生した。フビライの名の由来はヘブライである。ソルコクタニ・ベキは、ネストリウス派の信者だったため、ヘブライ人の名と彼らが誰かという知識を持っていたと考えられる。後に、モンケ、アリクブケなどフビライの兄弟がフビライに対して蜂起するが、これは彼らが真の兄弟ではないこと、異父兄弟であることを示している。

■AD1235年 スンジャータ・ケイタ、初代帝王に即位 「マリ帝国誕生」

AD1224年、アルモハード帝国が崩壊し、タナトス一族によるグラナダ王国が建つと、マリーン朝の残党は南下し、ガーナ王国に移住した。その後、スンジャータ・ケイタが帝王に即位し、「マリ帝国」が建てられた。マリの名の由来はマリーンであり、ケイタの名の由来はカイトである。カイト＝ケイト＝ケイタとなる。

■AD1271年 「大元帝国誕生」

フビライは国号を「大元」に定めた。大元の名の由来は「偉大な元氏」を意味している。フビライはカラコルムを首都に、東は中国、南は雲南、北はロシア、西はイラン、ハンガリーまでを支

配下に治めた。フビライは、元氏の故地中国を治め、阮氏の故地を治めるべくベトナムに侵攻し、カイン族の故地ニューギニアを治めようとマジヤパヒト王国に侵攻し、カイン族の故地を治めようとミャンマーにも侵攻した。

■AD1368年 「北元誕生」

朱元璋が明皇帝を称して中国全土を掌握すると、これを機に、フビライの一族は大都を離れてカラコルムに撤退した。彼らはここに「北元」を築いた。

■AD1391年 「阮氏復活」

AD1391年、フビライの一族は、ハルハ部に北元の王位を篡奪されてしまう。これを機に、元氏はモンゴルからベトナムに帰還して阮氏を復活させている。

■AD1548年 「大本氏誕生」

日本を脱出した伊達植宗（タイスン・ハーン）の一族は、北元でフビライの血統を退けて北元の王位を篡奪したが、同じようにベトナムに移住して阮氏の名を篡奪した。これを機に、正統な阮氏は日本へと旅立った。阮氏は、瀬戸内海に立ち寄って「大本」の名を生んだ。大本の名の由来は大元である。大元（ダーユエン）＝大元（おおもと）＝大本となる。筆者の母方は大本姓だが、母方の家族は、みな、モンゴル人のような顔をしている。

■AD1571年 「コーエン誕生」

織田信長による延暦寺焼き討ちが起きると、円珍の残党は瀬戸内海に逃げ、大本氏と共に戦国時代の日本を脱出した。太平洋を横断し、マヤを経た彼らはアイルランドに移住した。大本氏はアイルランドに「コーエン」の名を生んだ。コーエンの名の由来は阮（グエン）である。グエン＝グーエン＝コーエンとなる。一方、円珍の残党（山王信仰、日吉神社）は、イギリス人と交わった。この時に、後に「KKK」を結成する人々が生まれた。

■AD1865年 「K・K・K（クー・クラックス・クラン）誕生」

時は、血の法典時代の大英帝国である。円珍の残党は、あまりの過酷さにイギリスを逃げ出し、19世紀のアメリカに移民した。山王神道・日吉神社の末裔は、1865年に悪名高い秘密結社をアメリカに結成した。それが「クー・クラックス・クラン」である。当初、彼らはクーベラ、ラクシャサ、ランカーを組み合わせた名前を考え出した。略式名称はK・L・Lである。

しかし、K・L・Lではしまらないので、響きが良い「K・K・K」の略式名称を確定した上で、ラクシャサ、ランカーの頭にKを加えた。Kラクシャサ、Kランカーとなる。次に、クーベラ、クラクシャサ、クランカーを省略してクー（ベラ）・クラックス（ヤサ）・クラン（カー）とした。しっかりと自身の出自、先祖が誰であるかをアピールしつつ、その上、謎めいているK・K・K（クー・クラックス・クラン）の名は響きもよく、秘密結社には最高の名前だ。つまり、K・K・Kの正体は、比叡山で「山王信仰」を説き、「日吉神社」を築いた円珍の末裔である。

K・K・Kは、黒人のリンチなどで悪名を轟かせたが、実際にリンチの指揮したのはタナトスのキリスト教である。K・K・Kの団員にはキリスト教信者が大勢いたが、彼らはK・K・Kに席を置きながらタナトスの指示を受けた。凄惨な黒人のリンチ殺人は、K・K・Kに汚名を着せることが目的であった。つまり、タナトスはK・K・Kの勢力を非常に恐れていたのだ。

■AD1934年 レナード・コーエン生誕

■AD1938年 ラリー・コーエン生誕

■AD1942年 ロバート・クイン生誕 「リチャード・ヘル&ヴォイドイズ誕生」

■AD1946年 レニー・ケイ生誕 「パティ・スミス・グループ誕生」

■AD1947年 スティーブン&ティモシー・クエイ生誕 「ブラザーズ・クエイ誕生」

■AD1953年 甲斐よしひろ生誕 「甲斐バンド誕生」

■AD1954年 ジョエル・コーエン生誕

◆カイン（アルキュオネウス）の歴史

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「カイン誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したオケアーノスは、エジプトの地に「カイン」を生んだ。カインの名の由来はオケアーノスである。オケアーノス=ケアーノ=ケアノン=カインとなる。カインは、聖書にエノスの子として記されている。

■ 7万年前 「原初の神ヌン誕生」

カインは「原初の神ヌン」をエジプト祀っている。ヌンの名の由来はカインである。カイン=カインヌ=ヌンとなる。エジプト原初の神は、実際にはアドメテーが生んだ「太陽神アトウム」であるが、カインはアドメテーの影響力を削ぐため、原初の神を名乗った。つまり、原初の神は、実際には新参者であることが多い。

■ 1万3千年前 「ヘリオポリスの大移動時代」

■ 1万3千年前 「金星の女神イナンナ誕生」

「ヘリオポリスの大移動時代」に参加したカインは、メソポタミアの地に金星の女神「イナンナ」を祀った。イナンナの名の由来はカインである。カイン=カインナ=イナンナとなる。イシンの守護神「イナンナ」は、後に河川の種族イストロスがシュメールに導入した「イシュタル」と習合した。

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千 年 「カナン誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したカイナンは、北アフリカに「カナン」を生んだ。カナンの名の由来はカイナンである。カイナン=カエナン=カナンとなる。

■ B C 3 2 世 紀 「ソドムとゴモラ」

■ B C 3 2 世 紀 「第2次北極海ルート時代」

■ B C 3 2 世 紀 「海南島誕生」

「第2次北極海ルート時代」に参加したカイナンは、北極海を抜けると、東アジアを南下し、「海南島」に上陸した。この時、この島は、初めて「海南島（ハイナン）」と命名された。ハイナンの名の由来はカイナンである。ハ行はカ行を兼ねる法則により、カイナンがハイナンと読まれた。

■ A D 6 8 年 「扶南国誕生」

王氏の「新」が台頭して「前漢」が滅ぶと、一部劉氏は海南島に赴き、古の神農の子孫であるチワン族と連合した。劉氏とチワンの連合体はカンボジアに上陸して扶南国を築いた。扶南の名の由来は海南（ハイナン）である。

■ A D 5 5 0 年 「ベナン人誕生」

扶南国の滅亡を機に、扶南人（チワン族+劉氏）はインド洋を超えて、喜望峰を周航し、遠く大西洋側に進出してニジェールに上陸した。東南アジア人の顔をした彼らは、現地人と混合して「ベナン人」「フォン人」を形成した。ベナンの名の由来は扶南であり、フォンの名の由来はルーベン（劉氏の祖）である。扶南=ブナン=ベナンとなる。

■ A D 6 世 紀 「ハニャディ家誕生」

また、ベナン人はナイジェリアからパンノニアに移り、「ハニャディ家」を誕生させている。ハニャディの名の由来はベナンとドナウの組み合わせである。ベナン+ドナウ=ベニャド=ハニャディとなる。

■AD6世紀 「トランシルヴァニア誕生」

黒人の姿をしたハニャディ家は、トランシルヴァニアに入植する。トランシルヴァニアの名の由来はアトランティス南方（アフリカ大西洋岸）から来たハニャディである。アトランティス+スール（南）+ハニャディ=トランスールハニャ=トランシルヴァニアとなる。トランシルヴァニアの名はアフリカ由来なのだ。ハニャディ家からはトランシルヴァニア公、ハンガリー王、ボヘミア王、オーストリア伯が輩出された。

■AD1067年 「カネム帝国誕生」

その後、ベナン人はチャド湖方面に至って、AD1067年に「カネム帝国」を建てた。カネムの名の由来はカナンである。カナン=カネヌ=カネムとなる。カネム帝国は、インドネシアと東アフリカを頻繁に往来していたフラニ族が築いた「ボルヌ帝国」と連合していた。

■AD1946年 ダン・オバノン生誕

この系統からは、ロックミュージシャンのアリス・クーパー（ヴィンセント・ファニア）、格闘家ヴァンダレイ・シウバ、映画監督ダン・オバノン、第4代ベナン大統領ヤイ・ボニなどが輩出されている。ファニア、シウバ（S i l v a）の名の由来はトランシルヴァニアであり、オバノン（O' B a n n o n）、ボニの名の由来はベナンである。

■AD1948年 ヴィンセント・ファニア生誕 「アリス・クーパー誕生」

■AD19年 ヴァンダレイ・シウバ生誕

◆夏（アルキュオネウス）の歴史

■ B C 7 千 年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千 年 「カナン誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したカイナンは、北アフリカに「カナン」を生んだ。カナンの名の由来はカイナンである。カイナン=カエナン=カナンとなる。

■ B C 5 千 年 「セネガル人の大航海時代」

■ B C 5 千 年 「トロイア戦争」

■ B C 5 千 年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ B C 5 千 年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ B C 5 千 年 「月の神ナンナ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したカナンは、メソポタミアに移住した。彼らは、「月の神ナンナ」を祀った。ナンナの名の由来はカナンである。カナン=カナンナ=ナンナとなる。

■ B C 5 千 年 「バベルの塔建設」

■ B C 5 千 年 「第1次北極海ルート時代」

■ B C 5 千 年 「神農誕生」

「第1次北極海ルート時代」に参加したカナンは、ジェンギと組んで「神農（シェンノン）」を生んだ。神農（シェンノン）の名の由来はジェンギとカナンの組み合わせである。ジェンギ+カナン=ジェンナン=シェンノンとなる。

■BC 5千年 「夏誕生」

「第1次北極海ルート」を経て古代中国に根付き、「神農（シェンノン）」を祀っていたカナンは、中国伝説上の王朝「夏（キア）」を開く。夏（キア）の名の由来はカイナンである。カイナン=キャイナン=キアとなる。「聖書」に記されているカナンとは、夏時代の中国のことである。

■BC 1400年 「農家誕生」

夏が減ぶと、神農は2手に分かれて行動した。一部は後に諸子百家を構成する「農家」を興し、一部は古代中国を離れて海南島（ハイナン）に落ち着いた。農家の名の由来は神農であり、海南島の名の由来はカイナンである。

■AD 189年 「公孫氏誕生」

現カンボジアから遼東半島に移住したチワン族は、月氏と組んで「公孫（ゴンスン）氏」を生んだ。公孫の名の由来はカナンとシャンの組み合わせである。カナン+シャン=カナシャン=カンシャン=ゴンスンとなる。公孫度は、後漢により遼東太守に任命され、その後、独立した。公孫淵は魏王に上洛を求められるが、反旗を翻して「燕王」を称した。だが、一族が処刑されると公孫淵は「大和人の大航海時代」に参加してブリテン島に渡った。

■AD 3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD 3世紀 「サマーズ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加して太平洋を横断し、ブリテン島に上陸した神農は、現地人と混合して「サマーズ」を称した。サマーズの名の由来は夏である。この系統からは、「ポリス」の

アンディ・サマーズが輩出されている。

■ A D 3 世紀 「ファーマー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加して太平洋を横断し、ブリテン島に上陸した農家は、現地人と混合して「ファーマー」を称した。ファーマーの名の由来は農家である。この系統からは、タナトスに人生を破壊された女優フランシス・ファーマーが輩出されている。

■ A D 3 世紀 「バウアー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加して太平洋を横断し、ブリテン島に上陸した農家は、一部が単独でヨーロッパに渡り、ドイツ周辺に入植した。彼らは農家の名に因んで農民を意味する「バウアー」を称した。バウアーは、後に「ロスチャイルド家」を生む母体となる。

■ A D 3 世紀 「ロード誕生」「ヘルツォーク誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した公孫氏は、ブリテン島に上陸し、イギリス人と混合して「ロード」の名を生んだ。また、一部はヨーロッパに移住し「ヘルツォーク」の名を生んだ。どちらの名も「公孫氏」に因んでいる。

■ A D 1 2 世紀 フラールド 2 世、ブルターニュ半島からイングランドに移住

スチュアート氏の祖とされるフラールドの名の由来は「ブルターニュのロード」である。ブルターニュ+ロード=ブロード=フラールドとなる。フラールド 2 世は、イングランドに再上陸してからは「フィッツ・アラン」なる名をしばらく使用していた。その後、ウォルター・フィッツ・アランが「アサル朝」王室執事長に就任すると「スチュアート」を称した。スチュアートの語源は執事であるが、「公孫」にも因んでいる。

■ A D 1 3 7 1 年 ロバート 2 世、スコットランド王に即位 「スチュアート朝誕生」

A D 1 3 7 1 年、ロバート 2 世がスコットランドに「スチュアート朝」を開き、

■AD1603年 ジェームズ1世、イングランド王に即位 「スチュアート朝誕生」

AD1603年にジェームズ1世がイングランド王位・アイルランド王位を継承してブリテン諸島を統一した。

■AD1908年 ジェームス・スチュアート生誕

■AD1939年 ジョン・ロード生誕 「ディープ・パープル誕生」

■AD1942年 ヴェルナー・ヘルツォーク生誕

■AD1945年 ロッド・スチュアート生誕

■AD1952年 デイヴ・スチュアート生誕 「ユーリズミックス誕生」

■AD1960年 マーク・スチュアート生誕 「ポップ・グループ誕生」

◆トバルカイン（オロクン）の歴史

■3万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■3万年前 「トバルカイン誕生」

「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したテュポン（天香語山命）は、天津神の同僚であるアルキュオネウス（天之御中主神など）と共に「トバルカイン」を生んだ。トバルカインの名の由来はテュポンとアルキュオネウスの組み合わせである。テュポン+アルキュオネウス=テュ

ポアルキュオネ＝タパルキュオン＝トバルカインとなる。

■ 3 万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3 万年前 「テワ族誕生」「ティワ族誕生」「トワ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、コロラド流域残留を決めた。彼らは現地人と混合して「テワ族」「ティワ族」「トワ族」など、後にプエブロ族に数えられる部族を生んでいる。トバルカイン＝トワルカイン＝トワ＝テワ＝ティワと変遷が加えられている。

■ 3 万年前 「ルカイ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、台湾に移住した後、「ルカイ族」を生んだ。ルカイの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝ルカイン＝ルカイとなる。

■ 3 万年前 「ラガイン族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したトバルカインは、台湾に移住した後、ミャンマーに上陸して「ラガイン族」を生んだ。ラガインの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝ルカイン＝ラガインとなる。

■ 2 万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2 万年前 「五官王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加して火星に移住したアルキュオネウスは、十王に属する「五官王（ウーグアン）」を築いた。ウーグアンの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アーキュオン＝ウーグアンとなる。アルキュオネウスは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 1万5千年前 「科学の種族誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したトバルカインは、南極に移住してエラド、マハラエルと共に「科学の種族」を組んだ。この3者は、所謂「宇宙人（UFOに乗る人）」として知られている。

■ 1万3千年前 科学の種族、核兵器を開発

■ 1万3千年前 「アトランティス滅亡」

この頃、科学の種族は核爆弾を開発したが、当時、ゼウスがその一報を聞いて喜んだ。古代ギリシア・アトランティス王国（オーストラリア南）では、ディオニュソスが「エレウシス密儀」を布教する際、「入信しなければ殺す」と多くの人々を脅し、大量の信者を獲得していた。大量の信者獲得は、発言力の増大と共に、そのまま信者の離反防止につながる。そのため、タナトスの宗教は大量の信者の獲得を命題としている。

ディオニュソスは、その大量の信者たちをアトランティスのインフラ全般に送り込んで、これを掌握した。タナトスの発想では、王にならずとも、人民の生活を支配すれば、優れた王にも勝てるのだ。インフラ掌握により、ディオニュソスが何をしていても人々は怒ることも暴れることも弾劾することなく、怒りを飲み込んで幸福を演じていた。人々は、悪と戦って自由を得るのではなく、自由と生活を保障してもらうために、戦いを放棄し、悪に服従していたのだ。本能・感受性・意志の放棄は、非常な罪である。

ディオニュソスの非人間じみた圧制により、多くの人々が苦しんでいた。国民は「幸福な国の国民」を演じさせられていたのだ。抑圧的な生活により、精神疾患が蔓延した。だが、精神疾患患者はディオニュソスの命を受けた信者たちによってことごとく排除されてしまった。なぜなら、幸福な国で精神疾患を患うということは、国家がウソをついている証だからだ。ギリシア神話では、ポセイドンとアテネが対立する説話が紹介されている。これは、ディオニュソスが篡奪したポセイドンの国アトランティスとアテネが君臨していた時代の古代ギリシアとの対立を意味している。

「太陽神アポロン」を祀っていたアベラム族や全能の神ゼウスも、このことを憂慮していたが、数で圧倒するディオニュソスには対抗できなかった。そこへ、科学の種族が核兵器を開発した。ゼウスは、ディオニュソスと彼らに追従する人々を皆殺しにするために、科学の種族に核兵器の使用を要請した。人喰い人種を嫌悪していた科学の種族はこれを快く承諾した。これにより、ディオニュソスが篡奪したアトランティスは滅亡した。オーストラリア南部には、テクタイトが散乱しているが、これは当地にアトランティスの都市が存在していたことを意味している。

■ 1万3千年前 科学の種族、南極大陸の北方引き上げを計画

虚言症を患うタナトスと共存することは不可能だと考えていた科学の種族（エラド、マハラエル、トバルカイン）は、旧世界から切り離された南極大陸の立地条件を高評価していた。そして、彼らは、半分凍結している南極大陸を有効活用すべく、核兵器で地軸を動かして南極をもっと北方に引き上げようという計画を立てた。だが、これに懸念を示したのはノア、セム、ハム、ヤペテ、メトセラ、レメク、エノス、エノク、そして一部エラド、一部マハラエル、一部トバルカインの面々であった。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「科学の種族の大移動時代」

■ 1万3千年前 科学の種族がスコットランドに移住

「科学の種族の大移動時代」に参加したエラド一行は、文明継承を胸に原動機付きの船舶、或いは飛行機でペルーやスコットランドに移住した。文明継承組のエラド、マハラエル、トバルカインは、いわゆる「宇宙人」の祖である。彼らは、このスコットランドに建てた基地にてUFOを発明し、科学の種族として科学文明を深化させたと考えられる。

一方、エラド、マハラエル、トバルカインは、飛行機で世界中を巡って「文明放棄」を選んだ兄弟たちの足取りを追跡した。そして、罪滅ぼしとして、影ながら援助していたものと考えられる。ただ、お互いが兄弟であることを忘れた人々と接触するのは文明継承組にとって容易ではなかった。

想像力が乏しい人物と接触すると、怖がられ、化け物扱いされ、畏怖されるに過ぎないからだ。文明継承組が文明放棄組と接触を図る際の基本、それは、アブラハム、ロト、モーセ、千利休、アダムスキーなど、卓越した想像力を持つ人物との接触であり、その限定であった。また、UFOが発明されるまで、彼らはナスカに飛行機の離着陸基地を造って利用した。それが「ナスカの地上絵」と何らかの関係を持っているし、ジェット機を模した黄金製の遺物は、実際に文明継承組が使用していたジェット機をかたどった品物である。

■ 1万3千年前 「ヴィマーナ誕生」

ヴィマナ（U F O）の開発には科学の種族だけでなく、ハムの一族が加わった。それは、ヴィマーナの名前でわかる。ヴィマーナの名前とハムの名前は成立過程が同じなのだ。ハムとヴィマーナの名は、新水生人ヴィディエとイマナの組み合わせである。ヴィディエ+イマナ=ヴィマナ=ヴィマーナとなる。

■ B C 5 千年 「タップ・エノス誕生」

「セネガル人の大航海時代」にした参加したエノスは、タップ・オノスの基地に科学の種族トバルカインを訪ねて、初めて「タップ・オノス（トバルカイン+エノス）」の名が誕生した。トバルカイン+エノス=トバ+エノス=タップ・オノスとなる。

■ B C 5 千年 「トロイア戦争」

■ B C 5 千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ B C 5 千年 「竜飛岬誕生」「桃花源誕生」「エイ州誕生」

「トロイア戦争」と「マー・トゥーレスの戦い」の末期、劣勢のダーナ神族がタップオノスの基地に侵入すると、トバルカインは有無を言わず、優れた科学文明の痕跡を、基地ごと核兵器で溶かした。悪による科学の篡奪は、禁忌なのだ。その後、タップオノスを離れたトバルカインは、出羽国にいる兄弟を訪ねて津軽半島にU F Oで降り立った。

彼らは着陸した土地を「竜飛岬」と呼んだ。竜飛（たっぴ）の名の由来はタップである。竜飛岬は「桃花源（タオファ）」とも呼ばれた。タオファの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=タオファルカイン=タオファとなる。更に、白神山地は仙人が住む神山のひとつ「エイ州（インチュウ）」と呼ばれた。インチュウの名の由来はオロクンとカゾオバの組み合わせである。オロクン+カゾオバ=ウンゾオ=インチュウとなる。

■ B C 5 千年 「崑崙山瑤池宮誕生」「龍宮水府誕生」

オロクンのトバルカインは、竜飛岬を拠点に、テーバイ王国が建つアフリカに移住した。湖水地方に入植した彼らは、ビクトリア湖に「龍宮水府（ロンゲン）」を築き、キリマンジャロに「崑崙山瑤池宮（クンルンシャンヤオチゴン）」を築いた。ロンゲンとクンルンの名の由来はオロク

ンとオロルンの組み合わせである。オロルン+オロクン=ルンクン=ロングン（龍宮）となり、オロクン+オロルン=クンルン（崑崙）となる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「ダヴィデ朝誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加した十和田人は、夏時代の中国に渡り、そこから現チベットに移った。十和田人はここに「ダヴィデ朝」を築いた。ダヴィデの名の由来は十和田である。十和田=トヴァタ=トヴァダ=ダヴィデとなる。ダヴィデ王とは、十和田の縄文人の首長のことである。チベット人が日本人に似ているのは、この時の大移動時代の縄文人の大量移住によるものである。また、ツォボット（チベット）の名もダヴィデ、或いは十和田が由来となっている。十和田=トヴァッタ=ツォボット=チベットとなる。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「タバル誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したトバルカインは、タナトスとの抗争、核兵器による人々の殺戮に精神的に疲れ、科学を放棄した。放棄した科学はチュクウのトバルカインが継承した。アナトリアに住んだトバルカインは「タバル」を築いた。タバルの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=タバルカイン=タバルとなる。

■BC2134年 「テーベ誕生」

「ソドムとゴモラ」の事件が起きた際、タバルの人々はカッパドキア遺跡に身を潜めていた。その後、彼らは「太陽神アメン」の王統のエジプト行きに同行した。両者は、ナイル上流域に移住し、神官都市「テーベ」を建設した。テーベの名の由来はタバルである。タバル=ターバル=テーベとなる。

■BC2134年 「エジプト第11王朝樹立」

太陽神アメンは、トバルカインと共に「エジプト第11王朝」を開き、人喰い人種スキタイ人の「エジプト第10王朝」と対立した。彼らは、この対決に勝利し、エジプトを再統一した。その時のファラオは、第11王朝のメンチュヘテプ4世であった。その後、太陽神アメンの王統を継ぐアメンエムハト1世が「エジプト第12王朝」を開いている。アメンの王統は、ヒクソスが登場するBC1663年まで続いた。

■BC1650年 「エジプト第17王朝成立」

「ヒクソス」がエジプトに出現すると、エジプト第14王朝は滅亡してしまった。その後、イマナのアメン神官団は、エジプトを離れてクレタ島に落ち延び、避難した。だが、ニヤメのアメン神官団は、テーベを拠点に新規に「エジプト第17王朝」を開き、ヒクソス王朝に対抗した。

■BC945年 「アルメニア人誕生」

古代中国から来た、周の昭王がリビア人を指揮し、タニス（ディオニュソス）に首都を置く「第21王朝」とアメン祭祀国家の「第20王朝」を滅ぼしてエジプトを掌握した。周氏の「第22王朝」の誕生を機に、アメン神官団は、テーベ人（タバル）を連れてテーベを離れ、アナトリア半島に落ち延びた。アメン神官団は、ここで東西に移る計画を立てた。

アメン神官団は、サバエ人、アラム人と連合し、「アルメニア人」の連合体を築いた。アルメニアの名の由来はアラム、アメンの組み合わせである。アラム+アメン=アラメン=アラメンニア=アルメニアとなる。また、アルメニアの自称「ハヤ」の名の由来はサバエである。

■BC829年 「テーバイ誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加しなかったトバルカインは、ギリシアに入植し「テーバイ」を築いた。テーバイの名の由来はテーバイ王国である。

■BC282年 「ペルガモン王国誕生」

ミネア人がアラビアを離れてアナトリアに移住すると、ギリシアのテーバイ人と連合した。彼らは、アナトリア半島に移住した。この時に「ペルガモン」が生まれた。ペルガモンの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン+アメン=バルカメン=ペルガモン

となる。BC 282年、ピルタウエルスが初代王に即してペルガモン王国が誕生した。

■ BC 129年 「朴氏誕生」

その後、BC 129年にペルガモン王国が滅ぶと、ペルガモン人は東方へ東方へと船を進め、朝鮮半島に上陸する。この時に、タバリンが「朴 (PARK)」を称し、アメンが「文 (MOON)」を称した。

■ BC 57年 「朴氏王朝誕生」

BC 57年に、朴氏が「朴氏王朝 (新羅)」を開いた。この王朝はAD 184年まで続いた。

■ AD 3世紀 「大和人の大航海時代」

■ AD 3世紀 「BERG (バーグ) 誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した朴氏は、現地人と混合して「BERG」の名を生んだ。BERG (バーグ) の名の由来はPARK (朴) である。BERGからは、PARK、PARKS、BIRKIN、BERKIN、BARKER、PARKER、PERKINS、PYKE、BURG、BURGER、BURKEなどの名も派生した。

■ AD 357年 「オースターの大航海時代」

■ AD 357年 「ウズベク誕生」

「オースターの大航海時代」に参加して「勿吉」を生んだオースターは、オースターの大航海時代に参加していたドイツ人BERGと組んで「ウズベク族」を生んだ。ウズベクの名の由来は勿吉 (ウージ) と朴 (バーグ) である。ウージ+バーグ=ウジバグ=ウズベクとなる。ムーン (文氏) もウズベク族と行動を共にした。

■ A D 6 世紀 「勿吉の大航海時代」

■ A D 6 世紀 「ドヴァーラヴァティー王国誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したドイツ人 B E R G は、新羅時代の同盟者である昔氏と共にインドシナ半島に「ドヴァーラヴァティー王国」を築いた。ドヴァーラヴァティーの名の由来はトバルカイン（朴氏）とヴィディエ（昔氏）の組み合わせである。トバルカイン+ヴィディエ=トバルヴィディ=トバルヴィディ=ドヴァーラヴァティーとなる。この王朝は、A D 1 1 世紀まで続いた。

■ A D 6 3 8 年 「グンヤーン王国誕生」

ドヴァーラヴァティー王国の朴氏は、昔氏と袂を分かち、単身、「グンヤーン王国」を築いた。グンヤーンの名の由来はアルキュオネウスとトバルカインの組み合わせである。アルキュオネウス+トバルカイン=キュオネイン=ギュオネイン=グンヤーンとなる。

■ A D 6 9 4 年 「ペグー誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したドイツ人 B E R G は、イギリス人ムーンと共に満州からミャンマーに移住した。バーグは「ペグー」を築き、ムーンは「モン族」の名を生んだ。モンの名の由来は文（ムン）である。

■ A D 7 2 8 年 皮羅閣、南詔王に即位 「皮氏誕生」

ドヴァーラヴァティー王国の朴氏は、雲南に進出し「皮氏（クン）」を生んだ。クンの名の由来はオロクンである。A D 7 2 8 年、皮羅閣が南詔王に即位している。

■ A D 8 0 9 年 勸竜晟、南詔王に即位 「勸氏誕生」

皮氏が王位を失うと次に、朴氏は「勸氏（クーイエン）」を生んだ。クーイエンの名の由来はトバルカインである。トバルカイン=カーイン=クーイエンとなる。A D 8 0 9 年、勸竜晟は南詔王に即位している。A D 8 1 6 年には勸利晟が、A D 8 2 3 年には勸豊祐が南詔王に即位して

いる。

■AD1182年 「ウァシュテペック誕生」

ウズベク族は、大内氏と共に日本に移住すると、その後、ウズベク族だけがメキシコに移住した。彼らは、「ウァシュテペック」を称した。ウァシュテペックの名の由来はオースターとバーグの組み合わせである。オースター+バーグ=ウァシュタバーグ=ウァシュテペックとなる。

■AD1182年 「ペグー朝（前身）誕生」

タイに築いたドヴァーラヴァティー王国が滅ぶと、朴氏はミャンマーに移住した。朴氏（バーグ）は「ペグー」を称し、文氏（ムーン）は「モン族」の名を復活させた。AD1287年、ワーレルーが初代王に即位して「ペグー王朝」が開かれた。

■AD1287年 ワーレルー、初代王に即位 「ペグー朝誕生」

AD1287年、ワーレルーが初代王に即位して「ペグー王朝」が開かれた。しかし、文氏の系統であり、スコータ朝の援助を受けたワーレルーがペグー朝の王位に就くと、反感を持ったオリジナルのモン族が、ミャンマーを後にデカン高原に移住した。AD1757年にコンバウン朝の支配下に置かれると、ペグー族、モン族が朝鮮半島に帰還し、祖を同じくする朴氏、文氏に合流した。

■AD1440年 モクテスマ、第3代アステカ皇帝に即位

AD1398年、ウァシュテペック族は一族の娘をアステカ帝国第2代皇帝ウィツィリウィトルに接近させ、自身の血統を打ち立てた。この時に、モクテスマが誕生した。AD1440年、モクテスマは第3代アステカ帝国皇帝に即位した。こうして、ウァシュテペック族が天下を取ったことにより、アステカ族（アストラハン）、メシカ族（ムシュキ）はアステカ帝国を後にする。ウァシュテペックの王統は、最後の皇帝モクテスマ2世の治世まで続いている。

■AD1521年 「オスターバーグ誕生」

タナトスの血を引くエルナン・コルテスがアステカ帝国に侵入し、アステカ貴族を1万人も殺害すると、ウァシュテペックはメキシコを後にした。アステカ人の顔をしたウァシュテペックはブリテン島に渡り、イギリス人と混合して「オスターバーグ」の名を生んだ。オスターバーグの名の由来はウァシュテペックである。ウァシュテペック=ウァシュターベーク=オスターバーグとなる。

■AD1539年 「ダホメー王国誕生」

タウングー朝がペグー朝を滅ぼすと、ペグー族、モン族がミャンマーを脱出して、遠くナイジェリアの地にまで赴いた。ペグー族とモン族は連合して「ダホメー王国」を築いた。ダホメーの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン+アメン=トバメン=ダホメーとなる。

■AD1830年 「モザンビーク誕生」

モン族主導のダホメー王国軍がオヨ王国に攻め入ると、ペグー族主導のダホメー王家とオヨ王家がナイジェリアを脱出した。オヨ王家の構成員ムタパ人は縁がある土地ジンバブエを目指した。両者は連合して「モザンビーク」を称した。モザンビークの名の由来はムタパとペグーの組み合わせである。ムタパ+ペグー=ムタンペーク=モザンビークとなる。モザンビークの連合体は、AD1964年に「モザンビーク解放戦線」を組織し、ジンバブエの独立のために戦った。翌年、「ローデシア戦争」が始まり、完全独立を勝ち取ると、ペグー族主導のモザンビークがAD1975年に「モザンビーク人民共和国」を建て、ムタパ人主体のモザンビークはAD1980年に「ジンバブエ共和国」を建てた。

■AD1901年 リー・ストラスバーグ生誕 「アクターズ・スタジオ誕生」

■AD1919年 デビッド・バーグ生誕 「ファミリー誕生」

■AD1926年 アレン・ギンズバーグ生誕

■AD1928年 セルジュ・ゲズブル生誕

■AD1932年 アンソニー・パーキンス生誕

■AD1935年 ウディ・アレン（アレン・コニグスバーグ）生誕

■AD1935年 ハンス・ユルゲン・ジーパーベルク生誕

■AD1945年 アンドリュー・バーキン生誕

■AD1946年 デヴィッド・クロネンバーグ生誕

■AD1946年 ジェーン・バーキン生誕

■AD1947年 スティーヴン・スピルバーグ生誕

■AD1947年 イギー・ポップ（ジェイムズ・オスターバーグ）生誕

オスターバーグは、ワッシュテペックの直系である。つまり、イギー・ポップは、アステカ帝国を統治した王族の末裔である。

■AD1952年 クライブ・バーカー生誕

■AD1954年 エイドリアン・ヴァンデンバーグ生誕

■AD1971年 シャルロット・ゲンズブール生誕

■AD1984年 マーク・ザッカーバーグ生誕 「フェイスブック誕生」

オロクンの歴史（ウラヌス）

◆ウラヌスの歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「天空神ウラヌス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスは、オーストラリアに「ウラヌス」を生んだ。ウラヌスの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルネウス＝ウラヌスとなる。

■30万年前 「ウラニアー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスはウラヌスを生み、ウラヌスは「ウラニアー」を生んだ。ウラニアーの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝アルネウ＝ウラニアーとなる。その後、ウラニアーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「事代主神誕生」

ウラヌスは、コットスと組んで日本に移住した。彼らは、ティアマトの国ヤマトに入植して「事代主神」を生んだ。コトシロヌシの名の由来はコットス、ウラヌスの組み合わせである。コットス＋ウラヌス＝コットスラヌス＝コトシロヌシとなる。

■7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■7万年前 「ティタン神族誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、テテュスと連合して「ティタン神族」を生んでいる。ティタン（ティタヌス）の名の由来はテテュスとウラヌスの組み合わせである。テテュス＋ウラヌス＝テテヌス＝ティタヌス＝ティタンとなる。

■ 7 万年前 「海洋神オケアーノス誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、アカイア人と連合体を組んだ。この時に「海洋神オケアーノス」が生まれた。オケアーノスの名の由来はアカイアとウラヌスの組み合わせである。アカイア+ウラヌス=アカイアヌス=アカイアーヌス=オケアーノスとなる。その後、オケアーノスはティタン神族に参加している。

■ 4 万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 4 万年前 「ヴァラナシ誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、クロノスの姦計によってギリシアを追放された。兄弟ヴァナラシが住むガンジス流域に身を寄せた。この時、ヴァナラシと差別化するため、彼らは当地を「ヴァラナシ」と呼んだ。ヴァラナシの名の由来はウラヌスである。ウラヌス=ヴラヌス=ヴァラナシとなる。

■ 1 万 3 千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1 万 3 千年前 「ヘレネス人誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したヴァラナシ人は、スーサに到着後、単身、ギリシアに赴いた。クロノスによる追放以来、3 万年ぶりにギリシアの地を踏んだ。ヴァラナシ人は「ヘレネス人」を称した。ヘレネスの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ハラナシ=ヘレネスとなる。

■ B C 5 千年 「バラーナ族誕生」

「トロイア戦争」時、ギリシア軍に参加してブリテン島に入植していたヘレネス人は、タップ・オノスでの核爆発により、アベル（ホルス）と共にインドに赴いた。この時、「バラーナ族」が生まれた。バラーナの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ヴァラーナシ=バラーナと

なる。バラーナ族は、後にアーリア人に参加している。

■BC1200年 バラーナ族、アヌ族、パニ族と共にアーリア人に参加

ヴァラナシの子孫であるバラーナ族は、祖を同じくするヴァナラシの子孫であるアヌ族、パニ族と共にアーリア人の軍団に参加した。

■BC1027年 「十王戦争」

■BC1027年 「パルニ人誕生」

「十王戦争」の後、アヌ族、パニ族と共にイランにやって来たバラーナ族は、現地人と混合して「パルニ人」を誕生させた。パルニの名の由来はバラーナである。バラーナ＝バラニ＝パルニとなる。

■AD114年 「ポントス人の大航海時代」

■AD114年 「春名氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したパルニ人は、日本に上陸した。コーカサス人の顔をした彼らは、現地人と混合して「春名氏」を生んだ。春名の名の由来はパルニである。パルニ＝ハルニ＝春名となる。この系統からは一時期ツイッターの発言で話題になった春名風花が輩出されている。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ブレナン誕生」「レノン誕生」「ナッシュ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した春名氏は、アイルランド島に入植した。現地人と混合した彼らは「ブレナン」「レノン」「ナッシュ」などの姓を生んだ。ブレナン、レノンの名の由来は

春名、ナッシュの名の由来はヴァラナシである。春名=ハルナン=ブレナン=レノンとなり、ヴァラナシ=ヴァラナッシュ=ナッシュとなる。

■ A D 3 世紀 「バーニシア誕生」

アイルランドからスコットランドに入植した春名氏は、拠点を「バーニシア」と命名した。バーニシアの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ヴァールナシア=バーニシアとなる。

■ A D 6 世紀 「ヴィリニユス誕生」

A D 6 世紀頃にバーニシア王国が消滅すると、バーニシア人は2手に分かれてスコットランドを旅立った。北方組はバルト海に入り、リトアニアに「ヴィリニユス」の名を残した。ヴィリニユスの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ヴァリニヤシ=ヴィリニユスとなる。

■ A D 6 世紀 「レーニン誕生」「ボロネジ誕生」

A D 6 世紀頃にバーニシア王国が消滅すると、バーニシア人は2手に分かれてスコットランドを旅立った。北方組はバルト海に入り、ロシアに「ボロネジ」の名を残した。ボロネジの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=バラナジ=ボロネジとなる。この時に「レーニン」の名前がロシアに輸入された。ブレナン=ブレナン=レーニンとなる。

■ A D 6 世紀 「ボローニャ誕生」

ロシアを離れたパルニ人は、イタリアに入植して「ボローニャ」を築いた。ボローニャの名の由来はバラーナである。バラーナ=バラニャ=ボローニャとなる。

■ A D 6 世紀 「フラニ族誕生」

イタリアからアフリカ大陸に到達したパルニ人は「フラニ族」を称した。どちらの名も春名、或いはパルニが由来である。パルニ=ハルニ=フラニとなる。

■AD661年 「ハリブンチャイ王国誕生」

インドシナ半島に集った小野妹子（遣唐使）、フラニ族（イスラム教伝来）、趙氏（南越国）は、合同で「ハリブンチャイ王国」を築いた。ハリブンチャイの名の由来はヴァラナシ（フラニ族）、ヴァナラシ（小野氏）、ゼウス（趙氏）の組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ+ゼウス=ヴァラヴァンゼウ=ハラパンジェウ=ハリブンチャイとなる。ハリブンの部分は、ブルボンの名の由来と同じである。

■AD712年 「勿吉の大航海時代」

■AD712年 「高梨氏誕生」「椋梨氏誕生」「小梨氏誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人ナッシュは、イギリス人ニートと組み、井上家季に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「高梨氏」の祖、高梨盛光である。一方、一部はオースターと組み、小早川季平に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「椋梨氏」の祖、椋梨国平である。最後に、一部ナッシュは小津氏と組んで「小梨氏」を成した。

■AD13世紀 「ブルボン家誕生」

AD1292年、タイに建てられたハリブンチャイ王国が滅ぶと、彼らはインドシナ半島を離れ、ヨーロッパに移住した。彼らは、ヨーロッパに「ブルボン家」を生んだ。ブルボンの名の由来はハリブンチャイの名の由来と同じく、ヴァラナシ（フラニ族）とヴァナラシ（小野氏）の組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ=ヴァラヴァナ=ブルボンとなる。

■AD1376年 「ボルヌ帝国誕生」

フランスでブルボン家を生んだフラニ族だが、フラニ族はフランスを離れて東アフリカに帰還した。AD1376年、フラニ族は「ボルヌ帝国」を中央アフリカに建てた。ボルヌの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ヴァラヌ=ボルヌとなる。

■AD1376年 「ブルネイ帝国誕生」

AD1376年に「ボルネオ帝国」を中央アフリカに建てると、同時にインド洋を超えてカリマンタン島に上陸し、「ブルネイ王国」を建てている。この時に、イスラム教（シャフィイー派）が東南アジアにもたらされた。ボルネオ、ブルネイの名の由来はいずれもボローニャである。ボローニャ＝ボロネイ＝ブルネイとなり、ボローニャ＝ボロニア＝ボルネオとなる。以来、フラニ族は東アフリカと東南アジアを頻繁に往来していた。

■AD1594年 アンリ4世、ブルボン朝初代フランス国王に即位 「ブルボン朝誕生」

ブルボン朝は、聖公会（ポルトガル・クリュニー会）が掌握した大英帝国の侵略軍から世界を救うため、世界に進出し、大英帝国が現れるところに出現した。イロコイ連邦（アメリカ・カナダ）、ベンガル（インド）などで原住民を軍事的に援助した。もっとも、ベンガルは先祖の故地ヴァラナシを含んでいるため、特に支援を惜しまなかった。また、彼らはもともとハリプンチャイ王国の子孫で、インドシナ半島の出身のため、インドシナ半島の支配にこだわった。一方、ブルボン家は、病気がちな男系が続いたことで知られ、近親相姦が原因などという風評に苦しんだ。だが、これはフランス・クリュニー会による優れたブルボン家に対する攻撃であった。これは、ハプスブルグ家でも同様であったが、クリュニー会は、クリュニー会に属する医者に命じ、ブルボン家代々の男系メンバーに一服盛り、弱体化、ゆくゆくはブルボン家の滅亡を謀っていた。

■AD1793年 ルイ16世、処刑 「フランス革命」

タナトスのキリスト教ドミニコ会が指揮したフランス革命により、ルイ16世は理不尽にも処刑された。淘汰されるべきできそこないが、数で圧倒することで優れた者に勝利した瞬間である。できそこないの勝利は、人類にとって、果てしない悲劇である。

■AD1795年 ルイ17世、フランスからアフリカに移住

「フランス革命」を機に、幼いルイ17世を保護したブルボン家の残党は、ラヴァル家を率いてフランスを脱出した。彼らは、イベリア半島を南下してアルジェリアに侵入し、ティジャーニア派に入信した。

■AD1814年 ルイ18世、フランス王に即位

聖公会、フランス・クリュニー会、ドミニコ会の連合が皇帝ナポレオンを失脚させると、フランス・クリュニー会がルイ18世を即位させ、王政復古を実現した。だがこの時、既にルイ18世に決定権は無く、ハノーヴァ朝と聖公会の関係のように、隠れているクリュニー会のための「顔」を司る役割しかなかった。AD1852年、ナポレオン3世の皇帝即位を機に、ブルボン家は再び王座を去った。

■AD1854年 ルイ17世、フランス軍と交戦 「フルベの聖戦」

AD1854年、成長した50歳前後のルイ17世は指揮官としてティジャーニア派とトゥクロール族を指揮し、奇しくも同郷の人々であるフランス軍と交戦した。これが「フルベの聖戦」である。フルベの名の由来はブルボンである。ブルボン=ブルベン=フルベとなる。フランス軍に敗北したものの、ルイ17世の軍はバンバラ王国、マーシナ帝国を滅ぼすことが出来た。ルイ17世は、中央アジアから来たディゴル人と共にトゥクロール族を支配下に置き、「トゥクロール帝国」を建てている。

■AD1828年 ジュール・ヴェルヌ生誕

ヴェルヌの名の由来はヴァラナシである。ヴァラナシ=ヴェルヌシ=ヴェルヌとなる。

■AD1870年 ウラジミール・イリイチ・レーニン生誕

レーニンの名の由来はブレナンである。ブレナン=ブレーナン=レーニンとなる。レーニンはいわずと知れた「ロシア革命」の指揮者である。

■AD1920年 フェデリコ・フェリーニ生誕

フェリーニの名の由来はバラーナである。バラーナ=バラーニ=フェリーニとなる。

■AD1940年 ジョン・レノン生誕 「ザ・ビートルズ誕生」

レノンの名の由来はブレナンである。ブレナン=ブレのン=レノンとなる。

■AD1945年 ボブ・バラバン生誕

バラバンの名の由来はブルボンと同じくヴァラナシとヴァナラシの組み合わせである。ヴァラナシ+ヴァナラシ=ヴァラヴァナ=バラバンとなる。俳優として「未知との遭遇」「アルタードステーツ」などに出演したバラバンは、映画監督として映画「ペアレンツ」などを撮っている。

■AD1953年 アレックス・ヴァン・ヘイレン生誕 「ヴァン・ヘイレン誕生」

ヘイレンの名の由来はヘレネスである。ヘレネス=ヘイレネス=ヘイレンとなる。

■AD1955年 エドワード・ヴァン・ヘイレン生誕 「ヴァン・ヘイレン誕生」

ヘイレンの名の由来はヘレネスである。ヘレネス=ヘイレネス=ヘイレンとなる。

◆那覇（ウラニアー）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「ウラニアー誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアルキュオネウスはウラヌスを生み、ウラヌスは「ウラニアー」を生んだ。ウラニアーの名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス=アルネウ=ウラニアーとなる。その後、ウラニアーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「アルーネ族誕生」

マレー半島に移住したウラニアーは、「アルーネ族」を生んだ。アルーネの名の由来はウラニアーである。ウラニアー=ウラーニアー=アルーネとなる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ムネモシュネー誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラニアーは、他のオケアーニスに属するクリュメネー、獣人ミマースと組んでムネモシュネーを生んだ。ムネモシュネーの名の由来はクリュメネー、ミマース、ウラニアーの組み合わせである。クリュメネー+ミマース+ウラニアー=メネーマースニアー=ムネモシュネーとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 4万年前 「軍神の女神アテナイ誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したウラニアーは、台湾にてイデュイアと共に連合体を組んだ。この時に「アテナイ」が生まれた。アテナイの名の由来はイデュイアとウラニアーの組み合わせである。イデュイニアー=アテニアー=アテナイとなる。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「アテナイ王国誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したアテナイは、アラビア半島に上陸してアデンに入植した。アテナイはアデンをアテナイ王国として繁栄させ、アラビア半島に大きな国家を築いた。

■ 4万年前 アテナイ、海神ポセイドンと対立

アトランティス王国のタナトスはアテナイ王国征服のため、オーストラリアを発ってアラビア半島に侵攻した。このとき、卑怯なタナトスは食料の供給を絶つために、ギリシア人の農作地に大

量の枯葉剤を撒き、土地を荒廃させた。しかし、アテナイは残された土地にオリーブを植え、タナトスの思惑を退けた。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「ノア誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したアテナイは、東南アジアから南極に移住し、ノアを生んだ。ノアの名の由来はウラニアーである。ウラニアー＝ウラノア＝ノアとなる。ノアは、セム、ハム、ヤペテと同盟し、南極の文明を発展させた。

■ BC 1027年 「マハーバーラタ戦争」

■ BC 1027年 「アテネ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、イシン人がギリシアに来訪、その後、「マハーバーラタ戦争」によってアラビア半島が核兵器で消滅すると、アテナイ人、アデン人（ピュトン）が古代ギリシアに入植し、イシン人と共に都市国家「アテネ」を築いた。アテネの名の由来はアテーナイである。アテネ人は、スパルタ人と共に好戦的な人々であり、常に戦争に明け暮れていた。「第一次神聖戦争」「サラミスの海戦」「第一次ペロポネソス戦争」「第二次神聖戦争」「第二次ペロポネソス戦争」「シチリア戦争」「コリントス戦争」「同盟市戦争」「クレモニデス戦争」など、ほとんど常に戦闘を繰り返していた。BC 267年、マケドニア人の台頭により、アテネ人はギリシアを離れることを決意した。

■ BC 267年 「アザニアー海賊誕生」

「クレモニデス戦争」を機に、一部のアテネ人は、分裂して四散した。まだ文明の痕跡がない頃のswヒリ文化圏に侵入したアザニアーは、好戦的なアテネ人らしく、凶暴な海賊として鳴らした。アザニアーの名の由来はアテナイである。アテナイ＝アチェナイ＝アザニアーとなる。

■ BC 2世紀 「那覇誕生」

アザニアー海賊はエッセネ派を結成したが、ウラニアーは、沖縄諸島に入植して「那覇」と命名した。那覇の名の由来はウラニアーである。ウラニアー＝ウラニハ＝ニハ＝那覇となる。

■ A D 2 世紀 「尚氏誕生」

那覇に移住したナワ族は、「尚氏」を称した。尚氏の名は、那覇（なは）の名に因んで日本語読みの尚（なお）を由来としているが、中国語の読みでは「シャング」となる。

■ A D 2 世紀 「丹羽氏誕生」

沖縄を離れた尚氏は、日本に入植して「丹羽氏」となる。丹羽（にわ）の名の由来はウラニアーである。ウラニアー＝ウラニワ＝丹羽（ニワ）となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ガーディナー誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した丹羽氏は、現地人と混合して「ガーディナー」を生んだ。ガーディナーの名の由来は「にわ（丹羽）」である。丹羽（にわ）の読み「庭」を当て字している。

■ A D 3 世紀 「スティルス誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した尚氏は、現地人と混合して「スティルス」を生んだ。スティルスの名の由来は尚（～未だに）である。

■ A D 6 世紀 「丹波氏誕生」

その後、丹羽氏（にわ）から丹羽氏（たんば）が別れ、漢字表記も「丹波氏」となった。彼らは「丹波国」を築いた。

■ A D 6 世紀 「勿吉の大航海時代」

■ A D 8 4 2 年 「橘氏の大航海時代」

■ A D 8 4 2 年 「ニヨロ帝国誕生」

「承和の変」により、橘逸勢は伊豆に流される途上、三ヶ日辺りで船で逃亡すると、A D 7 1 3 年、律令制により、丹波国が丹後国と但馬国に分割されたのを機に、海外逃亡を考えていた丹波氏はこれに参加した。丹波氏は、橘逸勢の残党と共に日本を後にしてアフリカ大陸に向かった。

一行はナイル河を遡って湖水地方に進出し、「ニヨロ帝国」を建てた。ニヨロは「ブニヨロ」とも呼ばれたが、ヴァナラシが由来である。ヴァナラシ＝ヴァニヨロシ＝ブニヨロ＝ニヨロとなる。

■ A D 9 0 0 年 「テンブジ朝誕生」

9 0 0 年頃にニヨロ帝国に「テンブジ朝」が開かれた。この、テンブジの名の由来は丹波氏である。丹波氏＝タンバジ＝テンブジとなる。

■ A D 1 1 1 6 年 「大庭氏誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したオースターとイギリス人ガーディナーの連合体は、鎌倉氏に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に「大庭氏」の祖である大庭景忠が誕生した。大庭の名の由来は多と丹羽の組み合わせである。多＋丹羽＝大＋庭＝大庭（音読みでおおば）となる。大庭氏は、坂東八平氏の一族として源頼朝の軍に参加し、「石橋山の戦い」「富士川の戦い」でも活躍した。

■ A D 1 1 9 3 年 「トファ族誕生」

A D 1 1 9 3 年、大庭氏は「和田合戦」で敗北を喫すると、シベリアに移住し、「トファ族」を

生んでいる。トファの名の由来は大庭の中国語読み「ダーバ」である。ダーバ＝タハ＝トファとなる。

■AD1406年 尚思紹王、初代王に即位 「第一尚氏王統誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人スティルスは、中国に帰還して先祖「尚氏」の名を復活させていた。その後、「ヤハウエの大航海時代」の天孫族、ジュート人が沖縄に琉球王国を築いたことを知ると、尚氏も中国から沖縄へと移住した。

尚思紹王は、AD1406年に琉球王に即位し「第一尚氏王統」を開いた。尚氏王統は、東郷氏の察度王統、西郷氏の大里王統、バヌアツ人の怕尼芝王統と並行して沖縄に君臨した。第二尚氏王統を挟み、尚氏王統が支配する琉球王国はAD1872年まで続いた。

■AD1908年 「ツングース大爆発」

■AD1908年 「庭野氏誕生」

「ツングース大爆発」を機に、トファ族は日本に帰還した。もともと大庭氏だった彼らは、「大庭氏の土地（野）」を由来に「庭野氏」を生んだ。

■AD1938年 庭野日敬、長沼倭成と共に立教 「立正佼成会誕生」

彼らは、AD1930年の中国共産党の長征を機に、中国から日本に逃れてきた人々である。教祖、庭野日敬の名の由来は「丹羽」だと考えられるが、信仰指導を担当した長沼妙校の姓「長沼」の由来は、イザナギとイザナミの組み合わせである。イザナギ＋イザナミ＝ナギナミ＝長沼となる。

また、長沼妙校の「妙校」の名の由来は白山修験の明峰「妙高山」である。つまり、立正佼成会の基盤は白山修験によって形成された。この、庭野日敬、長沼妙校の先祖を含む白山修験の修験者集団は、AD1868年の「北越戦争」を機に日本を脱出して一時的に清治世下の中国に渡っていた。

■AD1922年 丹波哲郎生誕

■AD1945年 スティーヴン・スティルス生誕 「グレアム・スティルス・ナッシュ&ヤング誕生」

スティーヴン・スティルスは、60年代に「グラハム・スティルス・ナッシュ&ヤング」というユニットを結成したが、4人とも「大和人の大航海時代」によってイギリスを訪れた東アジア人の子孫である。

◆ナフタリ（ノア）の歴史

■1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■1万5千年前 「ノア誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したアテナイは、東南アジアから南極に移住し、ノアを生んだ。ノアの名の由来はウラニアーである。ウラニアー＝ウラノア＝ノアとなる。ノアは、セム、ハム、ヤペテと同盟し、南極の文明を発展させた。

■1万3千年前 「ノアの大航海時代」

■1万年3千年前 「ヌビア誕生」

「セム（サーミ人）」「ハム（ハミ族）」はバルト海に向かったが、「ノア」はバルト海には向かわずに、そのまま地中海に留まった。「ノア」は、ナイル河を遡って「ヌビア」に拠点を得た。ヌビアの名の由来はノアである。ノア＝ノヴァ＝ノビア＝ヌビアとなる。

■BC5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「スカンジナビア誕生」「最高神ニョルド誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したノアは、アイルランドからバルト海に移り、古代スカンジナビアを訪れた。ノア（ヌビア人）は科学の種族エラド（エリウ）と組んで「最高神ニョルド」を祀る。ノア+エラド=ノアラド=ニョルドとなる。スカンジナビアの名の由来はシカニ、エノス、ヌビアの組み合わせである（スカンジナビア南端にスコーネを得るシカニ族は、後になってシチリア島からやってくる）。シカニ+エノス+ヌビア=シカノスヌビア=スカンジナビアとなる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 ニョルド、アイルランドからナイル流域に帰還

■BC 5千年 「バベルの塔建設」

■BC 5千年 「第1次北極海ルート時代」

■BC 5千年 「セミノール族誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したスオミ族は、シベリアを離れて太平洋に出ると、アリューシャン列島を通過、マヤを経てミシシッピ流域に入植した。彼らは、ヌビア人（ノア）と連合して「セミノール族」を形成した。セミノールの名の由来はセムとニョルド（ノア）の組み合わせである。セム+ニョルド=セムニョール=セミノールとなる。その後、セミノール族は、ナワトル族と合流した。両者は、アメリカ・インディアンの母体を形成している。

■BC5千年 「ナワトル族誕生」

「第1次北極海ルート時代」に参加したタルタロスは、ノアと共に北アメリカに入植した。この時に「ナワトル族」が生まれた。ナワトルの名の由来はノアとタルタロスの組み合わせである。ノア+タルタロス=ノアタル=ナワトルとなる。

■BC40世紀 「ナワ族誕生」

ナワトル族は、北アメリカからマヤに移ると「ナワ族」に名を改めた。

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC32世紀 「ナウル誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したナワ族は、出羽国を発ち、太平洋に進出した。ナワ族は「ナウル島（ニョルド）」を発見する。ナウルの名の由来はナイルである。ナイル=ナウルとなる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「ナフタリ族誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したナワトル族は、モンゴルに移住して「ナフタリ族」を生んだ。ナフタリの名の由来はナワトルである。ナワトル=ナハトル=ナフタリとなる。

■BC30世紀 「黙示録アルマゲドン」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ナパタエ（前身）誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したタルタロス（ナフタリ族）は、アラビア半島に移住した。彼らは、ヨルダン方面に移住し、「ナパタエ」を築いた。ナパタエの名の由来はナフタリである。ナフタリ＝ナパタリ＝ナパタエとなる。

■BC1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「死者の女神ネフティス誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、アラビア半島を出たノア（ナフタリ族）は、エジプトに移住した。彼らは「死者の女神ネフティス」を祀ってヘリオポリスに参加した。ネフティスの名の由来はナワトルである。ナワトル＝ナワトス＝ネフティスとなる。

■BC1027年 「ナパタ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、アラビア半島を出たノア（ナフタリ族）は、エジプトからヌビアに移住し「ナパタ」を生んだ。ナパタの名の由来はナフタリである。ナフタリ＝ナプタリ＝ナパタとなる。

■BC7世紀 「クシュ人の大航海時代」

■BC7世紀 「ハワドレ誕生」

「クシュ人の大航海時代」第1の拠点ソマリアである。ここにはナフタリ族が残留を決めた。ナフタリ族は2つに分離し、ノア族の系統のナフタリ族が「ハワドレ」を称し、タルタロスの系統のナフタリ族は「ワダラーン」を称した。ハワドレ、ワダラーンのいずれの名もナワトルが由来である。ナワトル＝アワタリ＝ハワドレとなり、ナワトル＝ナワタラン＝ワダラーンとなる。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■BC327年 「ナパタエ族誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したハワドレ族は、ヨルダンに移住した。ここに「ナパタエ族」が誕生した。ナパタエの名の由来はナフタリである。ナフタリ＝ナフタエリ＝ナパタエとなる。ナパタエ族は、BC4世紀頃に「ナパタエ王国」を構えているが、勇猛なことで知られた彼らは、アレキサンダー大王の継承者アンチゴノス侵攻時にこれを退けたという。

■AD106年 「邪馬台国誕生」

トラヤヌス皇帝がナパタエ王国から自治権を奪うと、ナパタエ人はアビシニア人に統治されていたヒムヤル王国に立ち寄った。ナパタエ人は、アビシニア人に不満を持つ一部ヒムヤル人を同行させて、遠くインドシナ半島に移り住んだ。アラビア人の顔をしたナパタエ人は、シャム族と連合して「邪馬台国」を建設した。邪馬台の名の由来はシャムとナパタエの組み合わせである。シャム＋ナパタエ＝シャムタエ＝邪馬台となる。つまり、邪馬台国は現在のタイに存在したと考えられる。

■AD146年 「ジャマタエ人誕生」

倭国大乱を機に、邪馬台人がインドシナ半島を離れてゲルマニアに移住した。ゲルマニアに上陸した邪馬台国の一族は、ゲルマニア人と混合して「ジャマタエ人」を成した。ジャマタエ人の名の由来は邪馬台である。邪馬台＝ジャマタイ＝ジャマタエとなる。当初、マルコマンニ人とジャマタエ人の両者は邪馬台国時代からの同盟者とあって、連合していた。しかし、理由は不明だが、ジャマタエ人は同盟者であるはずのマルコマンニに討伐されてしまう。

■AD160年 「ヴァラビ朝誕生」

AD105年にシリアがローマ属僚となると、ナパタエ人はシリアを離れてグジャラートに逃亡した。彼らは、アラビアを由来に「ヴァラビ朝」を開いた。アラビア＝ヴァラビア＝ヴァラビとなる。

■AD170年 「エフタル誕生」

同盟者であるはずのマルコマン二人に討伐されると、「ジャマタエ人」は空中分解し、シャム族とナパタエ人に分離して東西に移住した。ナパタエ人はゲルマニアからパンジャブに移り、「エフタル」を称した。エフタルの名の由来はナフタリである。ナフタリ＝アフタリ＝エフタルとなる。ゲルマニア帰りの彼らは白人の顔をしていたため、エフタルは白いフン族などと呼ばれた。AD4??年、「エフタル」はパンジャブに台頭を始め、一時的に隆盛を極めるも、100年後にサーサーン朝と突厥帝国による挟み撃ちによって滅んでしまう。

■AD628年 「ヨハネスの大航海時代」

■AD780年 「ワラキア誕生」

その後、AD780年にヴァラビ朝が滅ぶと、ナパタエ人はグジャラートを離れて黒海に進出し、トラキア地方に移住した。彼らは当地を「ワラキア」と称した。ワラキアの名の由来はヴァラビである。ヴァラビ＝ヴァラキ＝ワラキアとなる。

■AD780年 「ワリアギ誕生」

その後、インド人の顔をしたワラキア人は、ドニエプル川を北上してスウェード人・ルス人と活動を共にした。彼らは「ワリアギ」を称した。ワリアギの名の由来はワラキアである。ワラキア＝ワリアギア＝ワリアギとなる。

■AD1180年 「ヴィッテルスバッハ誕生」

ヴァイキングの時代が終焉を迎えると、ワリアギは黒海に移り、AD1062年に滅んだブワイ朝の残党（渤海人）と連合し、「ヴィッテルスバッハ」を結成してバイエルンに移住した。ヴィッテルスバッハの名の由来はエフタルとボハイの組み合わせである。エフタル＋ボハイ＝フタルス＋ボッハイ＝ヴィッテルスバッハとなる。ヴィッテルスバッハ家からは、AD1806年に「バイエルン王国」を築いたマクシミリアン1世、発狂王として知られるルートヴィヒ2世らが輩出されている。

■AD1320年 「服部氏誕生」

ヴィッテルスバッハの片割れエフタルは、インドから日本に移住した。白人の顔をした彼らは日本人と混合して「服部」を称した。服部の名の由来はヴィッテルスである。ヴィッテル=ヴィットリ=服部となる。服部氏からは伊賀忍者「服部家」の服部半蔵、音楽家の服部良一、服部克久が輩出されている。

■AD1806年 マクシミリアン1世、初代王に即位 「バイエルン王国誕生」

ヴィッテルスバッハ家からは、AD1806年に「バイエルン王国」を築いたマクシミリアン1世、発狂王として知られるルートヴィヒ2世らが輩出されている。

■AD1845年 ルートヴィヒ2世生誕

■AD1936年 服部克久生誕

■AD1963年 ギャスパー・ノエ生誕

オロルンの歴史

◆日蓮（オロルン）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「オロルン誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したワルムベは、現ナイジェリアに「オロクン」「オロルン」を生んだ。オロクンは、ミャンマー少数民族の姿をしていた。日本で活躍しているボビー・オロゴンは、その名前からすると「原初の海オロクン」の末裔かもしれない（顔と身体はバントゥー族だが）。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■30万年前 「アロール族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したオロルンは、ミャンマーに入植した。この時、マレー半島に移ったオロルンからは「アロール族」が生まれた。アロールの名の由来はオロルンである。オロルン=オロールン=アロールとなる。

■30万年前 「冥府王エルリク誕生」

ミャンマー人の姿をしたアロール族とアラカン族は、東南アジアを離れてシベリアを目指した。彼らの到来を機に、クウォスとチュクウの部族は、シベリアを明け渡してオーストラリアに移る。だが、アロール族とアラカン族は豊かな海産資源に目を奪われ、再び水生生活に入った。その際、シベリア・モンゴルの神である「エルリク」が誕生した。エルリクの名の由来はオロルンとオロクンの組み合わせである。オロルン+オロクン=オロルクン=エルリクとなる。彼らは、シベリア人の祖となる。

彫りが浅く、目が細く、部品が小さいという特徴を持つ、シベリア人の容姿は、世界中の人々とは異なる印象を持っている、肌が白くとも黒くとも、更に、同じモンゴロイドに分類される東南アジア人、インディアンでさえ彫りが深い。つまり、東アジア人は異端であり、彫りが深い人々

の方が人類の主流である。じつは、これがシベリアに達したホモサピエンスが再度、海に入って水生生活をしていた証拠である。低温の海水に対応するため、身体が変化したのだ。

■ 7万年前 「シベリア人の大移動時代」

■ 7万年前 「東アジア人誕生」

「シベリア人の大移動時代」に参加したウリゲン、エルリクは、シベリアを発って中国、朝鮮半島、日本列島に入植した。この時に、中国人、朝鮮人、日本人の姿が生まれた。

■ 3万年前 「モンゴロイドの大移動時代」

■ 3万年前 「アララ族誕生」

「モンゴロイドの大移動時代」に参加したオロルンは、故地を離れて新天地を求めてアメリカに向かった。カリフォルニアを発ったオロルンは、当時、文明の最先端を行っていたペルーに立ち寄り、モホス平原に移住した。この時、オロルンはアマゾンに「アララ族」を残した。アララの名の由来はオロルンである。オロルン＝アロルン＝アララとなる。アマゾン原住民の姿、生活は、古（いにしえ）のウリゲンの姿、生活を髣髴とさせるものだ。

■ BC 30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ BC 30世紀 「ウラルトゥ誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加してモンゴルに移住し、その後「ヨシュアの大移動時代」に参加した安曇氏は、エルリクと共にコーカサスに移住した（エルリクはシベリアから参加した）。彼らは連合して「ウラルトゥ」を築いた。ウラルトゥの名の由来はエルリクとウトゥの組み合わせである。エルリク＋ウトゥ＝エルリトゥ＝ウラルトゥとなる。

■ BC 1700年 「エトルリア人誕生」

ミディアン人（司神タナトス）がウラルトゥに侵入し、ウラルトゥ人をインチキ宗教の信者として篡奪すると、メソポタミアに「ミタンニ王国」を建てた。その後、ミタンニ人は、ウラルトゥ人を率いてアラビア半島に侵攻し、アテーナイ王国に君臨した。その後、ミディアン人は、ウラルトゥ人を指揮して隣国のマガン王国（ローマ王国）に侵攻させ、ロムルスとサビニ人の王統と対立した。

この時、ウラルトゥ人は「エトルリア人」と呼ばれた。エトルリアの名の由来はウラルトゥの同じで、ウトゥとエルリクの組み合わせである。ウトゥ+エルリク=ウトゥルリ=エトルリアとなる。

■BC1270年 「エトルリア王国誕生」

ミタンニ王国（アテーナイ王国）が滅ぶと、司神タナトスから解放されたエトルリア人は、アラビア半島を発ち、マガン人（ローマ人、ミケーネ人とも呼ぶ）、サビニ人、ラテン人と共にイタリア半島に上陸した。エトルリア人はイタリアに「エトルリア王国」を築いた。

■BC1270年 「イリュリア人誕生」

イタリアに行かなかった人々は、アドリア海を挟んだバルカン半島に移住し、「イリュリア人」を生んだ。イリュリアの名の由来はオロルンである。オロルン=オロリャン=イリュリアとなる。

■BC4世紀 「イリュリア王国誕生」

BC4世紀にバルデュリス王が登場すると、「イリュリア王国」は強大化した。BC231年からBC228年にかけて、イリュリア人海賊として鳴らしたが、海賊の討伐を理由にローマ軍と戦争になると、ダキア人（大夏）、ダルダニア人（大宛）、スラブ人（疏勒）と共にタリム盆地に移住した。

■BC168年 「スラヴ人の大移動時代」

■BC168年 「楼蘭誕生」

「スラヴ人の大移動時代」に参加したイリュリア人は、タリム盆地に移住し「楼蘭（ローラン）」を築いた。ローランの名の由来はイリュリアである。イリュリア＝イリュリアン＝ローランとなる。

■BC168年 「オルレアン誕生」

「スラヴ人の大移動時代」に参加したイリュリア人は、現フランスに移住した。この時に「オルレアン」が築かれた。オルレアンの名の由来はオロルンである。オロルン＝オロルアン＝オルレアンとなる。

■BC109年 「柔然誕生」

柔然（衛氏朝鮮）は、AD315年頃にタリム盆地からの亡命者、楼蘭（ローラン）や、宇文部に皇位継承権を篡奪されたイエマック王家の木骨閭（モグル）の一族郎党と組んで柔然を騎馬軍団として強化する。だが、AD4世紀に柔然は楼蘭に乗っ取られた。この時に楼蘭が主導権を握ると、柔然（ゼンゼン）は、「ローラン」の別称を得る。

■AD420年 アラリック、西ローマ帝国に侵攻

アラリックの名の由来はエルリクである。エルリク＝エルリック＝アラリックとなる。オルレアンに生まれたアラリックは、ゴート人ではないが、西ゴート人の王となり、西ローマ帝国に侵攻して「西ゴート王国」建国の礎を築いた。

■AD562年 「バヤン可汗誕生」

モンゴル人の顔をした柔然（ローラン）がアヴァール王位を篡奪した。バヤン可汗はトラキア、イリュリア、ギリシアに侵入して略奪を繰り返したが、ビザンツ帝国により、打撃を被る。約200年後のAD791年、シャルルマーニュ大帝がパンノニアに進撃すると、アヴァール王国は崩壊した。

■AD791年 「ポピエル家誕生」

ローランとアヴァール人の連合体は、シャルルマーニュ大帝の進撃を機にシロンスク地方に移住した。アヴァール人はそこに「オポーレ」を築いた。オポーレの名の由来はアヴァールである。楼蘭とククルカンは、2つの連合体を築いた。楼蘭は「ポピエル家」を築いた。ポピエルの名の由来はアヴァールである。アヴァール＝ポヴァール＝ポピエルとなる。

■AD791年 「リューリク家誕生」

一方、楼蘭（ポピエル）はバルト海に進出してスウェード人、ワリアギ、ルス人と懇意になる。この時、楼蘭は「リューリク」を称した。リューリクの名の由来はエルリクである。エルリク＝エリユーリ＝リューリクとなる。AD862年、リューリク1世はノヴゴロド公に就任して「ノヴゴロド公国」を築いている。

■AD862年 「キエフ公国誕生」

リューリクはモンゴル人（柔然/ローラン）であり、スウェード人はインド人（チーティ王国）であり、ルス人はマヤ人（セロス）であり、ワリアギはアラビア人（ナパタ王国）であった。この国際的な連合体は、リューリクを指揮者にスウェード人傭兵の力でノヴゴロドを支配下に置いた。同時に、リューリクは「リューリク朝」を開き、ロシアの建国者となった。ロシア人の母体人種は、は宇宙人（科学の種族トバルカイン）である。

ロシアの名の由来はトゥルシア人の末裔「ルス」である。後にワリアギがキエフを占領し、首都に設定している。キエフの名の由来はキャラとヴィディエの組み合わせである。キャラ+ヴィディエ＝キャヴィ＝キエフとなる。AD913年にはイーゴリ1世が初代キエフ大公に就任して「キエフ大公国」を築いている。

■AD907年 耶律阿保機、初代遼王に即位 「遼誕生」

ゴプラン家はピヤスト家の登場を機に、モンゴルに帰還している。白人の顔をした彼らは、人喰い人種である契丹を統率し、「遼朝（リャン）」を開いた。遼（リャン）の名の由来は楼蘭（ローラン）である。ローラン＝ローリャン＝リャン（遼）となる。また、遼の君主、耶律阿保機（イェル）の名の由来はスラブ系の名ヤロスラフである。ヤロスラフ＝ヤロス＝耶律となる。ヤロスラフの名前も、「スラヴのイリュリア」を意味するイリュリアとスラヴの組み合わせである。イリュリア+スラヴ＝イリュスラヴ＝ヤロスラフとなる。

■AD1122年 耶律淳、遼王に即位 「北遼誕生」

■AD1124年 耶律大石、遼王に即位 「西遼（カラキタイ）誕生」

■AD1168年 「ロージア誕生」

ロスチスラフ1世とキエフ大公の座を巡って争ったイジャスラフ3世は敗北したのを機に、東西に新天地を求めて旅立った。西方組はロシアからスコットランドに移って「ロージア王国」を築いた。ロージアの名の由来はロシアである。ロシア＝ロージアとなる。

■AD1168年 「六角氏誕生」

東方組はロシアから遠く日本にまで旅立った。その途上で、彼らはインドに立ち寄り、AD12世紀に滅びたカーカティヤ朝の人々を船団に迎えた。まず、一行は九州に上陸した。インド人の顔をしたカーカティヤの人々は、藤原政則に接近して自身の血統を打ち立てている。この時に生まれたのが「菊池氏」の祖、菊池則隆である。

また、リューリク家とカーカティヤの一部は九州から近江国に至り、共同で「六角氏」を形成した。六角の名の由来はリューリクとカーカティヤの組み合わせである。リューリク＋カーカティヤ＝リク（六）＋カーカ（角）＝六角となる。近江国を治めていた六角氏は、「甲賀衆」を掌握し、伊賀にも「六角派」を置いて北畠氏、仁木氏と共に伊賀国を3分割して「伊賀衆」を支配下に置いていた。甲賀の名の由来はカーカティヤである。カーカティヤ＝カーカ＝甲賀となる。AD1487年、甲賀忍者は、六角高頼征伐のために、足利氏が幕府軍を派遣した「鉤の陣」で、特異な存在感をアピールした。

■AD1253年 日蓮生誕 「日蓮宗誕生」

AD1125年、遼が滅ぶと、遼は西遼（カラ・キタイ）としてしばらく続いた。だがAD1218年、チンギス・ハーンによって西遼が壊滅すると、遼の残党は日本に移住した。安房国に上陸した彼らは、三国太夫に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが善日磨は、後の「日蓮」である。日蓮の名の由来は日本の遼（リャン）である。日本＋遼（リャン）＝日＋蓮（れん）＝日蓮となる。

AD1274年、日蓮は蒙古襲来を予言する。自身の先祖（遼）が蒙古に滅ぼされたため、その

ような予言をしたと考えられる。また、「大石寺」の名の由来はカラキタイ（西遼）の初代王、耶律大石の名に因んでいると考えられる。

■AD1292年 「ランナー王国誕生」

AD1222年、西遼が滅ぶと、遥輦氏は耶律氏と共に現タイに移住した。この時、彼らは共同で「ランナー王国」を築いた。ランナーの名の由来はローランとヤオニャンの組み合わせである。ローラン+ヤオニャン=ランニャ=ランニャー=ランナーとなる。ランナー王国は、AD1775年まで続いた。

■AD1338年 「ランサーン王国誕生」

AD1222年、西遼が滅ぶと、遥輦氏は耶律氏と共に現ラオスに移住した。この時、彼らは共同で「ランサーン王国」を築いた。ランサーンの名の由来はローランとシャンの組み合わせである。ローラン+シャン=ランシャン=ランサーンとなる。ランサーン王国は、AD1707年まで続いた。

■AD1707年 「ルアンパバーン王国誕生」

ランサーン王国が分裂すると、耶律氏は「ルアンパバーン王国」を築いた。ルアンパバーンはAD1949年まで続いた。

■AD1875年 ライナー・リルケ生誕

■AD1898年 ガルシア・ロルカ生誕

■AD1932年 「血盟団誕生」

■AD1938年 ジャン・ローラン生誕

カアングの歴史

◆孔子（カアング）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「カアング誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したワルムベは、南アフリカに「カアング」を生んだ。カアングは、南アフリカ沿岸で再び水生生活を実施したことで、現在のコイサン族の容姿を得た。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■45万年前 「カヤン族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したカアングは、ミャンマーに入植した。この時、「アカヤン族」が生まれた。カヤンの名の由来はカアングである。カアング=カヤング=カヤンとなる。

■45万年前 「カヤー族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したカアングは、ミャンマーに入植した。この時、「カヤー族」が生まれた。カヤーの名の由来はカアングである。カアング=カヤング=カヤーとなる。

■45万年前 「オンゲ族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したカアングは、マルマ族は彼らと連合して「オンゲ族」を生んだ。オンゲの名の由来はカアングである。カアング=カアング=オンゲとなる。その後、オンゲ族は東南アジアからアンダマン諸島に移り住んだ。

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「エンケラドス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、カアングと組んで「エンケラドス」を生んだ。エンケラドスの名の由来はカアング、ヒッポリュトスの組み合わせである。カアング+ヒッポリュトス=アングリュトス=エンケラドスとなる。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「カナカナブ族誕生」

「カオスの大移動時代」などにより、異なる人類がオセアニアに集うと、カアングとテングリは台湾に移住し、バブサ族（エバシ）と連合した。この時に「カナカナブ」が生まれた。カナカナブの名の由来はカアング、ウリゲン、アプスーの組み合わせである。カアング+ウリゲン+アプスー=カナゲナアプ=カナカナブとなる。

■ 30万年前 「ガンガー誕生」

危険な反自然の種族であるタナトスが虚言と欺瞞によって台頭すると、これを嫌悪したカアングは、ガンジス流域に入植した。この河は、この時に初めて「ガンガー」と呼ばれた。ガンガーの名の由来はカアングである。カアング=カアングァー=ガンガーとなる。ガンガーは、ガンジスとも呼ばれている。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「参誕生」「星誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したカアングは、現アジスアベベに入植して「参（カン）」を生み、「白虎」の建設に参加した。また、一部はナイジェリアに入植して「星（シン）」を生み、ジェンギは「張（チャン）」を生んで「朱雀」の建設に参加した。

■ 2万年前 「最終戦争ラグナロク」

■ 2万年前 「文曲誕生」

「最終戦争ラグナロク」を機に、メキシコを離れたオーディーンが現ベナンに北斗星君を築くと、カアングは、北斗星君に属する神、「文曲（ウェンク）」を生んだ。ウェンクの名の由来はカアングである。カアング＝ウアング＝ウェンクとなる。

■ 2万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2万年前 「秦広王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加して火星に移住したカアングは、十王に属する「秦広王（シングアン）」を生んだ。シングアンの名の由来はンジニとカアングの組み合わせである。ンジニ＋カアング＝ジニカアン＝シングアンとなる。カアングは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2万年前 「閻羅王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したカアングは、火星に降り立ち、十王に属する「閻羅王（ヤンルオ）」を築いた。ヤンルオの名の由来はカアング、エウリュトスの組み合わせである。カアング＋エウリュトス＝アンリュ＝ヤンルオ（閻羅）となる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「テングリの大移動時代」

■ BC 7千2百年 「神々の集団アヌナキ誕生」

大地殻変動を機に、世界各地から神々の血統がメソポタミアに集った。ブリテン島から来たヘカテ、テミス、モンゴルから来た三皇、垂仁天皇、獣人たち、オケアーニスたち、エビス（アプスー）、ヤマト（ティアマト）、エジプトから来たアトゥム、カイン、マハラレル、カインアン、南極から来たエノク、レメク、ヤペテの4者が連合して「神々の集団アヌンナキ」を築いた。また、彼らはヤペテの子として知られる一族を共同で生んだ。

■BC 7千2百年 「キング誕生」

スワジ（朱雀）からメソポタミアに移住したカアングは、「キン（キング）」を生んで「神々の集団アヌンナキ」に参加した。キングの名の由来はカアングである。カアング=カング=キングとなる。

■BC 1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC 1027年 「ベーシュタードの大航海時代」

■BC 1027年 「アーンギラサ誕生」

「ベーシュタードの大航海時代」に参加したシェクレシュ人は、ガンジス流域に入植した。シェクレシュ人は、カアングと連合し「アーンギラサ」を称した。アーンギラサの名の由来はカアングとシェクレシュの組み合わせである。カアング+シェクレシュ=アンクレシュ=アーンギラサとなる。アーンギラサ族は、マハーバーラタ、リグ・ヴェーダなど、「ヴェーダ神話」の編纂を手がけた。

■BC 32世紀 モリモ、ガンジス流域に移住

「サムエルの大航海時代」に参加して出羽国に帰還し、「モーゼスの大移動時代」に参加してモンゴルに移住したモリモ（ムルムスラン）は、アンダマン諸島に移住した。彼らは、祖を同じくするオンゲ族と混合し、その後、ガンジス流域に移住した。

■BC 6世紀 「アンガ王国誕生」

ガンジス流域に移住したオンゲ族は、「アンガ王国」を築いた。アンガの名の由来はカアングである。カアング＝アング＝アンガとなる。

■BC551年 孔子生誕 「儒教誕生」

マガダ王国のビンドゥサーラ王が王位に就くと、アンガ人は魯国に移住した。この時に、「儒教（ルイ）」の創始者である「孔子（コン）」が生まれた。儒教の名の由来はモリモであり、孔（コン）の名の由来はカアングである。モリモ＝モルイモ＝ルイ（儒）となり、カアング＝カアン＝コンとなる。おもしろいことに「儒人」と書いて「こびと」を意味する。これは、ネグリトであるオンゲ族が「儒教」を興した証だ。

■BC497年 「康居（カンジュ）誕生」

BC497年、孔子は魯国を出て西域に向かい、「康居（カンジュ）」を築いた。カンジュの名の由来はガンガーである。ガンガー＝ガンジャー＝カンジュ（康居）となる。その後、AD1世紀頃に漢が西域に干渉を始めると、一部の康居はタリムを出てデカン高原に移住した。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ピット誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した孔氏は、ブリテン島に入植して現地人と混合し「ピット」の名を生んだ。ピット（穴）の名の由来は孔（穴の意）である。

■AD3世紀 「エンゲル人誕生」

AD3世紀に前秦に朝貢を行うようになると一部の康居人がヨーロッパに逃亡し、ドイツ辺りに入植した。この時に「エンゲル人」が生まれた。エンゲルの名の由来はアーンギラサである。アーンギラサ＝エーンギラサ＝エンゲルとなる。

■ A D 5 世紀 「東ガンガ朝誕生」

A D 3 世紀に前秦に朝貢を行うようになると一部の康居人がインド・オリッサ地方に逃亡し、「東ガンガ朝」を開いた。ガンガの名の由来はガンガーである。

■ A D 7 世紀 「アングロス家誕生」

ヴァルダナー朝がガンジスを掌握すると、アーンギラサ族は故地を離れてビザンツ帝国に移住し、「アングロス家」を称した。アングロスの名の由来はアーンギラサである。アーンギラサ＝アングロス＝アングロスとなる。「アンジュール帝国」が成立したのと丁度同じ頃、イサキオス 2 世アングロスがビザンツ皇帝に即位して「アングロス朝」をビザンツ帝国に開いている。

■ A D 7 8 2 年 「アンジュー家誕生」

シャルルマーニュ大帝がザクセンに侵攻すると、西方組エンゲル人はフランスに移住して「アンジェルジェ家」を成した。アンジェルジェの名の由来はアーンギラサである。アーンギラサ＝アンジュラサ＝アンジェルジュとなる。

■ A D 9 2 9 年 フルク 1 世、初代アンジュー伯に就任 「アンジュー家誕生」

A D 9 2 9 年、アンジェルジェ家から出たフルク 1 世が初代アンジュー伯に就任して「アンジュー伯」を誕生させた。

■ A D 1 0 4 1 年 「アングス誕生」

セルジューク朝が成立すると、カニクはモンゴルからバルト海に移住し、海を渡ってブリテン島に上陸し、ピクトランドに入植した。彼らは、ピクトランドに上陸して「アングス」を築いた。アングスの名の由来はカアングである。カアング＝カアングス＝アングスとなる。

■ A D 1 0 9 3 年 「アストゥリアス家の大航海時代」

■AD1093年 「イングーシ誕生」

ストラスクライド王国が解散すると、アンガスはアストゥリアス家、ジルシンと共にスコットランドを離れた。イシュタルの故地にほど近い、中央アジアにやって来たアンガスは「イングーシ」となった。イングーシの名の由来はアンガスである。アンガス=アングース=イングーシとなる。

■AD1154年 ヘンリー2世、イングランド王に即位 「アンジュー帝国誕生」

AD1154年、アンジュー伯のヘンリー2世が、イングランド王に即位して「プランタジネット朝」を開いている。ヘンリー2世は、ピレネー山脈からアイルランドに至る広大な狩猟を相続したが、その広大な領土をして「アンジュー帝国」と呼ばれた。

■AD1185年 イサキオス2世、ビザンツ皇帝に即位 「アンゲロス朝誕生」

■AD1204年 「安芸氏誕生」

アンゲロス朝が滅亡すると、アンゲロス家はビザンツを離れて東アジアに向かい、鎌倉幕府治世下の日本に上陸した。ギリシア人の顔をしたアンゲロス家は日本人と混合して「安芸氏」を生んだ。安芸の名の由来はアンゲロスである。アンゲロス=アンゲイ（安芸）=安芸（あき）となる。

■AD1216年 「日高氏誕生」「御厨氏誕生」「馬渡氏誕生」

AD1216年、死んだと見せかけてイギリスから来たアンジュー家に属するジョン失地王は現地人と混合して「日高氏」「御厨氏」「馬渡氏」を生んだ。アンジュー帝国と呼ばれたアンジュー一家もジョン失地王の時代には大陸の領土を喪失した。これを機に、死んだと見せかけたジョン失地王は、一族を率いてシルクロードを通過し、日本にまでやって来た。日高氏の名の由来は「ヴェーダの人（ヴェーダカ）」であり、御厨氏の名の由来はアンジューであり、馬渡氏の名の由来は「馬でシルクロードを渡った」ことを意味している。この3者は「倭寇」に参加した。

■AD1358年 「コンゴ王国誕生」

AD1358年にベンガル・スルターン朝やヴィジャヤナガル王国が東ガンガ朝を攻撃すると、一部の東ガンガ人はインドを離れて南アフリカを周航し、「コンゴ」に上陸している。コンゴの名の由来はカアングである。カアング=カング=コンゴとなる。

■AD1485年 「カラシュ誕生」

アンジュー家のヘンリー6世はクリューニー会、デーン人の共謀によって精神錯乱状態に陥ったが、見事に復活を遂げて「薔薇戦争」を戦った。しかし、敗北を機に、アンジュー家は船団を組んでブリテン島を発ち、紅海を経てインダス流域に入った。パンジャブに移ると、アンジュー家は戦争とは無縁の僻地に居を定めた。彼らはアーンギラサを由来に「カラシュ」と称した。アーンギラサ=ギラシャ=カラシュとなる。

カラシュ族はパキスタンの奥深くに居住しているにも拘らず、北欧人のような金髪・碧眼、白い肌を持つことで知られている。彼らは、イギリス人の子孫なのだ。彼らは現地人との接触を出来るだけ避けたため、現在でも、中世イギリス人の容貌を残している。その後、インドを足がかりにパンジャブにも大英帝国の毒牙が及ぶと、一部カラシュ族は平和を求めてブータン王国を訪れた。奇しくも、ブータンにはアンジュー家と祖を同じくするアンゲロス家の子孫「安芸氏」がいた。

■AD1498年 「耽氏誕生」

AD1464年、ガオ帝国（チンギス・ハーンの残党）が滅び、AD1490年にはポルトガル大布教団がコンゴを訪れ、AD1498年にはマラビ帝国が位置するスワヒリ地域にポルトガルが訪れている。鄭和の子孫、チェワ族はガオ族（チンギス）、コンゴ人（孔氏）、そしてケニアのルオ族（老子）を誘って中国への帰還を打診した。

タナトスに指揮されたポルトガル人に嫌気が差した彼らは、船団に参加した。アフリカ人の顔をした一行は、中国人と交わってそれぞれの姓を復活させた。この時、ガオのチンギスからは「張献忠」、コンゴの孔氏からは「孔有徳」、チェワの鄭氏からは「鄭芝龍」、ルオ族からは「李自成」が輩出された。また、コンゴ人は新規に「耽（ゲング）」の姓を作り、ここからは「耽仲明」が輩出された。

■AD1560年 「戦国大名の大航海時代」

■AD1560年 ナムゲル生誕 「ドゥク・カギユ派誕生」

信玄亡き後、武田氏が織田氏に敗れると、武田氏は他の清和源氏の残党と共に戦国時代の日本を後にスリランカに逃れた。「戦国大名の大航海時代」に参加した武田氏、安芸氏はスリランカには上陸せず、現ブータンに移住している。「ブータン」の名の由来は武田（ブダ）である。ブダ＝ブーダ＝ブータンとなる。武田氏・アンコール人は「カギユ派」に学び、始祖ナムゲルが「ドゥク・カギユ派」を創始する。ナムゲルの名の由来はアンギラサであり、ドゥクの名の由来は武田である。

■AD1861年 「ワンチュク家誕生」

AD1861年、カラシュ族は祖を同じくするジグメ・ナムゲルに接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのがウゲン・ワンチュクである。彼らは、「アンジューの人（アンジュキ）」に因んで「ワンチュク」を称した。アンジュキ＝アンチュク＝ワンチュクとなる。その後、パンジャブにも大英帝国の毒牙が及ぶと、一部カラシュ族は平和を求めてブータン王国を訪れた。奇しくも、ブータンにはアンジュー家と祖を同じくするアンゲロス家の子孫「安芸氏」がいた。AD1861年、カラシュ族は祖を同じくするジグメ・ナムゲルに接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのがウゲン・ワンチュクである。彼らは、「アンジューの人（アンジュキ）」に因んで「ワンチュク」を称した。アンジュキ＝アンチュク＝ワンチュクとなる。

AD1864年、奇しくも、同郷の人々の侵攻を受けたブータン王国は大英帝国と「イギリス＝ブータン戦争」を戦ったが、敗北を喫する。AD1906年、アンジュー家の末裔ワンチュク家は同郷の人々の入国を正式に承認し、AD1907年にウゲン・ワンチュクがブータン王に即位して「ブータン王国」が誕生した。AD2006年、ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクが第5代ブータン王に即位している。

■AD1907年 「ブータン王国誕生」

AD1864年、奇しくも、同郷の人々の侵攻を受けたブータン王国は大英帝国と「イギリス＝ブータン戦争」を戦ったが、敗北を喫する。AD1906年、アンジュー家の末裔ワンチュク家は同郷の人々の入国を正式に承認し、AD1907年にウゲン・ワンチュクがブータン王に即位して「ブータン王国」が誕生した。

■AD1963年 ブラッド・ピット生誕

■AD1980年 ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク生誕

AD2006年、ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクが第5代ブータン王に即位している。

◆エノク（エンケラドス）の歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「エンケラドス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヒッポリュトスは、カアングと組んで「エンケラドス」を生んだ。エンケラドスの名の由来はカアング、ヒッポリュトスの組み合わせである。カアング+ヒッポリュトス=アングリュトス=エンケラドスとなる。

■45万年前 「第1次獣人の大狩猟時代」

■45万年前 シベリアでマンモス狩りを行う

「盤古の大移動時代」に参加して中国に移り、更に「獣人の大狩猟時代」に参加してシベリアに移住したチュクウは、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。

「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■45万年前 「第2次獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「ニコラ族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したエンケラドスは、北アメリカ台地（現シアトル周辺）に居を構え、「ニコラ族」を生んだ。ニコラの名の由来はエンケラドスである。エンケラドス＝エノコラドス＝ノコラ＝ニコラとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ナゲ族誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したエンケラドスは、マレー半島に「ナゲ族」を生んだ。ナゲの名の由来はニコラである。ニコラ＝ナゲラ＝ナゲとなる。

■ 4万年前 「ギガントマキア」

■ 4万年前 「エノク誕生」

「ギガントマキア」に敗北したエンケラドスは、エジプトに移住した。この時に「エノク」が生まれた。エノクの名の由来はエンケラドスである。エンケラドス＝エヌケラドス＝エノクとなる。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「勝利の女神ニケ誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したエノクは、ギリシアに侵攻して「勝利の女神ニケ

」を生んだ。ニケの名の由来はエノクである。エノク＝エニケ＝ニケとなる。

■ 4 万年前 「クロマニヨン人の大航海時代」

■ 4 万年前 「クロマニヨン人誕生」

「クロマニヨン人の大航海時代」に参加したエノクは、地中海を出て大西洋を北上した。その時、エノク一行は一時的にヨーロッパに立ち寄った。後世になって、彼らの生活の痕跡を発見した学者たちは、彼らを「クロマニヨン人（ホモサピエンスサピエンス）」と命名した。

■ 4 万年前 「ティアワナク誕生」「ナスカ誕生」

「クロマニヨン人の大航海時代」に参加したエノクは、エノス、メトセラを連れて古代マヤを経てペルーに入植した。この時に「ティアワナク」「ナスカ」などの名が生まれた。ティアワナクの名の由来はメトセラとエノクの組み合わせであり、ナスカの名の由来はエノスとエノクの組み合わせである。メトセラ＋エノク＝メティエノク＝ティアワナクとなり、エノス＋エノク＝ノスク＝ナスカとなる。

■ 4 万年前 「モホス文明誕生」

エノクたちは、アンデスを越えてアマゾン流域に下ると、雨季になると広大な森林地帯が氾濫したアマゾン河の水底に沈むモホス平原を発見する。この神秘の平原に魅せられたエノクは、モホス平原に定住を試みることで文明の発想を得た。文明の基幹産業である農業や魚の養殖に開眼すると共に、用水路、運河、排水設備建設の必要性に気付いたのだ。それに伴って、土木・建築技術が向上し、計画的な都市建設が可能になった。

■ 3 万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3 万年前 「イエイ誕生」「ガン誕生」「ウナンガン族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエノクは、カナダ圏に留まり、トバルカインと共に、アパッ

チ族に祀られた神「イエイ（エノク）」と「ガン（トバルカイン）」を祀った。エノク＝イエイ
ノク＝イエイとなり、トバルカイン＝トバルカイン＝カイン＝ガンとなる。この連合体は、
アリューシャン列島通過の際に「ウナンガン族（エノク＋ガン）」を残している。エノク＋ガン
＝エノン＋ガン＝ウナンガンとなる。

■ 3万年前 「パイワン族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエノクは、台湾を訪れると、ヴィディエはエノクと組んで連
合体を生んだ。この時に生まれたのが「パイワン族」である。パイワンの名の由来はヴィディエ
とエノクの組み合わせである。ヴィディエ＋エノク＝ヴィエノ＝パイワンとなる。

■ 3万年前 「日子番能邇邇芸命誕生」

台湾に入植したエノクは、インドから来たヴァナラシ族と連合して「日子番能邇邇芸命」を誕生
させた。ホノニニギの名の由来はピュグマエイ、ヴァナラシとエノクの組み合わせである。ピュ
グマエイ＋ヴァナラシ＋エノク＝ピュグヴァナ＋ネノク＝ヒコホノニニギとなる。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「エノクの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ヤナ族誕生」

「天孫降臨の大航海時代」を経て南極に移住し、大地殻変動を機に「エノクの大航海時代」に参
加したエノクは、コロラド流域からカリフォルニアに移った。彼らは現地人と交わり、「ヤナ族
」を生んだ。ヤナの名の由来はエノクである。エノク＝ヤノク＝ヤナとなる。

■ 1万3千年前 「名護誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエノクは、アリューシャン列島を越えて、沖縄本島に移り、「名護（エノク）」の名を残している。エノク＝エナゴ＝ナゴ（名護）となる。

■ 1万3千年前 「メコン誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したレメクは、エノクと共にインドシナ半島に上陸した。両者は、大河のひとつに「メコン」と命名している。メコンの名の由来はレメクとエノクの組み合わせである。レメク＋エノク＝メクエノ＝メコンとなる。

■ 1万3千年前 「ナーガ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したエノクは、レメクと別れ、インドに移住した。エノクはインドに「ナーガ族」を生んだ。ナーガの名の由来はエノクであり、エノク＝エナーガ＝ナーガとなる。

■ BC 7千2百年 「神々の集団アヌンナキ誕生」

■ BC 7千2百年 「至高神エンキ誕生」

メソポタミアに移住したエノクは、メソポタミアに「至高神エンキ」を祀った。エンキの名の由来はエンケラドスである。エンケラドス＝エンキラドス＝エンキとなる。エンキは、カイナンと連合して「神々の集団アヌンナキ」を結成する。アヌンナキの名の由来はカイナンとエノクの組み合わせである。カイナン＋エノク＝イナンノク＝アヌンナキとなる。

■ BC 3 2世紀 「シュメール人の大航海時代」

■ BC 3 2世紀 「燕誕生」「斉誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したエノクは、春秋戦国時代になってから「燕（エン）」「斉（キ）」を建てて、古代中原に覇を唱えている。燕・斉（エンキ）の名の由来は至高神エ

ンキである。

■BC 21世紀 「長脛彦（前身）誕生」

ナーガ族は、現ミャンマーに移住し、シャン族と意気投合して「長脛彦」を結成した。長脛彦の名の由来はナーガとシャンの組み合わせである。ナーガ+シャン=ナガシャネ=長脛となる。

■BC 21世紀 「長脛彦の大移動時代」

■BC 1400年 「殷・商王朝誕生」

「長脛彦の大移動時代」に参加した長脛彦は、中国に移住し、夏王朝（カナン）を滅ぼした。その後、彼らは新規の王朝「殷（イン）・商（シャン）」を築いた。殷はエノク、商はシャンを由来にしている。ただ、日本時代から長脛彦に寄生していた能登族は、人身御供を開催して罪のない中国人を大量に惨殺した。

■BC 1027年 「長臈彦誕生」

「殷・商」が滅ぶる、ナーガ族は長臈彦の名を継承して日本に帰還した。長臈彦は、安日彦と同盟し、神武天皇が訪れるまで古代大和地方を治めた。

■BC 753年 「邇芸速日命誕生」

古代日本に上陸したアルメニア人は、長脛彦と合体し、「邇芸速日命（ニギハヤヒ）」の連合体を築いた。物部氏の祖と言われる邇芸速日の名の由来は、ナーガ（長脛彦）、サバエ、アメンの組み合わせである。ナーガ+サバエ+日（アメン）=ナガバエ日=ニギハヤ日=邇芸速日となる。

■BC 6世紀 「中曾根氏誕生」

その後、神武天皇の東征を機に「邇芸速日命」の連合体が崩壊すると、長脛彦は現群馬県に移住

して「中曾根」を称した。中曾根の名の由来は長脛彦である。長脛（ながすね）＝なかつね＝なかそね（中曾根）となる。

■BC4世紀 「焉耆（エンギ）誕生」

燕と斉が滅ぶと、彼らは、タリム盆地に移住し「焉耆（エンギ）」を築いた。焉耆（エンギ）の名の由来は燕と斉の組み合わせである。

■BC4世紀 「犬養氏誕生」

燕と斉が滅ぶと、彼らは、日本に上陸し、「犬養氏」を生んだ。犬養の名の由来はエノクである。エノク＝エノクイ＝犬養となる。犬養氏は、アッカド人の後裔縣氏と組んで「縣犬養氏」を称した。

■AD638年 「袁氏誕生」

焉耆がAD638年に滅亡すると、燕を由来に「袁氏」が輩出された。袁の名の由来は焉耆である。

■AD641年 「ペチェネグ族誕生」

イスラム教がヌビアに伝えられると、マクリア、アルワ、ノバティアのキリスト教国はヌビアを脱出して一旦、中央アジアに集結した。ノバティア人は、マクリア人、アルワ人とは行動を異にし、焉耆（エンギ）の末裔袁氏と組んで「ペチェネグ族」を結成した。ペチェネグの名の由来は北狄（ベイディ）と袁氏（エンギ）の祖エノクの組み合わせである。ベイディ＋エノク＝ベイチェノク＝ペチェネグとなる。ペチェネグ族は、強力な騎馬軍団としてハザール帝国、キエフ大公国、ビザンツ帝国などの名だたる強国と渡り合った。

■AD1561年 上杉謙信（長尾影虎）生誕

■AD1849年 乃木希典生誕

■ A D 1 8 5 5 年 犬養毅生誕

■ A D 1 8 5 9 年 袁世凱生誕

新生中華民国臨時総に就任している。

■ A D 1 9 1 8 年 中曾根康弘生誕

■ A D 1 9 2 1 年 長井勝一生誕 「漫画ガロ誕生」

■ A D 1 9 4 5 年 永井豪生誕

永井豪が描いたデビルマン、バイレンスジャックなどの迫りに満ちたキャラたちは、超古代、神々の時代に活躍した獣人エンケラドスの再現かもしれない。

■ A D 1 9 4 7 年 稲川淳二生誕

■ A D 1 9 4 8 年 二階堂正宏生誕

■ A D 1 9 5 0 年 翁長雄志生誕

第7代沖縄県知事に就任している。

ジェンギの歴史

◆インカ帝国（ジェンギ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ジェンギ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したワルムベは、南アフリカに移住して「カアング」「ジェンギ」を生んだ。彼らは、コイサン族のような姿をしていた。現在、「ジェンギ」の名は、南アフリカ人（コイコイ人、サン人）の神として知られている。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■45万年前 「シャン族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したジェンギは、オロクンらと共にミャンマーに上陸した。この時、「シャン族」が生まれた。シャンの名の由来はジェンギである。ジェンギ=シェンギ=シャンとなる。

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「シャンカレー族誕生」「サンガリオス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したアグリオスは、シャン族（ジェンギ）と組み、「シャンカレー族（サンガリオス）」をミャンマーに生んだ。シャンカレー、サンガリオスの名の由来はジェンギとアグリオスの組み合わせである。ジェンギ+アグリオス=ジェングリオ=シャンカレーとなり、ジェンギ+アグリオス=ジェングリオス=サンガリオスとなる。その後、サンガリオスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「サンガリオスの大移動時代」

■ 30万年前 「チャンカ族誕生」

「サンガリオスの大移動時代」に参加したサンガリオスは、現チリの地に「チャンカ族」を生んだ。チャンカの名の由来はサンガリオスである。サンガリオス=チャンガリオス=チャンカとなる。

■ 2万年前 「最終戦争ラグナロク」

■ 2万年前 「ヴォドゥンの大航海時代」

■ 2万年前 「北斗星君誕生」

「最終戦争ラグナロク」により、オーディーンがヴァルハラから現ベナン辺りに入植し、青龍（湖水地方）のディンカと組んで「北斗星君（ペイトーキンジュン）」を建設した。北斗星君の名の由来はペイトー、カアング、ジェンギの組み合わせである。ペイトー+カアング+ジェンギ=ペイトーカアングジェン=ペイトーキンジュン（北斗星君）となる。

オーディーンは、「ドロン・オドゥン」を築いた。ドロン・オドゥンの名の由来はトレ、ヴァナラシ、オーディーンの組み合わせである。これは、オーディーンが現ベナンと共に、アンダマン諸島（トレ）、ヴァナラシ（ガンジス流域）までをも支配していたことを意味する。トレ+ヴァナラシ+オーディーン=トレアナ+オディン=ドロン・オドゥンとなる。

また、オーディーンは「ヴォドゥン」とも呼ばれた。ヴォドゥンの名の由来はオーディーンである。オーディーン=オディン=ヴォドゥンとなる。ヴォドゥンは創造主であり、現ベナンでは超人的な力を持つ神とされた。

■ 2万年前 「廉貞誕生」「破軍誕生」

「ヴォドゥンの大航海時代」に参加したチャンカは、現チリを離れて現ベナンに移住した。ポルピュリオンと組んで「廉貞（リャンツェン）」を生み、ペイトーと組んで「破軍（ポジュン）」を生んだ。リャンツェンの名の由来はポルピュリオンとジェンギの組み合わせであり、ポジュンの名の由来はペイトーとジェンギの組み合わせである。ポルピュリオン+ジェンギ

=リオンジェン=リャンツェンとなり、ペイトー+ジェンギ=ペイジェン=ポジュンとなる。

■ 2 万年前 「中岳嵩山誕生」

「ヴォドゥンの大航海時代」に参加したチャンカは、南極大陸に移住し「中岳嵩山（チョンシヤン）」を築いた。チョンの名の由来はチャンカである。チャンカ=チョンカ=チョンとなる。

■ 2 万年前 「羅侯山の大航海時代」

■ 2 万年前 「宋帝王誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「宋帝王（ソンディワン）」を生んだ。ソンドイの名の由来はジェンギとヴィディエの組み合わせである。ジェンギ+ヴィディエ=シャンディ=ソンドイ（宋帝王）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「太山王誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したヴィディエは、火星に降り立ち、十王に属する「太山王（タイシャン）」を生んだ。タイシャンの名の由来はヴィディエとジェンギの組み合わせである。ヴィディエ+ジェンギ=ディエジェン=タイシャン（太山）となる。ヴィディエは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「楚江王誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したジェンギは、十王に属する「楚江王（チェジャン）」を生んだ。チェジャンの名の由来はチュクウとジェンギの組み合わせである。チュクウ+ジェンギ=チュジェン=チュジャンとなる。ジェンギは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 2 万年前 「変成山誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加したルハンガは、火星に降り立ち、十王に属する「変成山（ビアンチェン）」を築いた。ビアンチェンの名の由来はルハンガ、ジェンギの組み合わせである。ルハンガ+ジェンギ=ハンジェン=ビアンチェン（変成）となる。ルハンガは、ここに収容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「テングリの大移動時代」

■ 1万3千年前 「元辰誕生」

「テングリの大航海時代」に参加したジェンギは、アフリカを離れて長江に移住した。彼らは仲間と共に、60もの神々を生んだ。「六十元辰」と呼ばれた彼らは「元辰（ユエンチェン）」を築いた。元辰（ユエンチェン）、長江（チャンジャン）の名の由来はディンカとジェンギの組み合わせである。ディンカ+ジェンギ=イエンジェン=ユエンチェン（元辰）となり、ディンカ+ジェンギ=チャンカ+ジェング=チャンクジャン（長江）となる。

■ BC 5千年 「員僑山誕生」

火星から帰還したジェンギは、アルキュオネウスと共に「員僑（ユアンキャオ）」を築いた。ユアンキャオの名の由来はジェンギとアルキュオネウスの組み合わせである。ジェンギ+アルキュオネウス=ジェンキュオ=ユアンキャオ（員僑）となる。員僑山は中国にあるとされているが、実際にはアンデス山脈に存在した。

■ BC 5千年 「神農誕生」

火星から帰還したジェンギは、カナン（月氏）と混合し、トリツ族と共に中国方面に南下して、北狄と組んで「河姆渡文化」などを築いた。カナンはジェンギと共に「神農（シェンノン）」を生んだ。神農（シェンノン）の名の由来はジェンギとカナンの組み合わせである。ジェンギ+カナン=ジェンナン=シェンノンとなる。

■BC 5千年 「チワン族誕生」

カナン（月氏）は、古代中原に「夏王朝」を開いた。これを機に、ジェンギは神農を抜けて中原を後にした。海南島に上陸した彼らは「チワン族」となった。チワンの名の由来はジェンギである。ジェンギ＝チワンギ＝チワンとなる。

■BC 21世紀 「長脛彦の大移動時代」

■BC 1400年 「殷・商王朝誕生」

「長脛彦の大移動時代」に参加した長脛彦は、中国に移住し、夏王朝（カナン）を滅ぼした。その後、彼らは新規の王朝「殷（イン）・商（シャン）」を築いた。殷はエノク、商はシャンを由来にしている。ただ、日本時代から長脛彦に寄生していた能登族は、人身御供を開催して罪のない中国人を大量に惨殺した。

■BC 1027年 「ジュンガル誕生」

「殷・商」が滅ぶとびシャン族は、タリム盆地に移住して「ジュンガル」を築いた。ジュンガルの名の由来はシャンカレー、或いはサンガリオスである。シャンカレー＝シャンガレ＝ジュンガルとなる。

■BC 1027年 「陳誕生」「鄭誕生」「成誕生」

「殷・商」が滅ぶと、シャン族は、中国各地に拡散して「陳（チャン）」「鄭（チョン）」「成（チェン）」などの名を残した。いずれも名前の由来はジェンギである。

■BC 490年 ゼノン生誕 「エレア派誕生」

「フェニキア人の大航海時代」を機に黎族が海南島を訪れると、これを機に、一部チワン族が海南島を離れて古代ギリシアの地を踏んだ。中国人の顔をしたチワン族は、ギリシア人と混合して「ゼノン」を産んだ。ゼノンの名の由来は神農（シェンノン）である。シェンノン＝シェノン

=ゼノンとなる。BC 490年、エレア派の創始者である「ゼノン」が生まれている。

■ BC 335年 ゼノン生誕 「ストア派誕生」

BC 335年、ストア派の創始者である「ゼノン」が生まれている。

■ AD 7年 「扶南国誕生」

王氏の「新」が台頭して「前漢」が滅ぶと、一部劉氏は海南島に赴き、古の神農の子孫であるチワン族と連合した。劉氏とチワンの連合体はカンボジアに上陸して扶南国を築いた。扶南の名の由来は海南（ハイナン）である。

■ AD 189年 「公孫氏誕生」

現カンボジアから遼東半島に移住したチワン族は、月氏と組んで「公孫（ゴンスン）氏」を生んだ。公孫の名の由来はカナンとシャンの組み合わせである。カナン+シャン=カナシャン=カンシャン=ゴンスンとなる。公孫度は、後漢により遼東太守に任命され、その後、独立した。公孫淵は魏王に上洛を求められるが、反旗を翻して「燕王」を称した。だが、一族が処刑されると公孫淵は「大和人の大航海時代」に参加してブリテン島に渡った。

■ AD 474年 ゼノン、ビザンツ皇帝に即位

AD 4世紀頃、再度、ギリシアに覇を唱えることを考えたチワン族は、今回は黎族を率いてビザンツ帝国治世下のギリシアに向かった。彼らは、「東晋」の治世に海南島を発ち、地中海に進出している。中国人の顔をした黎族、チワン族はイサウリア家に自身の血統を打ち立てた。チワン族は、「ゼノン」の名を復活させた。ゼノンの名の由来は神農（シェンノン）である。シェンノン=シェノン=ゼノンとなる。

■ AD 502年 蕭衍、梁王に即位 「蕭氏誕生」

レオ1世とゼノン、両者がビザンツ帝国の王位を喪失すると、彼らはビザンツ帝国を後に東アジアに帰還した。ゼノンの一族は中国に移住し、「蕭氏（シャオ）」を生んだ。シャオの名の由来

は神農（シェンノン）である。シェンノン＝シャオノン＝シャオとなる。

■AD557年 蕭荘、梁王に即位

■AD730年 「遥輦氏誕生」

AD560年に梁が滅ぶと、蕭氏はモンゴルに移住した。蕭氏は、モンゴルに「遥輦氏（ヤオニャン）」を生んだ。ヤオニャンの名の由来はシャオとカナンの組み合わせである。シャオ+カナン＝シャオナン＝ヤオニャンとなる。遥輦氏は、大賀氏の後を継ぎ、AD906年まで契丹を治めた。

■AD1189年 「奥州藤原氏の大航海時代」

■AD1189年 「インカ人誕生」

「奥州藤原氏の大航海時代」に参加した遥輦氏は、「インカ人」を生んだ。インカの名の由来はジュンガルである。ジュンガル＝ユンガ＝インカとなる。「サンガリオスの大航海時代」から南アメリカに住んでいたチャンカ族は、祖を同じくする「インカ人」を嫌い、先祖の故地を守るため、ワルカ（野人女直ワラカ）と連合した。両者は、ケチュア族、インカ人（ジュンガル）、クスコ人（ガスコン人）の連合体「クスコ王国」と対立し、度々蜂起を繰り返した。

■AD1219年 「シェンカー誕生」

「ワールシュタットの戦い」に参加した遥輦氏は、神聖ローマ帝国治世下のドイツに移住して「シェンカー」の姓を残した。シェンカの名の由来はジュンガルである。ジュンガル＝ジュンガー＝シェンカーとなる。

■AD1292年 「ラーンナー王国誕生」

AD1222年、西遼が滅ぶと、遥輦氏は耶律氏と共に現タイに移住した。この時、彼らは共同で「ラーンナー王国」を築いた。ラーンナーの名の由来はローランとヤオニャンの組み合わせで

ある。ローラン+ヤオニャン=ランニャ=ランニャー=ランナーとなる。ランナー王国は、AD1775年まで続いた。

■AD1338年 「ランサーン王国誕生」

AD1222年、西遼が滅ぶと、遥輦氏は耶律氏と共に現ラオスに移住した。この時、彼らは共同で「ランサーン王国」を築いた。ランサーンの名の由来はローランとシャンの組み合わせである。ローラン+シャン=ランシャン=ランサーンとなる。ランサーン王国は、AD1707年まで続いた。

■AD1438年 サパ・インカ・パチャテク・クシ・ユパンキ、初代インカ皇帝に即位 「インカ帝国誕生」

インカ人の皇帝サパ・インカ・パチャテク・クシ・ユパンキが「インカ帝国」を建設した。

■AD1541年 マンコ・インカ・ユパンキ、ペルーからイングランドに移住 「マンク誕生」

AD1533年、コンキスタドールによってインカ帝国が滅亡すると、マンコ・インカ・ユパンキが初代皇帝に即位して「ビルカバンバ・インカ帝国」を建国した。マンコの名の由来はモンゴルである。モンゴル=マンゴル=マンコとなる。だが、AD1541年、マンコ・インカ・ユパンキは暗殺されたと見せかけてペルーを脱出し、遠くイングランドにまで落ち延びている。ペルー人の顔をしたマンコ・インカ・ユパンキの一行は、イギリス人と交わって「マンク」の姓を成した。マンクの名の由来はマンコである。

■AD1572年 「シュムクル誕生」

「インカ人の大航海時代」に参加したチャンカ族は、アイヌ人の子孫と共にインカから北海道に移住した。一行は、残留組のメナシクルに対抗するために連合して「シュムクル」を結成した。シュムクルの名の由来はジュンガルである。ジュンガル=ジウムガル=シュムクルとなる。AD1669年、シュムクルは奥州藤原氏の故地奪還を目的にアイヌ人を指揮して松前藩と交戦し「シャクシャインの戦い」を起こした。

■AD1608年 ジョージ・マンク生誕

マンコ・インカ・ユパンキ到着直後に息子と考えられるアンソニー・マンク、その後に、孫のトーマス・マンクが誕生している。AD1608年にはジョージ・マンクが誕生している。ジョージ・マンクは、イギリス軍人としてイギリス史に大きな足跡を残している。八十年戦争では「ラ・ロシエルの包囲戦」「ブレダ包囲戦」での勇敢な戦いで名を成した。また、スコットランドの反乱を鎮圧した「主教戦争」、アイルランドの反乱を鎮圧した「アイルランド同盟戦争」、オリバー・クロムウェルに従ってスコットランド遠征にも参加している。その後、「王政復古」に関わってチャールズ2世からアルベマール公爵などの恩賞を得た。

■AD1634年 「ジュンガル帝国誕生」

「インカ人の大航海時代」に参加したインカ人は、モンゴルに移住して「ジュンガル」の名を復活させた。AD1669年、「シャクシャインの戦い」に敗北したシュムクルは北海道から大陸に渡ってジュンガル部の地に逃亡し、後に、日本から落ち延びてきた「大坂の陣」の残党カラクラ・タイシャと連合し、「ジュンガル帝国」を築くことになる。

■AD1688年 「ムンク誕生」

イングランドの名将ジョージ・マンクの子孫クリストファー・マンクが死去と見せかけてイギリスを離れ、東方に旅立った。まず、ノルウェーに上陸した一行は「ムンク」の名を残した。ムンクからは、「ノルウェー史」を著したペーテル・アンドレアス・ムンク、「叫び」で知られる画家エドゥアルド・ムンクが輩出されている。

■AD1707年 「知念氏誕生」

ランサーン王国が滅んで3つに分離すると、遥輦氏は沖縄諸島に移住して「知念氏」を生んだ。知念の名の由来はゼノンである。ゼノン=ジェノン=知念となる。

■AD1713年 「チャンパーサック王国誕生」

ランサーン王国が分裂すると、遥輦氏は「チャンパーサック王国」を築いた。チャンパーサッ

クはAD1946年まで続いた。

■AD17??年 「ヴィエンチャン王国誕生」

ランサーン王国が分裂すると、遥輦氏は「ヴィエンチャン王国」を築いた。ヴィエンチャンはAD19世紀まで続いた。

■AD1742年 「小刀会誕生」

知念氏は、中国・現江蘇省に移住し、琉球空手をベースに「小刀会（シャオダオ）」を結成した。シャオダオの名の由来はシャンとヴィディエの組み合わせである。シャン+ヴィディエ=シャノディエ=シャオダオとなる。小刀会は、AD1853年に「漢大明統兵大元帥」を称して「廈門小刀会蜂起」を指揮した。同年、小刀会は広東の兵を指揮して「上海小刀会蜂起」を実施した。

■AD1748年 ナーシル・ジャング、第2代ニザーム王に即位

AD1748年、ナーシル・ジャングが第2代ニザーム王に即位している。ジャングの名の由来はジュンガルである。ジュンガル=ジュンガ=ジャングとなる。

■AD1750年 ムザッファル・ジャング、第3代ニザーム王に即位

■AD1751年 サラーバト・ジャング、第4代ニザーム王に即位

■AD1756年 「マンギト朝誕生」

イングランドの名将ジョージ・マンクの子孫クリストファー・マンクが死去と見せかけてイギリスを離れ、東方に旅立った。マンクの一行は中央アジアに移住し、「マンクの人」を意味する「マンギト」を称した。AD1756年、ムハンマド・ラヒームがマンギト朝初代アミールに即位して、ブハラ・ハン国に「マンギト朝」を開いている。

■AD1815年 「拝上帝会誕生」

「己亥教獄」が始まる一年前に朝鮮半島に生まれた洪秀全は33歳となっていた。洪秀全は、白蓮社の創始者（ペー族、シャン族）と「拝上帝会（バイシャン）」を組織し、AD1851年には清に反旗を翻し、「太平天国」を建国した。拝上（バイシャン）の名の由来はボイイ（ペー）とシャンの組み合わせである。ボイイ+シャン=ボイシャン=バイシャンとなる。

■AD1863年 エドゥアルド・ムンク生誕

■AD1920年 ラヴィ・シャンカール生誕

■AD1948年 ルドルフ・シェンカー生誕 「スコーピオンズ誕生」

■AD1954年 ジャッキー・チェン（成龍）生誕

■AD1955年 マイケル・シェンカー生誕 「マイケル・シェンカー・グループ誕生」

■AD1991年 セルゲイ・チェレシチャンコ、初代大統領に就任 「カザフスタン共和国誕生」

AD1469年、ケレイ・ハンが初代王に即位して「カザフ・ハン国」を建国した。その後、AD1991年には、セルゲイ・チェレシチャンコが初代カザフスタン大統領に就任して「カザフスタン共和国」が建てられた。チュレシチャンコの名の由来はツァリーツィンとチャンカの組み合わせである。ツァリーツィン+チャンカ=ツァリーツチャンカ=チュレシチャンコとなる。

ワルムベの歴史

◆ワルムベの歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■200万年前 「ワルムベ誕生」

「第1次エスの大移動時代」によってエスが湖水地方に入植すると、クウォスが生まれ、そこから各々が各々の獲物に特化することで50cmから4mに至るバラエティ豊かな人類が揃った。「ワルムベ」の身長は160cmで、ミャンマー少数民族の姿をしていた。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「オロクン誕生」「オロルン誕生」「カアング誕生」「ジェンギ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したワルムベは、現ナイジェリアに「オロクン」「オロルン」を生み、南アフリカに「カアング」「ジェンギ」を生んだ。カアング、ジェンギは南アフリカに流れ込む寒流によって特徴的な容貌を得た。

■45万年前 「オロクンの大移動時代」

■45万年前 「モブワ族誕生」

「オロクンの大移動時代」に参加したワルムベは、現ミャンマーに入植し「モブワ族」を生んだ。モブワの名の由来はワルムベである。ワルムベ=ワルムベエ=ムベエ=モブワとなる。

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「パッラース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したワルムベは、レザと組んで「パッラース」を生んだ。パッラースの名の由来はワルムベ、レザの組み合わせである。ワルムベ+レザ+ワルレザ=ワッレーザ=パッラースとなる。

■ 7万年前 「マハラレル誕生」「マハラエル誕生」

モブワ族は、ブリアレオースと組んだ。この時に「マハラレル（マハラエル）」が誕生した。マハラエルの名の由来はモブワとブリアレオースの組み合わせである。モブワ+ブリアレオース=モブリアレ=マハラエル（マハラレル）となる。マハラエルとマハラレルとは不可分の存在である。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 3万年前 「ヘイムダル誕生」

ダニ族のインチキ宗教に入信させられたマハラエルは、ダニ族に率いられてヴァルハラ王国に入植した。この時に「ヘイムダル」が生まれた。ヘイムダルの名の由来はモブワとメトセラの組み合わせである。モブワ+メーティス+プレークサウラー=ブワメテラー=ヘイムダルとなる。

■ 3万年前 「ヴァン神族誕生」「フレイ誕生」「フレイヤ誕生」

マハラエルは、ダニ族と共にヴァルハラ王国からミドガルド王国に入植すると「ヴァン神族」を生んだ。ヴァンの名の由来はモブワとダニの組み合わせである。モブワ+ダニ=ブワニ=ヴァンとなる。また、マハラエルは、「フレイ」「フレイヤ」を生んだ。フレイ、フレイヤの名の由来はマハラエルである。マハラエル=マフレイエル=フレイヤ=フレイとなる。

■ 3万年前 「ヘル誕生」「フェンリル誕生」

マハラエルは、ダニ族と組むと「ヘル」「フェンリル」を生み、ヴァルハラ王国に侵攻した。ヘルの名の由来はマハラエルであり、フェンリルの名の由来はヴァンとマハラエルの組み合わせで

ある。マハラエル＝マヘルエル＝ヘルとなり、ヴァン＋マハラエル＝ヴァンラエル＝フェンリルとなる。

■ 2万年前 「最終戦争ラグナロク」

■ 2万年前 「ユグドラシルの大航海時代」

■ 2万年前 「出羽国誕生」

最終戦争ラグナロクにより、ミドガルド王国はネバダ砂漠と化した。この時、「ユグドラシルの大航海時代」に参加したマハラエルは、東北地方に入植して「出羽国」の建国に参加した。

■ B C 3 2 世紀 「モーゼスの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ B C 3 2 世紀 「フィン人誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加してチベットに移住し、その後「ヨシュアの大移動時代」に参加したマハラエルは、ヨーロッパに移住した。彼らは、更に北上し、現フィンランドに入植した。この時、マベエは「フィン人」を生んだ。フィンの名の由来はヴァン神族である。ヴァン＝ファン＝フィンとなる。

■ B C 3 0 世紀 「マプングプエ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したカブール人は、マハラエルと共に東アフリカに移住した。カブール人は、マハラエルと共に現ジンバブエに入植した。この時に「マプングプエ」が生まれた。マプングプエの名の由来はモブワとキブウカの組み合わせである。モブワ＋キブウカ＝モブワキブウ＝モブアキブエ＝マプングプエとなる。

■ B C 3 0 世紀 「マフィア島誕生」

カブール人が現ジンバブエからマダガスカル島に移住すると、マハラエルは現ジンバブエから「マフィア島」に入植した。マフィアの名の由来はマベエである。マベエ=マヘエ=マフィアとなる。

■ B C 6 世紀 「フィン人の大航海時代」

■ B C 6 世紀 「ホン族誕生」

オビ川流域に入植した彼らは、後に南下してインダス流域に入植する。この時に「ホン族」が生まれた。ホンの名の由来はフィンである。フィン=フォン=ホンとなる。ホン族は、後にラージプートに属している。

■ B C 6 世紀 「洪氏誕生」

ホン族は、インドから中国に赴いて「洪氏（ホン）」の名を成している。ホンの名の由来はフィンである。フィン=フォン=ホンとなる。

■ B C 3 世紀 「サータヴァーハナ朝誕生」

サートヴァタ族は、ホン族と連合して「サータヴァーハナ朝」を開いた。サータヴァーハナの名の由来はサートヴァタ+ホン=サートヴァホン=サータヴァーハナとなる。サータヴァーハナ朝は、アーンドラ朝と共にインドを共同統治した。

■ A D 9 3 年 「フン族誕生」

北匈奴が滅ぶと、黄氏は匈奴を解散して「フン族」として中央アジアに進出を果たす。フンの名の由来は黄（ファン）である。ファン=ハン=フンとなる。フン族には、「サータヴァーハナ朝」のサートヴァタ族（サトゥルヌス）とホン族も加わっている。フン族は、アラン族と共に東ゴート族を撃破したため、東ゴート族は安全なローマ領内に避難した。これを機に「ゲルマン人の

大移動」が始まる。この強靱な騎馬民族に魅了されたアッチラ（サトゥルヌス）は、サートヴァタ族の力を借りてフン族を完全な支配下に置いた。

■AD238年 「莫護跋誕生」

マベエの系統から莫護跋（モフバ）が輩出された。モフバの名の由来はマベエとポエニの組み合わせである。マベエ+ポエニ=マベエポエ=モフバとなる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 「ウォータース誕生」

「大和人の大航海時代」に参加してブリテン島に上陸した洪氏は、現地人と混合して「ウォータース」の名を生んだ。ウォータースの名の由来は洪である。

■AD1094年 「マプングプエの大航海時代」

■AD1094年 「マプングプエ（後身）誕生」

AD1094年、カペー朝のフィリップ1世は離婚・再婚を機にリヨン司教に破門を通告される。これを機に、フィリップ1世は子息のアンリ、シャルル、ウスタシーと関連氏族を引き連れてフランスを離れた。このカペー家の一団に、ノルマン朝の成立を機にイングランドを後にしたマゴンサエテ家（天孫族）が合流した。一行は、先祖の故地であるマプングプエを目指した。

■AD1220年 「マプングプエ王国誕生」

AD1220年に「マプングプエ王国」を建設している。この王国の成立には、一部カペー家とマゴンサエテ家の片割れ「天孫族（マゴン）」が関与している。

■AD1年 「三船氏誕生」

マプングプエ王国が滅び、ジンバブエ王国が始まると、カペー家の残党はジンバブエを離れ、日本に移住した。この時に「三船氏」が生まれた。三船の名の由来はマプンである。マプン=マブネ=三船となる。

■AD1305年 「山本氏誕生」「松本氏誕生」など

賀茂氏（カーマルーパ）に同行したホン族は、インド各地から集合し、集団で日本に向かった。インド人の顔をしたホン族は日本各地に赴いて現地人と混合した。「山本」の名の由来は「ヒマラヤ（山）のホン（本）」、松本の名の由来は「マツヤ（松）のホン（本）」、坂本・塚本の名の由来は「サカ（坂・塚）のホン（本）」、岡本は「ヴァカタカ（岡）のホン（本）」、橋本・藤本の名の由来は「ホージャ（橋・藤）のホン（本）」である。

■AD1553年 「ウォータースの大航海時代」

■AD1553年 「洪門誕生」

ジョン・ゲイツは、イギリス人ウォータースの一族と共にイングランドを脱出した。ゲイツは、アメン神官団の子孫、門氏（メン）の子孫である。ジョン・ゲイツは、ノーザンバー侯と共にジェイン・グレイを女王に擁立したカドでメアリーに処刑された。しかし、写真も無い当時は何とかごまかして逃亡することも可能だった。死んだと見せかけてイングランドを脱出したジョン・ゲイツは、自身の一族とウォータースの一族を率いて太平洋を渡り、先祖の故地中国に辿り着いた。

イギリス人の顔をした彼らは中国人と混合して「洪」と「門」の名を復活させた。ウォータースとゲイツは共同で秘密結社「洪門（ホンメン）」を結成した。洪門の名の由来はウォータース（洪氏）とゲイツ（門氏）の連合を意味している。洪門は、まず李氏朝鮮の背後にいた朝鮮儒教士林派の支配を覆そうと、AD1733年に朝鮮半島で全羅道、平安道で農民蜂起を指揮した。次に、洪門はキリスト教を朝鮮半島に広めようと画策した。

■AD1776年 「ミニッツメン誕生」

朝鮮半島にキリスト教を普及しようと活動していた頃、一部洪門のメンバーが中国からアメリカ合衆国に移住して「アメリカ独立戦争」に関与した。洪門からは、大陸軍将軍ホレイシオ・ゲ

イツ、「ミニッツメン」に加わったダニエル・ウォーターズが輩出されている。その後、アメリカ合衆国の独立が果たされると、両者は一族を率いて再度、中国に帰還している。韓国人の強いアメリカ志向は、この「アメリカ独立戦争」を戦った、という記憶に起因しているのかもしれない。

■AD1811年 「洪景来の乱」

アメリカ合衆国から朝鮮半島に帰還した洪氏は、李氏朝鮮を支配する士林派を排除するべく、早速、キリスト教の布教を始めた。だが、このキリスト教の動きを嫌った士林派は、李氏朝鮮に命じてAD1791年に大規模なカトリック弾圧を実施した。これが「辛亥邪獄」である。更に、AD1801年に「辛酉教獄」を実施したが、この士林派の無慈悲な行為に対する答えとして、洪氏は、AD1811年に「洪景来の乱」を指揮した。

■AD1811年 「己亥教獄」

AD1815年～AD1839年にかけて断続的に起きた「己亥教獄」を機に、洪氏は、朝鮮人キリスト教徒を率いて、ついに朝鮮半島を脱出した。長江水系に侵入した洪氏の一行は、広西省辺りに拠点を設け、キリスト教の布教を開始した。

■AD1836年 坂本竜馬生誕

■AD1851年 「太平天国の乱」

AD1815年、「己亥教獄」が始まる一年前に朝鮮半島に生まれた洪秀全は33歳となっていた。李氏朝鮮によるキリスト教迫害を逃れ、長江水系に避難していた洪秀全は、「拝上帝会」を組織した。彼は、AD1851年には清に反旗を翻し、「太平天国」を建国した。この時に、「アメリカ独立戦争」に関与したアメリカ軍将軍ホレイシオ・ゲイツ、「ミニッツメン」のダニエル・ウォーターズなどのアメリカ帰還組の子孫が「太平天国」に参加している。

「第2次大覚醒」を指揮したバートン・ストーンなどもアメリカ合衆国を見限って中国を訪れ、太平天国に参加した。太平天国の指導者、楊秀清、石達聞もイギリス、またはアメリカから来たウィロウヤストーンを称する人々の子孫である。また、オーガスタス・リンドレーという生粋のイギリス人兵士も「太平天国」に参加した。リンドレー(LINDLEY)の名は陸氏(LAND)と李氏(LEE)の組み合わせだと考えられる。つまり、リンドレーも自分の出自を理解

した上で太平天国の軍に参加していた。

■AD1864年 「太平天国滅亡」

AD1853年、太平天国は南京を占領して首都に定め、勢いに乗っていたが、AD1864年、太平天国は清軍に包囲され、洪秀全は餓死している。しかし、洪秀全は死んだと見せかけて長江水系を脱出し、無事に朝鮮半島に帰還した。

■AD1909年 松本清張生誕

■AD1918年 橋本忍生誕

■AD1920年 三船敏郎生誕

■AD1930年 洪震、政党を結成 「韓国独立党誕生」

長江を逃れて朝鮮半島に舞い戻った彼らは、改めてキリスト教の布教に努めるが、李氏朝鮮によるカトリック弾圧「丙寅教獄」が起きた。韓国は長老派の国であるが、その原因は「第2次大覚醒」を指揮したバートン・ストーンの子孫が「太平天国の乱」失敗後に朝鮮半島に渡ったからだ。その後、洪秀全の子孫、洪震はAD1930年に「韓国独立党」を設立している。

■AD1945年 洪震、政党を結成 「新韓民主党誕生」

洪震は、AD1945年には「新韓民主党」を結成している。

■AD1932年 松本俊夫生誕

■AD1933年 藤子 f 不二雄（藤本弘）生誕

■AD1938年 松本零士生誕

■AD1946年 ジョン・ウォータース生誕

■AD1952年 坂本龍一生誕 「YMO誕生」

■AD1956年 山本政志生誕

■AD1960年 塚本晋也生誕

■AD1961年 滝本晃司生誕 「たま誕生」

■AD1963年 松本人志生誕 「ダウタウン誕生」

■AD1965年 hide (松本秀人) 生誕

◆エラム (ワルムベ) の歴史

■BC7千年 「エラム誕生」

「アヌンナキの大航海時代」の参加者がバルト海に到着すると、マハラエルはアイルランドからスカンジナビアに渡った。この時に、スカンジナビア半島に「エラム」「アラム」を生んだ。エラム、アラムの名の由来はワルムベである。ワルムベ＝ワルム＝アラム＝エラムとなる。アラムは、ブリアレオース (バロール) が、エラムはワルムベ (マッハ) が取った。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「エリュミア族誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したエラムは、メソポタミアへの途上、シチリア島に移住し、「エリュミア人」を生んだ。エラム＝エラミア＝エリュミアとなる。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC 32世紀 「エラム王国誕生」

「ソドムとゴモラ」の惨劇を耳にすると、エリュミア族はシチリアを発ち、ソマリアに向かった。その後、エリュミア族は最後のオリジナル人類ハダメと同盟し、メソポタミアに上陸した。壊滅した故地を後に、シュメール人は東西に旅立ったため、シュメールの諸都市には人影がなかった。エリュミア族は、主を失ったスーサを篡奪して首都に据えて「エラム王国」を建設した。

■BC 539年 「ハド라마ウト王国誕生」

エラム王国が滅亡すると、エラム人とハダメの連合体はアラビア半島南部に移住して「ハド라마ウト王国」を建国した。ハド라마ウトの名の由来はハダメ、エラムとメソポタミアの太陽神ウトウの組み合わせである。ハタミ＋エラム＋ウトウ＝ハタエラムウト＝ハド라마ウトとなる。

■BC 539年 「中山国誕生」

東方に向かったエラム人は、春秋戦国時代真っ盛りの中国大陸に上陸して「中山国」を建てた。中山の名の由来はエラム王国の首都スーサ（シュシャン）である。シュシャン＝チュウシャン＝中山となる。

■AD 3世紀 「大和人の大航海時代」

■ B C 2 9 6 年 「ワルメイ川誕生」

中山国が趙の攻撃によって滅ぶと、エラム人、ハダメ族は「大和人の大航海時代」に参加して太平洋を横断して古代ペルーに移住した。彼らは拠点である河川に「ワルメイ」と命名した。ワルメイの名の由来はエラムとハダメの組み合わせである。エラム+ハダメ=エラメ=ワルメイとなる。エラム人、ハダメ族は、後にペルーを訪れるマオリ族と連合して「ワリ帝国」を建設する。

■ A D 1 1 世紀 「ペルー人の大航海時代」

■ A D 1 1 世紀 「有馬氏誕生」

「鹿島神社」や望月氏、木曾氏、三木氏、知久氏、根津氏を生んだ「ペルー人の大航海時代」とは別に、エラム人、ハタミ人、マオリ族が敢行した、もうひとつの「ペルー人の大航海時代」が、これである。ペルー人の顔をした一行は日本人と混合した。エラム人は「有馬氏」を称し、「波多美氏」を称したハタミ人、「毛利氏」を称したマオリ族と共に北九州に向かった。エラム人は平直澄に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に「有馬氏」が生まれた。有馬の名の由来はエラムである。エラム=エラマ=有馬となる。

■ A D 1 4 8 3 年 有馬晴純生誕

■ A D 1 5 年 大村純忠生誕

大村純忠は有馬晴純と大村純伊の娘の次男であるが、母方の大村家に養子に出た。有馬氏は浄土真宗のことを、弱者を道具化する邪教として憎んでいたが、大村純忠もその血筋に違わず、キリシタンに改宗した後は、領内の寺社を破壊し、先祖の墓所も打ち壊した。領民にも改宗を強要し、日本仏教の僧侶、神道の神官や、キリスト教に改宗しない領民を殺害した。有馬氏は、浄土真宗に代表する日本仏教が、人類にとってどれだけ有害なのかを知っていた。A D 1 5 8 3 年、純忠は、長崎港周辺を教会領としてイエズス会に寄進した。

■ A D 1 5 年 大村喜前生誕

しかし、浄土真宗の信者（医者、料理人、侍女）に囲まれた生活を送っていた純忠は咽頭癌、肺結核を患い、侍女（浄土真宗信者）に嫌がらせも受けていた。その後、純忠の子、洗礼を受けた大村喜前は、禁教令を受けてパテレンを追放し、キリシタンを迫害する側に回った。その後、AD1616年に喜前は迫害を恨んだキリシタンによって毒殺されたと伝えられている。しかし、実際には喜前は死去と見せかけて摂津国に逃亡した。

■AD1567年 有馬晴信生誕

■AD1586年 有馬直純生誕

■AD1616年 「大塩氏誕生」

摂津国に亡命した喜前は、隠れキリシタンを意味する「オラシヨ」を由来に「大塩」を称した。オラシヨ＝オアシヨ＝大塩となる。また、喜前の子、純頼もキリシタンを弾圧したために毒殺されたと伝えられているが、実際には、大村純頼は喜前の後を追ひ、AD1619年、摂津国に移住して大塩家の仲間入りをしている。更に、純頼の子であり子が無いまま33歳で早世したとされる大村純信も、父や祖父と同じように摂津国に移住し、AD1650年に大塩家に加わった。

■AD1637年 「島原の乱」

AD1612年、有馬晴信は「岡本大八事件」の罠にはまり、死罪を宣告されるが、有馬直純の計らいで危機を脱出した。晴信は死んだと見せかけて8歳の息子フランシスコ、6歳のマティアスを連れて福建に潜伏する。当時、有馬晴信は台湾に出兵するなど力をつけたため、浄土真宗に目を付けられていた。有馬晴信は、キリシタン迫害を恐れて日本を脱出した高山、小西、大村、黒田などのキリシタン大名と連合し、キリシタン連合による大谷に対する蜂起を準備した。

32歳になった晴信の子フランシスコが指揮を執ると、彼らは、架空の少年「天草四郎」を頭に据えてキリシタン農民を指揮下に蜂起した。この蜂起には、高山、小西、大村、黒田などの元キリシタン大名、イエズス会、福建海賊、松浦党なども加わった。プロの戦士が参加した大規模な反乱軍は、徳川幕府や大谷を驚かせた。反乱軍は、仏閣神社を焼き払い、日本仏教の信者を虐殺した。しかし、残念ながら島原の乱は鎮圧されてしまう。だが、生き延びた有馬氏は、先祖のエラム人が続べたハドラマー時代の故地アラビア半島に帰還し、「ワッハーブ派」を作ってサウジアラビア王国の国教とした。

■AD1702年 ムハンマド・イブン・ワッハーブ生誕 「ワッハーブ派誕生」

有馬晴信の子、「島原の乱」を指揮した有馬フランシスコの子孫であるムハンマド・イブン・ワッハーブがアラビア半島に誕生した。ワッハーブの名の由来はヤハウエである。ヤハウエ=アッハーヴェ=ワッハーブとなる。AD1745年、ムハンマド・イブン・ワッハーブはナジュドにイスラム改革運動を起こし、聖剣をサウード家に授けて盟約を結んでいる。

■AD1837年 「大塩平八郎の乱」

大塩平八郎は正義感が強い与力として数々の汚職を暴いたが、その度に、人民を道具のように扱う邪教、浄土真宗の悪意を痛感した。そのため大塩平八郎も、「島原の乱」を起こした有馬晴信やキリシタンに改宗して寺社・仏閣を破壊した大村純忠と同様、日本仏教を掌握していた浄土真宗殲滅のために蜂起した。平八郎は、「天保の大飢饉」が人為的に作られた浄土真宗による陰謀だということを見抜いていた。また、飢饉を口実に大谷家が農民一揆を指揮することも分かっていた。そのため、大塩平八郎は浄土真宗が指揮する一揆と戦うため、与力同心の門人に砲術を中心にした軍事訓練を施した。

しかし、浄土真宗の信者は犬の糞のようにどこにでもいるもので、同心の門人（浄土真宗信徒）が大坂町奉行所に密告したため、蜂起は当日に鎮圧された。その後、大塩平八郎は自決を装い、中国人・朝鮮人キリスト教徒が清に対して蜂起を計画している旨を耳に挟み、長江水系に忍び込んで太平天国に参加した。

◆カンボジア（ワルムベ）の歴史

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ランブダ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したヴィディエは、ワルムベと共に古代オリエントに移住し、フェニキア文字のひとつ「ランブダ」を生んだ。ランブダの由来はワルムベとヴィディエの組み合わせである。ワルムベ+ヴィディエ=ルムディエ=ランブダとなる。

■BC1200年 「カンボジャ人誕生」

「海の民」の時代になり、海の民がヒッタイト人、トロイア人をイランに導くと、ベーシュタード王国が建てられた。この時に同行したフェニキア人、ヴィディエ・ワルムベ（ランブダ）は「カンボジャ人」を生んだ。カンボジャの名の由来はフェニキアとランブダの組み合わせである。フェニキア+ランブダ=キアンブダ=カンボジャとなる。

■BC1200年 フージャン、ベーシュタード王に即位 「フージャン人誕生」

カンボージャ人からは、後に「フージャン人」が輩出されている。フージャンの名の由来はカンボージャである。カンボージャ=カンボージャン=フージャンとなる。フージャンからは、ベーシュタード王に即位するフージャンが輩出されている。

■BC11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「福建誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したフージャン人は福建（フージャン）に根付いた。福建人は「福建王国」を建て、アマゾン由来に「媽祖（マソ）」を祀った。媽祖は航海安全守護神として信奉され、華僑はこの信仰を携えて世界各地に移住している。この系統からは胡錦濤が輩出されている。

■BC329年 「烏孫誕生」「単于誕生」

BC329年に楚の家臣団が分裂すると、キンメリア人の系統の羌族は、黄氏と福建人を率いてモンゴルに帰還した。フージャン人は「単于（ゼンウ）」を称した。単于の名の由来はフージャンをひっくり返したジャンフーである。ジャンフー=ジャンウ=単于となる。一方、一部フージャン人はタリム盆地に赴いて「烏孫（ウースン）」を築いた。

ウースンの名の由来はフージャンである。フージャン=ウーシャン=ウースンとなる。こうして、福建人の系統が単于として匈奴の王位を代々継承した。匈奴は、非常に凶暴な面も持ち合わせていたが、これは人喰い人種タナトスの系統に連なる田氏、或いは人身御供の種族である能登族

の血筋の者が匈奴の支配層に深く侵入していたことを示す。

■ B C 5 7 年 「新羅誕生」

神戸から朝鮮半島に移住したカンボージャ人は、朝鮮半島に入植し、「全羅道（チョンラ）」を築いた。更に、朴氏やチュルク族と連合した。この時に新羅（シラギ、シンラ）が生まれた。チョンラとシンラの名の由来はキャンとワルムベの組み合わせである。キャラ+ワルムベ=キャンル=チョンラ=シンラとなる。日本ではチュルクに由来して新羅（シラギ）と呼ばれた。そして、新羅誕生と同時に朴氏王朝が開かれた。

■ A D 2 6 2 年 「真蠟誕生」「カンボジア王国誕生」

A D 2 6 2 年、金氏が新羅を掌握すると、カンボージャ人は朝鮮半島を後に、インドシナ半島に移住した。彼らは、カンボジアに上陸して「真蠟（チャンラ）」を築いた。この時に初めて当地は「カンボジア」と呼ばれた。チャンラの名の由来はチョンラ（全羅道）であり、カンボジアの名の由来はカンボージャである。チョンラ（全羅）=チャンラ（真蠟）となる。

■ A D 5 8 1 年 「高橋氏誕生」「富樫氏誕生」

烏孫は、大夏と共に、黒龍江からオホーツク海に出て南下し、日本に上陸した。烏孫（ウースン）は大夏（ダキア）と連合して「高橋」「富樫」の名を成した。高橋、富樫の名の由来はダキアとフージャンの組み合わせである。ダキア（高）+フージャン（橋）=高橋となり、ダキア（トガ）フージャン（ジャ）=トガジャ=富樫となる。その後、大夏は「高村」「高木」など「高」が付く姓を多く生み、烏孫は「橋田」「橋野」「石橋」など「橋」が付く姓を多く生んだ。また、富樫氏からは「富田」「富山」「富永」など「富」が付く姓が多く生まれた。

■ A D 6 1 0 年 「真蠟国誕生」

A D 5 5 0 年頃に劉氏、海南島民がカンボジアに扶南国を建てると、真蠟は隷属した。しかし、数十年ぶりに真蠟は独立を勝ち取った。

■ A D 7 2 7 年 「ウイグル人の大航海時代」

■AD727年 「キエフ（前身）誕生」

AD675年、新羅人は、金氏が勢力を伸張して「統一新羅」を完成させると、朝鮮半島を出てモンゴルに移住した。「ウイグル人の大航海時代」に参加した新羅人は、北極海の航行を経てバルト海に到達すると、スウェード人、ワリアギ、ルス人、リューリクと組んだ。

■AD778年 「シャイレンドラ朝誕生」

更に、AD713年に真蠟国が分裂すると、一部はカンボジアからジャワ島に移住し、新羅人に合流した。真蠟人は、モンゴル時代の仲間、アラン人、タタール人と共に「シャイレンドラ朝」を開いた。シャイレンドラの名の由来はチャンラ、アラン、タタールの組み合わせである。チャンラ+アラン+タタール=チャアランタール=シャイレンドラとなる。その後、AD802年に真蠟国が滅び、AD998年に新羅が滅ぶと、カンボジアの真蠟人、朝鮮半島の新羅人がシャイレンドラ朝に参加した。

■AD832年 「ジャライル族誕生」

シャイレンドラ朝が滅ぶと、シャイレンドラ人はモンゴルに帰還した。真蠟人・新羅人は、現地人と混合して「ジャライル」を生んだ。ジャライルの名の由来はキャラとワルムベの組み合わせである。キャラ+ワルムベ=キャラワラ=キャラアラ=ジャライルとなる。

■AD862年 「キエフ公国誕生」

リューリクはモンゴル人（柔然/ローラン）であり、スウェード人はインド人（チーティ王国）であり、ルス人はマヤ人（セロス）であり、ワリアギはアラビア人（ナパタ王国）であった。この国際的な連合体は、リューリクを指揮者にスウェード人傭兵の力でノヴゴロドを支配下に置いた。同時に、リューリクは「リューリク朝」を開き、ロシアの建国者となった。ロシア人の母体人種は、は宇宙人（科学の種族トバルカイン）である。

ロシアの名の由来はトゥルシア人の末裔「ルス」である。後にワリアギがキエフを占領し、首都に設定している。キエフの名の由来はキャラとヴィディエの組み合わせである。キャラ+ヴィディエ=キャヴィ=キエフとなる。AD913年にはイーゴリ1世が初代キエフ大公に就任して「キエフ大公国」を築いている。

■AD1025年 「武田氏誕生」

チョーラ人がシュリーヴィジャヤを攻めると、一部カンボジア人はスマトラを後に東西に新天地を求めて旅立った。東方組は日本に上陸し、河内源氏の源清光に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「武田氏」の祖、武田信義である。武田の名の由来は、カンボジアの由来と同じく、フェニキア文字のひとつランブダである。ランブダ=ブダ（武田）=武田（たけだ）となる。

■AD1180年 「パタン王国誕生」

「富士川の戦い」で源頼朝に協力したにも拘らず、武田氏の勢力台頭を懸念した頼朝は武田信義を失脚させて一族に粛清を加えた。これにより多くの兄弟、子息が死に追いやられた。これを機に、五男信光を除いた武田信義の一族は、日本を離れて遠くネパールに移住した。彼らは、北インドを征服して「パタン王国」を築いた。このパタン王国は、後のブータン王国の前身でもある。パタンの名の由来は武田の音読み「ブダ」である。ブダ=ブダン=パタンとなる。

■AD1290年 「芝山氏誕生」「高山氏誕生」

キルジ王国が成立すると、「パタン王国」を築いた武田氏の血統は、ネパールを離れて日本に帰還した。ネパール人の顔をした彼らは日本人と混合して「芝山」「高山」の姓を形成した。芝山の名の由来は「シヴァの山」、高山の名の由来は「高い山」である。これらの山は、いずれも「ヒマラヤ」のことを指している。

■AD1521年 武田信玄生誕

■AD1552年 高山右近生誕

■AD1600年 「ブータン王国誕生」「ドゥク・カギユ派誕生」

信玄亡き後、武田氏が織田氏に敗れると、武田氏は他の清和源氏の残党と共に戦国時代の日本を

後にスリランカに逃れた。清和源氏の残党はキャンディ王国を開くが、単独で動いた武田氏は一部安芸氏と共にスリランカを去ってインドに上陸した。その後、両者は共に現ブータンに赴いている。「ブータン」の名の由来は武田（ブダ）である。ブダ＝ブーダ＝ブータンとなる。武田氏・アンコール人は「カギユ派」に学び、始祖ナムゲルが「ドゥク・カギユ派」を創始する。ナムゲルの名の由来はアンコールであり、ドゥクの名の由来は武田である。

■AD1941年 芝山努生誕

■AD1949年 武田鉄矢生誕 「海援隊誕生」

ワルムベの歴史（パッラース）

◆ホルス（パッラース）の歴史

■ 45万年前 「盤古の大移動時代」

■ 45万年前 「パッラース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したワルムベは、レザと組んで「パッラース」を生んだ。パッラースの名の由来はワルムベ、レザの組み合わせである。ワルムベ+レザ=ワルーザ=パッラースとなる。

■ 45万年前 「ヒッポリュトス誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したヴィディエは、パッラース、クリュテイオスと組んで「ヒッポリュトス」を生んだ。ヒッポリュトスの名の由来はヴィディエ、パッラース、クリュテイオスの組み合わせである。ヴィディエ+パッラース+クリュテイオス=ヴィパッラーテイオス=フィパラテイオス=ヒッポリュトスとなる。

■ 45万年前 「ポルピュリオン誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したパッラースは、ヒッポリュトス、ウェネと組んで「ポルピュリオン」を生んだ。ポルピュリオンの名の由来はパッラース、ヒッポリュトス、ウェネの組み合わせである。パッラース+ヒッポリュトス+ウェネ=パッラーポリュウェネ=ポルピュリオンとなる。

■ 40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■ 40万年前 「パルース族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したパッラースは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、台地（現

シアトル付近)に居を構えた。パッラースは「パルース族」を称した。パルースの名の由来はパッラースである。パッラース=パラース=パルースとなる。

■ 35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ペルセウス(ペルセーイス)誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したミマースは、パッラースや台湾から来たツオウ族と共に、オーストラリアに「ペルセウス(ペルセーイス)」を生んだ。ペルセウスの名の由来はパッラース、ツオウ、ムシシ(ミマース)の組み合わせである。パッラース+ツオウ+ムシシ=パッラツオウシ=パラソウシ=ペルセウスとなる。

■ 30万年前 「ヘルモス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したパッラースは、ミマースと組んで、オーストラリアに「ヘルモス」を生んだ。ヘルモスの名の由来はパッラース、ミマースの組み合わせである。パッラース+ミマース=パッラマース=パラマス=ヘルモスとなる。その後、ヘルモスは河川の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「サイシャット族(ヘラクレス)誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセウスは、台湾に上陸してクリュセーイスと共に合体部族を生んだ。この合体部族の誕生に参加したのはペルセーイス側からはパッラース(ヴィディエ+レザ)、ムシシが、クリュセーイス側からはグラティオンとムシシである。

しかし、グラティオン自体がアグリオス（チュクウ+ルワ）とディオナー（ヴィディエ+ウラニア）の合体部族である。つまり、ペルセーイスからは3部族、クリュセーイスからは5部族が参加している。

この時に生まれたのは、台湾少数民族として知られる「サイシャット族」である。サイシャットの名の由来はチュクウ、ムシシ、ヴィディエの組み合わせである。チュシシディ=ツォウセイイシディ=サイシャットとなる。サイシャット族は後に「ヘラクレス」と呼ばれることになる。ヘラクレスの名の由来はペルセーイスとクリュセーイスの組み合わせである。ペルセーイス+クリュセーイス=ペルクリュセ=ヘラクレスとなる。

■ 7万年前 「ヘラクレス誕生」

ヘラクレスとは、台湾のサイシャット族のことであるが、ヘラクレスの物語は全て、オーストラリア、メラネシア、南シナ海で起きたことである。ヘラクレスの目的は、主に、反自然の種族の成敗であった。ネメアのライオン、レルネのヒュドラ、ケリュネイアの鹿、エリュマントスの猪、アウゲイアスの家畜小屋掃除、ステュムパリデスの鳥退治、クレタの暴れ牛、ディオメデスの人喰い馬、アマゾネスとの戦闘、ゲリュオンの赤い牛、ヘスペリデスの黄金の林檎、ケルベロスの生け捕りの中でも、特にエリュマントスの猪とディオメデスの人喰い馬はタナトスの一族である。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ヴァルハラ誕生」「戦士の守護神ワルキューレ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、神話通り、葦原中津国に向かった。葦原中津国は2種類あるが、ひとつめは八代湾～天草諸島に跨る地域であり、2つめはアナトリア半島～ナクソス島に跨る地域である。彼らが目指したのは2つめの葦原中津国である。

アルゴス号は、途上の北アメリカで常世国、ミドガルド王国などを残しつつ、メキシコに到達した。大西洋側に出た彼らは、上陸ポイントを「ベラクルス」と命名した。更に、北メキシコに入植した塩椎神の勢力は「ヴァルハラ王国」を築いた。ヴァルハラの名の由来はペルセウスとヘラクレスの組み合わせである。ペルセウス+ヘラクレス=ペルヘラ=ヴァルハラとなる。

ベラクルスには、「ワルキューレ」が生まれた。ベラクルス、ワルキューレの名の由来は共にヘラクレスである。ヘラクレス=エラクーレス=ワルキューレとなる。北アメリカにあったミドガルド王国、北メキシコにあったヴァルハラ王国名は北欧神話に出てくるため、ミドガルド、ヴァ

ルハラは北欧に存在したと考える人も多いだろう。しかし、大概の場合、神話の舞台は神話が編まれた土地で起きた事柄ではない。タナトスを皆殺しにするため、科学の種族は核兵器によってミドガルド、ヴァルハラを消滅させたが、北欧神話は、その時の生存者が何万年もさすらったあぐく、北欧に辿り着き、現地人に伝えたものである。

■ 4 万年前 「オリンポス神族誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加した素戔鳴尊、筒之男命は、メキシコを離れ、葦原中津国を目指した。クロノスはケルンを拠点にし、インチキ宗教により、大量の弱者を信者として擁し、ヨーロッパを支配していた。これに対抗するべく、現オリンポス山付近に入植したサイシャット族は「オリンポス神族」を結成した。オリンポスの名の由来はウラヌスとポセイドンの組み合わせである。ウラヌス+ポセイドン=ウラヌポセ=オリンポスとなる。

■ 4 万年前 「太陽神ホルス誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したパッラーズは、世界を一周し、エジプトに上陸して「太陽神ホルス」を生んだ。ホルスの名の由来はパッラーズである。パッラーズ=ハッラーズ=ホルスとなる。

■ 4 万年前 「スフィンクス建設」

ヘラクレスは、エジプトに「蛇神アトゥム」を祀っていたアダムと連合して「スフィンクス」を建設している。ヒトとコブラの特徴を併せた頭部を持ち、百獣の王ライオンの身体を持つスフィンクスは、「蛇神アトゥム」を祀るアダムと、「太陽神ホルス」を祀る獣人の英雄ヘラクレスの合体を象徴している。後に、巨石の種族となる獣人の英雄たちは、この時に始めて巨石を用いて建築を行った。

■ 1 万3 千年前 「ヘリオポリスの大移動時代」

■ 1 万3 千年前 「伏羲と女禍の大航海時代」

■ 1万3千年前 「パリス誕生」

「ヘリオポリスの大移動時代」に参加してメソポタミアに移住し、その後に「伏羲と女禍の大航海時代」に参加したホルスは、アルプスに移住した。彼らはそこから北に移って現パリに「パリス」を築いた。パリスの名の由来はパッラースである。パッラース=パラス=パリスとなる。

■ BC 5千年 「トロイア（デリー）誕生」

「太陽神ホルス」は、後に科学の種族によってアイルランドに招かれ、トロイア（デリー）を築いた。その後、彼らのトロイア入植を気に入らないタナトス連合が陰謀を仕掛け、トロイア（古代デリー）が神々の種族と人喰い人種（タナトス）の決戦の場となる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5千年 「デリー再建」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したパリス人は、ヨーロッパを離れてインドに移住し、新規に「デリー」を再建している。デリーの名の由来はアイルランドのデリー（トロイア）である。

■ BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ BC 32世紀 「ベリーズ建設」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したパッラースは、マヤに移住して「ベリーズ」を建設した。ベリーズの名の由来はホルスである。ホルス=ボルーズ=ベリーズとなる。

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC19世紀 「パルシュ族誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したベリーズ人は、インドに入植して「パルシュ族」を名乗った。パルシュ族は、後にアーリア人の軍団に参加している。パルシュの名の由来はホルスである。ホルス=ホルシュ=パルシュとなる。

■BC1200年 「ベシュタード王国誕生」

ヒッタイト帝国の滅亡を機に、ハッティ人と分離し、イランに亡命したタタは、パルシュ族と連合体を組んだ。この時に幻の「ベシュタード王国」が誕生した。ベシュタードの名の由来はパルシュとタタの組み合わせである。パルシュ+タタ=パーシュタータ=ベシュタードとなる。

■BC1200年 「ペリシテ人誕生」

パルシュ族はタタと組んで「ベシュタード」を生んだが、その連合体から一部パルシュ族が主導する「ペリシテ人」が分かれた。ペリシテの名の由来はベシュタードと同じ、パルシュとティタンの組み合わせである。パルシュ+ティタン=パルシュタン=ペリシテ（フィリスティン）となる。ペリシテ人は海の民として活動し、イスラエルではダン族のサムソンと対立した。

■BC1027年 「ベシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「ルシタニア人誕生」

「ベシュタードの大航海時代」に参加したペリシテ人はイベリア半島に上陸すると、現地人と混合して「ルシタニア人」を形成した。ルシタニアの名の由来はペリシテである。ペリシテ=ペリシテン=ペリシテンニア=ルシタニアとなる。ルシタニア人は、後にハルシュタットに及んで隣接した土地に「ラ・テーヌ文化」を花開かせた。

■BC1027年 「ハルシュタット文化誕生」

「ベーシュタートの大航海時代」に参加したペリシテ人は、オーストリアの奥地に移住し、当地を「ハルシュタット」と命名した。ハルシュタットの名の由来はベーシュタートである。ベーシュタート＝ベルシュタート＝ハルシュタットとなる。ハルシュタット文化は岩塩交易により繁栄した。ハルシュタットでは、ペリシテ人の同盟者タタが文化の指揮権を掌握していた。

■BC1027年 「ホルシュタイン誕生」

「ベーシュタートの大航海時代」に参加したペリシテ人はユトランド半島の付け根に至り、「ホルシュタイン」を築いた。ハルシュタット＝ハルシュタイン＝ホルシュタインとなる。この系統からは、ホルシュタインを由来に「シュタイン」「スティーン」が末尾に付く姓が量産されている。シュタインを名乗る人々は、総じてユダヤ人だとされるが、実際にはベーシュタート王国の末裔である。

■BC1027年 「十王戦争」

■BC1027年 「ペルシア人誕生」

「十王戦争」の後、イランにやって来たパルシュ族は、現地人と混合して「ペルシア人」を誕生させた。ペルシアの名の由来はパルシュである。パルシュ＝ペルシュ＝ペルシアとなる。イラン人がアーリア人と呼ばれるのは、ペルシア人がアーリア人の軍団に参加していたパルシュ族の子孫だからである。アーリア人に属するペルシア人（パルシュ族）は「ペルシア帝国」の誕生に携わった。

■BC529年 「太陽神ミトラの大航海時代」

■BC529年 「プロイセン人誕生」

「太陽神ミトラの大航海時代」に参加したペルシア人は、バルト海に移住した。彼らは、ヨーロ

ッパ人と混合して「プロイセン人」を形成する。プロイセンの名の由来はペルシアである。ペルシア＝ペルイシャン＝プロイセンとなる。一部は、クール人と共にマヤに移ってベリーズを継承している。その後、「北方十字軍」が実施されると、彼らは故地を守護するためにバルト海に帰還し、タナトスの連合軍（シトー会、ドイツ騎士団）と戦火を交えている。

■BC133年 「西ゴート族誕生」

BC144年にルシタニア戦争が始まると、ルシタニア人は強力にローマ軍に抵抗した。だが、敗北すると、彼らはスカンジナビア半島に逃れた。彼らは、ベーシュタード王国時代の同盟者「ゴート族（ハッティ人）」と連合した。後に、ルシタニア人は独立して「西ゴート族」を名乗った。

■AD20年 「パッラヴァ人誕生」

パルシュ族の後身である「パッラヴァ人」がイランに誕生した。パッラヴァの名の由来はパールヴァティーである。パッラヴァ人は、パルティア王国から独立して「インド・パルティア王国」を建設した。パールヴァティー＝パアルヴァティー＝パフラヴァティー＝パフラヴァとなる。

■AD135年 「春日氏誕生」「春日神社誕生」

AD135年にパフラヴァ王国が滅ぶと、パッラヴァ人は「ポントス人の大航海時代」に参加した面々を追って、パンジャブから日本に移住した。パッラヴァ人は、現地人と混合して「春日氏」を成し、「春日神社（はるひ）」を創始した。はるひの名の由来はパールヴァティーである。パールヴァティー＝ハルハ＝はるひ（春日）となる。その後、春日神社が藤原氏に篡奪されると、春日（はるひ）は、カシュガルを由来に春日（かすが）と呼ばれるようになる。

■AD235年 「ハルハ部誕生」

「春日神社（はるひ）」を創立し、「春日氏（はるひ）」を称したパフラヴァ人は日本を発ち、南北に移住した。北方組はモンゴル人と混合して「ハルハ」を称した。ハルハの名の由来は春日（はるひ）である。

■AD235年 「パッラヴァ朝誕生」

また、南方組は、南インド東海岸に上陸して「パッラヴァ人」を称した。パッラヴァの名の由来はパールヴァティーである。パールヴァティー＝パッラヴァティー＝パッラヴァとなる。AD275年に「前期パッラヴァ朝」が開かれ、AD555年に「後期パッラヴァ朝」が開かれた。

■AD3世紀 「アルスター人誕生」

ゲルマン人が台頭すると、ハルシュタット人はアイルランドに入植し、「アルスター人」となる。アルスターの名の由来はハルシュタットである。ハルシュタット＝アルシュタット＝アルスターとなる。また、ヴァイキング時代にデーン人の襲撃が始まると、アルスター人は2手に分離して新天地へと向かった。

■AD415年 「西ゴート王国誕生」

ゲルマン人の中でもフランク族と共にローマ人をてこずらせた彼らは、イベリアに帰還して「西ゴート王国」を建設した。これにより、彼らはローマ帝国から、故地であるルシタニアの奪還を果たした。イベリア半島に西ゴート王国を建てたという事実は、彼らの正体がルシタニア人という証である。

■AD520年 「プロイセン人復活」

カウィール家はベリーズ人と共にリトアニアに赴き、「クール人」を復活させ、ベリーズ人（ペルシア人）は新規に「プロイセン人」を称した。プロイセンの名の由来はペルシアである。ペルシア＝ペルシアン＝プロイセンとなる。土地柄もあり、クールの名は英語の「冷たい」を連想させるが、実際には、アーリア人の一角を担ったクル族に由来している。AD1228年、クール人はセムガル族と連合してリガを襲撃し（リヴォニア十字軍）、AD1260年には十字軍側に参加したがリヴォニアに敗北している（ドウルペの戦い）。プロイセン人からは、イエズス会士ルイス・フロイスが輩出されている。

■AD531年 「マクリア人の大移動時代」

■AD531年 「アルワ王国誕生」

「マクリア人の大移動時代」に参加したハルハ部は、ヌビアに「アルワ王国」を建設した。アルワの名の由来半ハルハである。ハルハ＝アルハ＝アルワとなる。

■AD641年 ヌビアから中央アジアに移住

イスラム教徒がヌビアに侵入すると、これを嫌った「マクリア人の大移動時代」の同盟者たちは、ヌビアを脱出して中央アジアに避難した。

■AD641年 「ヴェルフ家誕生」

ヌビアを離れたアルワ人は、2手に分離してネーデルラント南部ブルグント、ドイツ南部シュヴァーベンに居住した。彼らは、ハルハの名に因んで「ヴェルフ」を称した。ハルハ＝ヴァルハ＝ヴェルフとなる。このうち、ブルグント系はブルグント人に吸収され、ヴェルフ家ブルグント系とヴェルフ家本流シュヴァーベン系は抗争を繰り返した。

■AD641年 「アールパード家誕生」「ハンガリー王国誕生」

マクリアとアルワ、一部北狄はパンノニアに移り、ノバティア（北狄）は中央アジアに残留している。マクリアは後にマーシア人と組んで「マジャール」の名を誕生させる。一方、アルワは北狄と共に「アールパード家」を築いている。アールパードの名の由来はアルワとベイディ（北狄）の組み合わせである。アルワ＋ベイディ＝アルベイディ＝アールペーイディ＝アールパードとなる。マジャール人とアールパード家の組み合わせといえば「ハンガリー王国」の礎を築いた人々である。ハンガリーを建国した人々は、モンゴルの騎馬軍団を先祖に持ち、尚且つヌビアから来たアフリカ人だったのだ。

■AD711年 「イロンゴット族誕生」「イビラオ誕生」

西ゴート王国が滅ぶと、イベリア半島を発った西ゴート族は、インド洋を越え、まずはフィリピンに到達した。彼らは、「イビラオ」「イロンゴット」の名を残した。西ゴート族はアラン人と組んで「カタルーニャ（ゴート＋アラン）」を築いたが、イロンゴットの名の由来もカタルーニャと同じ、ゴートとアランの組み合わせである。ただ、フィリピンではゴートとアランが反対

になっている。つまり、アラン+ゴート=アランゴト=イロンゴットとなる。イビラオの名の由来はイベリアであり、イベリア=イベリオ=イビラオとなる。

■AD711年 「織田氏誕生」「谷氏誕生」

忌部の名由来はイベリアであるため、忌部氏の子孫である「織田氏」はイベリア半島から来たことを示している。つまり、織田氏の祖はイベリア半島で「西ゴート王国」を開いた西ゴート族（ルシタニア人）なのだ。白人の顔をした西ゴート族は、日本人と混合して「織田氏」「谷氏」を形成した。織田の名由来はゴートであり、谷の名由来はルシタニアである。ゴート=ゴオト=オト=織田となり、ルシタニア=タニア=谷となる。織田氏は、伊部郷（イベリアに由来）に「剣神社」を建立し、「織田明神」を祀っている。織田氏からは、偉大な英雄、織田信長が輩出されている。信長が、イエズス会の布教を許し、鉄砲など、南蛮渡来の舶来品に関心を持ったのは、血筋が原因だったのだ。

■AD727年 「アリスタ家誕生」

ヴァイキングが登場すると、アルスター人はアイルランドを発ち、兄弟ルシタニア人の故地イベリア半島に赴いて「アリスタ」を称した。アリスタの名由来はアルスターである。アルスター=アルスタ=アリスタとなる。アリスタ家の血筋にはヒメノ家が連なる。

■AD731年 「ブロワ誕生」

ナンディヴァルマン2世パラヴァマツラの治世の初期、パツラヴァ朝はチャールキア朝に攻め込まれ、首都カーンチープラムが3度も陥落した。これを機に、一部パツラヴァ人が南インドを離れ、カロリング朝治世下のフランク王国に移住した。パツラヴァ人はフランスに得た拠点を「ブロワ」と命名した。ブロワの名由来はパツラヴァである。パツラヴァ=パラヴァ=ブロワとなる。AD8??年、パツラヴァ人の血統に属するウィレムが、初代「ブロワ公」に就任した。

■AD1034年 「ピエルボ朝誕生」

神聖ローマ帝国に吸収されたのを機に、スウェーデンに移住したブルグント系ヴェルフ家は、パールヴァティーに因んで「ピエルボ」を称した。パールヴァティー=ピエルヴァティー=ピエルボとなる。AD1250年、ヴァルデマール1世がスウェーデン王に即位して「ピエルボ朝」を

スウェーデンの地に開いた。

■AD11世紀 「マヤ人の大航海時代」

■AD11世紀 「生田氏誕生」「池田氏誕生」「池谷氏誕生」「秋谷氏誕生」

マヤから日本列島に移った人々は、現地人と混合して「生田氏」「池田氏」「池谷氏」「秋谷氏」を称した。生田、池田などの名の由来はユカタン半島である。ユカタン=イクタン=生田、池田となる。生田氏は「生田神社」を創建している。この系統からは「創価学会」第3代会長池田大作、第5代会長秋谷栄之助が輩出されている。

■AD1283年 「ブルース家誕生」

シトー会による北方十字軍とドイツ騎士団の侵攻によって滅亡したプロイセン人はバルト海を出てスコットランドに移住した。プロイセン人は、そこで「ブルース家」を作った。ブルースの名の由来はマヤの都市ベリーズである。ベリーズ=ベリース=ブルースとなる。AD1306年、ブルース家のロバート1世がスコットランド王に即位して「ブルース朝」を開いている。

■AD1301年 「レバノン誕生」「アラファト山誕生」

ハンガリー王位を篡奪されたアールパード家は、ハンガリーを後に2手に分離し、それぞれが新天地を求める旅に出た。南方組は「レバノン」に居を定め、レバノンの山に「アラファト山」と命名した。レバノンの名の由来はアールパードとパンノニアの組み合わせであり、アラファトの名の由来はアールパードである。アールパード+パンノニア=ルパノニア=レバノンとなる。

■AD1314年 「アrik・ブケ誕生」

ブロワ公がフランス王位に統合されると、ブロワ家はフランスを後に、陸路でモンゴルに移住した。フランス人の顔をした彼らは、モンゴル人と混合して「アrik・ブケ」を称した。アrikの名の由来はフランス人名エンリケである。AD1388年、アrik・ブケ家はイエスデルを第4代北元皇帝の座に送り込み、北元の王位を篡奪した。

■AD1328年 「ヴァロワ朝誕生」

ハンガリー王位を篡奪されたアールパード家は、ハンガリーを後に2手に分離し、それぞれが新天地を求める旅に出た。北方組はカペー朝治世下のフランス王国に侵入し、アルワの名に因んで「ヴァロワ家」を形成した。アルワ=ヴァルワ=ヴァロワとなる。AD1328年、ヴァロワ家のフィリップ6世が、フランス王に即位して「ヴァロワ朝」を開いている。その後、AD1589年にヴァロワ朝が断絶すると、フランス王位はブルボン家にとって替わられた。

■AD1364年 「春日氏復活」

AD1364年にスウェーデン王位を喪失すると、ピエルボ家はスカンジナビア半島を去り、遠く東アジアにまで及び、勇猛な武将が群雄割拠する戦国時代の日本の地を踏んだ。スウェーデン人の顔をしたピエルボ家は日本人と混合し、「春日氏」の名を復活させた。春日氏からは、戦国時代に活躍した春日虎綱、春日信達が輩出されている。

■AD1571年 織田信長、延暦寺を焼き討ち

ペルセウス、ヘラクレスの血統に属する織田信長は、タナトスの宗教が有害であることを知っていた。この比叡山焼き討ちを機に円仁の系統、円珍の系統の「天台宗」が日本から中国・湖南に移住した。彼らは、「湖南九江淫祀」に加わり、後にAD1930年代に入ると、中国共産党の進撃を危惧して日本に帰還して迷惑なことに新興宗教団体を乱立する。

■AD1582年 織田信長、明地光秀に討たれる 「本能寺の変」

偉大な織田信長は、日本仏教がどれだけ有害かを認識していた。彼は、全財産をむしり取られても喜ぶフリしかできない弱者たちを解放するため、比叡山を焼き、本願寺を滅ぼそうと攻撃を繰り返した。天台宗、真言宗、浄土宗、曹洞宗、浄土真宗などのタナトスの連合体は、織田信長を何とかしなければ皆殺し、或いは居心地の良い日本を追放されかねないと頭を悩ませていた。そこで、タナトスの中でも随一の狡猾さで知られる大谷家が、まず荒木村重、明智光秀の両者を信長のもとに送り込み、彼らが信長から「信頼の置ける家臣」という評価を得るまで、蜂起の機会を待った。

まず、荒木村重が信長の信頼を得ると、第一の作戦として、顕如は、荒木村重に命じて信長に対する離反を演じさせた。AD1578年のことである。顕如は、信頼していた家臣に裏切られ

たら、プライドが高そうな信長は必ず動揺するだろうと踏んでいた。そうして、信長がひるんだところを大量の農民に命じて一斉蜂起する手はずだった。だが、村重は早々に兵糧攻めに追い込まれた。戦意喪失した村重がひとりで城を出て逃亡すると、信長は、その後一族郎党650人を捕らえて処刑した。

こうして、第一の作戦が不発に終わると、顕如は次に、タナトスの家族である近衛前久（イスラエル・ダナーン族）と謀り、信長と和平を結ぶ芝居を演じた。その後、信長は忍びの者を送り込んで顕如の様子を探らせた。それを察知していた顕如は、忍者たちが見ている前で息子である教如と対立の芝居を演じた。これを芝居と見抜けなかった忍者は見たまますべてを信長に報告した。この報告を聞いて「本願寺は足並みが乱れている」と判断した信長だが、待ってましたとばかりに、顕如は第二の刺客、同じくタナトスの家族である明智光秀（イスラエル・ダナーン族）に信長に対する蜂起を命じた。それが「本能寺の変」である。狡猾過ぎるほど狡猾な顕如の前に、偉大な織田信長が油断した瞬間であった。信長の死は6月2日のことであったが、6月27日には、顕如と教如は何事もなかったかのように早々に和解している。

■AD1600年 「アラファト誕生」

春日信達は森長可の撤退妨害の罪状により一族全員が処刑される。しかし、信達は死んだと見せかけて生き残った一族を率いて日本を脱出し、西方に向かった。まず、祖を同じくするアールパード家が支配した土地ハンガリーに到着すると、春日氏は2手に分離して南北に移住した。南方組は、アールパードの名を継承し、アルフ人が命名した「アラファト山」が鎮座するレバノンに移住し、フサイニー家に自身の血統を打ち立てた。この系統からはPLO議長ヤーセル・アラファトが輩出されている。アラファトの名の由来はアールパードである。

■AD1692年 「ハノーヴァー王国誕生」

春日信達は森長可の撤退妨害の罪状により一族全員が処刑される。しかし、信達は死んだと見せかけて生き残った一族を率いて日本を脱出し、西方に向かった。まず、祖を同じくするアールパード家が支配した土地ハンガリーに到着すると、春日氏は2手に分離して南北に移住した。一方、北方組は、ドイツ北部・現ハノーヴァーに移住し、AD1692年に「ハノーヴァー王国」を建てた。ハノーヴァーの名の由来はパンノニアと先祖の名ヴェルフの組み合わせである。パンノニア+ヴェルフ=パンノヴェル=ハノーヴァーとなる。

■AD1866年 「パフラヴィー朝誕生」

「普墮戦争」で敗北したオーストリア側に付いたため、ハノーヴァーはプロイセンに併合されて州となった。これを機に、ハノーヴァー家はドイツを脱出してイランに移住した。「ペルシア・コサック旅団」を結成すると、指導者レザー・ハーンがクーデターを決行し、AD1926年、「パフラヴィー朝」を開いている。パフラヴィーの名の由来はパッラヴァである。

■AD1874年 グスタフ・ホルスト生誕

■AD1975年 エドガー・ライス・バロウズ生誕

■AD1879年 アルベルト・アインシュタイン生誕

■AD1889年 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン生誕

■AD1914年 ウィリアム・S・バロウズ生誕

■AD1918年 アンワル・アッ=サダト生誕

ハルシュタット=シュタット=サダトとなる。エジプト・アラブ共和国初代大統領。

■AD1929年 ヤーセル・アラファト生誕

■AD1932年 シルヴィア・プラス生誕

■AD1938年 アルタヴァスト・ペレシャン生誕

■AD1943年 ジャック・ブルース生誕 「クリーム誕生」

■AD1949年 ジョン・ベルーシ生誕

■AD1950年 クリス・スタイン生誕 「ブロンディ誕生」

■AD1949年 ブルース・スプリングスティーン生誕

■AD1956年 スティーヴン・パーシー生誕 「RATT誕生」

■AD1963年 イングヴェイ・マルムスティーン生誕

◆ポルピュリオーンの歴史

■45万年前 「盤古の大移動時代」

■45万年前 「ポルピュリオーン誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したパッラーズは、ヒッポリュトス、ウェネと組んで「ポルピュリオーン」を生んだ。ポルピュリオーンの名の由来はパッラーズ、ヒッポリュトス、ウェネの組み合わせである。パッラーズ+ヒッポリュトス+ウェネ=パッラーポリュウェネ=ポルピュリオーンとなる。

■40万年前 「獣人の大狩猟時代」

■40万年前 「ベラベラ族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したポルピュリオーンは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北

部沿岸（現バンクーバー）に居を構えたポルプュリオンは「ベラベラ族」を称した。ベラベラの名の由来はポルプュリオンである。ポルプュリオン＝ベラベラオン＝ベラベラとなる。

■ 40万年前 「ヒューロン族誕生」

「獣人の大狩猟時代」に参加したポルプュリオンは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北東部森林地帯（イリノイ～ニューヨーク）に居を構えた。ポルプュリオンは「ヒューロン族」を称した。ヒューロンの名の由来はポルプュリオンである。ポルプュリオン＝ポルプューリオン＝ヒューロンとなる。

■ 35万年前 「盤古の大移動時代」

■ 35万年前 「ブリアレオース誕生」

「獣人の大移動時代」に参加してモンゴルに移住したポルプュリオンは、アグリオスと連合して「ブリアレオース」を生んだ。ブリアレオースの名の由来はアグリオスとポルプュリオンの組み合わせである。ポルプュリオン＋アグリオス＝プュリオリオス＝ブリアレオースとなる。

■ 7万年前 「ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ヒュペリオン誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したポルプュリオンは、「ヒュペリオン」を生んだ。ヒュペリオンの名の由来はポルプュリオンである。ポルプュリオン＝ピュピュリオン＝ヒュペリオンとなる。その後、彼らはティタン神族に属した。

■ 4万年前 「ティタノマキア」

■ 4万年前 「ベルベル人誕生」

「ティタノマキア」に参加し、ゼウスに敗北したポルピュリオンは、ギリシアから北アフリカに移住した。この時に「ベルベル人」が生まれた。ベルベルの名の由来はポルピュリオンである。ポルピュリオン＝ポルピュリ＝ボルビュリ＝ベルベルとなる。

■ A D 5 3 4 年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■ A D 5 3 4 年 「バリ誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したベルベル人は、東南アジアに向かい、「バリ島」に移住した。この時に初めてバリと命名された。バリの名の由来はポルピュリオンである。ポルピュリオン＝ポル＝バリとなる。

■ A D 5 3 4 年 「ポリバル誕生」

一部のベルベル人は、北アフリカからスペインに移住した。この時に「ポリバル」の名が生まれた。ポリバルの名の由来はポルピュリオンである。ポルピュリオン＝ポルピュリ＝ポリバルとなる。

■ A D 1 2 世紀 「プレー王国誕生」

バリ島のベルベル人は、タイに移住した。この時に「プレー王国」が築かれた。プレーの名の由来はポルピュリオンである。ポルピュリオン＝ピュリオー＝プロー＝プレーとなる。

■ A D 1 3 5 4 年 「ゲルゲル王国誕生」

マジャパヒト王国の時代、ベルベル人はバリに「ゲルゲル王国」を築いた。ゲルゲルの名の由来はベルベルである。ハ行はカ行を兼ねる法則により、ベルベル＝ゲルゲルとなる。

■ A D 1 7 世紀 バスクから南米植民地に移民

バスクを離れたポリバル家は、南米植民地ベネズエラのカラカスに移民した。クリオーリヨの名

家であり、アメリカ大陸有数の資産家としての地位を築いた。

■AD1783年 シモン・ボリバル生誕

ナポレオンの下で働いたこともあるが、AD1811年にベネズエラに帰国した。ベネズエラ軍に入隊したボリバルは、ベネズエラ独立を宣言し、ベネズエラ独立運動を指揮した。ボリバルは、スペイン王国を裏で牛耳るドミニコ会に対する徹底抗戦を誓い、ヌエバ・グラナダのカルタヘナで「カルタヘナ宣言」を発表した。

■AD1813年 シモン・ボリバル、ベネズエラ第2共和国大統領に就任

■AD1817年 シモン・ボリバル、ベネズエラ第3共和国大統領に就任

■AD1819年 シモン・ボリバル、大コロンビア初代大統領に就任 「大コロンビア共和国誕生」

■AD1824年 シモン・ボリバル、ペルー第8代大統領に就任

■AD1825年 シモン・ボリバル、ボリビア初代大統領に就任

■AD1830年 シモン・ボリバル死去

数万年ぶりに目覚めた獣人ポルピュリオンの遺伝子がシモン・ボリバルを南アメリカ統一国家建設に駆り立てた。だが、ドミニコ会信者である部下たちの裏切りにより、権威が低下。その上、アメリカ植民地でも有数の資産家であったボリバル家だったが、革命理念とハイチ人との約束のため、ボリバルは自らの奴隷を解放し、農園・鉱山を売り、私財を投じて解放戦争を続けた。そのため、シモンの死の直前、ボリバル家は没落同然だった。

■AD1928年 アンディ・ウォーホル生誕 「ファクトリー誕生」

ウォーホルの本名はウォーホラだが、ウォーホラの名の由来はヴァルハラだと考えられる。ヴァルハラ=ヴァーハラ=ウォーホルとなる。ポップアートの旗手として、反復、複製という反芸術的な手法を駆使し、使用後は、ゴミにしかならない日用的な商業デザイン、ポスター、ブロマイドに対するモノの見方を変えた。不完全ゆえの「美しい複製品（偽物）」という概念を命題に掲げた。

◆ラムセス（ヘルモス）の歴史

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「ヘルモス誕生」

「カオスの大移動時代」に参加したパッラースは、ミマースと組んで、オーストラリアに「ヘルモス」を生んだ。ヘルモスの名の由来はパッラース、ミマースの組み合わせである。パッラース+ミマース=パッラマース=パラマス=ヘルモスとなる。その後、ヘルモスは河川の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ヘルメス（前身）誕生」

「アルゴス号の大航海時代」のメンバー、ステュクス、アドメテーと共に古代ブリテン島に上陸すると、彼らは「ヘルメス」を称した。ヘルメスの名の由来はヘルモスである。ヘルメスは、後にオリンポス神族に参加した。この系統からは、ヘルムスなどの姓が生まれている。

■ 4万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4万年前 「ヘルメス誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したヘルメスは、古代ギリシアに上陸し、オリンポス神族に参加した。

■BC 7千2百年 「ラムガ誕生」

大地殻変動の後、単身、古代ギリシアからメソポタミアにやってきたヘルメスは、「ラムガ」を生んだ。しかし、ヘルメスの背後には司神タナトスがいた。冥府ハデスの頃からのつながりである。ラムガの名の由来はヘルモスと悪鬼ケールの組み合わせである。ヘルモス+ケール=ルモケー=ラムガとなる。ラムガは、タナトスに操られていたため、神々の集団アヌンナキに嫌われ、殺害された。

■BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■BC 2613年 スネフェル、ファラオに即位 「エジプト第4王朝成立」

「ソドムとゴモラ」を機に、レウはメソポタミアからエジプトに移住した。この時、レウはヘルメスと組んだ。その後、BC 2613年にスネフェルが生まれ、ファラオに即位した。スネフェルの名の由来はシナイのヘルメスである。シナイ+ヘルメス=シナヘル=スネフェルとなる。

■BC 1310年 ラムセス1世、ファラオに即位 「エジプト第19王朝成立」

「ソドムとゴモラ」以来、タナトスから解放されたヘルメスは、エジプトに潜伏していた。ヘルメスは、エジプトに「ラムセス」を生んだ。ラムセスの名の由来はヘルメスとスエズの組み合わせである。ヘルメス+スエズ=ルメスエズ=ラムセスとなる。

■BC 1301年 ラムセス2世、ファラオに即位

■BC 1197年 ラムセス3世、ファラオに即位 「エジプト第20王朝成立」

■BC1070年 「ロマ（ジプシー）誕生」

太陽神ラーの王統がBC1070年頃に消滅すると、ラムセスの残党はエジプトを後に現ルーマニア方面に移住し、そこからヨーロッパ各地に拡散して「ロマ」となる。ルーマニア、ロマの名の由来はラムセスである。ロマはエジプト人を意味する「ジプシー」とも呼ばれている。しかし、ロマがラムセス王統の残党であるならジプシーのネーミングはある意味、間違っていない。

■BC3世紀 「ヘルウェティイ族誕生」

ローマ共和国の台頭を機に、エトルリア人がイタリアからガリアに移住した。エトルリア人はエドム人とフルリ人の組み合わせであるが、ガリアではフルリ人が主導権を握ったため、「ヘルウェティイ」を称した。フルリ+エドム=フルエド=ヘルウェティイとなる。

■BC58年 「ポーロヴェッツ族誕生」

BC58年、ヘルウェティイ族がローマ軍に蹴散らされると、エドム人はヘルウェティイから分離・独立してイスラエルに移住した。一方、フルリ人はヘルウェティイの名を継承し、各地を転戦すると共に名前が変遷を重ね、「ポーロヴェッツ族」として中央アジアに覇を競った。ヘルウェティイ=ヘルウェッティ=ポールヴェッツとなる。

■BC37年 「ヘロデ朝誕生」

エドム人が主導するヘルウェティイ族は「ヘロデ」を称した。ヘロデの名の由来はヘルウェティイである。ヘルウェティイ=ヘレティ=ヘロデとなる。AD66年、「ユダヤ戦争」が起きると、ヘロデの一族郎党は2手に分離してイスラエルから脱出した。

■AD66年 「フィレンツェ誕生」

AD66年、「ユダヤ戦争」が起きると、ヘロデの一族郎党はイスラエルから脱出した。西方組は、エトルリア時代の故地であるイタリアに帰還して「フィレンツェ」に拠点を構えた。フィレンツェの名の由来はヘロデである。ヘロデ=ヘロンジェ=フィレンツェとなる。AD1115年、ヘロデ朝の残党が共和制を採り、寡頭政治を行う。「フィレンツェ共和国」の誕生である。

■ A D 1 世紀 「パルミラ誕生」

ヨーロッパ方面に散っていた 로마 は、シリアに移住した。彼らは「パルミラ」を築いた。パルミラの名の由来はヘルモスとラーの組み合わせである。ヘルモス+ラー=ヘルモラー=ペルモラ=パルミラとなる。パルミラは、中近東きっての富裕国のひとつといわれた。

■ A D 2 7 4 年 「ジブチ誕生」

A D 2 7 4 年、パルミラ王国がローマに組み込まれると、パルミラ人はアビシニアに移住した。この時、彼らは「ジブチ」を築いた。ジブチの名の由来はジプシーである。ジプシー=ジプチー=ジブチとなる。

■ A D 5 3 4 年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■ A D 5 3 4 年 「スクスフ誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したガリア人は、満州に移住した。この時、ガリア人は、ジブチ人と組んで「スクスフ」を生んだ。スクスフの名の由来はチュクチとジブチの組み合わせである。チュクチ+ジブチ=チュクジブ=ツクソハ=スクスフとなる。その後、スクスフは建州女直に参加した。

■ A D 8 2 0 年 「パラマーラ朝誕生」

A D 7 世紀、イスラム帝国がヌビアに迫ると、ジブチ人はインド北部に移住した。彼らは「パラマーラ朝」を開いた。パラマーラの名の由来はパルミラである。パルミラ=パルミーラ=パラマーラとなる。

■ A D 9 9 7 年 「シェイクスピア誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したスクスフは、ブリテン島に移住した。アイルラ

ンドは、先祖であるダグザ縁の地だからだ。満州人の顔をしたスクスフは、イギリス人と混合して「シェイクスピア」の名を生んだ。シェイクスピアの名の由来はスクスフである。スクスフ＝スークスハ＝シェイクスピアとなる。

■AD1115年 「エチオピア帝国ソロモン朝誕生」

「フィレンツェ共和国」誕生に不満を持つ一部が、フィレンツェを後にアビシニアに移住し、陸奥安倍氏と組んで「エチオピア人」を形成する。エチオピアの名の由来はエドムとアベの組み合わせである。エドム＋アベ＝エドアベ＝エチオピアとなる。ヘロデ朝の残党である彼らは、ソロモン王の子孫であることを主張し、ザガウエ朝を退けて「ソロモン朝」を開いた。

■AD13世紀 「クロアチア人誕生」

モンゴル軍が征西を行うと、ポーロヴェッツ族はアドリア海に入植し、は「クロアチア人」となった。クロアチア人の自称フルヴァティの名の由来はヘルウェティイである。ヘルウェティイ＝フルヴェティイ＝フルヴァティとなる。その後、ハ行がカ行を兼ねる法則により、フルヴァティはクロアチアに変化する。フルヴァティ＝クルアティ＝クロアチアとなる。

■AD1535年 「ボナパルト家誕生」

ソロモン朝が崩壊すると、ヘロデ朝の残党はフィレンツェに帰還した。アフリカ人の顔をしたエチオピア人はイタリア人と混合して「ボナパルト」を形成した。ボナパルトの名の由来はブオノ＋ヘロデの組み合わせである。ボナパルトの系統からは、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトが輩出されている。

■AD1564年 ウィリアム・シェイクスピア生誕

■AD1632年 ヨハネス・フェルメール生誕

AD1305年にパラマーラ朝が滅ぶと、パラマーラ人はヨーロッパに移住した。この時に「フェルメール」の名が生まれた。フェルメールの名の由来はパラマーラである。パラマーラ＝ハラマーラ＝フェルメールとなる。

■AD1804年 ナポレオン・ポナパルト、初代皇帝に即位 「第一帝政樹立」

ナポレオンはAD1798年にエジプトに遠征を行っているが、これはナポレオンにとっては太祖アダムの故地奪還だったといえる。また、エトルリア人の子孫でもある彼は、AD1801年にトスカーナ公国を廃して「エトルリア王国」を設置している。

■AD1856年 ジグムント・フロイト生誕 「夢判断誕生」

フロイトの名の由来はヘルウェティイである。ヘルウェティイ=ヘルウィティイ=フロイトとなる。元を辿れば、フロイトは幻の民族エトルリア人の子孫である。

■AD1902年 ハンス・ベルメール生誕

■AD1940年 ブライアン・デ・パルマ生誕

■AD1949年 ジーン・シモンズ（チャイム・ウィッツ）生誕 「KISS誕生」

ウィッツの名の由来はポーロヴェッツである。ポールヴェッツ=ヴェッツ=ウィッツとなる。

■AD1971年 アダム・ホロウィッツ生誕 「ビースティ・ボーイズ誕生」

■AD1971年 ウィノナ・ライダー（ウィノナ・ホロウィッツ）生誕

◆マハラエル（ブリアレオース）の歴史

■35万年前 「獣人の大移動時代」

■ 35万年前 「ブリアレオース誕生」

「盤古の大移動時代」に参加したアグリオスは、ポルピュリオンと連合して「ブリアレオース」を生んだ。ブリアレオースの名の由来はアグリオスとポルピュリオンの組み合わせである。ポルピュリオン+アグリオス=ピュリオリオス=ブリアレオースとなる。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「エロス誕生」

クウォスは獣人アルキュオネウス、獣人ブリアレオースと共にモンゴルに移住し、遊牧民として暮らし始めた。当時のシベリアは現在の日本の位置にあり、日本はもっと赤道に接近していた（だからワニの化石が発見される）。この時、ブリアレオースは「エロス」を称した。エロスの名の由来はブリアレオースである。ブリアレオース=アレオース=エロスとなる。

■ 4万年前 「ロア族誕生」

台湾に移住したブリアレオースは、現地人と混合して「ロア族」を生んだ。ロアの名の由来はブリアレオースである。ブリアレオース=ブリアロアース=ロアとなる。

■ 4万年前 「マハラエル誕生」

台湾のロア族（ブリアレオース）は、マベエと組んで「マハラエル」を生んだ。マハラエルの名の由来はマベエとブリアレオースの組み合わせである。マベエ+ブリアレオース=マベリアレ=マハラエルとなる。

■ 4万年前 「アベルの大航海時代」

■ 4万年前 「マハラレル誕生」

「アベルの大航海時代」に参加したマハラエルは、エジプトに入植して「マハラレル」を称した。マハラレルの名の由来はマハラエルである。

■ 4 万年前 「クロマニオン人の大航海時代」

■ 4 万年前 マハラエル、古代ペルーに移住

「クロマニオン人の大航海時代」に参加したマハラエルは、エノクと共にヨーロッパを経てペルーに移住した。

■ 3 万年前 「エノクの大航海時代」

■ 3 万年前 「ブリヤート族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したマハラエルは、エラドと連合して「ブリヤート族」を結成している。ブリヤートの名の由来は、マハラエルとエラドの組み合わせである。マハラエル+エラド=ハラエド=ブリヤートとなる。

■ 1 万 5 千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1 万 5 千年前 「科学の種族誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したマハラエルは、南極に移住してエラド、トバルカインと共に「科学の種族」を組んだ。この3者は、所謂「宇宙人（U F Oに乗る人）」として知られている。

■ 1 万 3 千年前 科学の種族、核兵器を開発

■ 1万3千年前 「アトランティス滅亡」

この頃、科学の種族は核爆弾を開発したが、当時、ゼウスがその一報を聞いて喜んだ。古代ギリシア・アトランティス王国（オーストラリア南）では、ディオニュソスが「エレウシス密儀」を布教する際、「入信しなければ殺す」と多くの人々を脅し、大量の信者を獲得していた。大量の信者獲得は、発言力の増大と共に、そのまま信者の離反防止につながる。そのため、タナトスの宗教は大量の信者の獲得を命題としている。

ディオニュソスは、その大量の信者たちをアトランティスのインフラ全般に送り込んで、これを掌握した。タナトスの発想では、王にならずとも、人民の生活を支配すれば、優れた王にも勝てるのだ。インフラ掌握により、ディオニュソスが何をしていても人々は怒ることも暴れることも弾劾することなく、怒りを飲み込んで幸福を演じていた。人々は、悪と戦って自由を得るのではなく、自由と生活を保障してもらうために、戦いを放棄し、悪に服従していたのだ。本能・感受性・意志の放棄は、非常な罪である。

ディオニュソスの非人間じみた圧制により、多くの人々が苦しんでいた。国民は「幸福な国の国民」を演じさせられていたのだ。抑圧的な生活により、精神疾患が蔓延した。だが、精神疾患患者はディオニュソスの命を受けた信者たちによってことごとく排除されてしまった。なぜなら、幸福な国で精神疾患を患うということは、国家がウソをついている証だからだ。ギリシア神話では、ポセイドンとアテネが対立する説話が紹介されている。これは、ディオニュソスが篡奪したポセイドンの国アトランティスとアテネが君臨していた時代の古代ギリシアとの対立を意味している。

「太陽神アポロン」を祀っていたアベラム族や全能の神ゼウスも、このことを憂慮していたが、数で圧倒するディオニュソスには対抗できなかった。そこへ、科学の種族が核兵器を開発した。ゼウスは、ディオニュソスと彼らに追随する人々を皆殺しにするために、科学の種族に核兵器の使用を要請した。人喰い人種を嫌悪していた科学の種族はこれを快く承諾した。これにより、ディオニュソスが篡奪したアトランティスは滅亡した。オーストラリア南部には、テクタイトが散乱しているが、これは当地にアトランティスの都市が存在していたことを意味している。

■ 1万3千年前 南極を北方に引き上げる作戦を練る

虚言症を患う人喰い人種と共存することは不可能だと考えていた科学の種族（エラド、マハラエル、トバルカイン）は、旧世界から切り離された南極大陸の立地条件を高評価していた。そして、彼らは、半分凍結している南極大陸を有効活用すべく、核兵器で地軸を動かして南極をもっと北方に引き上げようという計画を立てた。だが、これに懸念を示したのは白人系のノア、セム、ハム、ヤペテ、メトセラ、レメク、モンゴロイド系のエノス、エノク、エラド、マハラエル、トバルカインの面々であった。

■ 1万3千年前 「科学の種族の大移動時代」

■ 1万3千年前 「戦いの女神マッハ誕生」「海神リール誕生」「魔眼の巨人バロール誕生」

「科学の種族の大移動時代」に参加したマハラエルは、アイルランドに入植した。マハラエルは「戦いの女神マッハ」「海神リール」「魔眼の巨人バロール」を古代アイルランドに祀り、現地人を支配下に置いた。マハラエル=マハリール=リール、マハラエル=マバラエル=バロールとなる。

■ BC 5千年 「エリウの大航海時代」

■ BC 5千年 「太陽神フレイ誕生」「愛と美の女神フレイア」

「エリウの大航海時代」に参加したマハラエルは、アイルランドからバルト海に移り、古代スカンジナビアを訪れた。科学の種族マハラエル（マッハ）は「太陽神フレイ」「愛と美の女神フレイア」を祀る。マハラエル=マフレイル=フレイ=フレイアとなる。

■ BC 5千年 「トロイア戦争」

■ BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■ BC 32世紀 「第2次北極海ルート」

■ BC 32世紀 「フルリ人誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したマハラレルは、オビ川流域に入植し、現地人と混合して「フルリ人」を築いた。フルリの名の由来はマハラレルである。マハラレル=ハラレ=フルリとなる。その後、フルリ人はシベリアからコーカサスに南下した。

■BC1270年頃 「ヘールル族誕生」

ミタンニ王国が滅亡すると、フルリ人はさっさと人喰い人種シェルデン人を見限り、2手に分かれてメソポタミアを去った。一部は、スカンジナビアやユトランドに拠点を得た。彼らは「ヘールル」を称した。ヘールルの名の由来はフルリである。フルリ=フールリ=ヘールルとなる。

■BC11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■BC11世紀 「プレヤール人誕生」

汚らしいタナトスに嫌気がさした科学の種族はヴィマーナで地球を飛び出し、宇宙に活路を見出した。ビリー・マイヤーによると、宇宙人の自称はエラ人、プレヤール人である。「マハーバーラタ戦争」を機に、宇宙に進出したマハラエルが「プレヤール人」になったと考えられる。プレヤールの名の由来はマハラエルである。マハラエル=マパラエール=プレヤールとなる。

■AD1249年 ジョン・ペイリャル生誕

エステ家がフェラーラに僭主国家体制を確立すると、一部フェラーラ人がスコットランドに移住し、AD1249年にジョン・ペイリャルを産んだ。ペイリャルの名はフェラーラの名に因んでいる。フェラーラ=ペラーラ=ペイリャルとなる。ジョン・ペイリャルは、スコットランドに「ペイリャル朝」を開くが、4年で治世は終焉を迎え、本人は3年間ロンドン塔に幽閉された後、AD1314年に所領で死去した。

■AD1262年 アシェラフ・ハリール生誕

AD1262年に産まれたジョン・ペイリャルの子はエジプトに移住してアシュラフ・ハリールとなり、バイバルスの治世直後にスルターンに即位し、アッコン包囲を指揮して十字軍国家を全滅させた。ハリールの名はペイリャルに因んでいる。ペイリャル=ヘイリャル=ハリールとなる。

■AD1285年 マリーノ・ファリエロ生誕

AD1285年に産まれたハリールの子がヴェネツィアに侵入してマリーノ・ファリエロとなる。ファリエロの名はフェラーラの名に因んでいる。フェラーラ=フェラエロ=ファリエロとなる。AD1355年、第55代ドージェに就任した70歳のマリーノ・ファリエロは世襲君主制を敷くべく、ヴェネツィア共和国でクーデターを決行するが、処刑され、死後に四肢を切り刻まれたと伝えられる。その後、ファリエロの一族は、ヴェネツィアを離れてインドに移住した。

■AD1490年 ファトフッラー・イマードゥル・ムルク、初代王に即位 「ベラール王国誕生」

ヴェネツィア共和国でクーデターを決行して失敗したファリエロの一族がインドに到来した。ファリエロの一族は、デカン高原の混乱に乗じて「ベラール王国」を築いた。ベラールの名の由来はフェラーラである。

■AD1928年 マルコ・フェレーリ生誕

■AD1951年 アベル・フェラーラ生誕

■AD1951年 エース・フレイリー生誕 「KISS誕生」

■AD1953年 プリヤール人、エドゥアルド・マイヤーに接触

◆アラム（ブリアレオース）の歴史

■1万3千年前 「科学の種族の大移動時代」

■1万3千年前 「戦いの女神マッハ誕生」 「海神リール誕生」 「魔眼の巨人バロール誕生」

「科学の種族の大移動時代」に参加したマハラエルは、アイルランドに入植した。マハラエルは「戦いの女神マッハ」「海神リール」「魔眼の巨人バロール」を古代アイルランドに祀り、現地人を支配下に置いた。マハラエル＝マハリール＝リール、マハラエル＝マバラエル＝バロールとなる。

■BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■BC 7千年 「エラム誕生」「アラム誕生」

「アヌンナキの大航海時代」の参加者がバルト海に到着すると、マハラエルはアイルランドからスカンジナビアに渡った。この時に、スカンジナビア半島に「エラム」「アラム」を生んだ。エラム、アラムの名の由来はワルムベである。ワルムベ＝ワルム＝アラム＝エラムとなる。アラムは、ブリアレオース（バロール）が、エラムはワルムベ（マッハ）が取った。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 ロムルス、初代王に即位 「ローマ王国誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したアラムは、エロスと共にマガン王国（アラビア半島）に入植し、ローマ王国の初代王「ロムルス」を生んだ。ローマの名の由来はアラムであり、ロムルスの名の由来はアラムとエロスの組み合わせである。アラム＋エロス＝ラムロス＝ロムルスとなる。ラテン神話、ローマ王国神話は、核兵器で荒廃したアラビア半島から亡命してきた人々がイタリア人に伝えたものなのだ。

■BC 22世紀 「太陽神アメン誕生」

サバエ人（クウォスのトバルカイン）は、オロクンのトバルカインから生まれたアラム、エラムと連合した。しかし、この時にイマナとニヤメがアラム、エラムから分離し、「太陽神アメン」を生んだ。アメンの名の由来はニヤメとイマナの組み合わせである。ニヤメ＋イマナ＝ニヤマナ＝ヤマナ＝アメンとなる。サバエ人は、太陽神アメンのエジプト行きに同行した。両者は、ナイル上流域に至り、神官都市「テーベ」を建設した。

■BC1293年 「ラーマ皇子誕生」

BC1310年、ラムセスの王統がエジプトを掌握すると、サバエ人と太陽神アメンはテーベからアラビア半島に移住した。祖を同じくするローマ人は、彼らを迎え入れた。ロムルス王統からはラーマヤナで知られる「ラーマ皇子」が生まれている。ラーマの名の由来はアラムである。アラム＝アラム＝ラーマとなる。その後、「マハーバーラタ戦争」時代、スリランカを出撃した魔王ラーヴァナは、「ラーマ王子」の妃シータを拉致し、マハーバーラタ戦争の一環として戦争が始まる。これが「ラーマヤナ」である。つまり、ラーマヤナの舞台は、アラビア半島とスリランカである。

■BC1027年 「マハーバーラタ戦争（ラーマヤナ）」

■BC1027年 「アラム人誕生」

「マハーバーラタ戦争（ラーマヤナ）」を機に、核兵器で砂漠になったアラビア半島を脱出したラーマ皇子の残党はメソポタミアに入植し、「アラム人」として活躍した。アラム人の言葉「アラム語」はバビロニアなどで公用語となり、当初、聖書なども「アラム語」で著された。

■BC945年 「アルメニア人誕生」

アラム人はサビニ人（サバエ人）と共にコーカサスに移住し、エジプトから亡命していたアメン神官団と連合体を築いた。それが「アルメニア人」である。アルメニアの名の由来はアラムとアメンの組み合わせである。アラム＋イマナ（アメン）＝アラマナ＝アラマニア＝アルメニアとなる。更に、アルメニア人の別称「ハヤ」の名の由来はサバエである。サバエ＝サハヤ＝ハヤとなる。だが、残念なことにアルメニア人はその後、タナトスに篡奪されてしまう。

■BC829年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC829年 「ローマ市誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したアラム人は、エトルリア人、サビニ人、アルバ・ロン

ガ人を率いてイタリア半島に移住した。。アラム人は「ローマ市」を築き、ロムルス王、ローマ王国の伝説をイタリア人に伝えた。また、エトルリア人はエトルリア文明を築き、アルバ・ロンガ人はラティヌス神話、ラテン王国の伝説をイタリア人に伝えた。その後、アルバ・ロンガ人からはパレンケ人が生まれたが、彼らはマヤに旅立った。

■BC829年 「月の神アラマク誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したアラム人は、故地であるアラビア半島に帰還し、アラムキ（アラムの人）を由来に「月の神アラマク」をサバエ王国に祀った。

■BC753年 「アルメニア人の大航海時代」

■BC753年 「邇芸速日命誕生」

「アルメニア人の大航海時代」に参加したアルメニア人は、長脛彦と合体し、「邇芸速日命（ニギハヤヒ）」の連合体を築いた。物部氏の祖と言われる邇芸速日の名の由来は、ナーガ（長脛彦）、サバエ、アメンの組み合わせである。ナーガ+サバエ+日（アメン）=ナガバエ日=ニギハヤ日=邇芸速日となる。物部の名の由来はアメンである。アメン=閔氏（ミン）=物部氏となる。

■BC7世紀 「ミン誕生」

神武の東征によって邇芸速日命が敗れると、アルメニア人は福建に移住した。この時に「ミン（ビン）」が築かれた。ミンの名の由来はアルメニアである。アルメニア=メニア=ミンとなる。日本語ではビンと読むが、中国語ではミンである。

■BC509年 「アルメニア王国誕生」

アタルガティス教は、優れた王、偉大な英雄を殺すために共和制を敷いた。「ローマ共和国」の誕生である。元老院を組織したアタルガティス教は、自分たちを守る盾、敵を攻撃する矛としてローマ共和国法を制定した。これを機に、アラム人はコーカサスに築かれたアルメニアに帰還した。

■BC202年 「物部氏誕生」

漢がミンを征服すると、ミンの人々は日本に移住し、因幡氏と組んだ。この時に「物部氏」が生まれた。物部の名の由来はアルメニアと因幡の組み合わせである。アルメニア+イナバ=メニアナバ=物部となる。

■AD66年 ティリダテス、アルサケス朝アルメニア王国初代王に即位

タナトスの一族に属するティリダテスが初代アルメニア王に即位した。ティリダテスの名の由来はポントス王ミトリダテスである。ミトリダテス=トリダテス=ティリダテスとなる。

■AD66年 「アラマンニ人誕生」

タナトスによるアルサケス朝が成立し、アルメニア王国が独立を失うと、アラムとサバエ人は連合して「アラマンニ人」を生んだ。アラマンニの名の由来はアラムとサビニの組み合わせである。アラム+サビニ=アラムニ=アラマンニとなる。アラマンニ人はフン族、アラン族と共に行動し、ゲルマン民族のひとつに数えられている。

■AD496年 「アルメニア人復活」

クロヴィス1世率いるフランク軍と「トルピアックの戦い」で戦火を交えるが、敗北を喫したアラマンニ人は故地アルメニアに帰還する。この系統からヘラクレイオス朝が輩出された。

■AD587年 「ナイマン族誕生」

AD587年、物部守屋は「丁未の乱」を機に、一族を率いて日本を脱出し、モンゴルに逃れた。この時に初めて当地は物（もん）を由来に「モンゴル」と呼ばれた。物部氏は先に来ていた因幡氏と連合して「ナイマン族」を形成した。ナイマンの名の由来はナホルとアメンの組み合わせである。ナホル+アメン=ナオメン=ナイマンとなる。

■AD587年 「閔氏誕生」

AD587年、物部守屋は「丁未の乱」を機に、一族を率いて日本を脱出し、朝鮮半島に逃れた。彼らは「閔氏」を生んだ。閔の名の由来はアルメニアである。アルメニア=メニ=閔（ミン）となる。

■AD610年 ヘラクレイオス、初代皇帝に即位 「ヘラクレイオス朝誕生」

AD610年、首都コンスタンティノポリスに侵攻したヘラクレイオスは皇帝フォカスを処刑し、ビザンツ帝国に「ヘラクレイオス朝」を開いた。

■AD1009年 「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1009年 「ミンガイラス誕生」

「東アジア王族のリトアニア大移住」

■AD1851年 閔妃生誕

■AD1934年 ジョルジオ・アルマーニ生誕

■AD1940年 ジョージ・A・ロメロ生誕

イマナの歴史

◆文氏（イマナ）の歴史

■400万年前 「第1次エスの大移動時代」

■200万年前 「イマナ誕生」

「第1次エスの大移動時代」によってエスが湖水地方に入植すると、クウォスが生まれ、そこから各々が各々の獲物に特化することで50cmから4mに至るバラエティ豊かな人類が揃った。「イマナ」の身長は160cmで、ミャンマー少数民族の姿をしていた。

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「ニャメ誕生」「ナナブルク誕生」「ンジニ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したイマナは、現カメルーンに「ニャメ」「ンジニ」を生み、現ベナンに「ナナブルク」を生んだ。ナナブルクは、身長50cmのサグバタと混合し、獲物を小さい昆虫などに特化することで、身長が160cmから50cm～1mに縮んだ。

■40万年前 「エバシの大航海時代」

■40万年前 「マノー族誕生」「マニ族誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したイマナは、ミャンマーに移住して「マノー族」を生んだ。マノーの名の由来はイマナである。イマナ=イマノー=マノーとなる。また、マレー半島に入植したイマナは、現地人のネグリトと混合して「マニ族」を成した。マニの名の由来はイマナである。イマナ=イマニ=マニとなる。

■40万年前 「プユマ族誕生」

東南アジアを離れたイマナは、して「プユマ族」を、ヴィディエと連合して「パゼッヘ族」を築いた。プユマの名の由来はアプスーとイマナの組み合わせである。アプスー+イマナ=アプイマ=プユマとなる。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「クリュメネー誕生」

「カオスの大移動時代」によって獣人、カオス、ピュグマエイがオーストラリアに到達すると、イマナはアグリオスと組み、「クリュメネー」を生んだ。クリュメネーの名の由来はアグリオスとイマナの組み合わせである。アグリオス+イマナ=グリオマナ=クリュメネーとなる。彼らはその後、大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「メネストー誕生」

「カオスの大移動時代」によって獣人、カオス、ピュグマエイがオーストラリアに到達すると、イマナはステュクスと組み、「メネストー」を生んだ。メネストーの名の由来はイマナとステュクスの組み合わせである。イマナ+ステュクス=マナステュ=メネストーとなる。彼らはその後、大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ハリアクモン誕生」

イマナはと、プレークサウラーと組んで「ハリアクモン」を生んだ。ハリアクモンの名の由来はプレークサウラーとイマナの組み合わせである。プレークサウラー+イマナ=プレークマナ=ハリアクモンとなる。その後、ハリアクモンは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「スカマンドロス誕生」

イマナは、ゼウクソー、テレストーと組んで「スカマンドロス」を生んだ。スカマンドロスの名の由来はゼウクソー、イマナ、テレストーの組み合わせである。ゼウクソー+イマナ+テレストー=ゼウクマナテレス=スカマンドロスとなる。その後、スカマンドロスは河川の娘たちに参加

した。

■ 30万年前 「ネイロス誕生」

「カオスの大移動時代」によって獣人、カオス、ピュグマエイがオーストラリアに到達すると、イマナはレザと組み、「ネイロス」を生んだ。ネイロスの名の由来はイマナとレザの組み合わせである。イマナ+レザ=ナレザ=ネイロスとなる。彼らはその後、河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ネソス誕生」

「カオスの大移動時代」によって獣人、カオス、ピュグマエイがオーストラリアに到達すると、イマナはムシシと組み、「ネソス」を生んだ。ネソスの名の由来はイマナとムシシの組み合わせである。イマナ+ムシシ=ナシシ=ネソスとなる。彼らはその後、河川の娘たちに参加した。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「高天原誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。このとき、台湾は「高天原（タカマノハラ）」と呼ばれていた。タカマノの名の由来はオケアーニスに属するティケーとイマナの組み合わせである。ティケー+イマナ=ティケマナ原=高天原となる。

■ 7万年前 「天之御中主神誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。イマナは、クリュメネー、グレニコス、ペネイオスと組んで「アメノミナカヌシ」を生んだ。アメノミナカヌシの名の由来はイマナ、クリュメネー、グレニコス、ペネイオスの組み合わせである。イマナ+クリュメネー+グレニコス+ペネイオス=イマナメニコネイオス=アメノミナカヌシとなる。

■ 7万年前 「天之常立神誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。イマナは、ティケー、テテユスと組んで「アメノトコタチ」を生んだ。アメノトコタチの名の由来はイマナ、ティケー、テテユスの組み合わせである。イマナ+ティケー+テテユス=イマナティケテテ=アメノトコタチとなる。

■ 7万年前 「天布刀玉命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。イマナ、ヴィディエは連合して天布刀玉（アメノフトタマ）を生んだ。アメノフトタマの名の由来はイマナ、ヴィディエ、ティアマトの組み合わせである。イマナ+ヴィディエ+ティアマト=アマナヴィデティアマ=アメノフトタマとなる。

■ 7万年前 「天宇受売命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。アドメテーは、イマナと連合して「天宇受売」を生んだ。アメノウズメの名の由来はイマナとアドメテーの組み合わせである。イマナ+アドメテー=イマナアゾメテ=アメノウズメとなる。

■ 7万年前 「天火明命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。エウドーラーは、カリユプソーと共にイマナと連合体を組んだ。この時に「天火明」が生まれた。アメノホアカリの名の由来はイマナ、エウドーラー、カリユプソーの組み合わせである。イマナ+エウドーラー+カリユプソー=イマナエウカリユ=アメノホアカリとなる。

■ 4万年前 「天忍穂耳命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。ミマースは、人イマナ、アシアーと混合して「アメノオシホミミ」を成した。アメノオシホミミの名の由来はイマナ、アシアー、ミマースの組み合わせである。イマナ+アシアー+ミマース=イマナアシアミマ=アメノオシホミミとなる。

■ 4 万年前 「天菩卑能命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。ヒッポリュトスは、イマナと混合して「アメノホヒ」を成した。アメノホヒの名の由来はイマナとヒッポリュトスの組み合わせである。イマナ+ヒッポリュトス=イマナヒッホ=アメノホヒとなる。

■ 4 万年前 「天児屋命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。アルキュオネウスは、イマナと混合して「アメノコヤネ」を成した。アメノコヤネの名の由来はイマナとアルキュオネウスの組み合わせである。イマナ+アルキュオネウス=イマナキュオネ=アメノコヤネとなる。

■ 4 万年前 「天手力男命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。クリュテイオスは、イマナと混合して「アメノタヂカラ」を成した。アメノタヂカラの名の由来はイマナとテイオスクリュ（クリュテイオスの反対）の組み合わせである。イマナ+テイオスクリュ=イマナテオスクル=アメノタヂカラとなる。

■ 4 万年前 「天香語山命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が台湾に入植した。ギューゲースは、イマナ、ニヤメと混合して「アメノカグヤマ」を成した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとギューゲースとニヤメの組み合わせである。イマナ+ギューゲース+ニヤメ=イマナギユゲヤメ=アメノカグヤマとなる。

■ 1 万 5 千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1 万 5 千年前 「ハム誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極にやってきたイマナはヴィディエと連合して「ハム」を生んだ。ハムはノアの子として知られるが、実際にはイマナとヴィディエの連合体である。ヴ

ィディエ+イマナ=ヴィマナ=ハムとなる。「ヴィマナ(UFO)」の名の由来もヴィディエとイマナの組み合わせである。ハムはイマナではなく、ヴィディエが主導していた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万5千5百年前 「オマーン誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加して黒龍江に移住し、その後に「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに移住したイマナとニャメは、その後に、メソポタミアを離れ、アラビア半島に上陸した。彼らは、当地に「オマーン」と命名した。オマーンの名の由来はニャメとイマナの組み合わせである。ニャメ+イマナ=ニャマーナ=ヤマーナ=オマーンとなる。

■ 1万5千5百年前 「ウンマ誕生」

アラビア半島からメソポタミアに上陸したイマナ・ニャメは、シュメールの都市国家「ウンマ」を築いた。ウンマの名の由来はイマナとニャメの組み合わせである。イマナ+ニャメ=ナメ=ンマ=ウンマとなる。

■ BC 32世紀 「ソドムとゴモラ」

■ BC 32世紀 「太陽神アメン誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、アラビア半島の現オマーンを離れたイマナとニャメは、エジプトに進出して「太陽神アメン」を生んだ。アメンの名の由来はニャメとイマナの組み合わせである。ニャメ+イマナ=ニャマナ=ヤマナ=アメンとなる。アテナイ王国のサバニ人は、太陽神アメンに同行し、アナトリア半島に移住した。両者は、彼の地でタバル人と出会い、後に、神官都

市「テーベ」を建設した。

■BC2134年 「エジプト第11王朝樹立」

太陽神アメンは、トバルカインと共に「エジプト第11王朝」を開き、人喰い人種スキタイ人の「エジプト第10王朝」と対立した。彼らは、この対決に勝利し、エジプトを再統一した。その時のファラオは、第11王朝のメンチュヘテプ4世であった。その後、太陽神アメンの王統を継ぐアメンエムハト1世が「エジプト第12王朝」を開いている。アメンの王統は、ヒクソスが登場するBC1663年まで続いた。

■BC1650年 「後期ミノス文明誕生」

シェルデン人・ダーナ神族の連合体「ヒクソス」がエジプトに出現すると、エジプト第14王朝は滅亡してしまった。その後、アメン神官団はエジプトを離れてクレタ島に落ち延び、避難した。だが、一部アメン神官団はテーベを拠点に新規に「エジプト第17王朝」を開き、ヒクソス王朝に対抗した。

■BC753年 「アルメニア人の大航海時代」

■BC753年 「ミネア王国誕生」

「アルメニア人の大航海時代」に参加したアメン神官団は、アラビア半島南部に移住した。彼らは、BC8世紀頃に「ミネア王国」を建てている。ミネアの名の由来はイマナである。イマナ=イマニア=マニア=ミネアとなる。

■BC282年 「ペルガモン王国誕生」

ミネア人がアラビアを離れてアナトリアに移住すると、ギリシアのテーバイ人と連合した。彼らは、アナトリア半島に移住した。この時に「ペルガモン」が生まれた。ペルガモンの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン+アメン=バルカメン=ペルガモンとなる。BC282年、ピルタウエルスが初代王に即してペルガモン王国が誕生した。

■ A D 2 7 3 年 「文氏誕生」「林氏誕生」

マニが処刑されると、マニの残党はイランから朝鮮半島に上陸する。この時、「文（MOON）」「林（イム）」が生まれた。文（ムン）、林（イム）の名の由来はイマナである。イマナ＝イマン＝ムン（文）となり、イマナ＝イムナ＝イム（林）となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ムーン誕生」「ルナ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した文氏は、ブリテン島に上陸し、現地人と混合した。この時に「ムーン」「ルナ」の名が生まれた。ムーンの名の由来は文（ムン）であり、ルナの名の由来はMOONである。

■ A D 3 5 7 年 「オースターの大航海時代」

■ A D 6 世紀 「勿吉の大航海時代」

■ A D 6 9 4 年 「摩尼教誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人ムーンは、福建に移住して「摩尼教」を生んだ。この「摩尼教」の由来はイマナであり、預言者マニの「マニ教」とは異なる。

■ A D 6 9 4 年 「モン族誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人ムーンは、ドイツ人BERGと共に満州からミャンマーに移住した。バーグは「ペグー」を築きし、ムーンは「モン族」の名を生んだ。モンの名の由来は文（ムン）である。

■AD1287年 ワーレルー、初代王に即位 「ペグー朝誕生」

AD1287年、ワーレルーが初代王に即位して「ペグー王朝」が開かれた。しかし、文氏の系統であり、スコタイ朝の援助を受けたワーレルーがペグー朝の王位に就くと、反感を持ったオリジナルのモン族が、ミャンマーを後にデカン高原に移住した。AD1757年にコンバウン朝の支配下に置かれると、ペグー族、モン族が朝鮮半島に帰還し、祖を同じくする朴氏、文氏に合流した。

■AD1320年 「バフマニー朝誕生」

4人のバイエルン公が立つと、ヴィッテルスバッハ家の一部（バッハ）がバイエルンを後にインドに移住した。一方、AD1287年、スコタイ朝の援助を受けたワーレルーがペグー朝の王位に就くと、反感を持ったモン族がミャンマーを後にデカン高原に移住した。白人の顔をしたヴィッテルスバッハ家はデカン高原に上陸し、モン族と組んで、AD1347年に「バフマニー朝」を開いた。バフマニーの名の由来はバッハとモンの組み合わせである。バッハ+モン=バフハモニ=バフマニーとなる。

■AD1323年 「シシマン朝（ブルガリア帝国）誕生」

■AD1368年 「明誕生」

イギリス人の摩尼教（ムーン）、アフリカ人の白蓮教（ルオ族、フォン族）、リトアニア大公国の朱元璋が「紅巾の乱」を指揮し、元を退けて「明」を開いた。明の名の由来は摩尼である。

■AD1433年 「鄭和の大航海時代」

■AD1433年 「フンジ王国誕生」

摩尼教は、鄭和の船団に同行してアフリカ大陸に移住した。紅海で船団を離脱した摩尼教は、単身、ナイル河を遡り、ヌビアに北アフリカ初の黒人イスラーム国家を築いた。フンジの名の由来はフージャン（福建）である。フージャン=フーンジャン=フンジとなる。

■AD1490年 「MANN (マン) 誕生」

バフマニー朝が分裂を始めると、バッハはモン族と共にヨーロッパに移住した。この時に、「MANN (マン)」の名が生まれた。マンの名の由来はモン、或いはバフマニーの「マニー」である。モン=マン (MANN) となる。BERGとMANNの一族は、朴氏と文氏の末裔である。

■AD1539年 「ダホメー王国誕生」

タウングー朝がペグー朝を滅ぼすと、ペグー族、モン族がミャンマーを脱出して、遠くナイジェリアの地にまで赴いた。ペグー族とモン族は連合して「ダホメー王国」を築いた。ダホメーの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン=アメン=トバメン=ダホメーとなる。

■AD1592年 「文禄の役」「慶長の役」

褐色の肌を持ったフォン人 (劉氏)、ルオ族 (ラーオ族) が中心になって「白蓮教」を復活させ、紅巾族を指揮して大元に対して蜂起した。しかし、同盟者であった朱元璋に弾圧を加えられると、紅巾族は中国を脱出して日本に落ち延びた。その紅巾族の子孫が小西氏と宗氏である。宗義智 (マニ教)、小西行長 (フォン族) は、倭寇を統べる松浦鎮信 (マトウーラ族)、有馬晴信 (エラム人)、大村喜前、宇久純玄 (ブギス族) と共に朝鮮出兵、第一軍の一番隊を担った。つまり、「文禄の役」「慶長の役」とは、秀吉の案ではなかった。「文禄の役」「慶長の役」は小西氏、宗氏の案であり、中国大陸に改めて覇を唱え、朱氏に対する先祖の雪辱を晴らすのが目的だったのだ。二番隊は、加藤清正 (イギリス人ゴドー) と鍋島直茂 (ネパール人)、相良長每 (サカラバ族) が務めた。三番隊は、黒田長政 (ケルト人)、大友吉統 (ボルジギン家) が務めた。四番隊は、毛利勝信 (マオリ族)、島津義弘 (イギリス人スミス) が務めた。五番隊は、福島政則 (ブギス族)、戸田勝信 (ハルシュタット人)、長宗我部元親 (カペー家)、蜂須賀家政 (ノルマン人)、生駒親正 (ユカタンのクメール人)、来島通行 (釜山倭館の村上氏) が務めた。六番隊は、小早川隆景 (マプングプエ人)、立花鎮虎 (ニョロ人)、毛利秀包、高橋統増 (ダキア人)、筑紫廣門 (フェニキア人)、毛利輝元が務めた。

第二軍の七番隊は、宇喜多秀家 (宇久+喜多川)、増田長盛。大谷吉継 (ホータン)、加藤光泰、石田三成 (ウァシュテベック家)、前野長康が務めた。八番隊以降は割愛するが、豊臣秀吉、木下氏などからしてキガ族、シク教の系統に連なっている。だが、「文禄の役」「慶長の役」に参加した面々も非常に国際色豊かであり、由緒正しい王統に属していた。また、受けて立った明

の朱氏や李氏朝鮮の李氏も、リトアニア大公国の王統に連なる人々である。つまり、両者は東アジア人の姿をしてはいたものの、先祖の顔ぶれを一瞥すれば、「文禄の役」「慶長の役」が非常に国際的な戦争だったことが分かる。

■AD1761年 「ナヒヤーン家誕生」

AD18世紀になると、フンジ人がアラビア半島に移住してバニ＝ヤース家に参加した。この時に、彼らは「ナヒヤーン」を称した。ナヒヤーンの名の由来はヌビアである。ヌビア＝ヌビヤーン＝ナヒヤーンとなる。

■AD1918年 イングマル・ベルイマン生誕

■AD1937年 ダスティン・ホフマン生誕

■AD1939年 バリー・マン生誕

■AD1946年 キース・ムーン生誕 「ザ・フー誕生」

■AD1946年 ヤン・アッカーマン生誕

■AD1946年 ビガス・ルナ生誕

■AD1950年 シャンタル・アケルマン生誕

■AD1953年 文在寅生誕

■AD1954年 文鮮明、教団を創立 「統一協会誕生」

■AD1971年 「アラブ首長国連邦誕生」

ナヒヤーン家は、AD1761年から代々アブダビの首長の座に就いた。ザイード大帝の時代、AD1971年に「アラブ首長国連邦」の一員としてイギリスから独立した。

■AD1987年 ムン・グニョン生誕

◆マナセ（メネストー）の歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「メネストー誕生」

「カオスの大移動時代」によって獣人、カオス、ピュグマエイがオーストラリアに到達すると、イマナはステュクスと組み、「メネストー」を生んだ。メネストーの名の由来はイマナとステュクスの組み合わせである。イマナ+ステュクス=マナステュ=メネストーとなる。彼らはその後、大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「ニアス族誕生」

メネストーは、オーストラリアからマレー半島に移住し「ニアス族」を生んだ。ニアスの名の由来はメネストーである。メネストー=メニアストー=ニアスとなる。

■BC40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「マナセ族誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したメネストーは、「マナセ族」を称した。メナス＝メナセ＝マナセとなる。彼らは、イスラエルの失われた10支族として知られている。

■BC30世紀 「黙示録アルマゲドン」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ナジュド誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したメネストーは、アラニア半島に移住して「ナジュド」を築いた。ナジュドの名の由来はメネストーである。メネストー＝メネジュドー＝ナジュドとなる。

■BC2850年 メネス、初代ファラオに即位 「エジプト第1王朝誕生」

アラビアを離れたナジュドは、紅海の対岸エジプトに上陸した。彼らは、エジプトに「メネス」を生んだ。メネスの名の由来はメネストーである。彼らは、ナルメル（シュメール人、ヌビア人）と組み、初代ファラオに即位して「エジプト王国」を治めた。

■BC28??年 「ミノス文明誕生」

その後、タナトスに属するデンがファラオの座に就くと、メナス（ナルメル）の王統はこれを嫌ってエジプトを脱出し、クレタ島に避難した。この時、クレタに「ミノス文明」が発生した。ミノスの名の由来はメナスである。メナス＝メネセ＝ミノスとなる。

■BC1230年 「マナセ族復活」

新しいイスラエル王国（北イスラエル王国）が建設されると、メナスの残党はイスラエルに駆けつけた。

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「アケメネス家誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したマナセ族は、イランに移住した。マナセ族は、アッカド人と組んで「アケメネス家」を生んだ。アケメネスの名の由来はアッカドとマナセの組み合わせである。アッカド+マナセ=アッカマナセ=アケメネスとなる。アケメネス家は、後にダリウス大帝を輩出しているが、ダリウス大帝はタナトス（ミトラス教）に属していた。

■ B C 3 3 0 年 「ペルシア人の大航海時代」

■ B C 3 3 0 年 「伊勢神社誕生」

「ペルシア人の大航海時代」に参加したマナセ族は、「伊勢国」に移住した。マナセ族は、第1のイザヤを惨殺しているが、その後は、イザヤの名を借りて第2のイザヤ、第3のイザヤを称した。マナセ族は、イザヤに因んで「伊勢谷」「磯谷」などの姓を誕生させている。イザヤ=イサヤ=伊勢（いせ）となる。マナセ族は、「伊勢神社」を創建した。

■ A D 9 ?? 年 平維衡生誕 「伊勢平氏誕生」

マナセ族は、平貞盛に接近して自身の血統を打ちたてた。この時に「伊勢平氏」の祖、平維衡が誕生している。

■ A D 1 1 1 8 年 平清盛生誕

平清盛は、A D 1 1 5 9 年には朝廷の警察力・軍事力を掌握して武家政権樹立の礎を築いた。清盛は全国に500余りの荘園を所有し、日宋貿易によって莫大な財貨を得ていた。しかし、「平

家にあらずば人にあらず」とまで言われた平家が傾きはじめると、一族は徐々に日本を脱出してモンゴルへの移住を始めた。

■AD1181年 「ホシュート誕生」

AD1179年には平重盛が、AD1181年には病死と見せかけて平清盛が、平知度が討ち死にに見せかけてモンゴルへと旅立っている。歴史上、平家は壇ノ浦で皆殺しにされたと伝えられているが、「壇ノ浦の戦い」では、平家は誰一人死なずにモンゴルへと旅立つことが出来た。源氏側は平家に逃げられたわけだが、日本の国土に存在しないということは死んだも同然である。また、無慈悲にも平家を女子供もろとも皆殺しにしたと宣伝すれば、隠れている反対勢力に対する威嚇・脅しとなる。

とにかく、モンゴルに落ち延びた清盛、経盛、重盛、教盛、宗盛、知盛ら平家一行は、善棟王が築いた「オイラート」に参加し、落人を由来に「ホシュート」を称した。落人=オチュード=ホシュートとなる。AD1219年にチンギスの征西がはじまると、ホシュートもこれに同行した。

■AD1241年 「パシュトゥーン人誕生」

AD1219年にチンギスの征西がはじまると、ホシュートもこれに同行した。ホシュートは、ホラサン帝国攻撃の際、一部がアフガンに残留した。彼らは「パシュトゥーン人」となる。パシュトゥーンの名の由来はホシュートである。ホシュート=ホシュートン=パシュトゥーンとなる。彼らは、ギルザイ族を乗っ取って「ブーラーン族」「スライマン・ヘール族」「アリー・ヘール族」「タラキ族」などを形成した。ヘールの名の由来は平（ひら）であり、タラキの名の由来は平氏（タイラシ）である。

■AD1359年 「モルダヴィア候国誕生」

その後、「ワールシュタットの戦い」に参加したホシュートは、モルダヴィア人を支配下に置き、ボグダン公がハンガリー軍を退けて「モルダヴィア公国」を黒海沿岸に打ち建てた。ボグダンの名の由来は日本語の「爆弾」である。

■AD1425年 ハーギー1世ギレイ、クリミアを掌握 「クリミア・ハン国誕生」

また、ハージー1世ギレイがリトアニア大公国の支援を受けて自立し、「クリミア・ハン国」を建てている。ハージーの名の由来は平氏（へいし）であり、ギレイの由来は日本語の「綺麗」である。

■AD1477年 「コサック誕生」

その後、クリミア・ハン国を拠点にウクライナにも進出すると、ホシュートは現地の農民を「コサック」と呼んだ。コサックの名の由来は日本語の「小作人」である。コサックには、ドン・コサックやウクライナ・コサックがいたが、ホシュートは「ウクライナ・コサック」として活動した。コサックの首長は「アタマン」と呼ばれたが、これは日本語の頭（あたま）に由来している。

■AD1582年 首長イエルマク、シベリアに進出

■AD1587年 トボルスク城建設

コサックは、シベリアに「トボルスク城」を建設した。コサックは、この時代に、シベリアに住んでいた宇宙人（トバルカイン）と交流を持った。その時の記憶が宮崎駿の身体の隅々に刻まれている。つまり、宮崎駿の映画の情景には、シベリア時代の景色が刷り込まれている。彼の世界観は作られたものではなく、思い出されたもの、記憶、フラッシュバックで成立している。

■AD1598年 ボリス・ゴドゥノフ、モスクワ大公に即位

ゴドゥノフの名の由来はボグダンである。ボグダン+フ=グダノフ=ゴドゥノフとなる。ゴドゥノフ家は、モルダヴィアを支配していたボグダン公の子孫である。ボリス・ゴドゥノフの妹は、フヨードル1世の後である。ということで、イヴァン4世が死去したあと、ボリスは、モスクワ大公国事実上の支配者として君臨していた。その後、フヨードル1世が死去し、リューリクの王統が途絶えたため、ボリスはツァーリとして即位した。

■AD1638年 シベリア遠征軍、太平洋に達する

コサックは太平洋に達すると、南下し、波状的に江戸時代の日本に移住した。壇ノ浦以来の故国

への帰還である。この時に「崎」が付く姓が量産された。「崎」は、ロシアで使われる、人を意味する「ツク」「スク」「スキー」などと同様のものである。どこかの谷に住んでいたコサックは「谷崎」を、聖地に住んでいたコサックは「宮崎」を称した。フヴォスト（ロシア姓）と名乗っていたコサックは「尾崎」を、オストロフスキー（ロシア姓）を名乗っていたコサックは「島崎」を、ホルムスク（地名）から来たコサックは「岡崎」を称した。

また、ホータン人と交流していたコサックは、ホータン人も同行させていた。ホータン人からは「大滝」「大竹」「太田」「大谷」などの名が生まれた。いずれも「ホータキ、ホータニキ（ホータンの人）」に由来する。ホータンを由来にしている人々はヒットイト人の末裔だが、オータンを由来にしている人々はタナトスである。

■AD1648年 ボグダン・フメリニツキー、大規模な反乱を指揮 「ヘーチマン国家誕生」

ウクライナ・コサックは、「ポーランド・コサック戦争」「フェドローヴィチの蜂起」「フメリニツキーの乱」などの反乱軍を指揮した。AD1648年には、フメリニツキーが「ヘーチマン国家」を築いている。ヘーチマンとは「平氏の男」の意である。

■AD1821年 フヨードル・ドストエフスキー生誕

■AD1839年 モデスト・ムソルグスキー生誕

■AD1872年 島崎藤村生誕

■AD1882年 イーゴリ・ストラヴィンスキー生誕

■AD1886年 谷崎潤一郎生誕

■AD19??年 マルタン・モネステイエ生誕

モネステイエの名の由来はメネストーである。メネストー＝メネストエ＝モネステイエとなる。

■AD1938年 ウラジミール・ヴィツツキー生誕

■AD1939年 ピーター・ボグダノビッチ生誕

ボグダン+ビッチ=ボグダノビッチとなる。

■AD1941年 宮崎駿生誕 「ジブリ誕生」

ジブリの名の由来はシベリアである。当人たちは、そうは言っていないが（笑）。「崎」が名前につく人々はシベリア探検を行ったコサックの末裔だ。もっと遡れば平家であり、もっともっと遡れば初代ファラオ、メネスの子孫である。

■AD1948年 大滝詠一生誕

■AD1963年 岡崎京子生誕

■AD1966年 尾崎豊生誕

■AD1972年 YUKI（磯谷有希）生誕

◆マンデラ（スカマンドロス）の歴史

■30万年前 「スカマンドロス誕生」

イマナは、ゼウクソー、テレステーと組んで「スカマンドロス」を生んだ。スカマンドロスの名の由来はゼウクソー、イマナ、テレステーの組み合わせである。ゼウクソー+イマナ+テレステー=ゼウクマナテレス=スカマンドロスとなる。その後、スカマンドロスは河川の娘たちに参加

した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「アンダマン諸島発見」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したスカマンドロスは、マイアンドロスと共にアンダマン諸島に入植した。この時に、「アンダマン諸島」の名が生まれた。アンダマンの名の由来はマイアンドロスとスカマンドロスの組み合わせである。マイアンドロス+スカマンドロス=アンドマンド=アンダマンとなる。

■ 30万年前 「ミンドロ島発見」

スカマンドロスは、アンダマン諸島からフィリピンに向かい、「ミンドロ島」を発見した。ミンドロの名の由来はスカマンドロスである。スカマンドロス=スカミンドロス=ミンドロとなる。

■ 30万年前 「スカマンデル川誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加してヨーロッパに帰還したスカマンドロスは、トロイア近辺の河川流域に居住し、当地の河川を「スカマンデル川」と命名した。スカマンデルの名の由来はスカマンドロスである。スカマンドロス=スカマンデルス=スカマンデルとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 3万年前 「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」

■ 3万年前 「マントゥーロ誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加して東南アジアに帰還し、その後「ティル・ナ・ノーグの大移民時代」に参加したスカマンドロスはペルーに移住した。彼らは「マントゥーロ川」を

拠点にした。マントゥーロの名の由来はスカマンドロスである。スカマンドロス＝マンドロ＝マントゥーロとなる。

■ A D 8 世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「曼荼羅誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したスカマンドロスは、「曼荼羅」をもたらした。曼荼羅の名の由来はスカマンドロスである。スカマンドロス＝マンドロ＝曼荼羅となる。スカマンドロスが製作した曼荼羅は、真言宗に奪われた。その後、スカマンドロスは、チベットに移住した。

■ A D 1 5 7 2 年 「インカ人の大航海時代」

■ A D 1 5 7 2 年 「マンデラ誕生」

「インカ人の大航海時代」に参加したマントゥーロは、南アフリカを目指した。南アフリカに到達すると、ケチュア族は「コサ族」を継承して復活させ、マントゥーロからは「マンデラ」の名が生まれた。マンデラの名の由来はマントゥーロである。

■ A D 1 5 7 2 年 「三大提携部族（MHA）誕生」

インカ帝国が滅ぶと、マントゥーロ族、ワラカ氏、望月氏、奥州藤原氏がインカ帝国を脱出して北アメリカ大平原地帯に侵入した。マントゥーロ族は「マンダン族」を、ワラカ氏が「アリカラ族」を、望月氏が「ヒダーツァ族」を形成した。ヒダーツァの名の由来は望月氏と縁がある飛騨である。この3者は、A D 1 8 5 1 年にアメリカ合衆国と不可侵条約「ララミー砦の条約」を結び、「三大提携部族（MHA）」を結成している。

■ A D 1 5 7 2 年 「グズムンズドットィル誕生」

奥州藤原氏らは、アメリカには上陸せずにそのまま北上し、アイスランドに至った。インカ人の顔をした奥州藤原氏はアイスランド人と混合して「グズムンズドットィル」の名を成した。グズ

ムンズドットイルの名の由来は、ケチュアとマントウーロと鳥取（奥州藤原氏）の組み合わせである。全てインカに纏わる名前である。ケチュア+マントウーロ+鳥取=ケチュマントトトリ=グズムンズドットイルとなる。

■AD1918年 ネルソン・マンデラ生誕

南アフリカ共和国第8代大統領

■AD1918年 ジョアン・セザール・モンテイロ生誕

■AD1965年 ビヨーク生誕

◆天孫族（レメク）の歴史

■1万3千年前 「大地殻変動」

■1万3千年前 「エノクの大航海時代」

■1万3千年前 「澳門誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したレメクは、エノクと共に広東に入植した。彼らは拠点を「澳門（マカオ）」と命名した。マカオの名の由来はレメクとエノクの組み合わせである。レメク+エノク=メクエ=マカオとなる。澳門のレメクは、台湾に赴いて祖を同じくするマカタオ族を迎え入れた。

■1万3千年前 「メコン誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したレメクは、エノクと共にインドシナ半島に上陸した。両者は

、大河のひとつに「メコン」と命名している。メコンの名の由来はレメクとエノクの組み合わせである。レメク+エノク=メクエノ=メコンとなる。

■ 1万3千年前 「マガン王国（ミケーネ文明）誕生」

エノクと分離したレメクは、メコン河を離れてアラビア半島にまで足を伸ばし、伝説の「マガン王国」を建設した。マゴンの名の由来はメコンである。メコン=メゴン=マゴンとなる。マゴンとは「ミケーネ」のことでもあるが、ミケーネ文明は、ギリシアではなくアラビア半島に存在したのだ。ミケーネの名の由来もマガンと同じく、レメクとエノクの組み合わせである。レメク+エノク=メクエノ=ミケーネとなる。

■ BC 1027年 「マハーバーラタ戦争」

■ BC 1027年 「メガラ誕生」「マゴ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出し、ペロポネソス半島に上陸したミケーネ人とチェケル人は「メガラ」を築いた。メガラの名の由来はミケーネとチェケルの組み合わせである。ミケーネ+チェケル=ミケル=メガラとなる。メガラ人は船人として地中海を縦横無尽に駆け、カルタゴ人やフェニキア人と交流をし、BC 685年には植民都市カルケドンを築き、BC 667年には植民都市ビザンティオンを建設した。メガラ人は、カルタゴでは「マゴ」を称した。マゴの名の由来はメガラである。メガラ=マゴラ=マゴとなる。

■ BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ BC 7世紀 「天孫族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したマゴは、澳門に移住した。この時に「天孫族」が生まれた。天孫の名の由来は、天とマゴの組み合わせである。天+マゴ（孫）=天孫となる。

■ BC 7世紀 「天孫降臨」

九州から澳門に天孫族を出迎えに来た大伴氏・久米氏（フェニキア人）は、猿田彦の案内で天孫族を日向国に先導した。

■BC7世紀 「イエマック（ワイヒャク）誕生」

しかし、天孫族は日本には留まらず、北上して満州に赴いた。神武天皇率いる天孫族は、多氏の時と同様に現地人にフェニキア文字のひとつオメガを冠した。やがて、オメガは変遷を重ねて「イエマック（日本の呼称ワイヒャク）」となる。オメガ=ウォメツガ=イエマックとなる。イエマック（天孫族）は、1万3千年前に、古の獣人やオケアーニスが築いた天皇家の系譜を継承した。神武天皇から垂仁天皇に至る天皇の系譜は、獣人とティアマト、オケアーニスなどの連合体であり、天孫族とは無関係である。

■BC6世紀 「マゴ朝誕生」

BC6世紀、メガラ人はカルタゴに「マゴ王朝」を開いた。

■BC409年 将軍ハンニバル・マゴ、シチリア侵攻

BC409年、将軍ハンニバル・マゴは、カルタゴ軍をシチリアに侵攻させて「第2次ヒメラの戦い」を指揮した。

■BC4世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■BC4世紀 「ムスコギー誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したイエマックは、北米北東部森林地帯に移住した。イエマックは、現地人と混合して「ムスコギー族」を形成した。ムスコギーの名の由来は朝鮮語「何の肉ですか？（ムスンコギヤ?）」である。ムスンコギヤ=ムスコギヤ=ムスコギーとなる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「モーガン誕生」

「大和人の大航海時代」に参加したイエマックは、現地人と混合して「モーガン」の名を生んだ。モーガンの名の由来はマゴンである。マゴン＝マーゴン＝モーガンとなる。その後、天孫族は A D 6 5 6 年にジュート人と連合して「マゴンサエテ王国」を築いている。マゴンサエテの名の由来はマゴとジュートの組み合わせである。マゴ+ジュート＝マゴンジュート＝マゴンサエテとなる。

■ A D 5 0 7 年 「継体天皇誕生」

柔然に参加して力を蓄えた継体天皇は、主戦力を失って弱体化した宇文部から皇位継承権を奪い返した。武烈天皇（ワカサザキ）は托跋部出身、鮮卑最後の天皇である。当時、インド・サカ王朝滅亡を機にインドから落ち延びた蘇我氏（ソグド人）が満州を訪ずれ、継体天皇の一族と親交を温めていた。A D 5 2 1 年に柔然は分裂しているが、これはローラン主導の柔然とイエマック主導（継体天皇）の柔然に分裂したことを示す。これを機に、柔然（ローラン主導）はパンノニアに侵攻して「アヴァール王国」王位を篡奪することになる。

■ A D 5 3 1 年 「マクリア人の大移動」

「マクリア人の大移動」の参加者：安閑天皇（マクリア）、ハルハ部（アルフ）、北狄（ノバティア）、丁零（ドンゴラ）。彼らは、ヌビアに王国を建設し、パンノニア、中央アジアにアーパード家、マジャーール人、クマン人、ペチェネグ族などの有力な騎馬民族を生んでいる。

■ A D 5 3 1 年 「マクリア人誕生」

マクリアの名の由来は安閑天皇の御名「匂大兄広国押武金日尊（まがりおおえひろくにおしたけかなひのみこと）」のマガリに由来する。このマガリはマゴの故地メガラに由来している。欽明天皇、宣化天皇は日本行きを決めたが、安閑天皇だけはモンゴル残留を決めた。この時に「マクリア人」が誕生した。マクリア人は、ハルハ部、北狄、丁零と連合体を結成し、柔然や突厥帝国の台頭を機にモンゴルを離れて西方を目指した。

オリエント地方に足を踏み入れた一行は、何を思ったか、更に南下して未知の領域であるアフリカ大陸に至り、エジプトを通過した。そして、彼らはナイル上流域ヌビアにまで足を伸ばした。モンゴル人の顔をした安閑天皇の一族はヌビア人と混合し、「マクリア王国」を建設した。

■AD628年 「ヨハネスの大航海時代」

■AD628年 「ハワイ誕生」「渤海誕生」

マーシア王国の属国家を機に、天孫族、ジュート人、スミス（司馬氏）、スティルス（尚氏）、段部を率いてブリテン島を脱出する。アメリカ通過時にモヒカン族を、マヤ通過時にククルカン神族を迎えた彼らは、新航路の開発を目的に広大な太平洋を冒険中、偶然にも「ハワイ諸島」を発見した。次いで、一行は「グアム諸島」も発見した。ハワイの名の由来は魏（ウェイ）であり、グアムの名の由来は日本語「神」である。ウェイ＝フエイ＝ハワイとなる。ハワイ人には、イギリス人、マヤ人、日本人の血が流れていることになる。ハワイを発った一行は、第二の拠点として満州に上陸した。当時、満州は唐の支配下にあったが、倭人は現地人と混合して、AD698年に「渤海国（ボハイ）」を建てた。ボハイの名の由来はハワイである。ボハイ＝ボワイ＝ハワイとなる。一方、スティルス（尚氏）は単身、満州から故地である中国に帰還した。

■AD825年 「マーシア人の大航海時代」

■AD825年 「マジヤール人誕生」「クマン人誕生」

「マーシア人の大航海時代」に参加したマーシア人は、エクバードによるイングランド統一を機に、フォトラ（エフタル）を率いてイングランドを離れ、パンノニアに移住する。この時、マーシア人は安閑天皇の後裔マクリア人と合体し、「マジヤール人」が誕生した。マジヤールの名の由来はマーシアとマクリアの組み合わせである。マーシア＋マクリア＝マーシアリア＝マジヤールトなる。一方、天孫族とガド族は差別化のために「クマン人」を称した。クマンの名の由来は熊野国である。熊野＝クマノ＝クマンとなる。

■AD905年 「ヒメノ朝誕生」

マジヤール人と袂を分かったクマン人は、更に分裂した。ガド族は「コムネーノス」を名乗ったが、天孫族は「ヒメノ」を名乗った。ヒメノの名の由来は熊野である（ハ行は力行を兼ねる法則が用いられている）。クマノ＝フマノ＝ヒメノとなる。AD905年、サンチョ1世がアリスト家のトダと結婚して「ヒメノ朝ナバラ王国」を建設している。AD1004年には、「大王ヒ

「スパンシア皇帝」と呼ばれたサンチヨ3世が輩出された。

■AD1131年 「中山家誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人モーガンは、ハワイを発って満州に立ち寄った。彼らは、契丹（キタイ）に肖ろうと、「刀伊（トイ）の賊」を称して九州に侵攻した。刀伊の名の由来は契丹（キタイ）である。キタイ＝キトイ＝トイ（刀伊）となる。

イギリス人モーガンは、九州から京都に移り、藤原家保に接近して女兒を儲けている。この女兒が成長すると、藤原忠宗に接近して自身の血統を打ち立てている。この時に誕生したのが「中山家」の祖、中山忠親である。

中山の名の由来は女真である。女真（ジュシャン）＝チュウサン＝中山（チュウサン）となる。中山家からは明治天皇が輩出されている。

■AD1187年 「天孫氏誕生」「舜天王統誕生」

沖縄に入植したイギリス人モーガンは、先祖である天孫族の名を採り「天孫氏」を称した。天孫（てんそん）を反対にした舜天（しゅんてん）が「舜天王統」を創始した。

■AD12世紀 「ホメイニー誕生」「ハーメネイー誕生」

AD12世紀頃にヒメノ家が覇権を喪失すると、彼らの一部はカシミールに落ち延びて「ホメイニ」「ハーメネイー」の名を形成した。2つの名はヒメノに由来する。ヒメノ＝ホメイニー＝ホメイニー＝ハーメネイーとなる。

■AD1260年 「英祖王統誕生」

AD1260年、天孫氏の末裔である英祖が「英祖王統」を開いているが、英祖の名の由来はイギリスである。

■AD1340年 「モグーリスタン・ハン国誕生」

AD1185年、コムネーノス朝が滅ぶと、コムネーノス家を離脱した天孫族はマクリアの名を

復活させ、「モグーリ」を称した。モグーリの名の由来はマクリアである。マクリア=マクーリア=マグーリア=モグーリとなる。チャガタイハン国が分裂すると、彼らは「モグーリスタン・ハン国/東チャガタイ・ハン国」を建てた。

■AD1349年 「孫氏誕生」

AD1349年に英祖王統が滅ぶと、天孫氏は広東地方に渡り、「孫氏」を称する。孫氏からは「辛亥革命」の指揮者、孫文が輩出されている。

■AD1526年 「ムガル帝国誕生」

AD1483年、モグーリ・スタンにバーブルと名付けられた男子が誕生している。これが、後のインドに覇を唱え、「ムガル帝国」を築くことになる初代ムガル皇帝バーブルである。ムガールの名の由来はモグーリである。モグーリ=モグール=ムガルとなる。

■AD1860年 「回民蜂起」

AD1803年、首都デリーが大英帝国に占領されると、ムガル帝国に斜陽の季節が訪れる。AD1860年、「セポイの乱」を機に、ムガル王家は故地であるモンゴルへの帰還を実施する。しかし、モンゴルの代わりにタリム盆地に拠点を得たらは、ホータンに独立政権を築いて「清」に挑戦した。これが、「回民蜂起」である。

■AD1837年 J・P・モーガン生誕 「モーガン財閥誕生」

■AD1852年 明治天皇生誕

天皇家は、長いこと藤原氏に篡奪されていたが、明治天皇の即位によって天皇家（イエマツクの王統）は天孫族の手に戻った。

■AD1866年 孫文生誕

若き日の孫文は、先祖の声に耳を傾けるように、天孫族の足取りを辿るようにハワイ、イギリス、日本と拠点を転々とした。

■AD1898年 ルネ・マグリット生誕

マグリットの名の由来は「マクリアの人」である。マクリア+ト（人）=マクリアット=マグリットとなる。

■AD1902年 アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニー生誕

アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーは、イラン・イスラム共和国初代最高指導者に就任した。

■AD1920年 エレイン・モーガン生誕

■AD1939年 アーヤトッラー・セイイェド・アリー・ホセイニー・ハーメネイー生誕

アーヤトッラー・セイイェド・アリー・ホセイニー・ハーメネイーは、イラン・イスラム共和国第2代最高指導者に就任した。

◆多氏の歴史

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「多氏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したマゴは、澳門に移住し、天孫族となった。天孫族は、澳門の現地人にフェニキア文字のひとつ「オメガ」を冠して「多氏」を生んだ。多の名の由来はオメガの読み「オー」である。因みにオミクロンの読みは「オ」である。オー（大、多）とオ（小）は、日本語に影響を与えていることがわかる。

■ B C 7 世紀 「大国主命誕生」

澳門から出雲国にやって来た多氏は、賀茂氏、安曇氏を廃して出雲国に糞食い、人身御供を強要していたインドの悪魔ナムチ（大己貴神）を皆殺しにした。その後、多氏は「大国主神」を祀って出雲の民を正しく導いた。

■ B C 7 世紀 「呉（春秋戦国時代）誕生」

「国譲り」が実行されると、多氏は前身である天孫族に出雲国を譲り、自身は長江下流域に拠点を移し、「呉（ウー）」を築いた。呉（ウー）の名の由来は多（オー）である。多氏の「呉（ウー）」は、長江水系の覇権を巡ってヤワン族の越（ユエ）やの楚（チュ）と激しく対立した。

■ B C 4 7 3 年 「大和朝廷誕生」

呉が B C 4 7 3 年に滅ぶと、呉（多氏）は日本に帰還した。彼らは大和国に移住してティアマトと組み、「大和朝廷（前身）」を作った。その後、B C 2 2 2 年に滅んだ魏（倭人）が、大和国を訪れて初めて「大和朝廷」が誕生する。大和の漢字表記の由来は、大（多）と和（魏）の組み合わせである。大和国は、古来から「ヤマト」と呼ばれていたが、「大和」の漢字表記はこの時が最初である。

■ A D 2 2 2 年 「呉（三国時代）誕生」

「大和人の大航海時代」前夜、大和国の多氏は、再度中国に覇を唱えるべく、日本を後に中国に出撃した。A D 2 2 2 年、多氏は「呉」を再建した。

■ A D 2 8 0 年 呉、大和国に帰還

A D 2 8 0 年に「呉」が司馬炎に率いられた「晋」の軍に敗れると、多氏は日本に帰還し、「大和人の大航海時代」の準備に入った。この大航海時代の計画は、中国の地にいた頃から多氏が温めていたものと考えられる。そのため、多氏と倭人が日本に帰還する際、計画に賛同した中国・

朝鮮の有志をたくさん連れて戻っている。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「オースター誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した多氏は、スコットランド北部に「オークニー諸島」を発見し、そのまま現オーストリア近辺に足を踏み入れると当地を「オースター」と呼んだ。オークニーの名の由来は「大国主命」であり、オースターの名の由来は「多氏の土地」である。多（オー）＋土地（スター）＝オースターとなる。

■ A D 3 5 7 年 「オースターの大航海時代」

■ A D 3 5 7 年 「エステ誕生」

「オースターの大航海時代」に参加したオースターは、イタリアに移住し「エステ」の名を生んだ。エステの名の由来はオースターである。オースター＝オスタ＝エステとなる。

■ A D 3 5 7 年 「アサド家（前身）誕生」

「オースターの大航海時代」に参加したオースターは、アラビア半島に移住し、ヒムヤル王国に侵入した。この時に「アサド」が生まれた。アサドの名の由来はオースターである。オースター＝アースター＝アサドとなる。

■ A D 3 5 7 年 「ダイフェド王国誕生」

「オースターの大航海時代」に参加したオースターは、ブリテン島に帰還し、ウェールズに拠点を得た。彼らは「ダイフェド王国」を築いたが、ダイフェドの名の由来は大和人（やまとじん）の別読み「ダイワビト」である。ダイワビト＝ダイファド＝ダイフェドとなる。アンワンなる人物が、初代ダイフェド王に即位している。

■AD357年 「勿吉（ウージ）誕生」

「オースターの大航海時代」に参加したオースターは、太平洋を渡って満州に移住した。オースターは、満州人と混合して「勿吉（ウージ）」を形成した。ウージの名の由来はオースターである。オースター＝オージター＝ウージとなる。

■AD357年 「ウズベク誕生」

「オースターの大航海時代」に参加して「勿吉」を生んだオースターは、オースターの大航海時代に参加していたドイツ人BERGと組んで「ウズベク族」を生んだ。ウズベクの名の由来は勿吉（ウージ）と朴（バーグ）である。ウージ+バーグ＝ウジバグ＝ウズベクとなる。ムーン（文氏）もウズベク族と行動を共にした。

■AD357年 「ヤジディー誕生」

「オースターの大航海時代」に参加したエステ人は、ヒムヤル王国を統治したアサド家を追い、アラビアを訪問した。その後、エステは北上してクルディスタンに至り、「ヤジディー」を生み、「ヤジディー教」を創始した。ヤジディーの名の由来はエステである。エステ＝エズデ＝ヤジディーとなる。

■AD385年 アビ・カリバ・アサド、ヒムヤル王に即位

■AD420年 「アサド家の大航海時代」

■AD420年 「朝戸氏誕生」

アビ・カリバ・アサドが王位を失うと、アサド家は「アサド家の大航海時代」を実施した。アラビア半島を離れた彼らは「沖泳良部島」に上陸し、現地人と混合して「朝戸氏」を称した。泳良部の名の由来はアラブであり、朝戸の名の由来は文字通りアサドである。

■AD420年 「他田氏誕生」「長田氏誕生」「永田氏誕生」「中田氏誕生」

その後、日本本土に上陸した朝戸氏は、諏訪国に「他田氏（おさだ）」「長田氏（おさだ）」「浅田氏」「佐田氏」を、長田氏（ながた）は近江国に「永田氏」を、遠江国に「中田氏」を誕生させた。

■AD420年 「佐藤氏誕生」「安田氏誕生」「吉田氏誕生」「芦田氏誕生」「志田氏誕生」

アサド家と共に日本本土に上陸したヤジディーは、山城国に「佐藤氏」を、甲斐国に「安田氏」を、近江国に「吉田氏」を残している。更に、備後国に「芦田氏」を、常陸国に「志田氏」を残した。ヤジディー＝ジディー＝シティー＝佐藤となり、ヤジディー＝ヤジデ＝安田＝吉田＝芦田＝志田となる。

■AD712年 「勿吉の大航海時代」

■AD712年 「小津神社誕生」「小津氏誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加した勿吉は、日本人と混合して「小津」の名を形成した。小津の名の由来は勿吉（ウージ）である。ウージ＝ウジ＝ウズ＝小津となる。小津氏は小規模な「小津神社」を展開した。だが、小規模な「小津神社」からは考えもつかないほど、世界的な名声を博した映画監督、小津安二郎が輩出されている。

■AD712年 「宇佐神宮誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加した勿吉は、日本人と混合して「宇佐」の名を生んだ。宇佐の名の由来は勿吉（ウージ）である。ウージ＝ウーシ＝ウシ＝宇佐となる。宇佐氏は、八幡信仰を展開していた禿髪部と連合して「宇佐神宮」を建立した。

■AD712年 「氷川神社誕生」「寒川神社誕生」「高千穂神社誕生」「新田氏誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したロス（朱氏）は、「赤城神社」「赤神神社」を建立し、ライダー（馬氏）は、馬の守り神を奉る「子眉嶺神社」を建立した。グラス（芝氏）は、「浅草神社」

を建立し、ロック（石氏）は、「石上神社」を建立した。そして、ニート（高氏）は、「高千穂神社」を建立した。高千穂の名の由来は、イギリス人と混合した高氏の子孫ジョン・ニートである。ジョンに「千穂」を当て字して「高（ニート）」と組み合わせ、「高千穂」の名を組み立てた。

また、彼らは全員で共同して「氷川神社」「寒川神社」を建立している。氷の川、寒い川の名の由来は黒龍江である。つまり、彼らは勿吉時代に満州に暮らしていたことを暗に示している。ニート（高氏）は、日本人と混合して「新田」の名を残している。新田の名の由来はニートである。ニート=ニト=新田となる。英語の「ニート（NEAT）」には「小奇麗な、さっぱりした、格好良い」などの意味がある。そのため、彼らは「新」を当て字したと考えられる。

■AD712年 「石清水神社誕生」「金刀比羅神社誕生」

「勿吉の大航海時代」に参加したストーン（石氏）は、「ヨハネスの大航海時代」に参加したスミス（司馬氏）と組んで「石清水神社」を建立し、「オースターの大航海時代」に参加したキャッシュ（銭氏）は、「ガンダーラ人の大航海時代」のディアラ王家と組んで「金刀比羅神社」を建立した。石清水の名の由来はロック（石）とスミス（清水）の組み合わせであり。金刀比羅の名の由来は刀銭とディアラ（平）の組み合わせである。

■AD907年 「五代十国時代」

「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人一族は、日本を発っていよいよ故地である中国に帰還を果たした。当時の中国は、「唐」の治世で下であった。ここに、ロート（朱氏）、リー（李氏）、ストーン（石氏）、ルーベンス（劉氏）、ホール（郭氏）、キング（王氏）、ウィンター（孟氏）、ウィロウ（楊氏）、ニート（高氏）、キャッシュ（銭氏）、ライダー（馬氏）、ブッシュ（柴氏）の面々が戻ってきたのだ。これによって唐は崩壊し、中国は「五代十国」の時代に突入する。

イギリスで生まれた姓を名乗っていた彼らは、中国の名を復活させた。その上で、彼らは国家を乱立した。朱氏は「後梁」を、李氏は「後唐」を、石氏は「後晋」を、劉氏は「後漢」を、郭氏は「後周」を建設した。王氏は「前蜀」を、孟氏は「後蜀」を、楊氏は「呉」を、李氏は「南唐」を、高氏は「荊南」を、銭氏は「呉越」を、王氏は「ビン」を、馬氏は「楚」を、劉氏は「南漢」「北漢」を建設した。また、ブッシュ（柴氏）は、名君と呼ばれた柴榮がAD954年に後周の王に即位している。しかし、イギリス帰りの中国人が中国に覇を唱えた時代は、趙匡胤が「宋」を開いたことにより、わずか72年で終焉を迎えた。

■AD909年 「大内氏（前身）誕生」「多々良氏誕生」

ダイフェド王国が滅ぶと、ダイフェド王家はブリテン島を発ち、中央アジアに向かった。シルクロートの通過中、彼らは、勿吉と朴氏、文氏の連合体「ウズベク族」に出会い、祖を同じくする者として意気投合し、連合する。この時に「大内」の名が生まれた。大内の名の由来はダイフェド側の多（大）と勿吉側のウズベクの組み合わせである。大+ウズ（内）=大内となる。現ウズベキスタン辺りで生まれた大内氏は、モンゴルを経て、朝鮮半島から日本に渡った。大内ウジは、周防国に上陸すると、「多々良氏」を称した。多々良の名の由来はタタールである。AD11??年、多々良盛房が「大内介」を称して、ここに「大内」の名が復活した。

■AD996年 「エステ家誕生」

ヒムヤル王国が滅ぶと、アラビア半島を離れたアサド家は、ヤジディーが築いた「エステ」に移住した。アサド家はイタリア人と交わって「アッツォ家」を形成した。アッツォの名の由来はアサドである。アサド=アツァド=アッツォとなる。AD996年、アッツォ家のアルベルトアッツォ2世はエステのシニョーレに就任し、「エステ家」を称した。

■AD11??年 多々良盛房、「大内介」を称す 「大内氏誕生」

AD11??年、多々良盛房が「大内介」を称して、ここに「大内」の名が復活した。

■AD1182年 「ウァシュテペック誕生」

ウズベク族は、大内氏と共に日本に移住すると、その後、ウズベク族だけがメキシコに移住した。彼らは、「ウァシュテペック」を称した。ウァシュテペックの名の由来はオースターとバーグの組み合わせである。オースター+バーグ=ウァシュタバーグ=ウァシュテペックとなる。

■AD1240年 「フェラーラ侯国誕生」

アッツォ7世がフェラーラ侯に就任し、フェラーラを掌握する。エステ家は、AD1240年に「フェラーラ侯国」を開いた。

■AD1351年 「尼子氏誕生」

大内氏から鷲頭氏に養子に出された鷲頭長弘（大内長弘）の子、鷲頭弘直は大内宗家に強い不満を抱いていた。彼は、近江国に移住して京極氏に接近して、自身の血統を打ち立てた。鷲頭弘直は、自身の血統にフェニキア文字のひとつオメガを冠した。これを由来に、彼らは「尼子氏」を称した。尼子の名の由来はフェニキア文字のひとつオメガである。オメガ＝アメゴ＝尼子となる。

ここに、大内氏と尼子氏の肉親同士の骨肉の争いが展開されることになる。大内義弘と尼子高久の争いに始まり、大内義興と尼子経久を経て、大内義隆と尼子晴久の時代、この対立は終焉を迎えている。配下であった陶隆房の謀反により、大内義隆は日本を脱出することを決意する。大内氏は、大友宗麟に焼き討ちをされた宇佐氏に中央アジアへの移住を打診する。その後、祖を同じくする両者はウズベクの地に足を運び、「ウズベク族」に改めて加わっている。

■AD1440年 モクテスマ、第3代アステカ皇帝に即位

AD1398年、ウァシュテペック族は一族の娘をアステカ帝国第2代皇帝ウィツィリウィトルに接近させ、自身の血統を打ち立てた。この時に、モクテスマが誕生した。AD1440年、モクテスマは第3代アステカ帝国皇帝に即位した。こうして、ウァシュテペック族が天下を取ったことにより、アステカ族（アストラハン）、メシカ族（ムシュキ）はアステカ帝国を後にする。ウァシュテペックの王統は、最後の皇帝モクテスマ2世の治世まで続いている。

■AD1521年 「サド誕生」

タナトスの血を引くエルナン・コルテスがアステカ帝国に侵入し、アステカ貴族を1万人も殺害すると、ウァシュテペックはメキシコを後にした。アステカ人の顔をしたウァシュテペックはブリテン島に渡り、イギリス人と混合して「サド」の名を生んだ。サドの名の由来はウァシュテペックである。ウァシュテペック＝シュテ＝サドとなる。

■AD1521年 「オスターバーク誕生」

タナトスの血を引くエルナン・コルテスがアステカ帝国に侵入し、アステカ貴族を1万人も殺害すると、ウァシュテペックはメキシコを後にした。アステカ人の顔をしたウァシュテペックはブリテン島に渡り、イギリス人と混合して「オスターバーク」の名を生んだ。オスターバークの名の由来はウァシュテペックである。ウァシュテペック＝ウァシュターベーク＝オスターバークと

なる。

■AD1521年 「石田氏継承」

タナトスの血を引くエルナン・コルテスがアステカ帝国に侵入し、アステカ貴族を1万人も殺害すると、ウァシュテペックはメキシコを後にした。アステカ人の顔をしたウァシュテペックは日本に渡り、イシュタルが生んだ「石田」の名を継承した。この系統からは石田三成が輩出されている。

■AD1521年 石田光成生誕

14歳の頃から豊臣秀吉に仕えていた石田三成は、AD1600年に上杉家の家老と秘密裏に対家康挙兵の計画を練った。これが「関ヶ原の戦い」であるが、浄土真宗の信者、小早川秀秋が大谷家の命令で西軍を裏切ったため、西軍は敗北を喫してしまう。

■AD1740年 マルキ・ド・サド生誕

■AD1861年 「アサド家復活」

イタリア半島が統一され、サヴォイア家による「イタリア王国」が成立すると、エステ家はイタリアからシリアに移住した。エステ家は「アサド」の名を復活させた。この系統からは、シリア・アラブ共和国第4代大統領ハフェズ・アル＝アサド、シリア・アラブ共和国第5代大統領パッシャール・アル＝アサドが輩出された。

■AD1903年 小津安二郎生誕

■AD1930年 ハフェズ・アル＝アサド生誕

シリア・アラブ共和国第4代大統領に就任している。

■AD1933年 吉田喜重生誕

■AD1952年 さだまさし生誕

■AD1947年 イギー・ポップ（ジェイムズ・オスターバーグ生）誕

オスターバーグは、ウァシュテペックの直系である。つまり、イギー・ポップは、アステカ帝国を統治した王族の末裔である。

■AD1946年 ジョン・ウー生誕

■AD1960年 佐藤優生誕

■AD1965年 パッシャール・アル＝アサド生誕

シリア・アラブ共和国第5代大統領に就任している。

■AD1961年 中田秀夫生誕

■AD1963年 吉田戦車生誕

■AD1991年 「ウズベキスタン共和国誕生」

ウズベク族は、AD1991年にソ連から独立して「ウズベキスタン共和国」を立てている。

エバシの歴史

◆アパッチ（エバシ）の歴史

■40万年前 「エバシ誕生」

カメルーン沖に水生人として暮らしていたエバシは、アパッチ族に似た姿をしており、自らを「エバシ」と呼んでいた。

■40万年前 「エバシの大移動時代」

■40万年前 「バブサ族誕生」「バサイ族誕生」

「エバシの大移動時代」に参加したエバシは、台湾に移住した。この時、彼らは「バブサ族」「バサイ族」を生んだ。両者の名の由来はエバシである。エバシ=ヘバシ=バブサとなり、エバシ=エバサイ=バサイとなる。彼らは、人類史上初の台湾に足を踏み入れた人々である。

■40万年前 「プユマ族誕生」「パゼッヘ族誕生」

エバシは、台湾でイマナと連合して「プユマ族」を、ヴィディエと連合して「パゼッヘ族」を築いた。プユマの名の由来はアプスーとイマナの組み合わせであり、パゼッヘの名の由来はアプスーとヴィディエの組み合わせである。アプスー+イマナ=アプイマ=プユマとなり、アプスー+ヴィディエ=プスーヴィ=パゼッヘとなる。

■30万年前 「アパッチの大移動時代」

■40万年前 「エビス誕生」

「アパッチの大移動時代」に参加したエバシは、日本に入植した。この時、東北地方に入植したエバシは「エビス」となった。エビスの名の由来はエバシである。エバシ=エバス=エビスとなる。彼らは、人類史上初の日本列島に足を踏み入れた人々である。

■ 40万年前 「アパッチ族誕生」

「アパッチの大移動時代」に参加したエバシは、当時、北極圏であった北アメリカに辿り着いた。エバシは、この地で「アパッチ」となった。アパッチの名の由来はエバシである。エバシ＝エパチ＝アパッチとなる。北アメリカの寒流水域を拠点に水生生活を行った彼らは、ここで、髭が生えないという身体的特徴を得た。このため、彼らの子孫であるアメリカ・インディアン、中南米のインディオには髭が生えない。

■ 40万年前 「アプチ誕生」

「アパッチの大移動時代」に参加したエバシは、次に古代のユカタン半島に足を踏み入れた。彼らはこの地に「アプチ」を祀った。アプチの名の由来はアパッチである。アパッチ＝アパチ＝アプチとなる。彼らは、人類史上初のユカタン半島に足を踏み入れた人々である。

■ 30万年前 「カオスの大移動時代」

■ 30万年前 「カリュプソー誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れ、オケアーニスが次々に生まれた。この時、エバシはクリュティアーと組んで「カリュプソー」を生んだ。カリュプソーの名の由来はクリュティアーとバサイ（エバシ）の組み合わせである。クリュティアー＋バサイ＝クリュバサイ＝クリュパサイ＝カリュプソーとなる。

■ 30万年前 「パシトエー誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れ、オケアーニスが次々に生まれた。この時、エバシはトエーと組んで「パシトエー」を生んだ。パシトエーの名の由来はエバシとトエーの組み合わせである。エバシ＋トエー＝バシトエー＝パシトエーとなる。その後、パシトエーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ヴェシ族誕生」

パシトエーは、マレー半島に移住すると「ヴェシ族」を生んだ。ヴェシの名の由来はパシトエーである。パシトエー＝ヴェシトエー＝ヴェシとなる。

■ 7万年前 「瀬織津比咩神誕生」

東南アジアから河の種族イストロスが来ると、エバシは彼らと連合して「セオリツヒメ」を成した。セオリツの名の由来はエバシとイストロスの組み合わせである。エバシ＋イストロス＝スウロス＝スオロツ＝セオリツとなる。

■ 7万年前 「気吹戸主神誕生」

東南アジアからオケアーニスに属するエレクトラ、河の種族エウエノスが来ると、エバシは彼らと連合した。この時に「イブキドヌシ」が生まれた。イブキドヌシの名の由来はエバシ、エレクトラ、エウエノスの組みあわせである。エバシ＋エレクトラ＋エウエノス＝エバクトノス＝イブキドヌシとなる。

■ 1万3千年前 「古代日本人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1万3千年前 「テシュプ誕生」

「古代日本人の大航海時代」に参加して日本を離れてモンゴルに移住し、「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに入植したエビスはメティスと連合し、「テシュプ」を生んだ。テシュプの名の由来はメティスとエビスの組み合わせである。メティス＋エビス＝ティスエビー＝テシュプとなる。彼らは「神々の集団アヌンナキ」に参加した。

■ BC 32世紀 「ソドムとゴモラ滅亡」

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「蝦夷（エビス）復活」

「ソドムとゴモラ滅亡」を機に「ドルイド教の大航海時代」に参加したテシュプ（エビス）は、出雲国に上陸すると、ムシュキ族（陸奥氏）を伴って故地である東北地方に入植した。ここに蝦夷（えびす）が復活した。と同時に、当地は「陸奥」と呼ばれるようになった。

■BC21世紀 「長脛彦の大移動時代」

■BC21世紀 「安日彦誕生」

「長脛彦の大移動時代」によって中国から日本に帰還した長脛彦は、東北地方に根付き、蝦夷（えびす）と連合した。蝦夷（えびす）は「安日彦（あびひこ）」を称した。安日（あび）の名の由来はエビスである。エビス＝アビス＝安日（あび）となる。

■BC1027年 「殷・商滅亡」

■BC1027年 「安日彦復活」

殷・商が滅ぶと、長脛彦は中国を離れて日本に帰還し、蝦夷に身を寄せた。この時に、彼らは安日彦と連合を組んだ。日本神話では長脛彦と安日彦は兄弟だと伝えられているが、これは彼らが同盟者だったことを示している。この兄弟は、東北地方から畿内に移住し、天孫族が訪れるまでの間、大和地方を治めた。

■BC6世紀 「アプスー復活」

天孫族が大和を制定すると、安日彦は日本を離れて、先祖の故地黒海に帰還した。日本人の顔をした安日彦は、現地人と混合してコーカサス人の顔を得た。

■BC 6世紀 「陸奥安倍氏誕生」

天孫族が大和を制定すると、安日彦は大和国を離れて、故地である蝦夷に帰還した。蝦夷に帰った彼らは、「安倍氏」を生んだ。安倍の名の由来は安日である。安日=あび=あべ=安倍となる。更に彼らは、かつての同盟者であり、ネパールに移住した陸奥氏が残した名「陸奥」を冠して「陸奥安倍氏」を称する。

■BC 327年 「コラズム族の大移動時代」

■BC 327年 「アビシニア誕生」「アペデマク誕生」

「コラズム族の大移動時代」に参加したアプスーは、現アビシニアに渡った。この時に「アビシニア」の名が生まれた。アビシニアの名の由来はアプスーとンジニの組み合わせである。アプスー+ンジニ=アプジニ=アビシニアとなる。また、彼らはメロエ王国に進出し、「獅子神アペデマク」を生んだ。アペデマクの名の由来はラテン語「マガンのアプスー（アプス・ド・マガン）」である。アプス+ド+マガン=アプドマガ=アペデマクとなる。

■BC 165年 「ハスモン朝誕生」

BC 198年、セレウコス朝のアンティオコス3世がエジプト征伐を行った。彼らがヌビアに侵攻すると、メロエ王国のアプスーは、イスラエルに逃亡した。この時、彼らはムンバイ人と連合した。BC 200年頃、ムンバイ人はアーンドラ朝成立を機にイスラエルに逃げていた。両社は共同で「ハスモン朝」を開いた。ハスモンの名の由来はアプスーとムンビの組み合わせである。アプスー+ムンビ=プスムン=ハスモンとなる。

■BC 63年 「ハウサ族誕生」

エルサレムが陥落すると、ハスモン朝のアプスーは現チャドに逃げ込んだ。彼らは、「ハウサ族」を生んだ。ハウサの名の由来はハスモンである。ハスモン=ハウスモン=ハウサとなる。

■BC 63年 「アッパーズ家誕生」

エルサレムが陥落すると、ハスモン朝のアプスーはアラビア半島南部に逃げ込んだ。彼らは、「アッバース族」を生んだ。アッバースの名の由来はアプスーである。アプスー＝アッブース＝アッバースとなる。アッバース家は、「コラズム族の大移動時代」の同盟者が生んだクライシユ族に参加した。

■AD632年 アブー・バクル、初代カリフに即位 「イスラム帝国誕生」

歴史上、アブー・バクルはタイム家の出であり、アッバース家の出とはされていないが、名前から察すると、アブーの名はアプスーに関係があると考えられる。

■AD750年 アブル・アッバス、カリフに即位 「アッバース朝誕生」

アブル・アッバスは、アッバース家から輩出された。イスラム帝国は、アッバース朝の時代にバグダッドを築き、最盛期を迎えた。

■AD878年 「ムタパ誕生」

「夷浮の乱」を起こしたものの、鎮圧された陸奥安倍氏は、東北地方を離れ、城氏を率いてインド洋を横断してジンバブエに上陸した。陸奥安倍氏は、「ムタパ」を称した。ムタパの名の由来は陸奥の安倍である。陸奥＋安倍＝ムツアベ＝ムツァペ＝ムタパとなる。

■AD878年 「アヴィス騎士団誕生」

ジンバブエ組とは別行動をとった陸奥安倍氏は、城氏と共にアフリカ大陸を経てイベリア半島に上陸した。日本人の顔をした彼らは、現地人と混合して「アヴィス騎士団」を形成した。アヴィスの名の由来はエビスである。エビス＝エヴィスー＝アヴィスとなる。これに、テンプル騎士団の残党に加わった。その後、テンプル騎士団から独立したアヴィス騎士団は、AD1383年、総長のジョアンが初代王に即位して「アヴィス朝ポルトガル王国」を創建した。

■AD909年 「ハプスブルグ家誕生」

ファティマ朝が成立し、同時に後ウマイヤ朝がカリフを称したため、アッバース家がスイス北東部に移住した。アラビア人の顔をした彼らはスイス人と混合して「ハプスブルグ家」を形成した。ハプスブルグの名の由来は「ブルグントのアプスー」である。アプスー+ブルグント=アプスブルグ=ハプスブルグとなる。

■AD1040年 「マドヴァ派誕生」

ジンバブエ人の顔をした人々は、インドに移住して「マドヴァ」を生んだ。マドヴァの名の由来はムタパである。マドヴァは、ヒンドゥー教ヴィシュヌ派に加わり、「ヴィシュヌ教マドヴァ派」を築いた。

■AD1229年 「ハフス朝誕生」

アブー・ザカリーヤ・ヤフヤー1世が、マラウィ人、マフダリ家に継ぐスワヒリ人の王国、「ハフサ朝」をチュニジアに開いた。しかし、AD1276年に権力闘争が起きると、一部ハフス家はチュニジアを後に南北に移住した。南方組は、チャドに戻って残留組のハウサ族と組み、「ハウサ諸王国」を建設した。

■AD1383年 ジョアン、初代ポルトガル王に即位 「アヴィス朝誕生」

AD1383年、アヴィス騎士団総長のジョアンが初代王に即位して「アヴィス朝ポルトガル王国」を創建した。しかし、ポルトガルにはタナトスの宗教シトー会やクリュニー会が巢食っていたため、アヴィス朝は彼らに引きずられて世界征服の尖兵と化してしまう。ポルトガル王国は、主にアフリカ、インド、東南アジア、東アジアを縄張りにしたが、アヴィス朝は悲しいことに、祖を同じくするムタパ王国とジンバブエの地で戦火を交えている。もちろん、人喰い人種クリュニー会の指揮下であった。

■AD13??年 インドからジンバブエに帰還

ヴィジャヤナガル王国、バフマニー朝は激しい交戦を繰り広げると、これを嫌ったヴィシュヌ教マドヴァ派はインドを離れて、ジンバブエに帰還した。この系統からは、初代ムトゥパ王オドゥドゥワが輩出されている。

■AD1430年 オドゥドゥワ、初代王に即位 「ムタパ王国誕生」

AD1430年、オドゥドゥワが初代ムタパ王に即位し、ジンバブエに「ムタパ王国」を建設した。

■AD1430年 「オヨ王国誕生」

一部のムタパ人はナイジェリアに移住して「イフェ人」に連合し、「オヨ」の名を復活させた。更に、ヨルバ人（ト部氏）と組んだイフェ人は、AD15世紀頃に「オヨ王国」を建てた。オヨの名の由来は奥羽である。

■AD1438年 アルブレヒト2世、神聖ローマ皇帝に即位 「ハプスブルグ朝誕生」

AD1273年、ハプスブルグ伯ルドルフ1世が神聖ローマ皇帝に即位して「ハプスブルグ家」が発足し、AD1438年にアルブレヒト2世が神聖ローマ皇帝に即位して「ハプスブルグ朝」が開かれる。

■AD1519年 カール5世、神聖ローマ皇帝に即位 「太陽の沈まぬ国誕生」

AD1519年に即位したカール5世の治世にはスペインを掌握していたため、「ハプスブルグ帝国」は「太陽の沈まぬ国」と呼ばれた。ハプスブルグ家の家系は、近親結婚によって体が弱い男子が多く生まれたとされている。だが、実際には、カトリック（クリュニー会、シトー会、ドミニコ会）の医者が一服盛っていたに過ぎない。

家来、兵士、料理人、召使などは、みなカトリック信者なのでハプスブルグ家は、常にタナトス（死）に囲まれていた。その後も、タナトスの陰謀にも拘らず、ハプスブルグ家はスペインやオーストリアに分家を持った。「オーストリア＝ハンガリー帝国」時代には、プロイセン帝国、オスマン・トルコ帝国と組んでタナトスが背後に隠れる白人列強に挑み、「第一次世界大戦」を戦った。

■AD1529年 「的場氏誕生」

AD1629年にムタパ王国が滅亡すると、ムタパ人はジンバブエを去り、故地である日本帰還

を目指した。ジンバブエ人の顔をしたムタパ人は、日本人と混合して「的場」の名を形成した。的場の名の由来はムタパである。ムタパの系統からは特撮監督の的場徹、俳優的場浩司が輩出されている。

■AD1574年 「アフシャル部族連合誕生」

ハフス朝が滅ぶと、ハフスの人々はチュニジアを離れて故地であるコラズムに帰還した。彼らは「アフシャル」の名を復活させ、「アフシャル部族連合」を築いた。しかし、タナトスの血を引くナディル・シャーがアフシャル部族連合を指揮下に置き、AD1736年、「アフシャル朝」を開いた。だが、ナディル・シャーはタナトスの系統であるため、アフシャル連合に嫌われ、虐殺された。その後、アフシャル朝は、60年後のAD1796年に滅んでいる。

■AD1580年 「我孫子氏誕生」「安孫子氏誕生」

AD1580年、「ポルトガル・スペイン同権連合」が発足すると、これを嫌ったアヴィス家はポルトガルを後に、日本に帰還した。ポルトガル人の顔をしたアヴィス家は日本人と混合して「蛭子」「安孫子」、そして「海老」「蝦」が付く姓を多く残した。この系統からは漫画家「藤子不二雄」の安孫子素雄、漫画家・俳優蛭子能収が輩出されている。

■AD1918年 「バアス党誕生」

「第一次世界大戦」に敗北すると、ハプスブルグ家は先祖が「アッバース朝」時代に治めていた土地、シリアに帰還した。オーストリア人の顔をした彼らは、アラビア人と混合し、サギー・アル＝アルスィーズイーを輩出した。彼は、ダマスカスで秘密結社「バアス党」を結成した。バアスの名の由来はアッバースである。サダム・フセインも母系ハプスブルグ家の系譜に属すると考えられる。残念ながら、白人列強の集中攻撃を受けたフセイン大統領は、「第一次世界大戦」と同様、タナトスが背後に控える白人列強に討ち取られてしまった。

■AD1924年 安部公房生誕

■AD1934年 藤子不二雄A（安孫子素雄）生誕

■AD1937年 安部譲二生誕

■AD1946年 カーマイン・アピス生誕 「ヴァニラ・ファッジ誕生」

■AD1957年 ヴィニー・アピス生誕 「ディオ誕生」

■AD1959年 スザンナ・ホフス生誕 「バングルス誕生」

◆ヴィスコンティ（プシケ）の歴史

■7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■7万年前 「プシケ誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」が到来し、ヘラクレスがアマゾン王国と戦争を始めると、エバシは、オーストラリア北西部に移住した。この時に「プシケ」が生まれた。プシケの名の由来はバブサとテューケーの組み合わせである。バブサ+テューケー=ブスケ=プシケとなる。

■7万年前 「ピサ王国誕生」

当時、オーストラリア大陸南東部にはタルタロスの一族が君臨し、西部には河川の娘たちのオイノマオスが王として君臨していた。プシケーは、まずタルタロスに赴いて体勢を整え、オイノマオスの国に侵入した。彼らはオイノマオスに勝利し、別の王族ヒッポダメイアと連合した。この時に「ピサ王国」が誕生した。ピサの名の由来はバブサである。バブサ=ブサ=ピサとなる。こうして、河川の娘たちに勝利したバブサ族は、タルタロスの国と並ぶピサ王国を建設してオーストラリア大陸に君臨した。

■ 4万年前 「オリンポス神族の大航海時代」

■ 4万年前 「ペロプス誕生」

「オリンポス神族の大航海時代」が到来すると、メラネシア海域に根を張っていたアンボン族（アンピロー）はマレー地域に住んでいたカロ族（カリュプソー）と連合体を組んだ。この時にペロプスが生まれた。ペロプスの名の由来はアンピローとカリュプソーの組み合わせである。アンピロー+カリュプソー=ピロプソー=ペロプスとなる。ペロプスは、アトランティス王国の王族となる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「原初の水アプスー誕生」

アトランティス王国が吹き飛び、大地殻変動でオーストラリア海岸部が荒廃に帰すと、「デウカリオンの大航海時代」に参加したピサ人はスーサに上陸し、コーカサス地方に入植した。彼らは「原初の水アプスー」を称した。アプスーの名の由来はエバシである。エバシ=エバシー=アプスーとなる。アプスーはモンゴルから来たティアマトと同盟を組み、メソポタミアから少々離れることで「神々の集団アヌナキ」の種族とは距離を置いた。

■ BC 1026年 「ピサ建設」

「マハーバーラタ戦争」によって故地が荒廃すると、アプスーはインダス流域を離れてギリシアに移住した。彼らはペロポネソス半島に改めて「ピサ」を築いた。

■ BC 327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■ BC 327年 「ヴァスコン誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したヴィシュヌは、次にアドリア海らイベリア半島北部に上

陸した。ヴィシュヌは、「ヴァスコン人」を称した。ヴァスコンの名の由来はプシケとガンダーラの組み合わせである。プシケ+ガンダーラ=プシガン=パシガン=ヴァスコンとなる。

■BC146年 「ピサ建設」

ギリシアがローマの属国化したのを機に、ピサ人がイタリアに移住した。ピサは交易都市として発展を遂げ、中世には「ピサ共和国」を立ち上げて、小国ながらジェノヴァ共和国やヴェネツィア共和国と凌ぎを削った。

■AD10??年 ピサ共和国、海洋国家のひとつとして数えられる

ピサは、ジェノヴァ共和国、アマルフィ共和国、ヴェネツィア共和国と共に地中海を統べる海洋国家のひとつとして名を成した。ジェノヴァ人はスエビ人の子孫であり、ヴェネツィア人はフェニキア人の子孫である。

■AD1060年 ピサ共和国、ジェノヴァ共和国と交戦し、勝利を得る 「海の慣習法承認」

■AD1099年 第1次十字軍に参加し、植民地を得る

ピサ共和国は、エルサレム、カエサリアに所領を持ち、アンティオキア、ヤッファ、トリポリ、ティルス、ラタキア、アッコンなどに植民地を築いた。

■AD1119年 ピサ共和国、ジェノヴァ共和国と交戦

AD1133年まで戦争を続いたが、両者は陸海で争い、戦闘行為は海賊のように略奪を主としていた。

■AD1238年 ジェノヴァ共和国、ヴェネツィア共和国が反ピサ同盟を締結

■AD1290年 ジェノヴァ共和国、ピサの主要港ピサーノを破壊

■AD1347年 「ヴィスコンティ家誕生」

AD1347年、黒死病がヨーロッパを席卷するが、バスク人は、黒死病を逃れるために一時、イベリア半島からミラノに避難した。この時に「ヴィスコンティ家」が生まれた。ヴィスコンティの名の由来はバスクとカンディアーノの組み合わせである。バスク+カンディアーノ=バスカンディ=ヴィスコンティとなる。

■AD1395年 ジャン=ガレアッツオ・ヴィスコンティ、ミラノ公に 「ミラノ公国誕生」

ヴィスコンティ家は、ミラノを掌握してAD1395年に「ミラノ公国」を建設している。この系統からは映画監督ルキノ・ヴィスコンティ、ロック・プロデューサーのトニー・ヴィスコンティが輩出されている。

■AD1447年 「バスク誕生」

しかし、その後の男系途絶により、ヴィスコンティ家はミラノを離れてイベリア半島に帰還した。この時、ヴィスコンティ家はカンディアーノと分離して「バスク」を称した。バスクの名の由来はヴァスコンである。ヴィスコン=バスコン=バスクとなる。

■AD1494年 「第2次ピサ共和国誕生」

フランス王シャルル8世がイタリアに侵攻すると、フィレンツェ共和国が衰退し、ピサは、自治権を再生する機会を得た。しかし、AD1509年に、ピサ共和国はフィレンツェ軍に再征服された。

■AD1509年 「ヴァーサ家誕生」

ピサを離れた人々は、スウェーデンに入植して「ヴァーサ」を称した。ヴァーサの名の由来はピサである。ピサ=ピャサ=ピャーサ=ヴァーサとなる。スウェーデン独立派の指導者ストウーレが戦死すると、優れた指導者を喪失した独立派は、一転してデンマーク王クリスチャン2世に講

和を求めた。クリスチャン2世もこれに応じ、反乱の罪を水に流すとして晩餐会を開いた。しかし、スウェーデン独立派や自由市民の有力者が集まると、クリスチャン2世は、彼らをまとめて皆殺しにした。これが「ストックホルムの血浴」である。これを機に、クリスチャン2世は、スウェーデンの独立運動はもう起きないだろうと安心した。しかし、ピサ共和国の末裔であるグスタフ・ヴァーサは、逆にストックホルムの血浴を機に立ち上がり、デンマーク人の支配を退けてスウェーデン王国を独立へと導いた。

■AD1523年 「ヴァーサ朝誕生」

AD1509年にピサ共和国が滅亡すると、ピサ人はイタリアを離れてスウェーデンに移住した。彼らはピサを由来に「ヴァーサ」を称した。ピサ=ヴィーサ=ヴァーサとなる。その後、AD1523年、グスタフ・ヴァーサが初代王に即位して「ヴァーサ朝」が開かれた。地中海で戦争ばかりしていたピサ人は、バルト海でも戦争に明け暮れた。「リヴォニア戦争」「北方七年戦争」「ロシア・ポーランド戦争」「スウェーデン・ポーランド戦争」などである。

■AD1611年 スウェーデンがデンマークと戦火を交える

■AD1613年 スウェーデンがロシアと戦火を交える

■AD1621年 スウェーデンがポーランドと戦火を交える

■AD1665年 スウェーデンがロシアと戦火を交える 「第1次北方戦争」

■AD1668年 「土方氏誕生」

AD1668年にヴァーサ朝が滅ぶと、ヴァーサ家はスウェーデンを出て日本に移住した。スウェーデン人の顔をしたヴァーサ家は、日本人と混合して「土方」の名を生んだ。土方の名の由来はヴァーサとゴートの組み合わせである。ゴートの名はスウェーデンから来たことを示している。ヴァーサ+ゴート=ヴァサゴト=土方となる。AD1833年に生まれた土方歳三は近藤勇などと共に「新撰組」に参加する。

■AD1833年 土方歳三生誕

AD1833年に生まれた土方歳三は近藤勇などと共に「新撰組」に参加するが、AD1869年に戦死している。

■AD1925年 「アルバニア共和国誕生」「アルバニア王国誕生」

AD1833年、カルリスタ戦争が発生すると、バスク人はスペインを離れてアルバニアに移住した。バスク人はアルバニアでは「ゾグー家」を称した。ゾグーの名の由来はバスクである。バスク=バゾグ=ゾグーとなる。AD1925年、アフメド・ゾグーは初代アルバニア大統領に就任して「アルバニア共和国」を建て、直後にゾグー1世を称してアルバニア王に即位し、「アルバニア王国」を建てた。しかし、AD1939年にイタリア軍が侵攻すると、ゾグー1世は王妃と共にアルバニアを脱出して海外に亡命した。

■AD1906年 ルキノ・ヴィスコンティ生誕

■AD1944年 トニー・ヴィスコンティ生誕

キャラの歴史

◆ケルケイース（キャラ）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「キャラ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したシルックは、現タンザニアに移住して「キャラ」を生んだ。

■40万年前 「エバシの大航海時代」

■40万年前 「カウレ族誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したキャラは、パプアに入植し「カウレ族」を生んだ。カウレの名の由来はキャラである。キャラ＝キヤラ＝カウレとなる。

■30万年前 「カオスの大航海時代」

■30万年前 「ケルケイース誕生」

「カオスの大航海時代」の参加者がオセアニアを訪れると、キャラはクウォスと組んで「ケルケイース」を生んだ。ケルケイースの名の由来はキャラとクウォスの組み合わせである。キャラ＋クウォス＝キャラクウォス＝カラクウォース＝ケルケイースとなる。その後、ケルケイースは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「ガラクサウラー誕生」

ケルケイースはアシェラーフと組んで「ガラクサウラー」を生んだ。ガラクサウラーの名の由来

はケルケイースとアシェラーフの組み合わせである。ケルケイース+アシェラーフ=ケルケシェラ=ガラクサウラーとなる。その後、ガラクサウラーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「カウレ族誕生」「セイル族誕生」

ガラクサウラーは、パプアに「カウレ族」「セイル族」を生んだ。カウレとセイルの名の由来はガラクサウラーである。ガラクサウラー=カウレクサウラー=カウレとなり、ガラクサウラー=ガラクセイル=セイルとなる。

■ 30万年前 「グレニコス誕生」

「カオスの大航海時代」の参加者がオセアニアを訪れると、キャラはウラニアー、クウォスと組んで「グレニコス」を生んだ。グレニコスの名の由来はキャラ、ウラニアー、クウォスの組み合わせである。キャラ+ウラニアー+クウォス=キャラニアクウォス=グレニコスとなる。その後、グレニコスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 7万年前 「コルクス誕生」

ケルケイースは、メーティスと共にエーゲ海を離れて黒海に移住した。彼らは上陸した拠点に「コルクス」と命名した。コルクスの名の由来はケルケイースである。ケルケイース=ケルケス=コルクスとなる。後に、コルクスがタナトスに篡奪されるとコルクスは「ゴルゴン」と呼ばれた。コルクスは、現グルジアの語源でもある。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「ポイニクス誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、グレニコスと連合してフェニキア人の祖である「ポイニクス」を生んだ。ポイニクスの名の由来はペイトーとグレニコスの組み合わせ

せである。ペイトー+グレニコス=ペイニコス=ポイニクスとなる。フェニキアの名の由来はポイニクスである。ポイニクス=ポイニキャ=フェニキアとなる。

■BC40世紀 「第1次シュメール人の大航海時代」

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「サウル朝誕生」「モンゴル誕生」

ソロモン諸島からペルーに移住し、そこから出羽国に移住した彼らは、「モーゼスの大移動時代」に参加してモンゴルに移住した。この時、この地は初めて「モンゴル」と呼ばれた。モンゴルの名の由来はクリュメネーとガラクサウラーの組み合わせである。クリュメネー+ガラクサウラー=メネガラ=モンゴルとなる。また、この時に「サウル」が誕生し、モンゴルに「サウル朝」を築いた。サウルの名の由来はガラクサウラーである。ガラクサウラー=サウラー=サウルとなる。

■BC32世紀 「ソロモン誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したガラクサウラーは、クリュメネーと連合して、モンゴルに「ソロモン」を生んだ。ソロモンの名の由来はガラクサウラーとクリュメネーの組み合わせである。ガラクサウラー+クリュメネー=サウラメネー=ソロモンとなる。

■BC30世紀 「黙示録アルマゲドン」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ハルキス誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したガラクサウラーは、エウボイア島に移住し「ハルキス」を建設した。ハルキスの名の由来はガラクサウラーである。ガラクサウラー＝バラクサウラー＝バラクサ＝ハルキスとなる。

■BC343年 「第1次ポントス人の大航海時代」

■BC343年 「コルキス王国誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したハルキス人は、コーカサスに移住し「コルキス王国」を築いた。コルキスの名の由来はガラクサウラーである。ガラクサウラー＝カラクサウラー＝コルキスとなる。

■AD114年 「第2次ポントス人の大航海時代」

■AD114年 「黒木氏誕生」「春木氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したコルキス人は、日本に上陸し「黒木氏」「春木氏」の名を生んだ。黒木、春木の名の由来はコルキスとハルキスである。

■AD114年 「ゴルカ誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したコルキス人は、満州に移住した。彼らは、現地人と混合して「ゴルカ」を生んだ。ゴルカの名の由来はコルキスである。コルキス＝ゴルキス＝ゴルカとなる。ゴルカは、後に、満州に移住して「野人女直」を結成する藤原氏と連合している。

■AD114年 「キルギス族誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したコルキス人は、モンゴルに帰還し「キルギス族」を生んだ。キルギスの名の由来はコルキスである。コルキス＝コルギス＝キルギスとなる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「クリーク族誕生」

「大和人の大航海時代」に参加したキルギス族は、アメリカに移住し、「クリーク族」を生んだ。クリークの名の由来はキルギスである。キルギス=キルーギス=クリークとなる。

■ A D 6 6 8 年 「グルジア王国誕生」

ハルキス人（コルキス人）は、かつてイベリア人（イベリア王国）、エウロペ（アルバニア王国）と共に一時的な国家「コルキス王国」を古代コーカサスに築いていた。ということで、ハルキス人の一部は、コルキス王国の跡地に移り「グルジア人」となっている。A D 1 0 0 8 年、バグラト 3 世が初代王に即位して「グルジア王国」を建てている。

■ A D 1 3 5 7 年 「ゲルク派誕生」

A D 1 2 3 4 年、金王朝の滅亡を機にゴルカが満州からチベットに逃亡した。この系統からツォンカパ・ロサンタクパが輩出され、「ゲルク派」を興してチベット仏教の一角を成すことになる。ゲルクの名の由来はゴルカである。

■ A D 1 5 2 3 年 「ゴルカ族誕生」

A D 1 5 2 3 年、野人女直は朝鮮半島に侵入している。結果がどうなったかは記録されていないが、多分、排除されたのだろう。コルカを含む野人女直は、満州を後にネパールに移住した。彼らは、「ゴルカ族」となる。

■ A D 1 5 5 9 年 ドラヴィア・シャハ、初代王に即位 「ゴルカ王国誕生」

A D 1 5 9 9 年、ドラヴィア・シャハは、初代ゴルカ王に即位して「シャー王朝」を開いた。シャハの名の由来は藤原と考えられる。藤原=フジハラ=フジャハラ=シャハとなる。

■AD1814年 「グルカ戦争」

ゴルカ王国と、侵略者である聖公会（クリユニー会）に率いられた大英帝国軍による戦闘である。これにより、ネパール軍は大英帝国軍を退け、「サガウリ条約」を締結している。

■AD1933年 マチュー・ケレク生誕

初代、第3代ベナン共和国大統領に就任している。

■AD1955年 ピーター・ギャラガー生誕

■AD196?年 ジョン・ギャラガー生誕 「レイヴン誕生」

■AD196?年 マーク・ギャラガー生誕 「レイヴン誕生」

◆カンボジア（グレニコス）の歴史

■30万年前 「カオスの大航海時代」

■30万年前 「グレニコス誕生」

「カオスの大航海時代」の参加者がオセアニアを訪れると、キャラはディンカと組んで「グレニコス」を生んだ。グレニコスの名の由来はキャラ、ナクソスの組み合わせである。キャラ+ナクソス=キャラナクソ=グレニコスとなる。その後、グレニコスは河川の娘たちに参加した。

■30万年前 「ニュクス誕生」

グレニコスが誕生したものの、グレニコスの部族の中で、できそこないが集団化して王族に蜂起した。これにより、「ニクス」が生まれた。反自然の種族の長である。やがて、反自然の種族のタナトスが、最凶最悪の人類として台頭する。

■ 30万年前 「ズルヴァーンの大移動時代」

■ 30万年前 「葦原中津国誕生」

「ズルヴァーンの大移動時代」に参加しなかったアシアーは、グレニコスと共に日本に移住した。八代湾に上陸した彼らは、「葦原中津国」を築いた。葦原中津国（アシハラナカツクニ）の名の由来は、アシアーとグレニコスの組み合わせである。アシアー+原+グレニコス+国=アシ原+ニコス国=葦原中津国となる。また、台湾（高天原）は、グレニコスが支配していたキレナイカとアシアーが支配していたアナトリア半島に至る海域、つまり、エーゲ海も「葦原中津国」と呼んでいた。

■ 30万年前 「伊邪那岐誕生」「伊邪那美誕生」

葦原中津国を建設したアシアーとグレニコスは、エウリュノメーを迎えて「伊邪那岐」「伊邪那美」の2神を誕生させた。イザナギの名の由来はアシアーとグレニコスの組み合わせであり、イザナミの名の由来はアシアーとエウリュノメーの組み合わせである。アシアー+グレニコス=アシアニコ=イザナギとなり、アシアー+エウリュノメー=アシアノメー=イザナミとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「人皇誕生」

「エノクの大航海時代」によって黒龍江に来たウラニアーは、オアンネスと連合して「人皇（レンホアン）」を生んだ。レンホアンの名の由来はウラニアーとオアンネスの組み合わせである。ウラニアー+オアンネス=ラニオアン=レンホアンとなる。人皇は、「古代日本人の大航海時代」で黒龍江に来たディオナーが築いた天皇、地皇と組んで「三皇」を称した。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC1200年 「カンボジャ人誕生」

「海の民」の時代になり、海の民がヒッタイト人、トロイア人をイランに導くと、ベーシュタード王国が建てられた。この時に同行したフェニキア人、ヴィディエ・ワルムベ（ランブダ）は「カンボジャ人」を生んだ。カンボジャの名の由来はフェニキアとランブダの組み合わせである。フェニキア+ランブダ=キアンブダ=カンボジャとなる。

■BC11世紀 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「熊氏誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、長江に移住したカンボジャ人（キャラ）は、「熊氏（キャン）」を称した。キャンの名の由来はカンボジャである。カンボジャ=キャンボジャ=キャンとなる。BC9世紀頃、熊氏は「楚王」に即位した。

■BC771年 「キンメリア人誕生」

BC771年、「東周」が生まれると、楚の熊氏はタリム盆地に移住し、パミール人と組んで「キンメリア人」を生んだ。キンメリアの名の由来はキャン（熊）とパミールの組み合わせである。キャン+パミール=キャンミール=キンメリアとなる。謎の民族とされるキンメリア人は、中央アジアに覇を唱え、フルリ人のウラルトゥ王国に侵攻し、サルゴン2世が率いるアッカド帝国と戦火を交えた。また、フリギア王ミダスを自殺に追い込んだりしたが、アッシリア軍、リディア王国軍に敗北してモンゴルに帰還している。

■BC6??年 「羌族誕生」

アッシリアとリディアの連合軍に敗れたキンメリア人は、東アジアに帰還した。この時、彼らは「羌（キャン）」を称した。キャンの名の由来は熊（キャン）である。

■BC530年 カンビュセス、ペルシア王に即位

「ベーシュタードの大航海時代」に参加せず、イランに残留したカンボージャ人は、現地人と混合して「カンビュセス」の名を誕生させた。この系統からはカンビュセス1世、カンビュセス2世が輩出されている。アーリア人に属するカンボージャ人は「ペルシア帝国」の誕生に携わった。

■BC329年 「匈奴（キョンヌ）誕生」

BC329年に楚の家臣団が分裂すると熊氏は、黄氏と福建人を率いてモンゴルに移住した。祖を同じくする羌族や、ペルシア帝国の滅亡を機にモンゴルに来ていたアーリア人（アラン人）、タタ（タタール人）と組んだ熊氏は「匈奴（キョンヌ）」を結成した。匈奴の名の由来は熊・羌（キャン）と黄（ファン）の組み合わせである。キャン+ファン=キャン+ファンヌ=キャンヌ=匈奴となる。匈奴の名はある意味フェニキアを逆にひっくり返したものである。

■BC327年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■BC327年 「神戸誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したカンボージャ人（カンビュセス）は、日本に移住した。播磨国に上陸したカンボージャ人は、拠点に「神戸（カンボージャ）」と命名した。神戸の名の由来はカンボージャである。カンボージャ=カンボ=カンベ（神戸）=神戸（こうべ）となる。

■BC57年 「新羅誕生」

神戸から朝鮮半島に移住したカンボージャ人は、朝鮮半島に入植し、「全羅道（チョンラ）」を築いた。更に、朴氏やチュルク族と連合した。この時に新羅（シラギ、シンラ）が生まれた。チョンラとシンラの名の由来はキャンとワルムベの組み合わせである。キャラ+ワルムベ=キャンル=チョンラ=シンラとなる。日本ではチュルクに由来して新羅（シラギ）と呼ばれた。そして、新羅誕生と同時に朴氏王朝が開かれた。

■ A D 9 3 年 「フン族誕生」

北匈奴が滅ぶと、羌族は匈奴を解散してフン族として中央アジアに進出を果たす。フンの名の由来は羌である。羌（キャン）＝ファン＝フンとなる。フン族は、アラン族と共に東ゴート族を撃破したため、東ゴート族は安全なローマ領内に避難した。これを機に「ゲルマン人の大移動」が始まる。この強靱な騎馬民族に魅了された人喰い人種（殷・能登族）は、徐々にインフラを掌握し、アッチラの時に、フン族を完全な支配下に置いた。

■ A D 2 6 2 年 「真蠟国誕生」

A D 2 6 2 年、金氏が新羅を掌握すると、カンボージャ人は朝鮮半島を後に、インドシナ半島に移住した。彼らは、カンボジアに上陸して「真蠟（チャンラ）」を築いた。この時に初めて当地は「カンボジア」と呼ばれた。チャンラの名の由来はチョンラ（全羅道）であり、カンボジアの名の由来はカンボージャである。チョンラ（全羅）＝チャンラ（真蠟）となる。

■ A D 3 世紀 「シュリーヴィジャヤ誕生」

太平道の残党は、スマトラ島に移住して「シュリーヴィジャヤ王国」を築いた。シュリーヴィジャヤの名の由来はキャラ、ワルムベ、ヴィディエの組み合わせである。キャラ＋ワルムベ＋ヴィディエ＝キャラワヴィディエ＝シャラワヴィジエ＝シュリーヴィジャヤとなる。

■ A D 4 4 5 年 「河野氏誕生」

人身御供の種族であるアッチラを嫌ったフン族は、ヨーロッパ支配を放棄して東方に帰還した。中国に上陸したフン族は「黄（ファン）」の名を継承した。また、日本に上陸したフン族は「河野氏」を称した。羌（キャン）に河（かわ）を当て字し、「キャンの土地」の意を含んだ「河野氏」を冠した。

■ A D 5 8 1 年 「ソンツェン・ガンポ誕生」

烏孫は、西域を離れてチベットに移住した。彼らはヤルルンの族長ナムリ・ソンツェンに接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのがソンツェン・ガンポである。ガンポの名の由来はカンボージャである。A D 5 9 3 年、ソンツェン・ガンポは、チベット初の統一国家「吐蕃

王国/チベット王国」を築いた。

■AD550年 「真蠟国復活」

AD550年頃に劉氏、海南島民がカンボジアに扶南国を建てると、真蠟は隷属した。しかし、数十年ぶりに真蠟は独立を勝ち取った。真蠟国は、AD802年まで続いた。

■AD727年 「ウイグル人の大航海時代」

■AD727年 「キエフ（前身）誕生」

AD675年、新羅人は、金氏が勢力を伸張して「統一新羅」を完成させると、朝鮮半島を出てモンゴルに移住した。「ウイグル人の大航海時代」に参加した新羅人は、北極海の航行を経てバルト海に到達すると、スウェード人、ワリアギ、ルス人、リユーリクと組んだ。

■AD752年 「シャイレンドラ朝誕生」

AD713年に真蠟国が分裂すると、一部はカンボジアからジャワ島に移住し、新羅人に合流した。真蠟人は、モンゴル時代の仲間、アラン人、タタール人と共に「シャイレンドラ朝」を開いた。シャイレンドラの名の由来はチャンラ、アラン、タタールの組み合わせである。チャンラ+アラン+タタール=チャアランタール=シャイレンドラとなる。その後、AD802年に真蠟国が滅び、AD998年に新羅が滅ぶと、カンボジアの真蠟人、朝鮮半島の新羅人がシャイレンドラ朝に参加した。

■AD832年 「ジャライル族誕生」

シャイレンドラ朝が滅ぶと、シャイレンドラ人はモンゴルに帰還した。真蠟人・新羅人は、現地人と混合して「ジャライル」を生んだ。ジャライルの名の由来はキャラとワルムベの組み合わせである。キャラ+ワルムベ=キャラワラ=キャラアラ=ジャライルとなる。

■AD862年 「キエフ公国誕生」

リューリクはモンゴル人（柔然/ローラン）であり、スウェード人はインド人（チエーティ王国）であり、ルス人はマヤ人（セロス）であり、ワリアギはアラビア人（ナパタ王国）であった。この国際的な連合体は、リューリクを指揮者にスウェード人傭兵の力でノヴゴロドを支配下に置いた。同時に、リューリクは「リューリク朝」を開き、ロシアの建国者となった。ロシア人の母体人種は、は宇宙人（科学の種族トバルカイン）である。

ロシアの名の由来はトゥルシア人の末裔「ルス」である。後にワリアギがキエフを占領し、首都に設定している。キエフの名の由来はキャラとヴィディエの組み合わせである。キャラ+ヴィディエ=キャヴィ=キエフとなる。AD913年にはイーゴリ1世が初代キエフ大公に就任して「キエフ大公国」を築いている。

■AD877年 「神保氏誕生」「坪内氏誕生」

反乱軍がヤルルンを占領したため、これを機にヤルルン家はチベットを発ち、日本に移住した。ヤルルン家は惟宗氏に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「神保氏」である。神保の名の由来はカンボージャである。カンボージャ=神保（カンボ）=神保（じんぼ）となる。また、ヤルルン家は祖を同じくする富樫氏にも接近して自身の血統を打ち立てている。この時に誕生したのが「坪内氏」である。坪内の名の由来は「ツォボ（チベット）のカンボージャ人」である。ツォボ（坪）+カンボージャ（内）=坪内となる。

■AD1025年 「ギンポ氏誕生」

チョーラ人がシュリーヴィジャヤを攻めると、一部カンボジア人はスマトラを後に東西に新天地を求めて旅立った。西方組はチベットに赴き、「ギンポ」を称した。ギンポの名の由来はカンボジアである。カンボジア=ガンボジア=ギンポとなる。ギンポ氏からは、「チベット仏教カギユ派」の創始者ミラレパが誕生している。また、ギンポ氏の分流「ケンパ氏」からは、ツルプ寺院を建立する。

■AD1025年 「関氏誕生」

チョーラ人がシュリーヴィジャヤを攻めると、一部カンボジア人はスマトラを後に東西に新天地を求めて旅立った。東方組は日本に上陸し、河内源氏の源清光に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「武田氏」の祖、武田信義である。一部は平維衡に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「関氏（せき）」の祖、関実忠である。関の名の由来

はガンダーラである。彼らは、ガンダーラの「ガン」に「関（かん）」を当て字し、訓読みで「関（せき）」と呼んだ。

■AD1336年 「神戸氏誕生」

関氏を頼って日本に移住した一部カンボジア人は関盛政に接近して自身の血統を打ち立てた、この時に誕生したのが「神戸氏（かんべ）」の祖、関盛澄である。神戸（かんべ）の名の由来はカンボジアである。カンボジア＝カンベジア＝かんべ（神戸）となる。

■AD1431年 「カンボジア王国誕生」

AD1334年、マジャパヒト王国の勢力がスマトラ島に及ぶと、シュリーヴィジャヤ王国の中枢を成していたカンボジア人は、インドシナ半島に移住した。この時に「カンボジア王国」が建てられた。カンボジア王国は、AD1953年まで続いた。

トレの歴史

◆テレストー（トレ）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「トレ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したシルックは、現コンゴに移住して「トレ」を生んだ。

■40万年前 「エバシの大航海時代」

■40万年前 「トル族誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したトレはアフリカを離れ、チッタゴンを経由してパプアに入植した。彼らは「トル族」を生んだ。トルの名の由来はトレである。

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「エウドーラー誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れると、トレはヴィディエと組んで「エウドーラー」を生んだ。ヴィディエ+トレ=イエトレ=イエトーラー=エウドーラーとなる。その後、エウドーラーは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「エレクトラ誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れると、トレはオロクンと組んで「エレクトラ」を生んだ。オロクン+トレ=オロクトレ=エレクトラとなる。その後、エレクトラは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ポリュドーラー誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れると、トレはヒッポリュトスと組んで「ポリュドーラー」を生んだ。ヒッポリュトス+トレ=ポリュトレ=ポリュドーラーとなる。その後、ポリュドーラーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「テレストー誕生」

「カオスの大移動時代」の参加者がオーストラリアを訪れると、トレはステュクスと組んで「テレストー」を生んだ。テレストーの名の由来はトレとステュクスの組み合わせである。トレ+ステュクス=トレステュ=テレストーとなる。その後、テレストーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「スカマンドロス誕生」

テレストーは、ゼウクソー、イマナと組んで「スカマンドロス」を生んだ。スカマンドロスの名の由来はゼウクソー、イマナ、テレストーの組み合わせである。ゼウクソー+イマナ+テレストー=ゼウクマナテレス=スカマンドロスとなる。その後、スカマンドロスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「マイアンドロス誕生」

テレストーは、ピュグマエイ、ウェネと組んで「マイアンドロス」を生んだ。マイアンドロスの名の由来はピュグマエイ、ウェネ、テレストーの組み合わせである。ピュグマエイ+ウェネ+テレストー=マエイウェネテレス=マイアンドロスとなる。その後、マイアンドロスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「イストロス誕生」

テレストーは、クウォスと組んで「イストロス」を生んだ。イストロスの名の由来はクウォス、テレストーの組み合わせである。クウォス+テレストー=ウォステレス=イストロスとなる。その後、イストロスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「ドーリス誕生」

テレストーが生まれると、その後にトレが分離し、「ドーリス」を生んでいる。ドーリスの名の由来はテレストーである。テレストー＝テーレストー＝ドーリスとなる。その後、ドーリスは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「アラス族誕生」「トアラ族誕生」

ドーリスは、テレストーと共にマレー半島に移住し「アラス族」、ヴェドイドに属する「トアラ族」を生んだ。アラス、トアラの名の由来はドーリスである。ドーリス＝オーリス＝アラスとなり、ドーリス＝トオリ＝トアラとなる。

■ 30万年前 「トラキ族誕生」「トラジャ族誕生」

テレストーは、ドーリスと共にマレー半島に移住し「トラキ族」「トラジャ族」を生んだ。トラキ、トラジャの名の由来はテレストーである。テレストー＝テレキトー＝トラキとなり、テレストー＝テレシュトー＝トラジャとなる。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「聖地デルポイ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したテレストーは、オーストラリアから古代ギリシアに移住した。テレストーはペイトーと組んで「聖地デルポイ」を建設した。デルポイの名の由来はテレストーとペイトーの組み合わせである。テレストー＋ペイトー＝テレペイ＝デルポイとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「天照大神誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したドーリスは、聖地デルポイから台湾に移住した。白人の姿をした彼らは、ニヤメ（アミ族）と連合した。この時に「天照大神」が生まれた。アマテラスの名の由来はニヤメとドーリスの組み合わせである。ニヤメ+ドーリス=ヤメドリス=アマテラスとなる。天照大神は、高天原（台湾）を統治した。

■ 7万年前 「ドラヴィダ族誕生」

「アルゴス号の大航海時代」に参加したテレストーは、インドに上陸して「ドラヴィダ族」を生んだ。ドラヴィダの名の由来はテレストー+ペイトーの組み合わせである。テレストー+ペイトー=テレペイト=ドラヴィダとなる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「テリピヌ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したドラヴィダ族は、メソポタミアに辿り着くとブリテン島から来たヴァナラシ人（ペルセポネ）と組んで「テリピヌ」を生んだ。テリピヌの名の由来はドラヴィダとヴァナラシの組み合わせである。ドラヴィダ+ヴァナラシ=ドラヴァナ=テリピヌとなる。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「日本足彦（孝安天皇）誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加した天照大神は、全世界的な大地殻変動によって故地が巨大な津波に飲み込まれると、荒廃した台湾を離れて大陸内陸部に避難した。モンゴルに拠点を得たティアマト、オケアーニス、獣人、河の種族は連合して「クンユ」「キアンユン」と呼ばれた国を築いた。

連合したティアマトたちは、後に、天孫族が築くイエマックの王統とは異なる天皇家の王統を築いた。神武天皇から始まり、垂仁天皇に終わる系譜は「クンユ」「キャンユン」時代に生きた天皇家の系譜である。彼らの御名は、みな獣人、オケアーニス、ティアマトに纏わる名前で構成さ

れている。

日本足彦（ヤマトタラシヒコ）の名の由来はティアマトとドーリスの組み合わせである。ティアマト+ドーリス=アマトドリス=ヤマトタラシとなる。ヤマトタラシヒコは後に孝安天皇となるが、御名から推察すると、天照大神の直系は孝安天皇だけである。

■ 1 万 5 千 年 前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1 万 5 千 年 前 「デリー誕生」

モンゴルに孝安天皇を生んだドーリスは、その後「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに移住した。彼らは、彼の地で「テリピヌ」を生んで「神々の集団アヌンナキ」に参加していたテレストーと再会し、再結合する。この時、両者はメソポタミアを離れて、ドラヴィダ族時代の故地インドに入植し「デリー」を築いた。デリーの名の由来はテレストーである。テレストー=テレーストー=デリーとなる。

■ B C 7 千 年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7 千 年 「デリー（トロイア）誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したテラは、アイルランドに入植し、「デリー（トロイア）」を築いた。このトロイアは「神統記」に記された「トロイア戦争」の舞台となる。

■ B C 5 千 年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ B C 5 千 年 「テラ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したテレストーとドーリスはメソポタミアに移住した。彼らは、この時にナホルの子として知られる「テラ」を生んだ。テラの名の由来はテレストーである。テレストー=テラストー=テラとなる。

■BC17世紀 「トロイア誕生」

インドに帰還していたテラは、パンジャブの王国（シバ王国、プント王国）の勢力拡大を機に、インドを離れ、ヒッタイト帝国で賑わうアナトリア半島に移住した。現地人と混合した彼らは、「トロイア」を称した。トロイアの名の由来はドラヴィダである。ドラヴィダ＝トラウイラ＝トラウリア＝トロイアとなる。トロイアは、海の民（デニエン人、シェルデン人）に破壊されるまで伝説の都市として繁栄した。

■BC1200年 「ドルヒユ族誕生」

海の民の侵攻によってトロイアが破壊されると、トロイア人はトゥルシア人の助けにより、イランに亡命した。その後、トロイア人は故地であるインドに帰り、「ドルヒユ族」を称して、アリア人の軍団に参加した。ドルヒユの名の由来はトロイアである。トロイア＝トロヒア＝ドルヒユとなる。

■BC1027年 「ダルマチア誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したマツヤ族とテラは、アドリア海に落ちていて「ダルマチア」を称した。ダルマチアの名の由来はドルヒユとマツヤの組み合わせである。ドルヒユ＋マツヤ＝ドルマツヤ＝ダルマチアとなる。BC7世紀頃、ダルマチア人は、シルクロードを介してタリム盆地に及んだ。この時、一部ハッティ人が同行した。ダルマチア人の到来により、この地は初めて「タリム」と呼ばれた。タリムの名の由来はダルマチアである。ダルマチア＝ダルマ＝タリムとなる。

■BC7世紀 「タリム誕生」

BC7世紀頃、ダルマチア人は、シルクロードを介してタリム盆地に及んだ。この時、一部ハッティ人が同行した。ダルマチア人の到来により、この地は初めて「タリム」と呼ばれた。タリムの名の由来はダルマチアである。ダルマチア＝ダルマ＝タリムとなる。

■BC7世紀 「登呂誕生」

キンメリア人などの勢力が強まると、をダルマチア人はタリム盆地から日本に移住した。日本で

はダルマチア人は一時的に解散し、テラは「登呂」を建設した。登呂の名の由来はトレである。トレ＝トロ＝登呂となる。名前から、登呂遺跡は、日本に入植したダルマチア人が建設したとわかる。

■BC6世紀 「マツヤ王国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」によってたくさんの種族が到来すると、刺激を受けたダルマチア人は、日本を離れて故郷インドに帰還した。この時にマツヤ族とドルヒユ族は共同で先祖の拠点だったデリー近郊に「マツヤ王国」を建てている。

■BC552年 「マゴスの大航海時代」

■BC552年 「聖地タラ誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したドルヒユ族は、インドを離れてかつての故郷であるアイルランドに上陸した。ドルヒユ族は、「聖地タラ」を設けた。タラの名の由来はテラである。このアイルランド上陸時に、ドルヒユ族はマツヤ族と離れ、マゴスを相棒に決めて合体している。

■BC552年 「デラウェア誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマツヤ族、ドルヒユ族は、大西洋を横断し、北アメリカに入植した。日本人の顔をした彼らは現地人と混合して「デラウェア」を称した。デラウェアの名の由来はドルヒユである。ドルヒユ＝ドルヒェア＝デラウェアとなる。

■BC552年 「タラスカ誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマツヤ族、ドルヒユ族は、次にメキシコに上陸すると、「タラスカ」を築いた。タラスカの名の由来は登呂と望月の組み合わせである。トロ＋モチヅキ＝トロツキ＝タラスカとなる。

■BC327年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■ B C 1 3 年 「景行天皇誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したマゴス、ドルヒユ族は満州に上陸し、イエマックの王室に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に生まれたのが「大足彦（オオタラシヒコ）」である。オオタラシヒコの名の由来はオメガ（オー）とタラスカである。オー+タラスカ=オオタラシ=大足彦となる。つまり、大足彦の名はマゴスとダルマチア人の連合体であることを示している。景行天皇は、弱い民衆を苦しめるタナトスの一族である土蜘蛛を皆殺しにし、日本武尊にもタナトスの一族である九頭龍の討伐を指示した。

■ A D 8 4 年 「成務天皇誕生」

ワカタラシヒコの名の由来は「若」とタラスカである。ワカ+タラスカ=ワカタラシ=稚足彦となる。稚足彦は「成務天皇」として第13代天皇に即位している。成務天皇の時代、ステュクスの後裔である武内宿禰が大臣として政務を統括したと言う。

■ A D ? ? 年 「仲哀天皇誕生」

タラシナカツヒコの名の由来はタラスカと河の種族グレニコスの組み合わせである。タラスカ+グレニコス=タラスナカ=足仲彦となる。足仲彦は「仲哀天皇」として第14代天皇に即位している。仲哀天皇を最後に、ポントス人の応神天皇が即位するまで、イエマック王位（天皇の座）は70年間、空位となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ダラス誕生」

仲哀天皇の一族は、アメリカに入植して「ダラス」を築き、「ムスコギー族」を成した。ダラスの名の由来はタラスカであり、ムスコギーの名の由来は朝鮮語「何の肉ですか？（ムスンコギヤ?）」である。

■ A D 3 世紀 「ハスティンギ族誕生」

仲哀天皇の一族は、ブリテン島に入植し、現地人と混合して「ハスティンギ族」を成した。ハスティンギの名の由来は朝鮮語「海水の友（ハス+チング）」である。ハス+チング=ハスチング=ハスティンギとなる。ハスティンギ族は、後にブリテン島を出撃してヨーロッパに渡り、イベリア半島に覇を唱えている。

A D 4 0 6 年、ブリテン島を出たハスティンギ族は、バルト海に赴くと、スエビ族、ヴァンダル族と連合してライン河を越えた。A D 4 0 9 年にイベリア半島に侵攻して「ハスティンギ王国」を建設するが、10年後にスエビ族と対立して敗北を喫してしまう。

■ A D 4 0 9 年 「ハスティンギ王国誕生」

A D 4 0 6 年、ブリテン島を出たハスティンギ族は、バルト海に赴くと、スエビ族、ヴァンダル族と連合してライン河を越えた。A D 4 0 9 年にイベリア半島に侵攻して「ハスティンギ王国」を建設するが、10年後にスエビ族と対立して敗北を喫してしまう。

■ A D 5 2 0 年 「タルマヌガラ王国誕生」

カンボジアに拠点を得たクメール人、アンコール人、ハスティンギ族だが、アンコール人がハスティンギ族と共にジャワ島に移住した。両者はジャワ島初の王国「タルマヌガラ」を建てた。タルマヌガラの名の由来はハスティンギ族の故地のひとつ「タリム」と「アンコール」の組み合わせである。タリム+アンコール=タリマンコール=タルマヌガラとなる。

■ A D 6 世紀 「ヘースティンガス王国誕生」

イベリア半島からブリテン島に帰還すると、彼らはA D 6 世紀に「ヘースティンガス王国」を築いた。ハスティンギの系統からは「デン」などが末尾に付く姓が多く残された。

■ A D 1 4 4 1 年 「トルワ王国誕生」

デラウェア族は、北アメリカからジンバブエに移住した。彼らは「トルワ」を称した。トルワの名の由来はトロイアである。トロイア=トロア=トルワとなる。トルワの首都は「カミ」である。カミの名の由来はもちろん、日本語の「神」だと考えられる。正式な国名「ブトゥワ」も日本

語「武闘派」が由来だと考えられる。トルワ王国は、陸奥安倍氏が築いた「ムタパ王国」と共存し、来島村上氏の後裔「チャンガミレ族」によって滅びた。

■AD1879年 レフ・トロツキー生誕

アステカ人（アストラハン・タタール）がメキシコから中央アジアに帰還した際、タラスカ人が同行していた。トロツキーはその子孫である。トロツキーの名の由来はタラスカと同じく登呂と望月の組み合わせである。登呂+望月=登呂月=トロツキーとなる。

■AD1983年 エドワード・スノーデン生誕

◆タルタロスの歴史

■30万年前 「カオスの大移動時代」

■30万年前 「スカマンドロス誕生」

テレストーは、ゼウクソー、イマナと組んで「スカマンドロス」を生んだ。スカマンドロスの名の由来はゼウクソー、イマナ、テレストーの組み合わせである。ゼウクソー+イマナ+テレストー=ゼウクマナテレス=スカマンドロスとなる。その後、スカマンドロスは河川の娘たちに参加した。

■30万年前 「マイアンドロス誕生」

テレストーは、ピュグマエイ、ウェネと組んで「マイアンドロス」を生んだ。マイアンドロスの名の由来はピュグマエイ、ウェネ、テレストーの組み合わせである。ピュグマエイ+ウェネ+テレストー=マエイウェネテレス=マイアンドロスとなる。その後、マイアンドロスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「タルタロス誕生」

スカマンドロス、マイアンドロスは、連合を組んで「タルタロス」を生んだ。タルタロスの名の由来はスカマンドロスとマイアンドロスの組み合わせである。スカマンドロス+マイアンドロス=ドロドロス=トロトロス=タルタロスとなる。タルタロスは、カオス、ガイア、エロスに次ぐ原初の神のひとりである。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 4万年前 「ティタノマキア」

■ 4万年前 「タロコ族誕生」「ケンタウロス誕生」

「ティタノマキア」に敗北し、クロノスから解放されると、ギリシアを離れたタルタロスは台湾に入植し、シベリアから来ていたウリゲンと連合した。この時に「タロコ族」「ケンタウロス」が生まれた。タロコの名の由来はタルタロスとウリゲン、ケンタウロスの名の由来はウリゲンとタルタロスの組み合わせである。タルタロス+ティケー=タルケー=タロコ、ウリゲン+タルタロス=ゲンタロス=ケンタウロスとなる。タロコとケンタウロスは不可分であり、一時期、台湾がケンタウロスと呼ばれていたことがわかる。

■ 7万年前 「ダイダロス誕生」

マレー半島でアドメテーと連合したタルタロスは、「ダイダロス」を生んだ。ダイダロスの名の由来はアドメテーとタルタロスの組み合わせである。アドメテー+タルタロス=テータロス=ダイダロスとなる。ダイダロスは入ったら二度と出られない迷宮「ラビュリントス」を建設した。

■ 7万年前 「アイトラ誕生」

アラビア半島でエウドーラーと連合したタルタロスは、「アイトラ」を生んだ。アイトラの名の由来はエウドーラーとタルタロスの組み合わせである。エウドーラー+タルタロス=エウタロ=アイトラとなる。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「タルタル人誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したタルタロスは、テテュスと行動を共にし、スーサから中央アジアに分布した。タルタロスは「タルタル人」を称した。タルタルの名の由来はタルタロスである。同盟者であるテテュスは「タタ」「タタール」などを称したが、彼らは行動を共にしていたため、タタ、タタール、タルタルはひとつの民族として混同された。

■ BC 5千年 「第1次北極海ルート時代」

■ BC 5千年 「ナワトル族誕生」

「第1次北極海ルート時代」に参加したタルタロスは、ノアと共に北アメリカに入植した。この時に「ナワトル族」が生まれた。ナワトルの名の由来はノアとタルタロスの組み合わせである。ノア+タルタロス=ノアタル=ナワトルとなる。

■ BC 40世紀 「ナワ族誕生」

ナワトル族は、北アメリカからマヤに移ると「ナワ族」に名を改めた。

■ BC 35世紀 「サムエルの大航海時代」

■ BC 32世紀 「那覇誕生」「ナウル誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したナワ族は、出羽国を発ち、沖縄諸島を発見した。ナワ族は当地を「那覇」と命名した。那覇の名の由来はナワである。また、彼らは太平洋に進出し、「ナウル島（ニョルド）」を発見する。ナウルの名の由来はナイルである。ナイル=ナウルとなる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC32世紀 「ナフタリ族誕生」

「モーゼスの大移動時代」に参加したナワトル族は、モンゴルに移住して「ナフタリ族」を生んだ。ナフタリの名の由来はナワトルである。ナワトル=ナハトル=ナフタリとなる。

■BC30世紀 「黙示録アルマゲドン」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「ガンダーラ（前身）誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したタルタロス（ナフタリ族）は、アラビア半島に移住した。彼らは、マガン王国に移住し、レメクと意気投合した。この時代に「ガンダーラ」の前身が生まれた。ガンダーラの名の由来はマガンとタルタロスの組み合わせである。マガン+タルタロス=ガントル=ガンダーラとなる。

■BC1027年 「マハーバーラタ戦争」

■BC1027年 「母なる女神タウレット誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、アラビア半島を出たタルタロス（ナフタリ族）は、エジプトに移住した。彼らは、エジプトに「母なる女神タウレット」を祀ってヘリオポリスに参加した。タウレットの名の由来はタルタロスである。タルタロス=タウレタロス=タウレットとなる。

■BC1027年 「ナパタ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、アラビア半島を出たタルタロス（ナフタリ族）は、エジプトからヌビアに移住し「ナパタ」を生んだ。ナパタの名の由来はナフタリである。ナフタリ=ナプタ

リ＝ナパタとなる。

■ B C 7 世紀 「クシュ人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「ワダラーン誕生」

「クシュ人の大航海時代」第1の拠点はソマリアである。ここにはナフタリ族が残留を決めた。ナフタリ族は2つに分離し、ノア族の系統のナフタリ族が「ハワドレ」を称し、タルタロスの系統のナフタリ族は「ワダラーン」を称した。ハワドレ、ワダラーンのいずれの名もナワトルが由来である。ナワトル＝アワタリ＝ハワドレとなり、ナワトル＝ナワタラン＝ワダラーンとなる。

■ B C 7 世紀 「ガンダーラ王国誕生」

「クシュ人の大航海時代」に参加したマガン人とタルタロス（ナフタリ族）は、インダス流域に移住した。この時に「ガンダーラ王国」が生まれた。

■ B C 3 2 7 年 「ヴィシュヌの大航海時代」

■ B C 3 2 7 年 「フォトラ誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したワダラーン族は、ピクトランドに根付いた。この時に「フォトラ」が生まれた。フォトラの名の由来はワダラーンである。ワダラーン＝ハタラーン＝ファタラ＝フォトラとなる。

■ B C 3 2 7 年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■ B C 3 2 7 年 「キングダ誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したガンダーラ人は、アラビア半島に上陸した。彼らは、アラビア人と混合して「キングダ族」を称した。キングダの名の由来はガンダーラである。ガンダー

ラ=ギンダーラ=キンダとなる。その後、キンダ族はヨルダンに移った。

■BC327年 「キンダ人の大航海時代」

■BC327年 「ブリギンテ族誕生」

「キンダ人の大航海時代」に参加したキンダ族は、イベリア半島に上陸すると、「ブリギンテ」の名前を得た。ブリギンテの名の由来はイベリアのキンダである。イベリア+キンダ=ベリアキンダ=ブリギンテとなる。

■BC327年 ブリギンテ族、ブリテン島に入植

■BC327年 「女神ブリギッド誕生」

ブリギンテ族は、ブリテン島北部を拠点にし、一部がアイルランドに移住すると、「聖なる女神ブリギッド」を祀った。ブリギッドの名の由来はブリギンテである。ブリギンテ=ブリギッテ=ブリギットとなる。

■BC4世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■BC3世紀 「ブルグント族誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したブリギンテ族は、キンブリ人と共にバルト海に進み、ボーンホルム島に入植した。この時に「ブルグント族」が生まれた。ブルグントの名の由来はブリギンテである。ブリギンテ=ブリギント=ブルグントとなる。

■BC3世紀 「第2次ヴィシュヌの大航海時代」

■BC3世紀 「ケツアルコアトル誕生」

「ヴィシュヌの大航海時代」に参加したケツアルコアトルは、コーサラ人と組んで「テオティワカン」が栄えていた古代メキシコに移住した。この時に「ケツアルコアトル」が生まれた。ケツアルコアトルの名の由来はコーサラとフォトラの組み合わせである。コーサラ+フォトラ=コーチャラ+クオトラ=ケツアルコアトルとなる。

■BC139年 「ケツアルコアトルの大航海時代」

■BC1世紀 「ツェルタル族誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」を経て、マヤに移住したタルタル族は、間や陣と混合し、タルタルを由来に「ツェルタル」の種族を儲けた。タルタル=チェルタル=ツェルタルとなる。

■AD346年 「百済誕生」

「ケツアルコアトルの大航海時代」に参加したケツアルコアトルは、バクトリアから来たバクトリア人と連合して百済（クダラ・ペクチェ）を建てた。百済の名の由来はケツアルコアトルである。ケツアルコアトル=コアトル=クダラ（百済）となる。古代朝鮮の王国、高句麗と百済はユカタン半島から来たのだ。

■AD411年 グンディオク、初代ブルグント王に即位 「ブルグント王国誕生」

ブリテン島に拠点があったブリギンテ族は、ボーンホルム島を経てゲルマニアに上陸し、「ブルグント族」として出現した。ブリギンテ族とブルグント族は不可分である。AD411年、ブルグント王国が建てられたが、王国は、AD534年に滅亡した。

■AD534年 「ブガンダ誕生」「ウガンダ誕生」

ブルグント王国が滅ぶと、ブルグント族はヨーロッパを発ってアフリカ大陸に向かった。地中海からナイル河に入り、上流の大湖水地方に達したブルグント族は「ブガンダ王国」「ウガンダ王国」を築いた。ブガンダの名の由来はブルグントである。ブルグント=ブーグント=ブガンダ=ウガンダとなる。ウガンダ族は、大英帝国がニョロ帝国を攻略する時に大英帝国軍に従軍し

てニョロ帝国を滅亡させた。ブリギンテ族の後裔であるウガンダ族は、イギリス人に親近感を持っていたため加勢した。だが、残念ながら、当時のイギリス人は人喰い人種の教会「聖公会に」に掌握されていたため、征服の道具として利用されたに過ぎない。

■AD633年 朝鮮半島からピクトランドに帰還

AD663年、「白村江の戦い」で百済が滅ぶと、一部の百済人は故地であるピクトランドに帰還し、朝鮮人の顔をした百済人は白人の顔をした兄弟「フォトラ」に合流した。

■AD681年 「第1次ドゥロ朝（ブルガリア帝国）誕生」

AD663年、「白村江の戦い」で百済が滅ぶと、一部の百済人はコーカサスに移住し、ブルガリア人を統率して「ブルガリア帝国」を建設した。「ドゥロ王朝」の名の由来はタルタロスである。タルタロス＝ドロドロス＝ドゥロとなる。

■AD753年 「ラーシュトラクータ朝誕生」

AD753年、ドゥロ王朝が滅ぶと、ドゥロ家はインドに入植し、ラーシュトラクと連合した。この時に「ラーシュトラクータ朝」が生まれた。ラーシュトラクータの名の由来はラーシュトラクと百済の組み合わせである。ラーシュトラク＋百済＝ラーシュトラク＋クダラ＝ラーシュトラクータとなる。

■AD825年 「マーシア人の大航海時代」

■AD825年 「バートリ家誕生」

「マーシア人の大航海時代」に参加したフォトラは、トランシルヴァニアに移ってフォトラを由来に「バートリ家」を築いた。バートリの名の由来はフォトラである。フォトラ＝フォートラ＝バートリとなる。バートリ家は、トランシルヴァニア公、ハンガリー王、ポーランド王を数多く輩出した東欧貴族の名家である。

■AD852年 ボリス1世、ブルガリア皇帝に即位 「第2次ドゥロ朝（ブルガリア帝国）誕生」

ラーシュトラクータ朝のドゥロ家は、再度、ブルガリアに侵入し「ドゥロ王朝」を開いた。この王朝はAD997年まで続いた。

■AD868年 「トゥールーン朝誕生」

AD663年、百済が滅ぶと、百済人は朝鮮半島を離れてエジプトに移住した。彼らは「トゥールーン」を称した。トゥールーンの名の由来はフォトラである。フォトラ=フォトラーン=トラーン=トゥルーンとなる。AD868年、アッバース朝治世下、アフマド・イブン=トゥールーンが初代王に即位して「トゥールーン朝」を開き、事実上の独立政権を樹立している。

■AD1092年 「アルスラーン誕生」

その後、AD905年にトゥールーン朝が滅ぶと、トゥールーン王家はイラクに逃れて「アルスラーン」を称した。アルスラーンの名の由来はアルとトゥールーンの組み合わせである。アル+トゥールーン=アルツルーン=アルスラーンとなる。AD1092年、アルプ・アルスラーンがスライマン1世を倒し、「ルーム・セルジューク朝」に君臨した。

■AD1192年 「ラ・トゥール家誕生」

AD1192年にクルチ・アルスラーン2世が死去すると、一族はイラクを去り、カペー朝治世下のフランス王国に移住した。彼らは、ここで「ラ・トゥール」を称した。ラ・トゥールの名の由来はラとトゥールーンの組み合わせである。ラ+トゥールーン=ラ・トゥールとなる。

■AD1280年 「テルテル朝（ブルガリア帝国）誕生」

AD1192年にクルチ・アルスラーン2世が死去すると、一族はイラクを去り、ブルガリア帝国に移住した。AD663年に分裂した百済人がドゥロ朝を開いたことを知った彼らは、「テルテル朝」を開いた。テルテルの名の由来はタルタロスである。タルタロス=テルテルス=テルテルとなる。この王朝は、AD1322年まで続いた。

■AD1490年 「ビーダル王国誕生」

オスマン・トルコ帝国がバルカン半島に進軍すると、トランシルヴァニアにいた一部のバートリ家がこれを嫌ってインドに移住した。白人の顔をした彼らは、インド人と混合して「ビーダル」の名を生んだ。バフマニー朝最後の王カリームッラー・シャーが死去すると宰相アミール・バリードがアミール・バリード・シャー1世を名乗り、バフマニー朝を廃した。ビーダルの人々は、「ビーダル王国」を建てた。ビーダルの名の由来はバートリである。バートリ=バードリ=ビーダルとなる。その後、ビーダル王国がAD1619年に滅ぶと、ビーダルの人々は、ナフタリ族時代の同盟者である服部氏に、日本への亡命を手助けしてもらった。

■AD1611年 エリザベート・バートリ逮捕

マラーター族を一時的に抜け出してインドからトランシルヴァニアに移り住んだルオ族は、ヴラド公の後釜としてエリザベート・バートリを選び、彼女の地位を利用して、近隣から子女を誘拐し、残虐な享楽の果てに殺害し、食べていた。しかし、余りにも近隣の少女に手を出しすぎたため、悪事が近隣住民に知れ渡ることになった。この時、ルオ族は家族であるルター派に相談し、エリザベートをハメ、全ての責任を転嫁して逃げる算段をつけた。

610人もの少女が惨殺されたといわれているが、責任は全てエリザベートに転嫁された。エリザベートは使用人たちが何をしているか知っていた。だが、恐ろしくてやめさせることは不可能だった。また、周りがルター派の信者で固められていたため、名門バートリ家の家族に相談しても、逆に、頭がおかしいとしてエリザベートは家族にさえ退けられていた。逮捕されたエリザベートは、窓も出入り口も塗り固められた穴倉に幽閉され、汚物と害虫に塗れて暗闇の中で果てたとされている。バートリ家だけでなく、近隣住民、被害者の遺族でさえ、エリザベートが犯人でないことは知っていた。しかし、パンノニアのインフラを掌握しているルター派に安定した生活と平穏な日常を保障してもらうため、仕方なかったのだ。このように、人喰い人種が君臨する世の中では「生きているのに口なし」ということがしばしば起きる。

現在、エリザベート・バートリの猟奇事件は、若さを妬み、少女を憎んだ年増の暴君が復讐心を満たすために行った身勝手に残虐な所業とされている。だが、実際にはソーニー・ビーンとしてイギリスで300人もの人間を殺して喰い、ジル・ド・レ、ヴラド公に寄生して、たくさんの人々を惨殺した人喰い人種の所業であった。エリザベートは「鋼鉄の処女」で殺した少女の血を浴び、拷問器具で指を切断して苦痛にゆがむ表情を見て笑い、使用人に命じて娘の皮膚を切り裂いたり、性器や膣を取り出して興奮していたという。しかし、これらは全て使用人（ルオ族）の所業である。このあと、ルオ族はインドに帰還してマラーター族に合流するが、一部はトランシルヴァニアからロシア帝国に移り、ダリヤ・サルトウイコヴァ伯爵夫人に寄生している。

■AD1918年 ヘルマン・ポール、創設 「トゥーレ協会誕生」

■AD1922年 ピエル＝パオロ・パゾリーニ生誕

バートリの家系からは映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニが輩出されている。バートリ＝バーソリ＝パゾリーニとなる。

◆トゥルシア（ティルス）の歴史

■1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■BC7千2百年 「神々の集団アヌンナキ誕生」

■BC7千2百年 「ティルス誕生」

タルタル人（タルタロス）は、中央アジアからメソポタミアに赴いて「ティルス」を生んでいる。ティルスはヤペテの子と伝えられているが、名前から察するに、トレに属している。ティルスの名の由来はタルタロスである。タルタロス＝タルティルス＝ティルスとなる。

■BC7千年 「アヌンナキの大航海時代」

■BC7千年 「トラキア誕生」

「アヌンナキの大航海時代」に参加したティルスは、マルドゥクと共にバルカン半島に移住した。この時、彼らは「トラキア」を築いた。トラキアの名の由来はティルスとカオス（マルドゥク）の組み合わせである。ティルス＋カオス＝ティルカオ＝トラキアとなる。

■BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC 32世紀 「セロス誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したティルスは、シルックと共にマヤに移住した。この時に「セロス」を築いている。セロスの名の由来はシルックとティルスの組み合わせである。シルック+ティルス=シルス=セロスとなる。

■BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC 19世紀 「トゥルシア人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したセロス人（ティルス）は、ベリーズ人（ホルス）と共にマヤで船団に加わった。セロス人は、イランに入植して「トゥルシア人」を名乗り、海の民の連合国、伝説の「ベッシュタード王国」を築いた。トゥルシアの名の由来はティルスである。ティルス=ティルシア=トゥルシアとなる。

■BC 19世紀 「テュロス誕生」

地中海の番人としての役割を果たしたトゥルシア人は、タナトスの海の民（シェルデン人、デニエン人）を成敗し、ラムセス2世を助け、ミケーネ人、ヒッタイト人、トロイア人などの亡命者をイランに導いた。、トゥルシア人はカナンに「テュロス」を築いた。テュロスの名の由来はティルスである。海の民の時代が終わった後も、テュロスは、そのままフェニキア人の都市として、アレキサンダー大王の侵攻まで存続した。

■BC 19世紀 「トリツ族誕生」

トゥルシア人は、インドに移住し、「トリツ族」を生んだ。トリツの名の由来はティルスである。ティルス=ティルツ=トリツとなる。トリツ族は、アーリア人の軍団に参加した。

■BC1027年 「ペーシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「トラキア王国誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したトラキア人は、バルカン半島に移住した。彼らは「トラキア王国」を築いた。

■BC1027年 「ラーシュトラク誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したゾロアスター教はインド西岸に「ラーシュトラク」の土地を得た。ラーシュトラクの名の由来はトゥルシアとトラキアの組み合わせである。トゥルシア+トラキア=ルシアトラキア+ラーシュトラクとなる。

■BC332年 「ユリウス家誕生」

アレクサンドル大王がティルスを占領すると、ティルス人はイタリア半島に逃亡した。この時に「ユリウス家」が生まれた。ユリウスの名の由来はティルスである。ティルス=ティリウス=イリウス=ユリウスとなる。

■BC273年 「ラジア誕生」

マウリア朝がラーシュトラクの領土を席卷すると、ラーシュトラク人は黒海東岸に移住した。この時に「ラジア」を建設した。ラジアの名の由来はラーシュトラクである。ラーシュトラク=ラジアトラク=ラジアとなる。

■BC年 ユリウス・カエサル生誕

■AD68年 「葛城氏誕生」

ローマ帝国の覇権を喪失すると、ユリウス家は、日本に上陸して現地人と混合し、「葛城氏」を形成した。葛城の名の由来は「カエサルの城」である。カエサル+城=カサル+城=葛城となる

。葛城氏は、後に満州に赴いてイエマック王統を篡奪した托跋部に接近して自身の血統を打ち建てた。葛城襲津彦の娘、磐之媛が仁徳天皇に接近して、履中天皇、反正天皇、允恭天皇を生んでいる。履中天皇の御名「大兄去来穗別尊」の大兄（おおえの）は、ヨーロッパの名「オーウェン」の当て字である。

■AD68年 「フォルト・リウ誕生」

ローマ帝国の覇権を喪失すると、ユリウス家は、クラウディウス家、プルトゥス家を率いてスコットランドに移住した。ユリウス家は、プルトゥス家と組んで「フォルト・リウ」を建てた。フォルト・リウの名の由来はプルトゥスとユリウスの組み合わせである。プルトゥス+ユリウス=プルトゥ+リウ=フォルト・リウとなる。

■AD3世紀 「大和人の大航海時代」

■AD3世紀 葛城氏、ジャワ島に移住

「大和人の大航海時代」に参加した葛城氏は、後に、山田氏と共に「マタラム王国」を築いた。

■AD470年 「マイトラカ朝誕生」

ゴート族、フン族が乱入してきたため、トラキア人はバルカン半島を離れて、グジャラートに居つき、ニュージーランドからインドに来ていたマオリ族と連合して「マイトラカ帝国」を建国した。マイトラカの名の由来はマオリとトラキアの組み合わせである。マオリ+トラキア=マオトラカ=マイトラカとなる。

■AD703年 「ラーシュトラクータ（前身）誕生」

イスラム軍がアルメニアに迫ると、ラジア人は黒海を脱出した。彼らは、「ラーシュトラク」の跡地に移住し、チャールキア朝に配下として参加した。一方、彼らはAD663年に滅亡した百済の残党と合体し、連合体「ラーシュトラクータ」を築いた。ラーシュトラクータの名の由来はラーシュトラクと百済の組み合わせである。ラーシュトラク+クダラ=ラーシュトラクダー=ラーシュトラクータとなる。

■AD753年 「ラーシュトラクータ朝誕生」

AD753年、ダンティドゥルガがチャールキアの君主を倒して「ラーシュトラクータ朝」を開き、デカン高原の支配者となる。

■AD864年 「マタラム王国誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した葛城氏は、山田氏と共に「マタラム王国」を築いた。マタラムの名の由来はティアマト（山田氏）とローマ（葛城氏）の組み合わせである。ティアマト+ローマ=マトローマ=マタラムとなる。

■AD929年 「ジャワ人の大航海時代」

■AD929年 「有吉氏誕生」「有安氏誕生」

マタラム王国が滅ぶと、ジャワから日本に帰還した葛城氏は、現地人と混合して「有吉氏」「有安氏」などを生んだ。2つの名の由来はいずれもユリウスである。ユリウス=ウリヤス=有吉=有安となる。

■AD973年 「龍造寺氏誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、ラーシュトラクータの人々は日本に移住した。ラジア人、トラキア人は九州に上陸した。インド人の顔をしたラジア人は現地人と混合して「龍造寺氏」を称した。龍造寺の名の由来はラーシュトラである。ラーシュトラ=リューゾーテラ=龍造寺となる。龍造寺氏の子孫には怪奇作家夢野久作（杉山直樹）がいると伝えられている（母方が龍造寺氏なのかもしれない）。

■AD973年 「寺沢氏誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、ラーシュトラクータの人々は日本に移住した。ラジア人、トラ

キア人は九州に上陸した。トラキア人は「寺沢氏」を称した。トラキア＝トラシワ＝寺沢となる。

■AD973年 「リスト誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、ラーシュトラクータの人々はヨーロッパに移住した。インド人の顔をした彼らは現地人と混合して「リスト」の名を生んだ。リストの名の由来はラーシュトラである。ラーシュトラ＝ラーシュト＝リストとなる。

■AD1584年 龍造寺隆信、千葉氏と共にパンジャブに移住

千葉氏はラージプート時代にパンジャブで生活していたため、一行は日本を発つとパンジャブに侵入し、一時的に潜伏した。

■AD1615年 「豊臣氏の大移動時代」

■AD1615年 「ルソー誕生」

「豊臣氏の大移動時代」に参加した龍造寺隆信の一行は、コーカサスを通過してスイスに移って現地人と交わり、「ルソー」「リスト」の名を生んだ。ルソーの名の由来は龍造寺であり、リストの名の由来はラーシュトラクータである。龍造寺（りゅうぞうじ）＝りゅうぞう＝ルソーとなる。

■AD1712年 ジャン＝ジャック・ルソー生誕

■AD1811年 フランツ・リスト生誕

■AD1844年 アンリ・ルソー生誕

■AD1848年　ガイド＝フォン・リスト生誕　「リスト協会誕生」

■AD1889年　夢野久作（杉山直樹）生誕

■AD1932年　リチャード・レスター生誕

■AD1955年　寺沢武一生誕

◆バクトリア（エウドローラー）の歴史

■30万年前　「ブカット族誕生」「ベカタン族誕生」

「カオスの大移動時代」「第2次キブウカの大移動時代」を介して異なる人類がオーストラリアに到来し、混血時代が始まると、ピュグマエイはエウドローラーと意気投合し、連合した。この時に「ブカット族」「ベカタン族」がパプアに生まれた。ブカットの名の由来はピュグマエイとエウドローラーの組み合わせであり、ベカタンの名の由来はブカットである。ピュグマエイ＋エウドローラー＝ピュグウドー＝ブカットとなり、ブカット＝ブカタン＝ベカタンとなる。このブカットの名は「ピクト」の語源でもある。

■4万年前　「第2次アルゴス号の大航海時代」

■4万年前　「ピクト人誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したブカット族、ベカタン族はブリテン島に辿り着いた。しかし、氷結を免れていたブリテン島南部にハタミ人がいたため、ブ厚い氷河に覆われたスコットランドに拠点を築き、エスキモーのような暮らしを始めた。彼らは当地を「ピクトランド」と呼んだ。ピクトの名の由来はブカット、或いはベカタンである。ブカット＝ブカト＝ピクトとなる。この時に、彼らは、グリーンランド、アイスランドに古来から伝わる小人の伝説を

生んだ。イグルーを初めて建造したのも彼らだと考えられる。

■ 4 万年前 「ヘカテ誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」のピクト人は、氷上のピクトランドから陸地剥き出しのロンドン地域に移住し、「ヘカテ」を生んだ。ヘカテの名の由来はピクトと同じ、ピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ピュグド=ヘカテとなる。ヘカテは「モルモー」という魔物を従えていたが、モルモーはピュグマエイの祖モリモのことである。

■ BC 5 千年 「ヘクトル誕生」

ブリテン島からアイルランドに渡ったヘカテは、デリーに「ヘクトル」を生んだ。ヘクトルの名の由来はピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ヒュクトラ=ヘクトルとなる。神話では、「トロイア戦争」でアキレウスに殺されている。

■ BC 5 千年 「トロイア戦争」

■ BC 5 千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5 千年 「バクトリア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したヘクトルの残党は、中央アジアに入植し「バクトリア」を築いた。バクトリアの名の由来はピュグマエイとエウドラーの組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ヒュクトリア=バクトリアとなる。

■ BC 250 年 ディオドトス1世、初代王に即位 「バクトリア王国誕生」

ピクト人の子孫であるバクトリア人は、BC 250 年、セレウコス朝から独立して「バクトリア王国」を築いている。バクトリアの名の由来はピクトと同じく、ピュグマエイとエウドラーの

組み合わせである。ピュグマエイ+エウドラー=ピュグドラー=ビクトリア=バクトリアとなる。

■BC139年 「カタール誕生」

王国が滅ぶと、バクトリア人はアラビア半島に移住した。彼らは「カタール」を築いた。カタールの名の由来はバクトリアである。バクトリア=バクトーリア=クターリア=カタールとなる。

■AD320年 「キダーラ誕生」

サーサーン朝がアラビアを攻撃すると、エウドラーが主導するカタールの人々はアラビア半島を離れてパンジャブに入植した。彼らはパンジャブに「キダーラ朝」を開いた。キダーラの名の由来はカタールである。

■AD500年 「ゴダール誕生」

キダーラ朝が滅ぶと、キダーラ人はフランスに入植した。パンジャブ人の顔をした彼らは現地人と混合して「ゴダール」の名を生んだ。ゴダールの名の由来はキダーラである。キダーラ=ギダーラ=ゴダールとなる。この系統からは映画監督ジャン=リュック・ゴダール、チャップリン夫人ポーレット・ゴダードが輩出されている。

■AD500年 「カタリ派誕生」

キダーラ朝がAD500年に滅ぶと、キダーラ人はフランスに移り、キリスト教徒になった。しかし、人食い人種タナトスの団体クリュニー会、シトー会などが仕切るカトリックに嫌悪を覚えたキダーラ人は独自のキリスト教を切り拓いた。それが「カタリ派」である。カタリの名の由来はバクトリアである。バクトリア=バカタリア=カタリとなる。AD1017年、タナトスのカトリックに発見されたカタリ派は異端の印を押され、受難の道を歩むことになる。

■AD1244年 「ドゥラニ族誕生」

タナトスの宗教シトー会が「カタリ派」を敵視し、異端と称して執拗に攻撃した。AD120

9年、カタリ派を壊滅させるために、シトー会は「アルビジョワ十字軍」を編成した。AD1244年、最後の砦モンセギュールが陥落すると、壊滅を機に、カタリ派はフランスを脱出してパシユトゥーンに移住した。フランス人の顔をしたカタリ派は、パシユトゥーン人の傘下に入り「ドゥラニ族」を生んだ。ドゥラニの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー＝エウドーラーン＝ドゥラニとなる。

■AD13世紀 「ドロン誕生」「ディロン誕生」

AD13世紀、モンゴル軍の侵攻を機に、ドゥラニ族は一時的にヨーロッパに避難した。この時に「ドロン」「ディロン」などの名が生まれた。これらの名はドゥラニが由来である。この系統からは俳優アラン・ドロン、俳優マット・ディロンが輩出されている。

■AD17世紀 「トゥーラーン族誕生」

その後、ドゥラニ族がヨーロッパからアフガンに戻ると、パシユトゥーン人がギルザイ族を乗っ取ったため、ギルザイ族が「ドゥラニ」の名を篡奪していた。そのため彼らは、代わりにパシユトゥーン人が篡奪した「ギルザイ族」に参加して「トゥーラーン族」を称した。トゥーラーンの名の由来はドゥラニである。

■AD1930年 ジャン＝リュック・ゴダール生誕

■AD1935年 アラン・ドロン生誕

■AD1964年 マット・ディロン生誕

■AD1964年 「西パプア国独立闘争組織誕生」

穢多やニクスの子、エリスの子がニューギニア島に帰還し、西パプア独立運動を指揮した。独立運動に関わった人々の名は日本語の名残りが見受けられる。カイセポ（飼いせば）、ジョウエ（女王）、ウォムシウォル（青虫おる）、ジョク（邪気）、マンガチャン（まんだしゃん）、メイドガ（毎度か）、ワンマ（あんま）、ミリノ（いみりの）、ワルサ（悪さ）、インディ（い

んで)、アジャミセバ(味見せば)、ペケイ(破壊)、プライ(無頼)、ワダンボ(わだんば)、テゲイ(てーげー)、ワインガイ(わいんかい)などである。以上、標準語もあるが、下北半島、名古屋、関西地方、静岡、徳島、岩手、甲州、沖縄、宮崎、北海道などの方言に因んだ名前が多く見受けられる。

また、パプアの独立運動家には、アンダマン諸島のジャラワ族(黒人ダン族)やミャンマー、アフリカを経て帰ってきたトンガ人(タンナ人)なども混在している。アンダマン諸島の名に因んだ「ヒンドム」はスウェーデンに拠点を設け、ミャンマー、アフリカを経たタンナ人は「タンガフマ」を称して、セネガルに拠点を設けている。アンダマン=ハンダマ=ヒンドムとなり、トンガ(リンポポ流域)+バマー(ビルマ)=トンガバマ=タンガフマとなる。

AD1973年、ヤコブ・プライは「西パプア共和国暫定政府」を宣言し、AD1988年にはトーマス・ワインガイが「西メラネシア国」の独立を宣言している。穢多の子孫は非常に活発に活動しているが、インドネシア共和国に君臨している華僑が彼らの独立を許さない。一部の華僑にはダニ族の血が流れている。つまり、ニューギニア島は「ダニ族の血を引く華僑のものだ」という考えがあるのだ。ダニ族の血を引く華僑も、もともとは大谷に誘われてアステカ帝国に渡った人々の子孫である。つまり、華僑VS西パプアの構図は、故地に帰還した、祖を同じくする人々による、故地を巡る抗争と捉えることができる。因みに、トーマス・ワインガイは日本人女性の妻を娶っている。これは彼の先祖が日本にいた証拠だ。

◆平氏(ガンダーラ)の歴史

■BC327年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■BC327年 「関氏(グアン)誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したガンダーラ人は、中国に上陸した。彼らは、中国人と混合して「関氏(グアン)」を称した。関(グアン)の名の由来はガンダーラである。ガンダーラ=グアンダーラ=関(グアン)となる。関氏からは、三国時代に活躍した「関羽」が輩出されている。

■AD3世紀 関羽生誕

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「ディアラ（前身）誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した関氏は、イングランドに入植し、ガンダーラを由来に「ディアラ王国」を築いた。ガンダーラ＝ガンディアラ＝ディアラとなる。

■ A D 5 5 9 年 「ディアラ王国誕生」

A D 5 5 9 年、アエラという人物が初代ディアラ王に即位している。A D 6 5 1 年、バーニシア王国がディアラ王位を篡奪すると、ディアラ王家は日本に移住することを決める。このイギリス人の顔をしたディアラ家が、日本人と混合して「源氏」「平氏」を生むことになる。

■ A D 6 5 1 年 「ヨハネスの大航海時代」

■ A D 6 5 1 年 「平氏（前身）誕生」

A D 6 5 1 年、バーニシア王国がディアラ王位を篡奪すると、ディアラ王家は「ヨハネスの大航海時代」に参加した。イギリス人の顔をしたディアラ王家は、多治比氏・安倍氏、藤原氏に接近して自身の血統を打ち立てた上で、天皇家に接近した。ディアラ王家は、日本に初上陸した時の同盟者であるカンボージャ人の後裔「桓武天皇」に娘たちを接近させた。源氏と平氏の名の由来はガンダーラを2つに分割したものであるが、特に、平氏（タイラ）のネーミングはディアラに因んでいる。

■ A D 7 1 2 年 「金刀比羅神社誕生」

「オースターの大航海時代」「勿吉の大航海時代」に参加したイギリス人ストーン（石氏）は、「ヨハネスの大航海時代」に参加したイギリス人スミス（司馬氏）と組んで「石清水神社」を建立し、「オースターの大航海時代」に参加したイギリス人キャッシュ（銭氏）は、ディアラ王家と組んで「金刀比羅神社」を建立した。石清水の名の由来はロック（石）とスミス（清水）の組み合わせであり。金刀比羅の名の由来は刀銭とディアラ（平）の組み合わせである。

■AD年 高棟王生誕

AD804年、ディアラ王家は直々に葛原親王に接近して桓武平氏の祖「高棟王」を生んだ。

■AD年 善棟王生誕

AD804年、ディアラ王家は直々に葛原親王に接近してオイラートの祖「善棟王」を生んだ。

■AD829年 「オイラート誕生」

死去に見せかけた善棟王が中臣氏を伴って満州を訪れ、女真族と接触を図る。だが、善棟王はそのままモンゴルに向かい、現地人と混合して「オイラート」を称する。オイラートの名の由来は「平の人（タイラート）」である。タイラート=アイラート=オイラートとなる。

■AD829年 「ラージプート誕生」

その後、遼朝が発足すると、オイラートは遼朝の人（リョウチョウビト）を意味する「ラージプート」を称した。その後、インドに侵入したラージプートからはタイラ2世が輩出された。タイラの名の由来は平（たいら）である。ラーシュトラクータ朝を滅ぼしたタイラ2世は、デカン高原に「後期チャールキヤ朝」を開いた。

■AD9??年 タイラ2世、チャールキヤ王に即位 「後チャールキヤ朝誕生」

AD10世紀には、ラージプート出身のタイラ2世が王位を篡奪し、「後チャールキヤ朝」が開かれた。

■AD1068年 「千葉氏誕生」「秩父氏誕生」

一部チェチェン人がコーカサスを離れて日本に向かった。彼らは、途中のインド洋辺りで善棟王の子孫ラージプートと合流すると、連合体を組んで房総半島に上陸し、チェチェン人は「上総氏（かずさ）」を称した。上総の名の由来はコーカサスであり、コーカサス=コーカズス=かず

さ（上総）となる。そして、ラージプートは「破壊神シヴァ」を由来に「千葉氏」を称した。更に、上総氏は千葉氏と連合して「秩父氏」を結成した。秩父の名の漢字表記の由来は「父なるゼウス（秩）」であり、読みの由来は「チェチェンと千葉」の組み合わせである。チェチェン＋千葉＝チェ千葉＝ちちぶ（秩父）となる。彼ら、千葉氏、上総氏、秩父氏は先発隊である中村氏、土屋氏、土肥氏と連合して「坂東八平氏」の中核を担い、鎌倉幕府の成立に邁進することとなる。

また、一部チェチェン人はシルクロードを介して満州に移住している。長孫氏の子孫であるチェチェン人は、兄弟である朱氏の女真族に合流することを考えていた。だが、その頃には既に正統な女真族は日本に移って「中村党」を組織して活動していた。更に、女真族自体は日本から来た中臣氏に篡奪されていた。その後、チェチェン人は「ジェチェン」を称し、中臣氏が築いた「建州女直」に参加した。その後、明治時代に建州女直が大挙して日本に移住すると、ジェチェンも日本の地を踏み、主に「塩」を由来にした姓を名乗った。

■AD11世紀 「坂東八平氏誕生」

上記のように、満州人の顔をした「中村氏」「土屋氏」が満州から、インド人の顔をしたラージプートの系統「千葉氏」「土肥氏」はインドから、そして中央アジア人の顔をした「上総氏」はコーカサスから来た。また、「秩父氏」は千葉氏と上総氏の連合体、つまり、中央アジア人とインド人の混血連合体である。

ここに、インドネシアから来たシャイレンドラ王家の「三浦氏」、中央アジアから来たハザール王家の「梶原氏」、インドから来たカーマルーパとアンコールの連合体「鎌倉氏」、インドを経てジャワから来た安曇氏（アーズミー）の後裔「江戸氏」、イスパニアから来たスペイン人の顔をした「伊勢氏」、アラビアから来たハドラミーの系統「和田氏」が加わっている。このように「坂東八平氏」は国際色豊かな軍事集団だったことが分かる。

■AD1206年 「松平家誕生」

デリー・スルタン朝がパンジャブを覆い尽くすと、ラージプートは日本への帰還を実施した。インド人の顔をしたラージプートは日本人と混合して「松平家」を形成した。松平の名の由来は「マツヤの平」である。マツヤ＋平＝マツ平＝松平となる。AD1360年、松平信重が家督を継いで、初めて「松平家」を称した。AD1529年、松平清康が三河を統一している。

■AD1584年 「チュヴァン誕生」

千葉氏はラージプート時代にパンジャブで生活していたため、一行は日本を発つとパンジャブに侵入した。その後、大坂の陣に敗北した豊臣秀頼の一行がパンジャブを訪れる。龍造寺氏は、豊臣秀頼の一行を迎えてパンジャブからカスピ海に至る。日本人の顔をした千葉氏は、ここで中央アジア人と交わり、「チュヴァシ」を称した。チュヴァシの名の由来は千葉氏（ちばし）である。チュヴァシ族は、豊臣秀頼の一行と共にサンクトペテルブルグに移り、「メドベージェフ」の名を築いた。メドベージェフの名の由来は「千葉又兵衛」である。

■AD1939年 ちばてつや生誕

■AD1943年 ちばあきお生誕

■AD1965年 ドミートリー・メドベージェフ生誕

AD2008年、ロシア連邦第3代大統領に就任している。

■AD1999年 エフゲニア・メドベージェワ生誕

ニャメの歴史

◆ヤペテ（ニャメ）の歴史

■40万年前 「ニャメ誕生」

ガボン沖で水生生活を送っていた水生人が上陸した。彼らは「ニャメ」を称した。ニャメはガボンで今尚、崇拝されている。彼らは、アミ族の姿をしていた。台湾少数民族の祖のひとつとなる。

■40万年前 「エバシの大航海時代」

■40万年前 「アミ族誕生」

「エバシの大航海時代」に参加したニャメは、台湾に移住して「アミ族」を生んだ。アミの名の由来はニャメである。ニャメ＝ニャミ＝アミとなる。高天原（台湾）の人々が呼んだ「黄泉の国」とは、ニャメの故地であるガボン（西アフリカ）を指す。「黄泉の国」とは、「ニャメの国」のことである。古代人は、生きている間にたどり着けないような、とんでもない遠方の地を冥界などと言い表していた。

■40万年前 「アマゾン誕生」

アミ族は、ミャンマーに住んでいたジェンギと連合し、現福建に「アマゾン」を築いた。アマゾンの名の由来はニャメとジェンギの組み合わせである。ニャメ＋ジェンギ＝ヤメジェン＝アマゾンとなる。アマゾンは胸がない女性だとされているが、これはゲイ男性を意味している。彼らの子孫といえる福建海賊も、ゲイは多かったようだ。因みに、福建で祀られている「馬姐（マソ）」の名の由来はアマゾンである。超古代、南シナ海はアマゾンと呼ばれていたのだ。

■7万年前 「第1次イマナの大航海時代」

■ 7 万年前 「月読神誕生」

「第1次イマナの大航海時代」に参加したジヨクタは、台湾に入植し、アミ族と混合して「ツクヨミ」を生んだ。ツクヨミの名の由来はジヨクタとニヤメの組み合わせである。ジヨクタ+ニヤメ=ジヨクヤメ=ツクヨミとなる。

■ 7 万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7 万年前 「天照大神誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」によって、オケアーニスたちが台湾に上陸すると、アミ族は彼らを仲間に迎えた。ニヤメは、ドーリスと連合して「天照大神」を祀った。アマテラスの名の由来はニヤメとドーリスの組み合わせである。ニヤメ+ドーリス=ヤメドリス=アマテラスとなる。

■ 4 万年前 「ギガントマキア」

■ 4 万年前 「天香語山命誕生」

「ギガントマキア」に敗北したキューゲースは、台湾に移住した。彼らは、イマナ、ニヤメと混合して「アメノカグヤマ」を成した。アメノカグヤマの名の由来はイマナとキューゲースとニヤメの組み合わせである。イマナ+キューゲース+ニヤメ=イマナギュゲヤメ=アメノカグヤマとなる。

■ 4 万年前 「金山毘古神誕生」「金山毘売神誕生」「思金神誕生」

「ギガントマキア」に敗北したアルキュオネウスは、ニヤメと混合して「カナヤマ」「オモイカネ」を成した。カナヤマ、オモイカネの名の由来はアルキュオネウスとニヤメの組み合わせである。アルキュオネウス+ニヤメ=キュオネヤメ=カナヤマとなり、ニヤメ+アルキュオネウス=ヤメキュオネ=オモイカネとなる。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「ヤペテ誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加して南極にやってきたニャメは、ヴィディエと連合して「ヤペテ」を生んだ。ヤペテはノアのこととして知られているが、実際にはニャメとヴィディエの連合体である。ニャメ+ヴィディエ=ニャヴィデ=ヤペテとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「エノクの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ハイダ族誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したヤペテは、アメリカ北西部沿岸に入植した。ヤペテは現地人と混合して「ハイダ族」を生んだ。ヤペテ=ヤペイテ=ハイダとなる。以上、南北アメリカ大陸に残留を決めた人々は「文明放棄」の意志を頑なに守った。インディオたち（栄光の南極の種族の文明放棄組）は鉄、車輪の不使用を徹底させていたが、これは大陸規模の暗黙の了解であった。

■ 1万3千年前 「北狄誕生」

「エノクの大航海時代」に参加したヤペテは、黒龍江に到達した。ヤペテは、内陸部に進出して蒙古に移り、入植した。ヤペテ族は、現地人と混合して「北狄（ベイディ）」を生んだ。ベイディの名の由来はヤペテである。ヤペテ=ヤベイディ=ベイディ（北狄）となる。

■ 1万3千年前 「台湾人の大航海時代」

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ 1 万 5 千 5 百年前 「オマーン誕生」

「台湾人の大航海時代」に参加して黒龍江に移住し、その後に「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに移住したイマナとニヤメは、その後に、メソポタミアを離れ、アラビア半島に上陸した。彼らは、当地に「オマーン」と命名した。オマーンの名の由来はニヤメとイマナの組み合わせである。ニヤメ+イマナ=ニヤマーナ=ヤマーナ=オマーンとなる。

■ 1 万 5 千 5 百年前 「ウンマ誕生」

アヌは、ニヤメと組んでメソポタミアにシュメール都市国家「ウンマ」を築いた。ウンマの名の由来はアヌとニヤメの組み合わせである。アヌ+ニヤメ=アヌメ=アンメ=ウンマとなる。

■ B C 3 2 世紀 「ソドムとゴモラ」

■ B C 3 2 世紀 「太陽神アメン誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、アラビア半島の現オマーンを離れたイマナとニヤメは、エジプトに進出して「太陽神アメン」を生んだ。アメンの名の由来はニヤメとイマナの組み合わせである。ニヤメ+イマナ=ニヤマナ=ヤマナ=アメンとなる。アテナイ王国のサバ二人は、太陽神アメンに同行し、アナトリア半島に移住した。両者は、彼の地でタバル人と出会い、後に、神官都市「テーベ」を建設した。

■ B C 2 1 3 4 年 「エジプト第 1 1 王朝樹立」

太陽神アメンは、トバルカインと共に「エジプト第 1 1 王朝」を開き、人喰い人種スキタイ人の「エジプト第 1 0 王朝」と対立した。彼らは、この対決に勝利し、エジプトを再統一した。その時のファラオは、第 1 1 王朝のメンチュヘテプ 4 世であった。その後、太陽神アメンの王統を継ぐアメンエムハト 1 世が「エジプト第 1 2 王朝」を開いている。アメンの王統は、ヒクソスが登場する B C 1 6 6 3 年まで続いた。

■ B C 1 6 5 0 年 「エジプト第 1 7 王朝成立」

「ヒクソス」がエジプトに出現すると、エジプト第14王朝は滅亡してしまった。その後、イマナのアメン神官団は、エジプトを離れてクレタ島に落ち延び、避難した。だが、ニヤメのアメン神官団は、テーベを拠点に新規に「エジプト第17王朝」を開き、ヒクソス王朝に対抗した。

■BC945年 「アルメニア人誕生」

アラム人はサビニ人（サバエ人）と共にコーカサスに移住し、エジプトから亡命していたアメン神官団と連合体を築いた。それが「アルメニア人」である。アルメニアの名の由来はアラムとアメンの組み合わせである。アラム＋イマナ（アメン）＝アラマナ＝アラマニア＝アルメニアとなる。更に、アルメニア人の別称「ハヤ」の名の由来はサバエである。サバエ＝サハヤ＝ハヤとなる。だが、残念なことにアルメニア人はその後、タナトスに篡奪されてしまう。

■BC829年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC829年 「ヤマン誕生」「イエメン誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したアメン神官団は、アラビア半島に移住した。アメン神官団は「ヤマン」「イエメン」などの名を残した。ヤマン、イエメンの名の由来はいずれもアメンである。

■AD531年 「マクリア人の大移動時代」

■AD531年 「ノバティア王国誕生」

「マクリア人の大移動時代」に参加した北狄は、モンゴルからヌビアに移住し、「ノバティア王国」を築いた。ノバティアの名の由来はヌビアと北狄（ベイディ）の組み合わせである。ヌビア＋ベイディ＝ヌビアティ＝ノバティアとなる。

■AD641年 「ペチェネグ族誕生」

イスラム教がヌビアに伝えられると、マクリア、アルワ、ノバティアのキリスト教国はヌビアを脱出して一旦、中央アジアに集結した。ノバティア人は、マクリア人、アルワ人とは行動を異にし、焉耆（エンギ）の末裔袁氏と組んで「ペチェネグ族」を結成した。ペチェネグの名の由来は北狄（ベイディ）と袁氏（エンギ）の祖エノクの組み合わせである。ベイディ+エノク=ベイチェノク=ペチェネグとなる。ペチェネグ族は、強力な騎馬軍団としてハザール帝国、キエフ大公国、ビザンツ帝国などの名だたる強国と渡り合った。

■AD641年 「ヴェッティン家誕生」

一部のペチェネグ族は、中央アジアからヨーロッパに移住し、「ヴェッティン家」を形成した。ヴェッティンの名の由来は北狄（ベイディ）とエノクの組み合わせである。ベイディ+エノク=ベイディエノ=ヴェッティンとなる。ヴェッティン家は有力な諸侯としてザクセン、チューリングェンを支配した。

■AD1094年 「山名氏誕生」

AD1094年にジャード朝が滅ぶと、アル・ヤマンの人々はジャード王家に同行し、日本に移住した。彼らは「山名氏」を生んだ。山名の由来はヤマンである。ヤマン=ヤマノ=山名となる。アル・ヤマンの人々は、新田義重に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「山名氏」の祖、山名義範である。

■AD12世紀 「ボヤジュ誕生」

その後、AD12世紀頃にペチェネグ族は分解し、バルカン半島に逃れた。彼らは「ボヤジュ」の名を生んだ。ボヤジュの名の由来はペチェネグである。ペチェネグ=ペイチェネグ=ペイチェ=ボヤジュとなる。

■AD1250年 「シュワルツネッガー誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」を続行したスヴェルケル家は黒澤氏を同行させた。その後、黒海に入って中央アジアに上陸したスヴェルケル家は解散したペチェネグ族の残党と合体し、「シュワルツネッガー」を結成した。シュワルツネッガーの名の由来は、スヴェルケルとペチェネグの組み合わせである。スヴェルケル+ペチェネグ=スヴェルチェネグ=シュワルツネッガーと

なる。この系統からは俳優アーノルド・シュワルツネッガーが輩出されている。

■AD1250年 「スフォルツァ誕生」

「スヴェルケル家の大航海時代」を続行したスヴェルケル家は、黒澤と共にイタリアの地を踏み、現地人と混合して「スフォルツァ家」を形成した。スフォルツァの名の由来はシュワルツネッガーである。シュワルツネッガー＝シュワルツェ＝スフォルツァとなる。スフォルツァ家は、ヴィスコンティ家の配下から這い上がり、ミラノ公の地位を得た。

■AD1439年 「林氏誕生」

AD1439年、オスマントルコ帝国がセルビアに侵攻すると、ボヤジュを称する人々はセルビアを離れて日本に移住し、ボヤジュに漢字の「林」を当て字して「ハヤシ」を名乗っている。

■AD1535年 「沢辺氏誕生」「沢田氏誕生」「沢中氏誕生」

スフォルツァ家は、ミラノ公位喪失を機に、ミラノを離れて日本に移住した。イタリア人の顔をした彼らは、日本人と混合して「沢辺（スフォ+ペ）」「沢田（スフォ+チェ）」「沢中（スフォ+ネグ）」の名を育んだ。いずれの名もスフォルツァとペチェネグの組み合わせである。

■AD1535年 「川端氏誕生」「川中氏誕生」「川辺氏誕生」「川瀬氏誕生」「川田氏誕生」

托跋部と同盟していたペチェネグ族はスフォルツァ家から分離・独立を申し出、その代わりに、過去にウイグル・ヴァイキング時代に托跋部の同盟者であったカウィール家に接触した。両者は合体して5つの名を生んだ。いずれもカウィールとペチェネグの組み合わせである。「川端（カウィ+ペチェ）」「川中（カウィ+ネグ）」「川辺（カウィ+ペ）」「川瀬（カウィ+チェ）」「川田（カウィ+チェ）」となる。更に、川田からは「桑田」の名も派生している。この5つの姓を持つ人々は、日本人を人種母体に持ちながら、イタリア人、北欧人、マヤ人、中央アジア人など多様な民族の血を継承している。

■AD1615年 「ヤマナ族（ヤーガン族）誕生」

「大坂の陣」に参戦した山名堯政は、死去と見せかけ、代々の臣下であった八木氏と共に日本を脱出した。一行は、太平洋を越えてペルーに至るが、戦争に懲りた彼らは、争いの無い土地を目指して南米大陸を南下した。南アメリカ最南端に達した彼らは、フエゴ島に上陸した。先住民であるセルクナム族と混合した彼らは「ヤマナ族（ヤーガン族）」を形成した。ヤマナの名の由来は山名であり、ヤーガンの名の由来は八木である。ヤギ=ヤーギン=ヤーガンとなる。ヤマナ族は、ウルトラマンのような、前衛的で奇抜なボディペイントで知られた謎の民族であった。しかし、現在では彼らは絶滅してしまった。或いは、ヤマナ族は日本に帰還しているのかもしれない。

■AD1826年 「ザクセン=コーブルク=ゴータ家誕生」

ヴェッティン家が生んだ、ヨーロッパ貴族の名家である。彼らは、タナトスの「顔」として利用されている。議会政府はタナトスの「声」であり、王族はタナトスの「顔」を司っている。つまり、王族としての権限はそれほどない。レオポルド2世のように、反逆すればたちまち消されるのだ。

■AD1835年 レオポルド2世、ベルギー王に即位

ザクセン=コーブルク=ゴータ家に属している。「コンゴ自由国」を建てた。

■AD1853年 ペドロ5世、ポルトガル王に即位

ザクセン=コーブルク=ゴータ家に属している。

■AD1861年 フェルディナンド1世、ブルガリア王に即位

ザクセン=コーブルク=ゴータ家に属している。

■AD1910年 ジョージ5世、イングランド王に即位 「ウィンザー家誕生」

ザクセン=コーブルク=ゴータ家に属している。

■AD1910年 マザー・テレサ（アグネス・ゴンジャ・ボヤジュ）生誕

■AD1916年 小林正樹生誕

■AD1952年 エリザベス2世、イングランド女王に即位

■AD1938年 庭野日敬、長沼倭成と共に立教 「立正佼成会誕生」

彼らは、AD1930年の中国共産党の長征を機に、中国から日本に逃れてきた人々である。教祖、庭野日敬の名の由来は「丹羽」だと考えられるが、信仰指導を担当した長沼妙校の姓「長沼」の由来は、イザナギとイザナミの組み合わせである。イザナギ+イザナミ=ナギナミ=長沼となる。

また、長沼妙校の「妙校」の名の由来は白山修験の明峰「妙高山」である。つまり、立正佼成会の基盤は白山修験によって形成された。この、庭野日敬、長沼妙校の先祖を含む白山修験の修験者集団は、AD1868年の「北越戦争」を機に日本を脱出して一時的に清治世下の中国に渡っていた。

■AD1931年 高林陽一生誕

■AD1938年 大林宣彦生誕

モディモの歴史

◆メーティス（モディモ）の歴史

■200万年前 「ビクトリア湖の大移動時代」

■200万年前 「モディモ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したアブクは、現ジンバブエに移住して「ムワリ」を、現レソトに移住して「モリモ」を生んだ。その後、モリモはボツワナに「モディモ」を生んだ。モディモは川に住み、水生生活に特化していた。また、モリモは身長140cmだったが、モリモよりも大きな獲物をとることにより、身長は180cmにまでなった。彼らは、イラク人、イラン人、アラビア人の顔をしていた。

■30万年前 「メディナ誕生」

水生人として生きていたモディモは、南アフリカの海から紅海に入植した。この時に、彼らの生活圏は「メディナ」と呼ばれた。メディナの名の由来はモディモである。モディモ＝モディノ＝メディナとなる。

■30万年前 モディモ、黒海に移住

紅海から地中海に入り、黒海に入植したモディモは、水生人として暮らした。現在、現地人に「ルナンシャア」と呼ばれる半漁人が棲んでいるが、彼らはモディモの子孫の可能性がある。

■30万年前 「第2次キブウカの大移動時代」

■30万年前 「メーティス誕生」

「第2次キブウカの大移動時代」に参加したモディモは、黒海からオーストラリア大陸に上陸すると、クリュティオスと連合し「メーティス」を生んだ。メーティスの名の由来はモディモと

クリュテイオスの組み合わせである。モディモ+クリュテイオス=モディオス=メーティスとなる。その後、メーティスは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「アドメテー誕生」

オーストラリアに生まれたメーティスは、イデュイアと組んで「アドメテー」を生んだ。アドメテーの名の由来はイデュイアとメーティスの組み合わせである。イデュイア+メーティス=イデュメーティ=アドメテーとなる。その後、アドメテーは大洋の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 7万年前 「メドゥーサ誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したメーティスは、ケルケイースと共にオーストラリアから黒海に移った。彼らは黒海沿岸に都市を建設したが、タナトスに篡奪されてしまう。タナトスが支配するメーティスの都市は恐ろしい惨劇の舞台となり、「メドゥーサ」と呼ばれた。メドゥーサの名の由来はメーティスである。メーティス=メディース=メドゥーサとなる。その後、ケルケイースの都市ゴルゴンと共にタナトスに篡奪されたメドゥーサの都市は、不名誉なことに、魔物ゴルゴン、怪物メドゥーサとしてギリシア神話に記される。

■ 7万年前 「第1次アルゴスの大航海時代」

■ 7万年前 「大年神誕生」

「アルゴスの大航海時代」に参加したメーティスは、アドメテー（但馬国）とティアマト（大和国）が住む日本に上陸し、後に「出雲国」と呼ばれる土地に拠点を得た。彼らは、現地人と混合して「大年神」を祀った。大年（オオトシ）の名の由来はメーティスである。メーティス=エーティス=大年（オオトシ）となる。

■ 7万年前 「第2次アルゴスの大航海時代」

■ 7万年前 「マティス族誕生」

「アルゴスの大航海時代」に参加して黒海沿岸を訪れた英雄ペルセウスがタナトスを皆殺しにすると、解放されたメーティスとケルケイースは「アルゴスの大航海時代」に参加した。メーティスは台湾に上陸し、一部は遠くアマゾンにまで足を伸ばし、「マティス族」を生んでいる。マティスの名の由来はメーティスである。マーティス=メティス=マティスとなる。

■ 4万年前 「ヒッポダメシア誕生」「ティエステス誕生」

台湾からオーストラリアに移住したメーティスは、アトランティス王国の王族「ヒッポダメシア」と「ティエステス」を生んでいる。ティエステスの名の由来はクリュテイオスとメーティスの組み合わせであり、ヒッポダメシアの名の由来はヒッポ、ロディア、メーティスの組み合わせである。クリュテイオス+メーティス=テイオスティス=ティエステスとなり、ヒッポ+ロディア+メーティス=ヒッポディアメー=ヒッポダメシアとなる。ティエステスはヒッポダメシアの王子である。

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「テシュプ誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加したメーティスは、アプスーの拠点である黒海に入植した。メーティスは、アプスーと連合し、「テシュプ」を生んだ。テシュプの名の由来はメティスとアプスーの組み合わせである。メティス+アプスー=ティスアプー=テシュプとなる。

■ BC 32世紀 「第2次北極海ルート時代」

■ BC 32世紀 「マツヤ族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したテシュプは、エニセイ河に進出し、南下してインド北部に「マツヤ族」を生んだ。マツヤの名の由来はメーティスとイデュイアの組み合わせである。メーティス+イデュイア=メーティイア=メチ=マツヤとなる。その後、マツヤ族はアーリア人の集団

に参加した。

■BC1027年 「ダルマチア誕生」

「十王戦争」を機に、イランを脱出したマツヤ族とドルヒユ族は、アドリア海に落ち着いて「ダルマチア」を称した。ダルマチアの名の由来はドルヒユとマツヤの組み合わせである。ドルヒユ+マツヤ=ドルマツヤ=ダルマチアとなる。BC7世紀頃、ダルマチア人は、シルクロードを介してタリム盆地に及んだ。この時、一部ハッティ人が同行した。ダルマチア人の到来により、この地は初めて「タリム」と呼ばれた。タリムの名の由来はダルマチアである。ダルマチア=ダルマ=タリムとなる。

■BC7世紀 「タリム誕生」

BC7世紀頃、ダルマチア人は、シルクロードを介してタリム盆地に及んだ。この時、一部ハッティ人が同行した。ダルマチア人の到来により、この地は初めて「タリム」と呼ばれた。タリムの名の由来はダルマチアである。ダルマチア=ダルマ=タリムとなる。

■BC7世紀 「多摩誕生」

キンメリア人などの勢力が強まると、をダルマチア人はタリム盆地から日本に移住した。日本ではダルマチア人は一時的に解散し、テラは「登呂」を建設し、マツヤ族は「多摩」を築いた。多摩の名の由来はモディモである。モディモ=モティモ=多摩となる。

■BC6世紀 「マツヤ王国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に刺激を受けたダルマチア人は、日本を離れてインドに入植した。この時にマツヤ族は「マツヤ王国」を建てた。テラはマツヤ王国に参加していた。

■BC552年 「マゴスの大航海時代」

■BC552年 「マー（マーメイド）誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマツヤ族は、アイルランドで水生生活に戻った。この時に「マー」と呼ばれた。マーの名の由来はモディモである。モディモ＝モーディモ＝モー＝マーとなる。女性はマーメイド、男性はマーマンと呼ばれた。

■BC552年 「タラスカ誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマツヤ族、ドルヒユ族は、次にメキシコに上陸すると、「タラスカ」を築いた。タラスカの名の由来は登呂と望月の組み合わせである。トロ+モチヅキ=トロツキ=タラスカとなる。

■BC552年 「モズナ誕生」

メディア人は「モズナ川」に拠点を得た。モズナの名の由来はメディーナである。メディーナ＝メディナ＝モズナとなる。

■BC3世紀 「モチエ文化誕生」

「ガスコン人の大航海時代」に参加したマツヤ族は、タラスカを離れ、マヤを通過してペルーに居を定めた。マツヤ族は「モチエ川」に拠点を得た。モチエの名の由来は松屋である。マツヤ＝マチャ＝モチエとなる。マツヤ族は、モチエ川を舞台に「モチエ文化」を牽引することとなる。この時に、マーも一緒にカリブ海に移住している。

■AD8世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■AD8世紀 「望月氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したマツヤ族は、太平洋を横断して房総半島に上陸し、諏訪国に入植した。マツヤ族は諏訪国に「望月氏」を生んだ。望月の名の由来は「メーティスキ（メーティスの人）」である。メーティスキ＝メチスキ＝望月となる。

■AD8世紀 「ユナイタマ誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したマーは、現沖縄県宮古島市下地島に移住した。彼らは「ユナイタマ」と呼ばれた。ユナイタマの名の由来は「海（ユナイ）のモディモ」である。ユナイ+モディモ=ユナイディモ=ユナイタマとなる。

■AD8世紀 「アカマタ誕生」「クロマタ誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したマーは、八重島諸島に移住した。水生人として暮らした彼らは、現地人に「アカマタ」「クロマタ」と呼ばれた。マタの名の由来はモディモである。モディモ=モディ=モテ=マタとなる。人魚神社の祭儀は、部外者の立ち入り禁止、写真撮影ご法度と、秘密結社並みの秘密主義に貫かれている。AD1968年には、殺人事件も起きているほどだ。現地人は、先祖を守るために必死なのだろう。このような人としての美德、崇高な発想は、資本主義社会では理解されない。

■AD1430年 海人、オランダ人に捕獲される

AD1430年、オランダでひどい嵐により堤防が破壊された。翌日、乳絞りの娘が海に沈んだ牧場を通りかかると、水は引いていた。だが、泥の中に「海の女」が見えた。娘は、その女を街に連れていき、着物を着せて食物を与えた。人々は女に糸の紡ぎ方を教え、ハーレムに住ませた。女は数年生きていたが、言葉を習得できず、水に惹かれる本能を持ち続けたという。

■AD1531年 海人、ポーランド人に捕獲される 「海の司教誕生」

AD1531年、闘争に疲れて水生生活を送っていたプロイセン人のひとりが、ポーランドで捕獲された。彼は「海の司教」と呼ばれた。記録によれば、海の司教は国王の元に運ばれたが、海に帰りたいたいというジェスチャーをした。ポーランド人は彼を海辺に導くとただちに海中に身を投じて見えなくなったという。

■AD1671年 海人、マルティニック島に出現

男の海人が出現し、黒人奴隷が網で捕獲を試みている。

■AD1758年 海人、フランス人に捕獲される

フランスで捕獲された水生人の女性は、大きな水槽に飼われていて、食事、水中での生活、特に性器が非常に良く観察され、詳細に報告されている。しかし、女の下半身は鱗で覆われた魚の尻尾だったという。尻尾以外の観察は詳細であるにもかかわらず、尻尾の部分は付け足された感がある。後世に付け加えられた可能性がある。

■AD1768年 海人、西インド諸島で目撃される

スペイン人の水夫が女の海人を目撃している。

■AD1950年 ナレンドラ・モディ生誕

第18代インド首相に就任している。

■AD1964年 望月峯太郎生誕

望月峯太郎のデビュー作は、トップスイマーを夢見る少年が主人公の、少々シュールな「バタアシ金魚」だった。

■AD1964年 逆柱いみり（望月勝広）生誕

逆柱いみりの主人公は、大概、知らない土地を散歩をしているが、海中を漂っていることがある。「はたらくカッパ」などがある。

■AD1970年代～ 水死者の霊？

水生生活をやめ、地上に上陸した人々を「35の異なる人類」としてカウントしているわけだが、もし、その後も、そのまま水生生活を続けている種族がいるとすれば、知られざる人類が大海の片隅のどこかに暮らしていることになる、そのような、知られざる人類がいるのかもしれない。そうだとすれば、異なる人類はもっと増えることになるだろう。

もし今でもまだ水生生活をしている人々がいるとしたら、彼らは今、どんな姿をしているだろう？時折、「半魚人が出た」などとオカルト界限で騒がれることがある。だが、その半魚人らは、もしかしたら水生人の成れの果てなのかもしれない。

例えば、怪談話で、ひとりで夜釣りしていたら海面から無数の手が出た、海面に浮かぶ無数の顔がこっちを見た。泳いでいたら足を引っ張られた、それで誰かが死んだ、などの話も良く聞かれる。だが、それらは水生人の仕業かもしれない。イルカのように完全な魚の姿をしていない彼らは、アザラシやペンギンのように、寝るときは陸上で寝る習慣があるのだろう。しかし、人がいては寝られない。ということで霊のふりをして、釣り人を脅かし、追い払っているのだ。

また、足を引っ張って脅すくらいはいいが、人を殺すとなると、これは尋常ではない。だが、タナトスの化学企業が垂れ流す農薬やゴルフ場に撒かれる除草剤に汚染された水によって、彼らの生活圏が破壊されているとしたら...、それが原因で顔が崩れた水生人を目撃して霊だ！とか、半魚人だ！と騒いでいるのかもしれない。つまり、足を掴んで溺れさせるなどの殺人行為は、彼らにとっては復讐なのだ。点が線で結ばれる試みがされなかつただけである。いろいろな報告がある以上、「彼らを見ていないから彼らは存在しない」ということにはならない。

◆マダイ（アドメテ）の歴史

■30万年前 「アドメテ誕生」

ミマースとクリュティオスの合体部族メーティスは、イデュイアと組んで「アドメテ」を生んでいる。アドメテの名の由来はイデュイアとメーティスの組み合わせである。イデュイア+メーティス=イデュメーティ=アドメテとなる。その後、アドメテは大洋の娘たちに参加した。

■30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■30万年前 「ティアマト誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加した一部アドメテは、ヨーロッパには移らず、古代日本に入植した。この時に「ティアマト」が生まれた。ティアマトの名の由来はヴィディエとメーティスの組み合わせである。ヴィディエ+メーティス=ディエメーテ=ティアマトとなる。

■ 30万年前 「綿津見神誕生」

但馬国に入植したアドメテは、ヤマトに赴いてティアマトと連合し「綿津見神」を生んだ。ワタツミの名の由来はアドメテとティアマトの組み合わせである。アドメテ+ティアマト=アドティアマ=アドチャマ=ワタツミとなる。綿津見は「但馬国」の語源となる。ワタツミ=ワダチマ=但馬となる。綿津見神は但馬国に住み、海宮神（わたつみかみのみや）の国は但馬国にあった。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「天宇受売命誕生」

イデュイアが指揮するアドメテは「アルゴス号の大航海時代」に参加したが、メーティスが指揮するアドメテは、逆に台湾に上陸した。台湾先住者のアミ族（ニャメ）とバブサ族（エバシ）は彼らを仲間に迎えた。アドメテは、イマナと連合して「天宇受売」を生んだ。アメノウズメの名の由来はイマナとアドメテの組み合わせである。イマナ+アドメテ=イマナアゾメテ=アメノウズメとなる。

■ 4万年前 「アンドロメダ誕生」

高天原を離れたアドメテは東南アジア（エチオピア王国）に移住し、マイアンドロスと組んで「アンドロメダ」を生んだ。アンドロメダの名の由来はマイアンドロスとメーティス（アドメテの祖）の組み合わせである。マイアンドロス+メーティス=アンドロメーティ=アンドロメダとなる。アンドロメダはエチオピア王国の王女として知られている。

■ 4万年前 「メトセラ誕生」

エチオピア王国にアンドロメダを生んだアドメテは、更にエチオピア王国を築いたエウローペーと組んで「メトセラ」を生んだ。メトセラの名の由来はメーティス（アドメテの祖）とアシェラーフ（エウローペーの祖）の組み合わせである。メーティス+アシェラーフ=メーティセラ=メトセラとなる。

■ 4 万年前 「アトランティス人の大航海時代」

■ 4 万年前 「思慮の女神メティス誕生」

「アトランティス人の大航海時代」に参加したメトセラは、エジプトに上陸し、オリンポス神族に加わった。ギリシア侵攻時、メトセラは「女神メティス」を称した。メティスの名の由来はメーティスである。メティスはゼウスと結婚したが、神々の結婚は、優れた部族の連合・同盟を意味している。

■ 4 万年前 「クロマニヨン人の大航海時代」

■ 3 万年前 「ティアワナク誕生」

「クロマニヨン人の大航海時代」に参加したメトセラは、ペルーに拠点を得た。当地は「ティアワナク」と呼ばれた。ティアワナクの名の由来はメーティス、イデュイア、エノクの組み合わせである。メーティス＋イデュイア＋エノク＝メーテイヤエノク＝ティアワナクとなる。また、ティアワナクは「ティル・ナ・ノーグ」としてアイルランド神話に語り継がれている。ティアワナク＝ティア・ワ・ナーク＝ティル・ナ・ノーグとなる。

エノクとメトセラは、アンデスを越えてアマゾン流域に下ると、雨季になると広大な森林地帯が氾濫したアマゾン河の水底に沈むモホス平原を発見する。この神秘の平原に魅せられたエノクは、モホス平原に定住を試みることで文明の発想を得た。文明の基幹産業である農業や魚の養殖に開眼すると共に、用水路、運河、排水設備建設の必要性に気付いたのだ。それに伴って、土木・建築技術が向上し、計画的な都市建設が可能になった。

アマゾン上流域に位置するモホス文明は、ティアワナクと共に常世の国「ティル・ナ・ノーグ」と呼ばれた。ティル・ナ・ノーグは、高天原、エチオピア王国や、オーストラリアの国々（ピサ王国、テュロス王国、アトランティス王国）とも交易を行っていた。ティル・ナ・ノーグは、「ハイ・ブラジル」とも呼ばれている。ブラジルの名は、もっと後世になって生まれたものだ。

■ 1 万 3 千年前 「エノスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ニジェール誕生」

「エノスの大航海時代」に参加したメトセラは、南極大陸から大西洋を横断し、西アフリカに入植した。メトセラはエノスと組んで拠点を「ニジェール」と呼んだ。ニジェールの名の由来はエノスとメトセラの組み合わせである。エノス+メトセラ=ノスセラ=ノスエラ=ニジェールとなる。

■ BC 7千5百年 「ナザレ誕生」

その後、ニジェール人は更に北上し、現イスラエルに入植した。この時に「ナザレ」が生まれた。ナザレの名の由来はニジェールである。ニジェール=ニジエラ=ナザレとなる。その後、ナザレ人はメソポタミアに渡った。

■ BC 7千5百年 「マダイ誕生」

メソポタミアに入植したナザレ人は、ヤペテの子として知られる「マダイ」を生んだ。マダイの名の由来はアドメテーである。アドメテー=アドメテイ=マダイとなる。つまり、マダイはメーティスが主導していた。

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年 「ヌミディア誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したマダイは、北アフリカに入植し「ヌミディア」を生んだ。ヌミディアの名の由来はカナンとマダイの組み合わせである。カナン+マダイ=ナンマダイ=ヌミディアとなる。

■ BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■ BC 5千年 「異界の王ミディール誕生」 「ネメズ族誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したニヌミディア人は「ネメズ族」を結成し、一方でエロス（アムル人）と組んで「異界の王ミディール」を祀っている。ヌミディア＝ヌミジ＝ネメズとなり、マダイ＋エロス＝マダイエロ＝ミディールとなる。

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「テッサリア誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したマダイは、古代ギリシアに上陸して「テッサリア」の地を得た。メトセラ＝メトッセリア＝テッサリアとなる。

■BC 344年 「タジク人誕生」

マケドニア王フィリップがテッサリア同盟の盟主となると、テッサリア人は中央アジアに向かった。彼らは「タジク人」になった。タジクの名の由来は「テッサキ（テッサリアの人）」である。テッサキ＝テザキ＝タジクとなる。

■AD 114年 「ポントス人の大航海時代」

■AD 114年 「多治比氏誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加したタジク人は、日本に移住して「多治比氏」を生んだ。多治比氏の名の由来はタジクである。タジク＝タジフ＝多治比となる（ハ行はカ行を兼ねる法則）。

■AD 941年 「第1次ポリネシア人の大航海時代」

■AD 941年 「タヒチ誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加した多治経明は、太平洋に「タヒチ」を発見し、入植した

。タヒチの名の由来は多治比である。多治比＝タヒジ＝タヒチとなる。

■ A D 1 1 世紀 「第2次ポリネシア人の大航海時代」

■ A D 1 1 世紀 「勅使河原氏誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加したタヒチ人は、平安時代末期の日本に帰還した。彼らは、武蔵国に上陸した。タヒチ人は先祖である多治の名を由来に「勅使河原」を称した。多治（タジ）＋河原＝タジ河原＝勅使河原となる。

■ A D 1 1 世紀 「デラ・トーザ誕生」「トスカーナ誕生」

「ポリネシア人の大航海時代」に参加したタヒチ人は、神聖ローマ帝国治世下にあったイタリア半島に上陸した。ポリネシア人の顔をした彼らは、イタリア人と混合し、多治を由来に「デラ・トーザ家」を形成した。彼らは上陸した土地を「トスカーナ」と命名した。デラトーザの名の由来は平（タイラ）と多治の組み合わせである。タイラ＋タジ＝ダイラ＋タージ＝デラ・トーザとなる。また、トスカーナの名の由来はタジクである。タジク＝タジカーナ＝トスカーナとなる。

■ A D 1 5 6 9 年 「手塚氏誕生」

メディチ家のコジモ1世が、A D 1 5 6 9 年に「トスカーナ大公国」の大公に就任すると、オリジナルの「トスカーナ」を築いたデラ・トーザ家は不満を持ち、日本への帰還を試みた。戦国時代が続いていた日本に上陸したデラ・トーザ家は「手塚」を生んだ。手塚の名の由来はトスカーナである。

■ A D 1 8 5 6 年 ニコラ・テスラ生誕

テスラの名の由来はテッサリアである。テッサリア＝テサラ＝テスラとなる。

■ A D 1 9 2 7 年 勅使河原宏生誕

■ A D 1 9 2 8 年 手塚治虫生誕

■ A D 1 9 6 1 年 手塚眞生誕

◆メディア（アドメテー）の歴史

■ B C 3 2 世紀 「第2次北極海ルート時代」

■ B C 3 2 世紀 「メディア人誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したアドメテーは、オビ河流域に入植した。その後、南下したアドメテーは、現地人と混合して「メディア人」を生んだ。メディアの名の由来はメーティスとヴィディエの組み合わせである。メーティス+ヴィディエ=メーディエ=メディアとなる。

■ B C 3 0 世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ B C 3 0 世紀 「ミディアン誕生」

メディア人は、司神タナトスと連合し「ミディアン」と呼ばれた。ミディアンの名の由来はメディアとディオナーの組み合わせである。メディア+ディオナー=メディオネ=ミディアンとなる。士師の時代、ミディアン人はギデオンに歯向かったが、皆殺しにされた。

■ B C 1 7 0 0 年 「ミタンニ王国誕生」

ミディアン人（司神タナトス）は、「アルマゲドン」によってモンゴルを追われ、中央アジアにやってきた預言者ナタンの残党と遭遇する。すると、司神タナトスは彼らが家族であることを

知り、すぐに連合し、「ミタンニ人」に加えた。ミタンニの名の由来はメディアとディオナーの組み合わせである。メディア+ディオナー=メディアナー=メテオンネ=ミタンニとなる。

■BC700年 デイオケス、初代メディア王に即位 「メディア王国誕生」

初代王デイオケスの名の由来はヴィディエである。キュアクサレス王の時、メディア王国は新バビロニア帝国と組んで古代オリエントに君臨したアッシリア帝国を撃破した。BC612年のことである。

■BC552年 「サルマタイ人誕生」

メディア王国が滅ぶと、メディア人は中央アジアに向かった。彼らは「サルマタイ人」になった。サルマタイの名の由来はメトセラ（メーティス+アシェラーフ）である。アシェラーフ+マダイ（メーティス）=シェラマダイ=サルマタイとなる。サルマタイ人の詳細は不明だが、彼らはフン族が登場した頃に新天地を求めて北東に移住している。

■BC552年 「マゴスの大航海時代」

■BC552年 「ミード誕生」

「マゴスの大航海時代」に参加したマツヤ族は、現地人と混合して「ミード」を築いた。ミードの名の由来はメーティスである。メーティス=メーディ=ミードとなる。

■BC3世紀 「ヴィシュヌの大航海時代」

■BC3世紀 「モチエ文化誕生」

「ガスコン人の大航海時代」に参加したマツヤ族は、タラスカを離れ、マヤを通過してペルーに居を定めた。マツヤ族は「モチエ川」に拠点を得た。モチエの名の由来は松屋である。マツヤ=マチャ=モチエとなる。マツヤ族は、モチエ川を舞台に「モチエ文化」を牽引することとなる。

この時に、マーも一緒にカリブ海に移住している。

■ A D 8 世紀 「鹿島神社の大航海時代」

■ A D 8 世紀 「望月氏誕生」

「鹿島神社の大航海時代」に参加したマツヤ族は、太平洋を横断して房総半島に上陸し、諏訪国に入植した。マツヤ族は諏訪国に「望月氏」を生んだ。望月の名の由来は「メーティスキ（メーティスの人）」である。メーティスキ＝メチスキ＝望月となる。

■ A D 1 3 6 0 年 「メディチ家誕生」

A D 1 3 3 5 年の「中先代の乱」を機に、望月氏が諏訪国を出てペルーのモチェ流域に帰還した。その後、望月氏は更に大西洋を超えて地中海に入り、ルネサンス前期のイタリア半島に侵入した。望月氏は、A D 1 3 6 0 年にメディチ家の祖であるジョヴァンニ・ディ・ビッチを誕生させた。メディチの名の由来は「メーティスキ（メーティスの人）」である。メーティスキ＝メーディジ＝メディチとなる。

メディチ家には「コジモ」「コジマ」などのファーストネームが多く見受けられるが、これは「鹿島」の名に因んでいる。つまり、メディチ家＝望月氏である。望月氏は、「鹿島神社」を創建した同盟者コサ族（アクスム人）の名に因んで「コジモ」の名を継承し続けた。A D 1 5 6 9 年、コジモ1世が「トスカーナ大公国」の初代大公に就任している。

■ A D 1 5 6 9 年 コジモ1世、トスカーナ初代大公に就任 「トスカーナ大公国誕生」

A D 1 5 6 9 年、コジモ1世が「トスカーナ大公国」の初代大公に就任している。コジモの名の由来は鹿島（アクスム）である。かしま＝カジマ＝コジモとなる。

■ A D 1 8 3 1 年 「青年イタリア誕生」

マツヤ族の後裔であるジュゼッペ・マツツイーニがカルボナリに限界を感じたため、新規に秘密結社を結成した。彼らはメディチ家の子孫であるため、イタリアにこだわった。マツツイーニの名の由来はマツヤである。マツヤ＝マツヤーニ＝マツツイーニとなる。

■AD1902年 トイエン（マリー・チェルミノヴァ）生誕

■AD1964年 鶴見済生誕

◆大和（ティアマト）の歴史

■30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■30万年前 「ティアマト誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加した一部アドメテは、ヨーロッパには移らず、古代日本に入植した。この時に「ティアマト」が生まれた。ティアマトの名の由来はヴィディエとメーティスの組み合わせである。ヴィディエ+メーティス=ディエメーテ=ティアマトとなる。

■30万年前 「大和国誕生」

ティアマトは日本上陸後、畿内に「大和国」を築いた。ヤマトの名の由来はティアマトである。ティアマト=アマト=ヤマトとなる。「大和」の漢字表記は、魏・呉・蜀の三国時代まで待たねばならない。

■30万年前 「大綿津見神誕生」

オケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「大綿津見神」が誕生した。「大綿津見神（オオワタツミ）」の名の由来はアドメテとティアマトの組み合わせである。アドメテ+ティアマト=アドティアマ=アドチャマ=ワタツミとなる。

■ 30万年前 「大山津見神誕生」

オケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「大山津見神」が誕生した。「大山津見神誕（オオヤマツミ）」の名の由来はクリュメネーとティアマトの組み合わせである。クリュメネー+ティアマト=ユメティアマ=ユメチャマ=ヤマツミとなる。

■ 30万年前 「宇迦之御魂神誕生」

オケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「宇迦之御魂神」が誕生した。「宇迦之御魂神（ウカノミタマ）」の名の由来はオケアーニスとエウリュノメーとティアマトの組み合わせである。オケアーニス+エウリュノメー+ティアマト=オケノメーティアマ=ウカノミタマとなる。

■ 30万年前 「豊玉毘売命誕生」

オケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「豊玉毘売命」が誕生した。「豊玉毘売命（トヨタマ）」の名の由来はテテウスとティアマトの組み合わせである。テテウス+ティアマト=テエテティアマ=テイティアマ=トヨタマとなる。

■ 30万年前 「玉依毘売命誕生」

オケアーニスが東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「玉依毘売命」が誕生した。「玉依毘売命（タマヨリ）」の名の由来はティアマトとエウリュノメーの組み合わせである。ティアマト+エウリュノメー=ティアマエウリュ=タマヨリとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「日子穗穗手見命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が東南アジアに到達すると、ティアマトは日本から台湾に移住した。この時に、彼らは「日子穂穂手見命」を生んだ。穂穂手見（ホホデミ）の名の由来はオケアーニスに属するヒッポーとティアマトの組み合わせである。ヒッポー+ティアマト=ヒッホティアマ=ヒホタマ=ホホデミとなる。

■ 7万年前 「天布刀玉命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が東南アジアに到達すると、ティアマトは日本から台湾に移住した。ティアマトは台湾に「天布刀玉」を生んだ。天布刀玉（アメノフトタマ）の名の由来はイマナ、ヴィディエ、ティアマトの組み合わせである。イマナ+ヴィディエ+ティアマト=アマナヴィデティアマ=アメノフトタマとなる。

■ 7万年前 「テテュス誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が東南アジアに到達すると、ティアマトは日本から台湾に移住した。ティアマトは、クリュテイオスと組んで「テテュス」を生んだ。テテュスの名の由来はティアマトとクリュテイオスの組み合わせである。モディモ+クリュテイオス=ディテイオス=テテュスとなる。

■ 1万3千年前 「縄文人の大航海時代」

■ 1万3千年前 「大日本彦（イ徳天皇）誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したティアマトは、オーキュロエーと組んで「大日本彦」を生んだ。大日本彦の名の由来はオーキュロエーとティアマトの組み合わせである。オーキュロエー+ティアマト=オーアマト=大日本（おおやまと）となる。大日本彦は、「イ徳天皇」として天皇に即位している。

■ 1万3千年前 「大日本根子彦（孝霊天皇、孝元天皇）誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したティアマトは、オーキュロエー、グレニコスと組んで「大日

本根子彦」を生んだ。大日本根子彦の名の由来はオーキュロエー、ティアマト、グレニコスの組み合わせである。オーキュロエー+ティアマト+グレニコス=オーアマトニコ=大日本根子（おやまとねこ）となる。大日本根子彦は、「孝霊天皇」「孝元天皇」として天皇に即位している。

■ 1万3千年前 「稚日本根子彦（開化天皇）誕生」

「縄文人の大航海時代」に参加したティアマトは、オーキュロエー、グレニコスと組んで「稚日本根子」を生んだ。稚日本根子の名の由来はオーキュロエー、ティアマト、グレニコスの組み合わせである。オーキュロエー+ティアマト+グレニコス=オーキュアマトニコ=稚日本根子（わかやまとねこ）となる。稚日本根子彦は、「開化天皇」として天皇に即位している。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■ B C 7千2百年前 「神々の集団アヌナキ誕生」

■ B C 7千2百年前 「原初の水ティアマト誕生」

「垂仁天皇の大移動時代」に参加して、モンゴルからメソポタミアに移ると、「アプスー」となる蝦夷（えびす）と共に黒海に入植し、「ティアマト」を復活させた。アプスーとティアマトはメソポタミア神話で原初の水として知られている。

■ B C 7世紀 「フェニキア人の大移動時代」

■ B C 7世紀 「大和国誕生」

「フェニキア人の大移動時代」に参加したティアマトは、メソポタミアを離れて日本に帰還し、「大和国」を再建した。

■ B C 473年 「大和朝廷誕生」

呉がBC 473年に滅ぶと、呉（多氏）は日本に帰還した。彼らは大和国に移住してティアマトと組み、「大和朝廷（前身）」を作った。その後、BC 222年に滅んだ魏（倭人）が、大和国を訪れて初めて「大和朝廷」が誕生する。大和の漢字表記の由来は、大（多）と和（魏）の組み合わせである。大和国は、古来から「ヤマト」と呼ばれていたが、「大和」の漢字表記はこの時が最初である。

■ BC 330年 「ペルシア人の大移動時代」

■ BC 330年 「山田氏誕生」

ペルシア帝国が滅ぶと、ティアマトの種族はアケメネス家と共に日本にやってきた。イラン人の顔をした彼らは、現地人と混合して「山田氏」を成した。山田の名の由来はティアマトである。ティアマト=ティヤマダ=山田となる。「山田」の名は、しばしば茶化されることがあるが、結構古い、由緒ある名前である。

■ BC 327年 「コラズム族の大移動時代」

■ BC 327年 「タイム家誕生」

アレキサンダー大王の侵攻から逃れてアラビア半島に上陸したティアマトの種族は、現地人と混合して「タイム家」を築いた。タイムの名の由来はティアマトである。ティアマト=ティアマ=タイムとなる。クライシュ族に属したタイム家からは、初代カリフに即位したアブー・バクルが輩出されている。

■ AD 3世紀 「大和人の大航海時代」

■ AD 3世紀 「デヴォン誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した大和人は、ブリテン島に上陸し、「デヴォン」を築いた。デヴォンの名の由来は「大和」の音読み「だいわ」である。だいわ=ダイワン=デヴォンとなる

。大和人は、みな、現地人のファーストネームで呼び合い、「さん」付けをした。例として、リチャードを称した大和人は仲間に「リチャードサン」と呼ばれた。これが後に「リチャードソン」となる。ジョンソン、ロビンソンなどの名も、みなそうして生まれた。ただ、「大和人」とひとこと言っても、実にいろんな種族が参加していた。だが、ブリテン島での「さん」付けで名前のトラッキングは途絶えてしまった。ただ、「ソン」が付く人々からは優れた人が多く生まれている。イギリス、アイスランド、スウェーデンでは「SON」であり、デンマーク、ノルウェーでは「SEN」と変遷が加えられている。

■AD717年 サンジャヤ、初代王に即位 「マタラム王国誕生」

「大和人の大航海時代」の西方組に参加した大和人は、ジャワに上陸した。大和人は、葛城氏と共に「マタラム王国」を築いた。マタラムの名の由来はヤマト（ティアマト）とローマ（葛城）の組み合わせである。ティアマト+ローマ=マトロマ=マタラムとなる。なぜ、ローマの名が出てくるかといえば、葛城氏が、かの「ユリウス家」の出だからだ。AD68年、日本を訪れたユリウス家は、カエサルの名を由来に「カエサルの城」を意味する「葛城」の名を称した。カエサル+城=カサル+城=葛城となる。

■AD1490年 アーマド・ニザーム・シャー1世、初代王に即位 「アーマドナガル王国誕生」

ジャワを拠点に活動していた大和は、「ヴィジャヤナガル」のアンコール人と共にインドに移住した。AD1490年頃、「バフマニー朝」が崩壊した隙を見計らい、両者は自身の王国を開いた。アーマドナガルの名の由来はティアマトとアンコールの組み合わせである。ヤマト+アンコール=ヤマトナコル=アーマドナガルとなる。

■AD1636年 「山田氏誕生」

AD1636年、ムガル帝国の侵攻を機に、「アーマドナガル」が滅亡すると、大和人とアンコール人の連合体は、インドを離れて江戸幕府治世下の日本に移住した。大和人は「山田氏」を生み、アンコール人は「名倉」を生んだ。山田の名の由来はティアマト、名倉の名の由来はナガルである。

■AD1636年 ディマデ、ゲルゲル王に即位

AD1636年、ムガル帝国の侵攻を機に、「アーマドナガル」が滅亡すると、大和人ディマデの名の由来はティアマトである。ティアマト=ティアマデ=ディマデとなる。

■AD1651年 「オラン・イカン（他称）誕生」

ディマデ王の時代、クーデターが起きたため、ディマデ王の子息デワ・アグン・ジャンベは「ク
ルンクン王国」を建てたが、ディマデ王は死んだことにして、水生生活に戻ったと考えられる。
インドネシアでは、「オラン・イカン」と呼ばれる水生人が目撃されている。

■AD1913年 ヴェラ・クルーゾー（ヴェラ=ギブソン・アマド）誕生

■AD1931年 山田洋次誕生

■AD1936年 ジョー・ダマト誕生

■AD1963年 NOKKO（山田信子）誕生 「レベッカ誕生」

■AD1964年 MASAKI（山田雅樹）誕生 「フラットバッカー誕生」「EZO誕生」

◆伊達氏（テテュス）の歴史

■7万年前 「テテュス誕生」

モディモは、クリュテイオスと組んで「テテュス」を生んだ。テテュスの名の由来はモディモと
クリュテイオスの組み合わせである。モディモ+クリュテイオス=ディテイオス=テテュスと

なる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大移動時代」

■ 7万年前 「ティタン神族誕生」

「ウラヌスの大移動時代」に参加したウラヌスは、テテュスと連合して「ティタン神族」を生んでいる。ティタン（ティタヌス）の名の由来はテテュスとウラヌスの組み合わせである。テテュス+ウラヌス=テテヌス=ティタヌス=ティタンとなる。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「豊玉毘売命誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」の参加者が、東南アジアから日本に大移動を実施すると、ティアマトは彼らを受け入れ、いくつかの連合体を築いた。この時に「豊玉毘売命」が誕生した。「豊玉毘売命（トヨタマ）」の名の由来はテテュスとティアマトの組み合わせである。テテュス+ティアマト=テエテティアマ=テイティアマ=トヨタマとなる。

■ 4万年前 「ティタノマキア」

■ 4万年前 「ディジリデュー誕生」

「ティタノマキア」に敗北したティタン神族だったが、ゼウスのおかげでクロノスの支配から解放されたティタン神族は、ピサ（オーストラリア北西部）やアトランティス（オーストラリア南部）で製鉄を始めた。その痕跡は、アトランティス滅亡、大地殻変動時代に洗い流されたが、製鉄技術はデウカリオンが亡命しげたメソポタミアに伝えられ、ヒッタイト帝国時代になって復活している。オーストラリア時代に使用されていたふいごは、後に、楽器に転化し、アボリジニの伝統楽器ディジリデューに姿を変えている。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「デウカリオンの大航海時代」

■ 1万3千年前 「叡智の神トート誕生」

「デウカリオンの大航海時代」に参加してメソポタミアに到達したデウカリオンは、その後、エジプトに上陸した。この時に「叡智の神トト」が生まれた。トートの名の由来はティタンである。ティタン=ティータ=トートとなる。彼らは製鉄の種族タタでもある。

■ BC 5千年 「ヒッタイト人誕生」

「第1次北極海ルート時代」に参加したハッティ人は、シベリアから南下し、製鉄の種族として古代オリエント地域で活動していたタタと出会い、連合体を築いた。それが「ヒッタイト人」である。ヒッタイトの名の由来はハッティとティタンの組み合わせである。ハッティ+ティタン=ハッテイタ=ヒッタイトとなる。古代タルタロス（オーストラリア）で製鉄を営んでいたティタン神族は、アナトリアで製鉄技術を発展させたため、「ヒッタイト帝国」は鉄器を振るい、最強の古代軍事国家として繁栄した。

■ BC 1900年 「ヒッタイト帝国誕生」

製鉄の種族タタを味方に付け、鉄器という武器を得たハッティ人の帝国は、エジプト王国に匹敵する大帝国としてオリエント地域に覇を唱えた。

■ BC 1200年 「ベーシュタード王国誕生」

ヒッタイト帝国が滅ぶと、彼らはトゥルシア人の援助により、イランに亡命を果たした。ヒッタイト人を解散したタタは、パルシュ族と連合して「ベーシュタード王国」を建設した。ベーシュタードの名の由来はパルシュとティタン（タタ）の組み合わせである。パルシュ+ティタン=パーシュ+テイタ=ベーシュタードとなる。

当時、イランには「至高神ズルヴァーン」が治める国があり、イランの東のインダス流域には善神デーヴァの国「第2代テーバイ王国」が栄えており、またその隣のインドには「雷神神イン

ドラ」を祀る「アーンドラ人」が君臨し、またその隣のガンジス流域には、クウォスのトバルカイン「クル族（プール族）」が指揮する「アーリア人」の一団が暮らしていた。

■BC1027年 「ベッシュタードの大航海時代」

■BC1027年 ティタン神族、イランに残留

「マハーバーラタ戦争」が起き、パンジャブ、インダス流域が核兵器によって荒廃すると、多くの人々は「ベッシュタードの大航海時代」に参加して故地を後にした。だが、ティタン神族（タタ）、カンボージャ人、ブリグ族、パルシュ族、クル族、アリナ族、バラーナ族がイランに残留している。彼らが「ペルシア帝国」の礎を築くことになる。

■BC525年 「ペルシア帝国誕生」

■BC330年 「ペルシア人の大移動時代」

■BC330年 「タタール人誕生」

ペルシア帝国滅亡を機に、イランからモンゴルに移住したアーリア人とタタは、現地人と混合して「タタール人」を成した。タタールの名の由来はタタとアーリアの組み合わせである。タタ＋アーリア＝タターリア＝タタールとなる。タタール人は「匈奴」に参加するが、匈奴が減ぶと、アーリア人はアラン族となる。

■BC4世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■BC4世紀 「テオティワカン誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したタタール人は、現地人と混合し、ククルカンと共に「テオティワカン」を築いた。テオティワカンの名の由来はティタン（タタール）とククルカンの組み合わせである。ティタン＋ククルカン＝テウタ＋ウガン＝テオティワカンとなる。

■BC4世紀 「テウトニ族誕生」

タタール人はユトランド半島に根付いて「テウトニ族」を称した。テウトニの名の由来はティタンである。ティタン=テイタン=テウトとなる。因みに、ホータン人は「ゴート人」となった。その後、ドルイド教の支配下に置かれたテウトニ族は、キンブリ人と連合してローマ共和国に侵入し、ローマ軍と戦火を交えている。

■BC1世紀 「ツォツィル族誕生」「チャーチル誕生」

メキシコからマヤに到達したタタールは、マヤ人と混合して自身の名を由来に「ツォツィル」の種族を儲けた。タタール=チャチャール=ツォツィルとなる。その後、マヤパンが滅ぶと、ツォツィル族はマヤを後に遠くブリテン島にまで及んだ。マヤ人の顔をしたツォツィル族はイギリス人と混合して「チャーチル」を形成した。チャーチルの名の由来はツォツィルである。ツォツィル=ツォーツィル=チャーチルとなる。

■BC113年 「アラウジオの惨劇」

カルヌーテース族が操るドルイド教の信者となっていたテウトニ族は、キンブリ人と共に、カルヌーテース族からローマ共和国に攻め込む指令を受けた。カルヌーテース族は、カルタゴのバル・ハンモン崇拝、シリアのアタルガティス教と協力し、合同で信者の軍団をローマ共和国に攻め込ませた。テウトニ族、キンブリ人の侵攻は「ウェル・サクレム」「ポエニ戦争」「シチリア奴隷戦争」に次ぐ、ローマ侵攻作戦の第四弾であった。

■BC73年 「キンブリ人の大航海時代」

■BC23年 「タタール人復活」

BC102年にテウトニ族が、BC101年にキンブリ人がたて続けに、ローマ共和国によって打ち破られた。彼らは、スパルタクスの大乱の際にはスパルタクスの反乱軍に加わっていたが、ローマ軍に破れると、テウトニ族はキンブリ人、バタヴィア族と共にインドに立ち寄り、その後、タタール人の故地であるモンゴルに入植した。この時、テウトニ族は「タタール人」に同化

した。

■ A D 3 1 9 年 「鳥取氏誕生」

「鮮卑」が消滅すると、托跋部、慕容部、乞伏部、秃髮部は中国に「代」「前燕」「北魏」「西秦」「南涼」などの短命な国家を建設する。だが、鮮卑の時代が終焉を迎えると、宇文部、一部托跋部、タタール人はモンゴルを発って日本に移住した。タタール人は、タタールを由来に「鳥取」を称した。

■ A D 3 1 9 年 「豊田氏誕生」

「鮮卑」が消滅すると、托跋部、慕容部、乞伏部、秃髮部は中国に「代」「前燕」「北魏」「西秦」「南涼」などの短命な国家を建設する。だが、鮮卑の時代が終焉を迎えると、宇文部、一部托跋部、タタール人はモンゴルを発って日本に移住した。タタール人は、テウトニを由来に「豊田」を称した。テウトニ＝テウト＝トヨタとなる。

製鉄の種族であったティタン神族（デウカリオン族）の子孫であるタタールは日本に「多田羅製鉄」を伝えた。この時の大移動の参加者にホンダ、トヨタ、スズキなど、代表的な日本の自動車企業の名前が並んでいるのは興味深い。

■ A D 6 4 2 年 「タタ誕生」

サーサーン朝が滅ぶと、拝火教の信者であるタタは、イランを離れてグジャラートに入植した。彼らは「タタ財閥」の祖となる。

■ A D 6 4 2 年 「多田氏誕生」

サーサーン人は同盟者であったイベリア人、タタを連れてイランを出発し、日本に移住した。イラン人の顔をしたタタは、日本人と混合して「多田氏」を成した。多田の名の由来はタタである。この時に「多田氏は「多田神社」を建立した。

■ A D 1 1 2 5 年 「伊達氏誕生」

遼が滅ぶと、タタール人はモンゴルを発って日本に上陸した。当初、タタール人は「下野中村氏」を称した。その後、「常陸入道念西」と呼ばれた中村念西が「伊達」を称した。伊達の名の由来はタタールである。タタール＝ダテール＝伊達となる。

■AD1425年 「タイスン・ハーン誕生」

AD1400年に伊達政宗が大崎氏と同盟して結城氏、上杉氏と交戦した「伊達政宗の乱」が発生した。伊達政宗は鎌倉幕府と抗争を続けたが、敗北すると、政宗は伊達氏宗と共に死去に見せかけてモンゴルに逃亡した。そして、政宗の系統はアダイ・ハーンに接近して自身の血統を打ち立てた。AD1425年、政宗の血を継ぐタイスン・ハーンが誕生した。タイスンの名の由来は西山城である。西山＝タイスンとなる。こうして、政宗の系統は、モンゴルの地を治めていた「北元」の王位を篡奪した。

■AD1548年 「阮氏篡奪」「阮氏地方政権樹立」

AD1542年に「天文の乱」が起きると、敗北を喫した伊達植宗がモンゴルへと逃亡している。この時、伊達政宗の血を引く北元王室と対立した伊達植宗は、代わりにベトナムへと落ち延びた。北元王室は、伊達政宗に敗北するとモンゴルを後にベトナムに来て「阮氏」を復活させていた。だが、ベトナムを訪れた伊達植宗は、北元王室を篡奪した伊達政宗と同じように阮氏の名を篡奪した。これを機に、正統な阮氏はアイルランドへと旅立った。

■AD1635年 「伊達宗純誕生」「伊達宗勝誕生」

伊達政宗の血を引く北元が滅ぶと、北元王室がモンゴルを後に仙台に帰還してきた。彼らは伊達氏に合流して伊達宗純、宗勝の兄弟を生んだ。宗純は宇和島藩から3万石を分知され、伊予吉田藩を得た。また、宗勝は仙台藩から3万石を分知され、一関藩を得た。しかし、伊達家の勢力を監視していた大谷家は陰謀を駆使し、「伊達騒動」を演出した。これにより、北元の直系、宗純と宗勝の一族は仙台を脱してベトナムに逃げ込んだ。彼らは、伊達植宗の子孫に合流して同じく「阮氏」を称した。

■AD1778年 「西山朝樹立」「阮朝誕生」

伊達植宗の子孫と対立したため、伊達宗純、宗勝の子孫が「西山朝（タイソン）」を開いた。タ

イソンの名の由来はタイスン・ハーンである。劣勢を喫していた伊達植宗の子孫だったが、AD 1782年に「天明の飢饉」が発生すると、伊達家が大挙してベトナムに移住してきた。援軍を得た伊達植宗の子孫は西山朝を滅ぼし、AD 1802年に「阮朝」を開いた

■AD 1802年 西山朝の残党、フィリピン・イタリアに移住

阮朝が成立すると、西山朝の残党は東西に分離して船出した。東方組はフィリピンに上陸し、「ドゥテルテ」の姓を称した。ドゥテルテの名の由来は「タタールの人（タタールト）」である。タタールト＝ドゥタールト＝ドゥテルテとなる。一方、ベトナムからイタリア半島に移住した西山朝の残党はイタリア人と混合して「タトゥーロ」の姓を形成した。タトゥーロの名の由来はタタールである。タタール＝タトゥール＝タトゥーロとなる。

■AD 1874年 ウィンストン・チャーチル生誕

■AD 1890年 阮生恭生誕 「ホー・チミン誕生」

■AD 1945年 ロドリゴ・ドゥテルテ生誕

フィリピン共和国第16代大統領に就任している。

■AD 1957年 ジョン・タトゥーロ生誕

ディンカの歴史

◆テングリ（ディンカ）の歴史

■50万年前 「ディンカ誕生」

ビクトリア湖沿岸部には巨大ワニが生息しているため、彼らは湖の中心部を生活の拠点としていた。そのため、水生生活に特化していたディンカは、頭部が小さく、手足、指が長いという身体的特徴を得た。これらの身体的変化により、彼らは、水中で大きな推進力を得ることができた。その二次的な結果として、彼らは2 m近い身長を手に入れた。

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「マサイ誕生」「ムルング誕生」「ハダメ誕生」「イサック誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したディンカは、現ケニアに「マサイ」、現タンザニアに「ムルング」、現ソマリアに「ハダメ」「イサック」を生んだ。

■40万年前 「第1次ディンカの大移動時代」

■40万年前 「タンジール誕生」「サルディニャ誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したディンカは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「タンジール」「サルディニャ島」「シェラネバダ」「メッサニア」「チャンネル諸島」「アルデンヌ」「セーヌ川」などである。残念ながら、サルディニャ島はその後、シェルデン人に篡奪され、タナトスの拠点となっている。

タンジール、サルディニャの名の由来はディンカとシルックの組み合わせ、メッサニア、セーヌの名の由来はマサイとディンカの組み合わせ、ナクソスの名の由来はディンカとゼウスの組み合わせである。ディンカ+シルック=ディンシル=タンジールとなり、シルック+ディンカ=シルディン=サルディニャとなる。マサイ+ディンカ=マサイン=マサイナ=メッサニア=サニア=セーヌとなる。

■ 30万年前 「第2次ディンカの大航海時代」

■ 30万年前 「グレニコス誕生」

「ディンカの大航海時代」に参加したディンカがオセアニアを訪れると、ディンカは、キャラ、ムシシと組んで「グレニコス」を生んだ。グレニコスの名の由来はキャラ、ディンカ、ムシシの組み合わせである。キャラ+ディンカ+ムシシ=キャラナコシ=グレニコスとなる。その後、グレニコスは河川の娘たちに参加した。

■ 30万年前 「伊邪那岐誕生」「伊邪那美誕生」

葦原中津国を建設したアシアーとグレニコスは、エウリュノメーを迎えて「伊邪那岐」「伊邪那美」の2神を誕生させた。イザナギの名の由来はアシアーとグレニコスの組み合わせであり、イザナミの名の由来はアシアーとエウリュノメーの組み合わせである。アシアー+グレニコス=アシアニコ=イザナギとなり、アシアー+エウリュノメー=アシアノメー=イザナミとなる。

■ 30万年前 「オケアーニスの大移動時代」

■ 30万年前 「守護蛇ピュトン誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したディンカは、ペイトーと組み、ナイル流域からエーゲ海へ移った。この時に、彼らは聖地デルポイの守護蛇「ピュトン」を生んだ。ピュトンの名の由来はペイトーとディンカの組み合わせである。ペイトー+ディンカ=ペイディン=ピュトンとなる。頭部が小さく、手足、指が長いディンカは、北極圏に近いエーゲ海に暮らすことで、背の高い金髪・碧眼の白人（北欧人）の祖となった。

■ 30万年前 「ナクソス誕生」

「オケアーニスの大移動時代」に参加したグレニコスは、エーゲ海に「ナクソス」の名を生んだ。ナクソスの名の由来はディンカとムシシの組み合わせである。ディンカ+ムシシ=ンカシシ=ナクソスとなる。

■ 7万年前 「第1次ウラヌスの大航海時代」

■ 7万年前 「タウマス誕生」「デイモス誕生」

「第1次ウラヌスの大航海時代」の参加者がオーストラリアから地中海を訪れると、ディンカはマサイと組んで「タウマス」「デイモス」「ステンノ」を生んだ。タウマス、デイモス、ステンノの名の由来はディンカとマサイの組み合わせである。ディンカ+マサイ=テイマサ=タウマスとなり、ディンカ+マサイ=テイマサ=デイモスとなり、マサイ+ディンカ=サイディン=サイテンノ=ステンノとなる。「神統記」では、タウマスはポントスとガイアの子、デイモスはアフロディテとアレスの子、ステンノはゴルゴたちとして知られている。

■ 7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「チン族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したディンカは、ミャンマーに入植し「チン族」を生んだ。チンの名の由来はディンカである。ディンカ=チンカ=チンとなる。

■ 7万年前 「トゥングル族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したムルングはディンカと連合して、インドネシアに「トゥングル族」を生んだ。トゥングルの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=トゥングルとなる。また、ミャンマーに足場を得たトゥングル族は、「カレン族」を生んだ。カレンの名の由来はディンカとムルングの組み合わせであり、ムルングが主導していた。ディンカ+ムルング=カルン=カレンとなる。

■ 7万年前 「ケタガラン族誕生」「クーロン族誕生」

台湾に入植したトゥングル族（カレン族）は、単独で「クーロン」を称し、エレクトラと連合して「ケタガラン」を成した。クーロンの名の由来はカレンであり、ケタガランの名の由来はエレ

クトラとカレンの組み合わせである。カレン=カーレン=クーロンとなり、エレクトラ+カレン=クトカレン=ケタガランとなる。

■ 7万年前 「天界神テングリ誕生」

セデック族（台湾）は、意気投合したトゥングル族（カレン族）と共にシベリアに移住した。両者は、ウリゲン、テングリ、エルリクなどの子孫である現地人と交わり「チュクチ」「ディングリング」を形成し、同時に「天界神テングリ」も生まれた。ディングリング、テングリの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=ディングリング=ディングリ=テングリとなる。犬戒（キロン）はカロンの渡し守であり、チュクチ族が住んだ黒龍江はステクスである。ということで、同盟者である天界神テングリ（ディングリング）も、黒龍江辺りに住んでいた。

■ 7万年前 「第2次アルゴス号の大航海時代」

■ 7万年前 「オーディーン誕生」

「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したペイトーは、古代マヤに入植し、「オーディーン」を生んだ。オーディーンの名の由来はペイトーとディンカの組み合わせである。ペイトー+ディンカ=オーディン=オーディーンとなる。オーディーンは、ヴァルハラ王国を統治した。

■ 4万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4万年前 「テイ誕生」「東方青龍誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したテングリは、ディンカの故郷である湖水地方に帰還し、テイを生んだ。彼らは、同盟者と共に「東方青龍（チンロン）」を建設した、チンロンの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンルン=チンロンとなる。

■ 2万年前 「最終戦争ラグナロク」

■ 2万年前 「貪狼誕生」「北斗星君誕生」

「最終戦争ラグナロク」により、オーディーンがヴァルハラから現ベナン辺りに入植し、青龍（湖水地方）のディンカと組んで「北斗星君（ペイトーキンジュン）」を建設した。ディンカは、「貪狼（タンラン）」を生んだ。タンランの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンルン=タンロンとなる。テングリは、この時にテーバイ王国のトバルカインと接触を持ち、交流した。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「テングリの大移動時代」

■ 1万3千年前 「六十元辰誕生」「長江誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したテングリは、大地殻変動を機に、アフリカ湖水地方から長江流域に逃げてきた。彼らは、メラネシアから逃げてきた人々と連合して60もの神々を生んだ。「六十元辰」と呼ばれた彼らは「元辰（ユエンチェン）」を築いた。元辰（ユエンチェン）の名の由来は長江（チャンジャン）であり、長江（チャンジャン）の名の由来は丁零（ディングリング）とジェンギの組み合わせである。ディングリング+ジェンギ=ディンジェン=チャンジャン=ヤンジャン=ユエンチェンとなる。

■ 1万3千年前 「チェケル人（前身）誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したテングリは、長江から瀬戸内海に移住した。この時に、テングリはチュクチと組んで「チェケル人」を生んだ。チェケルの名の由来はチュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュクリン=チェケルとなる。

■ 1万5千5百年前 「垂仁天皇の大移動時代」

■BC 7千年 「アヌンナキの大航海時代」

■BC 7千年 「ユングリング（前身）誕生」

「アヌンナキの大航海時代」に参加したディンカは、スカンジナビアに移住し「ユングリング（前身）」を生んだ。ユングリングの名の由来はディングリングである。ディングリング＝イングリング＝ユングリングとなる。8千年後、ユングリング家がノルウェー王、スウェーデン王としてスカンジナビア半島に返り咲いている。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「洞庭湖誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したディンカは、故地であるビクトリア湖に帰還し、「洞庭（ドンティン）」と命名した。ドンティンの名の由来はディンカとテングリの組み合わせである。ディンカ+テングリ＝ディンテン＝ドンティン（洞庭）となる。その後、ディンカがモンゴルに帰還すると、「洞庭」の名前が中国に伝えられた。

■BC 19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC 19世紀 「チェケル人誕生」

無法なシェルデン人は、地中海を我がもの顔で荒らしていた。これを懸念した科学の種族は、だが、これ以上核兵器を使用したくなかったため、タガログ族（チェケル人）にシェルデン人退治を依頼した。「海の民の大航海時代」を指揮したタガログ族は、太平洋、マヤ、アイルランドを経て地中海に進出した。タガログ族は、地中海では「チェケル人」と呼ばれた。チェケルの名

の由来はチュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュクリン=チェケルとなる。

■BC1027年 「ベーシュタードの大航海時代」

■BC1027年 「アーンギラサ誕生」

「ベーシュタードの大航海時代」に参加したシェクレシュ人は、ガンジス流域に入植した。シェクレシュ人は、カアングと連合し「アーンギラサ」を称した。アーンギラサの名の由来はカアングとシェクレシュの組み合わせである。カアング+シェクレシュ=アンクレシュ=アーンギラサとなる。アーンギラサ族は、マハーバーラタ、リグ・ヴェーダなど、「ヴェーダ神話」の編纂を手がけた。

■BC10世紀 「カルタゴ誕生」

「海の民」の時代が終焉を迎えると、シェクレシュ人はクレタ島を離れた。彼らは、チュニジアに入植し、「カルタゴ」を建設した。カルタゴの名の由来はチェケルとマルドゥクの組み合わせである。チェケル+マルドゥク=ケルドゥク=カルタゴとなる。カルタゴは、テュロスと並んで正しく優れた人々の中継地として発展した。美しく、優れた人々を非常に憎悪するタナトスは、ローマ共和国に巢食い、カルタゴ打倒に対して異常なまでの熱意を傾けた。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「テイ族誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカルタゴ人は、ガンジス流域に入植した。その後、チベットに移住し、「テイ族（ディ）」を生んだ。ディの名の由来はディンカである。ディンカ=ディ（テイ族）となる。

■BC2世紀 「丁零誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカルタゴ人は、黒龍江に入植し、その後、モンゴルに移住した。彼らは、「丁零（ディングリング）」を生んだ。丁零（ディングリング）の名の由来は、テングリと同じくディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=ディングリングとなる。

■AD531年 「マクリア人の大移動」

■AD531年 「ドンゴラ誕生」

「マクリア人の大移動」に参加した丁零は、安閑天皇が築いたマクリア王国の首都として「ドンゴラ」を建設した。ドンゴラの名の由来はディングリングである。ディングリング=ディングロ=ドンゴラとなる。

■AD641年 「ドンゴ誕生」

イスラム教徒がヌビアに侵入しはじめると、一部「ドンゴラ」の丁零は、ヌビア脱出時に、マクリア人とアルワ人の中央アジア行きには同行せず、単身モンゴルに帰還し、満州に移住して女真族に参加した。ヌビア人の顔をした彼らは。現地人と混合して「ドンゴ」を生んだ。ドンゴの名の由来はドンゴラである。

■AD641年 「ユングリング家誕生」

イスラム教徒がヌビアに侵入しはじめると、「ドンゴラ」の丁零は、アルワ王国の人々と共にスカンジナビア半島に移住した。この時に「ユングリング家」が生まれた。ユングリングの名の由来はディングリングである。ディングリング=イングリグ=ユングリングとなる。

■AD7世紀 「タングート誕生」

ティ族は、「ディンカの人」を意味する「タングート」を生んだ。ディンカト=ディンカート=タングートとなる。タングートは、ティ族と同じく、チベット付近を根城にしていた。

■AD872年 ハーラル1世、ノルウェー初代国王に即位 「ノルウェー王国誕生」

■AD985年 エリク6世、スウェーデン国王に即位 「スウェーデン王国誕生」

ユングリング朝は、祖を同じくするステンキル朝の王、ステンキルがスウェーデン王に即位するAD1060年まで存続した。

■AD1015年 オーラフ2世、ノルウェー国王に即位

■AD1035年 マグヌス1世、ノルウェー国王に即位

■AD1060年 「中島氏誕生」「長島氏誕生」「長瀬氏誕生」

ユングリング家は、スウェーデン王位を失うと、日本に入植した。彼らは「中島」「長島」「永島」「永瀬」「長瀬」などの名を儲けた。3つの名の由来は「ナクソス島」である。ナクソスの島=ナカ+島=長島、中島、永島となり、ナクソス=ナクソ=永瀬、長瀬となる。

■AD1287年 「タウングー朝誕生」

AD1277年、フビライのビルマ侵攻に従軍したタングートは、ビルマに根付いて「タウングー朝」を開いた。タウングーの名の由来はタングートである。タングート=タウングート=タウングーとなる。当初、タングートはパガン朝治世下のビルマで村を築いていた。しかし、首都パガンが陥落し、シャン族が王朝を乱立すると各地で発生した大量の難民が村に流入した。これを機に、ティンカバーが初代王に即位し、AD1347年に「タウングー朝」を開いた。

AD1551年に即位したバインナウンはモン族、シャン族を制圧してミャンマーの大半を掌握した。AD1548年、第一次緬泰戦争ではアユタヤ朝に侵攻し、AD1558年にランナー王国を占領し、第二次緬泰戦争、第三次緬泰戦争ではアユタヤを属国化した。その後、ペグー朝や明と交戦するが、AD1752年に滅びている。

■AD1630年 「トンガ族誕生」

デンケなどの人々は、狼男としてヨーロッパで忌み嫌われ、魔女狩りを機に、フランスを逃れてジンバブエにまで落ち延びた。ヨーロッパ人の顔をした彼らは現地人と混合して「トンガ」を称した。トンガの名の由来はタングートである。タングート＝タンガ＝トンガとなる。トンガ人はジンバブエからマラウィ、ザンビアにまで拡大した。後に、兄弟であるタウングー朝の残党がジンバブエを訪れると、彼らは連合し、中央アフリカに進出して「豹の部族」などを形成し、カニバリズムによってアフリカを汚染していく。

■AD1767年 「トンブリー朝誕生」

AD1758年、清によるジュンガル部大虐殺が起きると、女真族のドンゴはタイに移住した。その後、AD1767年に武将ピヤ・タークシンが「トンブリー朝」を開いた。トンブリーの名の由来はテングリである。テングリ＝テンブリ＝トンブリーとなる。ハ行がカ行を兼ねる法則が採用されている。トンブリー朝は、すぐに「チャックリー朝」にとって換えられている。

■AD1794年 「マフディー国家誕生」

AD1767年に武将ピヤ・タークシンが「トンブリー朝」を開いたが、すぐに暗殺されてしまった。その後、残党はタイを脱出してヌビアに帰還した。ドンゴラに生まれたドンゴの子孫ムハンマド・アフマドは、自らを「マフディー」と呼び習わし、軍勢を率いてエジプト軍を壊滅させ、大英帝国軍を退けて、AD1885年に「マフディー国家」をスーダンに打ち建てた。

■AD1904年 鄧小平生誕

鄧（ Deng ） の名の由来はテングリである。テングリ＝ Dengli ＝ Deng （ 鄧 ） となる。

■AD1938年 庭野日敬、長沼倭成と共に立教 「立正佼成会誕生」

彼らは、AD1930年の中国共産党の長征を機に、中国から日本に逃れてきた人々である。教祖、庭野日敬の名の由来は「丹羽」だと考えられるが、信仰指導を担当した長沼妙校の姓「長沼」の由来は、イザナギとイザナミの組み合わせである。イザナギ＋イザナミ＝ナギナミ＝長沼となる。

また、長沼妙校の「妙校」の名の由来は白山修験の明峰「妙高山」である。つまり、立正佼成会の基盤は白山修験によって形成された。この、庭野日敬、長沼妙校の先祖を含む白山修験の修験

者集団は、AD1868年の「北越戦争」を機に日本を脱出して一時的に清治世下の中国に渡っていた。

■AD1934年 中島貞夫生誕

■AD1936年 長嶋茂雄生誕

■AD1937年 永島慎二生誕

■AD1945年 テイン・セイン生誕

テイン・セインは、ミャンマー連邦共和国第8代大統領に就任した。テインの名の由来は、タウングートだと考えられる。タウングート＝タウン＝テインとなる。つまり、テイ族がビルマ人の祖というのは当たっている。

■AD1952年 中島みゆき生誕

■AD1953年 テレサ・テン生誕

■AD1966年 永瀬正敏生誕

◆ガリア（チェケル）の歴史

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC19世紀 「チェケル人誕生」

無法なシェルデン人は、地中海を我がもの顔で荒らしていた。これを懸念した科学の種族は、だが、これ以上核兵器を使用したくなかったため、イスラエル王国時代に知り合ったタガログ族にシェルデン人退治を依頼した。「海の民の大航海時代」を指揮したタガログ族は、太平洋、マヤ、アイルランドを経て地中海に進出した。タガログ族は、地中海では「チェケル人」と呼ばれた。チェケルの名の由来は、タガログの由来と同じく、チュクチとディングリングの組み合わせである。チュクチ+ディングリング=チュグリ=チェケルとなる。

■BC19世紀 「オルメカ文明誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したチェケル人の一部は、中米通過の際、マヤに残留している。彼らが築いた文明は、「オルメカ文明」として知られている。中でも、巨石で造られた巨大な黒人の頭部が有名だ。ただ、あの顔は黒人の顔ではなく、ルソン島に住んでいたチェケル人、つまり、タガログ族（フィリピン人）の顔である。海の民の脅威に曝されたラムセス2世の時代に製作されたレリーフがあるが、このレリーフにはチェケル人の姿が刻まれている。このレリーフに刻まれたチェケル人の顔も黒人に見えるが、じつはフィリピン人の顔である。

■BC10世紀 「カルタゴ誕生」

フィリピン人の顔をしたチェケル人、ポリネシア人の顔をしたマルドゥクは連合してチュニジアに入植し、「カルタゴ」を建設した。カルタゴの名の由来はチェケルとマルドゥクの組み合わせである。チェケル+マルドゥク=ケルドゥク=カルタゴとなる。カルタゴは、テュロスと並んで正しく優れた人々の中継地として発展した。美しく、優れた人々を非常に憎悪するタナトスは、ローマ共和国に巢食い、カルタゴ打倒に対して異常なまでの熱意を傾けた。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「ガリア誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカルタゴ人は、ビュブロス人、ダン族と共にライン河畔に上陸する。この時、カルタゴ人は2つに分離して、それぞれが「ガリア」「ダキア」を称した。ガリアの名の由来はカルタゴである。カルタゴ=カリャタゴ=ガリアとなる。

■BC7世紀 「カレドニア誕生」

ガリア人は、ダン族と組んで「カレドニア」を結成し、ガリアからスコットランドに移った。カレドニアの名の由来はガリアとダンの組み合わせである。ガリア+ダン=ガレダンニア=カレドニアとなる。

■BC7世紀 「ケルト人誕生」

しかし、人喰い人種であるダン族を嫌悪したガリア人は早々にカレドニアを解散し、ガリアに帰還して「ケルト人」を称した。ケルトの名の由来はカレドニアである。カレドニア=ケルトニア=ケルトとなる。

■BC390年 「ウェル・サクレム」

クロノスとタナトスの連合体であるドルイド僧による「一向一揆」の原型がこれである。「数で優れた者を圧倒する」という戦法が、古代ローマ相手に実施されていたのだ。多数の愚か者を指揮して少数の優れた者を数で圧倒する。これは、確かに賢い方法ではあるが、優れた者が多数である時、この方法は機能しない。ドルイド教が指揮した「ウェル・サクレム」は、それを教えてくれる。ローマには優れた兵士が大勢いたのだ。この時、ドルイド教は、強い敵と戦う前には、強い者たちを弱体化しなければならない、ということ学んだ（そして、その研究と実践は、中世ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本で発揮されることになる）。

■BC335年 「アレキサンダー大王暗殺」

BC335年、ドルイド僧の指揮下にあったガリア人は、ドナウ川とモラヴァ川の合流地点で、かのアレキサンダー大王と会見している。強い者と初めて対面する時、いい顔をして必ず下手に出る彼らは、大王に忠誠を示す品々を贈った。アレキサンダー大王は、自身の名声がガリアにまで轟いていることを期待して「おまえたちが一番恐ろしいと思う人物は誰だ？」と問うた。これに対し、ガリア人は「自分たちに怖いものは何もない」と答えた。この時、感銘を受けたアレキサンダー大王はガリア人を友と呼び、同盟を築こうとした。だが、大王は後にこの発言を撤回し「あいつらはただのホラ吹きだ」と一蹴し、ガリア人を追放している。この報復としてドルイド僧はアレキサンダーを暗殺した。これにより、マケドニア帝国という障害が除去されたガリア

軍は、バルカン半島になだれ込んだ。

■BC279年 「ガラティア王国誕生」

BC279年、ついにガリア人は聖地デルポイを蹂躪し、略奪の限りを尽くした。だが、聖地デルポイを治めていたディオニュソス密儀と対立することになる。ディオニュソス密儀のダルダニア人は、ドルイド教とは「神託」を学んだ師と弟子の間柄であった。だが、彼らは、ガリア人の侵攻をドルイド教の裏切りと判断し、「アポロンの呪い」とウソぶいて、ガリア人の指揮官を暗殺した。ドルイド僧は、これを単なるウソと見抜いたが、何も知らないガリア人兵士は恐れおののき、軍団は周囲に四散した。後に、人喰い人種を嫌っていた正統なケルト人は、ドルイド僧から逃れるようにアナトリア半島に落ち延び、独自に「ガラティア王国」を建てた。ガラティアの名の由来はケルトである。ケルト＝ゲルティア＝ガラティアとなる。

■AD534年 「ヴァンダル人の大航海時代」

■AD534年 「ノヴゴロド誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したケルト人は、バルト海に入植し、ノヴゴロドを築いた。その後、「ノヴゴロド公国」が建設された。ノヴゴロドの名の由来は「ヌオヴォ・ケルト（新しいケルト）」である。ヌオヴォケルト＝ノヴォゲルド＝ノヴゴロドとなる。

■AD534年 「黒田氏誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したケルト人は、日本に上陸し、現地人と混合して「黒田氏」を生み、マルコマンニ人は「丸子氏」を生んだ。黒田の名の由来はケルトである。ケルト＝ケルド＝黒田となる。

■AD534年 「ケレイト誕生」

「ヴァンダル人の大航海時代」に参加したケルト人は、更に、日本からモンゴルに渡った。ケルト人とマルコマンニ人は、現地人と混合して「ケレイト」「メルキト」を形成した。ケレイトの名の由来はケルトであり、メルキトの名の由来はマルコマンニの人である。ケルト＝ケレイト＝

ケレイトとなり、マルコマンニの人（ト）＝マルコト＝マルキトとなる。

■AD1219年 「シュレイダー誕生」

チングス・ハーンの征西に同行し、「ワールシュタットの戦い」に参加したケレイトは、ドイツに入植して「シュレイダー」「シュレイター」「ブットゲライト」などの名を残した、

この系統からは、戦国武将として知られる黒田如水、黒田長政が輩出されている。

■AD1940年 テリー・ギリアム生誕 「モンティ・パイソン誕生」

ギリアムの名の由来はガリアである。ガリア＝ガリアン＝ギリアムとなる。

■AD1942年 ポール・マッカートニー生誕 「ビートルズ誕生」

マッカートニーの名の由来はマックとカレドニアの組み合わせである。マック＋カレドニア＝マッカレドニア＝マッカートニーとなる。

■AD1943年 レナード・シュレイダー生誕

ケレイト＝シェレイト＝シュレイダーとなる。

■AD1945年 ヴェルナー・シュレーター生誕

ケレイト＝シェレイト＝シュレイダー＝シュレーターとなる。

■AD1946年 ポール・シュレイダー生誕

■AD1963年 ユルグ・ブットゲライト生誕

◆天狗（ディンカ）の歴史

■ B C 7 世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■ B C 7 世紀 「東胡誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したカルタゴは、モンゴルに移住し、「東胡（トングー）」を築いた。トングの名の由来はテングリである。テングリ＝テングー＝トングー（東胡）となる。

■ B C 2 世紀 「修験道誕生」

匈奴が勢力を拡大すると、東胡は瀬戸内海に移住した。この時、彼らはチュクチと組み、「修験道」を生んだ。修験道の名の由来はチュクチとディンカの組み合わせである。チュクチ＋ディンカ＋道＝チュクイン＋道＝修験道（しゅげんどう）となる。

■ B C 2 世紀 「天狗誕生」

日本中に分布した修験道の拠点に住んだディンカは「天狗」を称した。天狗の名の由来はテングリである。テングリ＝テング＝天狗となる。初代テーバイ王国時代に、科学の種族トバルカインと交流があった彼らは、山岳部に暮らしながら、最先端の科学力を取り入れた生活をしていた。天狗は、仏教の僧侶を敵視し、「神隠し」として、仏教信者の有力者の子息を連れ出し、自分たちの力を見せ付けた。目的は、仏教僧侶の驕り、思い上がりの払拭である。天狗たちは、仏教が人類の頂点ではないこと、仏教を遥かに上回る力が存在することを教えた。

しかし、狡猾な大谷は「神隠し」を利用した。大谷は、殺したい敵を拉致し、人知れず惨殺して遺体が目立つようにばらまいた。これにより、見せしめとして敵を威嚇した。また、天狗の脅威から保護してもらうためと称して、仏教に帰依した農民も大勢いただろう。大谷は、都合の悪いこと、悪事は全て天狗のせいにした。つまり、一口に「神隠し」と言っても、真相には2通りあるわけだ。

■ A D 6 8 1 年 「真言宗室生寺派誕生」

役小角の創建、空海が再興したと伝えられている。真言密教。

■ A D 7 世紀 「金峯山修験本宗誕生」

金峯山は、古来から山岳信仰の霊山であり、役小角が1000日の苦行の果てに金剛蔵王権現を感得したのが「金峯山修験本宗」の始まりである。天台密教。

■ A D 7 世紀 「修験道誕生」

役小角が伊豆に流罪となった時、熊野から吉備の児島に移住した五大弟子のひとり義学が開祖である。天台密教。

■ A D 8 世紀 「愛宕太郎坊誕生」

太郎坊は、八天狗の中で最もよく知られている。愛宕山は、京都を取り囲む山の中では最も高く、天狗の山として有名である。

■ A D 8 世紀 「鞍馬山僧正坊誕生」

■ A D 8 世紀 「比良山次郎坊誕生」

西の愛宕の大天狗太郎坊に対する大天狗が次郎坊だという。

■ A D 8 世紀 「飯綱三郎誕生」

■ A D 8 世紀 「大山伯耆坊誕生」

伯耆坊が棲む相模山の頂上には、大天狗祠があり、相当古い時代から祀られていたという。

■ A D 8 世紀 「彦山豊前坊誕生」

豊前坊は、九州天狗の元締めといわれている。

■ A D 8 世紀 「大峯前鬼坊誕生」

前鬼坊は、愛宕山の太郎坊よりも、古くから名前が知られているという。

■ A D 8 世紀 「白峯相模坊誕生」

讃岐松山山塊の主峰で、相模坊は、崩御した崇徳院を慰めていたという。

■ A D 8 世紀 「羽黒山三光坊誕生」

三光坊は、出羽三山に棲む多くの天狗を統率する大天狗だった。

■ A D 8 世紀 「秋葉山三尺坊誕生」

戸隠で修行し、越後の修験道場三尺坊で荒行をし、生身のまま天狗と化したという。

■ A D 8 世紀 「象頭山金剛坊誕生」

松雄寺金光院の院主実盛上人が山上で靈感に触れて天狗と化したという。

■ A D 8 世紀 「富士太郎誕生」

富士に君臨し、役行者を支援したといわれている。

■ A D 8 世紀 「鞍馬山魔王尊誕生」

有名な八天狗の一人で、牛若丸に武術を指南したとされている。

■ A D 8 世紀 「加波山石切大神誕生」

加波山は、寅吉に、筑波山の中で最も天狗が多いといわれた。石切はイエス・キリストを意味する。

■ A D 8 世紀 「道了薩夕誕生」

大雄山最上寺の開祖の弟子で、山を守護しようと請願を立てると虚空に舞い上がりその姿をけしたという。

■ A D 8 世紀 「水天狗円光坊誕生」

水天狗と呼ばれたのは円光坊だけだという。

■ A D 8 世紀 「奥山半僧坊誕生」

遠州奥山の方廣寺の開祖は半僧坊と呼ばれていたが、天狗だったといわれている。

■ A D 8 世紀 「比叡山法性坊誕生」

法性坊は、比叡山第13座主が、尸解してなったとされている。

■ A D 8 世紀 「白峯大僧正誕生」

白峯大僧正は、大天狗として白山全体を支配していた。

■ A D 8 世紀 「御嶽山六尺坊誕生」

六尺坊は、富士山よりも登山が困難な御嶽を統括していた。

■ A D 8 世紀 「黒眷属金毘羅坊誕生」

金毘羅坊は、四国象頭山で、金刀比羅宮の信者を守護し、参拝者の道中安全の役目を請け負っている。

■ A D 8 世紀 「石槌山法起坊誕生」

法起坊は、西日本随一の高峰、石槌山で、大小数万の天狗を統率していた。

■ A D 8 世紀 「高野山高林坊誕生」

高林坊は、空海が金剛峰寺を建てる以前から高野山の地主神で、護法の天狗を統率していた。

■ A D 8 世紀 桃太郎、鬼退治

黒人ダン族は、ナイジェリアを発ち、故国ダナーンを目指して東南アジアを訪れ、アンダマン諸島（ジャラワ族）、スラウェシ島、ミンダナオ島、台湾（サアロア族）に拠点を得ていた。黒人ダン族は、それらの島を出撃し、日本にまで足を伸ばして盗賊行為を行い、奈良時代、平安時代の子女を拉致して食べていた。これに対し、得体の知れない盗賊集団に縄張りを荒らされたと感じた百地氏は、腕利きの山伏、修験者を集め、キジを食糧として船に積み込み、台湾、ミンダナオ島、スラウェシ島、アンダマン諸島にまで行脚し、人喰い人種の黒人ダン族を成敗した。これは百地氏による鬼退治であった。つまり、昔話「桃太郎」の原話である。桃太郎（百地氏）、犬（天狗＝山伏）、猿（猿田彦の子孫＝修験者）、キジ（遠征の際の食糧）、キビ団子（吉備国、丹後国）、鬼（黒人ダン族）ということになる。後山の修験者は吉備国を、比叡山の修験者は丹後国を出発したが、「吉備丹後」が変遷を重ねて「キビ団子」となった。或いは、鬼退治に参加した修験者に対する報奨として吉備国、丹後国が与えられる約束があったのかもしれない。

■ A D 1 0 9 0 年 「本山修験宗誕生」

総本山聖護院は役小角を開祖とし、円珍が開基とされている。天台密教。

■ A D 1 6 世紀 「羽黒山修験本宗誕生」

出羽三山修験道の中心地で、16世紀には2500坊を数えるほど隆盛を極めた。天台密教。

■ A D 1 6 0 2 年 犬の早太郎、アステカの大谷を皆殺しに

ところで、見付天神の人身御供は、いつ終焉を迎えたのだろうか？見付天神の伝説によると、生贄を求めた猿神は信濃に住む「犬の早太郎」に成敗されたとされている。犬が出てきた時点で一般人の発想は分断され、「へえ、すごい犬だな」としか言えないだろう。しかし、名前を知れば大方の謎は解ける。ずばり、この犬の早太郎は、修験者であったと考えられる。「犬」とは天狗のことを指しているのは間違いない。そして、天狗は山伏、修験者の別名である。ということで、犬の早太郎の正体は、戸隠山修験、或いは秋葉山修験に属する優れた修験者である。もちろん、早太郎は個人ではなく、集団でやってきただろう。つまり、早太郎は修験者集団の首領だった可能性が高い。

修験者の早太郎に皆殺しにされた大谷は、遠江国を脱出し、命からがら兄弟が住む京都にまで逃げ延びた。彼ら、アステカ帰りの大谷は、日本に残留して本願寺を営んでいた大谷に接触し、自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが准如である。時折りしも、顕如が織田信長相手に一向一揆を仕掛けていた真っ最中である。だが、アステカ組の准如は、本願寺組の教如と対立し、本願寺は西本願寺と東本願寺に分離する。日本に残留した大谷は「東本願寺」を称し、アステカ組は「西本願寺」を称した。

ここで、最初の問いに戻りたい。見付天神の人身御供が終焉を迎えたのはいつか？それは、准如が生まれたA D 1 5 7 7 年よりも数年前と推定される。つまり、見付天神の生贄の儀式は、A D 1 5 2 0 年代から約50年ほど続いたのだ。人喰い人種である大谷は顔が醜い。そのため、彼らは良い顔を求めて器量良しの娘をさらい、子供をませた。顔が良ければ第一印象が改善される。「初対面で悪人に見えない」、これは悪党にとっての命題である。現在、磐田市近辺にはその時の生贄の娘の子孫がインフラ全般に渡ってごろごろしている。

◆アングル人（ガリア）の歴史

■BC 6世紀 「フィン人の大航海時代」

■BC 6世紀 「アンカラ誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加したカレドニア人（ガリア人）は、オビ河流域に足を止め、そこから南下してコラズムに移住した。その後、南下した彼らはアナトリア半島に上陸して「アンカラ」を得た。アンカラの名の由来はディングリングである。ディングリング＝イングリ＝アンカラとなる。

■BC 334年 「アングル人誕生」

BC 2世紀、エンゲル人はユトランド半島の付け根に「アンゲルン半島」を得た。アンゲルンの名の由来はディングリングである。ディングリング＝イングルン＝アングルンとなる。また、彼らは「アングル人」を称した。アングルの名の由来はエンゲルである。エンゲル＝アンゲル＝アングルとなる。

■AD 5世紀 「イースト・アングリア王国誕生」

アングル人、ジュート人、サクソン人がユトランド半島からブリテン島に移動する。アングル人は「イースト・アングリア王国」を建てた。

■AD 520年 「マヤ人の大航海時代」

■AD 520年 「アンコール人誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加したアングル人は、乞伏部（カーン王家）はカウィール家（クール人）、ベリーズ人と共にブリテン島を目指した。一方、賀茂氏はアングル人を連れてカンボジアを目指した。賀茂氏は、アングル人と共にカンボジアに入植し、両者は現地人と混合して「

クメール人（ゴメル）」「アンコール人（アングル）」となった。

■AD520年 「タルマヌガラ王国誕生」

カンボジアに拠点を得たクメール人、アンコール人だが、アンコール人がジャワ島に移住した。彼らはジャワ島初の王国「タルマヌガラ」を建てた。タルマヌガラの名の由来は「ダルマチア」と「アンコール」の組み合わせである。ダルマチア+アンコール=タリマンコール=タルマヌガラとなる。この後、ドルヒユ族はジャワ島を離れて中国に渡り、「達磨」を称した。

■AD8世紀 「ステンキル家誕生」

アングル人はマーシア王国の領域に進出して「ミドル・アングリア」も建設したが、マーシア王国編入を機に、一部ジュート人と共にブリテン島を離れ、バルト海に移住した。彼らは「ステンキル家」を称した。ステンキルの名の由来はサエテとアングルの組み合わせである。サエテ+アングル=サエテングル=ステンキルとなる。

■AD8世紀 「カンディアーノ家誕生」

「マーシア王国」に服属したことを機に、ケント人はアングル人と共にヴェネツィア共和国に渡り、連合して「カンディアーノ」を称した。カンディアーノの名の由来はケントとアングルの組み合わせである。ケント+アングル=ケントアン=ケントアヌ=カンディアーノとなる。

■AD8世紀 「ンコロ誕生」「アンゴラ誕生」

ザイール流域に根付いたケント人は「ガンダ族」を称し、アングル人は「ンコロ族」を称した。ンコロの名の由来はアングルである。古代ホモサピエンスの有力部族ジェンギやウリゲンの後裔であるテングリにとって、この移住は30万年ぶりとなる帰郷であった。両者は、ザイール流域を遡って大湖水地方に移って、伝説の「ニヨロ帝国」の傘下に入った。

また、その後に大湖水地方から帰還したンコロ族は、アフリカ西海岸に「アンゴラ」を築いた。アンゴラの名の由来はアングルである。AD19世紀、イギリス人の血が流れるガンダ族（ケント人）は、大湖水地方に進出してきた大英帝国と結び、伝説の「ニヨロ帝国」に進撃した。

■AD880年 「アンコール・トム建設」

カンボジア王スリ＝ヤソヴァルマンは、巨石の種族ピラミッド派に要請して「アンコール・トム」の建造を依頼している。

■AD1060年 ステンキル、スウェーデン国王に即位 「ステンキル朝誕生」

ステンキル朝は、AD1120年まで存続した。

■AD1112年 「アンコール・ワット建設」

カンボジア王スール＝ヤソヴァルマン2世は、巨石の種族ピラミッド派に要請して「アンコール・ワット」の建造を依頼している。

■AD1336年 「ヴィジャヤナガル王国誕生」

AD1377年にシュリーヴィジャヤ朝は滅ぶが、カンボジア人は既にスマトラ島を脱してインドに移住を完了していた。カンボジア人はカンボジア王国の同僚アンコール人と組んで「ヴィジャヤナガル王国」を建てた（本国カンボジアはクメール人の支配下にあった）。カンボジア+アンコール=ボジア+ンコール=ヴィジャヤナガルとなる。

■AD1490年 アーマド・ニザーム・シャー1世、初代王に即位 「アーマドナガル王国誕生」

ジャワを拠点に活動していた山田氏は「ヴィジャヤナガル」のアンコール人と共にインドに移住した。AD1490年頃、「バフマニー朝」が崩壊した際を見計らって両者は自身の王国を開いた。アーマドナガルの名の由来は山田（ティアマト）とアンコールの組み合わせである。ヤマダ+アンコール=ヤーマダンコル=アーマドナガルとなる。

■AD1490年 スルターン・クリー・クトゥブ・シャー、初代王に即位 「ゴールコンダ王国誕生」

ヴィジャヤナガルが分裂してアンコール人がゴンドワナ人と組んで出来た国。アンゲロス+ゴンドワナ=ゲルゴンドワ=ゴールコンダとなる。AD1687年に王国が滅ぶと、アンゲロス家はエチオピアに移って「ゲラ王国」を築き、更に、湖水地方に進出して「ニャンコロ王国」を建てた。

■AD1636年 「名倉氏誕生」

AD1636年、ムガル帝国の侵攻を機に、「アーマドナガル」は崩壊したが、山田氏とアンコール人の連合体は、インドを離れて江戸幕府治世下の日本に移住した。山田氏は残留していた山田氏と合流し、アンコール人は「名倉」を称した。名倉の名の由来はナガルである。

■AD18世紀 「ゲラ王国誕生」

ゴールコンダの王家はエチオピアに「ゲラ王国」を建てた。ゲラの名の由来はアングルである。アングル=アンゲラ=ゲラとなる。

■AD18世紀 「ニャンコレ王国誕生」

その後、エチオピアから湖水地方に移ったアンコール人は「ニャンコレ王国」を築いた。ニャンコレはアンコーレともニコロとも呼ばれる。どちらにしても名前の由来はアンコールである。アンコール=ニャンコール=ニャンコレとなる。

■AD1927年 ケネス・アンガー生誕

■AD1956年 「アンゴラ人民同盟誕生」

AD1962年、アングル人主体の「アンゴラ人民同盟」が祖を同じくするコンゴ人の支援を受けて組織された。

■AD1962年 ホールデン・ロベルト、指導者に就任 「アンゴラ民族解放戦線誕生」

「アンゴラ人民同盟」に参加したニャンコレ族は「アンゴラ民族解放戦線」を組織した。

シルックの歴史

◆チュルク（シルック）の歴史

■50万年前 「シルック誕生」

ビクトリア湖沿岸部には巨大ワニが生息しているため、彼らは湖の中心部を生活の拠点としていた。そのため、水生生活に特化していたシルックは、頭部が小さく、手足、指が長いという身体的特徴を得た。これらの身体的変化により、彼らは、水中で大きな推進力を得ることができた。その二次的な結果として、彼らは2 m近い身長を手に入れた。

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「トレ誕生」「キャラ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したシルックは、現コンゴに「トレ」、現タンザニアに「キャラ」を生んだ。

■40万年前 「第1次ディンカの大移動時代」

■40万年前 「シラクサ誕生」「チューリッヒ誕生」「チューリングン誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したシルックは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「タンジール」「サルディニヤ島」「シェラネバダ」「シェラモレナ」「シラクサ」「サラミス」「ルカニア」「チャンネル諸島」「アドリア海」「アルデンヌ」「チューリングン」「ロアール」「チューリッヒ」などである。

シラクサ、トラキアの名の由来はシルックとマサイの組み合わせ、チューリングンの名の由来はシルックとムルングの組み合わせであり、チューリッヒの名の由来はシルックである。シルック+マサイ=シルックサイ=シラクサ、シルック+マサイ=シルサイ=テルカイ=トラキアとなる。シルック+ムルング=シルング=シーリング=チューリングンとなり、シルック=シールック=チューリッヒとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■ BC 5千年 「セレグ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したシルックは、メソポタミアに移住して「セレグ」を生んだ、セレグの名の由来はシルックである。シルック=セレック=セレグとなる。

■ BC 32世紀 「第2次北極海ルート時代」

■ BC 32世紀 「チュルク族誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したセレグは、レナ流域に入植した。セレグは、現地人と混合して「チュルク族」を成した。チュルクの名の由来はセレグである。セレグ=チェレグ=チュルクとなる。

■ BC 32世紀 チュルク族、北狄に参加

黒龍江に到達したチュルク族は、「北狄（ベイディ）」に参加した。

■ BC 2180年 「高車誕生」

チュルク族は、高車に参加した。彼らは、高車の指揮によりアジア各地にドルメン、メンヒル、ストーンサークルを建設した。、モンゴルに「立石」、朝鮮半島に「支石墓」、大湯に「環状列石」、明日香村に「石舞台」「亀石」「猿石」「酒船石」、台湾に「卑南文化」、メラネシアに「ラピタ文化」を残した。

■ BC 2世紀 「丁零誕生」

チュルク族は、丁寧に参加した。この時に騎馬民族の生活を覚えた。

■BC317年 「チューリングア族誕生」

チューリングアに住んでいたシルックは、ゲルマン時代に「チューリングア族」を称した。チューリングアの名の由来はチューリングンである。チューリングン=チューリングアン=チューリングアとなる。AD5世紀に「チューリングア王国」を建てた際、チューリングア族はフン族を奴隷として徴用した。

■AD552年 トメン、初代帝王に即位 「突厥帝国誕生」

AD552年、チュルク族を指揮下に置いた土門が、柔然を撃破して伊利可汗として初代可汗に即位した。この時に「突厥帝国」が生まれた。

■AD6世紀 「トゥアレグ族誕生」

スワヒリから来たアザニア海賊（阿史那氏）がチュルク族を支配下に置くと、これを嫌った一部のチュルク族はインダス流域からインド洋に出て、南アフリカを周航した。その後、チュルク族は西アフリカに上陸し、サハラ砂漠に根付いた。この時に、チュルク族は「トゥアレグ族」を生んだ。トゥアレグの名の由来はチュルクである。チュルク=チュアレグ=トゥアレグとなる。現在、トゥアレグ族は、マリで軍事クーデターを起こし「アザワド独立宣言」を表明した。

■AD6世紀 「セラクレ族誕生」

その後、トゥアレグ族はサハラからニジェール流域に移り、「セラクレ族」を称した。セラクレの名の由来はチュルクである。チュルク=チュルクレ=セラクレとなる。

■AD6世紀 「トルテカ人誕生」

その後、セラクレ族は大西洋を横断し、メキシコに渡った。メキシコに到着したセラクレ族は、ティカル人と組んで「トルテカ人」を生んだ。トルテカの名の由来はチュルクとティカルの組み

合わせである。チュルク+ティカル=チュルティカ=トルテカとなる。彼らは、「トルテカ帝国」を建てた。首都「トゥーラ」の名の由来もチュルクである。チュルク=トゥルク=トゥーラとなる。

■AD557年 「チャールキヤ朝誕生」

スワヒリから来たアザニア海賊（阿史那氏）がチュルク族を支配下に置くと、これを嫌った一部のチュルク族はインドに移住した。彼らは、マイトラカ朝のトラキア人と連合し、AD6世紀に「チャールキヤ朝」を開いた。チャールキヤの名の由来はチュルクとトラキアの組み合わせである。チュルク+トラキア=チュルキア=チャールキヤとなる。AD7世紀には「東チャールキヤ朝」が、AD10世紀には、ラージプート出身のタイラ2世が王位を篡奪し、「後チャールキヤ朝」が開かれた。

■AD10世紀 「トルテカ帝国誕生」

AD10世紀、トルテカ人の戦士集団は、羽毛ある蛇を奉るトピルツィン王に率いられ、ユカタン半島を掌握した。

■AD1156年 「チェロキー族誕生」

AD1156年にチチェン・イツァーの侵攻によって首都トゥーラが破壊されると、トルテカ族はメキシコを後に北米大陸に向かった。北米南東部に居住したトルテカ族は「チュロキー」を称した。チェロキーの名の由来はチュルクである。チュルク=チュルキー=チェロキーとなる。

■AD15世紀 「シルック帝国誕生」

AD11世紀、ムラービト朝によってガーナ帝国が滅ぶと、セラクレ族は白ナイル流域に侵入した。セラクレ族は、先祖の名「シルック」を復活させた。セラクレ族は、何万年も前から現地に残っていたシルック族を統率し、AD15世紀に連邦制の国家「シルック王国」を建てている。

■AD15??年 フランシス・ドレイク生誕

一部のチェロキー族は、雨利他を離れて大西洋を渡り、ブリテン島に移住した。インディアンの顔をした彼らはイギリス人と混合して「ドレイク」の名を生んだ。ドレイクの名の由来はチュルクである。チュルク＝テルイク＝ドレイクとなる。フランシス・ドレイクは海賊として鳴らした。一方で、ドレイクはイングランド王国のために働き、スペイン無敵艦隊を撃破した。

■AD17世紀 「イロコイ連邦誕生」

その後、北東部森林地帯に移住したチェロキー族は「イロコイ族」を称した。イロコイの名の由来はチェロキーである。チェロキー＝チェロコイ＝イロコイとなる。AD17世紀には、イロコイ族は6部族連合の連邦国家「イロコイ連邦」を築いた。イロコイ連邦は「ビーバー戦争」で、チェロキー族は「セミノール戦争」で大々的に白人に対して抗戦した。

■AD1932年 ジャック・シラク生誕

シラクの名の由来はシルックである。シルック＝シルク＝シラクとなる。30万年前からヨーロッパに住んでいた人々の後裔である。

■AD1939年 グレース・スリック生誕 「ジェファーソン・エアプライン誕生」

スリックの名の由来はシルックである。シルック＝スルック＝スリックとなる。30万年前からヨーロッパに住んでいた人々の後裔である。

■AD1948年 ニック・ドレイク生誕

■AD1952年 アール・スリック生誕

スリックの名の由来はシルックである。シルック＝スルック＝スリックとなる。30万年前からヨーロッパに住んでいた人々の後裔である。

◆猿田彦の歴史

■30万年前 「ディンカの大移動時代」

■30万年前 「サルディニャ誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したシルックは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「タンジール」「サルディニャ島」「シェラネバダ」「シェラモレナ」「シラクサ」「トラキア」「サラミス」「ルカニア」「チャンネル諸島」「アドリア海」「アルデンヌ」「チューリングゲン」「ロアール」「チューリッヒ」などである。サルディニャの名の由来はシルックとディンカの組み合わせである。。シルック+ディンカ=シルディンナ=サルディニャとなる。

■BC945年 「アメン神官団の大航海時代」

■BC945年 「猿田彦誕生」「五十鈴誕生」

「アメン神官団の大航海時代」の東方組に参加したシェルデン人はモレヤ族と共に日本に上陸した。モレヤ族は諏訪国に移住して現地人の混合し、「守屋氏」を称して「洩矢信仰」を興した。シェルデン人は伊勢国に赴いて「五十鈴川」を拠点に「猿田彦」を称した。猿田彦の系統は、後に熊野三山を中心に日本中の山岳地帯に「修験道」を篡奪する。五十鈴の名の由来はイシスであり、猿田の名の由来はシェルデン、或いはサルディーニャである。

修験道の祖である役小角は賀茂氏の系統といわれるが、ステュクスとタナトスの2系統がある。タナトスの場合、名前を紐解くと、役（えんの）は「ディオニュソス」、小角は「小さいタナトス（タナトスの子）」に因んでいることがわかる。ディオニュソス=ディオニュソス=オンニユ=えんの（役）、小+タナトス=小+ツナトス=小角となる。鬼の子といわれる小綱の名も同様の由来を持っている。

■AD461年 ヒラルス、フェリクス3世、シンマクス、ローマ教皇に就任

AD3世紀、「大和人の大航海時代」に刺激を受けた猿田彦の子孫は日本を離れて故地であるサルディーニャ島に帰還した。彼らは、対岸のローマ帝国の繁栄を眺めながらサルディーニャ人と

して暮らし、ローマ掌握の機を狙っていた。サルディーニャ人はローマ教皇の座を篡奪することでローマを掌握する方法を考えた。そして、その思惑とおりにヒラルスがローマ教皇の座を得た。その後、フェリクス3世、シンマクスなどのローマ教皇を得るが、ゴート族、フランク族がローマ帝国を滅ぼしてしまう。また、サルディーニャ人は同時にローマ教皇の座を喪失した。ゲルマン人に対する復讐を胸にサルディーニャ人は再度、シェルデン人の秘儀「黒死病」戦法を持ち出した。AD540年からAD591年の間、エジプトからマルセイユ、ローヌ河、アイルランドにいたる広範囲にペスト菌を撒いたサルディーニャ人だが、フランク王国を破壊するには至らなかった。ローマ掌握が夢と消えたサルディーニャ人は、フランク王国の破壊を断念し、日本に帰還して、修験者としての修行を続けた。

■AD10世紀 「アササン教団誕生」

世直しのため、トバルカインのレポート装置によって日本を発った阿蘇修験は、クルディスタンに居を据えて「アササン」を称した。アササンの名の由来は阿蘇山（あそさん）である。阿蘇山の名がイタリア語アサシーノ、フランス語アササン（暗殺、殺人）の由来になっているのだ。阿蘇山修験の修験者たちは、ニザール派、イスマイール派にイスラムを学び、暗殺教団を組織した。

その後、アササンは十字軍・イスラム世界双方の要人暗殺を中心に、イスラム世界・十字軍、双方と交戦を続けた。日本に於いて、山岳に親しんできた彼らは、険しい山岳地帯を拠点を選んだ。カスピ海南岸に連なるエルブールズ山脈に「鷲の巣城」を築いた。また、修験者だけあり、アササンの首領は「山の長老」と呼ばれた。彼らは、十字軍・イスラム世界双方の有力者たちを震え上がらせていたが、AD1250年、フラグ率いるモンゴル軍によって、あっさりとやられてしまった。

ということになっているが、いくら相手が無敵のモンゴル軍でも、天狗がそんなにあっさりやられるわけがない。真相はこうだ。任務を果たしたと考えた彼らは、トバルカインに頼んで日本に帰還したのだ。空っぽの鷲の巣城を発見したモンゴル軍は、アササン教団を全滅させたと公言した。これにより、もともと最強と知られていたモンゴル軍の株も上がったわけだ。

■AD1125年 「サラディン誕生」

AD1125年に神聖ローマ帝国の「ザーリアー朝」が滅ぶと、サリ家は、22年後に「第2次十字軍」の行軍に紛れてイスラム世界に旅立った。サリ家は、10歳のサラディン（AD1137年生）を連れ、神聖ローマ帝国からクルディスタンに移住した。サラディンの名の由来はシェルデンである。「第1次十字軍」にも参加したサリ家の残党であるサラディンが、イスラム世界の王になり、「第3次十字軍」と戦ってキリスト教徒に英雄と呼ばれたことは興味深い。更に、

サラディンが仕えたアレppoの君主ヌーレッディーンは碧眼・金髪の男だったと言われている。サラディンだけでなく、彼もサリ家に関係が深い人物だったのだろう。

■AD1273年 「聖フェーメ団誕生」

世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った葉山修験は、神聖ローマ帝国治世下のヴェストファーレンに移住した。彼らは「聖フェーメ団」を結成した。フェーメの名の由来は葉山である。葉山=ハマ=ヒャマ=フェーメとなる。彼らは、街にうごめく悪を狩り、権力者に畏怖された。彼らは、ナポレオンがドイツに侵攻したAD1811年まで存続した。

■AD1502年 「阿蘇講誕生」「鷺津氏誕生」

アササン教団は、トバルカインの計らいにより、阿蘇山に帰還した。AD16??年、彼らは、加藤清正に呼応して山上本堂を修復し、三十五坊を復興して「阿蘇講」を開いた。また、イラン人の顔をした彼らは日本人と混合し、アササンの要塞「鷺の巣城」を由来に「鷺津氏」を称した。鷺+巣=鷺巣（わしず）=鷺津（わしづ）となる。

■AD1614年 「薔薇十字団誕生」

世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った英彦山修験は、神聖ローマ帝国領内に侵入した。彼らは、「薔薇十字団」を結成した。薔薇十字団の首領クリスチャン・ローゼンクロイツ（106歳亡）のモデルは修験者として知られる常陸坊海尊（108歳亡）である。

また、薔薇十字団の名の由来は、英彦山修験の一拠点松尾山の名産品「薔薇」と「十字」の組み合わせである。彼らは、怪文書「全世界の普遍的かつ総体的改革」「友愛団の信仰告白」「化学の結婚」を流布して世間を騒がせ、現在に於いても尚、オカルトファンの夢を掻き立ててやまない。これらの怪文書は、3冊まとめて「薔薇十字団の宣言書」と呼ばれている。

■AD1696年 「天台修験別格本山誕生」

その後、薔薇十字団は目立った活動もせず、トバルカインの計らいで日本に帰還した。一方、彼らが留守の間、英彦山修験は焼き討ち・寺領廃止によって衰微していた。だが、薔薇十字団の帰

還をもって英彦山は「天台修験別格本山」となり、AD1696年に「英彦山神宮」が建立された。

■AD17世紀 「フルイストゥイ派誕生」

世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った出羽修験は、ピョートル大帝が統治するロシア帝国に入植した。ヴォルガ河上流に根付いた彼らは、「フルイストゥイ派」を形成した。フルイストゥイの名の由来は「古い死体」である。古い死体＝フルイシタイ＝フルイストゥイとなる。

古い死体とはミイラ、つまり、出羽三山の聖地に収められている奥州藤原氏3代のミイラのことである。これがフルイストゥイ派の正体が出羽修験である証に他ならない。彼らは、淫靡で残虐な密儀集団として知られ、「罪を犯せば犯すほどより深く悔い改めることができる。真の意味で救済されるにはより罪を犯すべし」ということを旨にしていた。だが、ピョートル大帝の背後には古儀式派がいた。そのため、フルイストゥイ派を正義と認定した古儀式派は、あることないこと風評を撒き散らしたに過ぎない。

■AD1733年 「スコプチ誕生」

食行身禄なる修験者は富士山北口7合目で断食行に入り、そのまま入定...と見せかけ、世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った、ロシアに渡った富士修験は「スコプチ」を創始するコンドラティ・セリワノフを称した。スコプチの名の由来は修験と富士の組み合わせである。修験+富士＝シュゲフジ＝スコプチとなる。

セリワノフは、「諸悪の根源は肉欲」であるとし、それを根絶するために「人は去勢すべきだ」と説いたという。しかし、当時のロシア帝国は、古儀式派に属するエカチェリーナ2世の治世だった。そのため、彼らはあることないこと風評を撒き散らされたのだ。指導者アンドレイ・イワノフは、13人の信者を去勢したという冤罪によってシベリアに流され、教祖セリワノフは100歳で亡くなるまで監獄で過ごした。

■AD1776年 「イルミナティ誕生」

世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った巖島弥山修験に属する太光山・千光寺の修験者は、バイエルンに移住した。修験者たちは、アダム・ヴァイスハウプトを称した。彼は、AD1776年に「バイエルン啓明結社（イルミナティ）」を設立した。イルミナティの名の由来は太光山や千光寺の「光」、またイルミナティが言う「知の炎」の由来は千年

消えない常火堂の「消えずの霊火」である。

■AD1785年 「弥山大聖院誕生」

イルミナティを結成した修験者たちは多くの知識人を取り込むことに成功。ヨーロッパの中心に位置するバイエルンに拠点を据えてヨーロッパに覇を唱える準備をしていたが、AD1784年から1785年にかけて、バイエルン王国（というよりはカトリック）から3度の禁止令を通達された。これを機に、巖島弥山修験の人々はイルミナティを解散して日本に帰還した。広島に帰還したイルミナティの残党は、「弥山大聖院」を建てている。

■AD1800年 「カルボナリ誕生」

世直しのため、トバルカインのテレポート装置によって日本を発った木曾御岳修験は日本を発ち、イタリアに移住した。彼らは、AD1800年代初頭に「カルボナリ」を設立した。カルボナリは、その名から「炭焼きの結社」だと考えられているが、実際の名の由来は修験道の護摩祈祷である。天狗の祖はサルディーニャ島を初めて「サルディニャ」と命名した人々だ。そのため、カルボナリは「サルディーニャ王国」のサヴォイア家と連合してイタリア王国の独立に関与した。

カルボナリは、祖を同じくするサルディーニャ人の血統にカルボナリ入党を打診したため、会員数はあっという間に30万～60万を超えた。カルボナリは、「青年イタリア」のマッツイーニ、「赤シャツ隊」のガリバルディと組んだ。カルボナリは、AD1820年、ナポリ軍を巻き込んで一斉蜂起して「ナポリ革命」を起こし、翌年にサルディーニャ軍の決起を指導して「ピエモンテ革命」を指揮した。

また、AD1821年にはフランス支部「シャルボンヌリー」を創立し、AD1830年に市民、学生、労働者と連携してパリで「フランス7月革命」に関与した。また、翌年には教皇領、ボローニャ、モデナで蜂起して「中部イタリア革命」を指揮するが、オーストリア軍に敗北した。

■AD1814年 「フィリキ・エテリア誕生」

AD1758年、ジュンガル大虐殺を機に、ウイグル人がモンゴルからオスマン・トルコ治世下のギリシアへ移住した。この時のジュンガル・ウイグル人の子孫がギリシアに秘密結社を結成することになる。それが「フィリキ・エテリア」である。フィリキ・エテリアの名の由来はフリギアとイタリアの組み合わせである。フリギアからイタリア（ローマ）を支配していた「ディニュー

ソス密儀」に因んでいるのだ。

解散したばかりのイルミナティ（松尾山修験千光寺）は、世直しのために参加した。しかし、心を読む装置が開発されていなかった当時、彼らは「フィリキ・エテリア」がタナトスの連合体だということを知らなかった。

「フィリキ・エテリア」には、テンプル騎士団、ドン・コサック、マラーター同盟（マルタ騎士団）などのタナトス一族に属する集団が参加していた。しかし、ロシア帝国の援助を得るのに失敗したフィリキ・エテリアはAD1822年に解散し、マラーター同盟は2つに分離して、一部はアイルランド（IRA）に、一部はコーカサス（カフカース首長国）に移住している。また、イルミナティも2つに分離し、一部は日本（弥山大聖院）に帰還し、一部はスペイン（バスク祖国と自由）に移住した。

■AD1832年 「扶桑教誕生」

ロシア人の顔をしたスコプチの残党は、富士修験に合流した。現地人と混合した彼らは、富士修験と共に「富士一山講社」を築いた。その後、彼らは「富士一山教会」に改名し、AD1875年に太祠を建立して「扶桑教会」を称した。その後、AD1882年に扶桑教会は教派神道の一派として独立し、経典「扶桑教」を発行し、「扶桑教」となった。傘下の丸山教会が離脱すると、扶桑教の勢力は半減したが、信者は4万5千人を数えている。

■AD1869年 グレゴリー・ラスプーチン生誕

その名からラスプーチンはもともとはスコプチに席を置いていた富士修験の子孫だということがわかる。ラスプーチンの名の由来は「富士の龍神」である。龍神+富士=リュジフージ=ラスプーチンとなる。後に、フルイストゥイ派に席を置いた彼は、単独でロマノフ家に取り入り、ロシア帝国の篡奪を画策していたと考えられる。

■AD1911年 「黒手組誕生」

黒い手は「炭で汚れた手」を意味している。つまり、黒手組はカルボナリの後身である。カルボナリ時代、オーストリア帝国に敗北した彼らは、オーストリアに一矢報いたいと考えていた。ということで、タナトスと知らずに白人列強と組んだ黒手組は、ハプスブルグ家（オーストリア帝国）、オットマン家（オスマン・トルコ帝国）、ホーエンツォレルン家（プロイセン帝国）の掃討を旨に、セルビア皇太子夫妻を襲撃した。「第一次世界大戦」のはじまりである。オットマン家、ハプスブルグ家は、黒手組の思惑通り、見事に滅んだ。ナポレオン皇帝に次ぐ、英雄時代

の終焉である。

■AD1953年 ニキータ・フルシチョフ、ソ連邦第4代最高指導者就任

フルシチョフの名の由来はフルイストゥイである。フルイストゥイ＝フルストゥイフ＝フルシチョフとなる。フルイストゥイ派は、日本から来た出羽修験の人々がロシアに築いた邪教集団である。フルイストゥイの名の由来は「古い死体」である。古い死体とはミイラを意味しているが、ミイラといえば奥州藤原氏のミイラを納めている出羽三山である。フルシチョフは、タナトスの手先としてスターリン批判を繰り返して東欧各地を動揺させ、中国との間にイデオロギー論争を生じさせた。また、フルシチョフはAD1959年にアメリカを訪問した。彼は、アイゼンハワー大統領を差し置いてデン人人と接触を持ち、その後は、ロシア正教会の聖堂を3割方破壊してロシアを内側から蝕み、一方ではインドに武器を援助して中国と交戦させた（中印国境紛争）。

■AD1993年 ポール・ニューロップ・ラスムセン、第38代デンマーク首相就任

ラスムセンの名の由来は龍神と魔神の組み合わせである。龍神＋魔神＝リュシ＋マシン＝ルシマセン＝ラスムセンとなる。つまり、彼らは富士修験の子孫だと考えられる。

■AD2001年 アナス・フォー・ラスムセン、第39代デンマーク首相就任

■AD2009年 ラース・ロッケ・ラスムセン、第40代デンマーク首相就任

ラース・ロッケ・ラスムセンは、第41代トーニング首相の後に、再度、AD2015年にデンマーク首相に返り咲いている。

◆ゾロアスター（セロス）の歴史

■BC32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■BC32世紀 「セロス誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したティルスは、シルックと共にマヤに移住した。彼らは、この時に「セロス」を築いている。セロスの名の由来はシルックとティルスの組み合わせである。シルック+ティルス=シルス=セロスとなる。

■BC19世紀 「海の民の大航海時代」

■BC19世紀 「トゥルシア人誕生」

「海の民の大航海時代」に参加したセロス人（ティルス）は、ベリーズ人（ホルス）と共にマヤで船団に加わった。セロス人は、イランに入植して「トゥルシア人」を名乗り、海の民の連合国、伝説の「ベーシュタード王国」を築いた。トゥルシアの名の由来はティルスである。ティルス=ティルシア=トゥルシアとなる。

■BC19世紀 「ゾロアスター（ツアラストラ）誕生」

トゥルシア人は、ベーシュタード王国を訪れたトラキア人と連合した。この時に「ゾロアスター（ツアラストラ）」が誕生した。ツアラストラの名の由来はセロスとトラキアの組み合わせである。セロス+トラキア=セロストラ=ツアラストラとなる。

■BC1200年 「サラスヴァティー誕生」

トロイア、ミケーネ、ヒッタイト帝国が滅ぶと、トゥルシア人は彼らをイランに導いた。この時、セロス人はヒッタイト人と組んで「サラスヴァティー」を生んだ。サラスヴァティーの名の由来はセロスとハッティ（ヒッタイト）の組み合わせである。セロス+ハッティ=セロスハッティ=サラスヴァティーとなる。

■BC1027年 「シュレースヴィヒ誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機に、イランを脱出したセロス人は、ユトランド半島に入植して「シュレースヴィヒ」を建設した。シュレースヴィヒの名の由来はサラスヴァティーである。サラスヴァティー＝サラスヴァヒ＝シュレースヴィヒとなる。しかし、後年、ゲルマン人の大移動により、シュレースヴィヒを脱出した彼らは、「シラジ人」としてスワヒリに再登場し、ガリアに因んで「キルワ王国」を建設する。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 7 5 年 「シーラーズ誕生」

「ゲルマン人の大移動」が始まると、チューリングア族を離脱したトゥルシア人は故地イランに逃亡した。彼らは「シーラーズ」を建設したシーラーズの名の由来はシュレースヴィヒである。シュレースヴィヒ＝シューレース＝シーラーズとなる。

■ A D 3 7 5 年 「シラジ人誕生」「キルワ王国（前身）誕生」

シーラーズ人は、商人としてイランとスワヒリを往来し、「シラジ人」を称した。シラジの名の由来はシーラーズである。シラジ人は、スワヒリに伝説の王国「キルワ」を建てた。キルワの名の由来はガリアである。ガリア＝ガリワ＝キルワとなる。

■ A D 3 7 5 年 「チェーラ人誕生」

スワヒリ、アラビア、イラン、インドを往来していたシラジ人はラーシュトラク時代の故地インドに入植し、「チェーラ人」となった。チェーラの名の由来はシーラーズである。シーラーズ＝チェーラーズ＝チェーラとなる。

■ A D 6 4 2 年 「ルス人誕生」

サーサーン朝がイスラム帝国の侵攻によって滅ぶと、シーラーズ人は、故地シュレースヴィヒを目指してイランを離れ、ヨーロッパを北上した。この時に、バルト海でリューリク、スウェード人、ワリアギと知り合ったシーラーズ人は、彼らの軍事連合に参加し「ルス人」を称した。ルスの名の由来はセロスである。セロス＝ロス＝ルスとなる。ルスの名は「ロシア」の語源でも

ある。

■ A D 8 世紀 「ザイール誕生」

チェーラ人は A D 8 世紀にチャールキア王朝が滅ぶと、インドを出てアフリカ大陸に向かった。南アフリカを周航してコンゴに至った彼らは現地をザイールと命名した。ザイールの名の由来はチェーラである。チェーラ=チェイール=ザイールとなる。

■ A D 9 7 3 年 「ズイール朝誕生」

その後、北アフリカに移ったザイール人は、「ファティマ朝」の支配層に参加した。A D 9 7 3 年、ブルッギーン・イブン・スィーリが初代君主に即位し、チュニジアに「ズイール朝」を開いた。ズイール、スィーリの名の由来はザイールである。

■ A D 9 7 3 年 「世良氏誕生」

ラーシュトラクータ朝が滅ぶと、セロス人の系統に属するラーシュトラクータの人々は日本に移住した。ラジア人、トラキア人は九州に入植したが、セロス人は瀬戸内海に入植した。インド人の顔をしたセロス人は現地人と混合して「世良氏」を称した。世良の名の由来はセロスである。セロス=セラス=世良となる。

■ A D 9 ?? 年 「セルジューク家誕生」

その後、カニクはズイール朝のチェーラ人と組んで「セルジューク」を称し、騎馬民族を統合して騎馬軍団を組織した。セルジュークの名の由来はセロスとチャールキアの組み合わせである。セロス+チャールキア=セロスキア=セロスーキア=セルジュークとなる。

■ A D 1 0 4 1 年 カーヴルト・ベグ、初代スルタンに即位 「セルジューク朝誕生」

セルジューク家のカーヴルト・ベグは、セルジューク朝初代スルタンに即位した。セルジューク朝は、コラズム、イラン、アナトリア、シリアに渡って広大な領土を誇った。一方、ビザンツの領土を奪ったため、セルジューク朝はビザンツ帝国を弱体化に導いたが、エルサレムを治めてい

たことから、約150年に渡る「十字軍」の脅威に晒された、その後、セルジューク朝は、モンゴル軍の侵攻を機にAD1243年に滅亡している。

■AD1243年 「佐々氏誕生」「志方氏誕生」

AD1243年、セルジューク・トルコ帝国が滅ぶと、セルジューク家は九州を訪れた。この時、彼らは「佐々氏」「志方氏」を生んだ。佐々、志方の名の由来はセルジュークである。セルジューク=セルジュ=セルシュ=佐々となり、セルジュークトルコ=ジュークト=シュクト=志方となる。佐々氏、志方氏は「倭寇」に参加した。

■AD1892年 ブルーノ・シュルツ生誕

■AD1922年 チャールズ・シュルツ生誕 「スノーピー誕生」

■AD1926年 サティヤ・サイ・ババ（サティヤ・ナーラーヤナ・ラージェ）生誕

■AD1947年 トム・ショルツ生誕 「ボストン誕生」

■AD1955年 世良公則生誕

ハダメの歴史

◆秦氏（ハダメ）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「ハダメ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したディンカは、現ケニアに「マサイ」、現タンザニアに「ムルング」、現ソマリアに「ハダメ」「イサック」を生んだ。ハダメは、ソマリア人の姿をしていた。

■40万年前 「第1次ディンカの大移動時代」

■40万年前 「ポーツマス誕生」「アドリア誕生」「アムステルダム誕生」「ロッテルダム誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したハダメは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「ポーツマス」「アドリア」「シェラネバダ」「メッサビ」などである。ポーツマスの名の由来はハダメとマサイの組み合わせ、アドリアの名の由来はハダメとシルックである。ハダメ+マサイ=ハダマサイ=ハーダマサ=ポーツマスとなり、ハダメ+シルック=ハダリャク=アドリアとなる。アムステルダムやロッテルダムは、もっと後世に築かれるが、ダムの名の由来はハダメである。

■7万年前 「第1次ウラヌスの大航海時代」

■7万年前 「テミス誕生」

「第1次ウラヌスの大航海時代」の参加者がオーストラリアから地中海を訪れると、ハダメはマサイと組んで「テミス」を生んだ。テミスの名の由来はハダメ、マサイの組み合わせである。ハダメ+マサイ=ダメサイ=タメサ=テミスとなる。テミスは、ロンドンを流れる「テムズ川」の由来であるが、それにより、彼らが古代のブリテン島ので生まれたことがわかる。その後、テミ

スはティタン神族に参加している。

■ 7万年前 「ハデス誕生」「デメテル誕生」

「第1次ウラヌスの大航海時代」の参加者がオーストラリアから地中海を訪れると、ハダメはマサイと組んで「ハデス」を生んだ。ハデスの名の由来はハダメとマサイの組み合わせである。ハダメ+マサイ=ハダサイ=ハデスとなる。ハデスはテミスと同じ組み合わせであるが、「テミス+ハデス」ということになる。その後、ハデスはオリンポス神族に参加している。また、テミスはタルタロスと組んで「デメテル」を生んでいる。デメテルの名の由来はハダメとタルタロスの組み合わせである。ハダメ+タルタロス=ダメタル=デメテルとなる、デメテルも、オリンポス神族に参加している。

■ 1万3千年前 「テミスの大航海時代」

■ 1万3千年前 「ドゥムジ誕生」

「テミスの大航海時代」に参加してメソポタミアに逃れたテミスは、現地人と交わって「ドゥムジ」を生み、神々の集団アヌナキに参加した。ドゥムジの名の由来はテミスである。テミス=デミズ=ドゥムジとなる。

■ BC539年 「ハドラマウト王国誕生」

共和制ローマが台頭すると、エトルリア人はイスラエルに移住した。この時に「エドム王国」が生まれた。同じ頃、エラム王国を喪失したエラム人は、ソマリアに移住してハダメ族と連合した。エドム人は、このハダメ族とエラム人の連合に参加し、3者は共同で「ハドラマウト王国」をアラビア半島南部に築いた。ハドラマウトの名の由来はハダメ、エラム、エドムの組み合わせである。ハダメ+エラム+エドム=ハダラムエド=ハドラマウトとなる。

■ BC206年 ハダメ族、秦氏と合体

「秦」が滅ぶと、秦氏はラハンウェイン族の後を追いつ、中国を後にした。ソマリアに移住した秦氏は、ここでハダメ族と知り合い、連合体を築いている。この時に、「秦(シナ)」が「秦(

ハタ)」と読まれるようになった。ハタ（秦）の名の由来はハダメである。ハダメ＝ハタメ＝秦（ハタ）となる

■BC206年 「秦韓誕生」

秦氏は、ラハンウェイン族の構成部族である衛氏、韓氏を連れ、ソマリアを離れて朝鮮半島に移住した。彼らは「衛氏朝鮮」「韓」を築いた。その後、秦氏は「秦韓（唇韓）」を築き、韓から分かれた2つの国、馬韓、弁韓と共に「三韓」と呼ばれた。

■BC206年 「グアナファト誕生」

一方、朝鮮半島に残留せずに太平洋を渡った秦氏は、メキシコに上陸し、拠点を「グアナファト」と命名した。グアナファトの名の由来はキナ（秦）とハタ（ハダメ）の組み合わせである。キナ＋ハタ＝キャナファト＝グアナファトとなる。

■BC206年 「コナート誕生」

更に、メキシコを後にしたグアナファト人は北アメリカ大陸を北上し、アイスランドを経てアイルランドに辿り着いた。この時、彼らは上陸地点を「コナート」と呼んだ。コナートの名の由来はグアナファトである。グアナファト＝ガナハト＝コナートとなる。AD116年頃には、既に「コナート王国」がアイルランドに築かれていた。

■AD1世紀頃 「タミール人誕生」

ハドラマウト王国が滅ぶと、ハドラミーは南インドに足場を得て「タミール」を称した。タミールの名の由来はハドラミーと同じくハダメとエラムの組み合わせである。ハダメ＋エラム＝ダメエラ＝タミールとなる。

■AD1世紀頃 「穂積氏誕生」

一方、一部ハダメ族はインドから日本に足を伸ばし、現地人と混合して「穂積氏」を形成している。穂積の名の由来はハダメである。ハダメ＝ハザメ＝穂積（ほずみ）となる。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ B C 2 9 6 年 「ワルメイ川誕生」

中山国が趙の攻撃によって滅ぶと、エラム人、ハダメ族は「大和人の大航海時代」に参加して太平洋を横断して古代ペルーに移住した。彼らは拠点である河川に「ワルメイ」と命名した。ワルメイの名の由来はエラムとハダメの組み合わせである。エラム+ハダメ=エラメ=ワルメイとなる。エラム人、ハダメ族は、後にペルーを訪れるマオリ族と連合して「ワリ帝国」を建設する。

■ A D 6 4 8 年 秦河勝、常世神を皆殺しに

常世（トコヨ）の名の由来はダキアである。シルクロードを通過したヴァルダナーは蚕の幼虫を本尊に設定して農民たちから有り金を巻き上げることを思いついた。人々は喜びながら全財産を常世神に納めたが、これを淫祀と見抜いた秦河勝が常世神を壊滅させ、解放された農民たちから真の英雄として祭り上げられた。金を取られて喜ぶ人間はいない。つまり常世神にインフラを支配された無力な農民たちは喜ぶフリをしていたのだ。河勝はそれを見抜いた。さもなければ一旦離反者（神を信じない不信心者）として教団にマークされた信者は、家族であれ、友人であれ、そして世間であれ、完全に無視されてしまうのだ。それは、生活・自由の保障を喪失すること、孤独のまま野垂れ死にすることを意味した。

■ A D 8 5 1 年 「ケネディ誕生」

A D 8 5 0 年、黒い異邦人デーン人がダブリンを襲撃すると、コナート人はデーン人の側に付いた。翌年、ノルウェー王オーラフが率いるヴァイキング軍に敗北すると、コナート人はデーン人と共にアイルランドを離れた。コナート人は、一部がスコットランド西部に移住した。この時に「ケネディ」の名が生まれた。ケネディの名の由来はコナートである。コナート=コナーティ=ケネディとなる。

■ A D 9 9 7 年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「金田氏誕生」

「レイフ・エリクソンの大航海時代」に参加したコナート人は、日本人と混合して「金田氏」を形成した。金田の名の由来はケネディ、或いはコナートである。コナート人は、他にも「金（かね）」が付く「金村」「金本」「金山」などの姓を多く残している。

■AD9??年 ハーデクヌーズ1世、デンマーク王に即位

AD851年、デーン人と共にアイルランドを離れ、デンマークに移住したコナート人から「ハーデクヌーズ1世」が生まれた。ハーデクヌーズの名の由来はハダメとキナの組み合わせである。ハダメ+キナ=ハダキナ=ハーダキナズ=ハーデクヌーズとなる。

■AD1028年 クヌード1世、デンマーク王に即位 「クヌード帝国誕生」

ハーデクヌーズ1世の子息ゴームは能登族の系統である。ゴームは、「ゴーム・デン・ガムレ家」を創始した。その後、そのゴーム・デン・ガムレ家から正統なハーデクヌーズの血を引く「クヌード1世」が生まれた。クヌードの名の由来はコナートである。コナート=クナート=クヌードとなる。イングランド、デンマーク、ノルウェーに至る地域を掌握したクヌード1世の帝国は、北海帝国と呼ばれた。

■AD11世紀 「ペルー人の大航海時代」

■AD11世紀 「波多美氏誕生」

「ペルー人の大航海時代」に参加した一行は日本人と混合した。エラム人は「有馬氏」を称し、「波多美氏」を称したハタミ人、「毛利氏」を称したマオリ族と共に北九州に向かった、波多美氏の名の由来はハダメである。ハダメ=ハタメ=波多美となる。

■AD1370年 ティムール、初代皇帝に即位 「ティムール帝国誕生」

AD1213年、「和田合戦」を機に日本を脱出した和田氏は祖を同じくするタミルの地に落ち

延びた。その後、タミール人と化した和田氏はソグディアナに進出した。その後、AD1336年に和田氏の系統に属するティムールが誕生する。ティムールの名の由来はタミールである。ティムールは、ソグディアナを首都に強大な大帝国を打ち建てたが、AD1507年に滅亡してしまう。この後、ティムール王家はイランからインドネシアに移って「ティモール」を得る。

■AD1881年 セシル・B・デミル生誕

■AD1928年 ロジェ・ヴァディム生誕

■AD1943年 モハンマド・ハータミー生誕

イラン・イスラム共和国第5代大統領に就任している。1997年～2005年

■AD1948年 川勝平太生誕

■AD1958年 玉置浩二生誕 「安全地帯誕生」

■AD1967年 エレン・テン・ダム生誕

■AD2002年 「東ティモール民主共和国誕生」

マサイの歴史

◆釈迦（マサイ）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「マサイ誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したディンカは、現ケニアに「マサイ」、現タンザニアに「ムルング」、現ソマリアに「ハダメ」「イサク」を生んだ。マサイは、現マサイ族のような姿をしていた。

■40万年前 「第1次ディンカの大移動時代」

■30万年前 「メッサニア誕生」「メッサビ誕生」「セーヌ誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したマサイは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「シラクサ」「トラキア」「メッサニア」「サラミス」「メッサビ」「プリマス」「ポーツマス」「マルセイユ」「サンマロ」「セーヌ」などである。メッサニア、セーヌの名の由来はマサイとディンカの組み合わせ、メッサビの名の由来はマサイとハダメの組み合わせである。マサイ+ディンカ=マサインカ=マサイナ=メッサニア=サニア=セーヌとなり、マサイ+ハダメ=マサバ=メッサビとなる。

■7万年前 「第1次ウラヌスの大航海時代」

■7万年前 「ムネーモシュネー誕生」「ステンノ誕生」

「第1次ウラヌスの大航海時代」の参加者がオーストラリアから地中海を訪れると、マサイはクリュメネー、ウラニアーと組んで「ムネーモシュネー」を生んだ。ムネーモシュネーの名の由来はクリュメネー、マサイ、ウラニアーの組み合わせである。クリュメネー+マサイ+ウラニアー=メネーマサイニアー=ムネーモシュネーとなる。ムネーモシュネーの娘たちは「ムウサ」と

呼ばれたが、この名もマサイに由来している。その後、ムネーモシュネーはティタン神族に参加している。

一方、マサイはディンカと組んで「タウマス」「デイモス」を生んでいる。ディンカ+マサイ=テイマサ=タウマスとなり、ディンカ+マサイ=デイマサ=デイモスとなる。タウマスはポントスとガイアの子として、デイモスはアフロディテとアレスの子として知られている。また、マサイはディンカと組んで「ステンノ」を生んでいる。ステンノの名の由来はマサイとディンカの組み合わせである。マサイ+ディンカ=サイディン=サイデンノ=ステンノとなる。だが、ステンノはタナトスの掌中に落ち、一味の一角として「ゴルゴたち」と呼ばれた。

■ 1万3千年前 「メシェク誕生」

「マサイの大移動時代」に参加したマサイは、メソポタミアの地に「メシェク」を生んだ。メシェクの名の由来は「マサイク（マサイの人）」である。マサイク=メサイク=メシェクとなる。

■ BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ BC 7千年 「ミツライム誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したマサイ族は、北アフリカに入植した。彼らは、クリュメネーと連合し、北アフリカに「ミツライム」を生んだ。ミツライムの名の由来はマサイとクリュメネーの組み合わせである。マサイ+クリュメネー=マサリウメ=マチャリウメ=ミツライムとなる。

■ BC 32世紀 「ドルイド教の大航海時代」

■ BC 32世紀 「陸奥氏誕生」

「ドルイド教の大航海時代」に参加したメシュクは、日本に上陸し「陸奥氏」を生んだ。出雲国を離れた陸奥氏は、東北地方に入植し、拠点を「陸奥」と命名した。陸奥の名の由来はメシュキである。メシュキ=ムシュキ=陸奥となる。ドルイド教関連でストーンサークルを知っていた陸奥氏は、足跡として「大湯環状列石」など、小規模な遺跡を築いた。

■BC 21世紀 「長脛彦の大移動時代」

■BC 21世紀 「シャカ族誕生」

「長脛彦の大移動時代」に参加した陸奥氏は、人身御供の能登族を嫌い、モンゴルを離れてネパールに入植し、「シャカ族」を生んだ。シャカの名の由来はメシエクである。メシエク＝メシャカ＝シャカとなる。

■BC 1000年 「ムシュキ族誕生」

メシエクは、フリギア王国に「ムシュキ族」を生んだ。ムシュキの名の由来はメシエクである。メシエク＝ムシエク＝ムシュキとなる。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「マスカット誕生」

「フェニキア人の大航海時代」を経て、フリギア人の同盟者だったムシュキ族は、インダス流域からアラビア半島に移って「マスカット」の地を得た。マスカットの名の由来はムシュキである。ムシュキ＝ムシュキット＝マスカットとなる。マスカット人は後にモスクワを建設している。

■BC 566年 ゴータマ・シッダールタ誕生 「仏教誕生」

陸奥氏の後裔シャカ族から仏教の祖であるゴータマ・シッダールタが誕生した。しかし、父方はスッドーダナというサトゥルヌス由来の名を持っていた。つまり、当時のシャカ王国はサトゥルヌスの血統によって王位を篡奪されていた。ただ、シッダールタにシャカ族の血が甦り、能登族の血統バラモン教を批判して「仏教」を創始した。彼自身は、偉大な人物であったが、仏教は後にタナトス一族に篡奪されてしまう。

■AD 634年 「モスクワ誕生」

イスラム軍がアラビア半島を統一すると、一部ムシュキ族はオマーンを発ち、ロシアに移住して「モスクワ」を築いた。モスクワの名の由来はマスカットである。マスカット＝マスクワット＝モスクワとなる。

■AD1237年 「アストラハンの大航海時代」

■AD1237年 「メシコ族誕生」

「アストラハンの大航海時代」に参加したメシエクは、アステカに入植し、「メシコ族」となった。メシコの名の由来はメシエクである。メシエク＝メシエコ＝メシコとなる。メシコの名はメキシコの語源でもある。アストラハンの系統からは初代アステカ皇帝アカマピチトリ、第2代アステカ皇帝ウィツィリウィトルが輩出され、第4代皇帝にメシコ族の系統のイツコアトルが輩出されている。

■AD13世紀 「ニョロ帝国の大航海時代」

■AD13世紀 「松井氏誕生」「増井氏誕生」

「ニョロ帝国の大航海時代」に参加したマサイ族は、日本に上陸し、現地人と混合して「松井氏」「増井氏」などの名を生んだ。いずれの名もマサイが由来である。マサイ＝増井＝松井となる。

■AD1427年 イツコアトル、第4代アステカ皇帝に即位

■AD1440年 「ミスキート族誕生」

AD1440年、ワッシュテペック族出身のモクテスマが第3代アステカ帝国皇帝に即位した。ワッシュテペック族が天下を取ったことにより、アステカ族（アストラハン）、メシカ族（ムシュキ）はアステカ帝国を後にする。南方組のムシュキ族は現ニカラグアに移住し、逃亡奴隷と交わって「ミスキート族」を形成した。ミスキートの名の由来はマスカットである。マスカット

=マスカート=ミスキートとなる。

■AD1440年 「益子氏誕生」

イスラム軍がアラビア半島を統一すると、一部ムシュキ族は日本に向かったギルザイ族の船団に加わった。アラビア人の顔をしたムシュキ族は、日本人と混合して「益子」の姓を形成した。益子の名の由来はマスカットである、マスカット=マスコット=益子となる。

■AD1521年 松井忠次生誕 「松平康親誕生」

■AD1699年 「モスキート王国誕生」

AD1699年、ミスキート族は「モスキート王国」を築いている。モスキートを称しているとはいえ、「蚊」とは無縁である。ミスキート族は、スペイン人入植者を度々攻撃した。

■AD18??年 ジェスラン・ド・メスキータ生誕

メスキータの名の由来はモスキートである。メスキータは、不可能な世界の創造に熱中したM・C・エッシャーの師である。

■AD1922年 水木しげる生誕 「ゲゲゲの鬼太郎誕生」

水木の名の由来はミスキートである。ミスキート=ミズキート=水木となる、水木しげるは、ジャングルの描写に卓越しているが、これは身体に眠っていた、ミスキート時代を生きた先祖の記憶によるものだろう。

◆弥勒（ミツライム）の歴史

■BC 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■BC 7千年 「ミツライム誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したマサイ族は、北アフリカに入植した。彼らは、クリュメネーと連合し、北アフリカに「ミツライム」を生んだ。ミツライムの名の由来はマサイとクリュメネーの組み合わせである。マサイ+クリュメネー=マサリウメ=マチャリウメ=ミツライムとなる。

■BC 5千年 「セネガル人の大航海時代」

■BC 5千年 「マー・トゥーレス誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したミツライムは、アイルランドから古代ヨーロッパに移り、現ツールを訪れ「マー・トゥーレス」を築いた。マー・トゥーレスの名の由来はミツライムである。ミツライム=ミートゥーラ=マー・トゥーレスとなる。マー・トゥーレスは、後に「ツール」として知られるようになる。

■BC 5千年 「戦闘の神テュール誕生」

「セネガル人の大航海時代」に参加したミツライムは、ヴァン神族に参加して「戦闘の神テュール」を祀っている。テュールの名の由来はミツライムである。ミツライム=ミトゥライム=トゥーラ=テュールとなる。

■BC 5千年 「トロイア戦争」

■BC 5千年 「マー・トゥーレスの戦い」

■BC 5千年 「アイルランドの神々の大航海時代」

■BC 5千年 「太陽神ミトラ誕生」

「アイルランドの神々の大航海時代」に参加したミツライムは、メソポタミアに帰還し、「太陽神ミトラ」を祀った。ミトラの名の由来はミツライムである。ミツライム=ミトライム=ミトラとなる。その後、残念ながら、ミトラはローマ帝国時代にミトラスとして、タナトス（ドーリス人）によって篡奪されている。

■BC 32世紀 「第2次北極海ルート時代」

■BC 32世紀 「マトゥーラ誕生」

「第2次北極海ルート」に参加したミツライムは、エニセイ河流域に残留したが、その後、インドに南下して「マトゥーラ」を築いた。マトゥーラの名の由来はミツライムである。ミツライム=ミトゥーライム=マトゥーラとなる。

■BC 1027年 「マドゥラ王国誕生」

BC 1027年、「マハーバーラタ戦争」「十王戦争」の後に、パンジャブに入植し「マドゥラ王国」を建設している。マドゥラの名の由来はマトゥーラである。

■BC 521年 「マトゥーラ誕生」

ダリウス大帝の即位を機にイランを去ったマトゥーラ族（太陽神ミトラ）は、次にインドに赴いて「マトゥーラ」を築いた。彼らは、シューラセーナ人と連合し、マトゥーラをシューラセーナ王国の首都に設定した。

■BC 451年 インドから満州に移住

マガダ王国がガンジス流域を統一すると、シューラセーナ王国は滅び、シューラセーナ人とマトゥーラ人はインドを離れて満州に入植した。この時にシューラセーナ人は「粛慎」となる。そして、マトゥーラ人は「ヒットイト人の大航海時代」に参加して北アメリカに移住する。

■ B C 4 世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■ B C 4 世紀 「マイドゥー族誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」を経て、マトゥーラ族は現カリフォルニアで足を止めた。彼らは、そのまま現地人と混合して「マイドゥー族」となった。マイドゥーの名の由来はマトゥーラである。マトゥーラ=マイドゥーラ=マイドゥーとなる。マイドゥー族は「前田氏」の祖となる。

■ A D 1 0 世紀 「マヤ人の大航海時代」

■ A D 9 ? ? 年 「日奉氏誕生」

「マヤ人の大航海時代」に参加して現カリフォルニアを離れたマイドゥー族は、日本に上陸し、現地人と混合して「日奉氏」を成した。日奉の名の由来は太陽神ミトラである。太陽神（日）＋ミトラ（まつり）＝日奉となる。日奉宗頼は、武蔵七党「西党」の党祖として知られている。日奉氏の西党だけでなく、児玉氏（カドモス）の児玉党など、獣人ミマースの後裔が武蔵に集って「武蔵七党」を築いたことは興味深い。

■ A D 1 3 5 8 年 「前田氏誕生」

サキャパンディタの系統に属するサーキャ派の一部は、チベットを離れて三河国に移住した。この時に「前田氏」が生まれた。前田の名の由来は日奉氏の前身マイドゥー族である。マイドゥー＝マエドゥー＝前田となる。前田氏からは戦国時代に活躍した前田玄以、前田利家、前田利長などが輩出された。

■ A D 1 5 3 9 年 前田利家生誕

■ A D 1 9 1 8 年 ニコラス・マドゥロ生誕

ベネズエラ共和国第54代大統領に就任している。

ムルングの歴史

◆フランク（ムルング）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「ムルング誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したディンカは、現ケニアに「マサイ」、現タンザニアに「ムルング」、現ソマリアに「ハダメ」「イサック」を生んだ。

■40万年前 「第1次ディンカの大移動時代」

■40万年前 「ミラノ誕生」「リヨン誕生」「マルセイユ誕生」

「ディンカの大移動時代」に参加したムルングは、ヨーロッパ各地に拠点を得た。「ミラノ」「リヨン」「マルセイユ」「シェラモレナ」「サンマロ」「チューリングゲン」「ロアール」などである。「ミラノ」「リヨン」の名の由来はムルングであり、「マルセイユ」の名の由来はムルングとマサイの組み合わせである。ムルング＝ムルノ＝ミラノとなり、ムルング＝ムリヨン＝リヨンとなり、ムルング＋マサイ＝ムルサイ＝マルセイユとなる。

■7万年前 「第1次アルゴス号の大航海時代」

■7万年前 「ムル族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したムルングは、ミャンマーに移住した。この時、彼らは「ムル族」を称した。ムルの名の由来はムルングである。ムルング＝ムルとなる。

■7万年前 「トゥングル族誕生」「カレン族誕生」

「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したムルングはディンカと連合して、インドネシアに「トゥングル族」を生んだ。トゥングルの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=トゥングルとなる。また、ミャンマーに足場を得たトゥングル族は、「カレン族」を生んだ。カレンの名の由来はディンカとムルングの組み合わせであり、ムルングが主導していた。ディンカ+ムルング=カルン=カレンとなる。

■ 7万年前 「ケタガラン族誕生」「クーロン族誕生」

台湾に入植したトゥングル族（カレン族）は、単独で「クーロン」を称し、エレクトラと連合して「ケタガラン」を成した。クーロンの名の由来はカレンであり、ケタガランの名の由来はエレクトラとカレンの組み合わせである。カレン=カーレン=クーロンとなり、エレクトラ+カレン=クトカレン=ケタガランとなる。

■ 7万年前 「犬戒誕生」

セデック族（台湾）は、意気投合したトゥングル族（カレン族）と共にシベリアに移住した。両者は、ウリゲン、テングリ、エルリクなどの子孫である現地人と交わり「チュクチ」「ディングリング」を形成した。一方、カレン族は「犬戒（キロン）」を築いた。キロンの名の由来はカレンである。犬戒（キロン）は、黒龍江辺りに築かれた。「神統記」では、犬戒（カレン族）は「カロンの渡し守」と呼ばれた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ BC 30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■ BC 30世紀 「アルバ・ロンガ王国誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したムルングは、エジプトの途上、ソドム王国とゴモラ王国を築いたアルパクシャデと組んで「アルバ・ロンガ王国」を築いた。アルバロンガの名の由来はアルパクシャデ、ムルングの組み合わせである。アルパクシャデ+ムルング=アルパルング=アルバロンガとなる。アルパクシャデがアラビア半島を統治し、ムルングがランカー島を統治することで、アルバ・ロンガ王国は成立していた。アルバロンガ人は、アラビア半島でローマ人、サビ

二人、ラテン人と出会った。

■BC30世紀 「ランカー誕生」

アラビア半島に拠点があったアルバロンガ王国は、セイロン島に移住し、セイロン島を「ランカー」と命名した。ランカーの名の由来はロンガである。ロンガ＝ロンガー＝ランカーとなる。その後、タナトスの一族、ラクシャサ、魔王ラーヴァナがランカー島を征服する。マハーバーラタ戦争の一環である「ラーマヤナ」の舞台は、ランカー島とアラビア半島（アルバ・ロンガ）である。

■BC1134年 「カリंगा誕生」

魔王ラーヴァナがランカー島を支配すると、タナトス一族を嫌ったランカー人は、人跡未踏だった古代ジャワ島に移住し、「カリंगा」と命名した。カリंगाの名の由来はディングリングである。ディングリング＝グリング＝カリंगाとなる。カリंगाの名はムルングが主導している証である。カリंगा王国は、「マハーバーラタ戦争」にも関わっていた。

■BC1134年 「パレンケ誕生」

魔王ラーヴァナがランカー島を支配すると、タナトス一族を嫌ったランカー人は、ジャワ島を経て、太平洋を横断した。彼らは、遠くユカタン半島にまで足を伸ばし、「パレンケ」を築いた。パレンケの名の由来はアルバロンガである。アルバロンガ＝バロンガ＝パレンケとなる。

■BC7世紀 「カリंगा王国誕生」

「フェニキア人の大航海時代」ニ影響され、ジャワ島からインド東岸に移住したカリंगा人は「カリंगा王国」を築いた。カリंगा王国は、正体不明ながら、経済大国として繁栄した。カリंगा王国は、ヴァカタカ朝がデカン高原を制覇するAD5世紀まで続いた。しかし、その後も折に触れ、AD7世紀、AD11世紀と、何度か復活を遂げている。

■BC523年 「夜郎誕生」

シスナーガ朝が始まり、マガダ王国が強大になると、ムルングは、雲南に移住し「夜郎（イエラン）」を築いた。イエランの名の由来はムルングである。ムルング＝ウルング＝イエラングとなる。夜郎は、BC 27年に滅んでいるが、夜郎は同族の国であるカリングと共栄共存したと考えられる。

■ BC 4 世紀 「ヒッタイト人の大航海時代」

■ BC 4 世紀 「フランク族誕生」

「ヒッタイト人の大航海時代」に参加したパレンケ人は、マヤからヨーロッパに移り、ライン河畔に「フランク族」を形成した。フランクの名の由来はパレンケである。パレンケ＝ハレンケ＝フランクとなる。

■ BC 1 4 6 年 「ランゴバルト人誕生」

ローマとの抗争が激化すると、一部のフランク人はゲルマニアを逃れてバルト海に移住した。彼らは、バーラタ族と連合して「ランゴバルト人」を形成した。ランゴバルトの名の由来はフランクとバーラタ（エピアルテース）の組み合わせである。フランク＋バーラタ＝ランクバラタ＝ランゴバルトとなる。

■ AD 1 1 4 年 「慕容部（ムーロング）誕生」

「ポントス人の大航海時代」に参加せずに、陸路を選んだポントス人、パルティア人は正統な鮮卑を追放し、騎馬軍団を篡奪した。この時、犬戒（キロン）に住んでいたムルングは、慕容部（ムーロング）を称した。ムーロングの名の由来はムルングである。ムルング＝ムールング＝ムーロングとなる。その後、慕容部は宇文部（ポントス人）、托跋部（パルティア人）の鮮卑に参加している。

■ AD 4 7 1 年 「鮮卑の大航海時代」

■ AD 4 7 1 年 慕容部、ピクトランドに入植

「鮮卑の大航海時代」に参加した慕容部は、ピクトランドに入植した。彼らは、そこで「鮮卑の大航海時代」の同盟者であるカイトと連合を組んだ。

■AD568年 アルポイン、初代王に即位 「ランゴバルト王国誕生」

ランゴバルト人は、東ゴート王国を滅ぼした東ローマ帝国を退けてイタリア半島に「ランゴバルト王国」を築いた。AD774年になると、シャルルマーニュ大帝率いるフランク王国軍の侵攻によって滅んでいる。

■AD751年 ピピン、初代フランク王に即位 「カロリング朝誕生」

■AD768年 シャルルマーニュ、第2代フランク王に即位

■AD843年 シャルル1世、初代西フランク王に即位 「西フランク王国誕生」

■AD843年 ロタール、初代中フランク王に即位 「中フランク王国誕生」

■AD843年 ルートヴィヒ、初代東フランク王に即位 「東フランク王国誕生」

■AD877年 隆舜、第12代南詔王に即位

夜郎の残党は「隆氏（ロング）」を生んだ。ロングの名の由来はムルングである。ムルング＝ムロング＝ロングとなる。隆舜は、第12代南詔王に即位し、「大封民」と呼ばれた。治世はAD897年まで続いた。

■AD911年 コンラード1世、第5代東フランク王に即位 「フランコニア家誕生」

■AD987年 「パレンゲー家誕生」

AD888年、パリ伯ウードに西フランク王位を篡奪されると、フランク人はバルセロナに移住して「パレンゲー」を称した。パレンゲーの名の由来はフランク人の祖パレンケである。彼らは、バルセロナ伯ラモン・ボレイに接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのがバルセロナ伯を篡奪したパレンゲー・ラモン1世である。

■AD1150年 ラモン・バランゲー4世、アラゴン王女と結婚 「アラゴン連合王国誕生」

AD1150年、ラモン・バランゲー4世はアラゴン王女と結婚することにより、「アラゴン連合王国」を手中にした。アラゴン連合王国は、サルディーニャ島、シチリア島を領有した。

■AD1195年 「マリーン王朝誕生」

ヴァイキング時代、慕容部は、カイトと共にピクトランドを発ち、モロッコに入植した。彼らは、「マリーン朝」を開いた。マリーンの名の由来は、慕容部（ムーロン）である。ムーロン＝マーロン＝マーリンとなる。AD1463年、ポルトガル王国がカサブランカを占領すると、7年後にマリーン朝は滅んだ。

■AD1230年 「フランシスコ会誕生」

AD1230年、カスティーリャ王国とレオン王国が合同すると、パレンゲー家はウンブリアに入植した。AD13世紀、アッシジのフランシスコが誕生した。フランシスコの名の由来はフランスシカ（フランスの人）である。フランシスコは後に「フランシスコ会」を創設する。

■AD1235年 スンジャータ・ケイタ、初代帝王に即位 「マリ帝国誕生」

AD1224年、アルモハード帝国が崩壊し、タナトス一族によるグラナダ王国が建つと、マリーン朝の残党は南下し、ガーナ王国に移住した。その後、スンジャータ・ケイタが帝王に即位し、「マリ帝国」が建てられた。マリの名の由来はマリーンであり、ケイタの名の由来はカイトである。カイト＝ケイト＝ケイタとなる。

■AD17??年 「カラングスム王国誕生」

AD1555年、武田信玄に敗北した木曾義康は、バリ島に移住した。その後、カリंगाを後にしたカリंगा人は、木曾氏と組んで、バリ島に「カラングスム王国」を築いた。バリ8王国のひとつに数えられる。

■AD1710年 「クルンクン王国誕生」

カリंगा人は、デワ・アグン・ジャンベと共に「クルンクン王国」を築いた。クルンクンの名の由来はカリंगाである。カリंगा=カリガン=クルンクンとなる。

■AD1753年 「シルカル誕生」

シュリーヴィジャヤ時代のジャワ島に潜伏していたカリंगा人は、オランダ東インド会社によって植民地化されたジャワを離れ、故地であるカリंगाに帰還した。この時、彼らはカリंगाの跡地に「シルカル」を築いた。シルカルの名の由来は「シュリーヴィジャヤのカリंगा」である。シュリーヴィジャヤ+カリंगा=シュリカリ=シルカルとなる。

■AD1810年 ラダマ1世、マダガスカル王に即位に即位 「メリナ王国誕生」

AD1470年、マリーン朝が滅ぶと、マリーン王家は北アフリカを去り、西アフリカ、南アフリカを周航してマダガスカル島に上陸した。AD16世紀に「アンドレアナ王国」を建てたが、後にラダマ1世が初代即位して「メリナ王国」を建国している。メリナの名の由来はマリーンである。マリーン=マリヌ=メリナとなる。AD19世紀、大英帝国とフランスがマダガスカルを巡って争っていたが、メリナ王家はこれに抵抗した。

■AD1830年 オーギュスト・ブランキ生誕 「季節協会誕生」

メリナ王国にフランス軍が訪れると、ブランキはフランスに帰還した。この時に「ブランキ」を称した。ブランキの名の由来はフランク、或いはパレンケである。彼は、故国メリナ王国を救うために「季節協会（四季の会）」を設立し、革命運動を指揮した。

■AD1839年 季節協会、警察を襲撃

ブランキは、「真の市民革命を起こそう」と呼びかけ、パリ市庁舎と警察署を襲撃した。逮捕されたブランキは、死刑判決を受けたが、減刑されて釈放された。彼はすぐに二月革命に参加し、王制を廃したが臨時政府と対立して逮捕された。アフリカに追放された彼は、帰還するとナポレオン3世に逮捕され、33年を獄中で過ごした。ブランキの不屈の闘志は民衆に賞賛され、彼が議員に立候補すると、絶大な人気を博し、当選した。

■AD1890年 フリッツ・ラング生誕

ラングの名の由来はフランク、或いはパレンケである。

■AD1892年 フランシスコ・フランコ生誕

フランコの名の由来はフランクである。フランコは、AD1936年にスペイン国家主席に就任し、AD1939年に独裁権を掌握した。

■AD1948年 グレン・ブランカ生誕

ブランカの名の由来はフランク、或いはパレンケである。

■AD1960年 「マルガシュ共和国誕生」

AD1960年、メリナ家は「マルガシュ共和国」を建てるが、マラガシュの名は、自分たちがマラケシュ（モロッコ）から来たことを示している。メリナ家は、マリーン朝時代にモロッコを統治していた。

ザムビの歴史

◆セム（ザムビ）の歴史

■ 7万年前 「ザムビ誕生」

中央アフリカの海に暮らしていた「ザムビ」は、上陸し、陸上生活にスイッチした。彼らは、カンボジア人の姿をしていた。

■ 7万年前 「アフリカ人の大航海時代」

■ 7万年前 「チャム族誕生」

「アフリカ人の大航海時代」に参加したザムビは、ミャンマーに移住した。この時、彼らは「チャム族」を称した。チャムの名の由来はザムビである。ザムビ=チャムビ=チャムとなる。

■ 4万年前 「太陽神シャマシュ誕生」

「ギガントマキア」に参加したミマースは、ゼウスに敗北したため、ギリシアを脱出して台湾に移住した。ミマースは、ザムビと組んでタイ（シャム）に「太陽神シャマシュ」を生んだ。シャマシュの名の由来はザムビとムシシの組み合わせである。ザムビ+ムシシ=ザムシ=シャマシュとなる。

■ 2万年前 「羅侯山の大航海時代」

■ 2万年前 「ヤマ神（閻魔）誕生」

「羅侯山の大航海時代」に参加したシャマシュは、火星に「ヤマ神（閻魔）」を生んだ。ヤマ神（閻魔）の名の由来はシャマシュである。シャマシュ=シャマ=ヤマとなる。ヤマ神は、火星の最高峰「羅侯山」で、反自然的な人々を裁き、制裁を加えた。

■ 1万5千年前 「天孫降臨の大航海時代」

■ 1万5千年前 「セム誕生」

「天孫降臨の大航海時代」に参加したザムビは、南極大陸に入植し、「セム」を生んだ。セムの名の由来はザムビである。ザムビ=サム=セムとなる。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「ノアの大航海時代」

■ 1万3千年前 「スオミ族誕生」

「ノアの大航海時代」に参加したセムは、永久凍土から解放されたばかりの現フィンランドに入植した。この時に「スオミ族」が生まれた。スオミの名の由来はセムである。セム=セーム=スオミとなる。

■ BC 5千年 「バベルの塔建設」

■ BC 5千年 「第1北極海ルート時代」

■ BC 5千年 「サーミ人誕生」

「第1北極海ルート」を企画したスオミ族は、ラップランドに入植し「サーミ人」を生んだ。サーミの名の由来はスオミである。スオミ=スオーミ=サーミとなる。

■ BC 5千年 「セミノール族誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したスオミ族は、シベリアを離れて太平洋に出ると、アリューシャン列島を通過、マヤを経てミシシッピ流域に入植した。彼らは、ヌビア人（ノア）と連合して「セミノール族」を形成した。セミノールの名の由来はセムとニョルド（ノア）の組み合わせである。セム+ニョルド=セムニョール=セミノールとなる。その後、セミノール族は、ナワトル族と合流した。両者は、アメリカ・インディアンの母体を形成している。

■BC6世紀 「フィン人の大航海時代」

■BC6世紀 「コラズム誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加したスオミ族は、現地を初めて「コラズム」と呼んだ。コラズムの名の由来はカレリアとスオミの組み合わせである。カレリア+スオミ=カレスオミ=コラズムとなる。コラズムは、ハ行がカ行を兼ねる法則により、ホラズム、ホラサンとも呼ばれている。

■BC6世紀 「鮮卑誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加したスオミ族は、レナ河に入植した。金髪・碧眼の白人である両者は現地人と混合して「鮮卑（シェンベイ）」を称した。シェンベイの名の由来はザムビの組み合わせである。ザムビ=ザムベ=シェンベイ（鮮卑）となる。

■BC6世紀 「シャンパーニュ誕生」

「フィン人の大航海時代」に参加してモンゴルに入植したスオミ族の一部は、北極海ルートを逆走してセーヌ河畔に至り、ポイイ族と連合した。彼らは、得た領土に「シャンパーニュ」と命名した。シャンパーニュの名の由来はザムビとポエニ（ポイイ）の組み合わせである。ザムビ+ポエニ=ザムポエニ=シャンパーニュとなる。

■BC6世紀 「ジュネーブ誕生」

シャンパーニュから下って現スイスに入ると、彼らは「ジュネーブ」を築いた。ジュネーブの名の由来はザムビである。ザムビ=ザンビア=サナビア=ジュネーブとなる。

■BC6世紀 「ジェノヴァ誕生」

現スイスから更にローヌ河を下って地中海に出ると、彼らはイタリア方面に入植して「ジェノヴァ」を築いた。ジェノヴァの名の由来はジュネーブである。ジュネーブ=ジュネーピア=ジェノヴァとなる。

■BC327年 「コラズム族の大移動時代」

■BC327年 「ウマイヤ家誕生」

「コラズム族の大移動時代」に参加して、アラビア半島に上陸したスオミ族は、現地人と混合して「ウマイヤ家」を誕生させた。ウマイヤの名の由来はスオミとカレリアの組み合わせである。スオミ+カレリア=オミヤ=ウォミヤ=ウマイヤとなる。

■AD114年 「スエビ族誕生」

宇文部、托跋部は同盟して正統な鮮卑（シェンヴェイ）をモンゴルから追放したが、鮮卑はヨーロッパに帰還し、「スエビ族」となって存続した。スエビの名の由来はシェンヴェイである。シェンヴェイ=シェンヴェ=スエビとなる。カエサルをして「ゲルマン人随一の戦士」と呼ばれた。モンゴル時代に「鮮卑」として騎馬軍団を率いていただけはある。

■AD106年 「邪馬台国誕生」

トラヤヌス皇帝がナパタエ王国から自治権を奪うと、ナパタエ人はアビシニア人に統治されていたヒムヤル王国に立ち寄った。ナパタエ人は、アビシニア人に不満を持つ一部ヒムヤル人を同行させて、遠くインドシナ半島に移り住んだ。アラビア人の顔をしたナパタエ人は、シャム族と連合して「邪馬台国」を建設した。邪馬台の名の由来はシャムとナパタエの組み合わせである。シャム+ナパタエ=シャムタエ=邪馬台となる。つまり、邪馬台国は現在のタイに存在したと考えられる。

■AD146年 「ジャマトエ人誕生」

倭国大乱を機に、邪馬台人は卑弥呼の一族（ヒムヤル人）と共に、インドシナ半島を離れてゲルマニアに移住した。ゲルマニアに上陸した邪馬台国の一族は、ゲルマニア人と混合して「ジャマトエ人」を成した。ジャマトエ人の名の由来は邪馬台である。邪馬台＝ジャマタイ＝ジャマトエとなる。当初、マルコマンニ人（卑弥呼＋アラマンニ人）とジャマトエ人の両者は邪馬台国時代からの同盟者とあって、連合していた。しかし、理由は不明だが、ジャマトエ人は同盟者であるはずのマルコマンニに討伐されてしまう。これは、マルコマンニがドルイド教に操られていた可能性が高い。

■AD170年 「マーシア人誕生」

同盟者であるはずのマルコマンニ人に討伐されると、「ジャマトエ人」は空中分解し、シャム族とナパタエ人に分離して東西に移住した。タイ人の顔をしたシャム族はブリテン島に移住して白人と混合して「マーシア人」を形成した。マーシアの名の由来はシャマシュである。シャマシュ＝シャマーシュ＝マーシアとなる。

■AD192年 「チャンパ王国誕生」

ローマ帝国が成立すると、一部ジェノヴァ人は故地への帰還を決行してアジアに向かう。南ベトナムに上陸した彼らは「チャンパ」を称した。チャンパの名の由来はジェノバ、或いはザムビである。ザムビ＝ザムバ＝チャンパとなる。チャンパ人は「チャンパ王国」を建ててAD1832年まで存続させた。

■AD411年 「スエビ王国誕生」

「ゲルマン人の大移動」に参加したスエビ族は、ハスティンギ族、ヴァンダル人、西ゴート族、アラン人と共にイベリア半島になだれ込んだ。AD411年、スエビ人はイベリア半島に「スエビ王国」を建国するが、同盟者であった西ゴート族の侵攻によりAD585年に滅亡してしまう。

■AD585年 「シャヒ族誕生」

スエビ王国が滅ぶと、スエビ人はイベリア半島を発ってカブールにまで足を伸ばした。彼らは、カブールに於いて、スエビを由来に「シャヒ」を称した。スエビ=スエヒ=シャヒとなる。

■AD661年 ムアヴィア1世、初代カリフに即位 「ウマイヤ朝誕生」

クライシュ族に属したウマイヤ家からは「ウマイヤ朝」を開くムアヴィア1世が輩出された。ムアヴィアの名の由来はザムビである。ザムビ=ザムアヴィ=ムアヴィアとなる。彼の時代には、イスラム帝国は東はコラズム、西はアルジェリアにまで範囲を広げた。

■AD7世紀 「カブール・シャヒ王国誕生」

AD7世紀頃、キングアラが初代王に即位して「カブール・シャヒ王国」を建てている。

■AD9世紀 「スーフィー（イスラム神秘主義思想）誕生」

シャヒ族は、カブールを拠点に「スーフィー」を生んだ。官僚化したタナトスに支配されたスンニ派による律法主義・形式主義的なシャリーアを批判し、粗末な羊毛を身にまとった。スーフィーの由来は羊毛とされているが、シャヒの可能性もある。シャヒ=シャーヒー=スーフィーとなる。

■AD1026年 「チャップリン誕生」「ジョプリン誕生」

AD1026年、シャヒ王国が滅びると、シャヒ族はカブールからイタリアに向かった。アマルフィに上陸したシャヒ族は当地で「コッポラ」を称した。シャヒ族はイベリア半島に移ると「キャプラ」を称した。更に、シャヒ族はブリテン島にまで足を運んでいるが、ハンプシャーには「チャップリン」、北上してノースアンバーランドには「ジョプリン」の名を残した。

■AD1096年 ピサ、アマルフィ、ヴェネツィアと共に繁栄 「ジェノヴァ共和国誕生」

■AD1096年 「仙波氏誕生」

AD1096年、絶好調のジェノヴァ共和国が勢力圏を拡大中、一部はアジアにも進出して拠点を得ようと日本に移住した。イタリア人の顔をした彼らは、山口家継に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「仙波氏」の祖、仙波家宣である。仙波の名の由来はジェノヴァである。ジェノヴァ=ジェンヴァ=仙波となる。

■AD1138年 コンラート1世、神聖ローマ皇帝に即位 「ホーエンシュタウフェン朝誕生」

スエビ人は「シュヴァーベン」に拠点を築き、「ホーエンシュタウフェン家」となっていた。ホーエンシュタウフェンの名の由来は不明だが、シュヴァーベンの名の由来はスエビである。スエビ=シュエービ=シュヴァーベンとなる。フリードリヒ2世は、魔女狩りの法整備を推し進めた教皇グレゴリウス9世と対立し、破門にされた。だが、彼は第6回十字軍に参加し、エルサレムを無血で奪還した。

■AD1252年 サフィー・アッディーン・イスハーク・アルダビーリー生誕 「サファヴィー教団誕生」

フリードリヒ2世の子息たちもタナトスの教皇に目をつけられ、ホーエンシュタウフェン朝は滅んだ。AD1250年、フリードリヒ2世は外道なタナトスに嫌気が差し、死んだことにしてヨーロッパを去り、祖を同じくするシャヒ王国を訪問した。その当時、シャヒ王国は既に滅んでいたが、フリードリヒ2世の残党は、シャヒ王国が残したスーフィズムに参加した。

サフィー・アッディーン・イスハーク・アルダビーリーは、出自に関してナゾが多いが、彼は、コンラート2世、或いはホーエンシュタウフェン朝の王族の子として生まれた。サフィーは、後に「サファヴィー教団」を築いているが、サファヴィーの名の由来はシュヴァーベンである。シュヴァーベン=シュファアーベ=サファヴィーとなる。

■AD1378年 ジェノヴァ共和国、ヴェネツィア共和国と交戦

■AD1429年 「シャイバーニー朝誕生」

ジェノヴァは、中世にピサやヴェネツィアと頻繁に戦火を交えていたが、AD1381年にヴェネツィアとの百年戦争が劣勢のまま集結すると、不平を抱いたジェノヴァ人は中央アジアに移住した。彼らは、シャンパーニュを由来に「シャイバーニー」を称した。シャンパーニュ=シャン

パイニー＝シャイバーニーとなる。AD1429年、シャイバーニー家のアブル＝ハイル・ハンが初代ハーンに即位し、ブハラ・ハン国シャイバーニー朝を生んだ。

■AD1502年 イスマイル、初代カリフに即位 「サファヴィー朝誕生」

ホーエンシュタウフェン朝の王族が築いたサファヴィー教団がイランに王朝を開いた。サファヴィーの名の由来はシュヴァーベンである。シュヴァーベン＝シュファーバー＝サファヴィーとなる。

■AD1630年 ガンガ・ズンバ生誕 「キロンボ・ドス・パルマーレス誕生」

AD1599年、シャイバーニー朝が滅ぶと、シャイバーニーの王族は、コンゴに移住した。この時に、ガンガ・ズンバが生まれた。ズンバの名の由来はザムビである。ザムビ＝ザムバ＝ズンバとなる。ジェノヴァの血を引くズンバは、ポルトガルと戦ったが、戦争に敗北したため、奴隷としてブラジル植民地に送られた。彼らは、逃亡奴隷（マルーン）となり、逃亡奴隷の集落「キロンボ・ドス・パルマーレス」を築いた。キロンボ・ドス・パルマーレスには3万人が暮らし、ポルトガル本土の面積に匹敵する領土を有していた。

■AD1655年 ズンビ・ドス・パルマーレス生誕

ズンビの名の由来はザムビである。ザムビ＝ザンビ＝ズンビとなる。ガンガ・ズンバの甥にあたるが、強硬派のズンビは、穏健派のズンバを殺害し、ポルトガルに対して強硬姿勢を通した。AD1695年、ポルトガル軍の侵攻により、キロンボ・ドス・パルマーレスは滅び、ズンビは深の裏切りにより、斬首刑に処された。

■AD1889年 チャールズ・チャップリン生誕

■AD1893年 毛沢東生誕 「中華人民共和国誕生」

毛（マオ）の名の由来はミャオである。ミャオ＝マオ（毛）となる。

■AD1911年 ピクスレイ・セメ、議長に就任 「アフリカ民族会議誕生」

AD1911年、ズールー族出身のピクスレイ・セメが「アフリカ民族会議」を創立している。

■AD1943年 ジャニス・ジョプリン生誕

■AD1964年 「ザンビア共和国誕生」

ザンビアの名は、ザンベジ川から採用されたとされているが、実際には、ザンベジの名も、ザンビアの名も、ザムビが由来である。ザムビ=ザムビア=ザンビアとなる。イギリス連邦に蜂起し、独立を勝ち取って「ザンビア共和国」を築いた人々の正体は、ブラジルにキロンボ・ドス・パルマーレスを築いたズンビ・ドス・パルマーレスの子孫と考えられる。

◆シュメール人（セム）の歴史

■BC5千年 「第1北極海ルート」

■BC5千年 「サーミ人誕生」

「第1北極海ルート」を企画したスオミ族は、ラップランドに入植し「サーミ人」を生んだ。サーミの名の由来はスオミである。スオミ=スオーミ=サーミとなる。

■BC5千年 「シュメール人誕生」

ラップランドのサーミ人は、ポメラニア人と交流を重ねたが、「シュメール文明」とは、ポメラニア人とサーミ人の交流を指し、メソポタミアではなく、バルト海で展開されたものだ。この時に「シュメール人」が生まれた。シュメールの名の由来はサーミとエピアルテースの組み合わせである。サーミ+エピアルテース=サーミアル=サミアール=シュメールととなる。

■BC40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC40世紀 「チムー王国誕生」

「シュメール人の大航海時代」に参加したシュメール人（サーミ人とポメラニア人）は、バルト海を発ち、地中海に入ると、イサククなどを迎えてペルーを目指した。ペルーに上陸すると、彼らは「チムー王国」を築いた。チムーの名の由来はセムである。セム＝セムーチムーとなる。チムー王国で起きたことが、いわゆる「シュメール文明」と呼ばれている。

■BC40世紀 シウム、第5代チムー王に即位

シウムの名の由来はシュメールである。シュメール＝シウメール＝シウムとなる。

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC35世紀 「志摩半島誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したチムー人は、出羽国に移住すると、その後、「志摩半島」に入植した。志摩の名の由来はセムである。セム＝セマ＝志摩となる。セムは、志摩半島で「神道」を生んだイデュイア（伊勢国）と出会う。

■BC35世紀 「シメオン族（ミャオ族）誕生」

志摩半島、伊勢国でイデュイアとであったセムは、共同で夏時代の中国に移住した。この時に「シメオン族」が生まれた。シメオンの名の由来はセムとディオナー（イデュイアの子孫）の組み合わせである。セム＋ディオナー＝セムオーネ＝シメオンとなる。ミャオの名の由来はシメオンである。シメオン＝メオン＝ミャオとなる。

■BC35世紀 「サムエル誕生」

預言者サムエルの名の由来はシュメールである。シュメール＝シムエル＝サムエルとなる。最後の士師として出現したサムエルは、タナトスに操られた民衆を押さえ込みながら、十和田の縄文人の首長（ダヴィデ）を王として認めた。

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC2850年 ナルメル、初代ファラオに即位 「エジプト第1王朝誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したシュメール人はエジプトに進出し、ナイルの雄ヌビア人（ノア）と連合した。この時に、「ナルメル」が生まれた。「ナルメル」には「メナス」という別名もあるが、いずれも個人名ではなく、シュメール人とヌビア人、メネストーの連合体の名称である。ナルメルの名の由来はナイル（ノア）とアムルの組み合わせである。ナイル＋アムル＝ナイルムル＝ナルメルとなる。

■BC2750年 「スーマ王国誕生」

エジプト第2王朝が生まれると、ナルメルの残党はエジプトを離れてインドに移住した。彼らは「スーマ王国」を築いた。スーマの名の由来はシュメールである。シュメール＝スーマール＝スーマとなる。

■BC932年 「北イスラエル王国誕生」

北イスラエル王国が誕生すると、スーマの人々はイスラエルに移住した。この時に「シメオン族」が復活した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「シャム誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したシメオン族は、タイに移住した。シメオン族は「太陽神シャマシュ」の生誕地を「シャム」と命名した。シャマシュ＝シャマ＝シャムとなる。

■ B C 7 世紀 「司馬氏誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したシメオン族は、インドシナ半島から中国に移って「司馬氏」となった。司馬の名の由来はシメオンである。シメオン=シマオン=司馬（シマ）となる。

■ B C 3 2 7 年 「ガンダーラ人の大航海時代」

■ B C 3 2 7 年 「須磨誕生」

「ガンダーラ人の大航海時代」に参加したスーマ人は、神戸に上陸すると、得た拠点に「須磨（すま）」と命名した。須磨の名の由来はスーマである。

■ A D 3 世紀 「大和人の大航海時代」

■ A D 3 世紀 「マイアミ族誕生」「アイオミ誕生」

「大和人の大航海時代」に参加した司馬氏は、マヤのアミ族を由来に「マイアミ族」を称した。マヤ+アミ=マヤアミ=マイアミとなる。マイアミ族は、司馬氏と共にブリテン島に上陸し、「アイオミ」の名を残している。マイアミ=アイアミ=アイオミとなる。

■ A D 3 世紀 「スミス誕生」

「大和人の大航海時代」に参加してデヴォンに上陸した司馬氏は、イギリス人と混合して「スミス」の名を生んだ。スミスの名の由来はシャマシュである。シャマシュ=サマス=スミスとなる。

■ A D 6 2 8 年 「ヨハネスの大航海時代」

■AD628年 「チャーマッシュ族誕生」

「ヨハネスの大航海時代」に参加したスミスは、一部分離して北アメリカに渡った。スミスは、カリフォルニアに上陸して「チャーマッシュ族」を形成した。チャーマッシュの名の由来はシャマッシュである。シャマッシュ=チャマッシュ=チャーマッシュとなる。

■AD10世紀 「ジャームッシュ誕生」

AD10世紀頃にチャーマッシュ族は2手に分離して新天地へと向かった。東方組はヨーロッパに帰還してドイツ辺りに入植し、「ジャームッシュ」の名を残した。ジャームッシュの名の由来はシャマッシュである。シャマッシュ=シャーマッシュ=ジャームッシュとなる。

■AD1198年 「島津氏誕生」「清水氏誕生」

AD10世紀頃にチャーマッシュ族は2手に分離して新天地へと向かった。西方組は日本・九州南部に上陸し、惟宗広言に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが、「島津氏」の祖、惟宗忠久であった。島津の名の由来はスミスである。惟宗忠久はAD1198年に「島津」の姓を名乗り始めた。また、英語をしゃべるスミスが九州に来た際、BUTが「ばってん」に変遷が加えられ、九州の言葉として導入された。

また、インディアンの顔をしたスミスは、伊豆にも赴いて「清水氏」を形成している。清水の名の由来もスミスである。スミス=スマズ=島津となり、スミス=スミズ=清水となる。

■AD1086年 「シップソーンパンナー王国誕生」

司馬光の一族は、宋治世下の中国を後に、高麗王家の一部と共に現ラオスに移住した。シップソーンパンナーの名の由来は司馬、宋、パンノニアの組み合わせである。司馬+宋(ソン)+パンノニア=シバソンパンノニア=シップソーンパンナーとなる。高麗王家は、アヴァール帝国の後裔であるため、過去に支配したパンノニアの名を末尾に加えている。

■AD1609年 「島津氏の侵攻」

「ヨハネスの大航海時代」の同盟者である島津氏（スミス）が尚氏（スティルス）が治める琉球王国に侵攻し、薩摩藩の属領とした。島津氏は、尚寧王を江戸に連行し、徳川秀忠に謁見させたという。浄土真宗を邪教として弾圧していた島津氏にとっての真意は、沖縄諸島を邪悪な浄土真宗から保護しようという心積もりがあった。

■AD18世紀 「アーミッシュ誕生」

ドイツに入植したチャーマッシュ族の一部はオランダに移ってAD18世紀初頭に「アーミッシュ」を結成する。アーミッシュの名の由来はチャーマッシュである。チャーマッシュ＝アーマッシュ＝アーミッシュとなる。移民時代に、ペンシルヴァニア州に移住したアーミッシュは、産業革命が起きてアメリカが近代化しても、電気・自動車を使わない生活にこだわった。インディアンの持つ反文明主義と厳格なカルヴィニストの禁欲主義のハイブリッドといえる。AD1972年、アーミッシュは、連邦最高裁に於いて独自の教育・学校を許可されている。

■AD1919年 清水馨八郎生誕

■AD1946年 パティ・スミス生誕

■AD1949年 トニー・アイオミ生誕 「ブラック・サバス誕生」

■AD1953年 ジム・ジャームッシュ生誕

■AD1957年 エイドリアン・スミス生誕

ンジニの歴史

◆秦（ンジニ）の歴史

■ 4 万年前 「ンジニ誕生」

カメルーンの海岸に水生人として暮らしていた「ンジニ」はオリジナル人類である。彼らは、グジャラート人の姿をしていた。

■ 4 万年前 「シンド誕生」

異邦の地からきた旅人からアテナイ王国、ゼウスなどの噂を耳にすると、ンジニはカメルーンを発ち、アテナイ王国があるアラビア半島を目指した。アテナイ王国に到着すると、更に世界が広がり、インダス流域に移住した。彼らは拠点を「シンド」と命名した。シンドの名の由来はンジニの人（ジニド）である。ジニド＝シンド＝シンドとなる。

■ 4 万年前 「フッキとヌアの大航海時代」

■ 4 万年前 「セネガル人誕生」

「フッキとヌアの大航海時代」に参加したシンド人は、インダス流域を離れて故地に近い西アフリカに移住した。この時に「セネガル人」が生まれた。セネガルの名の由来はンジニとテングリの組み合わせである。ンジニ+テングリ＝ジニグリ＝セネガルとなる。頭部が小さく、手足、指が長いディンカとシンド人の混合により、セネガル人の容貌が生まれた。

■ 2 万年前 「羅ホウ山の大航海時代」

■ 2 万年前 「秦広王誕生」

「羅ホウ山の大航海時代」に参加して火星に移住したンジニは、十王に属する「秦広王（シングアン）」を生んだ。シングアンの名の由来はンジニとカアングの組み合わせである。ンジニ+カ

アング＝ジニカアン＝シングアンとなる。ンジニは、ここに收容されたできそこないを裁き、強制労働を課していた。

■ 1万3千年前 「大地殻変動」

■ 1万3千年前 「テングリの大移動時代」

■ 1万3千年前 「月神シン誕生」「イシン誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したセネガル人は、メソポタミアの地に月神「シン」を祀った。シンの名の由来はンジニである。ンジニ＝ジン＝シンとなる。また、セネガル人は都市国家「イシン」を築いた。イシンの名の由来はンジニである。ンジニ＝ウジニ＝ウジン＝イシンとなる。

■ B C 7千年 「アヌンナキの大移動時代」

■ B C 7千年 「シナイ誕生」

「アヌンナキの大移動時代」に参加したイシン人は、紅海を抜けた後、現シナイ半島に上陸し、世界で最初に「シナイ」と命名した。シナイの名の由来はンジニである。ンジニ＝ジニイ＝シナイとなる。。

■ B C 5千年 「伊勢国誕生」「神道誕生」

スバル人は、セネガル人と共に伊勢半島に住む「岱輿」の元を訪れた。両者は意気投合して「伊勢国」を築き、「神道」を生んだ。伊勢の名の由来はイデュイアとカゾオバの組み合わせであり、神道の名の由来はンジニとイデュイアの組み合わせである。イデュイア＋カゾオバ＝ユイアゾオ＝イザヤ＝伊勢となり、ンジニ＋イデュイア＝ジニデュイア＝神道（しんとう）となる。

■ B C 5千年 「バベルの塔建設」

■BC 5千年 「第1次北極海ルート時代」

■BC 5千年 「月氏誕生」

「第1次北極海ルート」に参加したシナイ人は、レナ河に残留し、現地のモンゴロイドと交わって「キナ族（月氏）」を形成した。シナの名の由来はン時にである。ンジニ＝ジニ＝シナとなる。シナの名は中国の歴史書に残されていない。しかし、月氏の家族と考えられる「秦（シナ）」や、後の大月氏時代に亀慈（クチャ）と連合して生まれた「クシャーナ」などの名から推測して、月氏の名は「シナ」とであると解釈できる。月氏の名の由来は、月神シンであるが、そこからも月氏の本名がシナであることがわかる。

■BC 1027年 「晋誕生」

「マハーバーラタ戦争」を機にシンド人は、インダス流域から古代中国に移住した。インド人の顔をした彼らは、中国人と混合して「晋氏（ジン）」を形成した。晋の名の由来はンジニ、或いはシンドである。BC 9世紀頃、晋と衛は春秋戦国時代に討って出るが、月氏（シン）の後裔である秦（キン）は晋（ジン）の兄弟といえる存在であった。

晋は強国であったが、「フェニキア人の大航海時代」を介して中国にやってきた「韓（ルーベン族）」「魏（フェニキア人）」、サイス朝から来た「趙（ツァオ）」が結成した三晋の台頭によって滅びる。その後、晋氏から「金氏（ジン）」「刑氏（ジン）」が輩出される。

■BC 829年 「太陽神ヴィシュヌ誕生」

「アメン神官団の大航海時代」に参加したサバエ人は、ンジニと組んで「太陽神ヴィシュヌ」を祀った。ヴィシュヌの名の由来はカゾオバとンジニの組み合わせである。カゾオバ+ンジニ＝バジニ＝バジュニ＝ヴィシュヌとなる。

■BC 7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC 7世紀 「シューラセーナ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したレビ族は、晋と組んで「シューラセーナ王国」を建設している。シューラセーナの名の由来は、シェラフと晋（ジン）の組み合わせである。シェラフ+ジン=シェーラジーナ=シューラセーナとなる。

■BC7世紀 「秦誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したシュメール人（イシン）は、中国に上陸した。シュメール人の顔をしたイシン人は、現地人と混合して「秦（シナ）」を誕生させた。秦の名の由来は「月の神シン」である。シン=キン=秦となる。その後、祖を同じくする月氏と交流した秦は、援軍を得て強大化し、秦の始皇帝がAD221年に中国を統一することになる。

■BC246年 「秦樹立」

秦には、シャムから来たシメオン族（司馬氏）やマウンド派のティカル人（日本武尊）も協力していた。この時代に、火薬が開発されている。始皇帝が不老不死の薬の製作を学者に頼んだのだが、不老不死の薬を作るつもりが偶然にも、その過程で火薬が発明されたと言う。

■BC207年 「大月氏誕生」

BC207年に秦が滅亡すると、秦の一族はモンゴルに帰還して、祖を同じくする月氏と合流し「大月氏」を形成した。

■BC206年 中国からソマリアに移住

「秦」が滅ぶと、秦氏（月の神シン）は中国を後にしてソマリアに移住した。秦氏はここでハダメ族と知り合い、連合体を築いている。この時に、秦（キン）が秦（ハタ）と読まれるようになった。

■BC206年 「秦韓誕生」「秦氏誕生」

その後、ソマリア人の顔をした秦氏（はた）は、AD1世頃に朝鮮半島に移住し、韓氏と共に「

秦韓」を築いた。秦韓が滅ぶと、秦氏は日本に移住して「秦氏（はた）」を名乗る。

■ A D 4 5 年 「クシャーナ朝誕生」

大月氏（シナ）と亀慈人は連合して「クシャーナ朝」を開いた。クシャーナの名の由来はクチャ（亀慈）とシナ（月氏）の組み合わせである。クチャ+シナ=クチャナ=クシャーナとなる。

■ A D 5 世紀 「六詔国誕生」

クシャーナ人（月氏主導）は、一部が雲南に残留し、「六詔国」を建設した。詔（シャオ）の名の由来はクシャーナである。

■ A D 5 世紀 「佐野氏誕生」「園氏誕生」

一部クシャーナ人（月氏主導）はクシャーナ人（亀慈主導）と共に日本に上陸した。クシャーナ人は、草野氏を称したが、草野氏から分かれる形で佐野氏、園氏が輩出された。くさの（草野）=さの（佐野）=その（園）となる。

■ A D 6 4 8 年 秦河勝、常世神を皆殺しに

常世（トコヨ）の名の由来はダキアである。シルクロードを通過したヴァルダーナは蚕の幼虫を本尊に設定して農民たちから有り金を巻き上げることを思いついた。人々は喜びながら全財産を常世神に納めたが、これを淫祀と見抜いた秦河勝が常世神を壊滅させ、解放された農民たちから真の英雄として祭り上げられた。金を取られて喜ぶ人間はいない。つまり常世神にインフラを支配された無力な農民たちは喜ぶフリをしていたのだ。河勝はそれを見抜いた。さもなければ一旦離反者（神を信じない不信心者）として教団にマークされた信者は、家族であれ、友人であれ、そして世間であれ、完全に無視されてしまうのだ。それは、生活・自由の保障を喪失すること、孤独のまま野垂れ死にすることを意味した。

■ A D 9 世紀 「ケネディ誕生」

この時に、「ケネディ」の名が生まれた。ケネディの名の由来はコナートである。コナート=

コナーティ＝ケネディとなる。この系統からはアメリカ合衆国第35代大統領ジョン・F・ケネディ、ロバート・ケネディ、第40代駐日アメリカ大使キャロライン・ケネディ、ロックバンド「KGB」のレイ・ケネディ、「アルタン」のフランキー・ケネディが輩出されている。

■AD902年 「シヨナ人誕生」

ミャオ族の顔をしたクシャーナ人は、東アフリカのザンベジ川付近に上陸し、現地人と混合して「シヨナ人」を形成した。シヨナの名の由来はクシャーナである。クシャーナ＝シャナ＝シヨナとなる。シヨナ人は、マプングプエ王国、ムタパ王国、トルワ王国など、ジンバブエに君臨した王国の母体を築いた。

■AD997年 「レイフ・エリクソンの大航海時代」

■AD997年 「金田氏誕生」

ヴァイキング然とした姿をしたコナート人は、日本人と混合して「金田氏」を形成した。金だの名の由来はケネディ、或いはコナートである。コナート人は、他にも「金（かね）」が付く「金村」「金井」「金本」「金山」などの姓を多く残している。

■AD1028年 クヌード1世、北海帝国を築く 「クヌード帝国誕生」

マンスター王国がコナート王国に侵入すると、コナート人がアイスランドに亡命した。その後、コナート人はアイスランド人を率いてユトランド半島に侵攻した。その際、カタル・マック・チョコバルがデンマーク王に即位して「ハーデクヌーズ1世」を称した。ハーデクヌーズ1世の子息ゴームは「ゴーム・デン・ガムレ家」を創始した。

その後、そのゴーム・デン・ガムレ家から「クヌード1世」が輩出される。クヌードの名の由来はコナートである。コナート＝クナート＝クヌードとなる。イングランド、デンマーク、ノルウェーに至る地域を掌握したクヌード1世の帝国は、北海帝国と呼ばれた。

■AD1150年 「ツワナ人誕生」

AD1150年頃にシヨナ人がジンバブエからトランスバール地方に移住した。現地人と混合し

た彼らは「ツワナ人」を形成した。シヨナ=チャナ=ツワナとなる。AD1966年、セレツエ・カーマがペチュアナランド民主党を率いて総選挙に勝利後、ロンドン制憲会議を経て独立し、「ボツワナ共和国」を建国している。

■AD18世紀 「ングニ族誕生」

ツワナ人は、南アフリカに移住すると「ングニ族」を生んだ。ングニの名の由来はンジニである。ンジニ=ンギニ=ングニとなる。ングニ族は、戦争に備えて武術を発達させてきた。現在の形になったのは19世紀前半のシャカ王の時代と言われている。この時代には軍事力が大きく発達し、「ズールー戦争」ではイサンドルワナの戦いでイギリス軍を破る活躍を見せた。

■AD1917年 ジョン・F・ケネディ生誕

この系統からはアメリカ合衆国第35代大統領ジョン・F・ケネディ、ロバート・ケネディ、第40代駐日アメリカ大使キャロライン・ケネディ、ロックバンド「KGB」のレイ・ケネディ、「アルタン」のフランキー・ケネディが輩出されている。

■AD1937年 ユルマズ・ギュネイ生誕

「クヌード帝国」が滅ぶと、クヌードの一族はヨーロッパを離れてアナトリア半島に移った。金髪・碧眼の白人であるクヌード一族は現地人と混合して「ギュネイ」の名を形成した。ギュネイの名の由来はクヌードである。クヌード=クネイド=ギュネイとなる。

■AD1936年 金井勝生誕

■AD1946年 デヴィッド・リンチ生誕

■AD1954年 ジョージ・リンチ生誕 「ドッケン誕生」「リンチ・モブ誕生」

■AD1956年 佐野元春生誕

■ A D 1 9 6 1 年 園子温生誕

◆愛新覚羅（イシン）の歴史

■ 1 万 3 千年前 「月神シン誕生」「イシン誕生」

「テングリの大移動時代」に参加したセネガル人は、メソポタミアの地に月神「シン」を祀った。シンの名の由来はンジニである。ンジニ=ジン=シンとなる。また、セネガル人は都市国家「イシン」を築いた。イシンの名の由来はンジニである。ンジニ=ウジニ=ウジン=イシンとなる。

■ B C 3 2 世紀 「ソドムとゴモラ」

■ B C 1 0 2 7 年 「アテネ誕生」

「ソドムとゴモラ」を機に、イシン人がギリシアに来訪、その後、「マハーバーラタ戦争」によってアラビア半島が核兵器で消滅すると、アテナイ人、アデン人（ピュトン）が古代ギリシアに入植し、イシン人と共に都市国家「アテネ」を築いた。アテネの名の由来はアテーナイである。アテネ人は、スパルタ人と共に好戦的な人々であり、常に戦争に明け暮れていた。「第一次神聖戦争」「サラミスの海戦」「第一次ペロポネソス戦争」「第二次神聖戦争」「第二次ペロポネソス戦争」「シチリア戦争」「コリントス戦争」「同盟市戦争」「クレモニデス戦争」など、ほとんど常に戦闘を繰り返していた。B C 2 6 7 年、マケドニア人の台頭により、アテネ人はギリシアを離れることを決意した。

■ B C 2 6 7 年 「アザニアー海賊誕生」

「クレモニデス戦争」を機に、一部のアテネ人は、分裂して四散した。まだ文明の痕跡がない頃のswヒリ文化圏に侵入したアザニアーは、好戦的なアテネ人らしく、凶暴な海賊として鳴ら

した。アザニアーの名の由来はアテナイである。アテナイ＝アチェナイ＝アザニアーとなる。

■ B C 2 世紀 「エッセネ派誕生」

アザニアー海賊は、イスラエルに入植した。彼らは、現地人と混合して「エッセネ派」を結成する。エッセネの名の由来はアザニアーである。アザニアー＝アッサニアー＝エッセネとなる。B C 1 4 3 年、ギリシアがローマの属領と化すと、エッセネ派は、イスラエルに亡命してきたアテネ人を迎えた。イエスの時代、エッセネ派は、パリサイ派、サドカイ派と共にユダヤ教の主な派閥の中心的存在であった。

■ A D 5 7 年 「昔氏王朝誕生」

A D 4 4 年、ユダヤ王国がローマ属州に併合されると、エッセネ派はイスラエルを脱出し、朝鮮半島に移住した。この時に「昔氏（イエツ）」が生まれた。「昔（イエツ）」の名の由来はエッセネである。エッセネ＝イエッセネ＝イエツ（昔）となる。昔氏は昔氏王朝（新羅）を開いた。この王朝はA D 3 5 6 年まで続いた。

■ A D 4 世紀 「阿史那氏誕生」

昔氏王朝が滅ぶとこれを機に、昔氏は中央アジアに入植した。昔氏は「阿史那氏」を称し、上流部に進出してチュルク族を支配下に置いた。阿史那の名の由来はアザニアー、或いはエッセネである。アザニアー＝アサナ＝阿史那（あしな）となる。

■ A D 5 5 2 年 トメン、初代帝王に即位 「突厥帝国誕生」

A D 5 5 2 年、チュルク族を指揮下に置いた土門が、柔然を撃破して伊利可汗として初代可汗に即位した。この時に「突厥帝国」が生まれた。

■ A D 6 3 4 年 「役小角誕生」

A D 6 2 9 年、唐の李靖が東突厥を討つと、一部が中央アジアを逃れて日本に移住した。一部の阿史那氏は、上野氏と連合して「役小角」を成した。役小角の名の由来はエウエノスとアザニア

一の組み合わせである。エウエノス+アザニアー=エウエンノ+オズニアー=エンノ+オズヌ=役小角（えんの・おずぬ）となる。

■AD9世紀 「キルワ王国誕生」

AD744年に東突厥帝国が滅ぶと、阿史那氏はタヌーフ族を率いて中央アジアからスワヒリに帰還した。阿史那氏はキルワ王国を統治し、スワヒリ文化圏を成熟させた。キルワ王国は、AD14世紀に最盛期を迎えたといわれている。

■AD1040年 「スワヒリ人の大航海時代」

■AD1176年 朝比奈義秀生誕 「朝比奈氏誕生」

「スワヒリ人の大航海時代」に参加したアザニアー海賊はタヌーフ族を率いて日本に移住した。彼らは「朝比奈氏」を生んだ。和田義盛の子として生まれた義秀が、「朝比奈氏」を称したときに「朝比奈氏」は生まれた。朝比奈の名の由来はアザニアーとヴァナラシの組み合わせである。アザニアーに「朝」を当て字し、ヴァナラシ（ウラニアー）に「比奈」を当て字している。これにより、朝比奈の名が生まれた。

■AD1185年 「アセン朝（ブルガリア帝国）誕生」

「スワヒリ人の大航海時代」に参加したアザニアー海賊は、中央アジアに移住した。彼らはブルガリア帝国に侵入し、「アセン朝」を開いた。アセンの名の由来はイシン、或いは阿史那である。イシン=アシン=アセンとなる。

■AD1280年 「アイゼン誕生」

AD1280年、アセン朝が滅ぶと、アセン家は東欧に入植した。この時に「アイゼン」の名が生まれた。アイゼンの名の由来はアセンである。アセン=アイセン=アイゼンとなる。

■AD1280年 「蘆名氏誕生」

AD1280年、アセン朝が滅ぶと、アセン家は日本に移住した。アセン家は三浦義明に接近して自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「葦名氏」の祖、三浦為清である。阿史那（あしな）＝葦名（あしな）となる。

■AD1280年 「椎名氏誕生」

AD1280年、アセン朝が滅ぶと、アセン家は日本に移住した。アセン家は千葉常重にも接近し、自身の血統を打ち立てた。その時に誕生したのが「椎名氏」の祖、千葉胤光である。椎名の名の由来は阿史那である。阿史那（あしな）＝アシーナ＝椎名となる。

■AD1521年 蘆名盛氏生誕

■AD1547年 蘆名盛興生誕

AD1574年、嫡男がいないまま、29歳の若さで病死したと伝えられている。だが、実際にはAD1574年に満州に移住し、ヌルハチらを支えていたと考えられる。

■AD1559年 ヌルハチ生誕

日本で蘆名盛氏の子として生まれたヌルハチ。彼が2歳の時のAD1561年、盛氏は庶兄・氏方の謀反を鎮圧している。これを機に、盛氏は側室や子供（ヌルハチ、ムルハチ）を満州に移住させていた。

■AD1561年 ムルハチ生誕

ムルハチが生まれた時のAD1561年、盛氏は庶兄・氏方の謀反を鎮圧している。これを機に、盛氏は側室や子供（ヌルハチ、ムルハチ）を満州に移住させていた。

■AD1564年 シュルハチ生誕

シュルハチが生まれる前年（AD1563年）から盛氏は。二階堂盛義と交戦していた。更に、二階堂氏救援のために伊達軍が侵攻してきたため、盛氏は側室やシュルハチを満州に逃がしていたと考えられる。

■AD1616年 ヌルハチ、大ハーンに即位 「愛新覚羅家誕生」

オグズ24氏族に属するドゥグエルは、坂上氏が築いた満州に移住し、「覚羅家（ギョロ）」を生んだ。覚羅の名の由来はドゥグエルである。ドゥグエル＝グエル＝ギョロ（覚羅）となる。その後、覚羅家は日本から落ち延びた韋名氏と連合し、「愛新覚羅（アイシンギョロ）」を生んだ。アイシンギョロの名の由来はアザニア（蘆名）、覚羅の組み合わせである。アザニア＋ギョロ＝アイザニギョロ＝アイシンギョロ（愛新覚羅）となる。

尚、ヌルハチは、蘆名盛氏の子と考えられる。蘆名盛氏は側室を持たず、子もひとりしかいないと伝えられているが、実際には配下の二階堂氏の台頭に危機感を覚えていた。そのため、あらかじめ、側室や子供を随時、満州に逃がしていた。そのうちのひとりが、ヌルハチというわけだ。盛氏の子、盛興も子がいなかったが、全員で満州に落ち延びたと考えられる。

おもしろいことに、ヌルハチの兄弟、ムルハチの名は盛氏（もりうじ）に似ている。その法則で行けば、ヌルハチは日本名「成氏（なりうじ）」、シュルハチは日本名「城氏（しろうじ）」、ヤルハチは日本名「荒氏（あらうじ）」といえることができる。

■AD1626年 ホンタイジ、大ハーンに即位 「清誕生」

清（シン）の名の由来はンジニである。ンジニ＝ジニ＝シン（清）となる。

■AD1835年 西太后生誕

纏足の風習を廃止したり、白人列強と渡り歩き、中国を守ろうとした。そのため、中国仏教によって汚名を着せられた。

■AD1944年 椎名誠生誕

■AD1952年 ポール・スタンレー（スタンレー・アイゼン）生誕 「KISS誕生」

アイゼンの名の由来はアセン、或いはアザニアーである。アセン＝アイセン＝アイゼンとなる。KISSが成功したのも、他のメンバー3人も中央アジアの血が流れているためだ。ジーン・シモンズ（ポーロヴェッツ族）、ピーター・クリス（コラサン）、エース・フレイリー（フルリ人）。

■AD1978年 椎名林檎生誕

イサックの歴史

◆明日香（イサック）の歴史

■50万年前 「第2次ビクトリア湖の大移動時代」

■50万年前 「イサック誕生」

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したディンカは、現ケニアに「マサイ」、現タンザニアに「ムルング」、現ソマリアに「ハダメ」「イサック」を生んだ。イサックは、現イサック族のような姿をしていた。

■BC40世紀 「イサックの大移動時代」

■BC40世紀 「シュメール人の大航海時代」

■BC40世紀 「イサク誕生」

「イサックの大移動時代」に参加してメソポタミアの地を踏み、その後「シュメール人の大航海時代」に参加したイサック族は、ペルーに入植した。この時に「イサク」が生まれた。イサクの名の由来はイサックである。アブラハムがイサクを神に生贄として捧げる説話があるが、あれは、アブラハムがタナトスの命令に従って同盟者イサクの寝首を搔こうとしたことを意味する。結局、アブラハムは神の声を聞いてイサクの殺害をやめているが、これは、アブラハムが科学の種族トバルカインに「タナトスの命令を聞くな」と、諭されたことを意味する。

■BC35世紀 「サムエルの大航海時代」

■BC35世紀 「イッサカル族誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したイサクは、津軽でティカル人と組み、「イッサカル族」を

生んだ。イッサカルの名の由来はイサクとティカルの組み合わせである。イサク+ティカル=イサガル=イッサカルとなる。彼らは、イスラエルの失われた10支族として知られている。

■BC35世紀 「明日香誕生」

「サムエルの大航海時代」に参加したイサクは、津軽に入植したが、その後、単身、現奈良県に移住した。この時に、彼らは「明日香」を築いた。明日香の名の由来はイサクである。イサク=イスカ=明日香となる。

■BC32世紀 「モーゼスの大移動時代」

■BC30世紀 「ヨシュアの大移動時代」

■BC30世紀 「アッティカ誕生」

「ヨシュアの大移動時代」に参加したイッサカル族は、古代ギリシアに入植し「アッティカ」を築いた。アッティカの名の由来はイッサカルである。イッサカル=イッタカル=イッタカ=アッティカとなる。

■BC932年 「北イスラエル王国誕生」

「北イスラエル王国」が建てられると、アッティカ人はイッサカル族に戻り、ギリシアを離れて北イスラエル王国に入植した。

■BC7世紀 「フェニキア人の大航海時代」

■BC7世紀 「アッサカ誕生」

「フェニキア人の大航海時代」に参加したイッサカル族はガンジス流域に入植し、その後、南インド方面に南下し、「アッサカ王国」を建てた。アッサカの名の由来はイッサカルである。イッ

サカル＝アッサカル＝アッサカとなる。

■ B C 5 世紀 「第 1 次アッサカ人の大航海時代」

■ B C 5 世紀 「巖島誕生」「市杵嶋姫命誕生」

「第 1 次アッサカ人の大航海時代」に参加したアッサカ人は、インドを後に瀬戸内海を訪れた。彼らは、巖島を初めて「巖島」と命名し、「市杵嶋姫命」を島に祀った。巖島、市杵嶋姫命の名の由来はアッサカである。アッサカ＝アシカ＝巖（いつく）、市杵（いちき）となる。アッサカ人は、巖島の巨石建造物（ドルメン）を一目見て先祖の高車（ガオチェ）が作ったものであると確信し、拠点とした。

■ B C 5 世紀 「第 2 次アッサカ人の大航海時代」

■ B C 5 世紀 「ジャカルタ誕生」

「第 2 次アッサカ人の大航海時代」に参加したアッサカ人は、日本を発つと、まず、ジャワ島に立ち寄った。この時に「ジャカルタ」の名が生まれた。ジャカルタの名の由来はイッサカルト（イッサカルの人）である。イッサカルト＋サカルト＝ジャカルタとなる。

■ B C 5 世紀 「シケリア誕生」「シクリ族誕生」「シカニ族誕生」

「第 2 次アッサカ人の大航海時代」に参加したアッサカ人は、ヤコブをアナトリア半島に残すと、シチリア島に上陸した。アッサカ人は、現シチリア島を「シケリア」と命名し、自身は「シクリ族」を称した。シケリア、シクリの名の由来はイッサカルである。イッサカル＝イッサカリア＝シケリア＝シクリとなる。また、アッサカ人は、シクリ族の他に「シカニ族」を生んだ。シカニの名の由来はアッサカの土地（野）である。アッサカ＋野＝アッサカノ＝サカノ＝シカニとなる。

■ B C 2 4 1 年 「スコーネ誕生」

ローマ軍がシチリアを掌握すると、シカニ族は新天地を求めて旅立った。シカニ族は、スカンジナビア半島南端に拠点を得て、その地を「スコーネ」と命名した。スコーネの名の由来はシカニである。シカニ＝シカーニ＝スコーネとなる。

■AD488年 「阿知使主誕生」「都加使主誕生」

東ゴート族が「東ゴート王国」を建てるとシカニ族がシチリアを離れて日本に移住した。イタリア人の顔をしたシカニ族は日本人と混合して「阿知使主」「都加使主」を誕生させた。「阿知使主（あち）」「都加使主（つか）」の名の由来はアッサカである。アッサカ＝アチ＋チカ＝阿知（あち）＋都加（つか）となる。阿知使主からは「坂上氏」が生まれた。

■AD727年 「シケリア人の大航海時代」

■AD727年 「チコーネ誕生」

「シケリア人の大航海時代」に参加したスコーネ人は、バルト海からシチリア島に帰還した。この時に「チコーネ」の名が生まれた。チコーネの名の由来はスコーネである。スコーネ＝チコーネとなる。

■AD727年 「関根氏誕生」

「シケリア人の大航海時代」に参加したスコーネ人はシケリア人と共にシチリア島を旅立った。イタリア人の顔をした彼らは、日本に入植し、現地人と混合して「関根氏」を形成した。関根の名の由来はスコーネである。スコーネ＝スコネ＝関根となる。この系統からは、コメディアンの関根勤、女優高橋恵子（関根恵子）輩出されている。おもしろいことに関根勤は「モンティ・パイソン」のテリー・ジョーンズが撮ったヴァイキング映画「エリック・ザ・バイキング」に出演している。

■AD727年 「滋野氏誕生」

「シケリア人の大航海時代」に参加したシケリア人はスコーネ人と共にシチリア島を旅立った。イタリア人の顔をした彼らは、日本に入植し、現地人と混合して「滋野氏」を形成した。滋野の

名の由来は「シケリアの土地」である。シケリア+野=シゲル+野=滋野となる。

■AD758年 坂上田村麻呂生誕 「坂上氏誕生」

坂上の名の由来は、スコーネの神、或いはシカニの神である。スコーネ+神=スコネ+上（かみ）=坂上（さかのうえ）となり。シカニ+神=シカ（坂）+上（かみ）=坂上となる。坂上田村麻呂は、蝦夷を討伐し、「清水寺」を建立している。

■AD864年 「ドゥグエル誕生」

AD864年にマタラム王国が成立すると、ジャカルタ人はジャワ島を後にした。ジャワからモンゴルに移住したジャカルタ人は「ドゥグエル」を称して「オグズ24氏族」に参加した。ドゥグエルの名の由来はイッサカルの片割れのティカルである。ティカル=ディガル=ドゥグエルとなる。

■AD879年 「タクリ朝誕生」

その後、ネパールに移ったドゥグエルはデーヴァ家に接近して自身の血統を打ち立てる。その時に誕生したのがラガーヴァ・デーヴァである。彼は、ネパールに「タクリ朝」を開いた。タクリの名の由来はドゥグエルである。ドゥグエル=ドゲル=タクリとなる。

■AD1043年 「真田氏誕生」「海野氏誕生」

ナポリを拠点に、シチリア島からイタリア南部を領有するノルマン王国が誕生すると、シケリア人は先発隊である「滋野氏」を頼りに日本に移住する。イタリア人の顔をした後発隊のシケリア人は、滋野氏と混合して「サンタ・アナ」を由来に「真田氏（サンタ）」「海野氏（宇野氏）（アンナ、アナ）」を誕生させた。サンタ=サナタ=真田（さなだ）となり、アナ=アンナ=海野（うんの）となる。

■AD11世紀 「一色氏誕生」

その後、11世紀にマッラ朝が台頭すると、タクリ王家はネパールを脱出して日本に移住した。

彼らは先祖であるイッサカル族の名に因んで「一色氏」を称した。一色の名の由来はイッサカルである。イッサカル＝イッサキ＝一色となる。一色氏からは、一色公深、一色義貫などの武将が輩出されている。

■AD1165年 「満州誕生」

延暦寺の僧兵の焼き討ちにより清水寺が焼失すると、坂上氏は津軽に向かい、そこから満州へと渡る。坂上氏が上陸した時、初めて当地は「満州」と呼ばれた。満州の名の由来は「文殊（もんじゅ）」である。

■AD1493年 「イッサ族誕生」

一色義直が伊賀次郎左衛門蜂起の鎮圧に向かう途中、AD1493年に消息を絶ったといわれている。だが、実際には、一色義直は祖であるイッサカル族の故地であるソマリアに帰還して「イッサ族」を形成していた。イッサの名の由来は一色である。一色（いっしき）＝いっさき＝イッサとなる。イッサ族からは初代ジブチ共和国大統領ハッサン・グレド・アプティドが、イサク族からは初代ソマリランド大統領アブドゥラフマン・アリ・トゥール、第4代ソマリランド大統領アフメッド・シランヨが輩出されている。

■AD1600年 「サンタナ誕生」

西軍についた真田昌幸が徳川幕府によって改易されると、彼らの一族は海野氏と共に日本を発ち、ヨーロッパに帰還した。現地人と混合した彼らは「サンタナ」を称した。真田と海野の組み合わせであるが、真田と海野の名の由来はもともとがサンタ・アナである。

■AD1782年 「チャックリー朝誕生」

タクリ王朝の末期、一部タクリ王家はネパールを後にタイに移住した。タイ人と混合したタクリ王家からはトーン・ドゥワン（チャックリー将軍）がAD1737年に誕生した。その後、AD1782年にチャックリー将軍はトンブリー朝を倒し、「チャックリー朝」を開いた。チャックリーの名の由来はタクリである。タクリ＝タックリー＝チャックリーとなる。

■AD1901年 スカルノ生誕

スカルノの名の由来は滋野である。滋野（しげの）＝滋野（しげるの）＝シケルノ＝スカルノとなる。

■AD1947年 カルロス・サンタナ生誕 「サンタナ誕生」

カルロス・サンタナは親日家であるが、それは彼が、真田氏と海野氏の子孫だからだ。

■AD1958年 マドンナ（マドンナ＝ルイーズ・チコネ）生誕

大和人の大航海時代の末裔

「大和人の大航海時代」子孫のリスト

■朝鮮人の子孫（由来）

百済（ペクチェ）＝BECK（BECKER、PECK）

朴（パク）＝BERG（BARKIN、PERKINS、PYKE、BURG、BURGER、PARKS、PARKER、BARKER、BURKE）

文（ムン）＝MOON（LUNA）

■朝鮮人の子孫

アラン・パーカー 映画監督、代表作「エンゼルハート」

アルバート・パイク 黒い教皇

アレン・ギンズバーグ ビートニク詩人

アンソニー・パーキンス 俳優、代表作「審判」「サイコ」

アンドリュー・バーキン 映画監督、代表作「セメントガーデン」

ヴァン・ダイク・パークス ミュージシャン、代表作「」

ウディ・アレン（アレン・コニグスバーグ） 俳優・映画監督、代表作「泥棒野郎」「バナナ」「カメレオンマン」

エイドリアン・ヴァンデンバーグ ヴァンデンバーグ、代表作「アリバイ」

キース・ムーン ザ・フー、代表作「四重人格」「フーズネクスト」

クライヴ・バーカー 作家、映画監督、代表作「ヘルレイザー」

グレゴリー・ペック 俳優

ジェーン・バーキン 女優、代表作「ジュテーム・モア・ノン・プリュ」「熱砂の情事」「カンフーマスター」

ジェフ・ベック ミュージシャン、代表作「ベックオラ」「ワイアード」

シャルロット・ゲンズブール 女優、代表作「なまいきシャルロット」「シャルロット・フォーエバー」「セメントガーデン」

スティーヴン・スピルバーグ 映画監督、代表作「激突」「ジョーズ」「未知との遭遇」「ET」「ジュラシックパーク」

セルジュ・ゲンズブール 音楽家、作家、映画監督、代表作「シャルロット・フォーエバー」「

スタン・ザ・フラッシャー」

デヴィッド・クローネンバーグ 映画監督、代表作「シーバース」「ラビッド」「戦慄の絆」「クラッシュ」

デヴィッド・ザッカーバーグ フェイスブック創業者

ハンス・ユルゲン・ジーパーベルク 映画監督、代表作「カール・マイ」「ヒトラー」

ピガス・ルナ 映画監督、代表作「月とおっばい」

リー・ストラスバーグ アクターズ・スタジオ創設者

■中国人の子孫（由来）

BAKER 湯（タン） 唐（タン）

BARN 倉（アング） カアング

BATES (BAIT) 餌（エー） 多氏

BAUER 農家（ノン） カイナン

BEARD 熊（キャン） グレニコス

BELL 鐘（チョン） フージャン

BIGGS 大（ダー） ヴィディエ

BLACK、BLACKMORE 墨家（モー）

BOIL 湯（タン） 唐（タン）

BOND 結（ジエ） シャン

BOURNE 境（ジング） ジュンガル

BROOK 溪（シ） ゼウス

BROWN、BROWNING 茶（チャ） シャン

BURNS 閻（イエ） 宇文武（ユーウェン）

BUSH 藪（ソウ） ゼウス

BUTLER 管（グアン） 孔子（カアング）

CAMPION 王（ワン） ヤワン

CARR 車（チェ） 高車

CARPENTER 建（ジャン） フージャン

CARRY 運（ユン）

CASH 銭（キャン） グレニコス

CATES 味（ウェイ） 魏

CAVE 洞 (ドン) 段
CHILD 子 (チー) ゼウス
COOPER 桶 (トング) テングリ
CRAVEN 望 (ウアング) カアング
CRUISE
CRYER 泣 (ギ) カアング

DALE 峡 (シア) シャン
DOWNES 下 (シア) シャン

FARMER 農家 (ノン) カイナン
FIELD 陸 (ルー) 黎
FISHER 釣 (ディアオ) ヴィディエ
FITZ 適 (シ) ゼウス
FOSTER 育 (ヨ一) 宇文部

GATES 門 (メン) アメン
GIBBONS 猿 (ユアン) 宇文部
GILLAN (KILN) 炉 (ル)
GLOVER 套 (タオ) ヴィディエ
GOLD、GOULD、GOLDMAN 金 (チン) 普
GRANT 許 (シュ) ゼウス
GRASS 芝 (チー) ゼウス
GREEN 緑 (ル) 魯

HALL 郭 (グア) 高車
HART 鹿 (ル) 魯
HERZOG 公孫 (ゴンスン)
HILL 丘 (キュー) アルキュオネウス
HOWE 何 (ホ一) ペー
HUNTER 狩 (ショウ) 周

KERN 黄 (ファン) フェニキア (ペイトー)
KING 王 (ワン) ヤワン

LAKE 湖 (フー) フージャン
LANE 道 (タオ) ヴィディエ

LAND 陸 (ルー) 黎
LEARNER 習 (チー) ゼウス
LEE、LEIGH 李 (リー)
LIEVES 葉 (イエ) 魏 (ウェイ)
LINE 線 (シアン) シャン
LITTLE 小 (シャオ) ゼウス
LOCKE 鍵ジャン フージャン
LORD 公孫 (ゴンスン)
LOTH 朱 (チュ) ゼウス
LYNCH 刑 (チン) 普
LYONS 獅 (シ) ゼウス

MAY 春 (チュン) シャン
MOORE 墨家 (モー)

NEAT 高ガオ 高車

PACE 歩 (ブ) ペイトー
PAGE、PAICH 頁 (イエ) ベイディ
PENN 筆 (ビ) ピュグマエイ
PERSONS 人 (レン) ローラン
PINTER (PINTLE) 軸 (ツォウ) 周氏
PITT 孔 (コン)
PLANT 植 (ツィー) チュクチ
POWERS 武 (ウー)
PRICE 値 (ツィ) ゼウス

RAVEN 烏 (ウ) 多氏
REED (READ) 読 (ドウ)
REINER 馬 (マー)
RIDER 馬 (マー)
RIVERS 江 (ジャン) フージャン
ROCK 石 (シー) ゼウス
RUBENS 劉 (リュウ)

SANDERS 雷 (レイ) 黎
SELLERS 売 (マイ)

SHIELDS 盾 (ドゥン) 唐
SMITH 司馬 (シャマシュ)
SNOW 雪 (シュエ) ゼウス
SPECTOR 靈 (ヨウ) 宇文部
SPRING 孟 (メング) スカマンドロス+カアング
STAMP 印 (イン)
STEWART 公孫 (ゴンスン)
STONE 石 (シー) ゼウス

TELLER 告 (ガオ) 高車
TEMPEST 嵐 (ラン) ローラン
THORPE 村 (クン) カアング
TRUMP 札 (ツア) ゼウス

WAITES 候 (ハウ) フージャン
WALKER 歩 (ブ) ペイトー
WARD 房 (リユー) 劉氏
WATERS 洪 (ホン) フィン
WATTS 何 (ホー) フージャン
WAY 方 (ファン) ペネイオス
WEIR 堰 (ヤン) 宇文部
WEST 西 (シー) ゼウス
WHITE 白 (バイ) ペー
WILD、WILDER 暴 (パオ) アルペイオス
WILLOW 楊 (ヤン) ユーウェン
WINTER 孟 (メング) スカマンドロス+カアング
WOOD 林 (リン) カンボージャ (ランブダ)
WRIGHT 書 (シュ) シュメール (司馬氏)

YOUNG 青 (チン) 普

ZUCKER 糖 (タング) テングリ

■中国人の子孫

アーサー・ペン 映画監督、代表作「俺たちに明日はない」「ペン&テラーの死ぬのはボク

らだ!？」

アラン・ベイツ 俳優、代表作「まぼろしの市街戦」「コレクション」

アラン・ホワイト イエス、代表作「」

アル・クーパー ブルース・プロジェクト、代表作「血と汗と涙」

アレキサンダー・グラハム・ベル 発明家

アンガス・ヤング AC/DC、代表作「」

イアン・ギラン ディープ・パープル、代表作「インロック」「ファイアボール」「マシンヘッド」「ボーンアゲイン」

イアン・ハンター モット・ザ・フープル、代表作「」

イアン・ペイス ディープ・パープル、代表作「インロック」「ファイアボール」「マシンヘッド」

ウィリアム・ハート 俳優、代表作「アルタードステーツ」

ウェス・クレイヴン 映画監督、代表作「サランドラ」「エルム街の悪夢」

ヴェルナー・ヘルツォーク 映画監督、代表作「生の証明」「小人の饗宴」「アギーレ/神の怒り」

エイドリアン・スミス アイアン・メイデン、代表作「頭脳改革」「パワースレイヴ」

ウリ・ロート スコーピオンズ、エレクトリック・サン、代表作「電撃の蠍団」「復讐の蠍団」「ファイヤウィンド」

エイドリアン・ライン 映画監督、代表作「フラッシュダンス」「ジェイコブズ・ラダー」

エド・ウッド 映画監督、代表作「」

エドガー・ウィンター ミュージシャン、代表作「」

オジー・オズボーン ブラック・サバス、代表作「」

オスカー・ワイルド 作家、代表作「サロメ」

オリバー・ストーン 映画監督、代表作「プラトーン」「ウォール街」「JFK」

カール・ライナー 映画監督、代表作「2つの頭脳を持つ男」「マージョリーの告白」

ガブリエル・バーン 俳優、代表作「ゴシック」「エンド・オブ・バイオレンス」

カレン・カーペンター カーペンターズ、代表作「」

カレン・ブラック 女優、代表作「スペースインベーダー」

ギーザー・バトラー ブラック・サバス、代表作「」

キャシー・ベイツ 女優、代表作「ミザリー」

キャリー・フィッシャー 女優、代表作「スターウォーズ」「帝国の逆襲」「ジェダイの復讐」

キャロル・ベイカー 女優、「ベビィドール」「ジャイアンツ」

クリント・イーストウッド 俳優・映画監督、代表作「荒野の用心棒」「ダーティハリー」「サンダーボルト」「ガントレット」

グレアム・グールド 10cc、代表作「」

グレアム・ボンド ボンド&ブラウン、代表作「」

グレッグ・レイク キング・クリムゾン、E L & P、代表作「クリムゾンキングの宮殿」「タルカス」

ケイト・ブッシュ ミュージシャン、代表作「魔物語」「ドリームタイム」

ゲイリー・ムーア ミュージシャン、代表作「」

ケヴィン・シールズ マイブラディ・バレンタイン、代表作「ラブレス」

サーストン・ムーア ソニック・ユース、代表作「コンフュージョン・イズ・セックス」「バッドムーン・ライジング」「G O O」

ジーン・ワイルダー 俳優・映画監督、代表作「スタークレイジー」「ウーマン・イン・レッド」

ジェイク・E・リー オジー・オズボーン、代表作「罪と罰」「レッドドラゴンカルテル」

ジェイムス・ヘットフィールド メタリカ、代表作「」

ジェーン・カンピオン 映画監督、代表作「」

ジェフリー・ダウンス エイジア、代表作「詠時感～時へのロマン」「アルファ」「アストラ」

ジミー・ペイジ レッド・ツェッペリン、代表作「レッドツェッペリンI」「フィジカルグラフィティ」

ジム・カー シンプル・マインズ、代表作「」

ジム・キャリー 俳優、代表作「エースヴァンチュラ」「ケーブルガイ」「トルーマンショー」

ジム・リード ジーザス&メリーチェイン、代表作「サイコキャンディー」

ジャクソン・ブラウン ミュージシャン、代表作「」

ジャック・ワイルド 俳優、代表作「小さな恋のメロディ」

ジョーイ・テンペスト ヨーロッパ、代表作「ファイナルカウントダウン」「アウト・オブ・ザ・ワールド」

ジョージ・リンチ ドッケン、リンチ・モブ、代表作「バック・フォー・アタック」

ジョーディー・ウォーカー キリング・ジョーク、代表作「」

ショーン・ペン 俳優・映画監督、代表作「初体験リッジмонтハイ」「バッドボーイズ」「インディアンランナー」

ジョナサン・プライス 俳優、代表作「未来世紀ブラジル」「バロン」

ジョニー・ウィンター ミュージシャン、代表作「」

ジョニー・キャッシュ ミュージシャン、代表作「」

ジョン・ウォーターズ 映画監督、代表作「マルチプルマニアックス」「シリアルママ」

ジョン・カーペンター 映画監督、代表作「要塞警察」「ハロウィン」「ゼイリブ」

ジョン・キング ギャング・オブ・フォー、代表作「エンターテインメント!」「ソリッドゴールド」

ジョン・クライアー 俳優、代表作「プリティ・イン・ピンク」

ジョン・ハート 俳優、代表作「エイリアン」「バイオレンスサタデー」「あどけない殺意」

ジョン・ランディス 映画監督、代表作「大災難」「ブルースブラザーズ」「星の王子さまニュー

ーヨークへいく」

ジョン・ロード ディープ・パープル、代表作「インロック」「ファイアボール」「マシンヘッド」

ジンジャー・ベイカー クリーム、代表作「カラフルクリーム」「ブラインドフェイス」

スティーヴ・ハウ イエス、エイジア、代表作「こわれもの」「危機」

スティーヴン・キング 作家、代表作「キャリー」「シャイニング」「IT」「ミザリー」

ダイアン・レーン 女優、代表作「アウトサイダー」「コットンクラブ」

ダスティ・ヒル ZZトップ、代表作「皆殺しの挽歌」「エルロコ」「エリミネーター」

ダリル・ホール ホール&オーツ、代表作「サラ・スマイル」「H2O」「ドリームタイム」

チャーリー・ワッツ ローリング・ストーンズ、代表作「ベガーズバンケット」「レット・イット・ブリード」

デイヴ・スチュアート ユーリズミックス、代表作「」

デヴィッド・カヴァデール ホワイトスネイク、代表作「紫の炎」「スライド・イット・イン」「サーペンスアルパス」

デヴィッド・ザッカー 映画監督、

デヴィッド・バーン トーキング・ヘッズ、代表作「リメイン・イン・ライト」

デヴィッド・フォスター 音楽プロデューサー

デヴィッド・ペイチ TOTO、代表作「宇宙の騎士」「ターンバック」「TOTON」「ファーレンハイト」

デヴィッド・リー・ロス ヴァン・ヘイレン、代表作「炎の導火線」「戒厳令」「1984」「スカイスクレイパー」

デヴィッド・リンチ 映画監督、代表作「イレイザーヘッド」「ブルーベルベット」「ロストハイウェイ」

テレンス・スタンプ 俳優、「世にも奇妙な物語」「コレクター」「テオレマ」「スーパーマン2」

テレンス・フィッシャー 映画監督、代表作「」

トッド・ブラウニング 映画監督、代表作「フリークス」「三人」「知られざる」

トニー・アイオミ ブラック・サバス、

ドナルド・トランプ 第45代アメリカ合衆国大統領

トム・ウェイツ ミュージシャン、代表作「」

トム・クルーズ 俳優

トルーマン・カポーティ（パーソンズ） 作家、代表作「ミリアム」「ティファニーで朝食を」

ナオミ・ワッツ 女優、代表作「マルホランドドライブ」

ナタリー・ウッド 女優、代表作「理由なき反抗」「ウェストサイド物語」

ニール・ヤング ミュージシャン、代表作「」

ニック・ケイヴ バースデイ・パーティ、代表作「」

バーナード・バトラー スウェード、代表作「スウェード」「ドッグマンスター」

パティ・スミス ミュージシャン、代表作「ホーセス」「ウェイブ」

ハロルド・ピンター 作家・映画監督、代表作「召使」「できごと」「ベースメント」

ピーター・ウィアー 映画監督、代表作「ピクニック・アット・ハンギングロック」「グリーンカード」「トゥルーマンショー」

ピーター・グリーン フリートウッド・マック、代表作「」

ピーター・セラーズ 俳優、「博士の異常な愛情」「マジッククリスチャン」「ピンクパンサー」

ピーター・ボイル 俳優、代表作「タクシードライバー」

ピート・ウェイ UFO、代表作「」

ピート・ブラウン ボンド&ブラウン、代表作「」

ビビアン・リー 女優、代表作「風と共に去りぬ」「欲望という名の電車」

ヒュー・グラント 俳優、代表作「白蛇伝説」「赤い航路」

ビリー・ギボンズ ZZトップ、代表作「皆殺しの挽歌」「エルロコ」「エリミネイター」

ビル・ワード ブラック・サバス、

フィービー・ケイツ 女優、代表作「パラダイス」「初体験リッジмонтハイ」「グレムリン」

フィル・スペクター 音楽プロデューサー

ブライアン・メイ クイーン、代表作「戦慄の女王」「オペラ座の夜」

ブラッド・ピット 俳優、代表作「ジョニースウェード」「ファイトクラブ」

フランク・ベアード ZZトップ、代表作「皆殺しの挽歌」「エルロコ」「エリミネイター」

フランシス・ファーマー 女優

ブルック・シールズ 女優、代表作「青い珊瑚礁」「サハラ」

ポール・レイヴン キリング・ジョーク、代表作「」

マーク・ボラン (マーク・フェルド) Tレックス、代表作「電気の武者」「スライダー」

マイク・オールドフィールド ミュージシャン、代表作「チューブラーベルズ」「ムーンライトシャドー」

マイケル・スノウ 映画監督、代表作「プレゼンス」

マイケル・ムーア 映画監督、代表作「シッコ」

マリリン・バーンズ 女優、代表作「悪魔のいけにえ」「悪魔の沼」「ゾンビパパ」

ミッチ・ライダー ミュージシャン、代表作「」

ミランダ・カー モデル

メル・ブルックス 映画監督、代表作「サイレントムーヴィー」「スペースボールズ」

リチャード・カーペンター カーペンターズ、代表作「」

リチャード・カーン 映画監督、代表作「ユー・キルミー・ファースト」「ライトサイド・オブ・マイブレイン」

リチャード・ページ Mrミスター、代表作「ウェルカム・トゥ・ザ・リアルワールド」

リック・ライト ピンク・フロイド、代表作「夜明けの笛吹き」「原子心母」「狂気」「ザ・ウォール」

リッチー・ブラックモア ディープ・パープル、レインボー、代表作「インロック」「マシンヘッド」「虹を翔ける覇者」

ルー・リード ヴェルヴェット・アンダーグラウンド、代表作「ホワイトライト・ホワイトヒート」

レイ・クーパー ミュージシャン

レイモンド・テラー ペン&テラー、代表作品「ペン&テラーの死ぬのはボくらだ!？」

レスリー・ウェスト マウンテン、代表作「ナンタケット・スレイライド」「雪崩」

ロジャー・ウォータース ピンク・フロイド、代表作「夜明けの笛吹き」「原子心母」「狂気」「ザ・ウォール」

ロジャー・グローヴァー ディープ・パープル、代表作「インロック」「ファイアボール」「マシンヘッド」

ロッド・スチュアート ミュージシャン、代表作「ベックオラ」「アトランティック・クロッシング」

ロバート・プラント レッド・ツェッペリン、代表作「レッドツェッペリンI」「フィジカルグラフィティ」

ロバート・メイプルソープ 写真家

ロブ・ライナー 映画監督、代表作「スタンド・バイ・ミー」「ミザリー」

ロミナ・パワー 女優、代表作「ジュスティーン」

■日本人の子孫（由来）

イギリスに上陸した大和人は、それぞれがイギリス風のファーストネームで呼び合い、場合によってウィリアムさん、エディさん、リチャードさんなど「さん」付けをした。これがウィリアムソン、エディソン、リチャードソンなどの由来となった。基本的に、イギリス以外のヨーロッパ諸国でも、現地のファーストネームを姓にしている人々は日本人の子孫だ。

■日本人の子孫

アーサー・C・クラーク 作家、代表作「2001年宇宙の旅」「幼年期の終わり」

アル・ヨルゲンセン ミニストリー、代表作「」

アンソニー・フィリップス ジェネシス、代表作「ギース・アンド・ザ・ゴースト」「サイド」
アンドリュー・ニコル 映画監督、代表作「ガタカ」「シモーヌ」
イアン・カーティス ジョイ・ディヴィジョン、代表作「アンノウン・プレジャーズ」「クローサー」
ウォーレン・デ・マルティーニ R A T T、代表作
ウォルフガング・ペーターセン 映画監督、代表作「Uボート」「ネヴァーエンディング・ストーリー」
エメリヤーエンコ・ヒョードル/ヒョードル・エメリヤーエンコ 格闘家
エリック・H・エリクソン 精神分析医
エルトン・ジョン（レジナルド・ケネス・ドワイト） ミュージシャン、代表作「黄昏のレンガ路」「キャプテンファンタステック」

キース・エマーソン エマーソン・レイク&パーマー、代表作「タルカス」
キース・リチャーズ ローリング・ストーンズ、代表作「ベガーズ・バンケット」「レット・イット・ブリード」「ダーティワーク」
クレール・ドニ 映画監督、代表作「ショコラ」「パリ、18区、夜」「ネネットとボニ」

ジェームズ・ディーン 俳優、代表作「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」
ジェリー・ルイス 俳優
ジム・エイブラハムス 映画監督、「ビッグビジネス」
ジム・ヘンソン 映画監督、代表作「ダーククリスタル」「ラビリンス」
ジム・モリソン ドアーズ、代表作「ハートに火をつけて」「まぼろしの世界」
ジャック・ニコルソン 俳優、代表作「さすらいの二人」「シャイニング」
ジャック＝ルイ・ダヴィド 画家、代表作「ナポレオンの戴冠式」
ジョー・エリオット デフ・レパード、代表作「炎のターゲット」「ヒステリア」
ジョージ・ハリソン ビートルズ、代表作「アビイロード」「オールシングス・マスト・パス」
ジョージ・ルーカス 映画監督、代表作「アメリカン・グラフィティ」「スターウォーズ」「レイダース」
ジョン・アンダーソン イエス、代表作「こわれもの」「危機」
ジョン・ウィリアムス 音楽家、代表作「ジョーズ」「スターウォーズ」「レイダース」「E T」
ジョン・G・アビルドセン 映画監督、代表作「ロッキー」「ベストキッド」
スカーレット・ヨハンソン 女優、代表作「バーバー」「ゴーストワールド」
スコット・イアン アンスラックス、代表作「アamong・ザ・リビング」
スティーブ・スティーブンス ビリー・アイドル、代表作「ウィプラッシュスマイル」「アトミックプレイボーイズ」
スティーヴィー・ニックス フリートウッド・マック、代表作「噂」「タンゴ・イン・ザナイト

」

スティーブ・ハリス アイアン・メイデン、代表作「キラーズ」「パワースレイヴ」「サムウエア・イン・タイム」

スティーブ・マーティン 俳優、代表作「2つの頭脳を持つ男」「大災難」

ダイアナ・スペンサー 元イギリス皇太子妃

ティム・バートン 映画監督、代表作「ビートルジュース」「シザーハンズ」

デヴィッド・シルヴィアン ジャパン、代表作「」

デビッド・ヨハンセン ニューヨーク・ドールズ、代表作「ニューヨークドールズ」「悪徳のジャングル」

ディーン・マーティン 俳優

ディッキー・ピーターソン ブルー・チアー、代表作「ヴィンスバス・イラプタス」「ダイニング・ウィズ・シャークス」

デビー・ギブソン ミュージシャン、代表作「アウト・オブ・ザ・ブルー」「エレクトリックユース」

デボラ・ハリー ブロンディ、代表作「恋の平行線」「オートメリカン」

トーマス・エジソン 発明家

トニー・マーティン ブラック・サバス、代表作「エターナルアイドル」「ヘッドレスクロス」「ティール」

トム・キーファー シンデレラ、代表作「ナイトソングス」「ロングコールド・ウィンター」

ハンス・クリスチャン・アンデルセン 童話作家、代表作「人魚姫」「裸の王様」「マッチ売りの少女」

ピーター・ガブリエル ジェネシス、代表作「怪奇骨董箱」「眩惑のブロードウェイ」「ピーター・ガブリエルIII」

ピーター・ジャクソン 映画監督、代表作「ブレインデッド」「ミート・ザ・フィーブルズ」

ヒクソン・グレイシー 格闘家

フィル・コリンズ ジェネシス、代表作「そして3人が残った」「デューク」「アバカブ」「インビジブルタッチ」

ブライアン・ウィルソン ビーチ・ボーイズ、代表作「サーフィンUSA」

ブルース・ディッキンソン アイアン・メイデン、代表作「頭脳改革」「パワースレイヴ」

ブレイク・エドワーズ 映画監督、「ティファニーで朝食を」「ピンクパンサー」

ブレット・アンダーソン スウェード、代表作「スウェード」

ブレット・マイケルズ ポイズン、代表作「オープン・アップ・アンド・セイ・アー」

ベニー・アンダーソン ABBA、代表作「アライヴァル」

ボン・スコット AC/DC、代表作「ハイ・ヴォルテージ」「ハイウェイ・トゥ・ヘル」

マリリン・モンロー（ノーマ・ジーン） 女優、代表作「お熱いのがお好き」「荒馬と女」

ミケランジェロ・アントニオーニ 映画監督、代表作「情事」「夜」「欲望」「砂丘」

ミルコ・クロコップ/ミルコ・フィリポビッチ 格闘家

メル・ギブソン 俳優、代表作「マッドマックス」「リーサルウェポン」

ラーズ・ウルリッヒ メタリカ、代表作「メタル・マスター」「メタル・ジャスティス」

リチャード・D・ジェイムス エイフェックス・ツイン、代表作「セレクトッド・アンビエントワークス」

リック・ニールセン チープ・トリック、代表作「イン・カラー」「ドリームポリス」

リン・フレデリック 女優

ルイス・キャロル（チャールズ・ラトウィッジ・ドジソン） 作家、代表作「不思議の国のアリス」

レイ・デイヴィス キンクス、代表作「ザ・キンクス」「カインダ・キンクス」

レイ・ハリーハウゼン アニメ作家、代表作「タイタンの戦い」「巨大生物の島」

レスリー・ニールセン 俳優、代表作「裸の銃をもつ男」

ロッキー・エリクソン 13フロア・エレベーターズ、代表作「サイケデリックサウンド・オブ13フロア・エレベーターズ」

■日本語由来の英語

BOY（少年）＝坊や

HOWL（吠える）＝吠える

KILL（殺す）＝斬る

KINKY（ヤバイ）＝禁忌

LUCK（幸運）＝楽

OI＝おい

DAMN（畜生、呪う）＝ダメ

BIMBO（売女）＝貧乏

BOLLOCKS（クズ野郎）＝ボロクソ

TITS（乳）＝乳

DUMB（間抜け）＝ダメ

DOOR（扉、戸）＝戸

BUGGER（男色、獣姦、寄生虫、野郎）＝バカ

■英語由来の日本語（九州弁）

ばってん=BUT

おいどん=I DONE IT

※おいどん誕生秘話

イギリス人スミスが九州に上陸して島津氏となりました。この上陸時、スミスは何か悪さをしたか、それとも善行をしたか定かではないが（浄土真宗を弾圧した人々だから多分善行）、日本人が「誰がやった？」と聞くとスミスは「I DONE IT（おれがやった）」と言った。これが「オレ」を意味する「おいどん」として九州全域に広がった。

■朝鮮語由来の英語

HURRY（急ぐ、急げ）=パリイ（急いで、早く）

UN（否定）=アン、アニ（否定の意）

WHY（なぜ？）=ウエ（なぜ？）

WHAT（何？）=ボ（何？）

GO（行く、行け）=カー（行こう、行け）

YES（はい）=イエ（はい）

SURE（了解）=チョア（良い、好き、了解などの意）

TOO（～も）=ド（～も）

BITCH（売女）=ビッチ（狂ってる）

■中国語由来の英語

KIN（親戚）=親（キナ）

超古代正史 35のオリジナル人類 年表 2018年版

<http://p.booklog.jp/book/121550>

著者：大本正 (C) masahiro taguchi 2018

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/danejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121550>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト